秋田県文化財調査報告書125集

七曲台遺跡群

発掘調査報告書

1985・3

秋田県教育委員会

七曲臨空港工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—秋田県河辺郡河辺町七曲台における旧石器時代～古代の発掘調査—

風無台Ⅰ遺跡
風無台Ⅱ遺跡
風無台Ⅲ遺跡
風無台Ⅴ遺跡
石坂台Ⅰ遺跡
石坂台Ⅱ遺跡
石坂台Ⅲ遺跡
松木台Ⅰ遺跡
松木台Ⅱ遺跡
餅田沢Ⅰ遺跡
餅田沢Ⅱ遺跡

序

秋田県は、昭和56年度に開港した秋田空港の隣接地に先端産業を基盤とした工業団地を造成するべく計画を進めており、河辺郡河辺町七曲地区はその一つとして昭和59年度から60haに及ぶ造成工事を行っております。計画地内には11ヶ所の遺跡のあることが判明し、秋田県教育委員会では、工事に先立ち、これを昭和58・59年度に発掘調査しました。

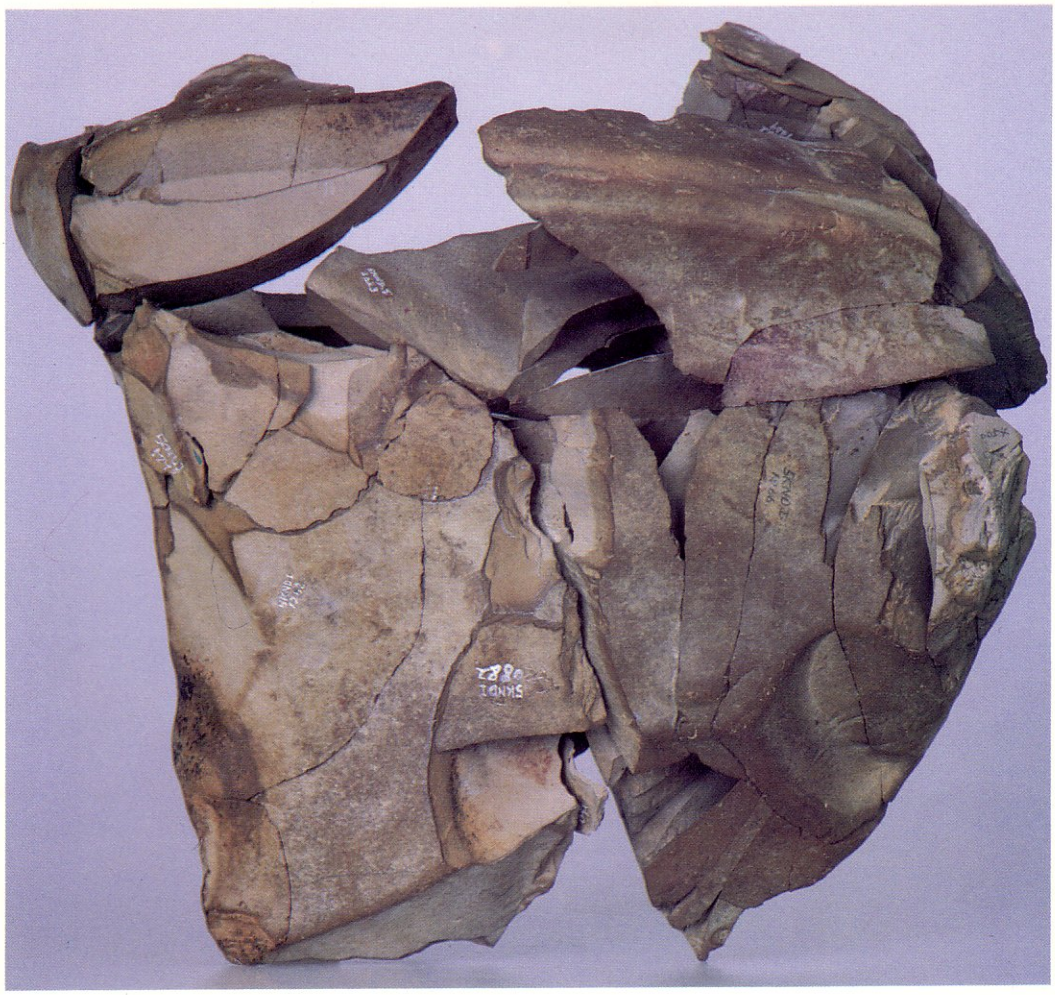
調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡としては県内では最古と思われる遺構の発見や、３つの遺跡から旧石器時代の石器群が発見されるなど、貴重な成果を上げることができました。特に台形様石器がまとまって出土したことは、今後秋田県の同時代の歴史のみならず、全日本的な規模での研究に欠かすことのできない資料になるものと考えております。

ここにその成果を報告するにあたり、秋田県商工労働部工業振興課、秋田県企業局、河辺町教育員会、同産業課の御協力に対し厚く感謝の意を表するとともに、本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する御理解の一助として役立つことを切に希望します。

昭和60年３月31日

秋田県教育委員会
教育長　斎　藤　　長

巻頭図版1　台形様石器（S＝1：1）
（上3段が風無台Ⅱ遺跡出土、下1段が松木台Ⅱ遺跡出土）



巻頭図版 2　上　風無台Ⅰ遺跡　母岩㋑接合状況
下　松木台Ⅱ遺跡　接合資料４　台形様石器接合状況

目　　次

序

例　言

第１章　調査に至るまでの経緯と調査経過 …… 1

第１節　調査に至るまで …… 1

第２節　調査経過 …… 1

第２章　調査の組織と構成 …… 3

第３章　遺跡群の立地と環境 …… 5

第１節　遺跡群の位置 …… 5

第２節　周辺の地形と遺跡群の立地 …… 7

第３節　歴史的環境 …… 13

第４章　調査の方法 …… 16

第５章　七曲台における旧石器時代遺跡群の調査 …… 17

第１節　風無台Ⅰ遺跡 …… 17

第２節　風無台Ⅱ遺跡 …… 61

第３節　松木台Ⅱ遺跡 …… 104

第６章　七曲台における縄文時代～古代の調査 …… 139

第１節　風無台Ⅰ遺跡 …… 139

第２節　風無台Ⅱ遺跡 …… 153

第３節　松木台Ⅱ遺跡 …… 166

第４節　餅田沢Ⅱ遺跡 …… 176

第５節　石坂台Ⅰ遺跡 …… 182

第６節　石坂台Ⅲ遺跡 …… 194

第７節　石坂台Ⅱ遺跡 …… 200
第８節　餅田沢Ⅰ遺跡 …… 204
第９節　松木台Ⅰ遺跡 …… 206
第10節　風無台Ⅲ遺跡 …… 209
第11節　風無台Ⅴ遺跡 …… 210
第７章　七曲台の縄文時代遺構に
あらわれた問題について …… 212

例　　言

1　本書は、昭和58・59年の２ヶ年にわたって行われた、七曲臨空港工業団地造成地内（秋田県河辺郡河辺町七曲台）に所在する11遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

2　各遺跡の調査期間、調査面積、調査担当者は第２章を参照されたい。

3　本書の執筆・編集の分担は下記のとおりである。

第１章、第３章の第１・２節、第５章……大野憲司

第３章の第３節、第４章、第６章の第１・２・４・５節……高橋忠彦

第６章の第３・６・７・８・９・10・11節、第７章……小林　克

4　土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』を活用した。

5　第６章の挿図中における「Ｓ」は礫、「Ｐ」は土器を表わし、またスクリーントーンは▒が焼土、▒が炭化物である。

6　本書の作成にあたり次の諸氏から御指導、御助言を賜わった。記して謝意を表する。

加藤晋平（筑波大学教授）・戸沢充則（明治大学教授）・渡辺　誠（名古屋大学助教授）白石建雄（秋田大学教授）・冨樫泰時（秋田県教育庁文化課）・加藤　稔（山形大学講師）小田静夫（東京都教育庁社会教育部文化課）・安蒜政雄（明治大学助教授）・安孫子昭二（東京都教育庁社会教育部文化課）・岡村道雄（東北歴史資料館）・柳田俊雄（郡山女子短期大学講師）・藤原妃敏（福島県教育庁文化課）・館野　孝（東京都埋蔵文化財センター）栗島義明（明治大学文学部考古陳列館）・石川恵美子（明治大学文学部大学院生）

第１章　調査に至るまでの経緯と調査経過

第１節　調査に至るまで

秋田県は昭和53年新秋田空港建設計画に伴って、空港およびその周辺地域に対して、産業立地の視点から基礎調査を実施した。その結果、今後の高度情報化社会および先端技術産業進展等の想定から、空港周辺には、航空輸送をフルに活用した知識集約型産業の立地が最適であるとして、これを臨空港工業団地とした。そして、その開発の適地として、自然、社会、事業の採算等の諸条件に優れた河辺町七曲地区が選定された。七曲臨空港工業団地がこれで、開発計画面積は約60haである。(注1)

七曲臨空港工業団地造成計画地は、岩見川の左岸に形成された河岸段丘上であり、未発見の遺跡の存在が予想されるところでもあった。このため、秋田県商工労働部工業立地課長は、秋田県教育委員会文化課長あてに、昭和57年４月10日付「工17」で工業団地計画地内の遺跡分布調査を依頼した。これを受けて秋田県教育委員会は、昭和57年11月24日～30日に同地内での遺跡分布調査(注2)を行い、同年12月20日付で、その結果について報告し、さらに翌昭和58年４月11日～５月14日には遺跡範囲の確認をも含めた遺跡詳細分布調査(注3)を実施して、同年６月１日付でこれを報告した。２回の調査の結果、工業団地計画地内には、合計12ヶ所の遺跡の存在が確認された。

七曲臨空港工業団地造成は秋田県の最重要施策の一つでもあったことから、工業立地課と文化課は遺跡の対応についてさっそく協議を行い、造成工事に伴い遺跡の破壊は回避できないとして、事前に発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は昭和58年７月から開始して、昭和59年中には終了することであった。なお、風無台Ⅳ遺跡は緑地帯として残るため調査対象から外され、調査対象遺跡は合計11遺跡となった。

第２節　調 査 経 過

調査に先立ち調査の方法として、遺跡の所在する地点の表土は全て重機で除去することを採用して、昭和58年６月下旬からこれを開始した。七曲台全体は平坦な台地で畑作等には適した立地であったと思われるが、第二次世界大戦前までは萱刈場や雑木林であったという。これに人手が加わって、畑地、牧草地として大いに利用されるようになったのは戦後間もなくで、前

後10戸くらいの入植者によって開拓された。これによって七曲台はほぼ全面畑地等になったのであるが、その後ここを離れる人も出て、一部の畑地は杉や桐の植林地などに変わった。

発掘調査は昭和58年７月６日、風無台Ⅰ遺跡から着手し、同年には11月15日まで、風無台Ⅰ遺跡、風無台Ⅴ遺跡の一部、餅田沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、風無台Ⅱ遺跡の一部を行った。風無台Ⅰ遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡、土壙群の他に旧石器時代の遺物多数を、餅田沢Ⅰ・Ⅱ遺跡ではやはり縄文時代の竪穴住居跡などを発見して風無台Ⅱ遺跡の調査に移った。風無台Ⅱ遺跡は縄文時代だけの遺跡であると見られていたが、10月下旬には調査区中央部から旧石器時代の遺物、地点を別にして弥生時代の竪穴住居跡や土壙群が発見された。旧石器時代の遺物はこれまで東日本で全く出土例のなかった台形様石器を主体とするものであり、弥生時代の竪穴住居跡は本県では若美町横長根Ａ遺跡に次ぐ２例目の発見であった。しかしながらこれらの遺構・遺物については調査期間が無くなったことから次年度に継続することとした。

翌昭和59年の発掘調査は、豪雪が未だ消えずに残る中で開始された。風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅰ・Ⅱ遺跡、石坂台Ⅱ遺跡の４遺跡をほぼ同時に行ったが、遺構・遺物ともに希薄な遺跡については早めに調査を終了させ、両者が多いところには人員を集中させた。風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡では数地点から、主に断面フラスコ状を呈する土壙群が集中して発見され、松木台Ⅱ遺跡からは風無台Ⅱ遺跡と同様の台形様石器を主体とする旧石器時代の遺物が出土した。５月下旬までに風無台Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ遺跡、松木台Ⅰ・Ⅱ遺跡、石坂台Ⅱ遺跡の調査を終了して、６月からは調査体制を縮小して石坂台Ⅲ遺跡の調査に入った。石坂台Ⅲ遺跡の終了後、引き続き石坂台Ⅰ遺跡の調査に着手する予定であったが、諸般の事情により石坂台Ⅰ遺跡のそれは８月下旬からとなった。このため、２ヶ年にわたった七曲臨空港工業団地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査の終了したのは昭和59年９月22日であった。

全調査を通じて見た場合、県内では一地域の段丘面をほぼ全面にわたって発掘調査した例は皆無であったが、今回の調査によって、限定された地域とはいえ、一つの段丘面における各時代の遺構・遺物のあり方が具体的に解明されたこと、および、夢想だにされなかった台形様石器の出土は、望外の収穫であったといえる。

注１．秋田県、秋田ドラフティック社　『七曲工業団地建設計画策定調査報告書』　1981年
　２．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　1983年
　３．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　1984年

第２章　調査の組織と構成

調査主体　　秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・面積・時代・調査期間・担当者

番号	遺跡名	所在地	予定面積	発掘面積	時代				調査期間	担当者
					旧石器	縄文	弥生	古代		
1	風無台Ⅰ	河辺郡河辺町 松渕字風無台127他	8,520㎡	8,200㎡	○	○	○	○	S58 7月6日～9月21日	大野憲司(社会教育主事)
2	石坂台Ⅰ	河辺郡河辺町 戸嶋字七曲石坂台141他	8,600㎡	3,728㎡		○	○		S59 8月22日～9月22日	大野憲司 高橋忠彦(文化財主事)
3	風無台Ⅱ	河辺郡河辺町 松渕字風無台110他	13,200㎡	11,600㎡	○	○	○		S58 10月19日～11月15日 S59 4月2日～5月31日	大野憲司 高橋忠彦
4	風無台Ⅲ	河辺郡河辺町 松渕字風無台63他	8,240㎡	1,740㎡		○			S59 5月4日～5月29日	永瀬福男(社会教育主事) 橋本高史(文化財主事)
5	松木台Ⅰ	河辺郡河辺町 松渕字松木台97他	9,320㎡	2,520㎡		○	○		S59 4月12日～4月28日	柴田陽一郎(文化財主事)
6	松木台Ⅱ	河辺郡河辺町 松渕字松木台81他	14,730㎡	7,464㎡	○	○		○	S59 4月2日～5月31日	児玉　準(文化財主事) 小林　克(文化財主事)
8	風無台Ⅴ	河辺郡河辺町 松渕字風無台72他	7,750㎡	3,482㎡		○			S59 5月14日～5月19日	柴田陽一郎
9	餅田沢Ⅰ	河辺郡河辺町 松渕字餅田沢58他	7,000㎡	6,000㎡		○			S58 9月21日～10月19日	大野憲司
10	餅田沢Ⅱ	河辺郡河辺町 松渕字餅田沢56他	11,000㎡	8,500㎡		○			S58 9月12日～10月19日	高橋忠彦
11	石坂台Ⅱ	河辺郡河辺町 戸嶋字七曲石坂台52他	7,480㎡	3,670㎡		○	○		S59 4月12日～5月2日	永瀬福男 橋本高史
12	石坂台Ⅲ	河辺郡河辺町 戸嶋字七曲石坂台232他	7,730㎡	5,720㎡		○			S59 5月28日～6月21日	大野憲司　柴田陽一郎 高橋忠彦　小林　克

事務担当　　加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
　　佐藤　健（秋田県埋蔵文化財センター　主事）

事務補助　　伊藤香世

調査補佐員（昭和58年度）
　　池田洋一　佐々木正昇　佐藤雅子　高橋　修　竹村昭雄　村田嘉一

協力機関　　河辺町・産業課・同教育委員会，秋田県企業局，秋田県商工労働部工業立地課（現・工業振興課），国土開発㈱・第一建設㈱・栗原組㈱ＪＶ，総合開発㈱

整理作業員　五十嵐博子　伊藤順子　泉谷昭子　大野甲子　熊谷恵子　小松郁子　佐々木アイ子　進藤姈子　高橋チエ子　高柳良子　皆川恵子　柳田良子　嶋津竜子

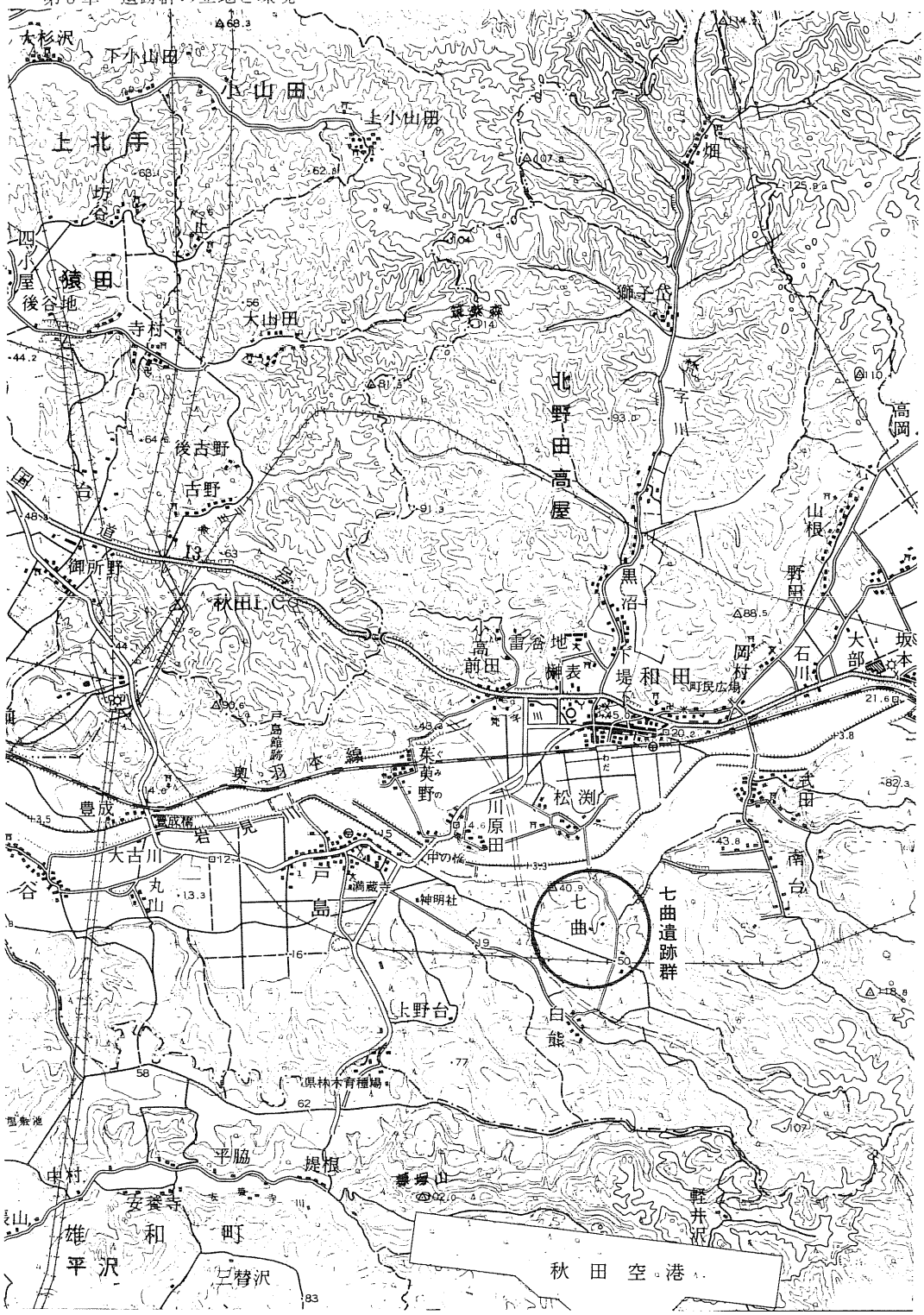
発掘作業員　鈴木正勝　藤田信雄　足利幸二　安藤和彦　伊藤宗太郎　石井金春　石井千代正　大堀孝以　岡部秀明　尾形政雄　尾形政隆　加賀谷隆　加藤正明　上遠野謙介　熊谷多茂治郎　川上金秀　木村重治　児玉喜太郎　金　隆雄　佐々木兼雄　佐々木貞一　斉藤祥朗　佐藤竹弥　佐藤信義　鈴木兼治　鈴木久雄　鈴木光行　菅原朋靖　関　富吉　外山　巌　高屋喜代一　高屋鉄蔵　高橋兼松　高橋貞夫　田口武雄　田口鶴治　名古屋晃　長谷川久儀　堀井助美　三浦淳一　三浦良治　渡辺長二郎　渡辺鉄夫　足利カツヱ　足利久美子　足利テツ　足利ヨシ子　伊藤マサエ　伊藤マサ子　石井いさ子　石井咲子　石井　光　石沢泰子　稲垣テル子　大山なみ子　岡部アヤ子　岡部カツヨ　岡部ヤエ　尾形チヨ　尾形ミチヱ　加賀谷カネ　加藤節子　鎌田江美子　鎌田ハナ　鎌田リツ　川上エミ子　熊谷春美　倉田サツ　佐々木恵美子　佐々木慶子　佐々木キワ　佐々木シヅヱ　佐々木志美子　佐々木セイ　佐々木千代　佐々木フヨ　佐々木ミキ子　佐々木ミホ　佐々木るり子　佐々木玲子　嵯峨信江　鈴木カツ　鈴木チヤ　鈴木恵子　鈴木サダ　鈴木チヤ　鈴木トミヱ　鈴木ハツヱ　鈴木初枝　鈴木ひろ子　鈴木弘子　鈴木フヂヱ　関　則子　関　ハル　高橋圭子　高橋ヒデ　高橋正子　高山エツ子　田口フサ　竹本ハルヱ　竹村まつゑ　二木トシ　藤島チヤ　藤田節子　藤田チヨ　藤田照子　藤田テル子　堀井シゲ　堀井トシ　堀井ハルヱ　堀井ヨシヱ　前田ワカ子　松田キク　三浦アエ子　三浦イマ子　三浦久美子　三浦ツヨノ　三浦栄子　三浦ミツ　三浦亮子　村上ヨシヱ　柳原いま　渡辺幸子　渡辺ハツヱ　渡辺ミチエ　渡辺ユキノ

第３章　遺跡群の立地と環境

第１節　遺跡群の位置　（第１・２図）

秋田駅から国鉄奥羽本線上り列車に乗って10～15分行くと、進行方向右側には岩見川によって形成された美しい平坦面をなす数段の段丘面が続く。七曲台遺跡群はこの段丘上にあり、和田駅のちょうど真南1.0～1.5kmに位置している。北緯39°38′00″～39°38′20″、東経140°13′00″

第１図　七曲台遺跡群の位置


大杉沢
下小山田
小山田
上小山田
上北手
坊谷
四小屋
猿田
後谷地
寺村
大山田
北野田
高屋
後古野
古野
御所野
秋田I.C.
黒沼
小高前田
雷谷地
榊表
下堤
和田
町民広場
岡村
石川
大部
坂本
山根
野田
高岡
戸島館跡
奥羽本線
東野
豊成
豊成橋
岩見川
大古川
丸山
戸島
満蔵寺
神明社
中の橋
川原田
松渕
武田
南台
七曲
七曲遺跡群
上野台
白熊
県林木育種場
平脇
堤根
中村
安養寺
雄和町
平沢
三替沢
軽井沢
秋田空港
0
1
2
3
4 Km

第２図　遺跡群の位置

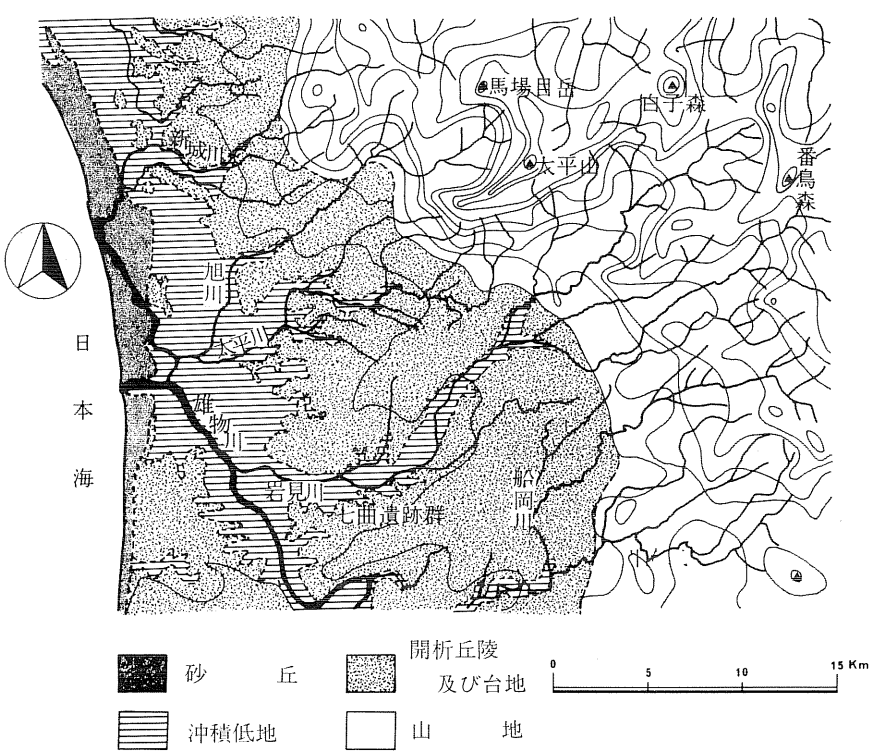
～140°13′30″の地点である。遺跡群の北1.5kmには国道13号線が東西に走り、同南３kmには昭和56年６月開港の秋田空港、同西北西５kmには秋田市教育委員会によって発掘調査が進められている御所野台地がある。

第２節　周辺の地形と遺跡群の立地

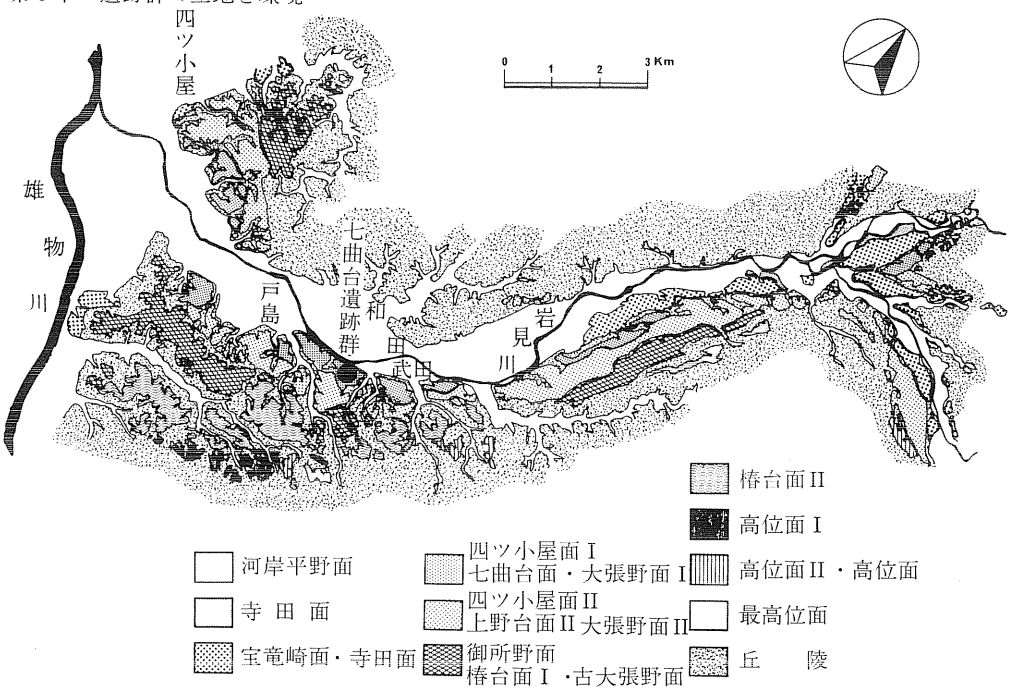
１　地形の概況と岩見川流域の段丘面

第３図は、七曲台周辺の地形区分、並びに接峰図面である。この地域の地形要素は東から順に山地、丘陵(台地を含む)、沖積低地、砂丘からなっておりそれらは太平山複合プルトンを基盤とする新第三系から構成されている。主水系は全体としてほぼＮＥ－ＳＷ方向に流れており、高度分布と調和的な必従河川であるが、岩見川をはじめとして山地間から沖積地に出たところで流路を西に変えている。

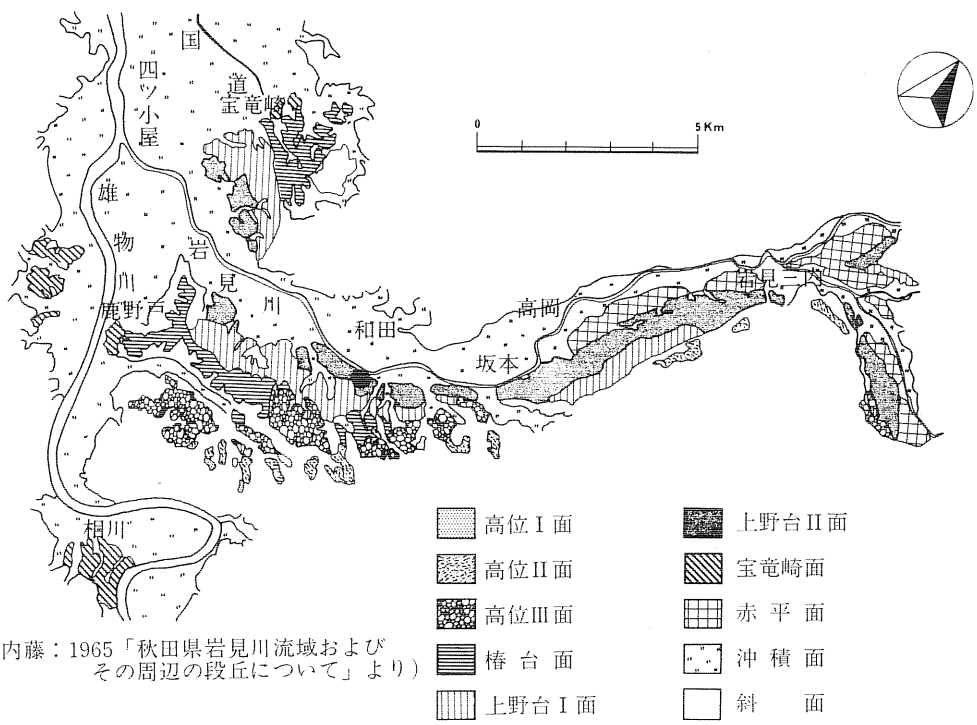
太平山塊南西斜面に源を発する岩見川は、大又川、杉沢川、三内川などの水を集めてほぼ南西に流下し、河辺町石川あたりでやや西に流路を変え、秋田市南郊で大河雄物川に合流する。



第３図　地形学図及び接峰面図　（白石：1975「岩見川流域の河岸段丘群」より）



（白石：1975「岩見川流域の河岸段丘群」より）



（内藤：1965「秋田県岩見川流域および
その周辺の段丘について」より）

第４図　岩見川流域段丘面分布図

流域面積約300km²、流路延長約60kmのこの川のほぼ全流域にわたって見事な河岸段丘が発達しており、県内の河川の中では比較的古くから研究が進められて来ている（内藤[注1]1965、白石[注2]1975など）。それによれば内藤は全流域を８面に、白石は流域を３地域に区分し、それぞれの段丘を対比させながら全９面に分けている。第１表は、両者の段丘面の対比であるがこの中で注目されるのは、白石が、段丘面の高度、面間の比高面の発達状態、勾配、丘陵背面との位置関係等に着目してこれらの段丘群を、性格を同じくする五群の段丘群（新期のものから河岸平野面、低位段丘、中位段丘、高低段丘、最高位段丘）に大別できるとし、さらにこれが中川[注3]（1961）が太平洋沿岸地帯に発達している段丘群をⅠ～Ⅴ期に区分したものに対応できるものとしたことである。また、内藤もほぼ同様の推定をしている。

表１　岩見川流域段丘面の対比

	御所野地区		岩見川下流域		岩見川中・上流域		中川(1961)		地質時代
河岸平野面	白石	内藤	白石	内藤	白石	内藤	Ⅰ	沖積世	完新世
低位段丘	—	—	—	—	寺田面	—	Ⅱ	(ヴュルム)氷期	更新世後期
		宝竜崎段丘(25m)	—	—	—	—			
	宝竜崎面(25m)	—	—		赤平面(20m)	赤平段丘			
	四ツ小屋面Ⅰ(35m)	上野台段丘Ⅱ(35m)	七曲台面(35～40m)	上野台段丘Ⅱ(35～45m)	大張野面Ⅰ(－)	上野台段丘Ⅱ(55～70m)			
	四ツ小屋面Ⅱ(35～45m)	上野台段丘Ⅰ(40m)	上野台面(40～50m)	上野台段丘Ⅰ(40～50m)	大張野面Ⅱ(60～120m)				
中位段丘	御所野面(50m)	椿台段丘(45～50m)	椿台面Ⅰ(60～80m)	椿台段丘(60～65m)	古大張野面(60～80m)	上野台段丘Ⅰ(65～80m)	Ⅲ	リス・ヴュルム間氷期	
			椿台面Ⅱ(80～90m)						
高位段丘	—		高位面Ⅰ(90～100m)	高位段丘Ⅲ	高位面(130～150m)	高位段丘Ⅱ(80～85m)	Ⅳ	(リス)氷期	更新世中期
			高位面Ⅱ(100m)	高位段丘Ⅱ(90～100m)					
最高位段丘			最高位面(120)	高位段丘Ⅰ(120m)	最高位面(120～160m)	高位段丘Ⅱ(130～160m)	Ⅴ	ミンデル・リス間氷期	

白石：「岩見川流域段丘面対比」に加筆

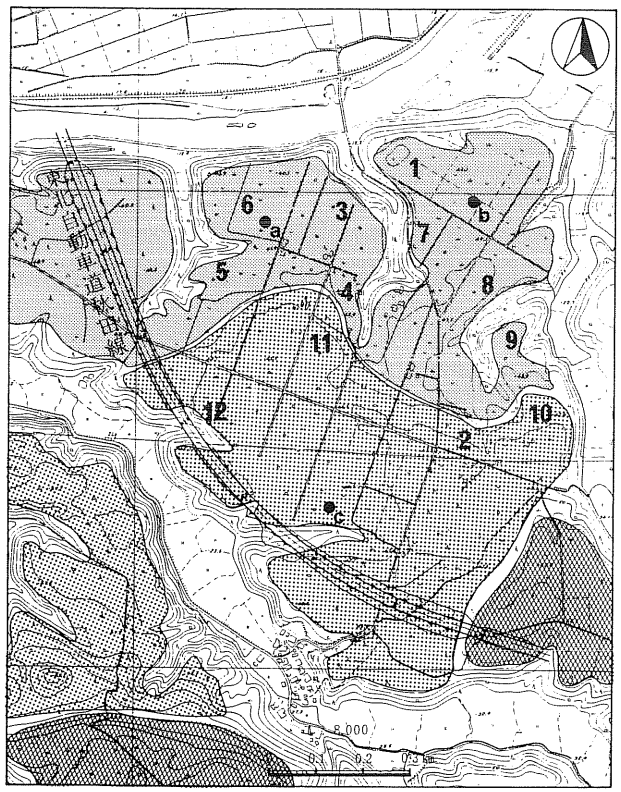
2　遺跡群の立地と地層の概略

七曲台遺跡群は岩見川下流域の右岸、白石によれば七曲台面および上野台面（内藤によれば上野台段丘IIおよび上野台段丘Ⅰ）に存在する。それぞれの段丘面の高度は、七曲台では七曲台面が40～43.5m、上野台面が44m～48mでほぼ平坦である。両者の比高は約５mであるが、七曲台における両者の境界は比較的急な斜面となっているところと、漸移的な面となっているところがある。岩見川と七曲台面の北端はまさに急峻な段丘崖となっている。現河水面と七曲台面の比高は約27mである。また、これらの２つ段丘面の南東側には急角度の段丘崖を持って

標高60m～64mの椿台面が位置している。

２つの段丘面は比較的開析が進んでおり、北側から二つ、東側と南側から一つづつの沢が、段丘中央近くまで入り込んでいる。これらの沢は断面形がするどいV字形をなしており段丘面からは急斜度の崖となっている。また微視的にはこれら四つの沢以外にも規模の小さな浸蝕が所々に見られ、各遺跡はそれら大小の沢に囲まれた段丘端部に位置しているとも言える。

第６図は七曲台の３ヶ所におけるボーリング調査の柱状図である。段丘の基盤は均質なシルト質泥岩で、新第三紀鮮新世の天徳寺層上部にあたる。天徳寺層は地質構造上の褶曲をうけており、七曲台付近では北東方向へ緩く傾斜している。基盤であるシルト質泥岩の上には砂礫層および粘土混り礫層が厚く堆積しており、その上には褐色～黄灰色を呈するシルト質土層、さらに黒色の表土がのっている。礫層中の礫質は岩見川流域に普遍的に見られる花崗岩質のもので粒径は最大で12～15cm程度である。黒色表土の下のシルト質土層については、これが粘土質火山灰層で一応男鹿半島の寒風山起源のものと考えられている[注4]が、その降下年代や起源についての詳しい研究は進んでいない。第７図は七曲台における段丘礫層よりも上部に堆積している土層図である。土層の名称については、風無台Ⅰ遺跡の標準的な部分の土層をもとに付したものである。従って、同一段丘上にあっても地点が異なれば土色の違い、厚さの違いはもとより、確認できない土層もあったりする。



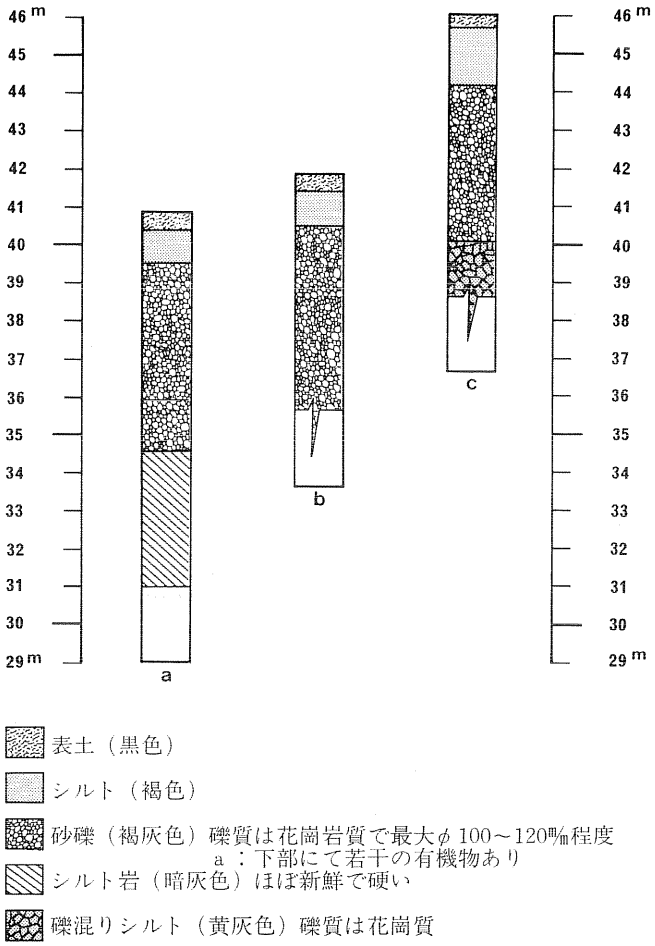
1　風無台Ⅰ遺跡　7　風無台Ⅳ遺跡
2　石坂台Ⅰ　〃　8　風無台Ⅴ　〃
3　風無台Ⅱ　〃　9　餅田沢Ⅰ　〃
4　風無台Ⅲ　〃　10　餅田沢Ⅱ　〃
5　松木台Ⅰ　〃　11　石坂台Ⅱ　〃
6　松木台Ⅱ　〃　12　石坂台Ⅲ　〃

七曲台面
上野台面
椿台面Ⅰ

第５図　遺跡群周辺の段丘面と遺跡・ボーリング調査の位置

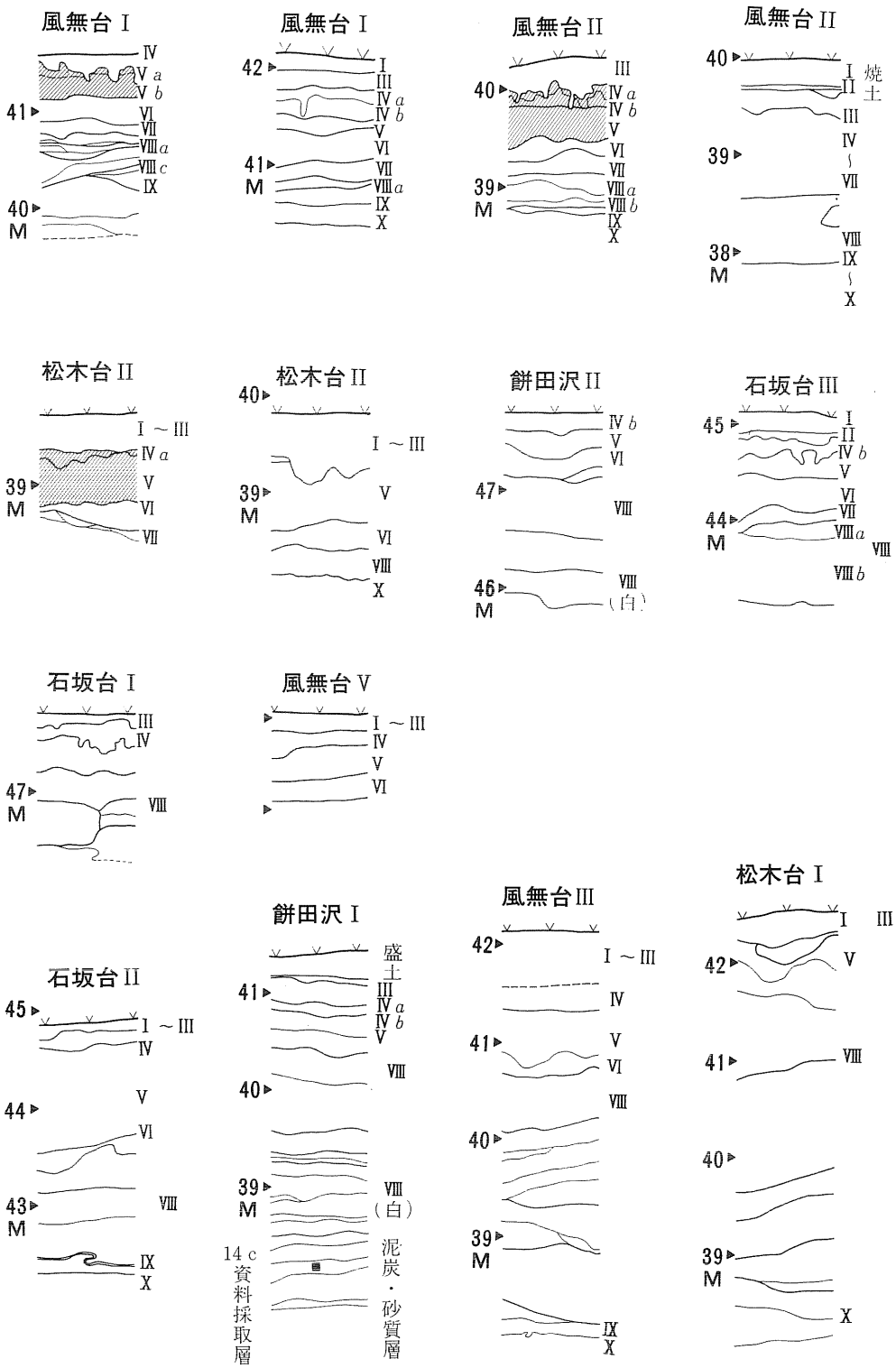
第Ⅰ～Ⅲ層が、いわゆる〝黒ボク〟と呼ばれる黒色表土、Ⅳ層は褐色～暗褐色を呈する漸移

層で、この下の褐色ローム土の混じり具合でⅣａ、Ⅳｂに分けられる。Ⅴ～Ⅶ層は明褐～明黄褐色を呈する火山灰質の土層で、砂、粘土を全く含まず、径１～３㎜程度の鉱物様の物質を含む。このうち、Ⅴ層よりもⅥ層の方が黄色味が強くかたくしまっている。また、Ⅶ層は他の地点では明確に分層できないことが多い。Ⅷ層はオリーブ黄色を呈する粘土質あるいは砂の混入した粘質土で、これが横縞状に互層となることが一般的であり、水成堆積の土層であると思われる。このⅧ層は七曲台面の上野台面寄り（風無台Ⅲ、松木台Ⅰ、餅田沢Ⅰ）には厚くあり、しかもそれが水平な堆積ではなくうねっている。この２つの地点が上野台面形成後の岩見川の岸辺で土砂の堆積が川の中ほどよりも多い状況下にあったためと思われる。Ⅸ層以下がいわゆる褐色の砂礫層でⅩ層からは砂の少ない黄褐色の礫層である。径１～３cmの小さな円礫から最大径12～15cm程度の花崗岩の円礫が多い。また七曲台面と上野台面の土層の堆積状況およびその厚さを概観すると、Ⅰ～Ⅳ層、Ⅴ～Ⅶ層までについては両者が相似している。異っているのは、風無台Ⅲ、松木台Ⅰ、餅田沢Ⅰを除いた七曲台面のⅧ層の厚さと、上野台面でのⅧ層の厚さである。このことから、Ⅶ層以降を降下火山灰と仮定すると、上野台面が形成されてから七曲台面の形成までほとんど火山灰の降下がなかったとも予想される。



第６図　ボーリング調査による土層柱状図

なお、七曲台面、上野台面の形成時期については、表１のようにヴェルム氷期とする以外ないのであるが、餅田沢Ⅰ遺跡の土層観察用深掘り地点の現表土下約3.2mから出土した木片の^{14}C年代は28,900±1,900であった。


風無台Ⅰ
Ⅳ
Ⅴa
Ⅴb
41
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷa
Ⅷc
Ⅸ
40
M
風無台Ⅰ
42
Ⅰ
Ⅲ
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴ
Ⅵ
41
M
Ⅶ
Ⅷa
Ⅸ
Ⅹ
風無台Ⅱ
Ⅲ
40
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
39
M
Ⅷa
Ⅷb
Ⅸ
Ⅹ
風無台Ⅱ
40
Ⅰ
焼土
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
39
Ⅶ
Ⅷ
38
M
Ⅸ
Ⅹ
松木台Ⅱ
Ⅰ～Ⅲ
Ⅳa
39
M
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
松木台Ⅱ
40
Ⅰ～Ⅲ
39
M
Ⅴ
Ⅵ
Ⅷ
Ⅹ
餅田沢Ⅱ
Ⅳb
Ⅴ
Ⅵ
47
Ⅷ
46
M
Ⅷ
（白）
石坂台Ⅲ
45
Ⅰ
Ⅱ
Ⅳb
Ⅴ
Ⅵ
44
M
Ⅶ
Ⅷa
Ⅷ
Ⅷb
石坂台Ⅰ
Ⅲ
Ⅳ
47
M
Ⅷ
風無台Ⅴ
Ⅰ～Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
石坂台Ⅱ
45
Ⅰ～Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
44
Ⅵ
43
M
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
餅田沢Ⅰ
盛土
41
Ⅲ
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴ
Ⅷ
40
39
M
Ⅷ
（白）
14c資料採取層
泥炭・砂質層
風無台Ⅲ
42
Ⅰ～Ⅲ
Ⅳ
41
Ⅴ
Ⅵ
Ⅷ
40
39
M
Ⅸ
Ⅹ
松木台Ⅰ
Ⅰ
Ⅲ
42
Ⅴ
41
Ⅷ
40
39
M
Ⅹ

第７図　遺跡基本層位

第３節　歴史的環境　（第８図）

岩見川を中心とする南北の丘陵には、南側に七曲台・南台・上野台のある戸島丘陵と対岸の和田丘陵があり、これには西端で未戸台地が連接している。これまでこの地域においては遺跡調査例が全くなく遺跡数も少なかったのであるが、今回の七曲台の調査および周辺の分布調査（踏査）、東北横断道の分布調査[注5]、さらには秋田市教育委員会の未戸台地における調査等[注6]によって遺跡数は、未命名のものも含めて67ヶ所を数えるに至っており、その調査結果からこの地域における各時代の遺跡の分布状態や遺跡個々の諸様相が明確になりつつある。

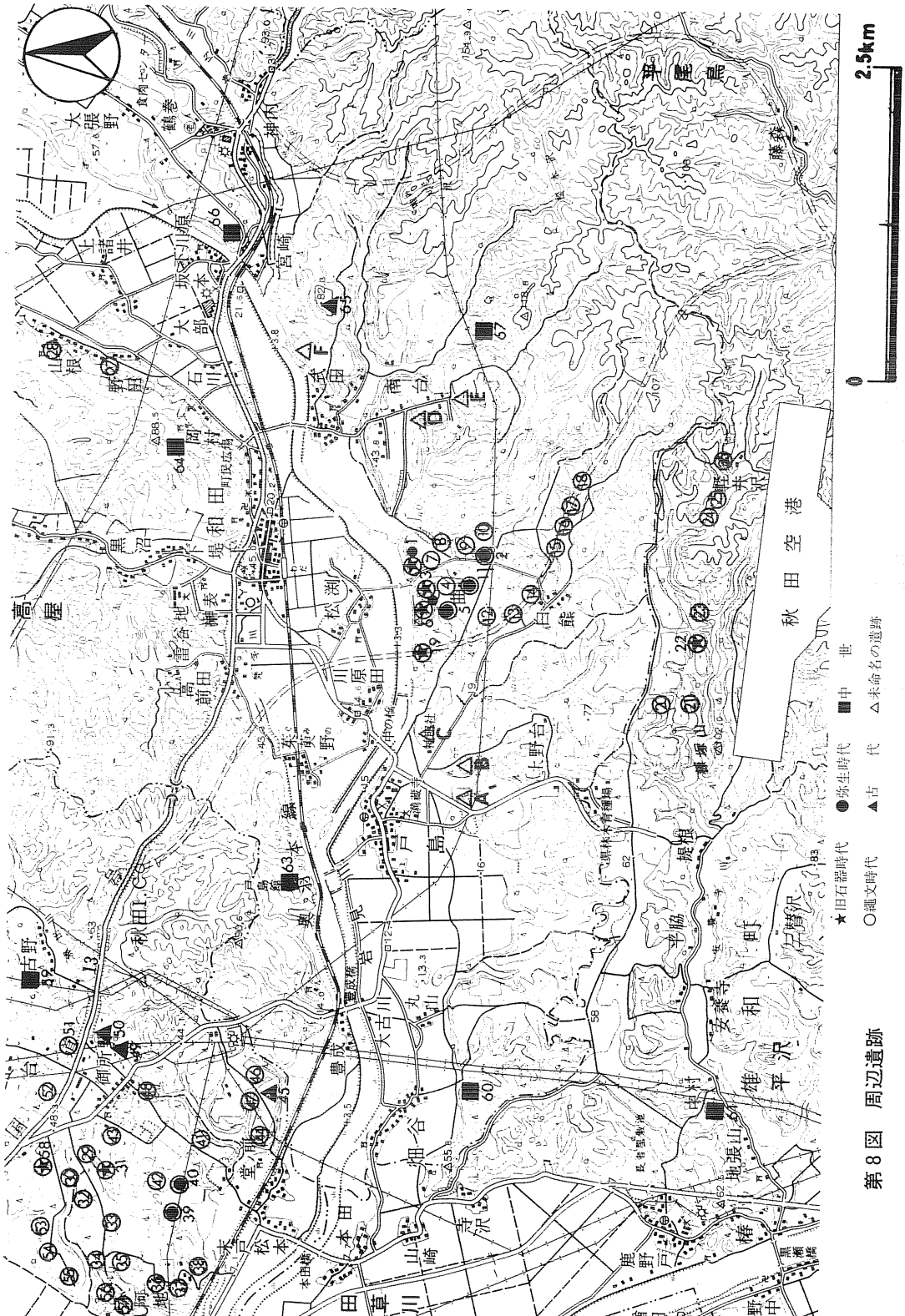
これらの67遺跡の調査されつつある内容を概観してみると、遺跡の大部分が未戸台地と戸島丘陵の平坦面標高30～50m前後に立地していることがわかる。和田丘陵にはその地形が急峻なせいもあってかわずかに戸島館（63）・和田城（64）が認められるにすぎず、未戸台地に33、戸島丘陵で26の遺跡を数えることができるのである。これら遺跡群を時代別にみると、一部重複もあるが、旧石器時代７、縄文時代44、弥生時代９、古代６、中世[注７]７である。この中で特に注目されるのが旧石器時代と弥生時代の遺跡である。この両時代の遺跡はこれまで県内においても調査例が少なくその実態を把握するまでに至らなかったのであるが、七曲台・未戸台における調査によってこの両時代の内容が少なからず明確になりつつある。

旧石器時代では七曲台において石刃を中心とする風無台Ⅰ遺跡（１）、台形様石器を中心とする風無台Ⅱ遺跡（３）、松木台Ⅱ遺跡（６）があるのに対して未戸台地の、下堤Ｇ（31）では米ヶ森型台形石器を中心としており、近接している遺跡でありながらその石器組成に大きな違いをみせている。

縄文時代に入ると遺跡数は多くなる。時期的には縄文前期から晩期まで認められ、特に湯ノ沢Ｂ（41）、坂ノ上Ｅ（34）の遺跡では縄文中期の集落が検出されている。一方七曲台では風無台Ⅰ・石坂台Ⅰ・餅田沢Ⅱ（10）の各遺跡でそれぞれ３・４軒ほどの住居跡が検出されたにすぎず、むしろ縄文時代晩期に属する土壙群が多い。

弥生時代の遺跡としては風無台Ⅱ遺跡、未戸台地の湯ノ沢Ａ遺跡（40）で、同時代の住居跡が検出されており、南秋田郡若美町の横長根Ａ遺跡の住居跡とともに、秋田県内の弥生時代における社会構造を知る手がかりを得たことになる。この他弥生時代の遺跡としては七曲台では風無台Ⅰ、石坂台Ⅰ・Ⅱ（２・11）、松木台Ⅰ（５）遺跡などがあり、まだ未命名であるが七曲台西端においても変形工字文の施される土器（第９図）を出土する遺跡（Ｃ）が確認されている。

古代になると七曲台ではわずかに風無台Ⅰ、松木台Ⅱ遺跡で１基ずつ遺構が確認されたにとどまるが、未戸台地では豊富な副葬品を伴う土壙墓の検出された湯ノ沢Ｆ遺跡（45）がある。



第８図　周辺遺跡

中世の遺跡は調査例がなく不明確であるが今のところこの地域に７つ城館が認められる。

注１．内藤博夫　「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」　『第４紀研究４－１』1965年

２．白石建雄　「岩見川流域の河岸段丘群」　『秋田大学教育学部研究紀要26』1971年

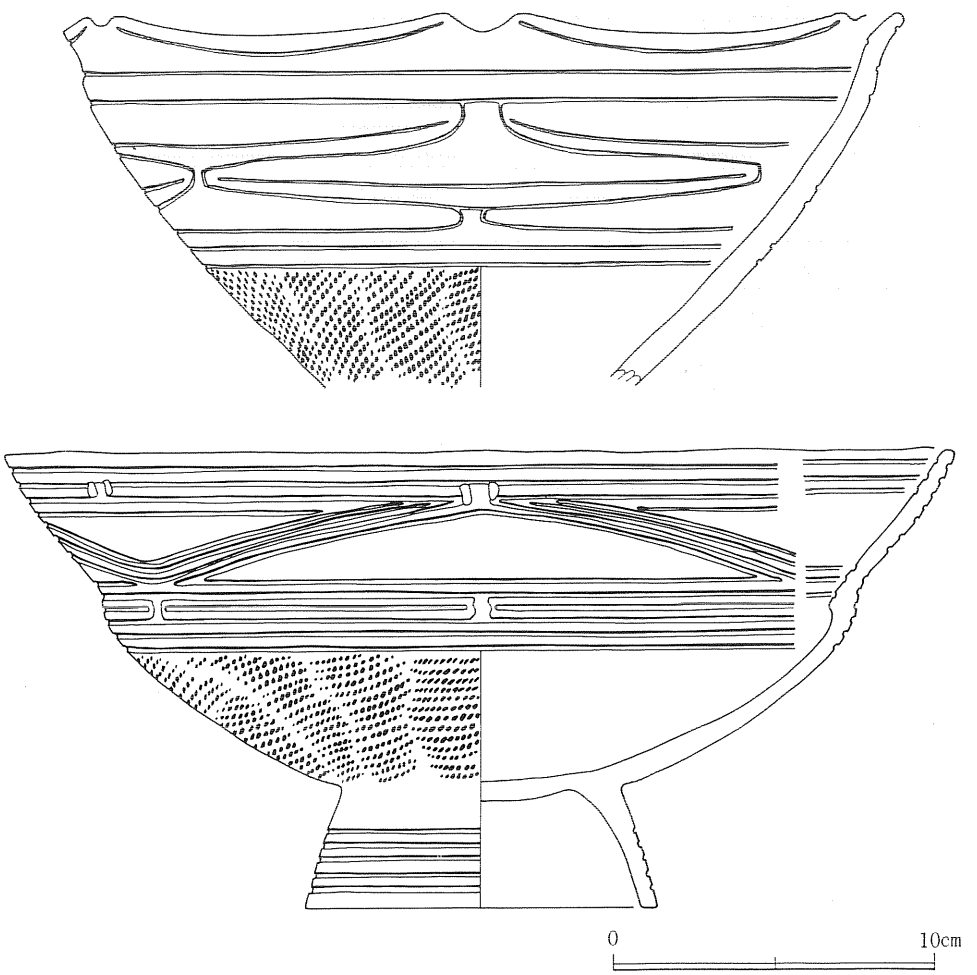
３．中川久夫　「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」　『東北大地古邦報54』1961年

４．経済企画庁　「秋田」　『経済企画庁土地分類企画調査』1966年

５．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』1985年

６．秋田市教育委員会　『秋田臨空港都市開発関係埋蔵文化財発掘調査書』1983・1984年

７．秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』1981年



第９図　Ｃ遺跡出土土器

第４章　調査の方法

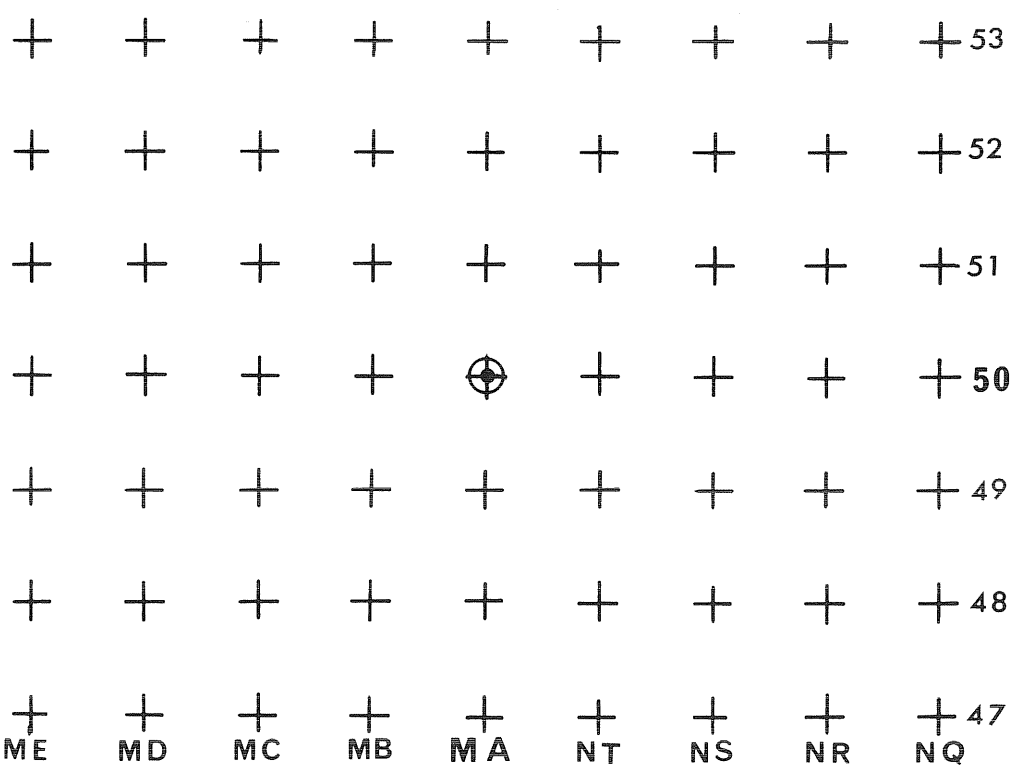
七曲における遺跡の調査は全てグリッド方式を用いて行われた。七曲台全域には工事計画用の20mメッシュの杭が打設されており、遺跡内においてもこの杭のいずれかを基準点(ＭＡ50)として４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。グリッドの表記には東西にアルファベット２文字南北に２桁の数字を用い、グリッド東南隅の杭(座標交点)をその呼称とする表記法を採用している。(第10図参照)

調査は、範囲確認調査の結果に基づき遺物包含層・遺構に影響を及ぼさない限りにおいて表土を重機によって除去し、遺構・遺物の少ない遺跡に関しては速やかに調査を終了し、旧石器など、遺物の数量、遺構の広く展開する遺跡に関しては随時人員を配して調査を行った。確認される遺構には順次、略記号と番号を付し、実測は縮尺率1/20で作図し、遺構・遺物の検出状況に応じ写真撮影を行った。

本調査において使用された遺構の略記号は以下の通りである。

ＳＩ……竪穴住居跡　ＳＫ……土壙　ＳＫＴ……Ｔピット　ＳＫＦ……フラスコ状土壙

ＳＲ……土器埋設遺構　ＳＮ……焼土遺構　ＳＢ……掘立柱建物跡



第10図　グリッド配置模式図

第５章　七曲台における旧石器時代遺跡群の調査

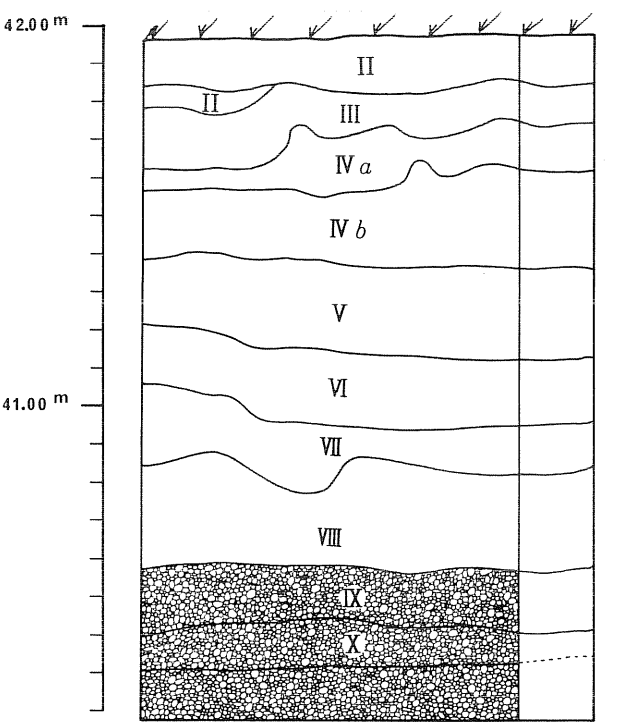
昭和58・59年２ヶ年の発掘調査で、七曲台では３ヶ所から旧石器時代の遺物が発見された。発見順に風無台Ｉ遺跡、風無台II遺跡、松木台II遺跡がそれである。各遺跡の旧石器時代遺物の出土地点及び調査区は、それぞれ第91図、105図、113図と163図のとおりである。３つの遺跡はこの地域では低い方の段丘（七曲台面）にあり、風無台Ｉ遺跡と風無台II遺跡は谷をはさんでいるが直線距離にして約250m、風無台II遺跡と松木台II遺跡は同一台地上で約120mほど離れている。各遺跡における石器群の内容は、風無台Ｉ遺跡がナイフ形石器を主な石器とする石刃石器群、風無台II・松木台II遺跡が台形様石器を主とする石器群である。以下、３つの遺跡について風無台Ｉ遺跡、風無台II遺跡、松木台II遺跡の順で説明したい。

第１節　風無台Ｉ遺跡

１　基本層序

風無台Ｉ遺跡における旧石器時代遺物は、遺跡調査区のほぼ中央部、北側に岩見川を見下ろす段丘縁辺から25～35mほど中よりの黒色土下から発見された。この地点はほぼ平坦な面をなしているが、微視的には極く緩やかに南側に低く傾斜しているところである。

第11図は、遺物集中地区に隣接した地点の深掘りトレンチ断面図である。第Ｉ～III層は黒色～黒褐色の表土。第IV層は表土と第Ｖ層黄褐色土の間の漸移層で、その色の差によってIV$_a$、IV$_b$層に分層した。木の根等の影響によるものか波打っている。第Ｖ・VI層は一般

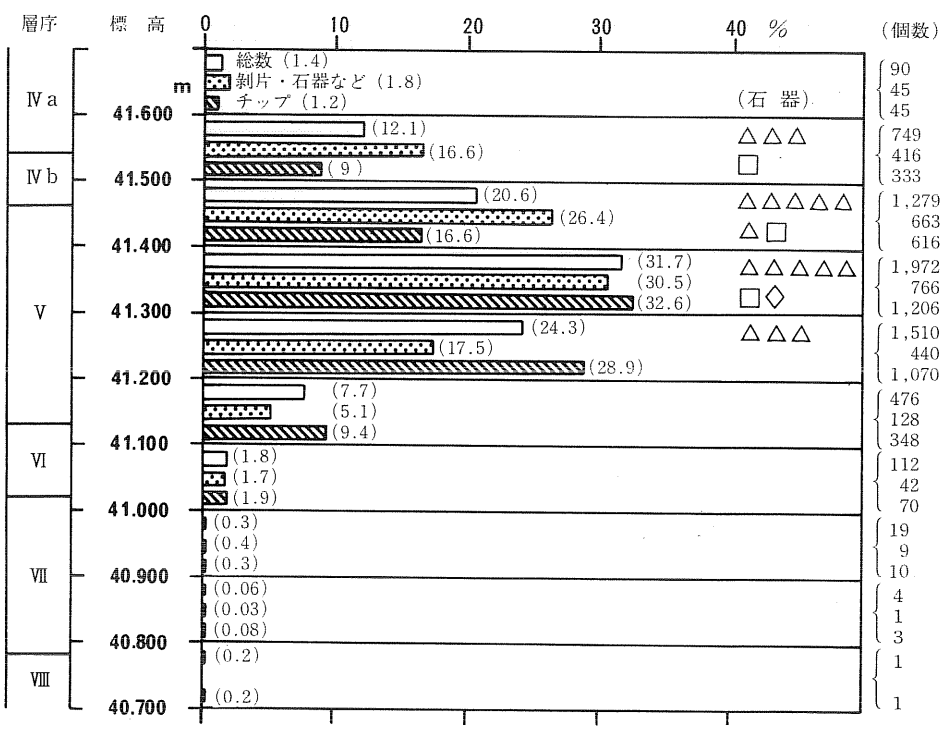


第11図　風無台Ｉ遺跡土層図

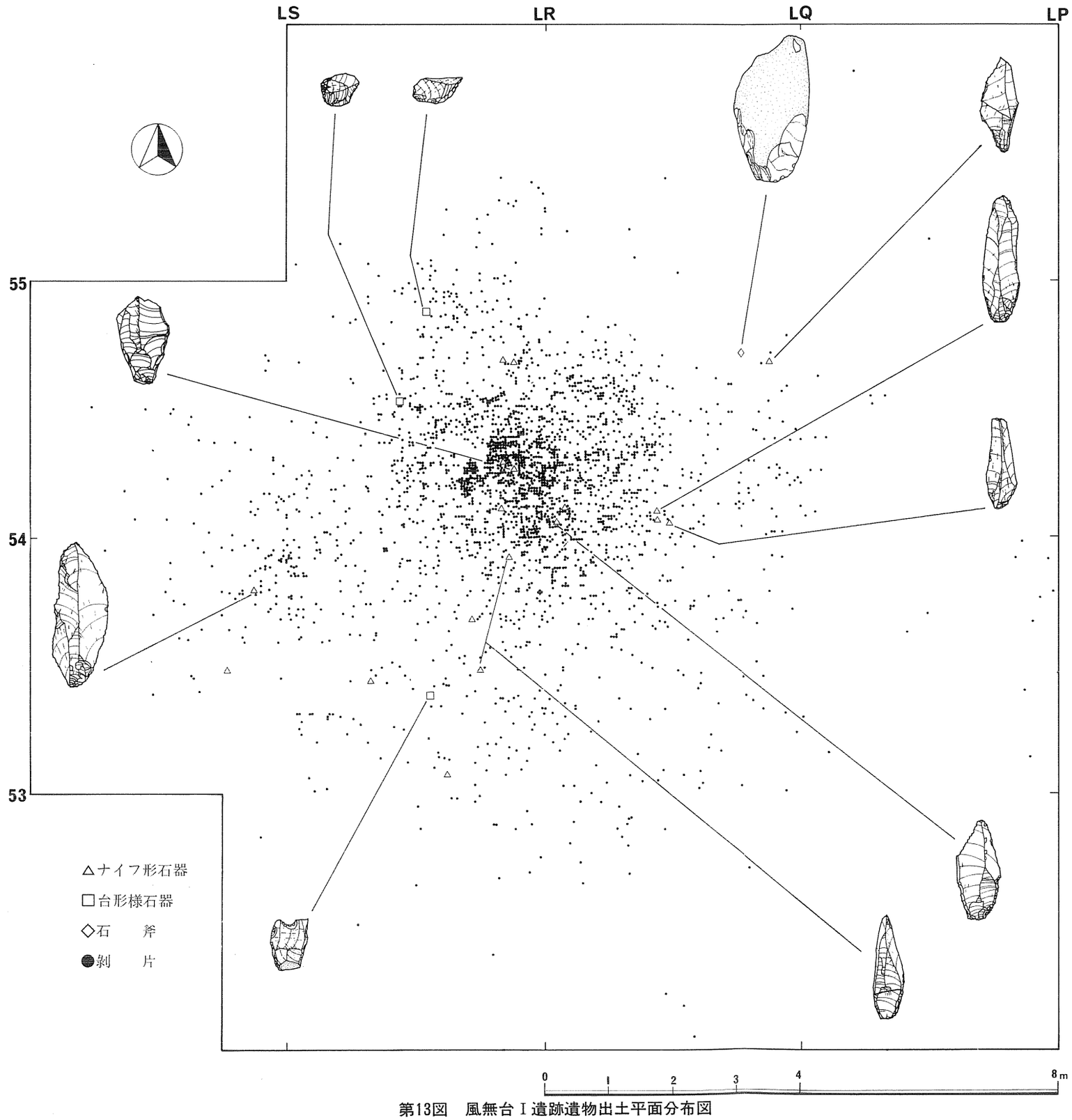
的にローム層と呼ばれる黄褐色～褐色を呈する土で、Ⅳ層の方が黄色味が強く、堅くしまっている。第Ⅶ層は第Ⅷ層への漸移層で、Ⅵ層より軟かく、少し粘性が出てくる。第Ⅷ層はオリーブ黄色の粘質土と砂の混じり合った層で、両者が互層になる部分もある。第Ⅸ層以下は段丘砂礫層である。色調によってＸ層と区分されるが、基本的には径１～15cm前後の花崗岩を主体とする円礫に砂の混じり合った層である。これらの土層のうちⅠ～Ⅲ層中には縄文時代以降の遺物が、$Ⅳ_a$層下部～Ⅵ層にかけては旧石器時代の遺物が包含されている。なお地点によっては、Ⅷ層下部からⅨ・Ｘ層上部にかけてうねるような堆積状況のところもある。

2　遺物の出土状況

旧石器時代の遺物は第Ⅳ層漸移層中位以下から、平面的には約230m²の節囲で出土した。第13図がその平面分布状況、第12図がその出土レベルを示している。これでわかるように、石器群は調査区のほぼ中央部直径約12mの円の中に集中しており、垂直分布にして約0.7mの範囲内である。なお花崗岩を主とする円礫も出土しているが、特に集中は見られず、焼けた痕跡のある



第12図　出土レベル別個体数　（　）内は%を表す



第13図　風無台Ⅰ遺跡遺物出土平面分布図

ものも見られなかった。

遺物として取り上げた総数は礫、微細なチップ等も含めて6,258点に上るが、その後の整理の結果、遺物でないもの、礫を除くと総数で6,212点となる。その内訳は、定形的な石器・剥片・石核などが、2,510点、チップが3,702点で、両者の比率は約４：６となる。チップと石器・剥片・石核などの出土レベル毎の個数を見てみると（第12図）、両者のピークおよび総数は第Ｖ層中にあり、ナイフ形石器などもおおよそこの中に入る。また、発掘中にも石器群を分層できるような状況は全くなく、前述したこととも合わせ、これらの石器群は同一の時期のもので、１つのまとまりとして把えることができる。さらにこのことは同一母岩の資料の平面分布、垂直分布の状況も同様である。従って、風無台Ｉ遺跡の石器群は、第Ｖ層中に生活面を持った単一時期のものであると言える。

3　出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、礫などを除いて総数で6,212点に及ぶ。これらの石器群は整理の結果、石斧とした１点を除いて、合計28個の原材（母岩㋐～㋚）から得られたものであることがわかった。各母岩毎の資料は多いものから少ないものまで種々あるが、総じて接合するものが多く、原石の大きさ、分割の過程、剥片剥離作業の進行状況のよくわかるものもある。石材は石斧を除いて全て硬質頁岩である。

(1)　母岩別資料[注1]

合計28個の母岩のあることを確認した。これらの母岩個々の残存の仕方には、以下のようなものがある。

Ａ類：母岩を持ち込んで、本遺跡内で、分割から剥片剥離作業まで行ったもの。

Ｂ類：他のところで剥片剥離作業を行って、それから得られた石刃などの素材を素材のままか、石器として、本遺跡に持ち込んだもの。

Ｃ類：母岩の一部を持ち込んで剥片剥離作業を行ったもの。

Ｄ類：母岩の分割後、その一部を他所へ持って行ったもの。

また、これらの母岩の分割から、剥片剥離までの行程を観ると、「打面調整」、「作業面調整[注2]」と呼ばれるような調整作業は全く行っていない。ただ１個１個の剥片を得る前の頭部調整だけは非常によく行われている。そして、母岩毎にその剥片剥離の方法を観察すると、以下のような分類が可能である。

Ｉ－ａ類：単設打面だけで剥片剥離作業を行うもの。

Ｉ－ｂ類：主に単設打面で剥片剥離作業を行うが、最後に打面を90°転移するもの。

II－ａ類：両設打面だけで剥片剥離作業を行うもの。

II－ｂ類：基本的には両設打面で剥片剥離作業を行うが、最後に打面と作業面を交互に変えるもの。

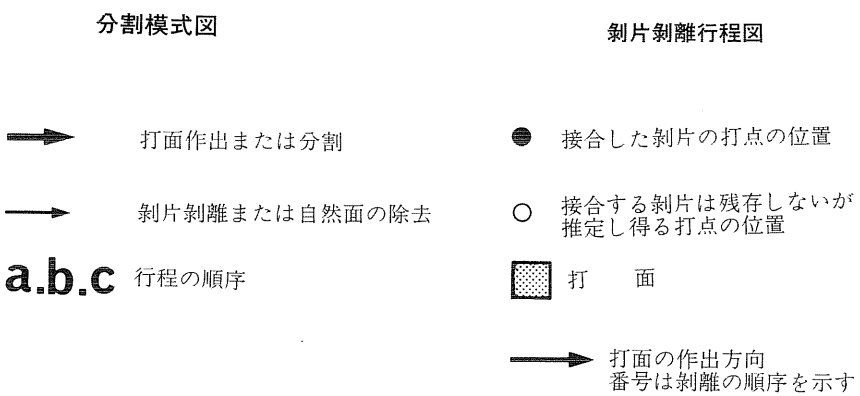
III類：打面と作業面を交互に変えながら剥片剥離作業を行うが、剥離が石核の縁辺を周り、円盤形の残核となるもの。

IV類：打面と作業面を頻繁に変えるもの。

これらＩ～IV類に分類した剥片剥離の方法は、１つの母岩から剥片剥離を行う際に、最初から最後まで１つの方法で行われる場合と、数種類の方法が併用されて行われる場合とがある。

以上のことと、各母岩の剥片数等をまとめたのが表２である。この中の数字で、特に総点数などは、チップ等で母岩毎に分けられなかったものも多く、概数であるものがある。

なお、各母岩の実測図中の模式図などで、使用している記号、マークは以下のことを表わしている。



第14図　模式図などの記号説明図

母岩　㋓　（第15、16図、図版10）

第15図１が、最終接合図である。これから推定すると、この原材は、長さ19cm、幅約10cm、厚さ約７cmの自然面で覆われた細長い円礫であったと思われる。２は、１－ｂ側から見た母岩分割模式図である。その行程は、①細長い円礫の両端に打面を作出する（ａ、ｂ）、②その打面から斜め方向に大きく分割して（ｃ、ｄ）、石核Ａ、Ｂを得る、③残った中心部の上から約３分の１のところで輪切りにするように再び分割して（ｅ）石核Ｃを得る、④ｅの分割面を打面と

第2表　母岩別石器数など

番号	母岩名	総点数	内容			母岩の分類	剥片剥離の分類						挿図番号	備考
			石核数	石刃数	石器		Ⅰ－a	Ⅰ－b	Ⅱ－a	Ⅱ－b	Ⅲ	Ⅳ		
1	あ	(280)	5 4	(100)	ナイフ形石器3	A	○		○		○		29.30	
2	い	(140)	6 2	(40)		A	○	○					18	
3	う	(180)	7 6	(50)		D	○		○				24	
4	え	(90)	4 1	(30)	ナイフ形石器1	A	○						15.16	
5	お	(100)	5 4	(20)	掻器 2	D	○						19	
6	か	20	0	19	ナイフ形石器1	B	(○)						32.33.34	
7	き	(140)	3 3	(35)		A		○		○			25.26	
8	く	(60)	3 1	(25)		A	○						17	
9	け	(190)	3 3	(40)		A	○		○				23	
10	こ	(490)	5 5		台形様石器1	A	(○)					○	31	
11	さ	(320)	4 3	(80)	ナイフ形石器2 掻器 2	A		○					27.28	
12	し	19	0			C			○				20.21	
13	す	28	2 2	(10)		A			○				20.21	
14	せ	74	1 0	(10)		A			○				20.21	
15	そ	25	0	(10)	掻器 1	C			○				22.	
16	た	26	0		台形様石器2	C						○	22.	
17	ち	5	1	4	ナイフ形石器1	B	(○)		(○)				32.33.35	
18	つ	5	0	5	ノッチ入り石器1	B	(○)						〃	
19	て	39	0	37	ナイフ形石器6	B	(○)		(○)				〃	
20	と	7	0	7		B			(○)				〃	
21	な	5	0	4	ナイフ形石器1	B	(○)						〃	
22	に	9	0	8	ナイフ形石器1	B	(○)						〃	
23	ぬ	8	0	8		B	(○)						〃	
24	ね	9	0	9		B	(○)						〃	
25	の	5	0	5		B	(○)						〃	
26	は	2		2		B	(○)						〃	
27	ひ	1		1		B	(○)						〃	
28	ふ	1		1		B			(○)				〃	
合計		(2278)	48 35	(560)	ナイフ形石器16 掻器 5 台形様石器 3 ノッチ入り石器1	A 10 B 13 C 3 D 2	7 12	3	7 4	1	1	2		

して数枚の自然面付きの剝片を得る、⑤ｅの分割面がひどく波打っていたためか、ｅの打点を約90°ずらして打面の再生を計り（ｇ）、最約的に石核Ｄを得る、である。

３は、石核Ａから得られたと思われる剝片の接合図で、ａを打面としている。４は、石核Ｃから得られた剝片と打面再生剝片の接合図で、ｃによる分割面を打面として剝片剝離を行っている。石核Ａ、Ｂ、Ｃともに、残核は残存しない。第16図５は、石核Ｄから得られた剝片と残核の接合した図である。２－ｇによる再生面を打面として、分割面を時計の逆回りに半周することをくり返すようにして剝片剝離を行っている。剝片剝離作業は、石核の全周を周ることはなく、結果的には残核を囲む三ヶ月形の部分で行われている。６がその残核である。４つの石核からは中形、小形、極小形の石刃が多数得られているが、（７～13など）、この他には、第35図218のナイフ形石器があるのみである。13は極小形の石刃の先端に腹面から急斜度の二次加工を施したもので、小形の掻器と思われる。

母岩　㋕　（第17図、図版10）

母岩㋕は、単設打面だけを有する母岩の中では最も小さなもので、第17図14が最終接合図である。これによると、母岩㋕は、長さ約12cm、幅約７cm、厚さ約８cm前後で、自然面には気泡状の小孔が多く、ゴツゴツした部分のある円礫であったものと推定される。石質は、中心部ほど緻密であるが、少しずれると節理面が走る。15は、14－ｄ側から見た母岩分割模式図である。その行程は、①母岩の上部先端に打面を作出する一方（ａ）、他の部分では少し張り出した部分等の除去を行う（ｂ、ｃ）、②ａを打面として上から縦割り状に分割して石核Ａを得る（ｄ）、③残った部分のほぼ中間でｄを打面として分割して（ｅ）石核Ｂ、Ｃを得る、と思われる。石核Ａの残核及び、接合資料はないが、23、24のような、石核Ｂ、Ｃからは剝取不可能な、この母岩の中では大きな剝片の存在でそれがわかる。石核Ｂの明瞭な残核も残存しない。16は石核Ｃから得られた剝片と残核の接合したものを打面側から見たものである。分割ｅの打点側から剝片剝離作業を開始するが、初めに自然面の残る周囲からそれを行い、中心部に移り、中心部から自然面の残る左下側辺→中心部と移動しているが、後半には良好な石刃は得られず、作業を終了している。17がその残核である。母岩㋕から得られた石刃は例外的に23のような中形のものもあるが、大部分は、18～22のような長さ2.5～4.0cm、幅1.0～1.5cmの小形のものである。これらの石刃から得られた石器は残存しない。

母岩　㋒　（第18図、巻頭図版２、図版９）

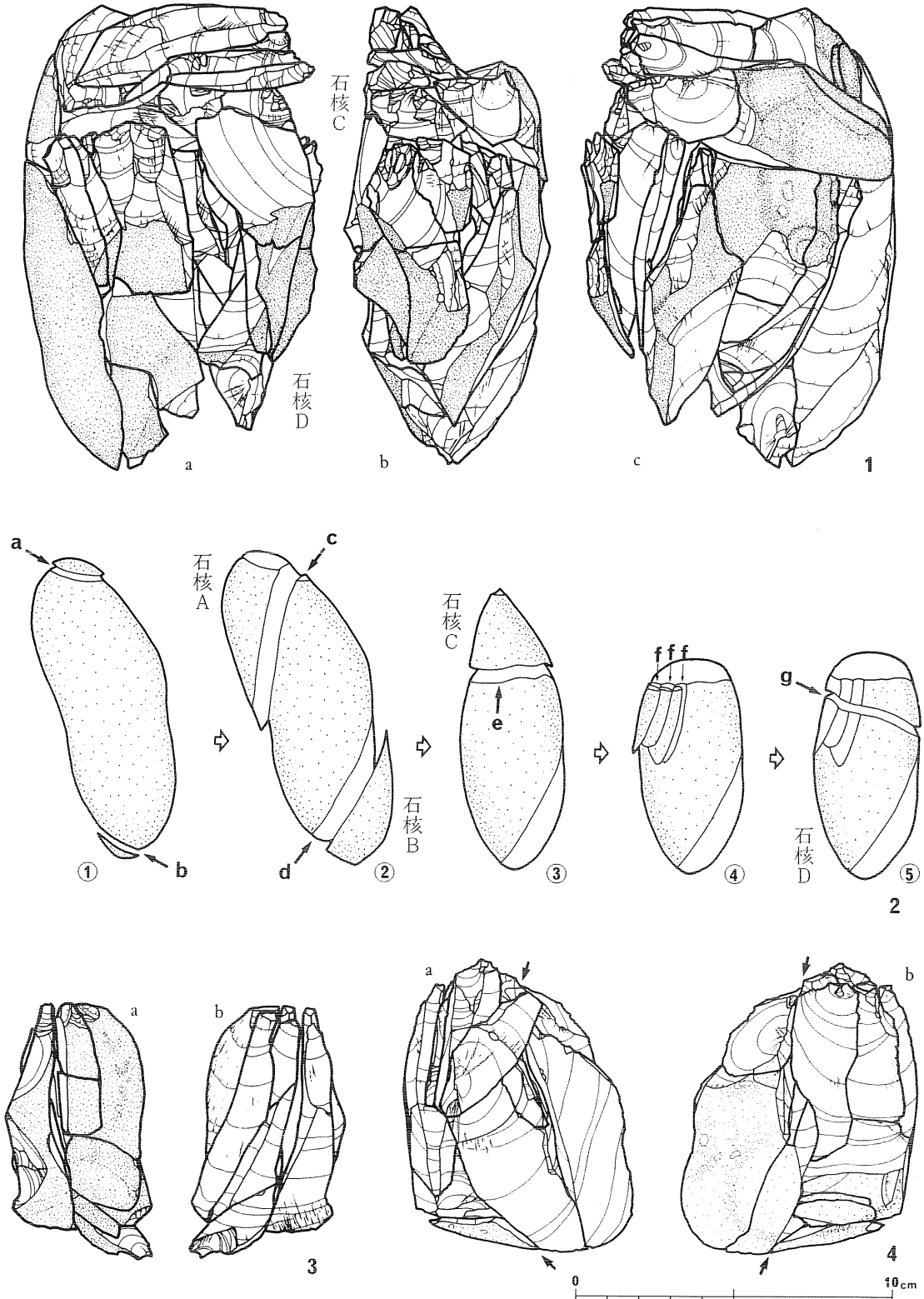
本遺跡の中では最も良く接合して、最も大きい原材である。接合した分だけの重さが2,400ｇで、最も小さい母岩㋕の全資料が200ｇに達しないのと比較すれば、いかに大きいかがわかる。

第18図（袋入）25が最終接合図である。これによると母岩㋑は、長さ約20cm、幅約18～20cm、厚さ約８～11cmのやや偏平な角張らない礫で、光沢のある自然面を有していたと思われる。26は、25－ｃ側から見た母岩分割模式図で、その行程は以下の通りである。①礫の中の張り出した部分を除去するように打面を作出し（ａ）、これからｂで分割して石核Ａを得、さらに石核Ａの反対側で張り出部をｃによって除去するが、この除去された面とは関係なしに右側面からｄによる分割によって石核Ｂを得る。②ｄによる分割面を打面にして、ｆで分割して石核Ｃを得る。③ｆによる分割面を打面として、ｇで上下に分割して石核Ｄを得る。④ｇによる分割面を打面にして、ｈで左右に分割してそれぞれ石核Ｅ、石核Ｆを得る。このようにして合計６個の石核が得られている。石核Ｂと石核Ｆは残存する資料が少なく詳細は不明であるが、石核Ｂは26のｃを打面として、石核Ｆは新たに下端に打面を作出して剥片剥離作業を行っているようである。また28は石核Ｃの残核である。この石核からは石刃の剥離は全く行われておらず、あるいはチョッピング・トール様の石器である可能性もあるが、刃部にあたる部分には自然面を残すところもあり、鋭い稜線にはなっていない。

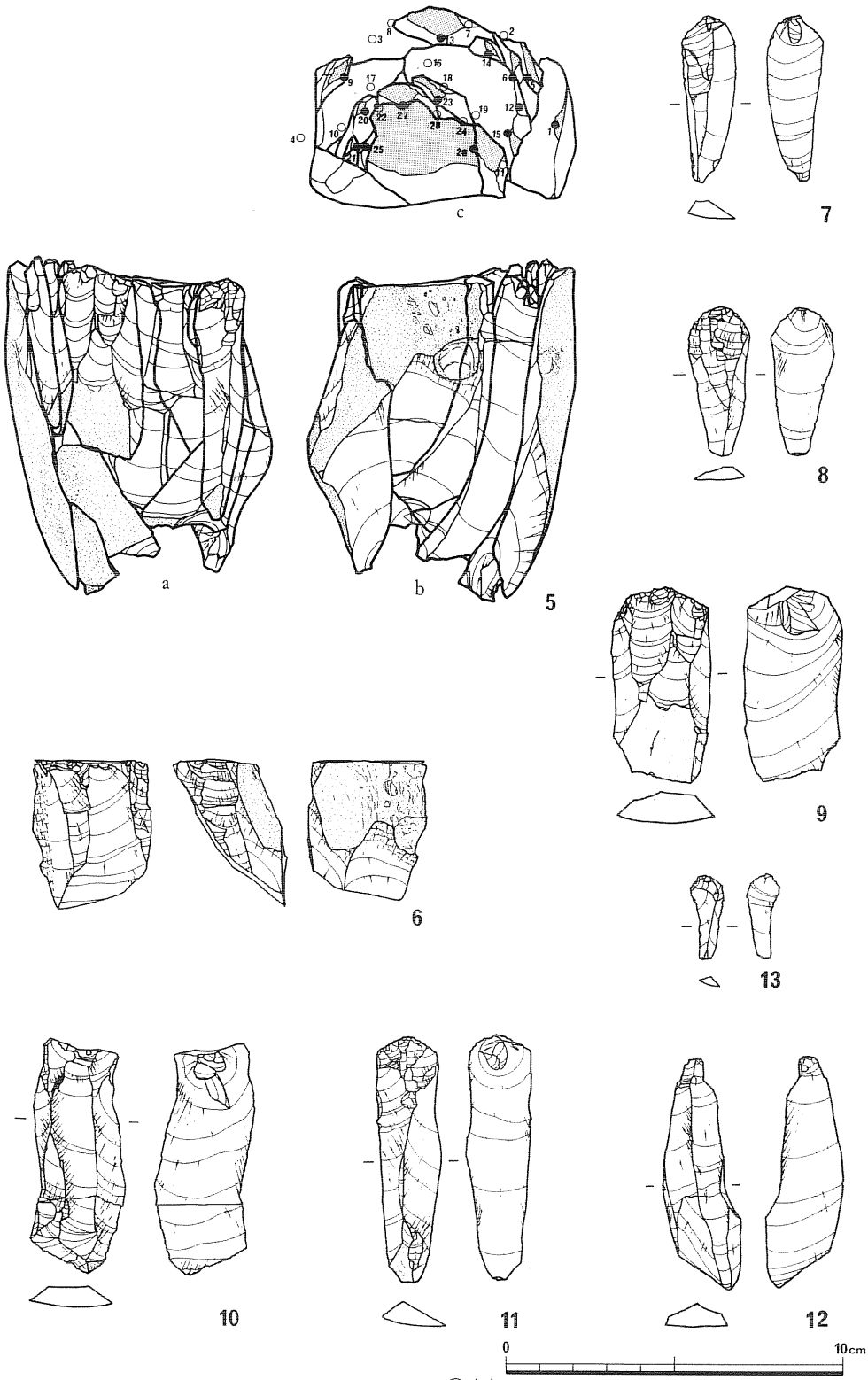
27は、石核Ｄと石核Ｅの接合状況で上方に石核Ｄの残核があったと思われるが残存しない。27－ｂは、石核Ｄの剥片剥離作業の行程を示したものである。石核Ａを得るための分割面（26のｂ）を打面にして両側の自然面の残る部分から中心部へと作業を進めている。この場合の剥離作業の進み方としては、母岩㋓の石核Ｄ、母岩㋕の石核Ｃとは逆に打点の反対側から打点側へと移っている。32が石核Ｄから得られた石刃の接合状況である。29は、石核Ｅの剥片と残核の接合した図で、ｂの面が石核Ｆとの分割面である。石核Ｅの剥片剥離作業は、反時計回りに石核の縁辺を３分の２周ほどし（29－ｄの１～19まで）、ここで一旦、この打面での作業を中止し、29－ｂの下半部に打面を移して10回前後の剥片剥離作業を行った後、再びもとの打面にもどり、29－ｄの20、21の剥離を行っている（▲が石核Ｆとの分割の打点である。）。30が石核Ｅの残核。31は石核Ａの打面作出剥片と石核の接合した図である。節理面が入っているせいかあまり良好な石刃は得られていない。33～35は、石核Ｄから、36～36が、石核Ｅから得られた石刃である。概して厚みのある大形の石刃が多いが、石器にしたものは残っていない。

母岩　㋔　（第19図）

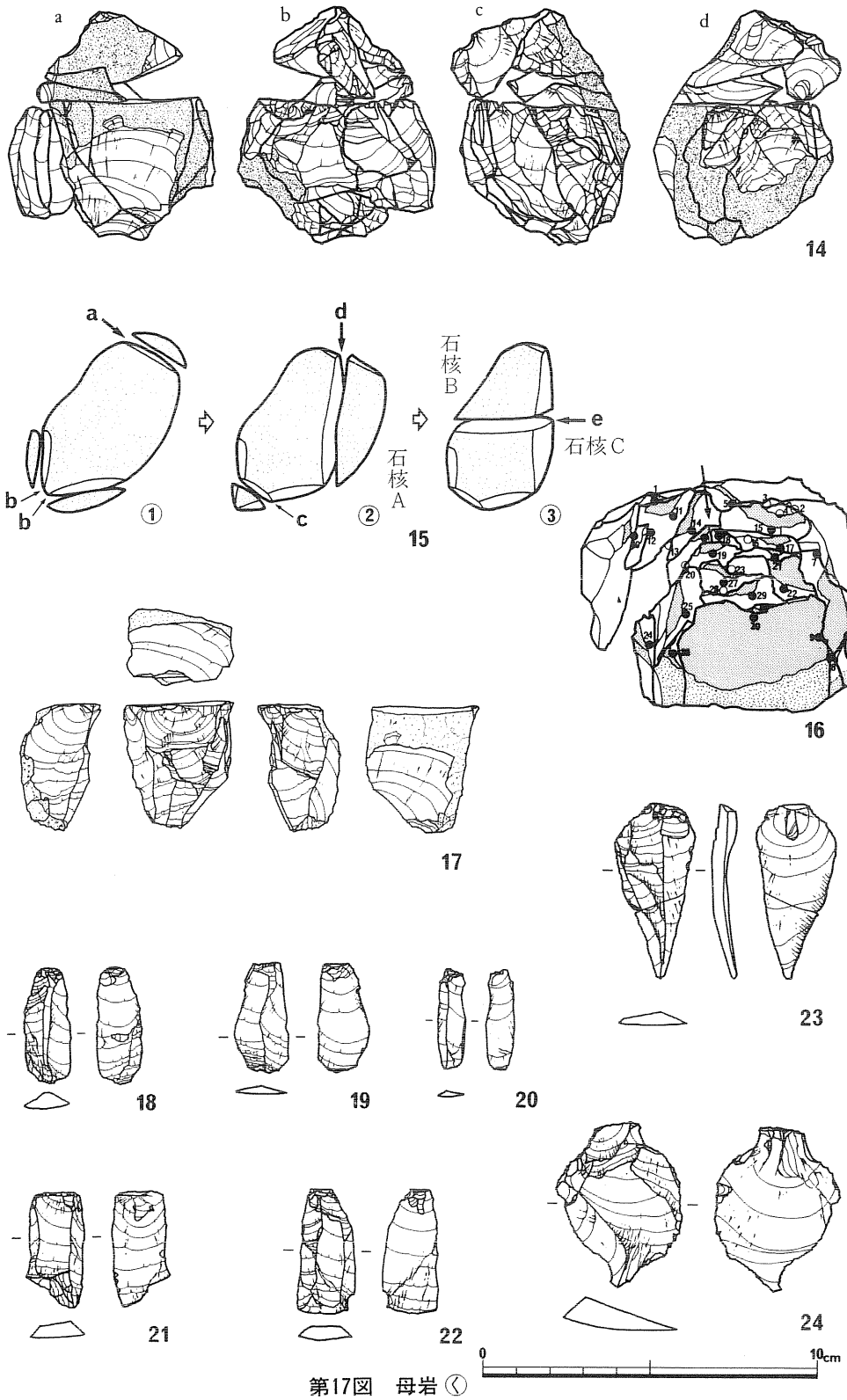
図示したもの以外に自然面の付いた大きな剥片等があるがうまく接合しない。接合しない原因の１つは、分割後の中心部が他所に運び去られたためと思われる。このことは、43のような大形の石刃が１点しか残っていなく、これに接合する資料もその石核も見当らないことからも明らかである。39は、（４～７）×（３～４）×（３～４）cm前後に分割されたままの大きな剥片等が接合したものである。他の接合資料からすると、このくらいの大剥片はそのまま石核とし



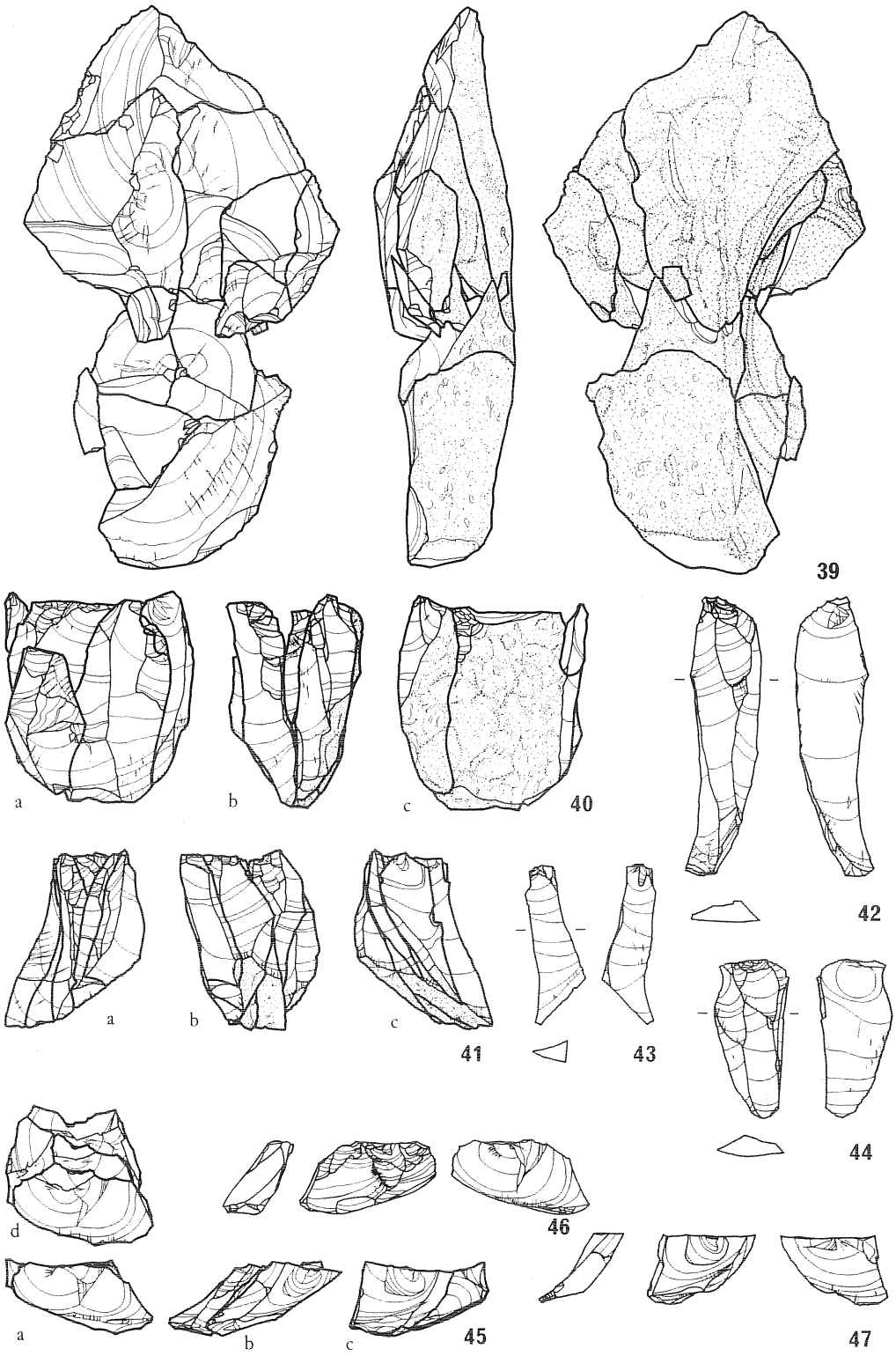
第15図　母岩㋓(1)



第16図　母岩②(2)



第17図　母岩Ⓚ



第19図　母岩㋐(1)

て剥片の剥離が行われるものと予想されるが、この接合した中には横幅の広い剥片が数点取られた残核が２個入っているだけである。39や他の資料をもとにこの原材の大きさを推定すると、長さ18cm以上、幅11cm以上、厚さ６cm以上であったと思われる。42のような大形の石刃を剥離する石核については詳細は不明であるが、大部分の石核は、43、44のような中形の石刃を取る40、41のようなものであったと考えられる。この中形の石刃を剥離する石核の打面と、作業面及びその反対側の面の形状には１つの特徴がある。すなわち、40－ｂ、41－ａ、ｃに見られるごとく、剥離面とその反対側の面が湾曲しており、結果的に作業面の末端が尖るように小さくなっている。打面（分割面）は、石核全体の形状がこのようになるように作出されている可能性がある。もちろん作業面調整は見られないし、打面の再生もないようである。また、45のように、厚さが２cm、幅４cm前後の盤状の剥片から連続的に長さよりも横幅の広い剥片を得ているものもある。ここで得られたほとんどの剥片の先端部には、石核の底面部が面として残っており、この底面と剥片の腹面の先端とは鋭い角度をもって交っている。なお、剥離作業の前に石核の形状を整えるような調整作業は全く行われていない。このようにして得られた剥片の中には、46、47のように先端部にわずかに二次加工を施して掻器にしているものがある。

母岩　㋜　（第20、21図）

第20図48が最終接合図である。剥片のほとんどが接合した。これによって、この母岩は、長さ約10cm、幅約７cm、厚さ約３～5.5cmの大きさの角礫であったことがわかる。49は、48－ａの側から見た母岩分割模式図。その行程は、以下の①～④である。①下半部が細くなる三角柱状の母岩の上、下両端にａ、ｂによって、上設、下設の打面を作出し、②ｃ～ｆまで両打面から母岩の角を落とすような形で剥片剥離を行う一方、右下端からｇによって石核Ｂの打面を用意する（この段階ではまだ石核Ａと石核Ｂの分割は行われていない）、③左側では、ｈ～ｊの剥片剥離を行い、次にｋによって石核Ａから石核Ｂを分割する（石核Ｂはこの後、ｇを打面として数回の剥片剥離作業を行っているが、あまり良好なものは得られていない）、④分割後の石核Ａの下設打面をｌ、ｍの２回にわたり再生しているが、その後良好な剥片は得られず石核が放棄されている。50は、石核Ａの残核と、打面再生後に剥離された剥片が接合した図。第21図53～56は、石核Ａから得られた剥片であるが、石質は、この小さな母岩の中に節理面が縦方向に２～３条入るような悪質なもので、石器として使用された剥片はないようである。

母岩　㋝　（第20、21図）

第20図51が最終接合図である。母岩の大きさは、長さ約11cm、幅約８cm、厚さ約７cmの角礫であったと推定される。52は、51－ｂ側から見た母岩分割模式図で、その行程は以下の①～③

である。①左側辺の自然面をａ、ｂによって除去し、右下端にｃで下設の打面を作出する、②右側辺に張り出した部分をｄによって大きく除去する、③上辺の自然面を１～２回の打撃で除去し、（ｅ）、最終的にｆで上設打面を作出する。この結果、上辺と下辺から右下にかけて２つの打面が用意されるが、この２つの打面は平行せず、横から見た場合、三角形の二辺のような関係にある。51－ｃは、下設打面を上から見た図である。この母岩も、母岩㋜と同様、節理面が多く入り、剝片の剝離面も乱れているものが多く、二次加工の施されたものは見当らない。第21図57～59が、母岩㋝から得られた剝片である。

母岩　㋓　（第21図60～67）

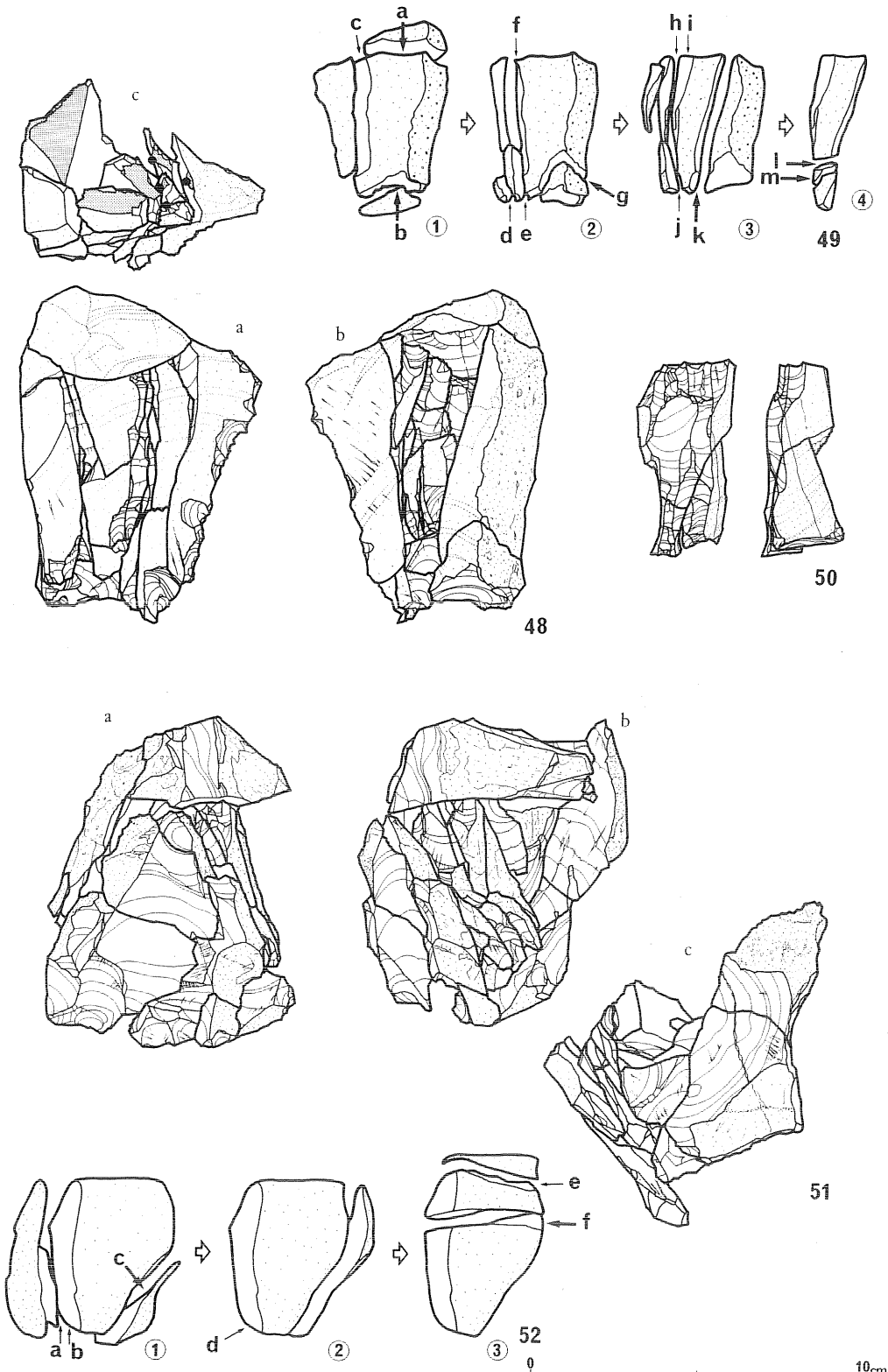
第21図60が最終接合図であるが、残核もなく自然面の付いたままの剝片もほとんどない。剝片だけが持ち込まれた可能性もあるが、とても、使用には耐え得ない、と思われる小さな剝片もあり、母岩から分割された１つの石核として持って来て、この場で剝片剝離を行い、残核を捨てた、とも考えられる。60でわかるように、この石核は平行でない両設打面を持ち、長幅指数100～200の間に納まるような剝片を得ている。この61、63～67のような剝片は、石核の長さよりも短いものが大部分で、62のようなものは例外である。このため、石核の作業面は前に突き出すような形となり（60－ｃ、ｄ）、時折、上下両端に打面を持つ厚手の剝片を取っている。

母岩　㋒　（第22図77～83）

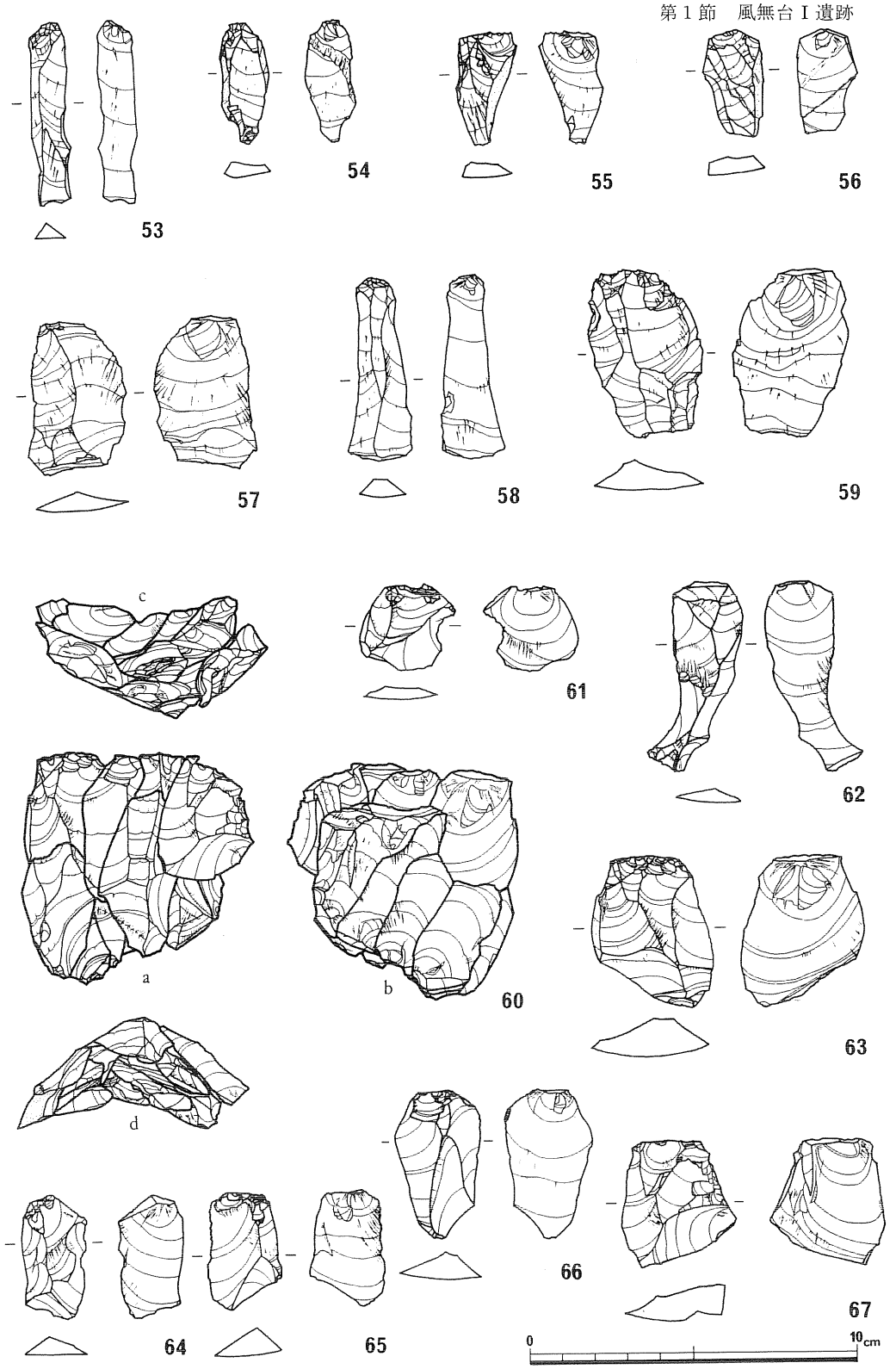
合計25点の剝片のみで接合するものはないが、母岩㋓のような石核であったと思われる。得られている剝片は、79や第36図224のような縦横の長さがほぼ等しいようなものもあるが、大部分は、80～83のような小形のものである。やはり、母岩㋓と同様に77、78のような上下両端に打面を持つ厚手の剝片がある。

母岩　㋔　（第23図、図版12）

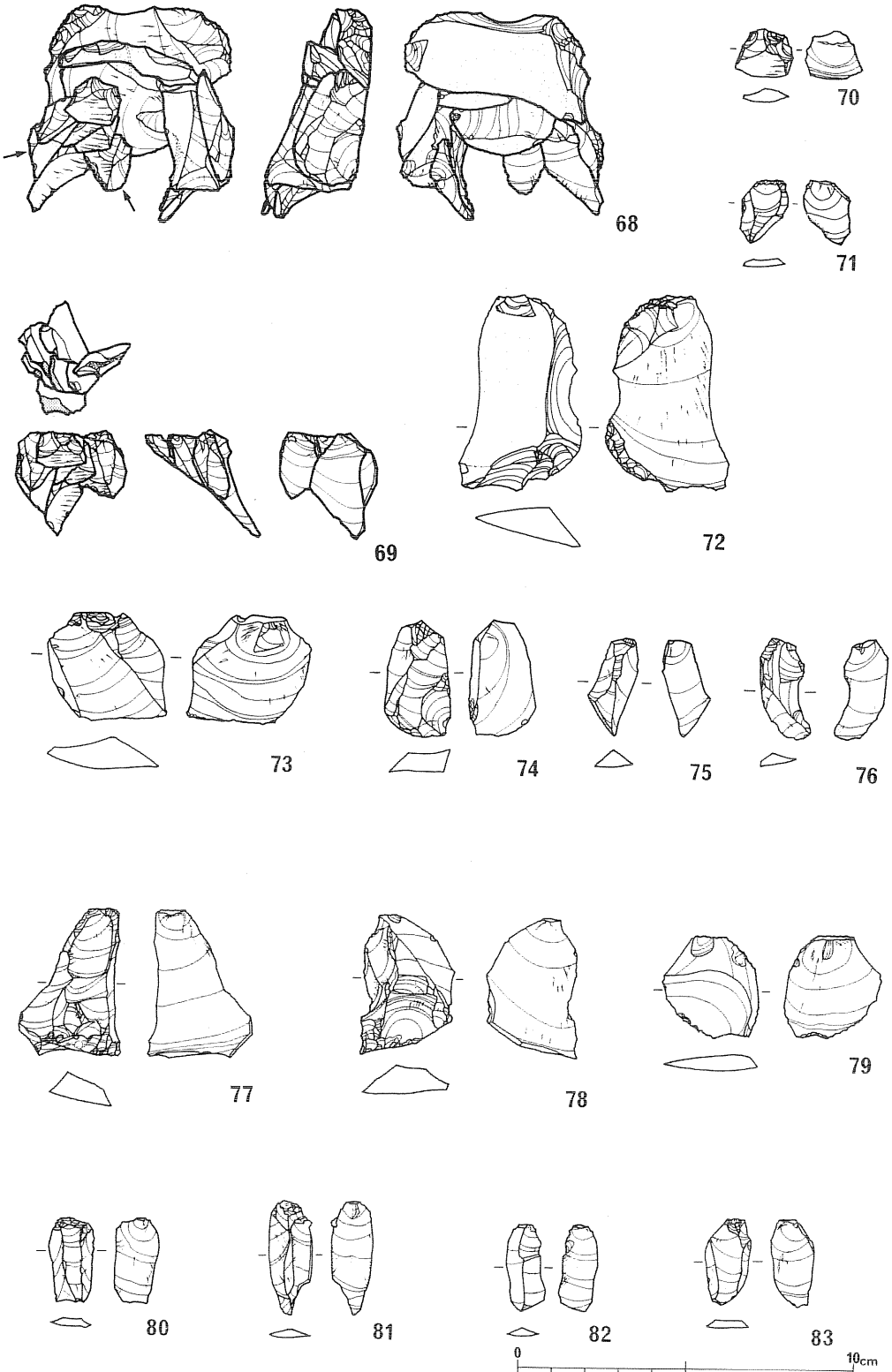
第23図84が最終接合図。これから推定される母岩の大きさは、長さ20cm、幅約11cm、厚さ約９cmの細長い円礫である。礫の内部は、淡黄色～黄白色を呈して剝片は軟かい感じを与え、実際に他の頁岩よりももろい。85が、84－ｃより見た母岩分割模式図で、その行程は、①礫の上下端の張り出している部分を除去する（ａ、ｂ）、②上部と下部でそれぞれｃ、ｄによって分割し、上から石核Ａ、石核Ｂ、石核Ｃを得る、である。石核Ｂはｃを上設打面、ｄを下設打面として左側から剝片剝離作業を行っている。石核Ａの場合は、ｃによって分割された大きな塊の正面側と右側に新たに打面を作出して、やはり両設打面による剝離作業を進めている。石核Ａ、Ｂとも上、下の打面が平行でない。石核Ｃは左側に新たに打面を作出して、ｄによる分割面を



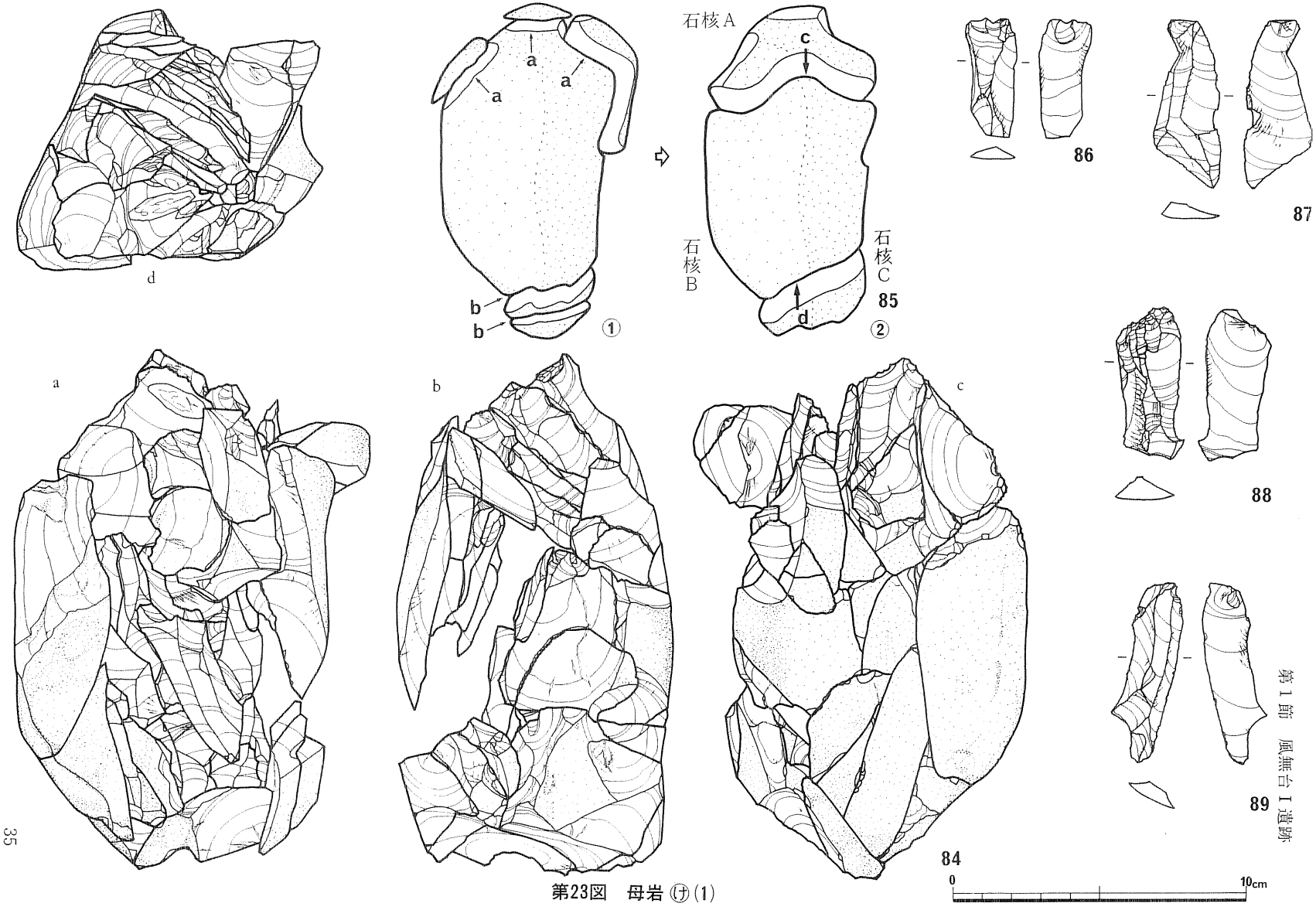
第20図　母岩㋟・㋝・㋡(1)



第21図　母岩㋟・㋝・㋡(2)



第22図　母岩㋟・㋝



第23図　母岩 ㋕(1)

作業面として剝離作業を行っているが、数回の打撃でやめ、石核を放棄している。石核Ａ、Ｂから得られた石刃は、86～89のような中形のものであるが端正なものは少ない。また、特に石核Ａから得られた石刃で、石核の長さとほぼ等しいくらいの長さを持つものはほとんどない。

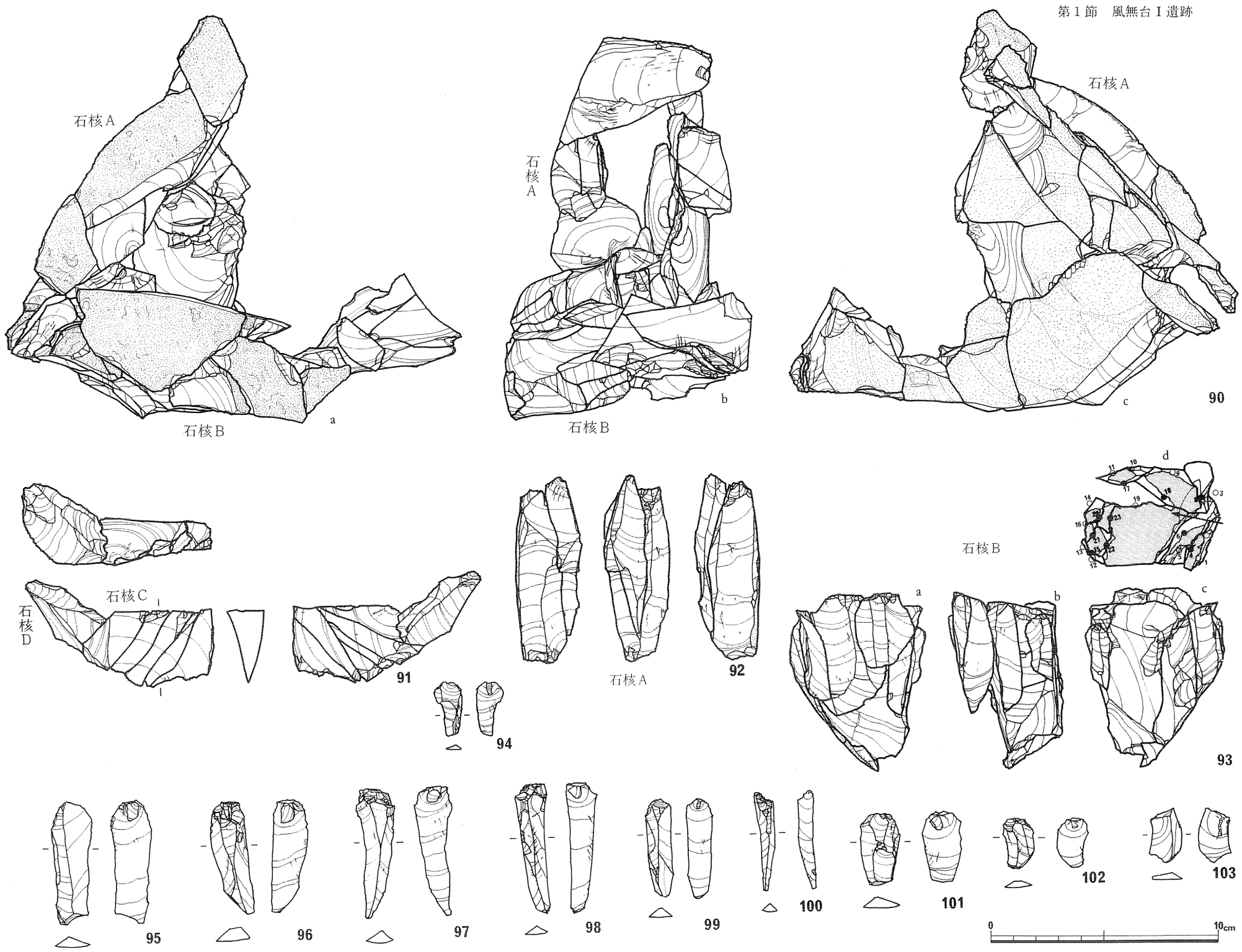
母岩　㋒　（第24図、図版11）

第24図90が最終接合図である。他に91のような大きな部分もあるがうまく接合しない。90から推定するとこの母岩は、１つの側面に風化の進んだ自然面を残し、他の面はあまり風化の進んでいない面を持つ角礫で、平面的には高さ約20cm、底辺22cm以上の三角形を呈し、厚さ約11cmの大きさであったと見られる。このような形状の母岩を少くとも12～13個体以上に分割してその中から７個以上の石核を得ているが、この母岩の中心部分には節理面があり、この部分の剝片は少ない。最初からこの部分が無かったものか、捨て去ったものかは不明である。

92は、90－ａ、ｂの中の石核Ａである。両設打面を持つ残核と石刃１点が接合している。この残核は、遺物集中地点から北西方向に約32m離れた段丘縁辺の漸移層中から単独で出土したもので、その周囲には他の旧石器時代の遺物は全く見られなかった。93は、この母岩中の石核の中では最も数多くの剝片剝離が行われたものである。93－ｃが残核部分を手前において見た図で、93－ｄが剝片剝離の行程を表わしている。やはり、他の単設打面の石核と同じように、反時計回りに作業を進行し、全体的には残核を三ヶ月形に囲むように剝離されている。91は、小さな石核ｃとｄが接合した図である。石核Ｄからは、小さな剝片を３点程度しか取っていない。石核Ｃは、縦3.0～3.3cm、横約６cm、幅1.2cm～2.2cm、下端が尖って断面二等辺三角形を呈する小さな石核である。打面はほんのわずかな平坦面しかなく、ここから斜め下端に向けて打撃し、４点の剝片を得ている。得られた剝片は全て下端にまで達するもので、幅に比して厚みがある。石核の下端稜線上には、剝片剝離前に細かい剝離が加えられているが、どのような理由によるものかわからない。母岩㋒から得られた剝片は、95～100のような、５～６cm前後の中形から５cm以下の小形の石刃が大部分で、他には、101～103のように小形で長幅指数200以下の剝片がある。後者は、94、102、103のように先端部にわずかに二次加工が施され、小さな掻器として使用された可能性もある。

母岩　㋓　（第25、26図、図版12）

第25図104が最終接合図である。これによるとこの母岩は、縦横とも約13cm、厚さ約10cmの球に近い角礫で、上辺にゴツゴツした自然面を、他の面は風化のあまり進んでいない破砕面を残している。105が104－ａ側から見た母岩分割模式図で、その行程は①～③のとおりである。①左辺、右下辺の角張った部分を除去し（ａ、ｂ）、右上にｃによって小さな打面を作出する。②


石核Ａ
石核Ｂ
a
石核Ａ
石核Ｂ
b
石核Ａ
c
90
d
石核Ｂ
a
b
c
93
石核Ｃ
石核Ｄ
91
94
石核Ａ
92
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
10cm

第24図　母岩 ⑦

左辺～下辺にかけては①の作業を継続し（ｄ～ｉ）、右上でもｃを打面として同様の作業を行う（ｊ、ｋ）。③さらに右上からｃを打面としてｌで大きく上辺を除去し、打面を作出する。打面作出後の剥片剥離行程を示したのが104－ｄである。その行程は、①打点部を手前にして時計回りを繰り返すようにして作業を進行させる。剥離順にして１～11まで行なった後、②12で下辺を大きく打ち割り、石核Ｂ（第26図106）を得、③この後再び14～21まで剥離を進行させ、④22では、これまでの打面とは反対側に打面を移す（106の６などを打面とする）。そしてしばらくは、下方で打面と作業面を交互に変えながら剥片剥離を行うが、時折23のように元の打面にも戻る、⑤最終的に元の打面から、24を剥離して石核を放棄する、となっている。第26図107が残核。105－ｄで生じた打面作出剥片は、この後小さな打面が作出されて、数回の剥片剥離作業が行われているが良好な石刃は得られていない。このようにして得られた石刃は、第26図109、110、113、114のような長幅指数200以上のものや、108、111、112のように同指数150前後のものから、115～117のような小形のものまで含まれている。

母岩　㋔　（第27、28図）

母岩㋔は、剥片など約300点あるが、母岩の原形を復原できるほど接合できていない。接合して最も大きくなったのが第27図118である。これによるとこの母岩は、高さ７cm以上、幅11cm以上、厚さ４～７cm以上の直方体を呈して、１～２面に自然面、他の面に風化の進んでいない破砕面を持っていたと思われる。

母岩分割行程全体を窺い知ることは出来ないので、接合したものの代表的なものを説明したい。118は、上面が分割面あるいは作出された打面で、他に見られないほど平坦である。この平坦面が形成された後、118－ａの矢印のところで左右に分割され、それぞれ剥片剥離作業が行われている（118－ｃが、同図ｂを上面から見たもの）。118－ａの左側では、下面に２～３回の分割あるいは打面作出のあとがあり、これと上面を両設打面として、長さが４～6.5cm程度の石刃を得ている。118－ａの右側でも左側同様両設打面による剥片剥離を行なっているが、作業終了近くなって一度下設打面の再生をしている。得られている石刃は、長さが約８cm～2.5cmほどのものまで種類が多い。119は石核からの剥片剥離作業が相当進行した段階での接合資料である。上に自然面で覆われた打面作出のための剥片が付いている。この石核はもともと高さが７cm以上はあり、両設打面を持つものであったが、剥片剥離作業の後半になって、打面再生が頻繁に行われることによって小さくなっている。119－ｂおよびｄに見るごとく、上設打面で１回、下設打面で３回以上の打面再生を行っている。120はその残核であるが、長さが２cmにも満たない剥片まで取っている。121も119同様、剥片剥離作業終了間際の接合資料である。やはり平行しない両設打面を持つ石核であるが、打面再生の痕跡は認められない。122はその残核。第

28図123は、石刃と打面再生剥片等が接合したものである。残核はわからない。これらが接合したもともとの石核は、高さが７cm前後あり、上面が分割面か、作出された打面と思われる平坦面で、下面は自然面のままであった。この石核の上面を打面として、123―ｂから見て、左側から剥片剥離作業を関始し、数点の石刃を取った後、上面では打面の再生、下面では打面の作出を行って、高さが約５cmの両設打面を持つ石核にしている。124は、３点の石刃が接合したものである。１点は下端が、あと１点は両端が折り取られているが、二次加工は施されていない。母岩㋒から得られた石刃は、124～131のような５～８cm前後の中形のもの、132～136のような小形のものがある。小形の石刃の中には132、134のように先端部に細かい二次加工の施されたものもあり、掻器として使用されたものであろう。

母岩　㋐　（第29、30図）

この母岩も約300点の剥片等があるが、原形を窺い知るほどには接合できなかった。第29図137は、２つの石核Ａ、Ｂが接合したものである。これによると、周囲の自然面を多方向から除去した後、両石核に共通する上、下設打面を作出し、137―ｂの矢印のところから分割している。（分割の打点は矢印の反対側にある。）分割後、石核Ａ、Ｂとも上、下設打面から剥片剥離作業を行っているが、石核Ｂにあっては一度上設打面の再生を行っている。なお、両石核とも裏面には剥片剥離作業が及んでいない。138が石核Ａの、139が石核Ｂの残核である。140、141は、石刃の接合した図であるが、いずれも単設打面の石核から得られたものと思われる。140の打面は自然面である。142は、これまで述べて来た石核とは全く異なる。比較的扁平な石核で、打面を作業面に、作業面を打面に交互に変えながら、石核の３辺を周るように剥片剥離作業を進めている。得られた剥片は寸詰りで、第30図156、157のように長幅指数が100～200の間に入る類のものである。143がその残核。

第30図144～155は、母岩㋐から得られた石刃である。その数は多く、中～小形が主である。比較的厚手のものから端正なものまでバラエティーに富む。ナイフ形石器のうち、１点はこの母岩の石刃を素材にしており、他の２点もその可能性がある。

母岩　㋑　（第31図）

この母岩も400点以上の資料があるがうまく接合せず、原形を推定することができない。このため、石核の獲得方法等については不明な部分も多いが、第31図158～163の接合資料や、他の石核から推測すると、母岩を２～３個体に分割して、それぞれを石核とし、剥片剥離作業を開始するが、途中、比較的大きな剥片が得られればそれをまた別の石核とするようである。剥片剥離作業は、１つの打面から連続して数点の剥片を得る場合と（162、163など）、打面と作業面

が次々に入れ替わる場合（158、161など）とがあるようである。このため後者の場合には、得られた剝片の背面に多方向からの剝離面が残る。164～170は母岩㋓から得られた剝片であるが、162の中の一部や、164～167のように長幅指数300前後の石刃状のものと、163の一部、168～170のように長幅指数200～100のものとがある。ただ、概して厚さはなく、両側辺が鋭いものが多い。二次加工の施されたものは少ないが、小さな剝片の先端か一方の側辺にかけ、二次加工されたものもある。

母岩　㋟　（第22図、図版10）

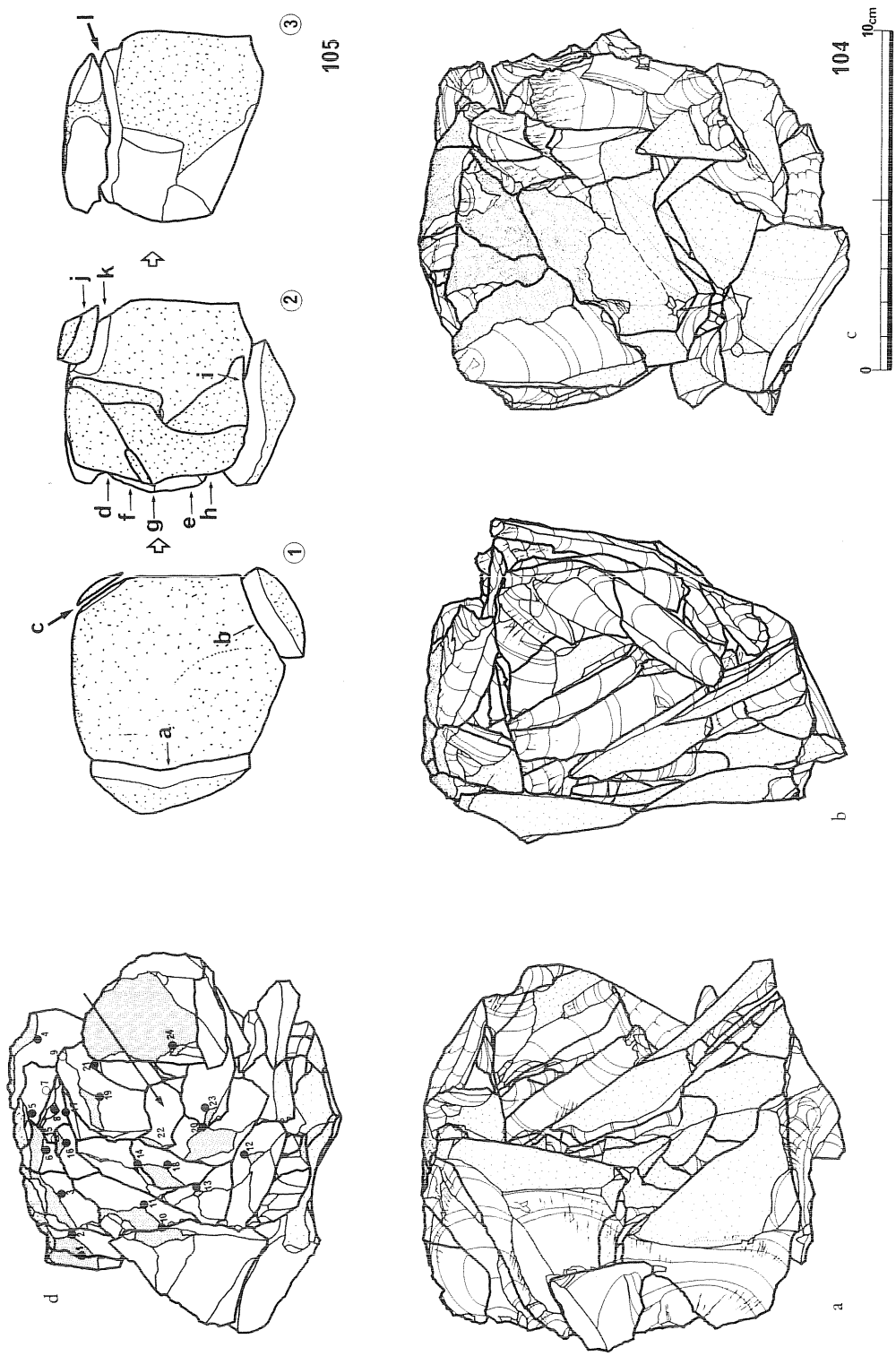
同一母岩から得られた26点の剝片があり、このうち13点が接合する。その接合した図が、第22図68である。これからすると、この母岩は厚さが２～３cmしかなく、表裏面には風化の進んでいない滑かな自然面を残す、長さ・幅とも６cm前後の小さなものであろう。

剝片剝離作業は、打面と作業面を交互に変えながら、この母岩の中では比較的大きな剝片を獲得し、最終的に69を示すように、打面と滑かな自然面とが、約45°で交わる部分から底面が残る小さな剝片を連続して剝取っている。この最後の作業で得られた剝片の中には、第36図229、231、232の３点の台形様石器がある。70～76は剝片の一部である。

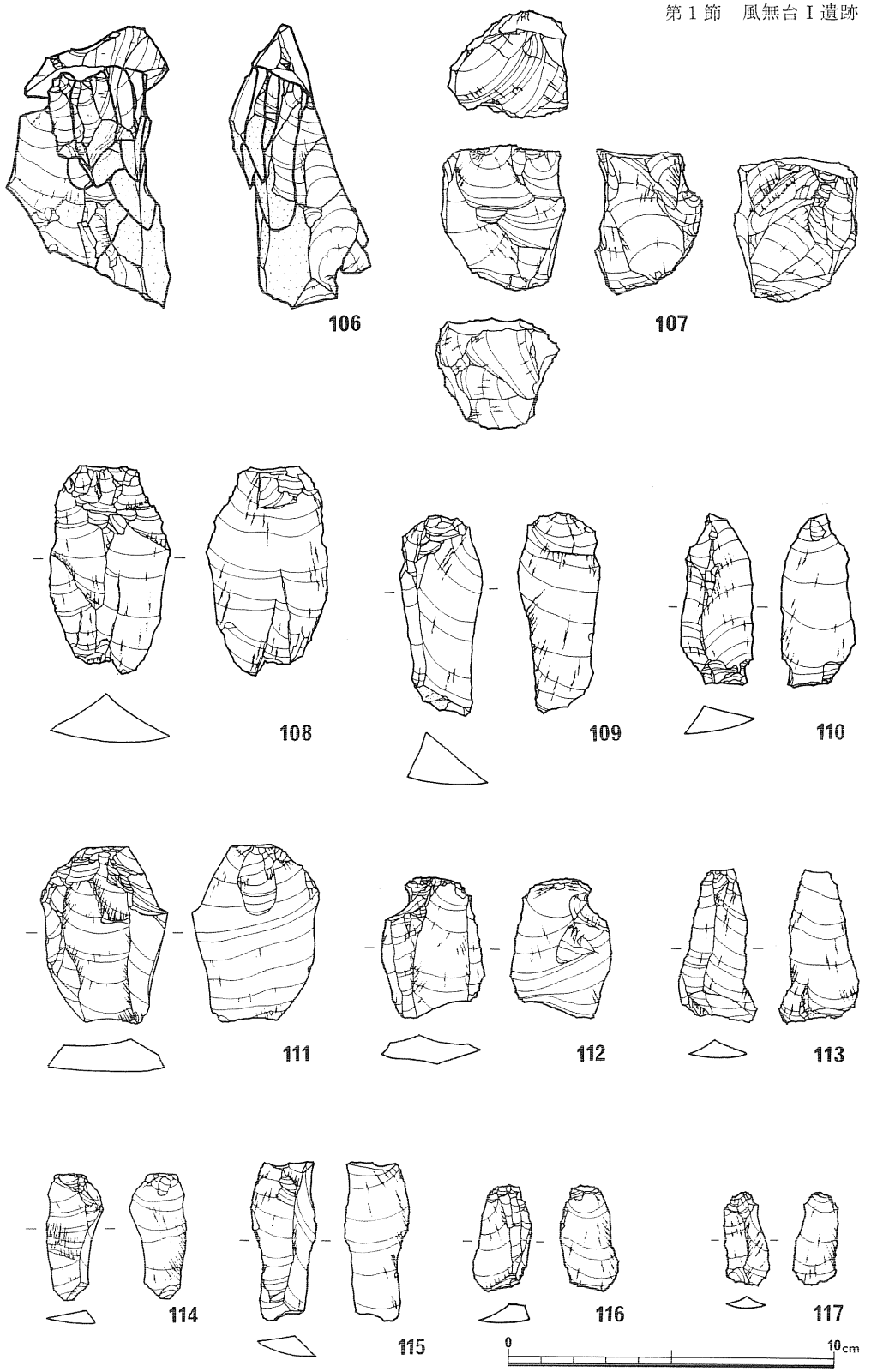
その他の母岩　㋕・㋚・㋠・～・㋝・㋜　（第32、33、34図）

これまで述べてき来た母岩㋐～㋔、㋖～㋟のうち、母岩㋛と㋞を除いた13個の母岩は全て、旧石器時代の遺物の集中するところで剝片剝離作業が行われたものである。これに対して、遺物の中には、同一母岩から得られたと考えられる石刃あるいはナイフ形石器などが、チップあるいは小さな剝片を伴わないで存在している。このことは、これらの石刃などが他のところで剝片剝離された後、石器あるいはその素材として、いわば製品あるいはその原材料として、本遺跡に持ち込まれたものと考えることができる。このように考えることのできる石刃あるいはナイフ形石器などの母岩の種類は、㋕、㋚～㋜までの13個体である。それぞれの母岩内での持ち込まれた石刃、石器の数などについては、第２表のとおりであるが、これらの中には母岩㋚のように、３点の石刃と小さな残核１点（第34図205）だけであったり、母岩㋠のように６点のナイフ形石器の他に37点の石刃があり、石器と石刃が接合したりする（第34図202、203）ものもある。

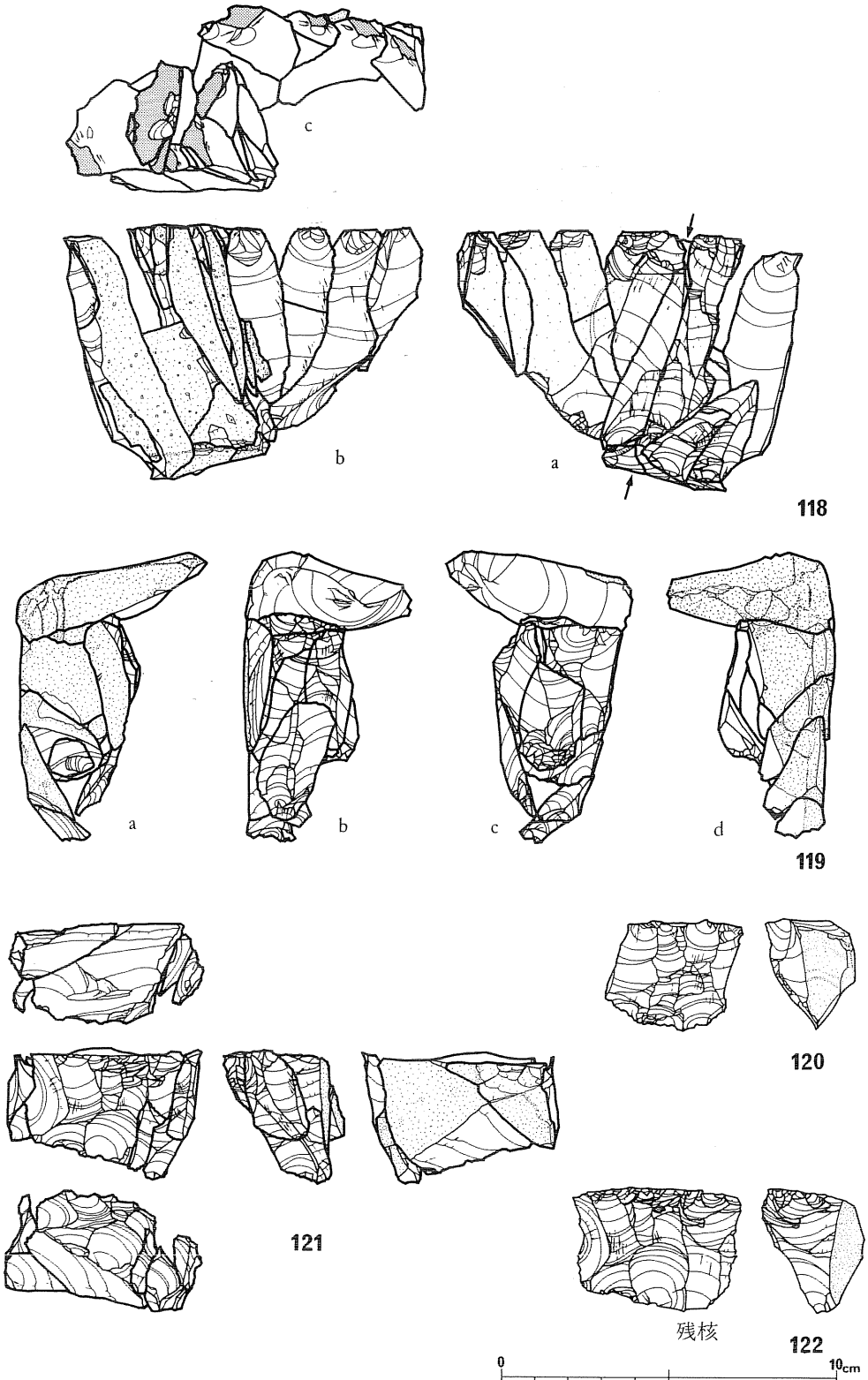
それぞれの母岩に属する石刃などは以下のとおりである。（第32～34図、ここでは各母岩の代表的なもののみを掲載した。）母岩㋕：173、178、180、182、196、197。母岩㋚：174、176、205。母岩㋠：188、189。母岩㋠：177、181、183、184、186、194、198～200、202、203。母岩㋛：172、175、204。母岩㋝：192。母岩㋟：171、179、193。母岩㋜：170、191。母岩㋝：195。



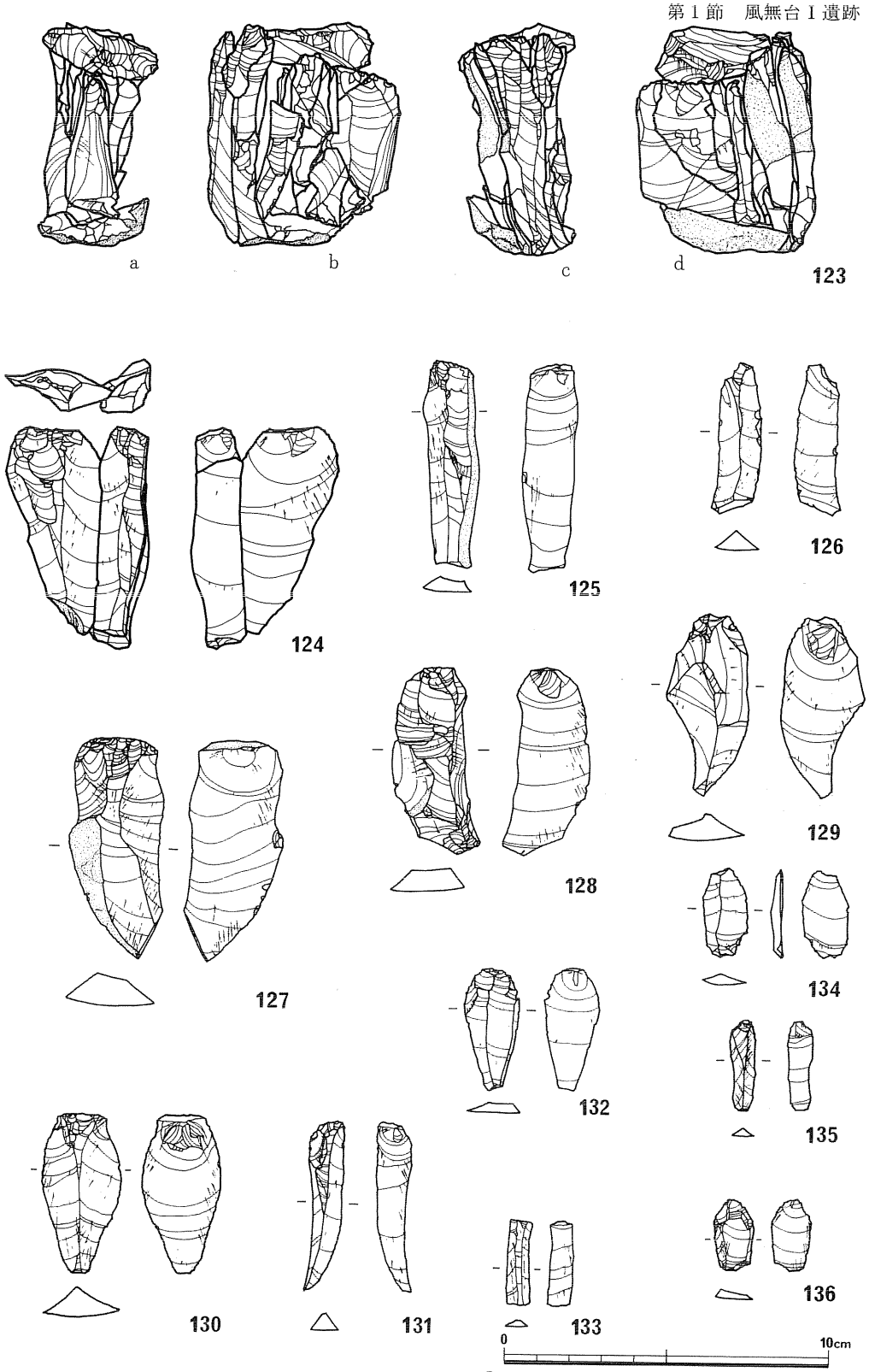
第25図　母岩㋓(1)



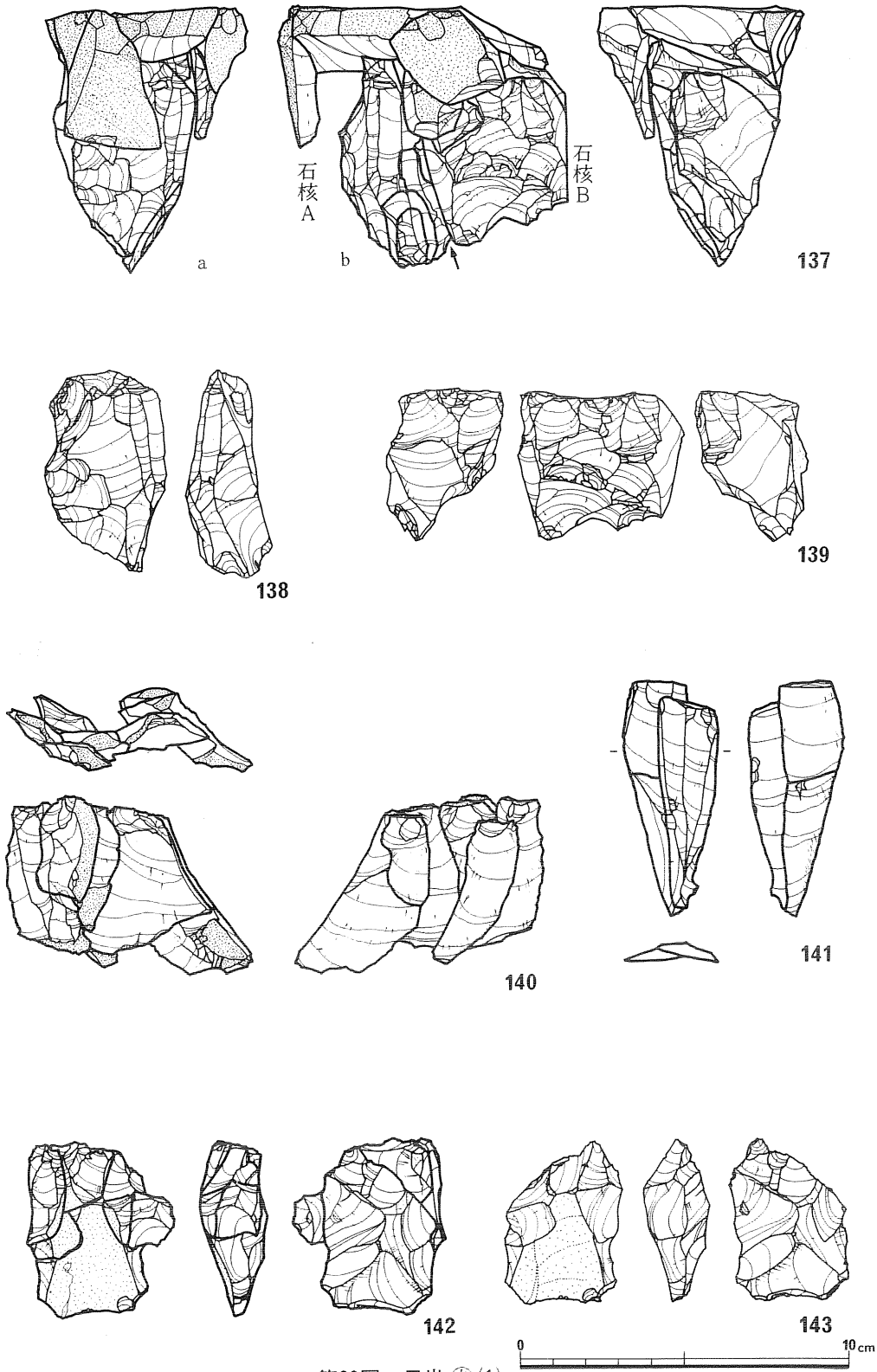
第26図　母岩㋓(2)



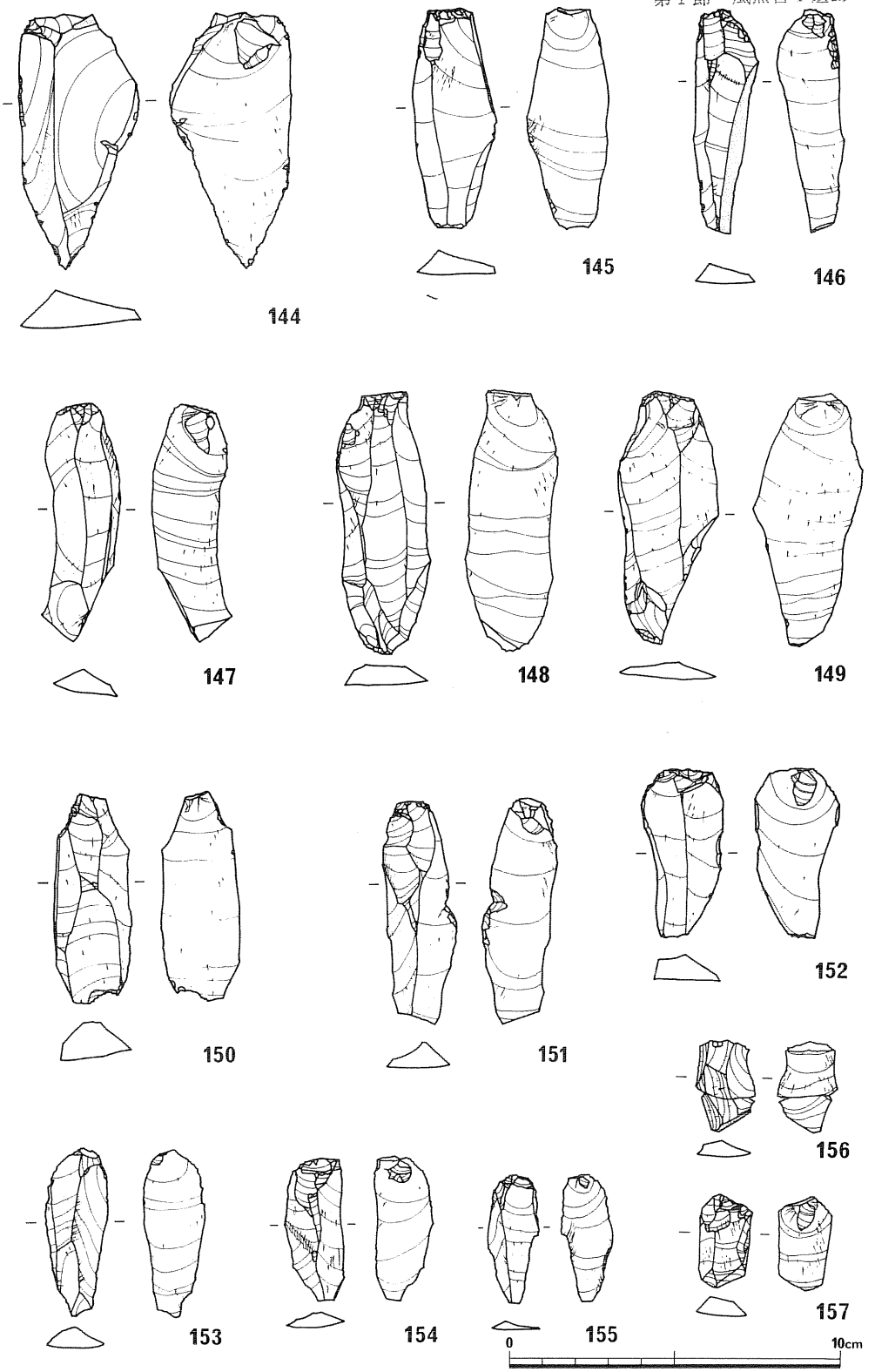
第27図　母岩㋝(1)


a
b
c
d
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
0
10cm

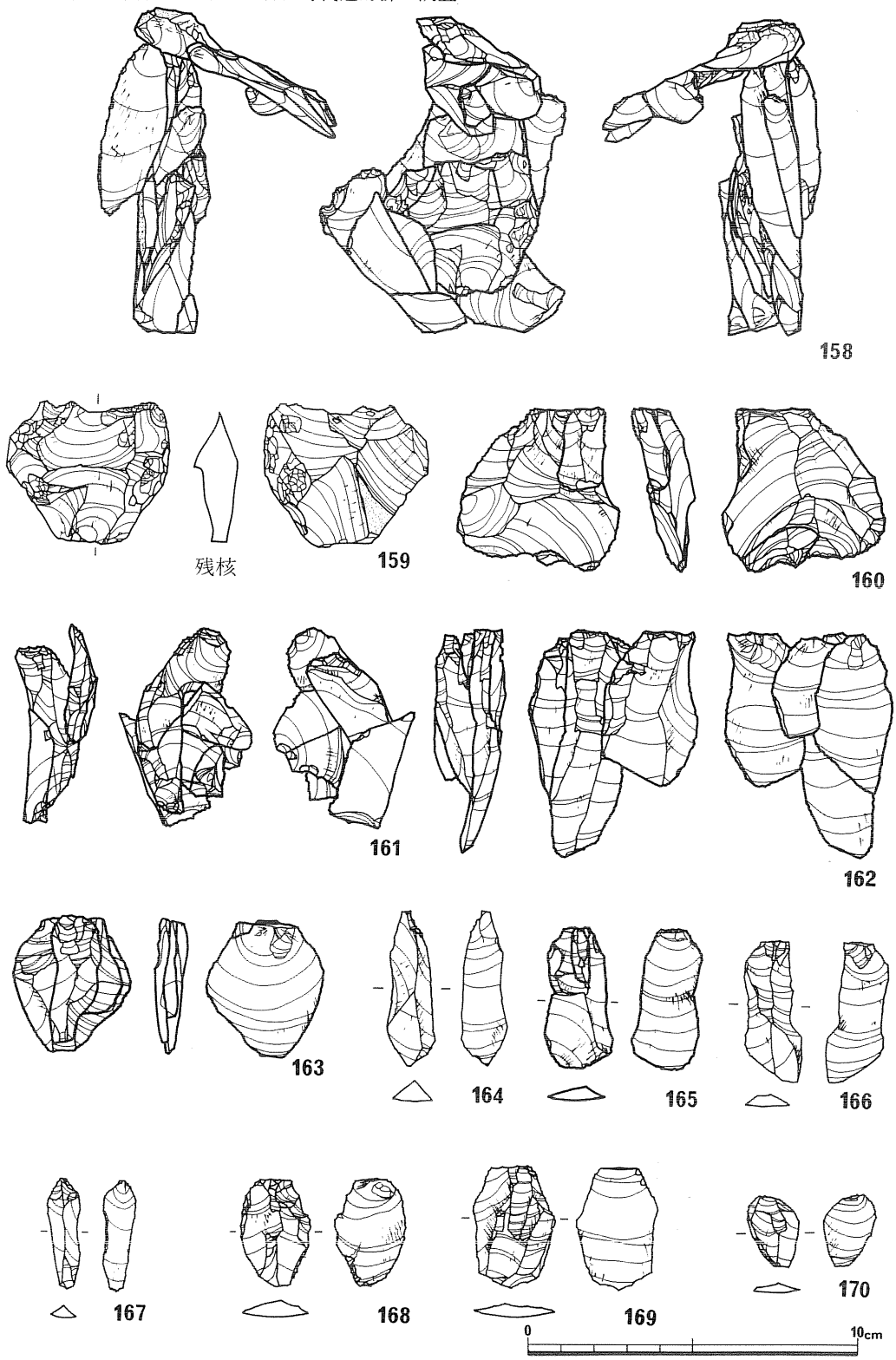
第28図　母岩㋓(2)



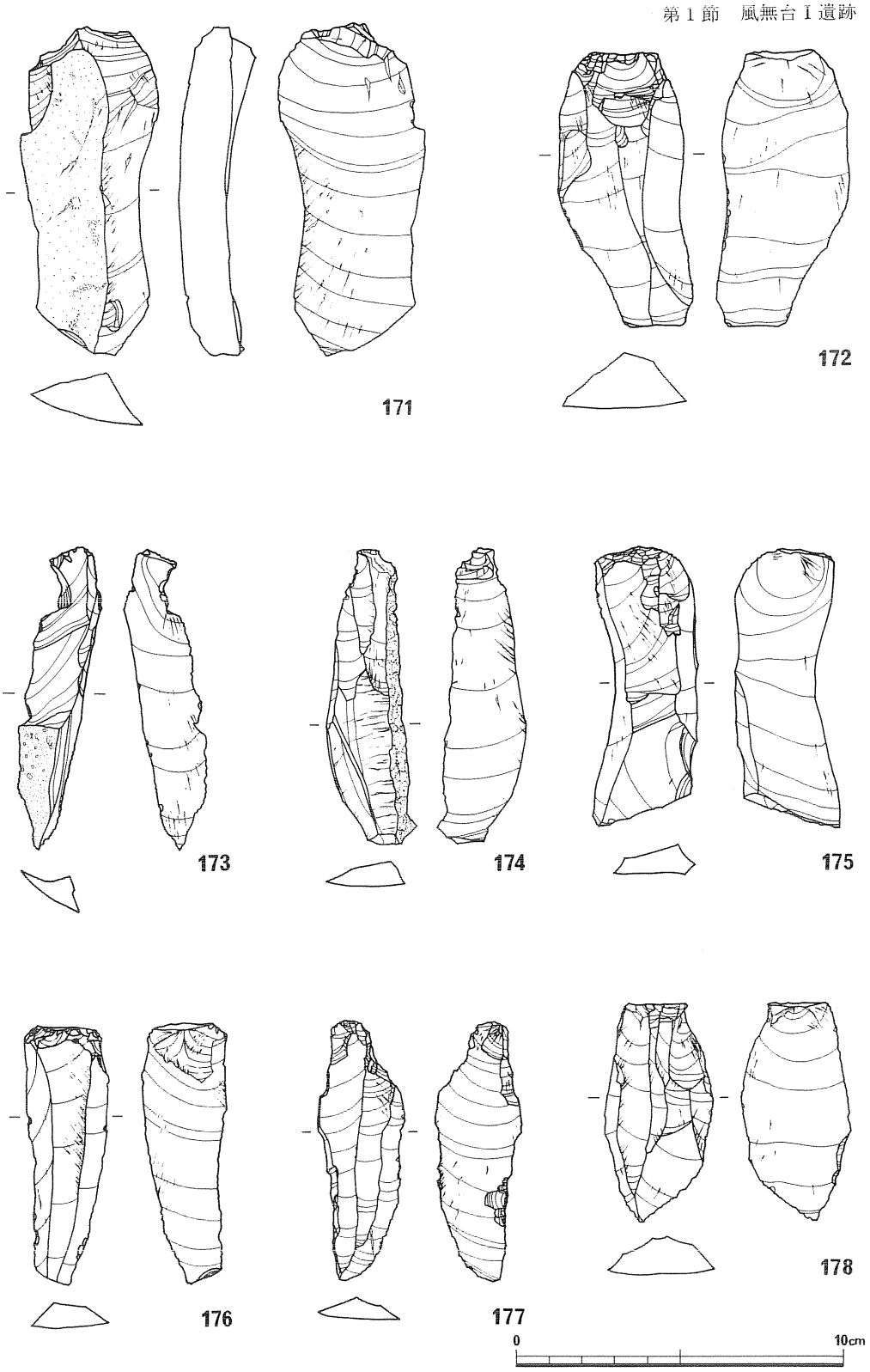
第29図　母岩㋐(1)



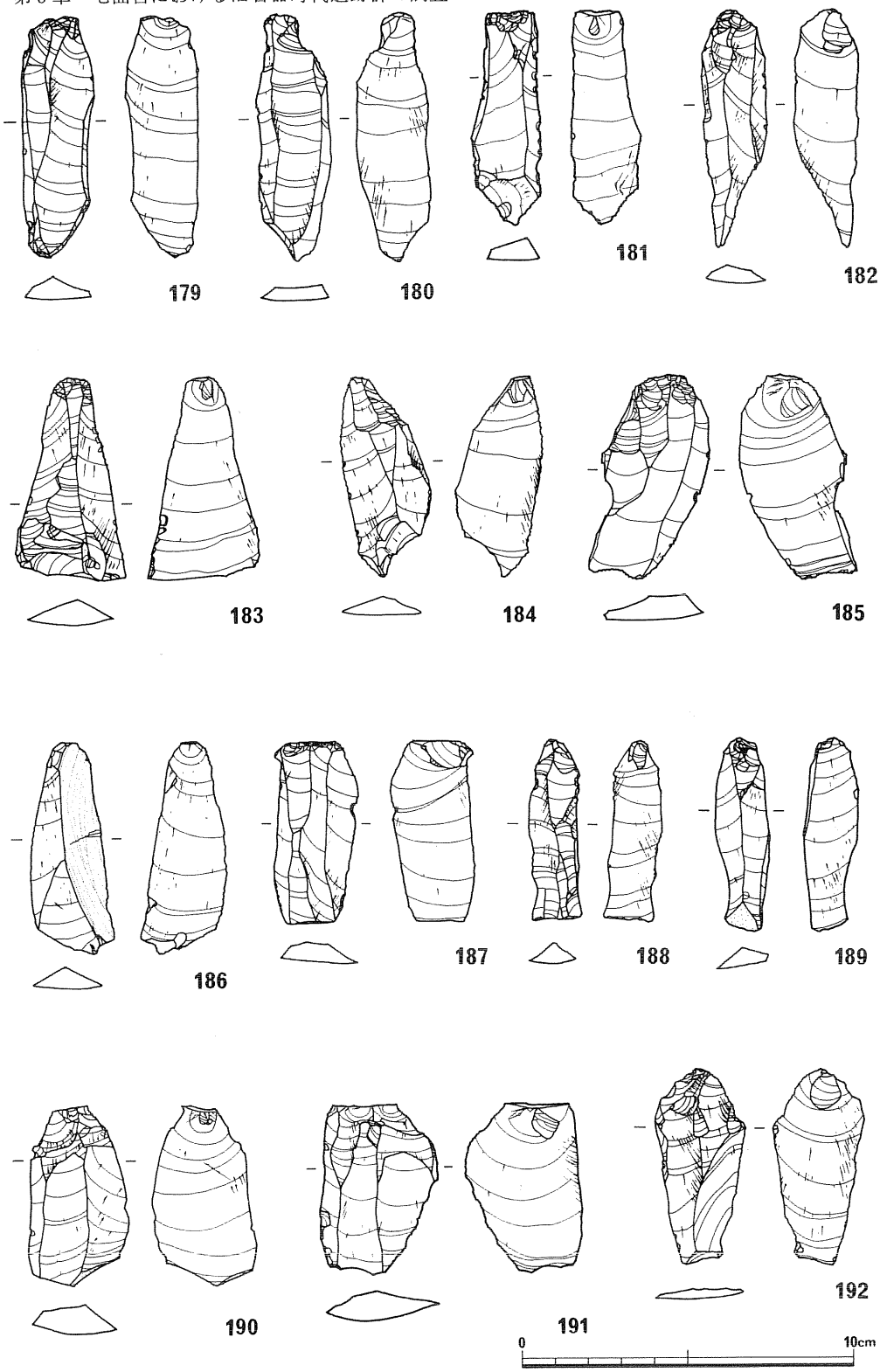
第30図　母岩㋐(2)



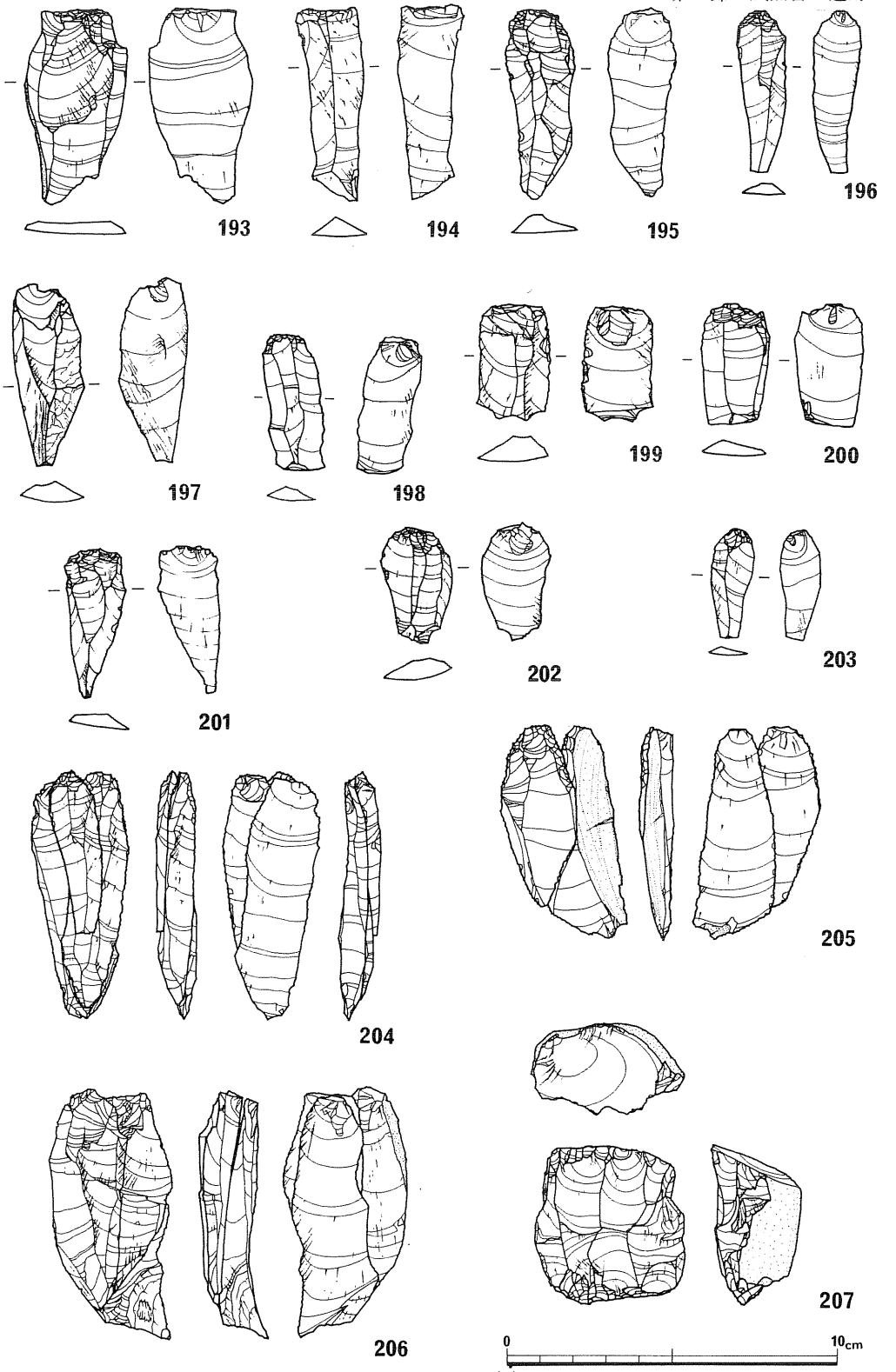
第31図　母岩㊁



第32図　石刃(1)



第33図　石刃(2)


193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
0
10cm

第34図　石刃(3)

母岩㋩：169。母岩㋭：190。

なお、これら持ち込まれた石刃の先端から両側辺の上半には、母岩㋐～㋝（㋕、㋟を除く）から得られた石刃にはそれほど顕著ではない刃こぼれと思われる痕跡が著しいものが多い。

(2)　ナイフ形石器　（第35、36図、図版13、14）

16点が出土している。この数は石刃の多さに比べ極端に少ないと言える。第３表にその観察結果を示した。これらのナイフ形石器は、第36図に示すとおり、219を除いて全て５～８cm前後の中形の石刃を素材とする。二次加工は、打面側を基部として、その両側辺に腹面側からわずかに施されるのみで、それも211、222のように一方の側辺が急角度の自然面や節理面である場合にはその部分への二次加工は省かれている。基木的にその形状によってⅠ、Ⅱ類に分類され、さらにそれぞれが、先端部への二次加工の有無によってａ、ｂ類に細分できる。

Ⅰ類：先端の尖るものである。

ａ：（208～212）：先端の右側か、左側に微細な二次加工を施すもの。

209～211は先端右側に腹面側から、長さ0.5～1.0cm、206は先端左側に背面側から、0.8cm、212は中軸線に直交するような、二次加工が先端に施されている。

ｂ：（213～219）：先端に二次加工のないもので、最も多い。

Ⅱ類：先端が尖らず、先端の幅広のもの。

ａ：（222）：先端右側辺に急斜度の二次加工を施すもの。

ｂ：（223）：先端に二次加工のないもので、この石器の場合、長さに比べて幅がある。

(3)　掻　器　（第36図224、図版14）

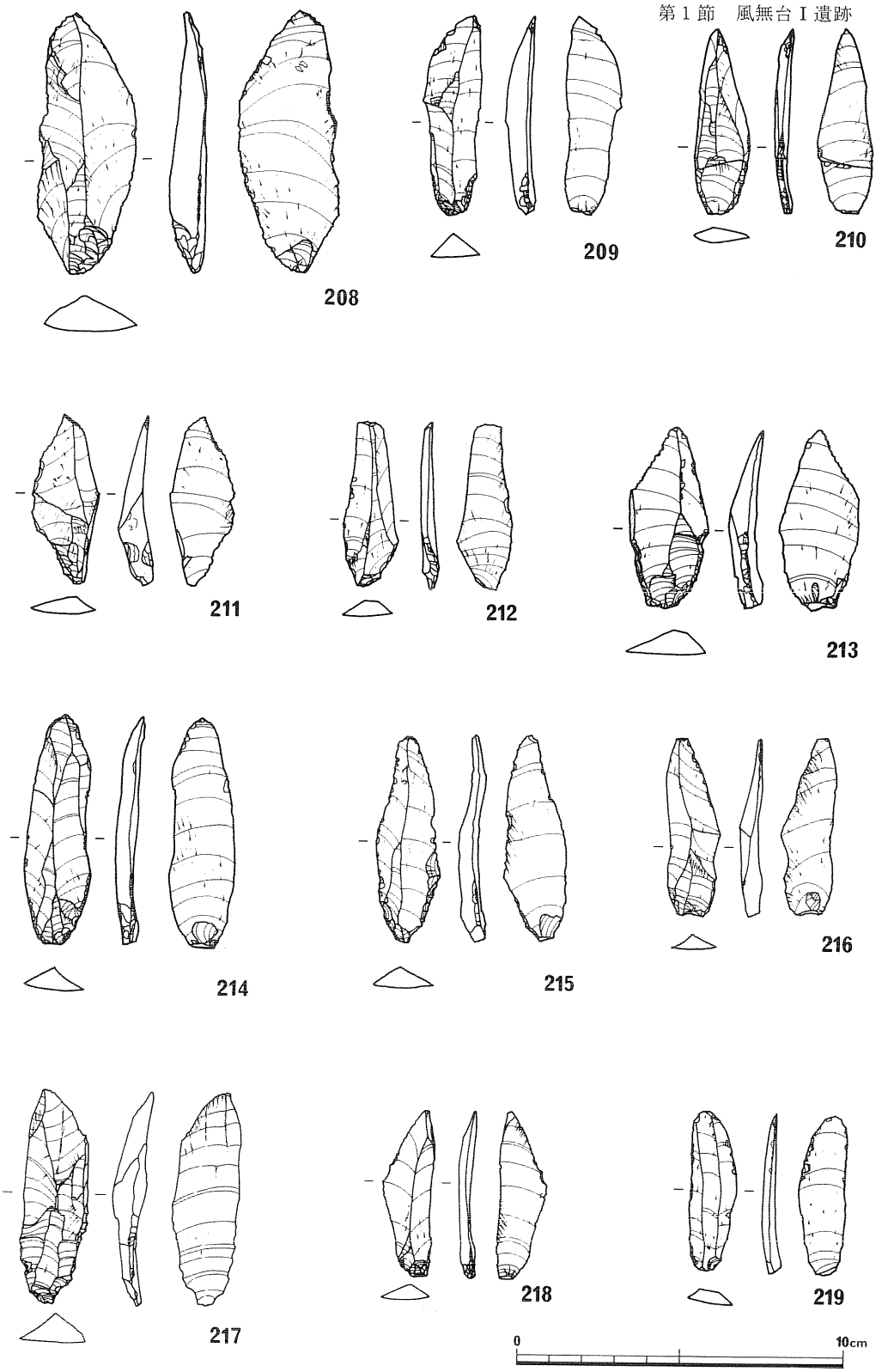
長幅指数100に近い比較的幅広の剝片の先端に、腹面側から急斜度の二次加工を施したものである。大きめの掻器はこれ１点で、他には非常に小さい掻器がある（第24図94など）。

(4)　二次加工のある剝片　（第36図225、226、図版14）

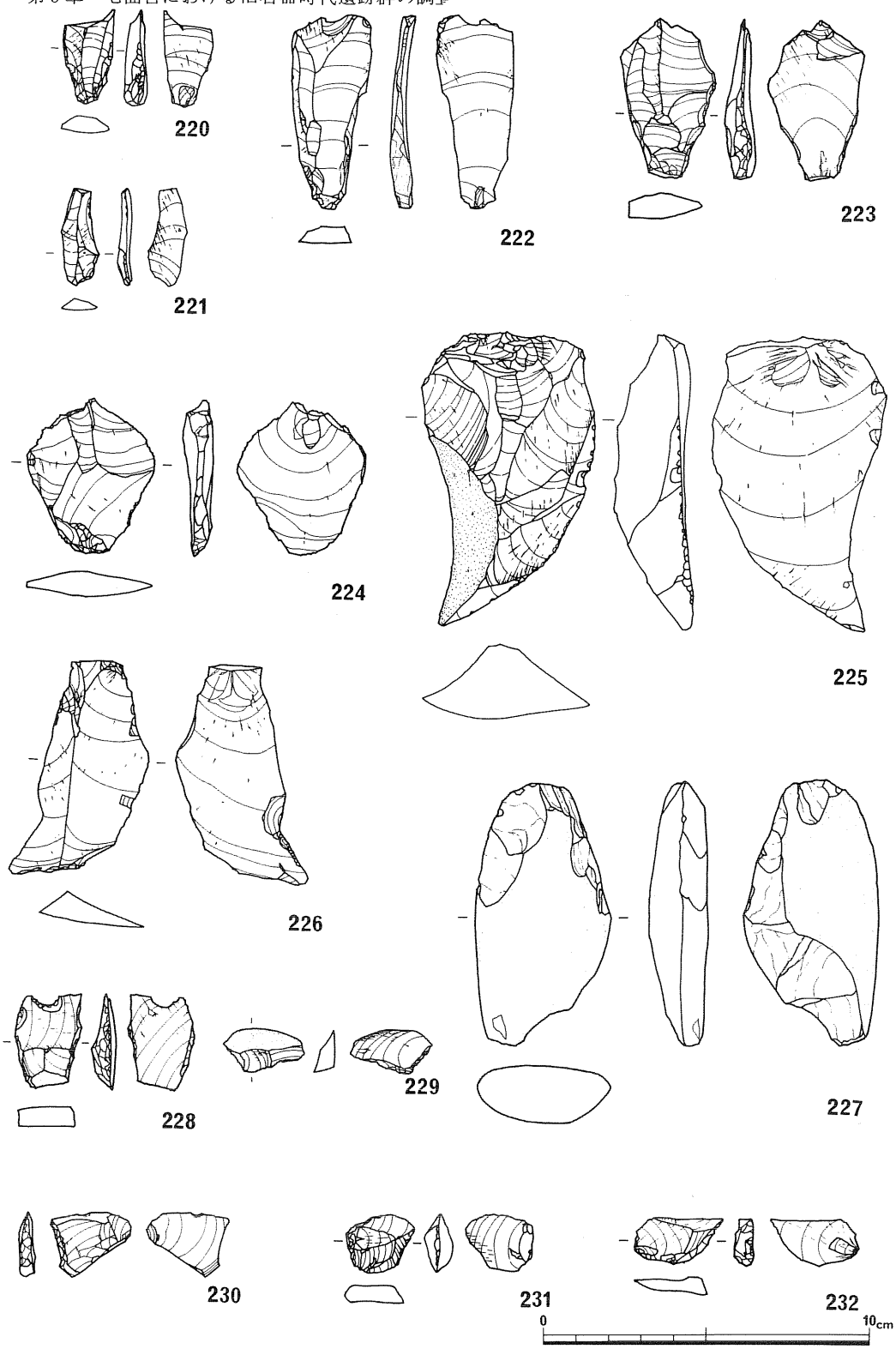
225は、部厚く大きな剝片の側辺に微細な二次加工を施したものである。あるいは削器とすべきかもしれない。226は石刃の側辺の一部に、いわゆるノッチの入るものである。

(5)　石　斧　（第36図227、図版14）

緑色凝灰岩の円礫の縁辺を打ち欠いて石斧にしたものであろう。下半（刃部があったと思われる）は欠失し、全体的に磨滅していて、磨製であったか、打製のままであったかはわからない。



第35図　ナイフ形石器など(1)



第36図　ナイフ形石器(2)・掻器・台形様石器・その他の石器

(6)　台形様石器　（第36図228～232、図版14）

５点の台形様石器が出土している。これらの出土地点は、第13図に示すように遺物の最も集中する部分の中では、わずかに西寄りになるが、決して独立した存在ではない。228は、自然面の付いた石刃の両端を折り取り、腹面側から急斜度の二次加工を施したもので、全体の形状もほぼ台形である。刃部中央に使用によるものか抉りが入っている。母岩㋚あるいは㋐から得られた石刃を素材とする可能性もあるが判然としない。230は、母岩㋛から得られた幅広の剝片を中央部で折断し、打面の反対側に二次加工を施したものである。229、231、232は、母岩㋟から得られた剝片の打面とは反対側に、腹面から二次加工を施したもので、打面を上にして見た場合の右側辺を刃部としている。

これらの台形様石器のうち、特に229、231、232の３点については、これをナイフ形石器として把えることも可能かと思われるが、ナイフ形石器の主体を占めるものとはあまりにもかけ離れすぎているため、この仲間とした。

第３表　ナイフ形石器計測表

図番号	石器番号	長さ (mm)	幅(mm)	長幅指数	欠損	厚さ (mm)	重さ (g)	打面の有無	刃角 左(α°)	刃角 右(α°)	刃向	刃先bulbの関係	類
① 206	3532	81	29	279	—	10	19.4	有	—	40	右	正	Ⅰ－a
② 207	0508	61	17	358	—	7	6.3	有	35		左	正	Ⅰ－a
③ 208	1834、2241	57	17	335	—	4	3.4	有	54		左	正	Ⅰ－a
④ 209	1632	52	21	247	—	8	5.8	有	30		左	逆	Ⅰ－a
⑤ 210	1594	51	17	300	—	5	3.3	無	35	49	?（両）	正	Ⅰ－a
⑥ 211	4833	55	24	229	—	7	8.6	有	25	46	?	正	Ⅰ－b
⑦ 212	1926	71	21	338	—	6	8.7	有	42	51	?	正	Ⅰ－b
⑧ 213	3536	64	19	336	—	6	6.3	有	42	37	?	正	Ⅰ－b
⑨ 214	0973	(54)	16	—	先端	5	3.4	有	34	40	—	逆	Ⅰ－b
⑩ 215	3217	65	20	325	—	9	9.4	有	54	39	—	逆	Ⅰ－b
⑪ 216	3332	52	15	346	—	4	2.4	有	24		左?	正	Ⅰ－b
⑫ 217	0293	(49)	14	350	基部	4	2.7	—	37	33	—	正	Ⅰ－b
⑬ 218	0166	(30)	16	—	上半分	7	2.8	有	—	—	—	—	Ⅰ－c
⑭ 219	0303	(30)	11	—	先端	3	1.1	無	—	—	—	—	Ⅰ－c
⑮ 220	1039	60	24	250	—	5	7.0	有	24	—	左	逆	Ⅱ－a
⑯ 221	3328	48	28	171	—	8	9.9	有	65	44	右？	逆	Ⅱ－b

4　小　結

(1)　石器組成について

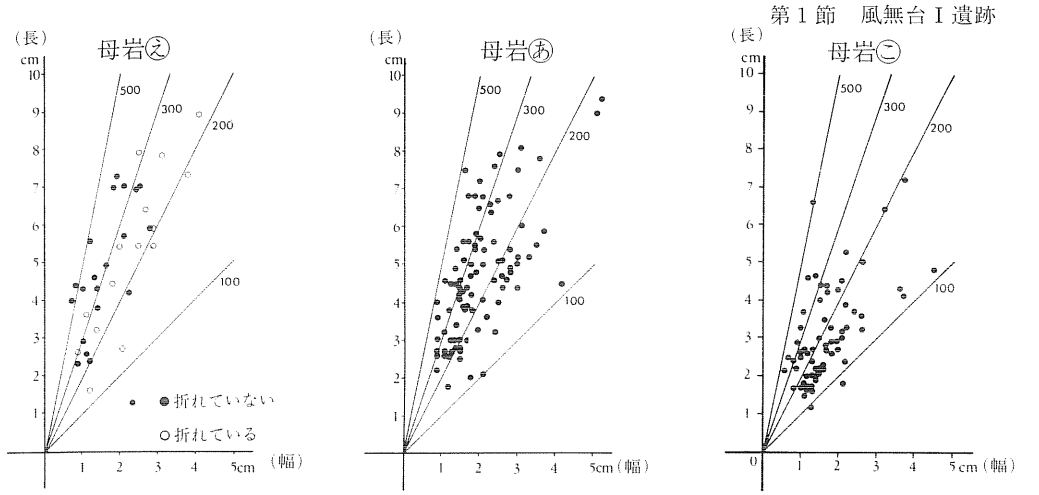
風無台Ⅰ遺跡では、約230m²の調査範囲から、約6,200点の石器群が出土した。その内訳は、定形的な石器・石核・剥片などが約2,500点、チップが約3,700点で、両者の割合は約４：６である。定形的な石器は、ナイフ形石器16点、掻器９点、石斧１点、台形様石器５点、二次加工のある剥片２点の計33点で、これが全石器組成である。これは、約560点に上ると見られる大小の石刃の数に比較すると非常に少ない。

ナイフ形石器は、第37図右下からわかるとおり、長さが５～８cmの中形石刃を素材に打面側を基部とし、その両側縁に二次加工を施したものが主体を占める。先端部の一方の側に極く狭い範囲に微細な刃潰し様の二次加工を施すものも約半数ほどあるが、いずれも素材の形をほとんど変えないでナイフ形石器にしていると言える。掻器とした石器の中には、厚みのある大形石刃を素材としたいわゆるエンド・スクレーパーは１点もない。長幅指数100前後の剥片の一部にゆるい孤を描くように二次加工を施したものが１点と、長さ3cmにも満たないような小さな石刃の先端に微細な二次加工を施したものが８点あるのみである。

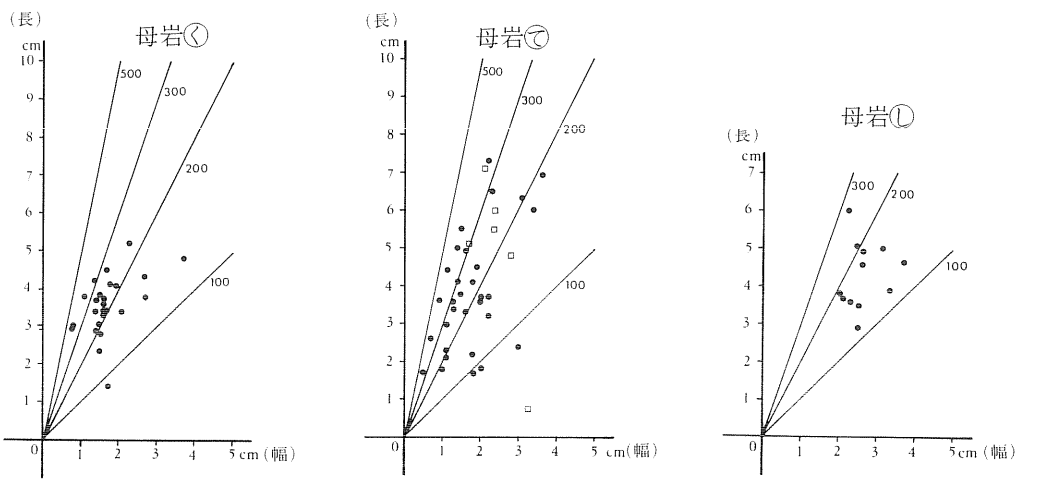
これらの石器組成を見てみると、東北地方の石刃石器群の中では、ごく普通に見られるナイフ形石器が石器の中では圧倒的に多いにもかかわらず、典型的な掻器（エンド・スクレーパー）、彫刻刀形石器が全く存在せず、わずかではあるが台形様石器が含まれていることに最大の特徴がある。

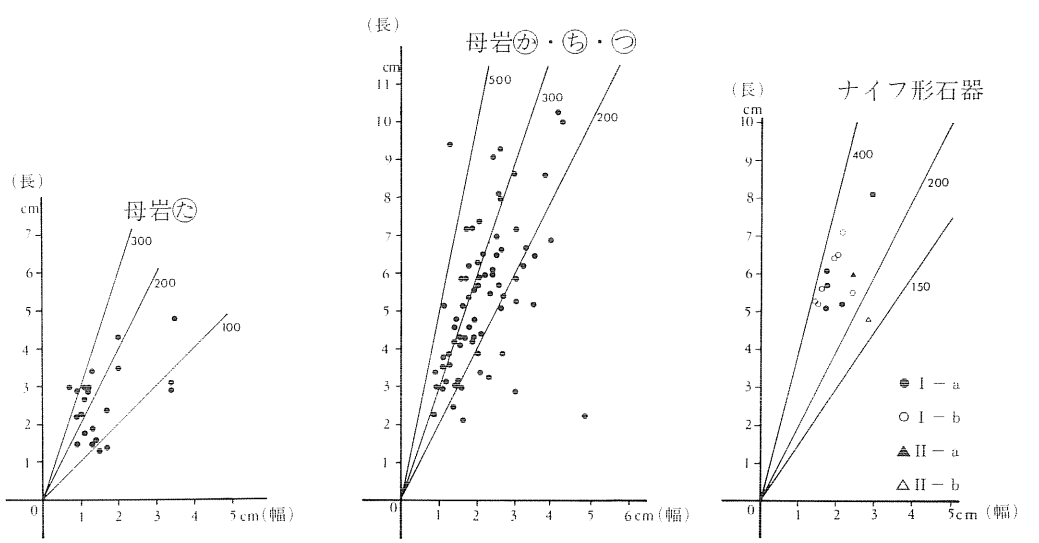
(2)　剥片剥離の方法について

良好な接合資料をもとに、各母岩別にその剥片剥離の方法を概説したが、風無台Ⅰ遺跡では、いわゆる「真正な石刃技法」(注3)とよばれる条件となる打面調整、稜形成の作業面調整等の調整技術を全く持たない石刃技法を主体としながら、それと、打面と作業面を頻繁に変える方法、とによって剥片剥離作業が行われている。前者は剥片剥離の方法の分類による、Ⅰ－ａ、Ⅰ－ｂ、Ⅱ－ａ、Ⅱ－ｂ類、後者はⅢ、Ⅳ類がそれである。両者の数量的な比較では、第２表のとおり、前者が圧倒的に多いが、後者も確実に含まれていることも事実で、本遺跡では、剥片剥離の方法の上で異質とも言える２つの方法が共存していると言える。そしてこのことは、２つの方法から得られた剥片の差となって表われている。第37図は、各母岩から得られた石刃及び剥片の長幅分布図をまとめたものである。この中で、母岩㋦、㋒は、剥片剥離の方法分類のⅠ－ａ類だけ、㋐は、Ⅰ－ａ、とⅡ－ａ、とⅢ類、㋑は、Ⅰ－ａ、とⅣ類、㋓は、Ⅱ－ａ類だけ、㋔は、



（100、200、500などの数値は長幅指数を表わす。）





第37図　石刃・剥片・ナイフ形石器長幅分布図

Ⅳ類だけを持つものである。母岩㋓では、長幅指数200～500の小～大形石刃を、㋕は、同指数200前後の小形石刃を、㋚の場合、同指数100～200の中形石刃を得ている。また、母岩㋐では、長幅指数150～500の大～小形の石刃、剥片を、㋒では、同指数100～500までの中～小形の石刃及び剥片を、㋟では、同指数100以下～300までの剥片を得ていることがわかる。このことから、Ⅰ－ａ～Ⅱ－ｂ類の剥片剥離の方法では、得られた石刃に大小はあるものの、それぞれが長幅指数分布の上でまとまりを持っているが、それにⅢ、Ⅳ類を含んだり、Ⅲ、Ⅳ類単独ではそのまとまりがなくなり、非常に散漫になる傾向のあることが窺える。このように２つの異なる剥片剥離の方法から得られた剥片と特定の器種との結びつきについては、本遺跡の場合、石器の種類が少なく、その判断に苦慮するところであるが、少くとも中形の石刃はナイフ形石器に用いられていることは確実で、この他にも剥片剥離の方法Ⅲ、Ⅳ類から得られた剥片が第36図229～232のような台形様石器の素材になる可能性の高いことだけは指摘できる。

(3)　石器群の製作の場とその持ち運びについて

本遺跡は、石器製作地、あるいはそのための素材を生産する場所であったとすることができる。そして幸いなことに、本遺跡の石器群は、比較的識別するに容易な頁岩を母岩としている。このため、チップや一部選別できなかった剥片を除いて、大半のものは合計28個の母岩に分けることができた。それらの母岩は、原材から剥片にするまでの一貫した作業を本遺跡で行ったか否かを基準にしてＡ～Ｄ類に分類できる。それによると、Ａ類（本遺跡で、分割から剥片剥離作業まで行ったもの）10母岩、Ｂ類（他所で剥片剥離された剥片を、そのままか、石器として持ちこんだもの）13母岩、Ｃ類（他所で分割された石核の一部を持ち込んで本遺跡で剥片剥離作業を行ったもの）３母岩、Ｄ類（原石の分割後、その一部の石核を他所へ持って行ったもの）２母岩、である。この中で、Ａ・Ｃ・Ｄ類は本遺跡で剥片を得ているものとして、また石刃等の一部が他所へ石器あるいはその素材として持ち去られた可能性のあるものとして、まとめられる。このようにして見ると、偶然の一致かもしれないが、本遺跡で剥片剥離作業の行われた母岩数と、他所から持ち込まれた石器の、あるいはその素材が得られた母岩の数とは15：13で、ほぼ同数と見ることができる。すなわちこのことは、当時の人々が移動を繰り返す生活の中で、ある場所では新たに10数個の原材を持ち込んでその分割から剥片剥離作業までを行い、生活の場を変える際には、そこの場所で得た石器や石刃、あるいは石核の一部を携えて次の場所に移った、というようなあり方の反映と見ることができる。勿論、本遺跡に残された石器群が当時の人間集団の生活、行動様式の全てを現わしているものではないが、少くとも石器（＝道具の一部）あるいはその素材の扱われ方、行動様式の一端を物語るものであると言えるのである。出土したナイフ形石器16点のうち、少くとも10点は本遺跡外で製作されてから持ち込ま

れたものであり、母岩㋕や㋖以降の母岩から得られた石刃も同様である。そして、本遺跡内で生産された石刃には刃こぼれ様の傷跡があまり見えないのと対照的に、これら持ち込まれた石刃の多くにはそれが著しい。(注4)

(4)　風無台Ⅰ遺跡の石器群の位置について

本遺跡における剝片生産技術と、石器組成を見てみると以下の①、②になる。

①　剝片生産技術には、ⓐ縦長剝片を連続して剝離する技術（＝石刃技法）と、ⓑ打面を固定せず、打面と作業面を次々に移動させながら剝離作業を進行させる２つの方法がある。量的に多い石刃技法は、基本的に単設打面のものと両設打面のものとがあるが、両者ともに打面調整、稜形成の作業面調整等の調整技術は全く持っていない。ただし、後者には打面の再生をするものもあり、１個の石核から順次大→小の石刃を得ているものもある。このようにして得られた石刃は大形のもの（長さが８cm以上）、中形のもの（８～５cm）、小形のもの（５～２cm）まであり、中形のものが最も多く、次いで小形で、大形のものは少ない。(第37図の中で、持ち込まれた母岩㋜や、その他の㋖、㋗、㋙……㋩の長幅分布図を見てもわかる。)。

②　石器の組成は、中形石刃の基部両側に二次加工を施しただけのナイフ形石器と、極く小さな先端掻器、台形様石器、石斧であり、典型的なエンド・スクレーパー、彫刻刀形石器は全くない。

本遺跡の石器群を、層位的な証拠によって後期旧石器時代編年表の中に組み入れることは、残念ながらできない。このため、現状では剝片剝離技術及び、石器組成等の比較などによって試行せざるを得ないのであるが、これとて報告者の力量不足や、十分に資料接合の済んでいない状況では、確たる根拠を持って行えるものではない。しかし、ここで上記①、②をもとに、これを東北地方とその周辺の石器群との比較で考えてみると、以下のようになる。

剝片生産技術のⓐの調整作業を全く持たない石刃技法は、栃木県磯山遺跡(注5)、山形県岩井沢遺跡(注6)などに見られるが、打面再生の有無とその頻度や、打面の転移等に若干の差異がある。同技術のⓑは上記磯山遺跡や、岩手県上萩森遺跡(注7)などに見られるが、全体の技術に占める割合は磯山遺跡のそれに比べて少ない。石器の組成を見てみると、ナイフ形石器は本遺跡のものと、磯山、岩井沢遺跡のものに判然とした差異は認められず、典型的な掻器（エンド・スクレーパー）や彫刻刀形石器のないことも共通している。ただし、掻器については、小形石刃や剝片の先端部に微細な二次加工を施したものが岩井沢遺跡にもあり、本遺跡のものに類似する。この他磯山遺跡には、ⓑの剝片生産技術から得られた剝片を主な素材とするいわゆる「ペン先形のナイフ形石器」があるが、本遺跡では、そのような剝片から台形様の石器を作っている。そしてこれに加えて本遺跡には１点だけであるが、石刃を折断して作った台形様石器があり、他の遺跡

とは際立った違いを見せている。

以上、大略ながらも、剝片剝離技術と石器組成の観点から、本遺跡と周辺遺跡について述べたわけであるが、このことから、本遺跡の石器群は東北地方の後期旧石器文化において、各種の調整技術が発達するいわゆる「真正な石刃技法」の前段階・調整技術が未発達な段階の所産で、藤原（1983、1984）のいう(注8)Ｉ群の中に大わくで含めることができるものと思われる。

注１．ここでは剝片（＝素材）を得る目的で採集されて来た原材（原石）を母岩と呼ぶ。母岩からは種々の剝片やチップなどが得られているが、これらを接合したり、石質を比較し選別することによって、１個の母岩から得られた剝片の数、母岩の分割や剝片剝離の行程のわかるものが多い。以下、この呼び方は風無台II、松木台II遺跡も同様である。

２．１個の石核から剝片剝離作業を進めて行くと、一般的には、石核の持っている面のうち、１回の作業毎に形の変わる面が２面ある。１つは打面で、他の１つは剝片が剝離される面である。便宜上、この剝片が剝離される面を作業面と呼ぶ。

３．藤原妃敏「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤」　『考古学論叢』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編　1983

４．また、石刃が石刃として持ち込まれ、それがナイフ形石器などの定形的な石器に加工されず、そのまま使用されていると見られる事実は、石刃が一つの道具として機能したことの証の１つとなるものと思われる。

５．芹沢長介編　『磯山』　東北大学考古学研究室　1977

６．加藤稔・米地文夫・渋谷孝雄『山形県岩井沢遺跡の研究』　山形県小国町教育委員会　1973

７．東北歴史資料館『旧石器時代の東北』　1981

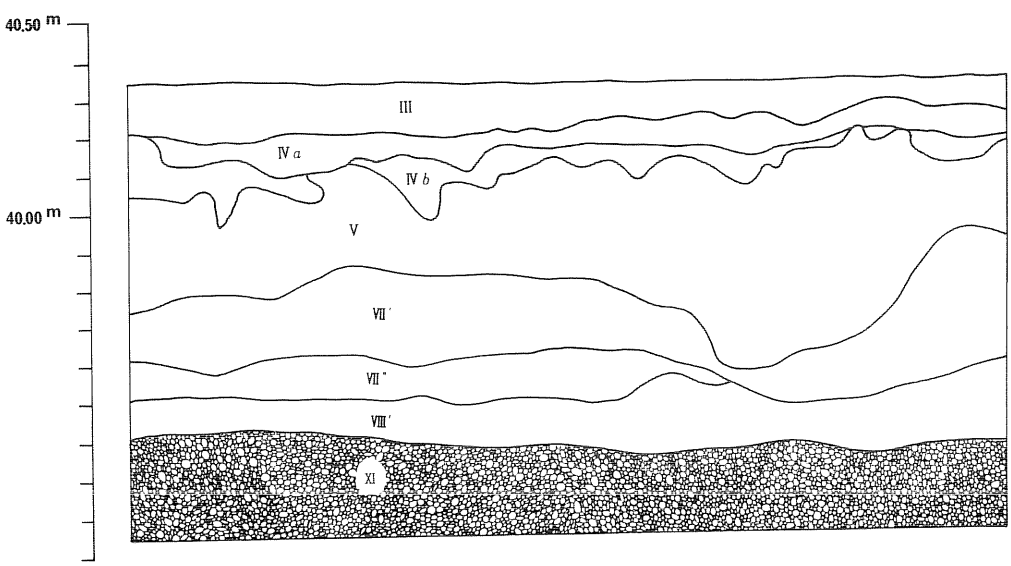
８．藤原妃敏　注３に同じ
「東北地方における石刃石器群について」　『太平臺史窟』第３号　1984

第２節　風無台II遺跡

1　基本層序

七曲台における低い方の段丘は七曲台面と呼ばれる。この七曲台面のほぼ中央部には北側から、左右を分けるような鋭い沢が南に入り込んでいる。風無台II遺跡における旧石器時代の遺物は、この鋭い沢に面した段丘縁辺から約45m南西に入ったところの黒色土下から出土した。この地点は平坦であるが、微視的には鋭い沢からさらに小枝状に分かれた小さな沢の沢頭の部分にあたり、全体としては、北東側に極く緩かに傾斜するそのはじまりの部分である。

第38図は、遺物が集中して出土した地点に隣接するところでの深掘りトレンチの断面図である。この部分は、重機によって表土除去がなされており、表土Ｉ～III層のうち風無台Ｉ遺跡のＩ・II層にあたる層は残っていない。第III層～IVｂ層については風無台Ｉ遺跡の場合と同様である。本図の第Ｖ層は黄褐色～褐色のローム層で風無台Ｉ遺跡のＶ・VI層にあたるが、両層の層境がそれほど明瞭でなく敢えて分層しなかった。第VII′・VII″・第VIII′層は風無台Ｉ遺跡ではほとんど見られなかった層である。第VII′層は風無台Ｉ遺跡のVII層に似ているが、少ないながらも点々と風化した小礫が入っている点で異なり、第VII″、VIII′層も黄褐色砂質土中に風化した礫が混在している。第IX層以下は段丘礫層である。このうち旧石器時代の遺物は、第IV層、第Ｖ層と

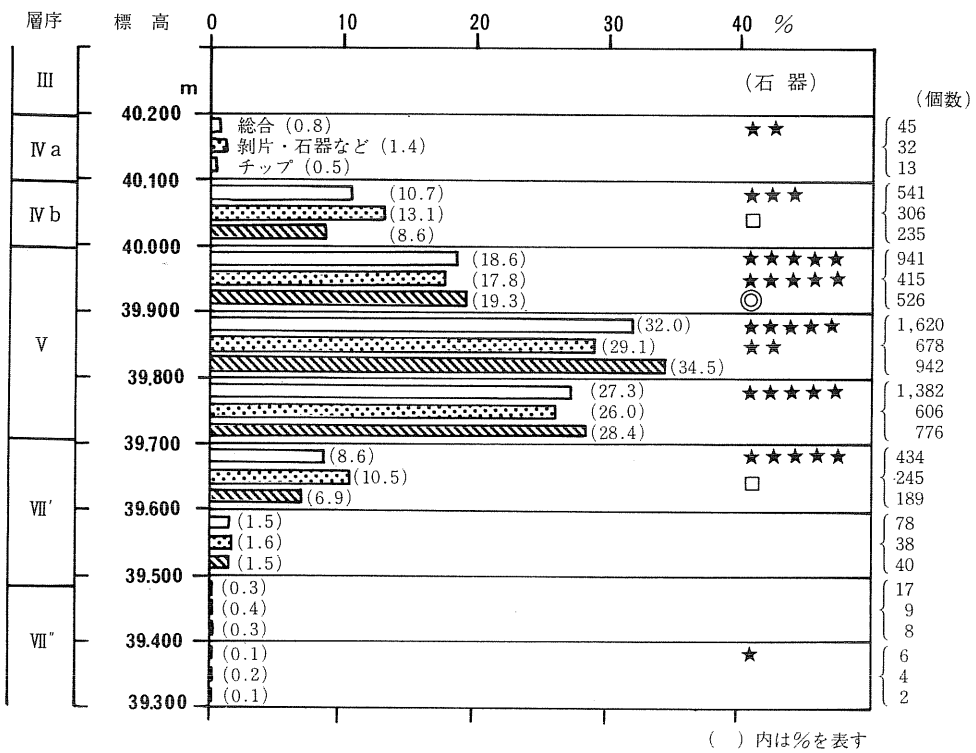


第38図　風無台II遺跡土層図

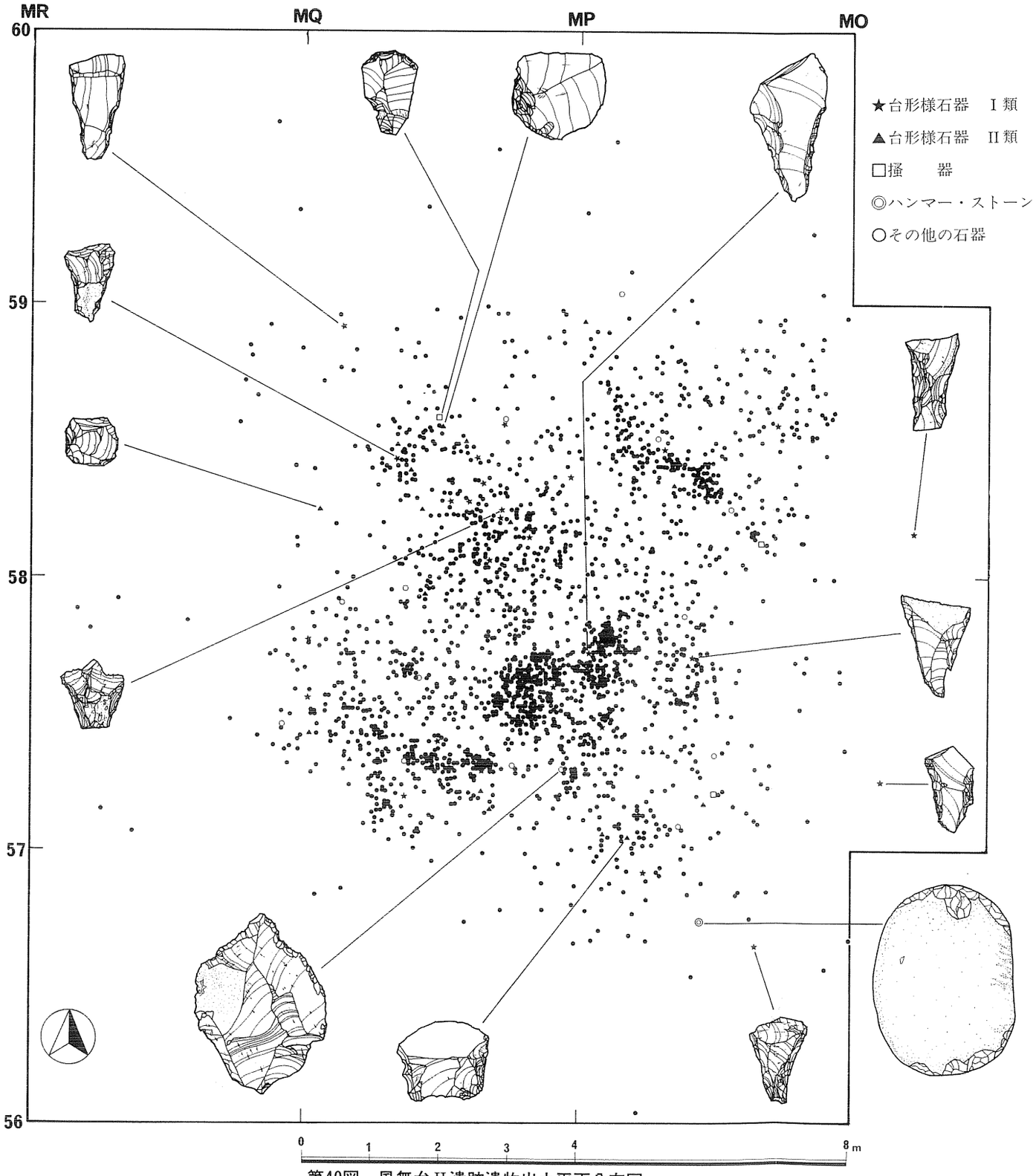
Ⅶ′層の上部にその大部分が含まれるが、第38図からもわかるように、本遺跡における各層の層境は風無台Ⅰ遺跡のそれよりも平面的ではなく大きく波打ち、Ⅴ層以下の層序層厚とも地点によって大きく異っている。このことは、調査区の周囲で３ヶ所深掘りしたが、３ヶ所とも第Ⅴ層以下の様相、各層厚が異っていたことからも明らかである。従って、第Ⅴ層が厚ければ、その部分からは石器が出土し続ける、といった状態であった。なお、第38図の層レベルと第40図の層序のレベルとは異っているが、40図は石器集中地点での模式的な層序を示しているためで、両者は一致しない。

2　遺物の出土状況

第40図が調査区と遺物の出土平面分布図、第39図がレベル毎の遺物出土数である。これからわかるように遺物の大部分は、調査区のほぼ中央で、直径約12mの円の中に含まれ、垂直分布にして0.7mの範囲である。現場で遺物として採り上げたものは、礫、微細なチップ等も含めて5,065点に上るが、その後の整理の結果、遺物でないもの、礫を除き、番号を付さなかったものも含めると総数で5,064点となる。石器群が約2,300点、チップが約2,700点で両者の割合は９：11となる。



第39図　出土レベル別個体数



第40図　風無台II遺跡遺物出土平面分布図

これらの遺物は、その内容、レベル毎の個数、同一母岩内での接合状況、発掘中の出土状況などからして、全て同一時期のもので、１つのまとまりとして把えられるものである。従って、風無台II遺跡の石器群は、風無台Ｉ遺跡の石器群同様、第Ｖ層中（風無台遺跡でのＶ・VI層）に生活面を持った単一の時期のものであるとすることができる。

3　出土遺物

出土した石器群のうち、定形的な石器・剥片・石核等の数は約2,300点である。このうち定形的な石器、あるいは二次加工が施された剥片として分類可能なものは85点で、その内訳は台形様石器60点、掻器４点、ハンマー・ストーン１点、その他の石器20点である。

石器群のうち剥片に着目すると、剥片の打面を上にして見た場合の、剥片の長さと幅との比が２：１を超えるようなものも散見されるが、大部分の剥片はその比が１：１前後（長幅指数100)のものである。このことは、接合作業の結果判明した剥片剥離の方法の内容によっても明らかで、風無台II遺跡では、いわゆる石刃技法は全く存在せず、長幅指数100前後の剥片を得ることを目的にした剥片剥離が行われている。

石材は台形様石器Ｉ－ａ類のうち、４点が黒曜石、母岩㋐、㋑がチャート、ハンマー・ストーンが砂岩の他は、全て頁岩である。

以下、出土した石器、母岩別の資料、接合資料の順で説明する。

(1)　台形様石器

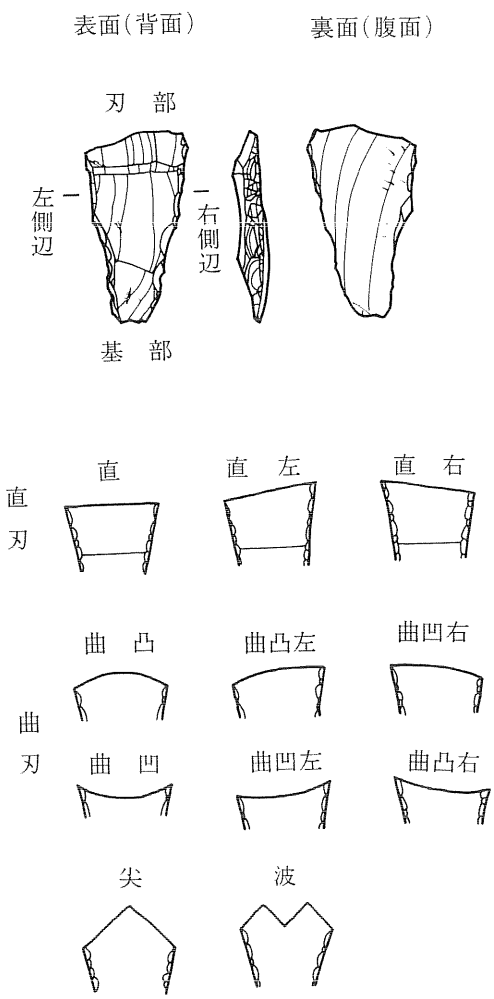
長幅指数100前後の剥片の鋭い１側辺を刃部として残し、他の１～３の側辺に二次加工を施して石器としたもので、形が台形状を呈するものである。60点が出土している。第43図に長幅分布を示した。石器の形状及び二次加工の施された部位の違いによってＩ・II類に分類され、それぞれがさらに細分できる。

なお、石器の各部の名称及び、細部の形状の名称については第41図をもとに記述する。第４表に石器の観察結果を示した。この中の「刃部とbulbの関係」の項では、背面の刃部となっている部分の剥離方向が、腹面の剥離方向と一致している場合は「正」、反対の場合は「逆」とし、打点を上にして見て左側から剥離が入っている場合は「左」、右からの場合は「右」として表わしている。

台形様石器の製作工程については、本遺跡の接合資料中にも（特にII－ａ類など）それのわかるものもあるが、この後に述べる松木台II遺跡の接合資料中（本書128ページの第85図）にＩ－ａ類の最も良好な例があるので、ここでその行程について説明する。

第42図①～⑧が、その行程を表している。①　石核は１面が自然面、他の３面が節理面で囲

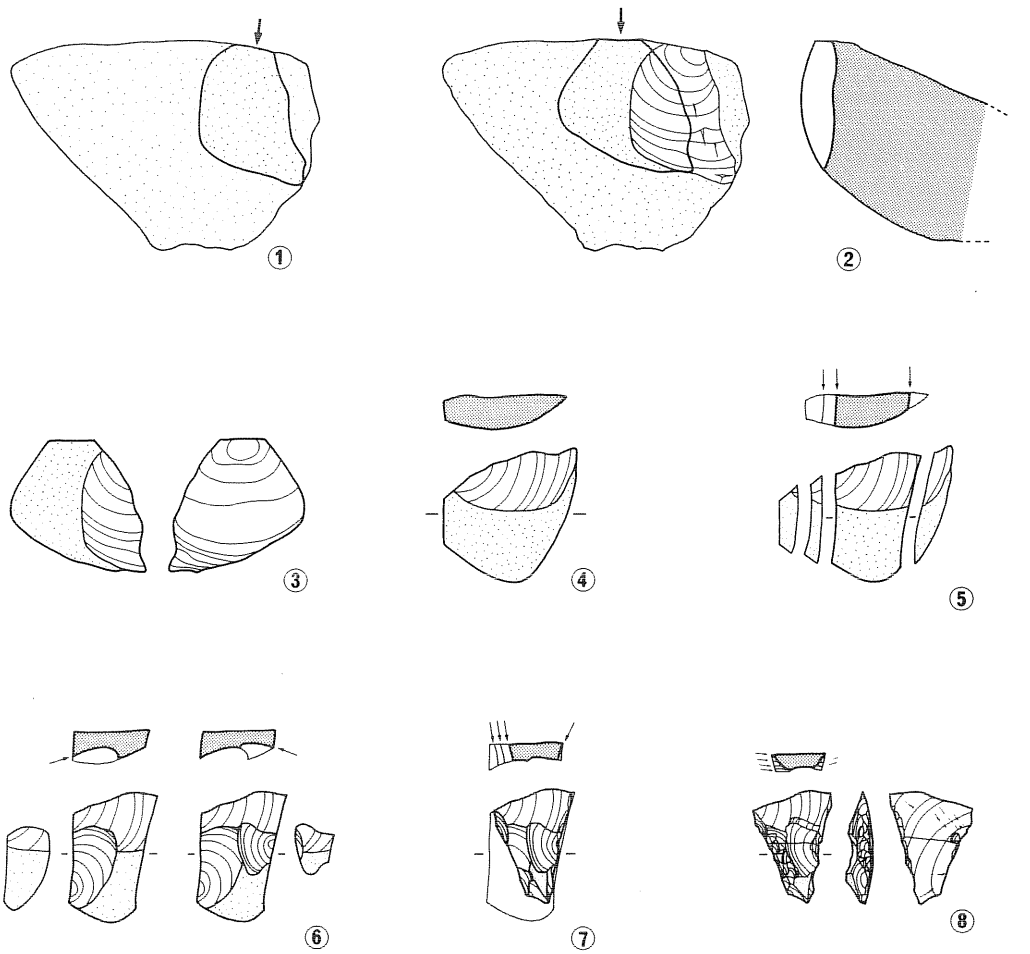
まれた不正四面体を呈する。この石核の１面から背面に節理面の付いた比較的大きな剝片を取る。②　打点を①よりも少しだけ右（図では左）に移動して台形様石器の素材となる剝片を剝離する。③　この剝片には、打面を上にして見た場合、右側に①の剝離面が残っており、これとこの剝片の腹面とが鋭い縁辺を形成している。④　このようにして得られた剝片を、鋭い縁辺が刃部になるようにおく。⑤　剝片のバルブ側（左）と末端側（右）を腹面からの加撃によって折断する。⑥　左、右の折断面を打面として、背面側の高まりを除去する（個々の石器によっては、これが省略される）。⑦　再び腹面を打面として、急斜度（緩斜度のものもある）の二次加工を施して（特に基部側の幅が小さくなるように行われる）、ほぼ台形様石器の形が出来上る。⑧　左右の側面から、細かい階段状（あるいは刃潰し様）の剝離を施して石器を完成させる。なお、ここに示した例は、あくまでも１例であって、①の石核の状態、②、③の素材となる剝片の刃部として選定する縁辺のあり方は一定ではない。台形様石器Ⅱ類の製作行程もほぼこれに似ているが、上記行程中の⑥は全くない。



第41図　台形様石器の各部の名称・刃部の名称

Ⅰ類：（第44図１～第47図34、図版16～17）

刃部を上にして見た場合の形状が、おおむね逆台形、あるいは逆三角形を呈するものである。刃部の形状は直線的なもの（６、17、20、33など）、曲線的なもの（１、19、35など）、尖るもの（３、28など）、波状を呈するもの（９）などがあり、側辺の形状は直線的なもの（５、６、９、20など）や、わずかに内側に曲るもの（１、２、23など）などがある。個々の石器の観察結果は第４表の通りであるが、この中で、石器の素材となった剝片のbulbと刃部の剝離方向の関係を見てみると、「正」が約45％、「逆」が約26％、「右」が約23％、「左」が約６％である。石器の素材として、刃部に予定する部分の剝離方向が、素材の剝離方向と同じ



第42図　台形様石器製作行程模式図

であるのが約半数を占めている。

側辺への二次加工のあり方によってａ、ｂ類に細分した。

Ｉ－ａ類：（第44図１～第46図28）

左・右両側辺に二次加工を施すものである。二次加工のあり方は製作行程の項で述べたとおりであるが、⑥の、素材の高まりを減ずる剝離が、裏面のバルブの高まりを対象にして行われたものが、１、２、４、６、14、19～21、23、28などに見られる。このような石器では、１のように側辺加工は急斜度のものであっても側辺が平らな面とならず断面形が算盤玉状を呈する。また、⑧の、刃潰し様の加工は、腹面→背面のものが多いが、両側辺とも背面→腹面のものが、１、19に、左側辺が

背面→腹面で、右側辺が腹面→背面のものが２、６、20、21、23、26に、これと全く逆のものが４、24に見られる。17の背面は分割面と思われる。２、３、６は背面に自然面を残し、６ではそれを刃部としている。22は左側辺の二次加工中に折れてしまったものと思われる。６、14、18、22、25は打面部が基部側にあり、14、18、22は打面を残している。

石質は、１～４が黒曜石、15、22、24がチャートで、他は頁岩である。

Ｉ－ｂ類：（第46図29～第47図34）

一側辺の大部分を素材のままの姿で残し、他の一側辺に二次加工を施したものである。29は右側辺が軽いヒンジフラクチャーで終わっており、33、34は一方の側辺に打面を大きく残したままである。

II類：（第47図35～第49図60、図版17～19）

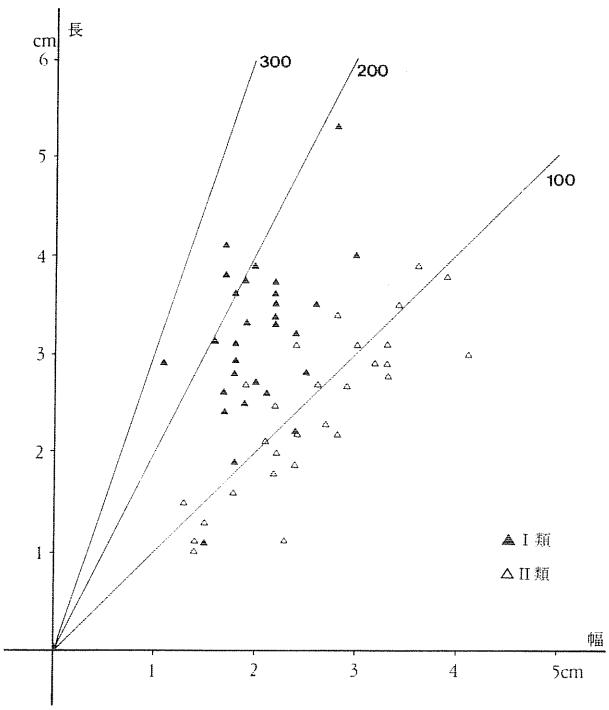
全体の形状が、正方形か、長方形に近いもので、刃部は直線的か、ゆるく張り出す形となる。二次加工の施される部位の違いなどによりａ、ｂ類に分けられるが、二次加工は43、52を除いて全て腹面側→背面側のものである。

II－ａ類（第47図35～39）

５点ある。打面を大きく残し、刃部を除く他の二辺に二次加工を施すものである。刃部は直線的なもの（36・38）、ゆるく張り出すもの（35・39）、尖るもの（37）がある。石質は37がチャート以外は全て頁岩である。

II－ｂ類（第47図40～第49図60）

主に一側辺と、



第43図　台形様石器長幅分布図

第４表　台形様石器計測表(1)

整理番号	取り上げ番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	刃部長(mm)	刃角(α°)	刃部の形状	刃先とbulbの関係	分類	裏面調整	その他
1	1955	31	18	9	4.4	22	55～60	曲凸左	正	Ⅰ－a	○	
2	1850	28	18	7	2.8	18	52	直　左	正	〃	○	基部欠損
3	1461	(25)	21	11	4.6	23	46	尖	石	〃		〃
4	638	(26)	(14)	6	2.0	—	刃部欠損	—	—	〃	○	刃部欠損
5	847	39	20	7	4.7	20	40	直　左	正	〃		
6	3332	35	26	10	4.8	25	42	直　右	—	〃	○	
7	1770	28	25	7	3.4	21	40	曲凹左	右	〃		
8	1371	33	22	9	3.4	17	30	直	逆	〃		
9	3395	40	30	8	5.5	31	37	波	逆	〃		
10	643	33	19	11	4.7	18	38	直	正	〃		
11	1049	38	17	8	3.2	11	40	直　右	左	〃		
12	453	37	19	8	3.5	12	43	〃	正	〃		
13	5017	(24)	18	11	2.7	15	43	直	右	〃		基部欠損、焼
14	4603	31	16	10	3.0	21	28	曲　凸	左	〃	○	
15	6039	27	20	6	3.6	19	43～57	〃	正	〃		
16	4802	(24)	19	8	2.6	29	35	尖	右・逆	〃	○	
17	037	41	17	7	4.6	16	27	直	逆	〃		
18	679	37	22	7	3.8	20	37	—	—	〃		焼
19	2669	33	22	8	5.0	23	32～35	曲凸左	正	〃	○	
20	989	36	22	8	4.8	18	48	直	正	〃	○	
21	832	36	18	7	3.7	12	26	〃	正	〃	○	
22	1864	(31)	(20)	8	3.1	15	40	曲　凸	正	〃		
23	3064	19	18	5	1.4	18	32	〃	逆	〃	○	
24	720	24	17	5	1.4	14	20	〃	右	〃		
25		26	17	9	3.2	11	52～60	直　左	〃	〃		基部欠損
26	4552	22	24	6	1.3	10	23	〃	〃	〃		
27	2985	29	11	5	1.4	—	—	—	—	〃		刃部欠損、焼
28	223	53	28	6	6.0	—	—	尖	逆	〃	○	刃部欠損
29	2678	(28)	20	8	4.6	20	35	直　左	右	Ⅰ－b		基部欠損
30		35	22	7		15		直　右	逆	〃		
31	52	32	24	7	4.2	18	37	直	正	〃		
32	1067	26	21	9	3.6	20	25	曲　凸		〃		
33	552	29	18	7	2.7	12	27	直	正	〃接10		
34	591	25	19	4	1.4	14	20	尖	正	〃		
35	3430	28	33	10	6.3	30	20	曲　凸	?	Ⅱ－a		
36	3259	23	27	5	3.2	24	28	直	左	〃		
37	937	25	22	5	5.0	20	20	直　左	正	〃		
38	2278	19	24	6	2.1	23	29	直	〃	〃		
39	2080	29	23	10	7.6	一部欠損	34	〃	〃	〃		刃部欠損
40	1420	29	32	8	7.2	21	32	〃	右	Ⅱ－b		
41	4516	31	33	9	7.8	31	18	〃	正	〃		
42	053	34	28	9	6.6	20	20	曲　凸	〃	〃		

第４表　台形様石器計測表(2)

整理番号	取り上げ番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	刃部長(mm)	刃角(α°)	刃部の形状	刃先とbulbの関係	分類	裏面調整	その他
43	792	31	30	9	7.1	20	25	直	逆	〃 接1		
44	4938	31	24	7	4.9	21	47～55	曲凸	右	〃		
45	628	38	39	10	12.4	30	20	直	逆	〃		
46	1872	39	36	10	11.9	26	30	〃	正	〃 接10		
47	844	27	29	6	5.2	19	20	曲凹	〃	〃		
48	148	35	34	8	6.7	26	20	直	〃	〃 接2		
49		22	28	8	4.9	23	50	曲凸	右	〃		
50	2832	27	26	7	5.1	29	32	〃	〃	〃		
51	080	30	41	10	9.8	35	26～29	〃	〃	〃 接3		
52	4993	27	19	4	1.5	13	19	直	〃	〃		
53	1496	20	22	5	2.1	20	19	〃	正	〃 接7		
54	1539	21	19	6	2.5	17	23	〃	〃	〃		
55	3373	21	21	5	1.6	20	19	曲凸	右	〃		
56	2027	20	23	6	3.0	15	19	直	逆	〃		
57	2001	22	24	6	2.9	25	24	〃	正	〃		
58	934	10	14	4	0.6	10	21	曲凸	左	〃		
59	233	13	15	3	0.8	14	20	直	正	〃		
60	4454	15	13	2	0.6	11	19	曲凸	右	〃		

他の側辺と刃部との交わる部分に二次加工を施すものである。大形のもの(40～51)と小形のもの（52～57)、超小形のもの（58～60）がある。刃部の形状は直線的なものが主体を占めるが、ゆるく張り出すもの（44、49、51、56など）もある。打面を上にして、表面から刃部と打面の関係を見ると、刃部が右側にあるものが12点（37～44など)、左側にあるものが３点（45、46など)、下にあるものが６点（51、56など）である。40～44は、打面をていねいに取り除いているが、他は54を除いて打面を大きく残す。54は比較的縦長の剝片を中位で折断し、その部分は折断のままに、反対側に急斜度の二次加工を施したものである。52は右側辺と刃部との交わる部位に、43は打面部に背面側から二次加工を施している。

(2)　掻　器　（第49図61～64、図版19)

４点ある。61は、打面部は小さいが末端部が大きく厚くなる比較的縦に長い剝片の先端側に刃部を作出したものである。腹面と刃部のなす角度は約90°あり、刃部は表面から見ると孤状を呈する。62は長幅指数100前後で、厚みのある中形の剝片の先端部に緩く孤を描くような刃部を作出したものである。刃の角度は70～80°。63、64は厚手の中形剝片の一部に腹面側からごく小さな刃部を形成したものである。刀の角度はそれぞれ80～90°ある。石材は64がチャートで他は

頁岩である。63は第49図53の台形様石器と接合する。

(3)　ハンマー・ストーン　（第50図70、図版20）

砂岩製の扁平な円礫を敲石として用いている。現存する大きさは長さ約７cm、幅約５cm、厚さ約1.8cmの掌中にすっぽり入る大きさで、平面形は小判形を呈する。上辺部と下辺部に使用による傷跡が明瞭に残り、それ以外の面は全てよく磨かれて、ツルツルしている。

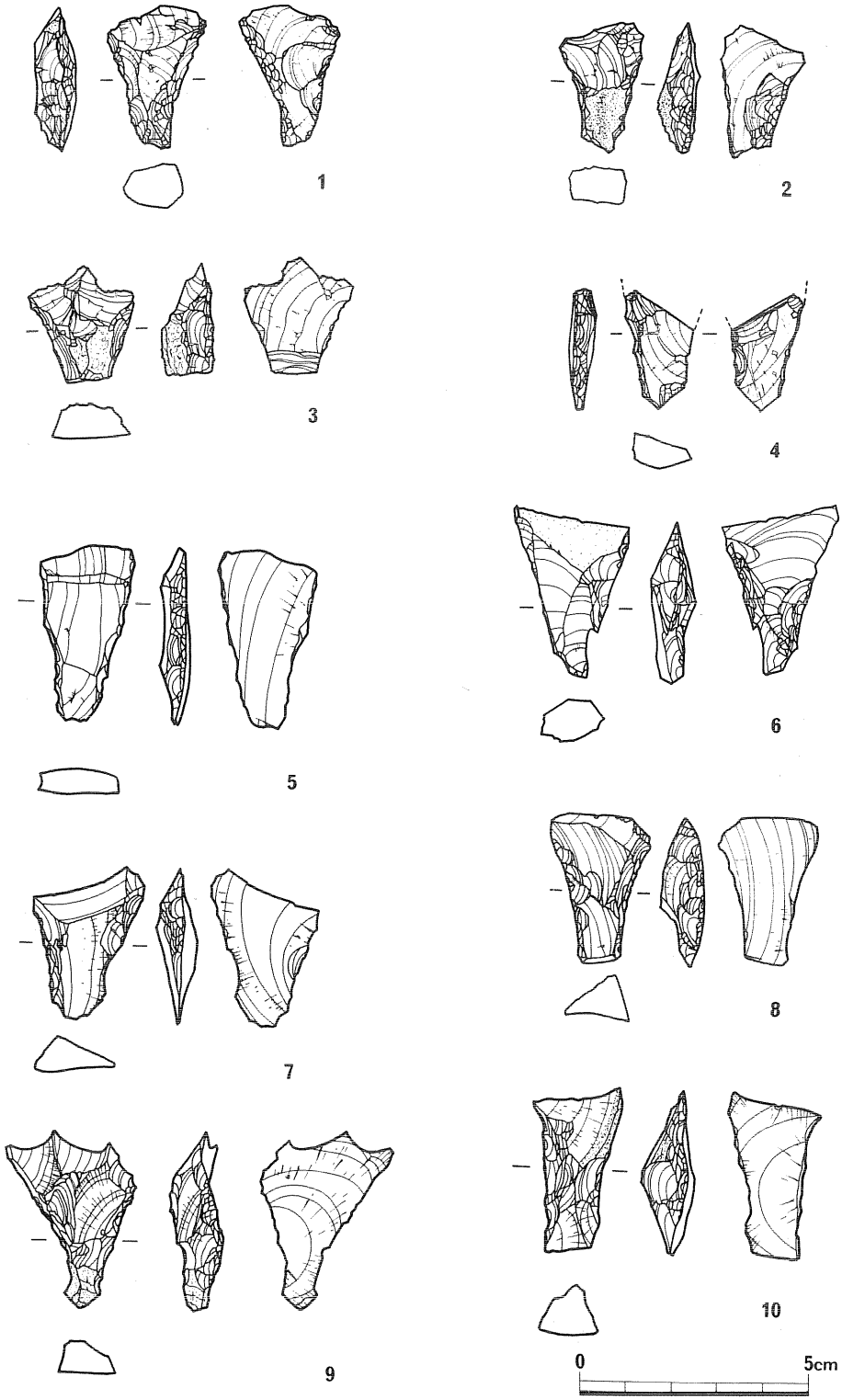
(4)　その他の石器　（第50図65～69、図版20）

65は大形の剝片の一側辺からその反対側の一部に細かい二次加工を施した石器である。削器とも考えられるが、先端が尖っており、ドリルかもしれない。68は中形の剝片の尖った部分に両側から細かい二次加工を施したドリルと思われる。66は細長くて厚みのある剝片の腹面はそのままにし、両側辺から急斜度の二次加工を施した石器である。先端部の右側はヒンジフラクチャーで終わっているし、左側も急な角度を持っている。断面形は台形を呈し、あるいは尖頭器様の石器かとも思われるが判然としない。67も66とほぼ同様の石器と思われるが、上・下端が欠損している。69は二等辺三角形を呈する剝片の一端に細かい二次加工を施したもので、あるいはナイフ形石器の１つとして見るべきものなのかもしれない。これらの石材はいずれも頁岩である。

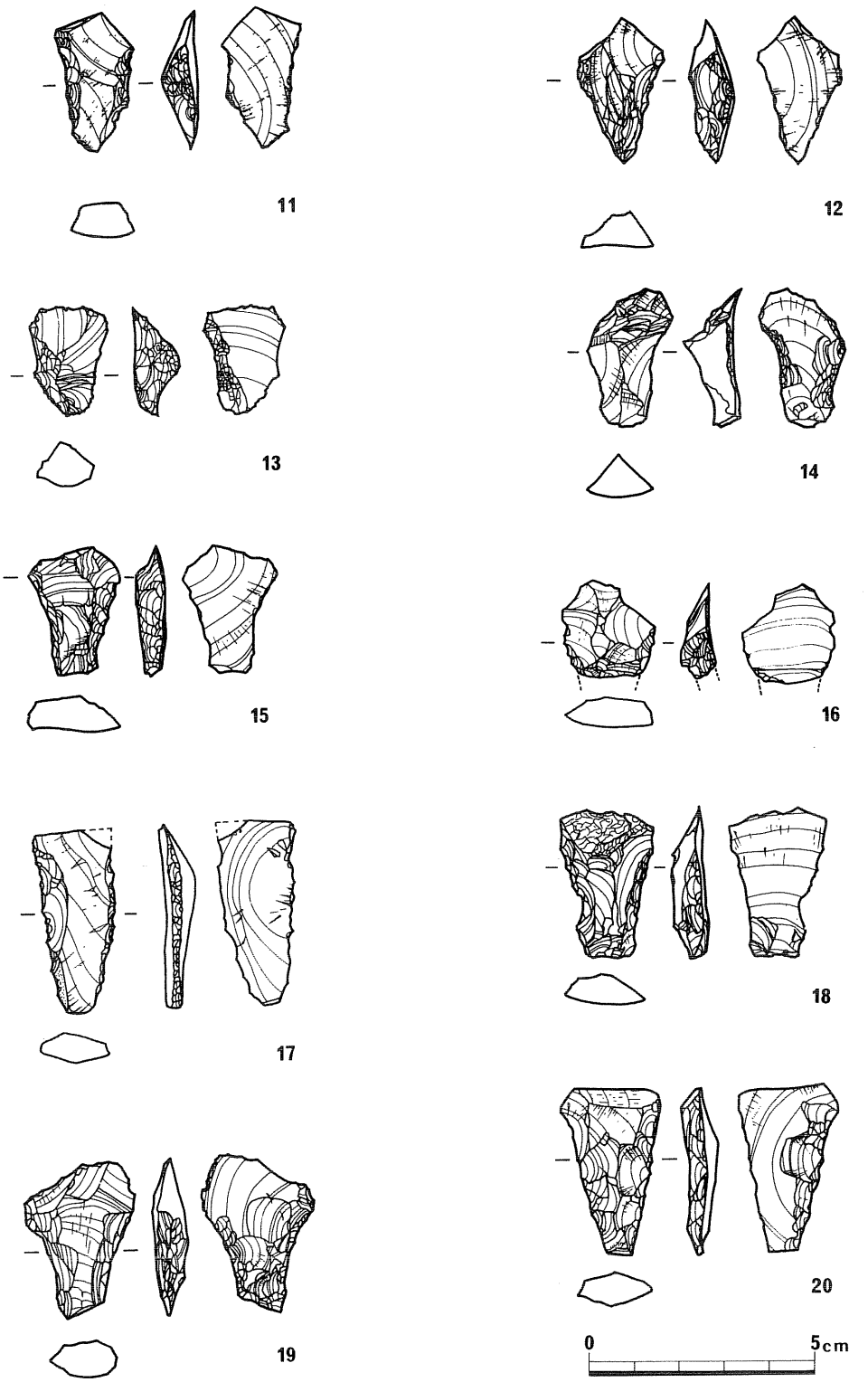
(5)　旧石器集中地点以外の石器　（第51図77～73、図版20）

旧石器集中地点の南東側、80～150mほどの地点の漸移層中から、３点の頁岩製の石器が出土した。71は別々に出土した２点が接合したナイフ形石器である。比較的長い石刃を素材としているが、基部を欠く。正面左側辺の先端側に、長さ３cmに及ぶ急斜度の二次加工が腹面側から施されている。先端部は尖るが、背面中央部には先端側から腹面とは逆の剝離面が入っている。72、73は厚みのある中形～大形石刃の先端側を縦型掻器（エンド・スクレーパー）に、基部側を彫刻刀形石器とした複合石器である。72の彫刻刀面の作出は、左側から１回の加撃で打面を作出し、この打面から左下方向に２回の加撃で行っている。

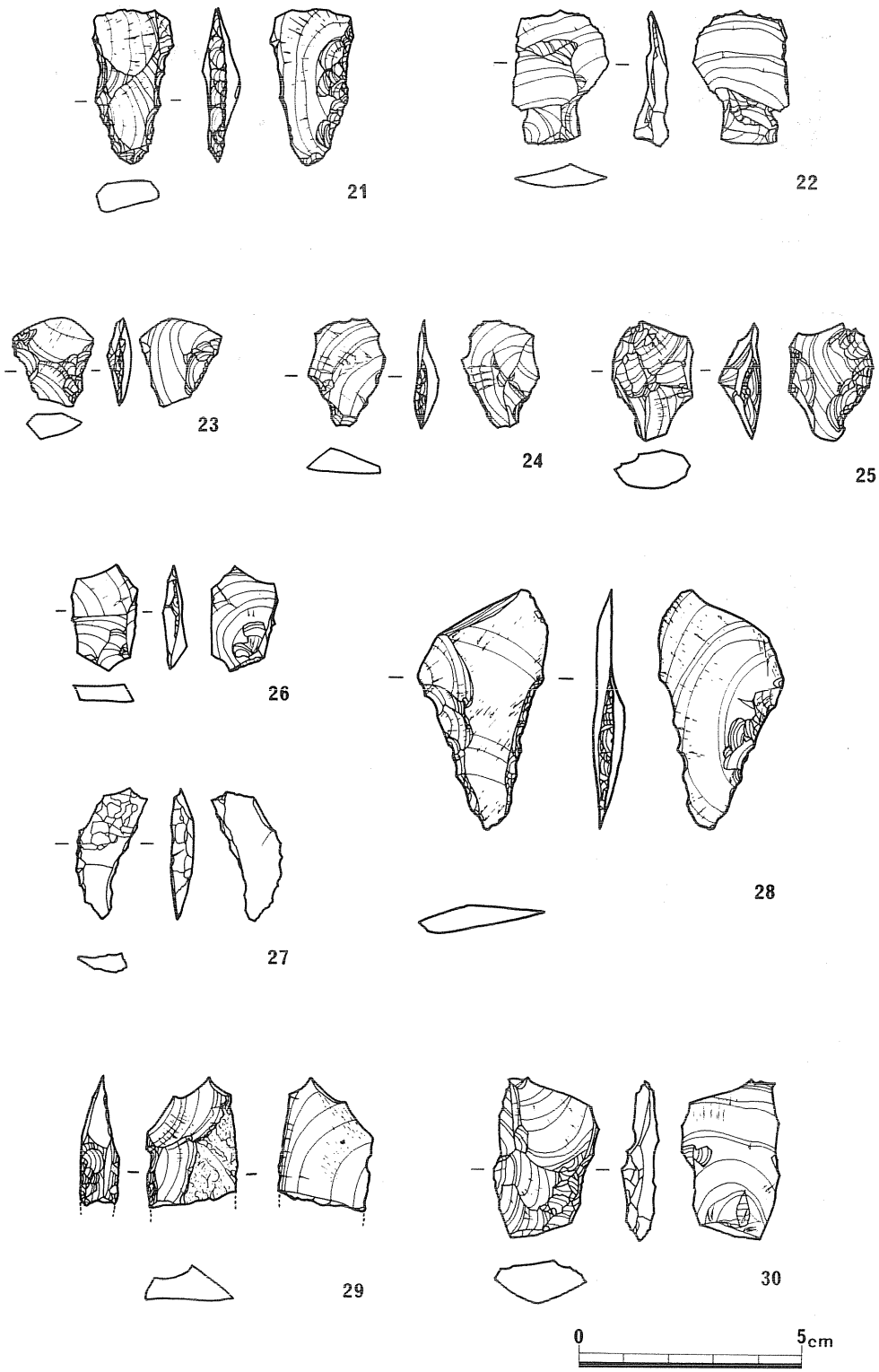
これら３点の石器は旧石器集中地点からは遠く離れて散発的に発見されたものであり、まとまりもない。本遺跡の旧石器集中地点の石器群とは全く異質で、これとは関係のないものと思われる。



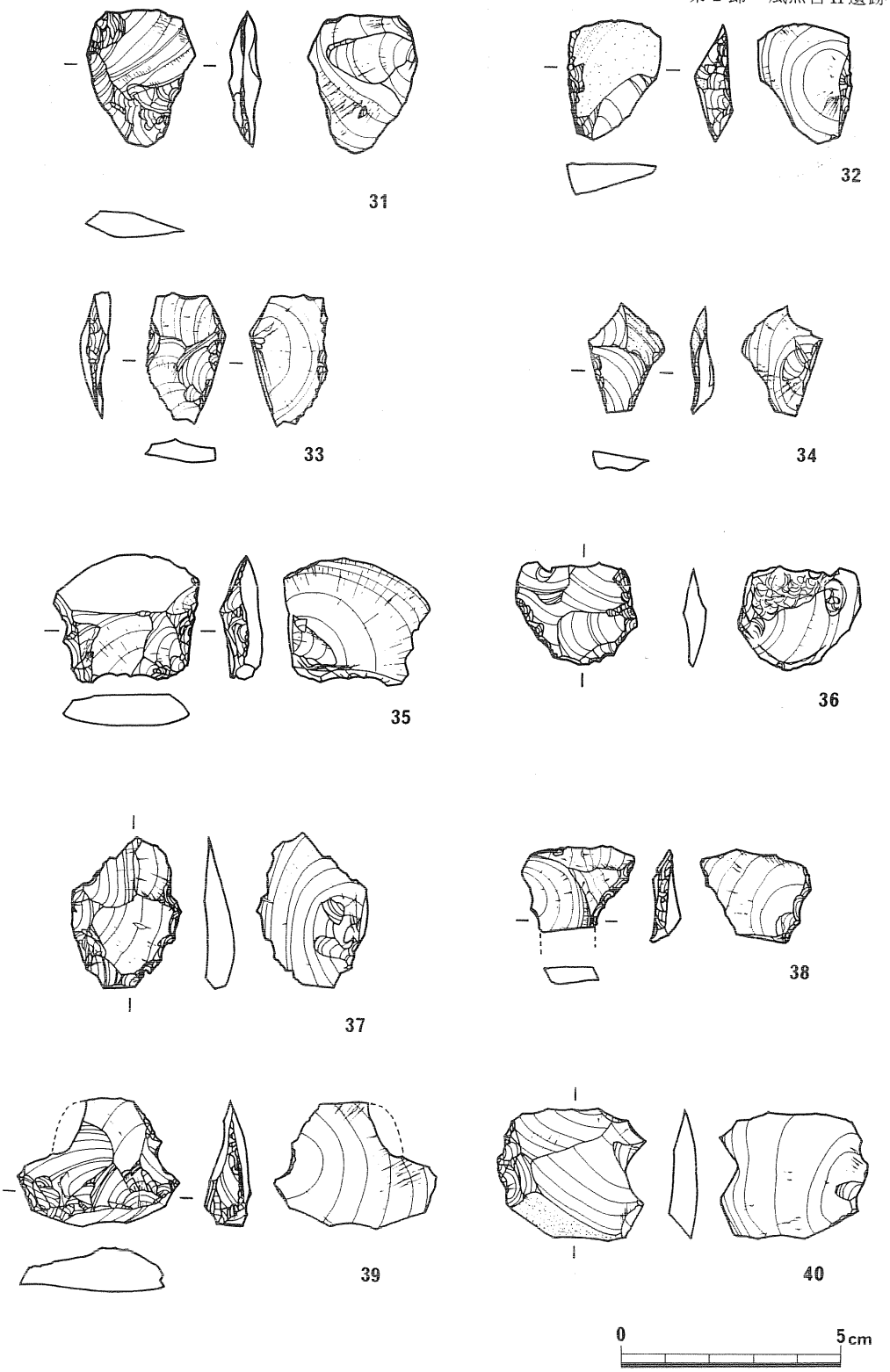
第44図　台形様石器(1)



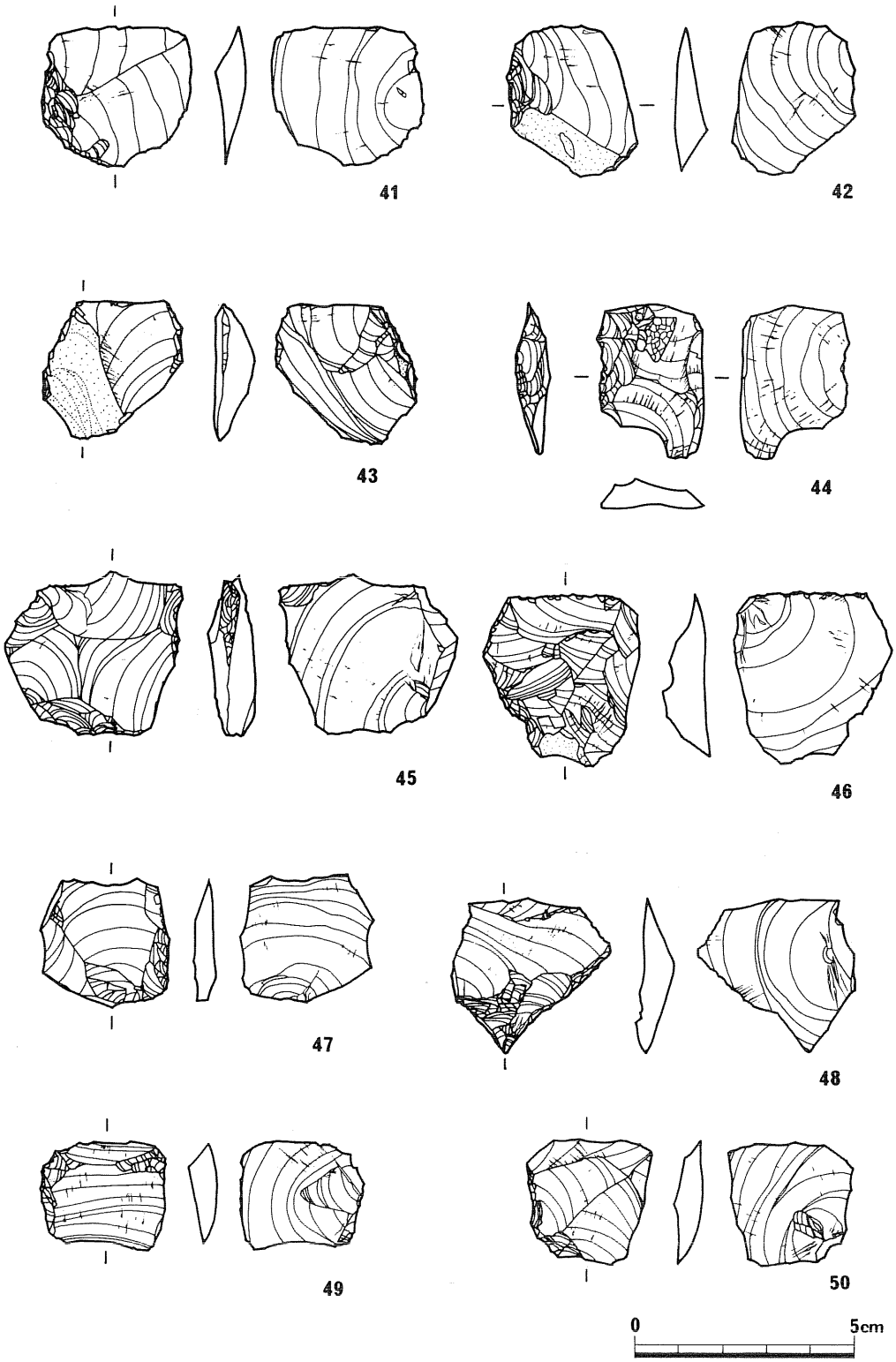
第45図　台形様石器(2)



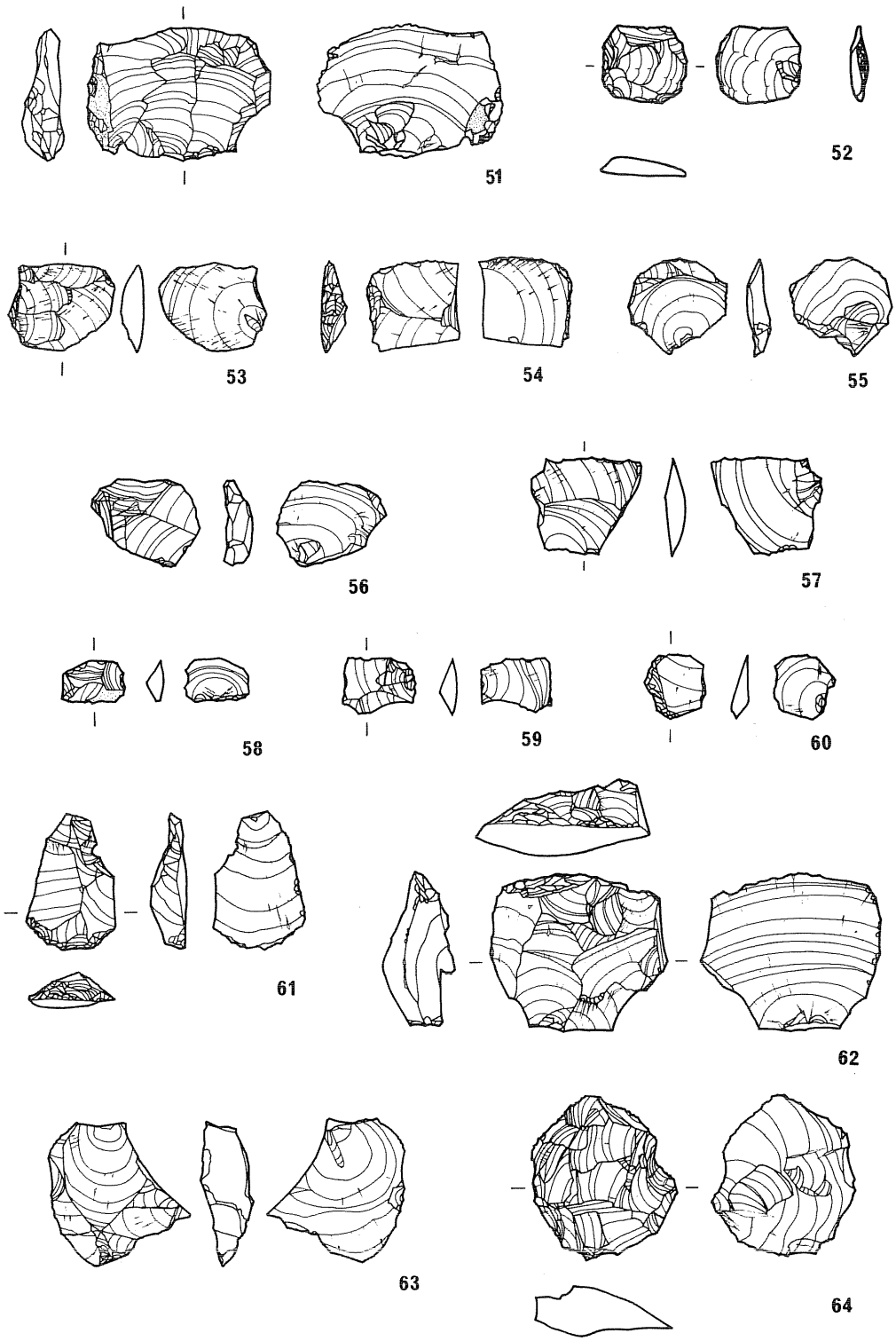
第46図　台形様石器(3)



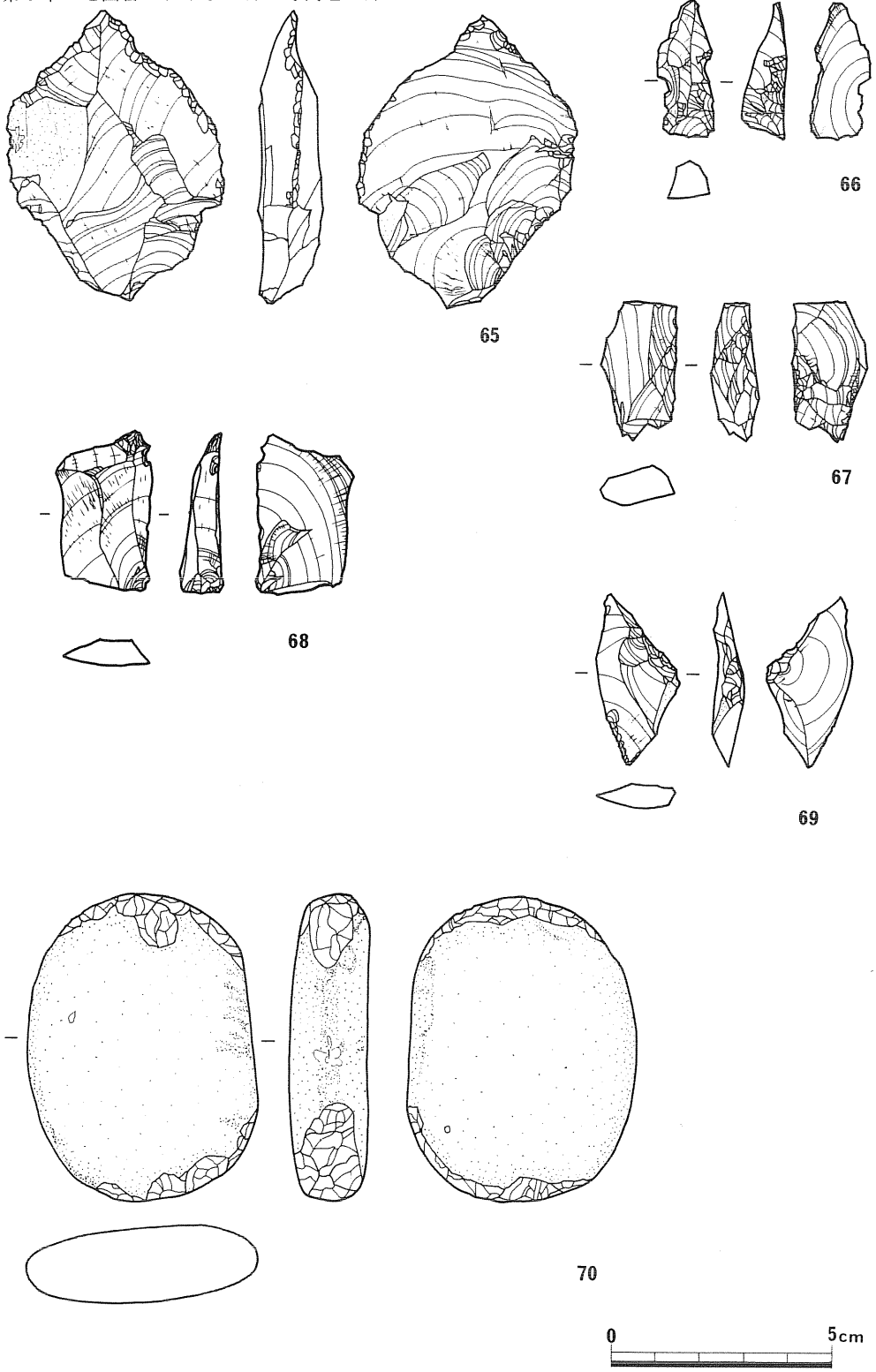
第47図　台形様石器(4)



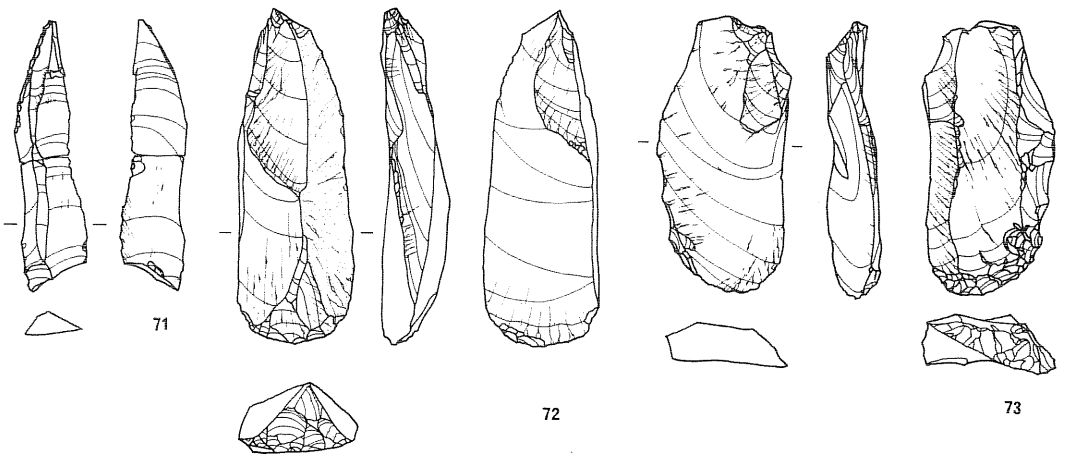
第48図　台形様石器(5)



第49図　台形様石器(6)・掻器



第50図　その他の石器・ハンマーストーン



第51図　ナイフ形石器・掻器

4　剥片剥離の方法とその種類

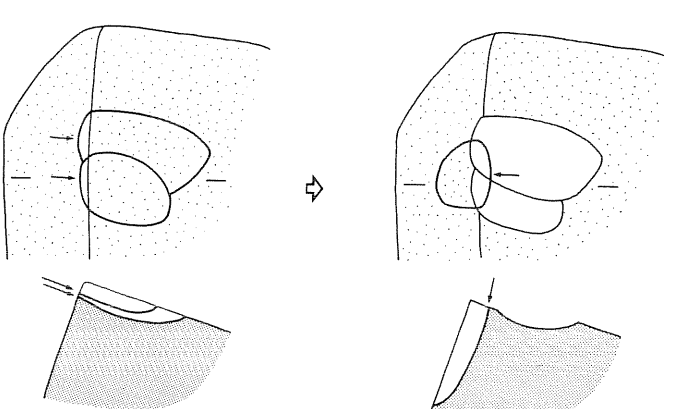
接合作業等の結果、本遺跡内での剥片剥離の方法にはいくつかのバラエティーのあることが判明した。大きくは４種類で細分すると６種類になる。

それを概説する前に、まず剥片剥離作業を２つに分けるとすれば第１段階にあたる母岩の分割であるが、原石が大きい場合には、特に打面を用意せず自然面から分割するようである。小さい原石であれば基本的に分割はしない。また、比較的大きな石核から剥片剥離を開始しても、途中で必要に応じて分割したり、得られた剥片が厚みのある大きなものだったりした場合には、それを石核として新たに剥片剥離を始めるようである。

以上のようにして得られた石核からの剥片剥離の方法を第２段階として分類すると、以下のようになるが、それらは石核の形によって決まるような側面を持っていると言える。

Ａ類：小さくて一つの面が平坦な石核

平坦な面は自然面であったり、節理面や分割面であったりする。この平坦な面を打面として連続的な剥片剥離を行う。打面の反対側は小さくな



第52図　剥片剥離の方法Ｂ類模式図

り全体の形状として不正四面体を呈するものが多い。母岩㋑、㋓の一部、㋕などに見られる。

Ｂ類：全体の形状が立方体か直方体に近いような石核　（第52図）

ほぼ直角をなす稜線の両側から、新たな直角に近い稜を形成するようにして錯向剥離状に剥離をくり返す(第25図①→②)。全体的には、打面と作業面が稜線に沿って螺線状に回りながら作業が進められ石核の底面に至る。このようにして作業が進められた時、母岩㋔のように作業面が広い場合には、大きさ等の規格性の強い剥片だけを連続して剥離すると、作業面の中央部だけが残って行くので、途中厚みのある大きめの剥片を剥離している。母岩㋔などに見られる。

ｃ類：楕円球か、球に近い石核

Ｃ－１類：

剥片剥離の行われない１つの面を決め、それ以外の面で、基本的には１回毎に打面と作業面を変えながら、石核を転すようにして剥片剥離を行う。母岩㋐の一部、㋑、㋒、㋓、㋔、その他に見られ、最も多い方法である。

第５表　母岩などの剥片剥離の方法一覧

母岩名 接合資料	剥片剥離の方法						図番号
	A	B	C－1	C－2	D－1	D－2	
㋐			○	○		○	62・63
㋑	○		○				64・65
㋒			○		○		66
㋓	○		○				67
㋔		○	○				54～61
㋕			○				68
㋖			○				
㋗			○				67
㋘	○						68
㋙			○				
㋚			○				67
接合資料①	○						68
②			○				68
③			○				68
④			○				68
⑤			○				68
⑥			○				69
⑦			○				69
⑧			○				69
⑨			○				69
⑩			○				69

Ｃ－２類：

打面と作業面との関係はＣ－１類と同じであるが、途中、打面、作業面ともに良好な面があれば、その場所で同じ打面から数回の剥片剥離を行うこともある。母岩㋐の一部などに見られるが、数個の剥片だけが接合したような場合Ａ類との区別がつきにくい。

Ｄ類：舟底状あるいは盤状の石核

Ｄ－１類：

舟底状を呈する石核の場合。甲板にあたる面を打面として、石核の端から剥身をおろす

ような形で剝片剝離が行われる。しかし打点は１つの線上を移動するのではなく、左右に振れながら後退する。底面を持つ剝片が多い。母岩㋒の一部に見られる。

Ｄ－２類：

盤状の石核の場合、基本的にはＤ－１類と同じであるが、打面が広い分だけ打点の移動が大きく得られた剝片も石核の厚みがない分だけ長さの短かいものが多い。母岩㋐の一部に見られる。

以上Ａ類～Ｄ２類までの剝片剝離の方法と、各母岩、接合資料との関係を示したのが第５表である。これによると、比較的多く接合して剝片剝離の状況もわかり易い母岩㋐～㋔は、２～３種類の方法が併用されていることがわかる。他の㋕～㋚の母岩は、少ない接合資料であったり、残核だけであったりするため、１種類しか認められないが、基本的には、大きな母岩の場合、数種類の剝片剝離の方法が用いられていたと考えるのが妥当と思われる。

また、これらの剝片剝離の方法から得られた剝片と特定の器種との結びつきは見られないようである。このことは、母岩㋐、㋔などにおいて、１つの母岩からいくつもの器種が得られていることからも明らかである。そして、１つの方法から得られた複数の剝片であっても、それらは、形、大きさとも一定せず、剝片の属性と剝片剝離の方法との間には特に関連性を見い出すことはできない。

なお、残核を見ると、極く一部の不明瞭なものを除いて、全ての残核の一部には最初から最後まで剝片剝離作業の及ばなかった面が必ず存在する。このことは、Ｂ類のような場合であっても、剝片剝離作業を進める場合の石核の据え方（置き方）がある程度定まっていたことを示すものであろう。

5　母岩別資料

接合作業の結果、本遺跡においても多くの母岩が存在し、それぞれ剝片剝離作業の行われていることがわかった。しかしながら、非常に特色のある石材（チャートなど）であったり、他とは明瞭に区別できる頁岩であったりする場合には、母岩毎にまとめることも簡単であったが、原材の中心部で似ているようなものについては区別のつきかねる場合もあり、結局それについては個々にまとめることができなかった。このようにして分類できた母岩の数は11個(㋐～㋚)であり、この他に、明確に区別はできないものの、本遺跡内で剝片剝離作業の行われていたものは３～４個（㋟、㋠、㋡、㋢）ある。さらにこれに剝片あるいは完成された石器として持ち込まれたもの（㋣、㋤、㋥）も、区別すると、母岩の総数は16～17個であったと推定できる。

母岩㋔　（第53～61図、図版21）

合計120個の剥片、石器、石核等を確認し、このうちの約80個が接合した。第54図74がその最終接合図である。これによると母岩㋐は縦12cm以上、横12.5cm以上、高さ約７cmの直方体に近い形を呈していたものと思われる。それが最初かあるいは剥片剥離作業の早い段階で３つに分割され（第54図74―ａの矢印）それぞれ石核Ａ、石核Ｂ、石核Ｃとなったものである。

石核Ａは剥片剥離の方法分類のＢ類で、第54図74―ａの左上あたりから剥片剥離作業が始められ、反時計回りにそれが進められたものと思われる。同図75、76がその経過の一部を表している。74―ａの下端中央に１点（第47図39）、75の中央部に２点（第47図36と第48図46）の台形様石器が接合した。

第61図158はこの石核における最終段階の剥片剥離作業の状況を示している。残核を下にして、石核の稜線上を上から（ｂ）と、左（ａ）右（ｃ）から見たものである。159～172は158の段階から得られた剥片である。173は残核で、下辺に自然面、横に節理面を残している。

第55図77～84はこの母岩から得られた石器である。85も基部の両側辺にわずかに二次加工があり、ナイフ形石器のようなものかもしれない。第55図86～第61図173までは、この母岩から剥離された打面を持つ全ての剥片で、157は石核Ｂの、156は石核Ｃの残核である。これらの剥片の長幅分布図及び打角分布図が第52図である。実測図や長幅分布図を見てもわかるとおり、母岩㋐から得られた剥片は長幅指数にして50以下のものから300近くのものまであり、その中でのピークも100前後にややその傾向があるやに思えるが、ほとんどまとまりを持たないと言っても良い。これは打角の分布にもやや似て、105°～125°の間に集中する傾向にあるが、その分布の広がりは85°～140°にまで達する。

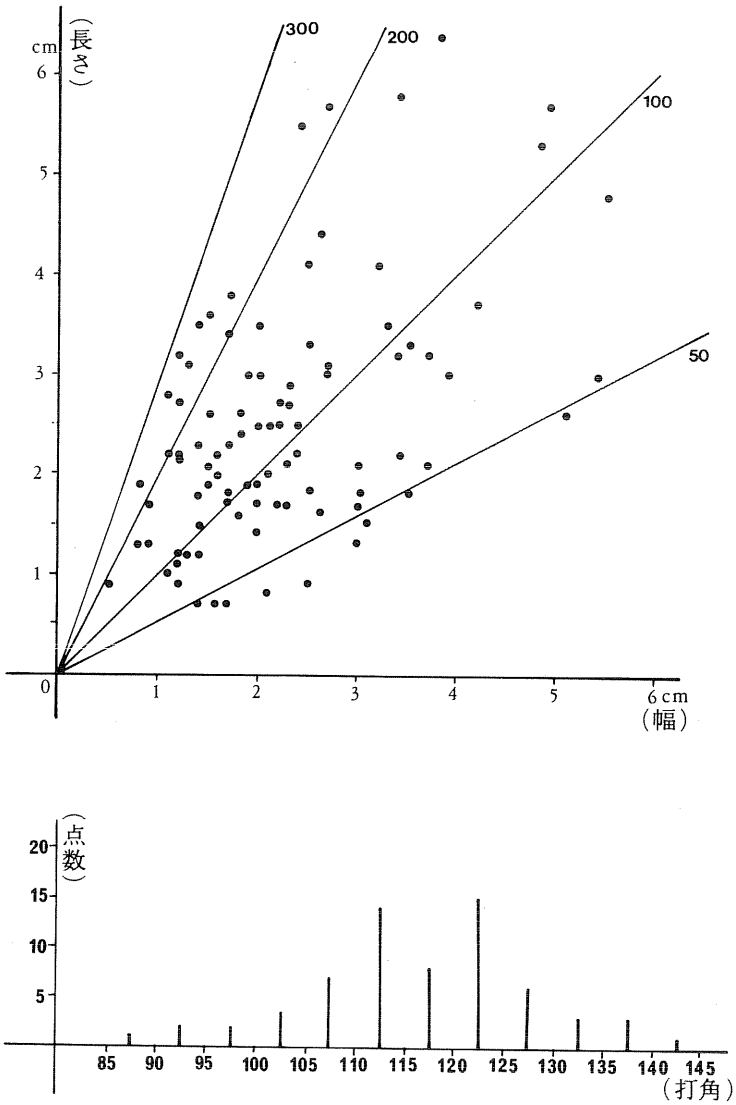
母岩㋐　（第62、63図）

134個の剥片と３点の残核が確認できた。第62図174ａ～ｅはその最終接合図で、ａ～ｄは下にした部分を変えないで順次右側に90°ずつ回転させた図、ｅはａを上から見た図である。石質がチャートで、剥片も小さいことからリングは入れず矢印で剥離方向を示し、右側にその写真を付した（これは次の母岩㋑も同じで、打点のある剥離面は●→、ないものは→、腹面を表す場合は○―→とした。）。174―ａの上半部で左手前から大きく分割されて、上半の剥片は盤状の石核として、剥片剥離の方法の分類のＤ―２類によって剥離作業が行われている。残った大きな塊りは、Ｃ―２類によって剥片が剥離されている。174―ｄの正面に台形様石器が１点（第47図の37）接合している。

第63図175は残核の１つで、176～188はこの母岩から得られた剥片の比較的形の整ったものである。

母岩㋑　（第64、65図）

318点の剝片及び石核等を確認した。石質はチャートである。第64図189－ａ～ｄはその接合資料の一部で、ａ～ｃは下にした部分を変えないで右側に90°ずつ回転させた図で、ｄはｃの下面を見た図である。この接合資料は剝片剝離の方法の分類のＣ－１類で剝離作業を行っている。第65図189は、接合資料の一部で、節理面で分割されている。剝片剝離の方法Ａ類によって剝離された剝片とその残核（189－Ｃの下半部がそれ）が、他の大きな剝片等と接合している。189－Ｃは、小さな石核の打面側（節理面である）から見た図である。190～199は、母岩㋑の中では比較的形の整った剝片類であるが、母岩㋐同様、他の母岩の剝片とくらべ形状の整わないものが多い。



第53図　母岩㋓長幅・打角分布図

母岩㋒　（第66図）

240点の剝片を確認した。第66図200、201はその接合したものの一部である。200－ａの★印の部分と201－ａの★印の部分が接合する。この母岩からの剝片剝離は同方法の分類のＣ－１類とＤ－１類で行われている。Ｃ－１類で行われた部分の残核が、200－ｂの左下半に見える。Ｄ

－１類の状況は同図202－ａ・ｂ・ｃで示してある。ａは打面側、ｂはその側面、ｃは横面の形状の実測図である。Ｄ－１類で行われた剥片剥離作業によって得られた剥片から台形様石器（第44図５）が作られている。

その他の母岩㋓・㋔・㋖・㋕・㋗と接合資料１～10　（第67～69図）

第67図203は母岩㋓の接合したものの一部である。母岩の分割後、大きい方の塊では剥片剥離の方法Ｃ－１類によって、小さい部分では同方法Ａ類によって剥片剥離を行っている。203－ａ・ｂ・ｃの上半分は小さい部分の剥片剥離の状況を表している。平坦な自然面を打面として連続的に剥片剥離作業を行っている。

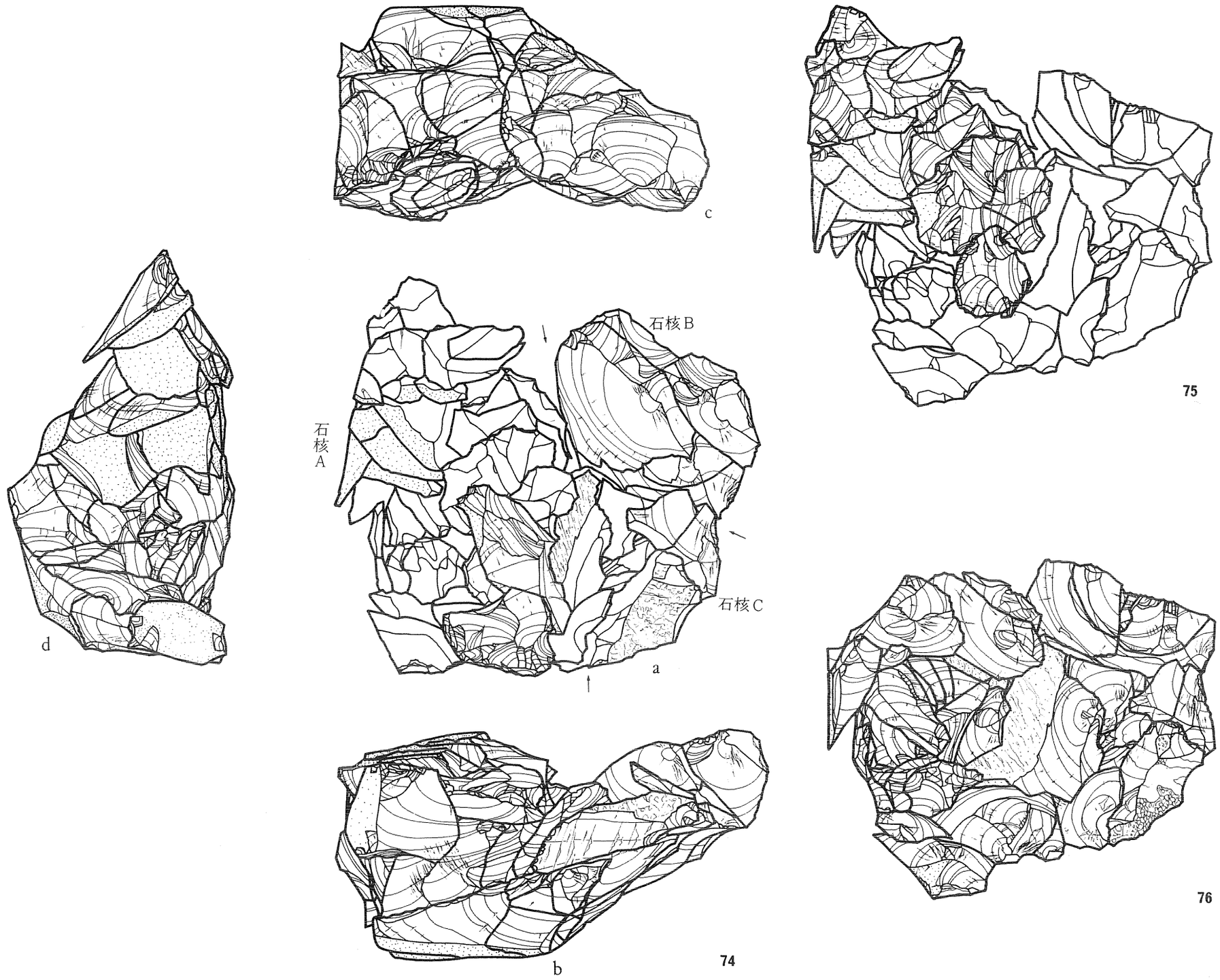
第67図204は母岩㋔の接合したものの一部である。剥片剥離の方法Ｃ－１類によって剥離作業を行っている。

第67図205は母岩㋖の残核に10点の剥片が接合したものである。自然面を残す下面を除いて、あらゆる方向から剥片剥離が行われており、残核は小さな角柱状になっている。剥片剥離の方法Ｃ－１類によっている。

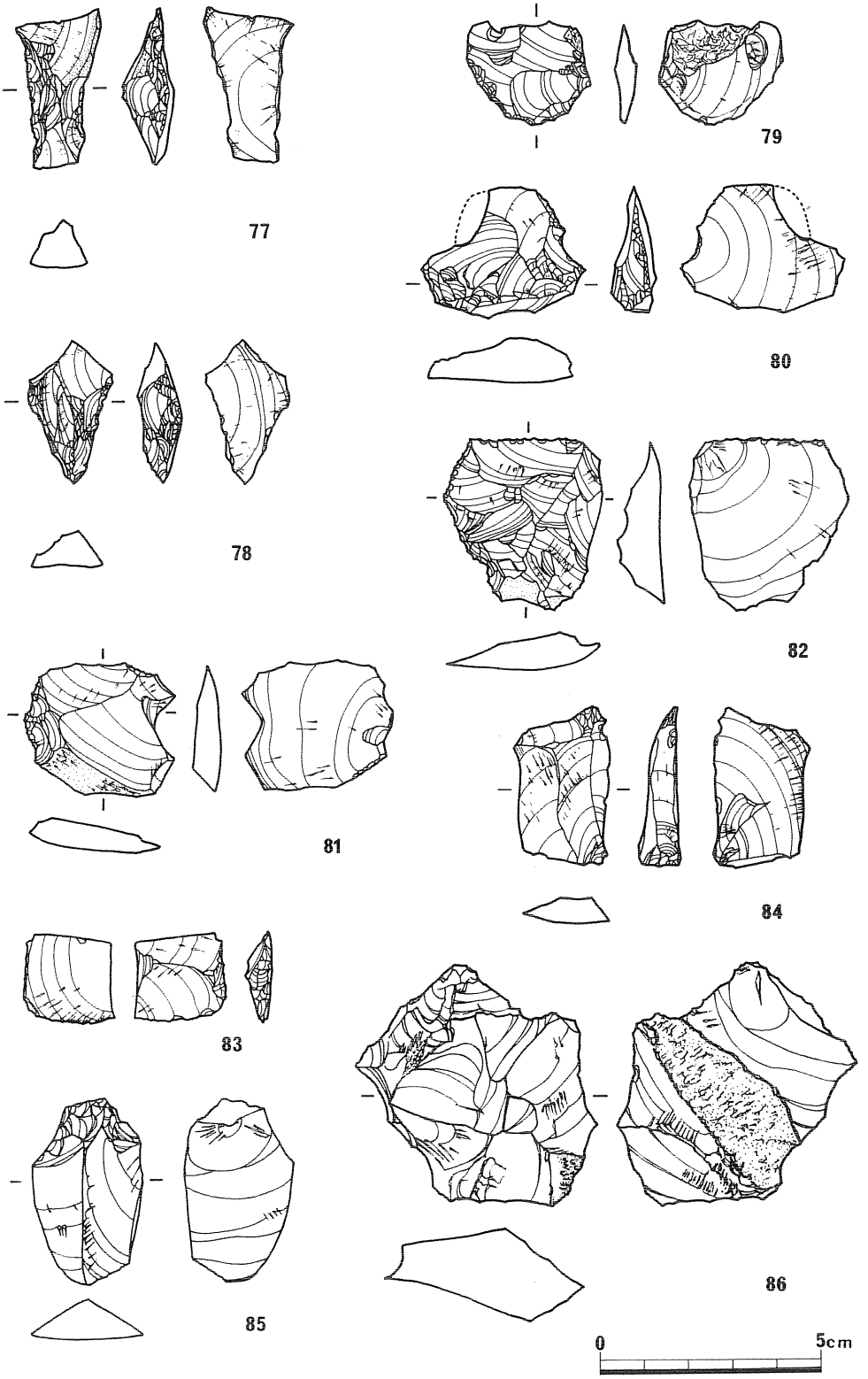
第68図206は、母岩㋕の接合したものの一部である。剥片剥離の方法Ｃ－１類によって大小の剥片が得られている。この母岩は49点の剥片があるが、残核は残存しない。第48図41・42の２点の台形様石器Ⅱ－ｂ類はこの母岩から得られたものである。

第68図208は母岩㋗の接合したものの一部である。非常に小さな母岩で、17点の剥片しか残っていない。平坦な自然面を打面として剥片剥離の方法Ａ類によって小さな剥片を連続的に剥離しており、剥片の最大のものでも高さ2.7cm、幅3.0cm、厚さ0.7cmの大きさしかない。

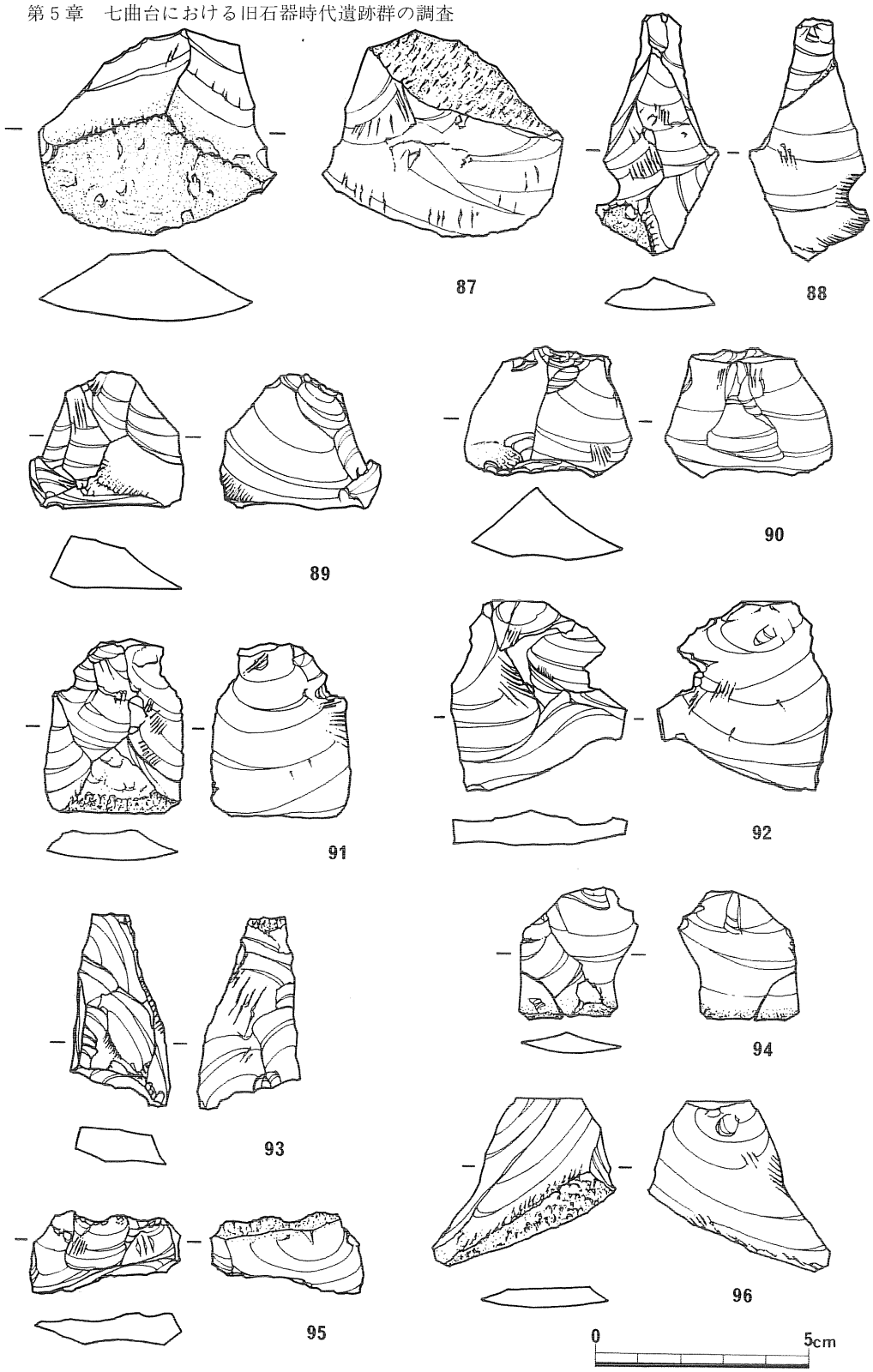
第68図207～第69図217は、剥片同士（209～212・214）、あるいは石核と剥片（213・215～217）の接合したものの図で、これらの接合資料はこれまで母岩㋐～㋔まで分けて来た中には含まれず、他の母岩のものである。209は剥片剥離の方法Ａ類による、210～217は同方法Ｃ－１類による剥離作業を行っている。214は第47図33と第48図45の、215は石核に第49図53と同図63が接合したものである。



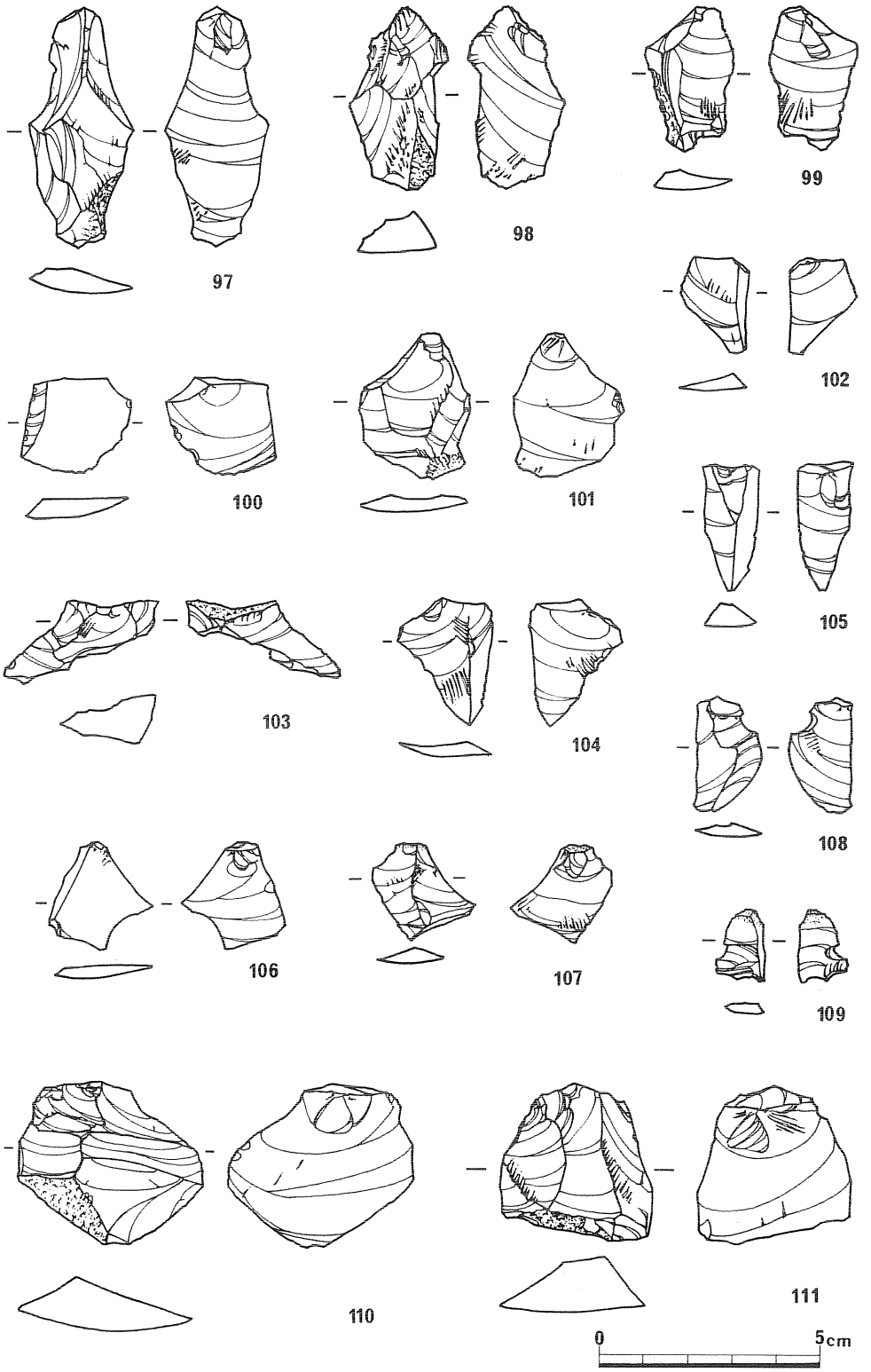
第54図　母岩 ㊂(1)



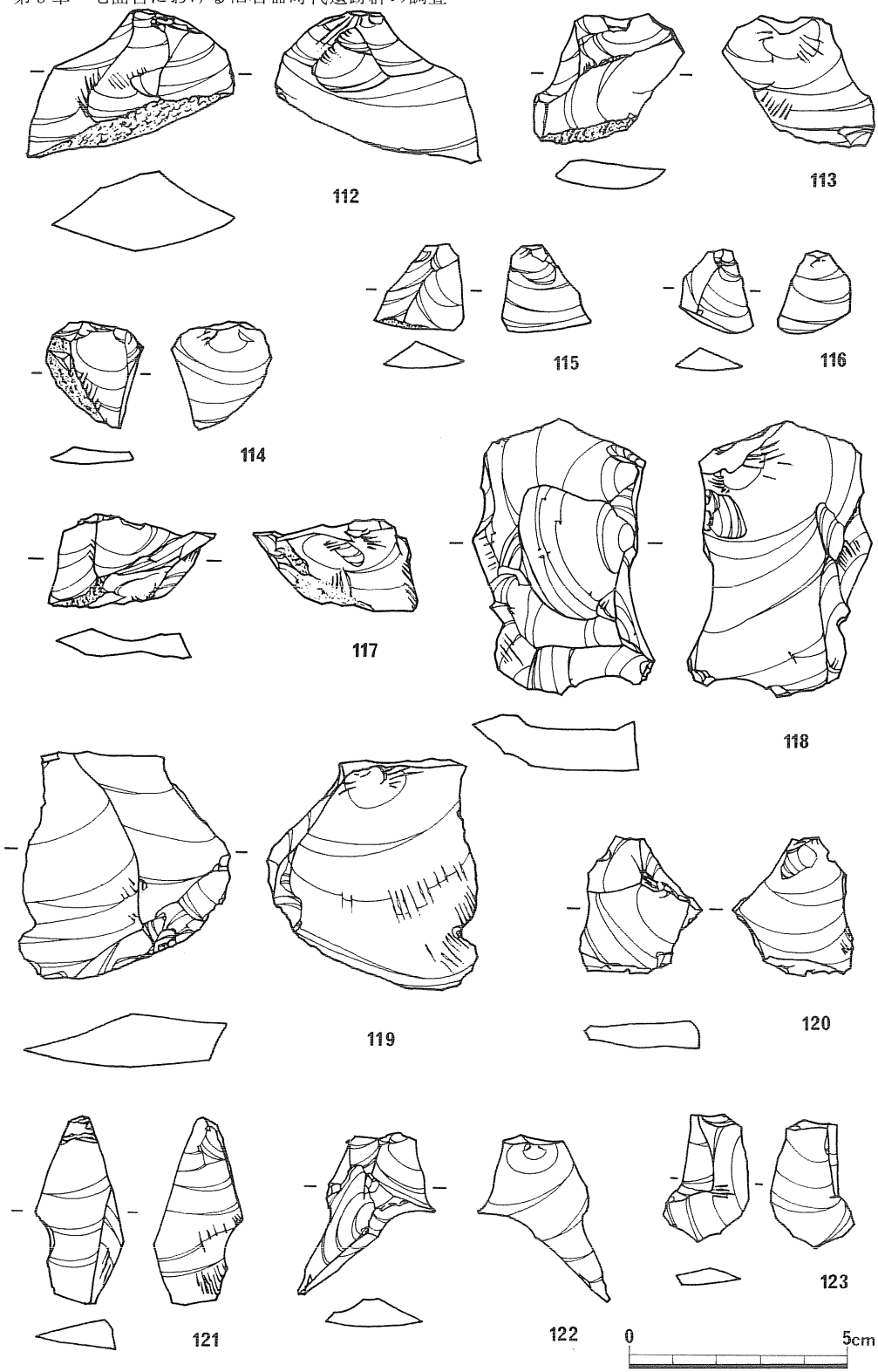
第55図　母岩 ㊨(2)



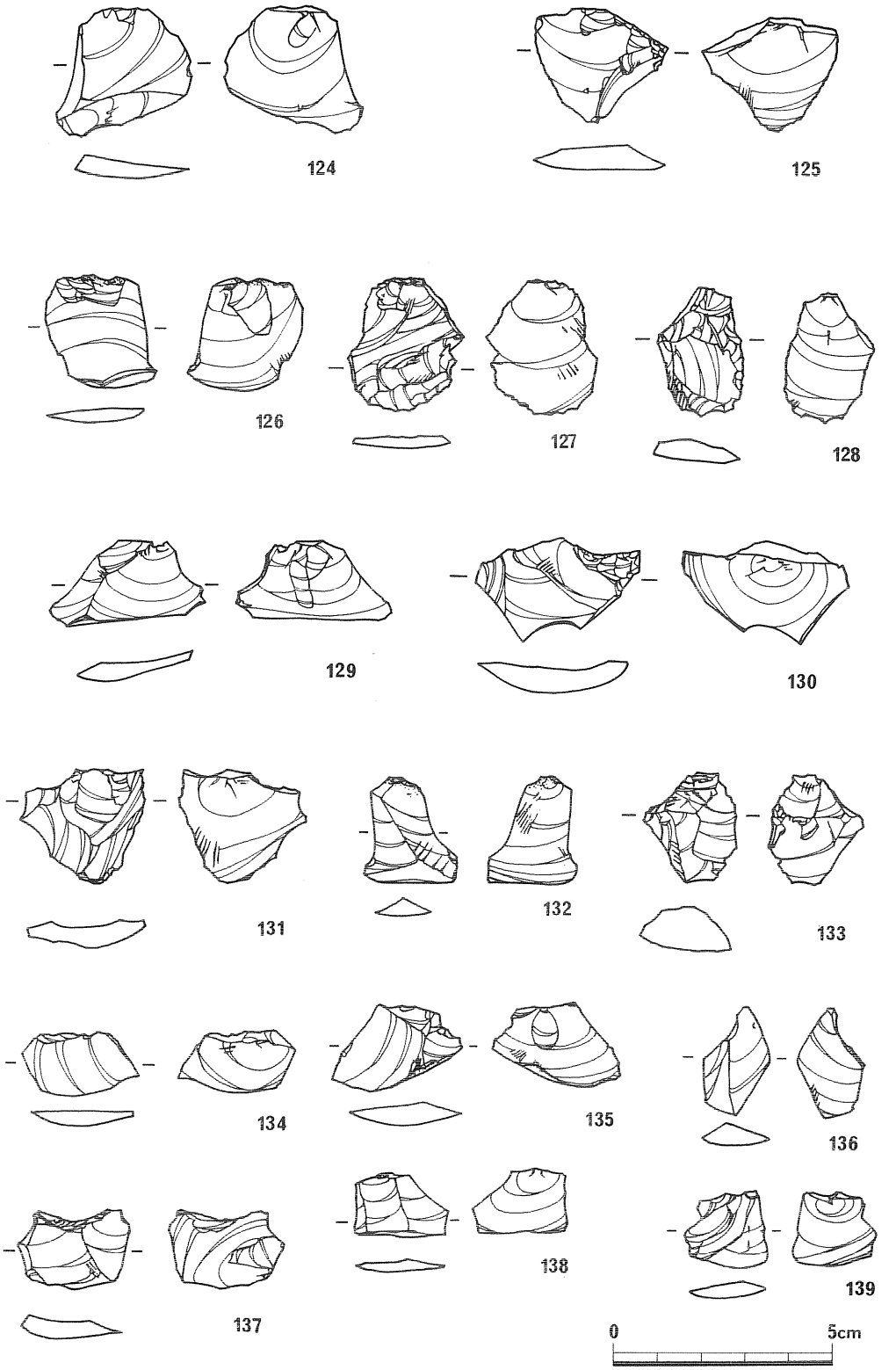
第56図　母岩㋐(3)



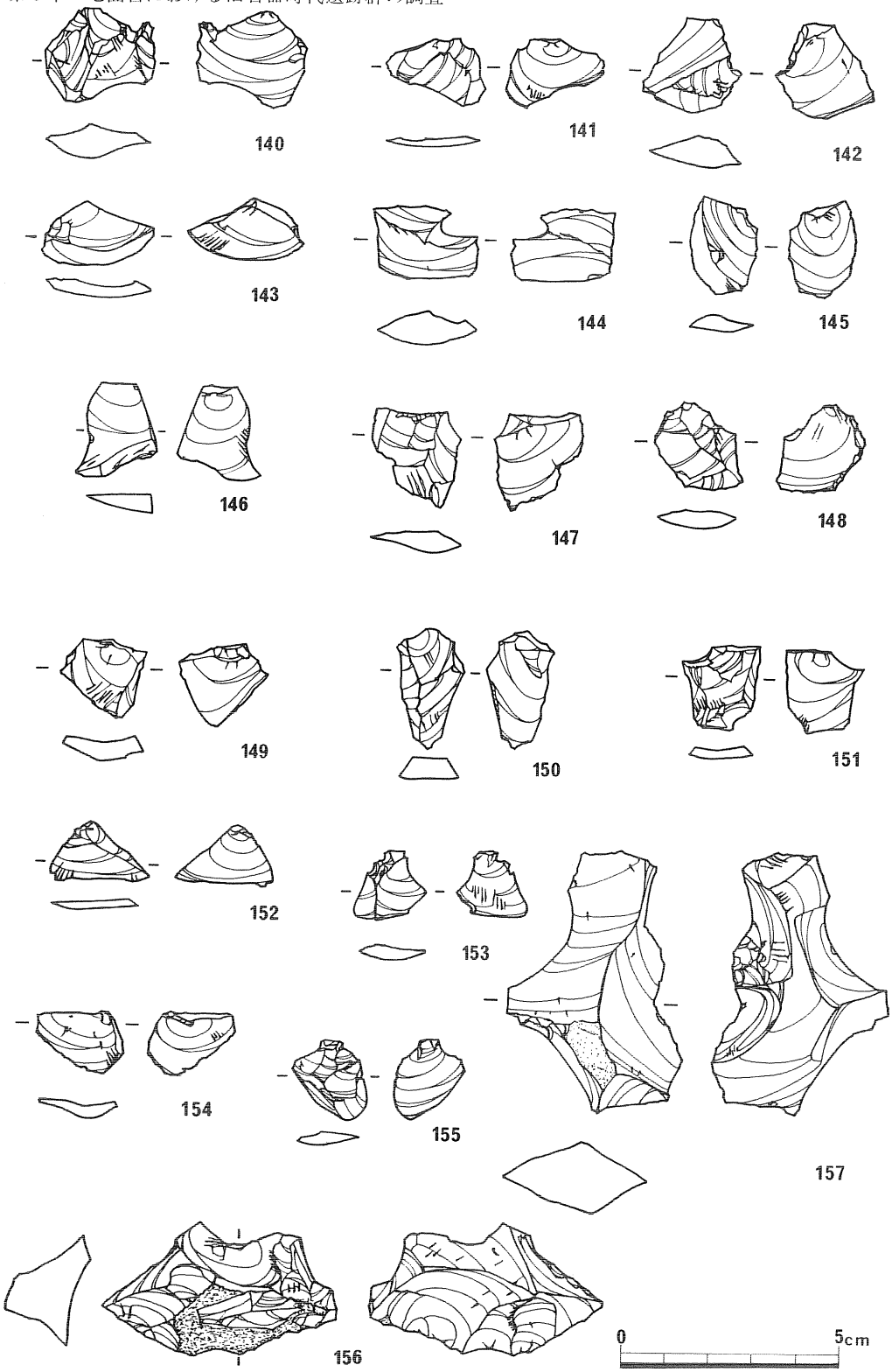
第57図　母岩㋐(4)



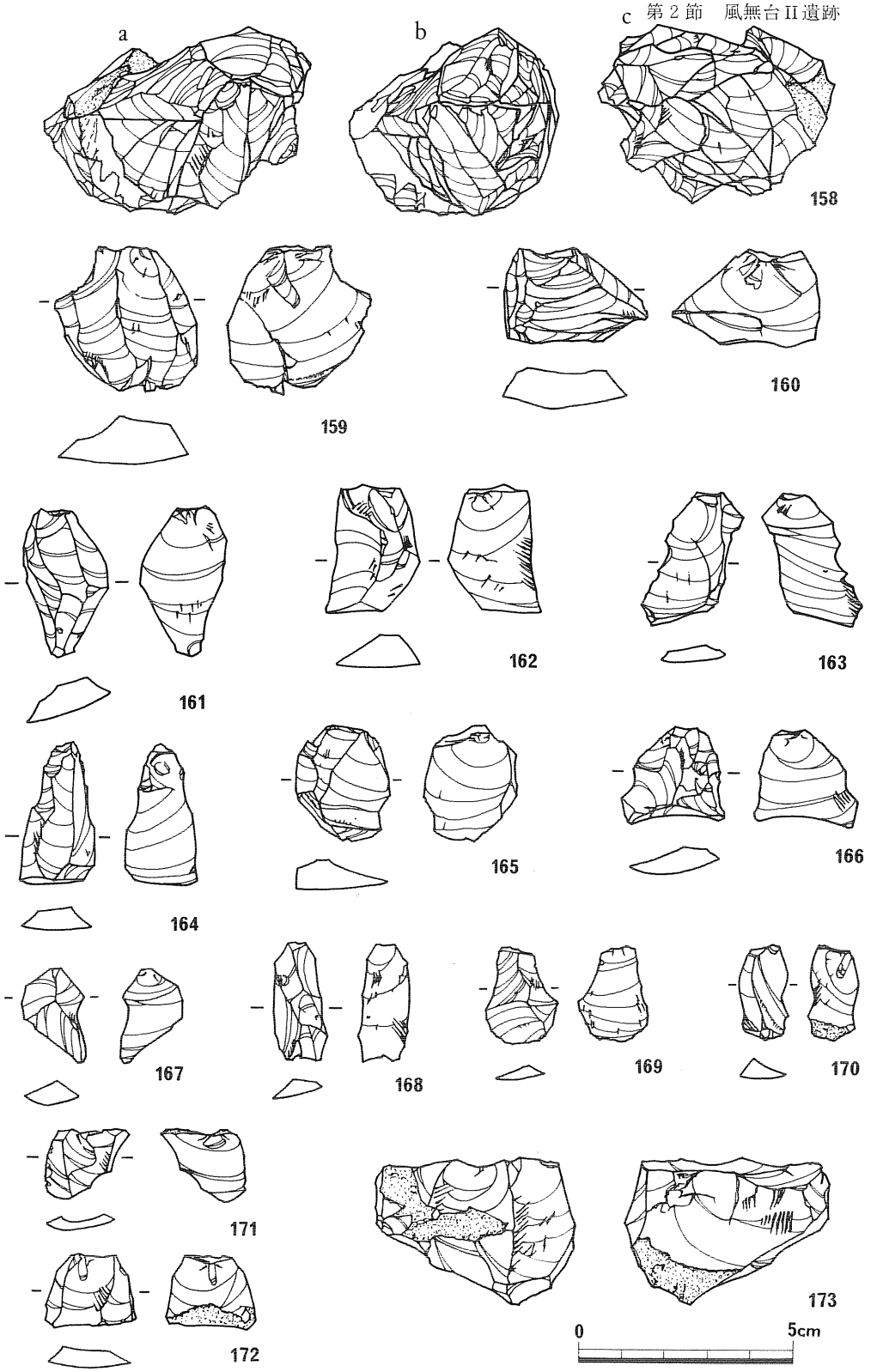
第58図　母岩 ㊧(5)


124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
5cm

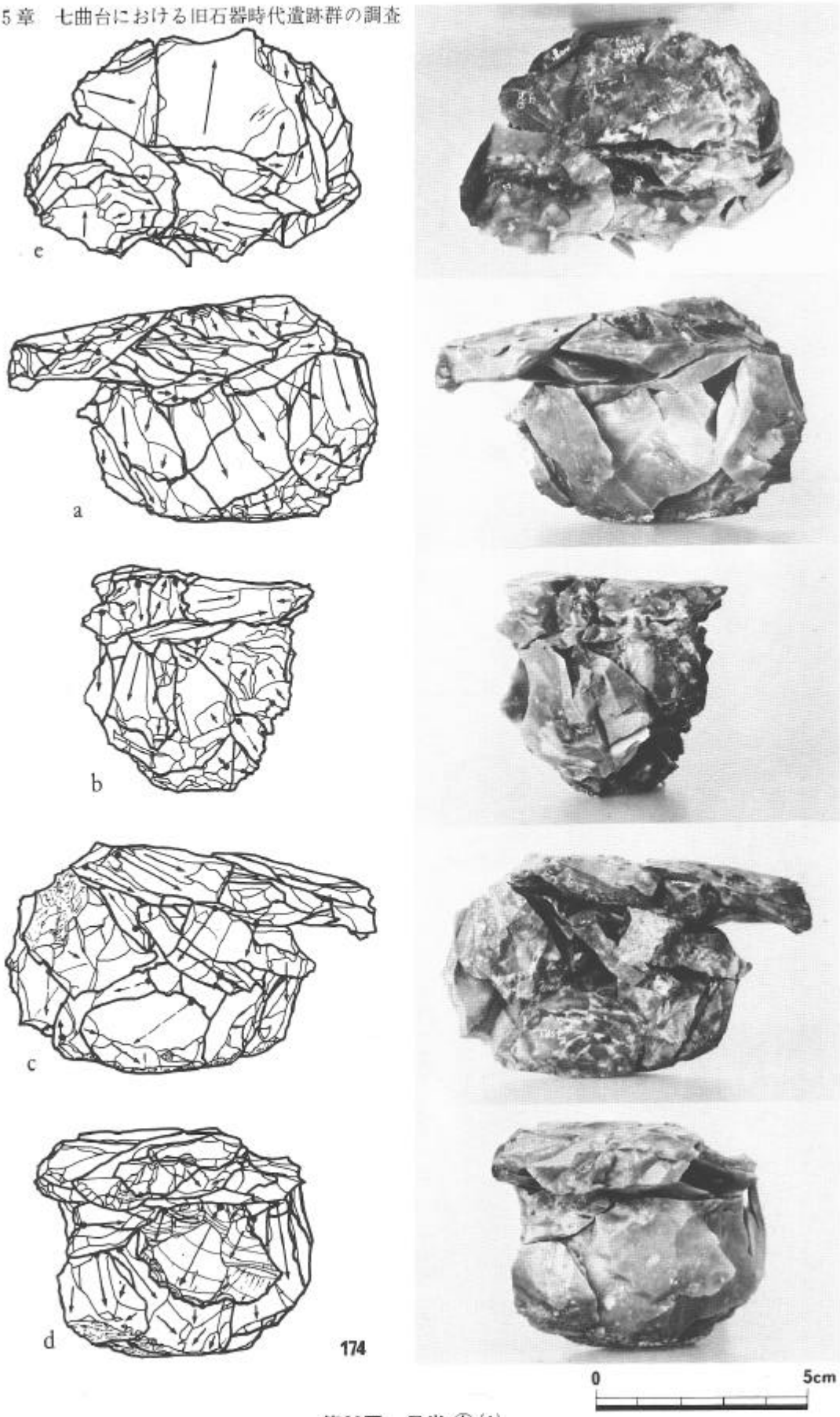
第59図　母岩㋐(6)


140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
0
5cm

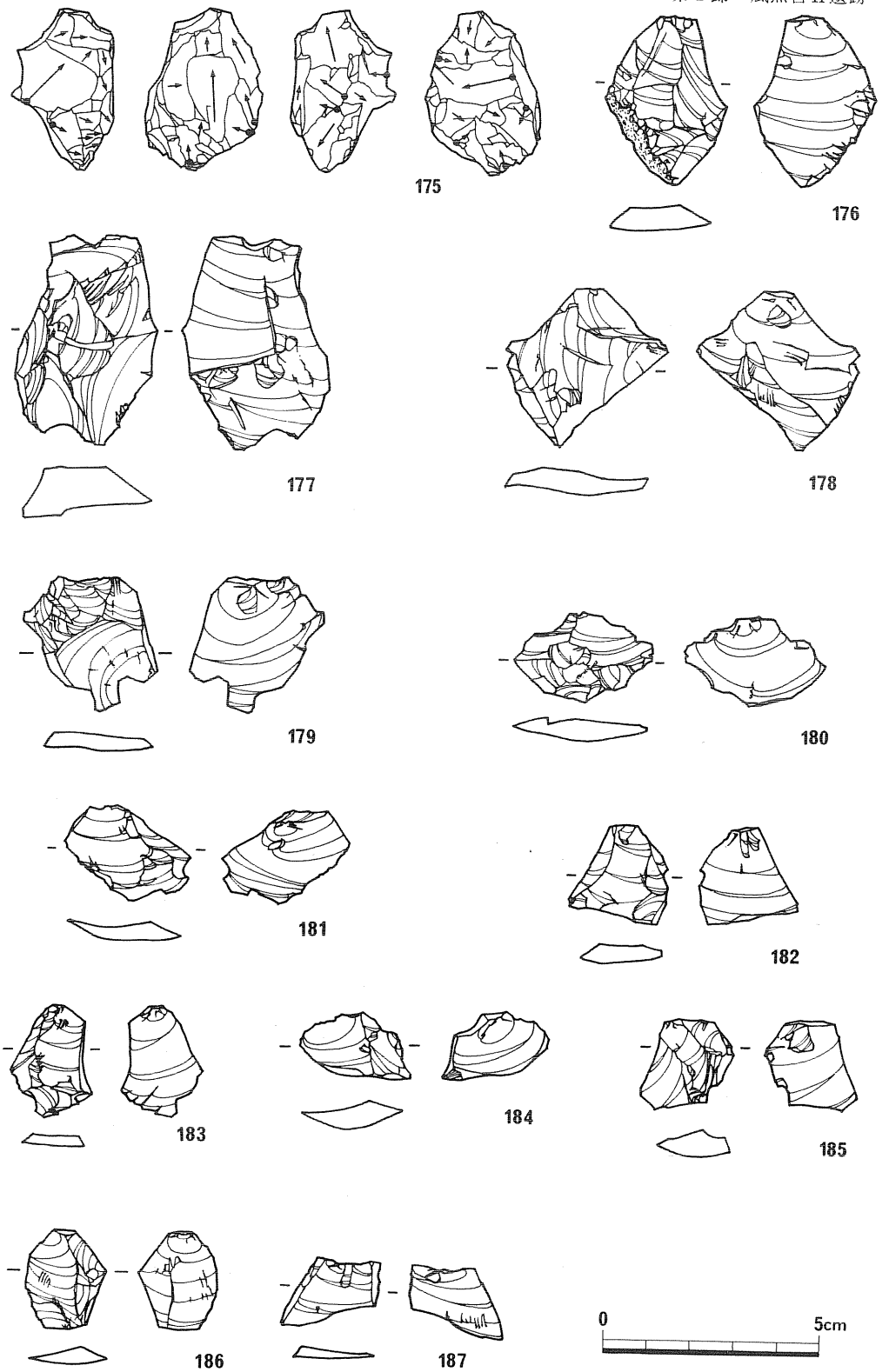
第60図　母岩㊨(7)


a
b
c
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
0
5cm

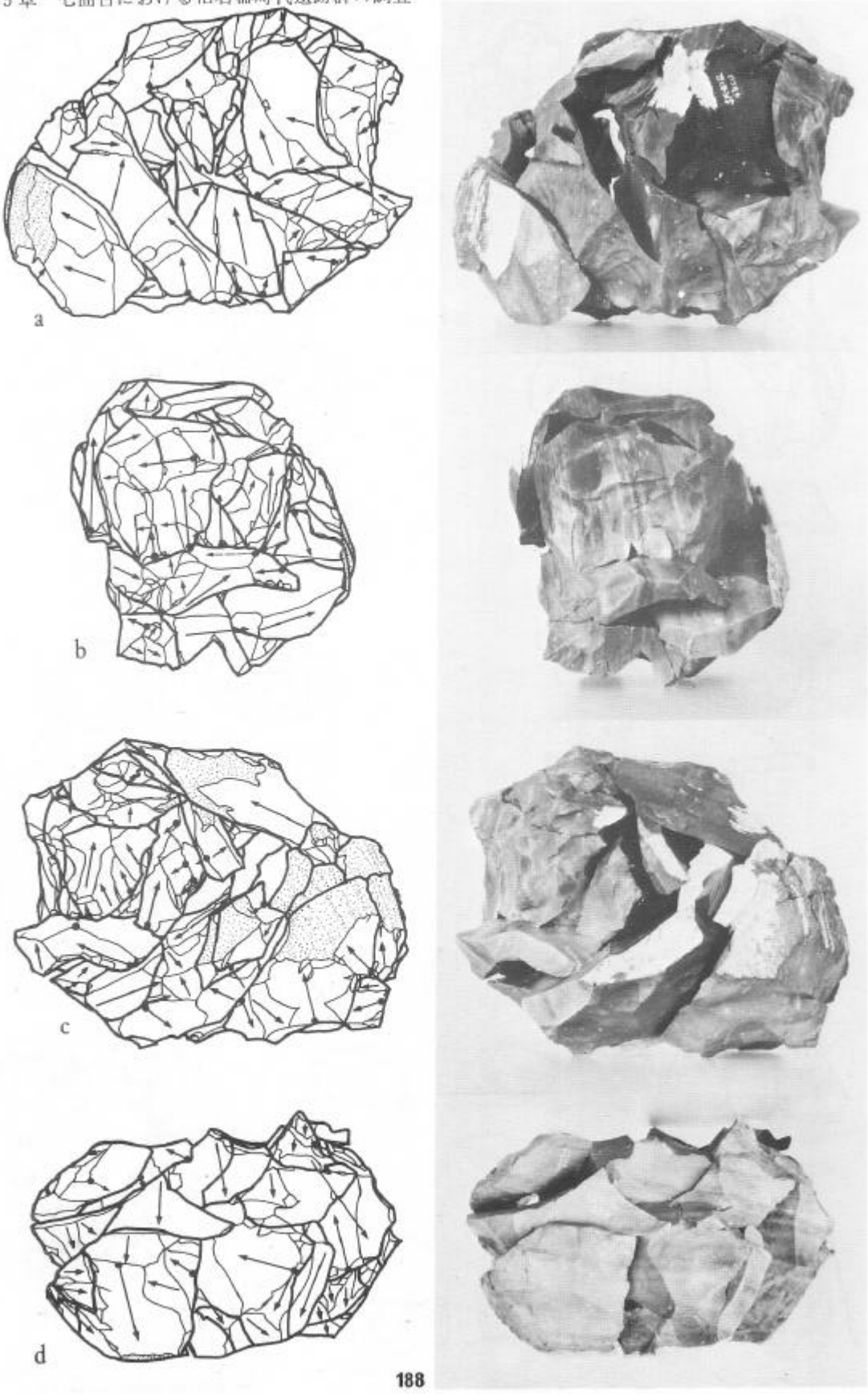
第61図　母岩㋐(8)



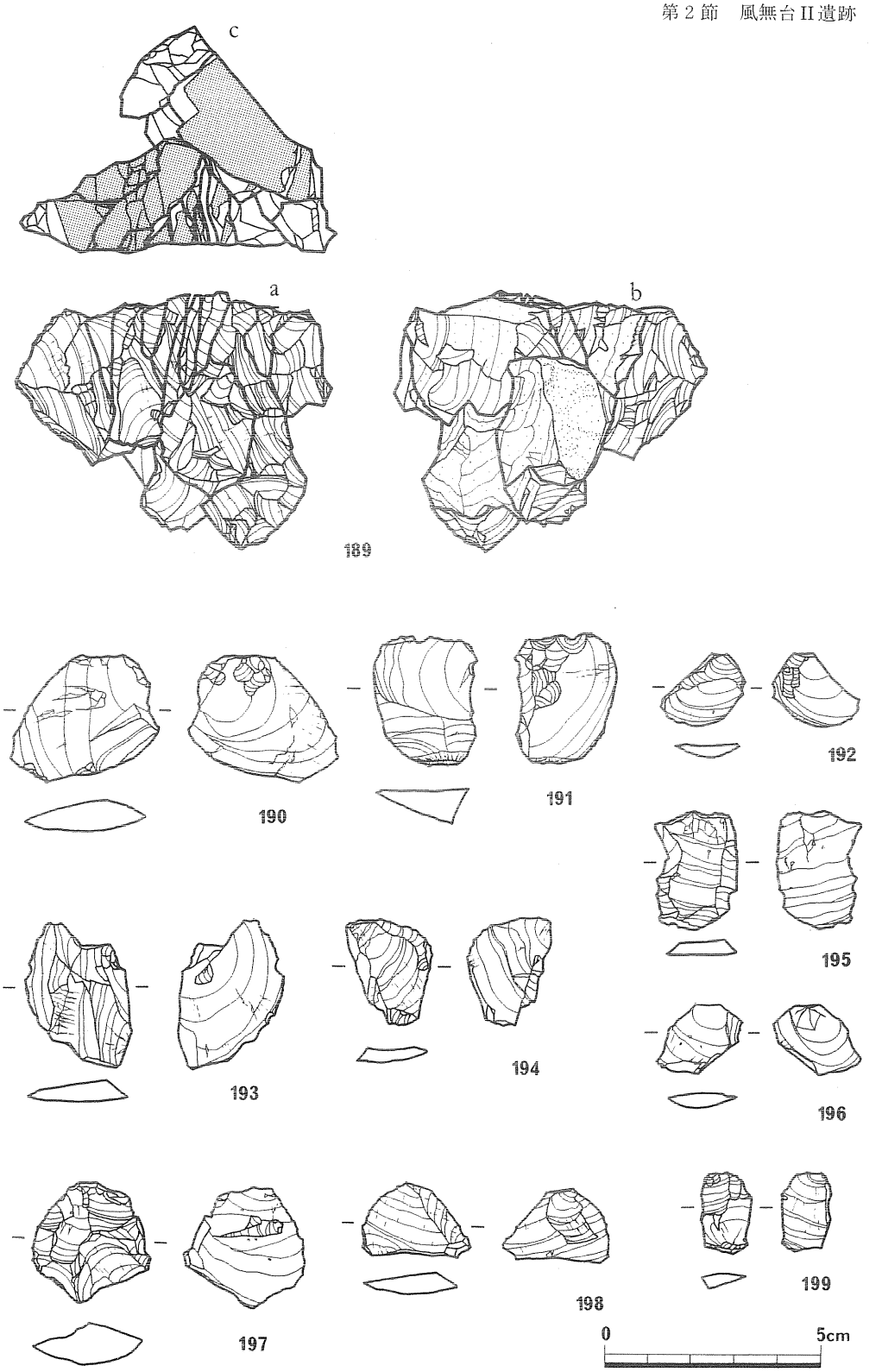
第62図　母岩あ(1)



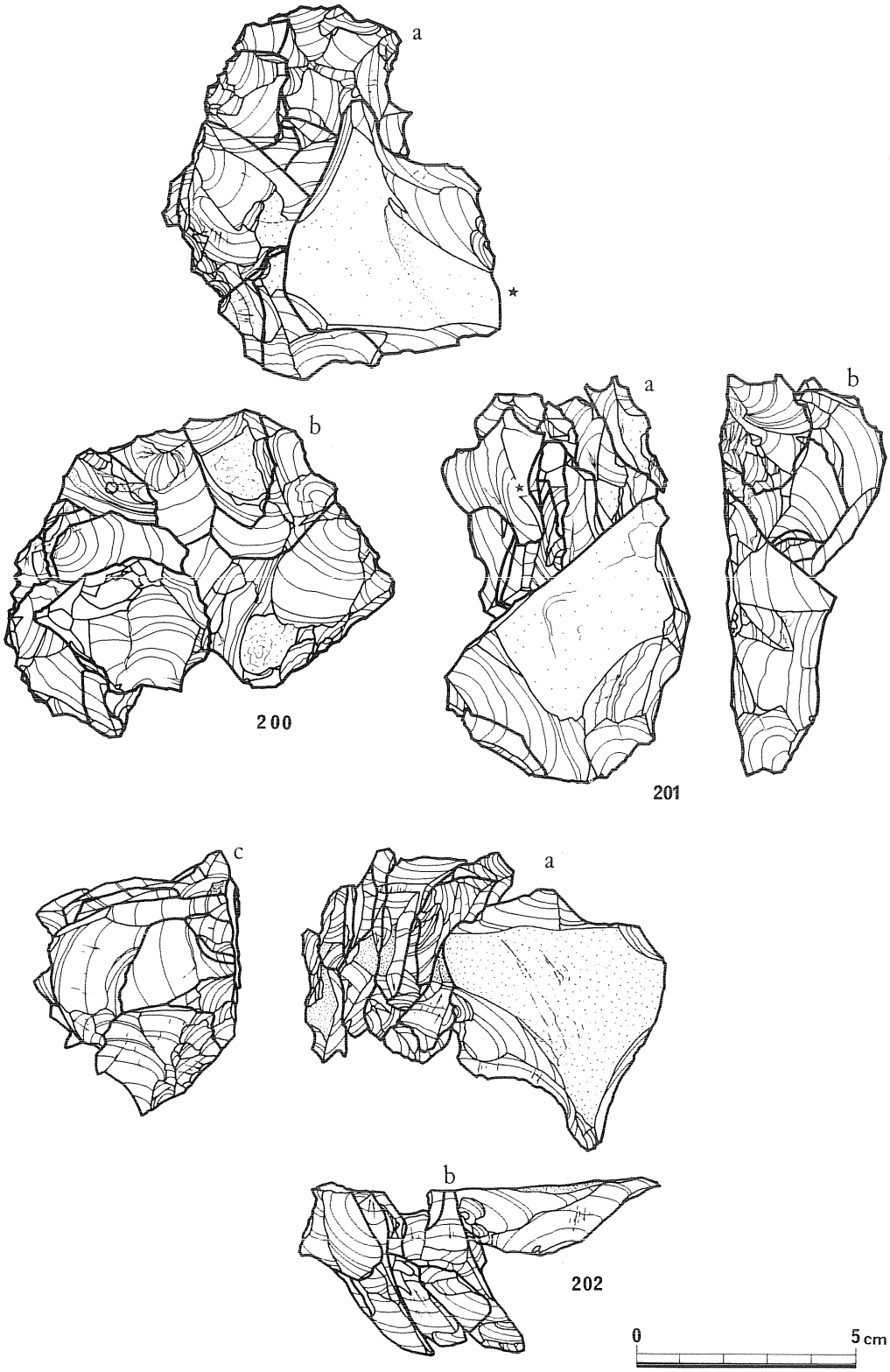
第63図　母岩㋐(2)



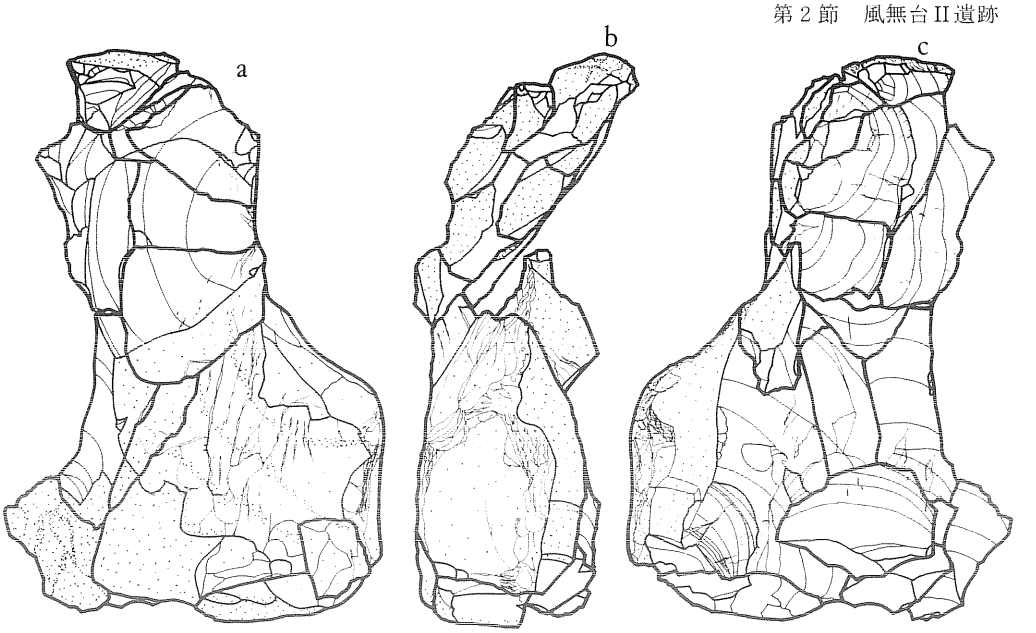
第64図　母岩 ⑤(1)



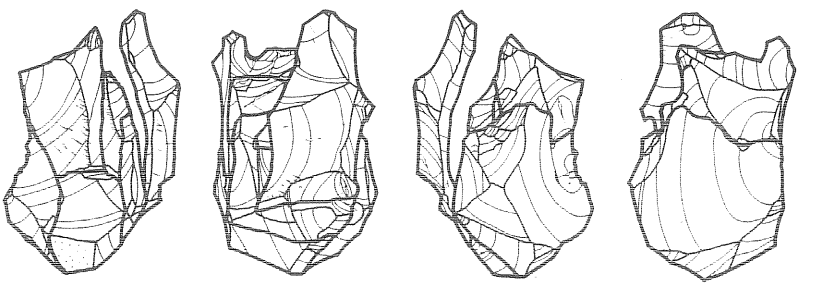
第65図　母岩 い (2)



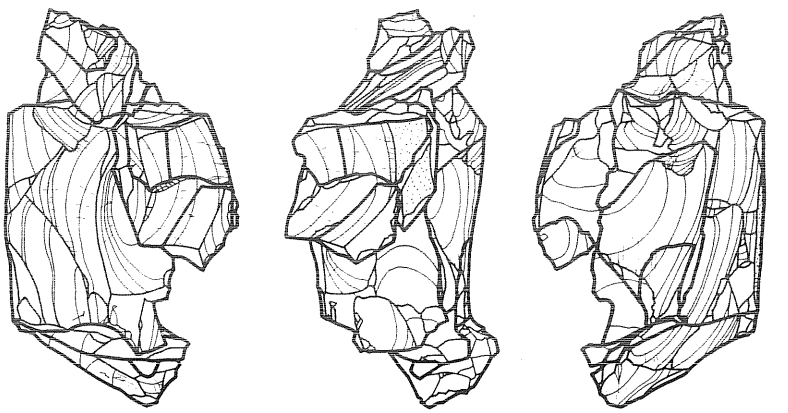
第66図　母岩㋒



203



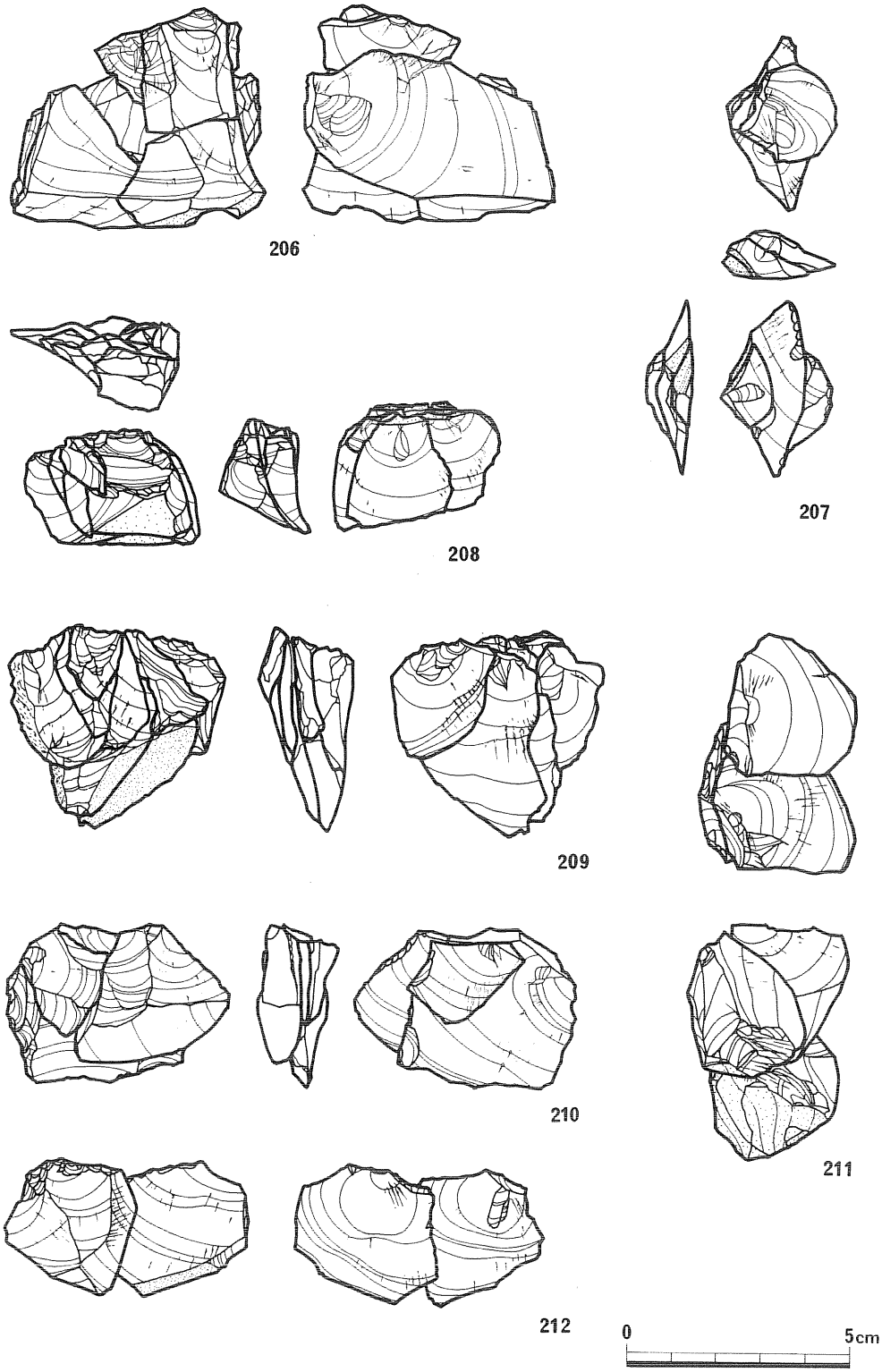
204



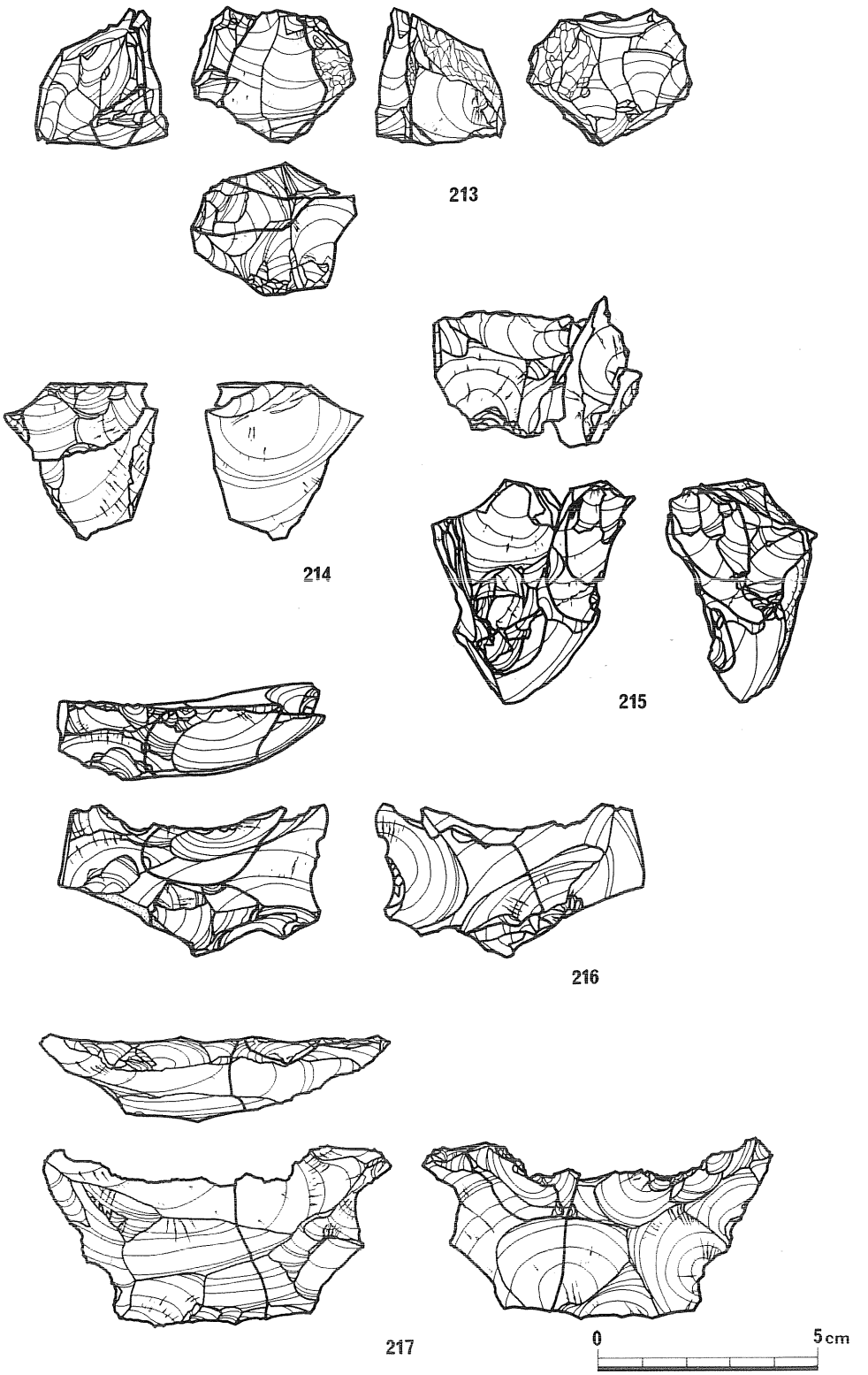
0　5cm

205

第67図　母岩㋓・㋔・㋕



第68図　母岩㋕・㋖，接合資料１，２，３，４，５



第69図　接合資料６，７，８，９，10

6　小　結

(1)　剥片剥離の方法について

風無台Ⅱ遺跡では、直径約12cmの範囲の中からチップを除いて約2,300点の定型的な石器、石核、剥片などが出土した。それらは垂直分布にして約0.7mほどになるが、出土状況、同一母岩での接合関係、技術基盤などから、全て同一時期の所産のものであると考えられる。これらの石器群は、接合資料、残核の状況などから、大きくは４種類、細かくは６種類の剥片剥離の方法から得られたものであることが判明した。その中にはいわゆる「石刃技法」は全く含まれない。さらに、それらの剥片剥離の方法から得られる剥片は、第53図に見るとおり一定の規格性を持たず大小、平面形ともさまざまの形を呈し、一般的には「不定形剥片」と呼ばれて来たものである。６種類の剥片剥離の方法の、剥片剥離作業を行う前の石核の形状を見てみると、打面はいずれも平坦な面であるが、その面は特に作出された打面ではなく、自然面や、節理面あるいは分割面であったりする。そして、打面と作業面との角度が直角に近いもの、あるいはそのような部分を選んで剥片剥離作業を開始し、途中で打面の調整、作業面の調整などは一切行われていない。

(2)　石器組成について

石器として把え得たものは、約2,300点の石器群のうち約80点で、このうち70点を図示した（第44～50図）。この中で台形様石器は60点と圧倒的に多く、その他の石器には掻器４点、ハンマー・ストーン１点、その他が５点などで、彫刻刀形石器や、尖頭器の出土は全くない。

台形様石器としたもの60点の内訳はⅠ類が34点、Ⅱ類が26点である。Ⅰ類とした石器の刃部の形状には種々あり、この中の特に第44図６、７、第45図11、12、第46図28、第47図34などについては刃部の形状を基準にして、ナイフ形石器の一部として把える考え方もあろうかと思われる。しかしながらここでは、第52図に示したように、得られた剥片から台形様石器を作ろうとする際の、刃部にあたる部分の選定には限度があると考えられ、必ずしも刃部が石器の中軸線に対して直交するものだけを台形様石器と規定することには、躊躇を覚えたため、敢えてこれらをナイフ形石器として区分しなかった。また、Ⅰ類とした台形様石器の中にはいわゆる「日ノ岳型台形石器」(注1)、「技去木型台形石器」(注2)と呼ばれているもの双方を含んでいる。これら２つの台形石器は、層位的な事実などからも前者から後者への変遷が確実であるとされて来たが(注3)、熊本県曲野遺跡では広域火山灰である姶良Tn火山灰(注4)（ＡＴ）の下から、この両者が共存して出土している。この曲野遺跡の事実をもってすれば、上記２つの台形石器の前後関係云々につい

ては再考されなければならないと考えられる。また、それら２つの台形石器の区分の基準の１つとされている側辺に対する二次加工のあり方(注5)についても、二次加工の施し方が、即、年代的な前後関係を表わす、とされて来たが、これについても再考が必要であると思われる。台形様石器Ⅱ類としたのは、「ウワダイラ型台形石器(注6)」とよばれているものに類似しているように思われるが、詳細については、今後検討したい。

風無台Ⅱ遺跡出土の石器の組成については上述のとおりであるが、この中で最大の特徴は、石器群の主体を台形様石器が占め、台形様石器の中では、これまで「日ノ岳型」「技去木型」とよばれていた一群のものと、「ウワダイラ型」とよばれていた一群のものが、比較的近い割合で共存し、それ以外の定形的な石器としてはわずかながら掻器が伴うことであるといえよう。

(3)　風無台Ⅱ遺跡の編年的な位置について

現状では層位的な事実からも、石器群の型式的なものからも本遺跡の編年的な位置について言及できる論拠は何もない。しかしながら、剝片剝離の方法の内容や、その中に、石刃技法はまったく持っていないことなどから、これらの石器群を、尖頭器文化、あるいは細石刃文化などとは相当隔たりを持つ石器群の一つとして把えられる可能性もある、としておきたい。いずれにしても、これまで関東地方あたりまでは、その分布域を持っても、１遺跡からほんの数点の出土にしかすぎなかった台形様石器が、秋田県でも単一の文化内容としてまとまって出土したことは、北海道湯ノ里４遺跡の出土例(注7)なども合わせて、より広範囲にわたる石器群、文化の１つとして今後考究されなければならないと思われる。

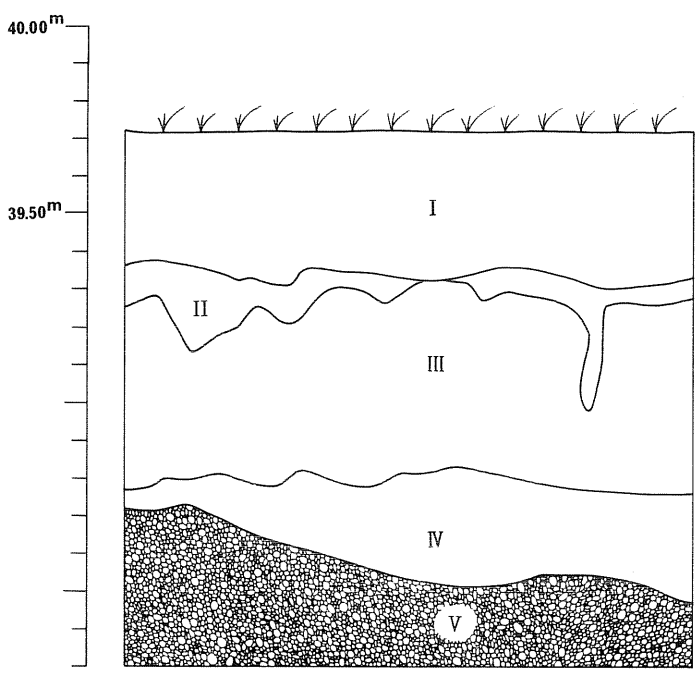
注１．下川達彌・立平進　『日ノ岳遺跡』　長崎県立美術博物館　1981
２．杉原荘介・戸沢充則　「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考古学集刊３－２　1971
３．注１に同じ　下川達彌　「長崎県日ノ岳遺跡」　『探訪　先土器の遺跡』1983など
４．江本直ほか　『曲野遺跡Ⅱ』　熊本県教育委員会　1984
５．小畑弘己　「石器のかたちとはたらき―台形石器」　季刊考古学第４号　1983
６．橋本正・上野章・神保孝造　『立野ヶ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会　1974　　なおこの中の「ウワダイラＬ遺跡の石器」の中にナイフ形石器が示されているが、本遺跡の中で、第55図85に示したものに類似している。
７．畑宏明　「湯の里４遺跡の台形石器」　考古学ジャーナル№233　1984

第３節　松木台Ⅱ遺跡

１　基本層序

松木台Ⅱ遺跡の旧石器時代遺物集中地点は、第２節の風無台Ⅱ遺跡と同じ台地上にあり、風無台Ⅱ遺跡の旧石器時代遺物集中地点の西120mにある。この地点は七曲台面の北端から南に70mほどのところにあり、台地の中央部にあたる。この付近はほぼ平坦な面をなしているが、微視的には南にゆるく傾斜しており、土層の南北方向の流れもおおよそ同様の状況を示している。

第70図が遺物集中地点の北側に隣接する深掘りトレンチの土層断面図である。第Ⅰ層は黒褐色土層で、風無台Ⅰ遺跡でのⅠ～Ⅲ層にあたる。第Ⅱ層は褐色漸移層で、風無台Ⅰ遺跡のⅣａ、Ⅳｂ層である。第Ⅲ層は明黄褐色土層で、風無台Ⅰ遺跡のⅤ、Ⅵ層に相当するが分層はむずかしい。第Ⅳ層は明褐色土層で風無台Ⅰ遺跡のⅦ層にあたるが、それよりも粘性があり、やや白色化している。第Ⅴ層以下は砂礫層で、上部では礫層と砂層が互層をなしている部分もある。この段丘砂礫層のうちの礫層は旧石器時代遺物集中付近でもかなり上下に波うっており、直径１～３cm、あるいは挙大の円礫が、遺物集中範囲の西側部分では漸移層直下から現われたりしている。

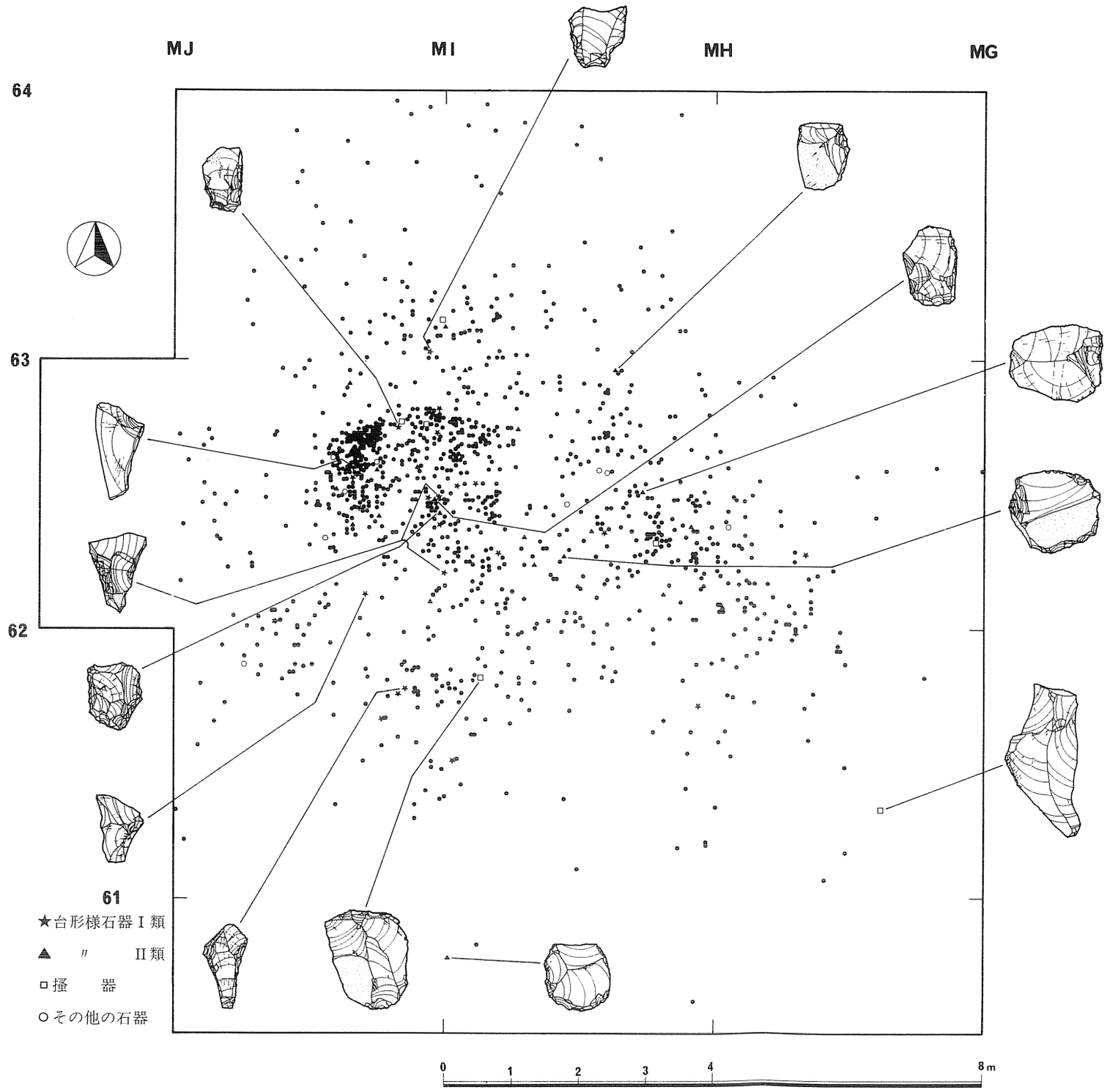


第70図　松木台Ⅱ遺跡土層図

以上の層のうち、第Ⅰ層が縄文時代～弥生時代の、第Ⅱ・Ⅲ層と第Ⅳ層の上部が旧石器時代の遺物含有層である。

２　遺物の出土状況

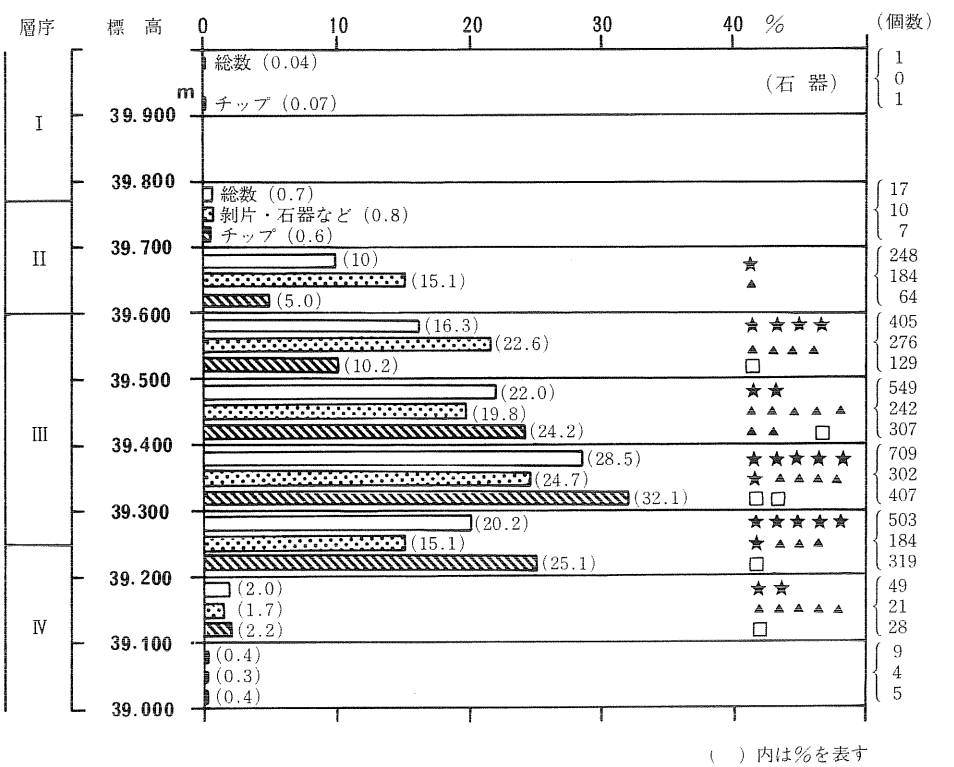
第72図がレベル毎の遺物出土数で、第71図がその平面分布図である。両図から、遺物の大部分は、平面的には直径12～13



第71図　松木台Ⅱ遺跡遺物出土平面分布図

mの円の中から、垂直的には約0.5mの高低差を持って出土していることがわかる。遺物の平面分布状況を見ると、円の中心よりもやや西側に最も集中する部分があるが、調査範囲内で、東側には風倒木痕があったり、西側には段丘礫層の礫が浮き上っていたりで、土層の混乱が見られた。この浮き上っている礫は遺物が一緒に出ていることからして初め旧石器時代に属する礫群かと思われたが、掘り下げたところ、第Ⅴ層の砂礫層に連続していることがわかり、またそれらの礫の中に特に焼けたものなどが見られなかったことから、同時代のものではないと判断した。

現場で遺物として採り上げたものは礫、微細なチップ等も含めて2,505点に上るが、その後の整理の結果、石器・剥片・石核などが約1,200点、チップなどが約1,300点である。この石器・剥片・石核類とチップなどの割合は12：13で拮抗する比率であるが、これは風無台Ⅰ遺跡や、風無台Ⅱ遺跡のそれと比較すると、チップ類が少ないといえる。また、同じ石器・剥片・石核などにあっても、その数は風無台Ⅱ遺跡よりも少ないにも拘らず、体積的には、それよりも大きい。これは剥片などが風無台Ⅱ遺跡のそれよりも大きいものが多く、残核の数も多いためである。



第72図　レベル別個体数

これらの遺物は、その平面、垂直分布の状況、同一母岩内での接合関係、石器群の内容などから、全て同一時期のもので、１つのまとまりとして把えられるものである。従って松木台II遺跡の石器群もまた、風無台Ｉ遺跡・風無台II遺跡同様、第III層（風無台Ｉ遺跡でのＶ・VI層、風無台II遺跡でのＶ層）中に生活の面を持った単一の時期のものであるとすることができる。

3　出土遺物

出土した石器群のうち、剥片・石核・定形的な石器などの総数は約1,200点である。このうち定形的な石器、あるいは二次加工の施された石器として分類可能なものは71点で、その内訳は台形様石器51点、掻器11点、その他の石器９点である。

石器群の形状や大きさは、風無台II遺跡とほとんど変わりはないが、剥片が若干大きいものが目立つ。また、剥片剥離の方法では、風無台II遺跡のＡ類～Ｃ－２類までのものに加えて、Ｅ類として、

Ｅ類：上・下面に自然面や節理面などの平坦な面を有する石核の場合で、両設打面による剥片剥離を行う。

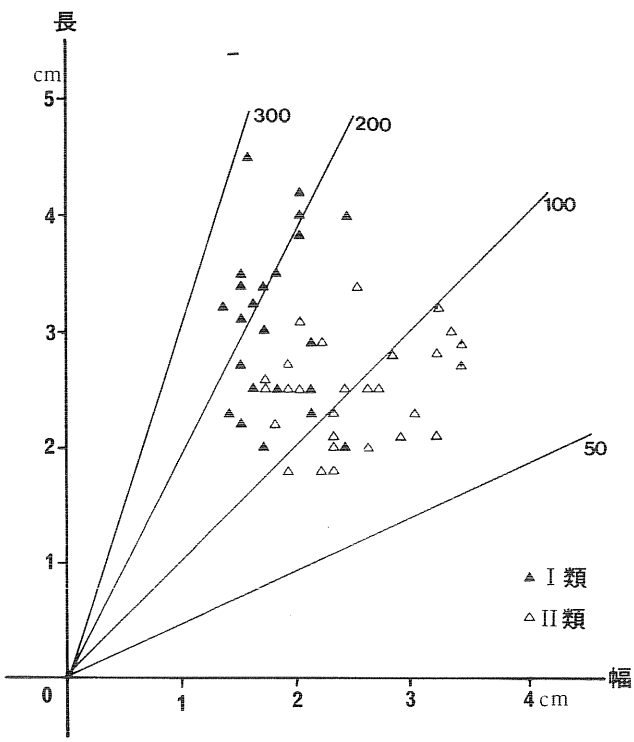
の方法がわずかながら存在し、風無台II遺跡のＤ－１、Ｄ－２類が存在しないようである。

石材は、風無台II遺跡で見られた黒曜石とチャートは全くなく、全て頁岩を用いている。また、風無台II遺跡では石器群をある程度母岩別に分けることができたが、本遺跡の場合、１つの母岩を特定しただけで、他は選別することができなかった。

以下、出土石器、接合資料の順で説明する。

(1)　台形様石器

51点出土している。石器の形状および属性については、第２節風無台II遺跡の項で示したものと同じであるので、



第73図　台形様石器長幅分布図

それを参照されたい。第73図に、Ⅱ－ｆ類を除く長幅分布図、第６表に観察結果を示した。

Ⅰ類：（第74図１～第75図23、図版23、24）

刃部を上にして見た場合の形状が、おおむね逆台形あるいは逆三角形を呈するものである。刃部の形状は直線的なもの（３、９、14など）は少なく、多少なりとも曲線的であったり、尖ったりする。側辺の形状は直線的なものが主体を占めるが、５、６、12などのように一方の側辺が内側にわずかに曲り、石器全体の形状が撥形に近いものもある。

側辺への二次加工のあり方によってａ、ｂ類に細分した。

Ⅰ－ａ類：（第74図１～11）

左右両側辺に組織的な二次加工を施すものである。側辺への二次加工は腹面から背面側に急斜度に行うものが主体を占めるが、７、８のように緩斜度のものもある。二次加工を背面から腹面側に行うものでは、11と６の左側辺がある。また３と７では腹面に残る打瘤の高まりを減じる二次加工が施されている。９のように大形のものもあるが、風無台Ⅱ遺跡の同類のものとくらべて小さいものが多い。１、８、９は折損して出土したものが、それぞれ接合したもので、この他にも２、３、７、11のように折れているものが多い。折れ方は石器の中軸線に直交するような形で、その部位は石器の中心部か、その上下である。

Ⅰ－ｂ類：（第74図12～75図23）

一側辺の全部分を素材のまま残し、他の一側辺に二次加工を施したものである。基部の尖る形のものが多い。刃部は15、19のように石器の中軸線に対して直交するようなものはまれで、中軸線に対して右か左側に傾くものが多い。二次加工は21を除いて、腹面から背面側になされており急斜度である。12の左側辺はヒンジフラクチャーで終っており、12、13の左側辺と22の右側辺は折断したまま、16と21の左側辺には大きく打面を残している。20の右側辺下端は二次加工の施されない鋭利な縁辺となっており、あるいはこの石器は上下を逆にしてナイフ形石器として見るべきなのかもしれない。

Ⅱ類：（第75図24～77図51、図版24、25、26）

石器の形状が正方形や長方形、あるいは半月形をなし、刃部は緩くふくらむものもあるが、大部分は直線的なものである。

Ⅱ－ａ類：（第75図24～29）

縦に長い長方形を呈するものである。刃部は直線的で石器の中軸線に対してほぼ直交する。刃部を除く３辺に、二次加工を施すもの（24、25）、２辺に二次加工を施すもの（26～29）がある。Ⅱ－ａ類は、他の石器に比べて薄い。29は石器中央部で折れたものが接合したものである。

II－ｂ類：（第75図30～76図34）

刃部が直線的で、他が弧を描くような半月形を呈する。いずれも左側辺に打面を大きく残すが、その部分も含めて刃部を除く３辺に急斜度～緩斜度の二次加工を施している。比較的大形のものが多い。

II－ｃ類：（第76図35～37）

刃部を除く３辺のうち２辺か、１辺と他の辺の一部に二次加工を施した正方形に近いものである。35、37は打面を残すが、36は打面を含む打瘤部までも除去している。

II－ｄ類：（第76図38）

１点のみであるが中形の剥片の打面部と先端部に急斜度の二次加工を施したもので、刃部は緩くふくらむ。

II－ｅ類：（第76図39～77図48）

左右どちらかの一側辺全体か、その一部に急斜度の二次加工を施したものである。比較的小形で正方形に近い形のもの（39～41、43）と、中心で長方形を呈するもの（42、44～48）がある。48の右半分は欠損している。

II－ｆ類：（第77図49～52）

全体の形状が正方形や長方形とならず、II類に含めるべきではないかもしれないが、一応この仲間とした。剥片の形をほとんど変えず、側辺の一部に微細な二次加工を施したものである。

(2)　掻　器　（第77図53～78図62、図版26）

中形～大形の厚みのある剥片の一部に二次加工を施した掻器が10点出土している。それらは刃部の角度、形状によってＩ・II・III類に分けることができる。

Ｉ類：（第77図53～78図58）

比較的縦長で部厚い剥片の先端（53～55）や側辺（56）に直角に近い刃部を作出したものである。刃部の形状は、53、54、56がゆるく弧を描き、55が直線状をなす。

II類：（第78図57、58）

大形の剥片の一部に、緩い角度の刃部を作出したものである。剥片は大形である割には厚みがない。

III類：（第78図59～62）

小～大形の剥片の尖った部分を選び、その先端に急斜度の刃部を作出したものである。刃部近くの断面はほぼ三角形を呈する。

第6表　台形様石器計測表

整理番号	取り上げ番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	刃部長(mm)	刃角(α°)	刃部の形状	刃部とbulbの関係	分類	裏面調整	その他
1	2024, 2047	29	21	7		21	36	曲凸左	正	Ⅰ－a		
2	2077	(34)	15	8		15	53	〃	節理面	〃		基部欠損
3	1818	(20)	17	8	2.4	17	44	直	正	〃	○	基部欠損
4	2212	(27)	(15)	(5)	1.7	—	—	?	正?	〃		刃部欠損、焼けている
5	1323	23	21	5	2.6	26	43	曲凹	左	〃	○	
6	518	25	16	6	1.9	18	45	曲凸右	正	〃		
7	2434	(25)	(18)	6	2.2	—	—	?	—	〃	○	刃部欠損
8	2038	34	17	6	3.3	15	50	曲凹	右	〃		焼けている
9	194(Ⅵ)199	40	24	7	6.5	18	32	〃	逆	〃		
10	(Ⅵ)880	25	21	8	3.7	16	46	直左	正	〃		
11	364	(20)	24	5	2.7	刃部欠損	—	—	—	〃	○	上半欠損
12	2250	35	18	6	3.0	20	20	直右	正	Ⅰ－b	○	
13	1501	31	15	6	2.3	10	36	曲凸右	正	〃	○	
14	1361	32	13	5	2.2	11	60	直右	節理面	〃		
15	?	23	14	4	1.7	8	69	直	正	〃		
16	1449	42	20	6	3.6	18	36	直右	節理面	〃		
17	2437	(26)	17	—	1.6	12	—	曲凹右	—	〃		基部、腹面欠損、焼けている
18	(Ⅵ)558	(22)	(15)	6	1.4	20	37	曲凹左	左	〃		下半欠損
19	2310	30	17	8	3.0	14	20～30	曲凹	正・右	〃		
20	1869	33	16	6	2.7	14	30～35	曲凹左	正	〃		
21	1885	39	20	7	4.0	(13)	41	〃	正	〃	○	
22	394	40	20	10	6.9	12	45	直左	逆	〃		
23	1719	(45)	16	8	3.9	—	—	—	—	〃	○	刃部欠損、焼けている
24	2455	31	20	5	2.7	20	23	曲凸左	右	Ⅱ－a		
25	1925	25	20	6	3.0	13	45	直	正	〃		
26	430	(25)	26	(5)	2.1	22	21	〃	正	〃		
27	918	25	19	5	2.2	15	38	〃	正	〃		
28	2450	25	17	5	2.1	16	30	直右	左	〃		
29	296	34	25	4	3.0	15	31	直	右	〃		
30	(Ⅵ)792	25	24	7	3.7	15	40	〃	右	Ⅱ－b		
31	2452	32	32	10	9.0	22	38	曲凸右	右	〃		
32	2093	28	32	5	4.6	18	20	直	右	〃		
33	1197	28	28	6	5.1	27	28	曲凸	右	〃		
34	403	30	33	6	7.7	31	36	〃	右	〃		
35	382	20	23	8	3.3	20	43	直右	左	Ⅱ－c		
36	1334	18	23	5	2.0	19	26	直	正	〃		
37	250	25	27	8	5.3	17	40	〃	正	〃		
38	11	29	34	10	8.3	31	44	曲凸	正	Ⅱ－d		
39	2453	18	22	7	2.6	17	43	直	正	Ⅱ－e		
40	1081	22	18	5	1.6	17	23	曲凹左	右	〃		
41	2214	23	23	5	2.1	18	37	直	正	〃		
42	1533	21	23	7	3.4	17	34	曲凸	逆	〃		
43	826	18	19	4	1.2	17	26	直	正	〃		
44	2416	27	19	8	5.1	27	47	曲凸	左	〃		
45	417	29	22	5	2.9	20	31	直	正	〃		
46	1263	23	30	6	4.0	22	44	曲凸	正	〃		
47	967	27	34	11	7.1	25	30	直	正	〃		
48	(Ⅵ)1075	26	(17)	6	2.8	(7)	38	〃	右	〃		
49	2447	20	26	5	2.7	23	56	〃	正	Ⅱ－f		
50	1769	21	29	5	2.5	25	58	〃	正	〃		
51	2459	21	32	6	4.8	23	34	〃	節理面	〃		

(3)　その他の石器　（第79図63～71、図版27）

剝片の一部に組織的な、あるいは微細な二次加工が施されたものである。63、64は二次加工によって比較的急斜度の刃部を作出したもので、刃部が内湾している。いわゆる抉入石器の一つかと思われる。65の下端も同様で、同じ仲間であろう。66～68は比較的縦に長い剝片の側辺の一部に微細な二次加工を施したもので、あるいはこのようなものがナイフ形石器といえるのかもしれない。69は剝片の尖った部分の両側に微細な二次加工があり、ドリルであろうか。70は部厚い剝片の両側辺に大まかな二次加工を施したもので、台形様石器のＩ類かもしれない。71は台形様石器II－ｆ類に似るが、打面の一部に細かい二次加工が見える。

4　接合資料

本遺跡で用いられた頁岩は節理面が多く入り、色調やその他の要素だけでは母岩別に分類することが極めて困難であった。このため、確実な母岩としては、第86図126・127で示した接合資料５を代表とする母岩㋐を確認したにとどまる。この母岩㋐は、図示しなかった大きな塊も含めて、187個の剝片類からなっている大きなものである。この他に数個の母岩が存在することは確かであるが、前述の理由によって選別し得なかった。

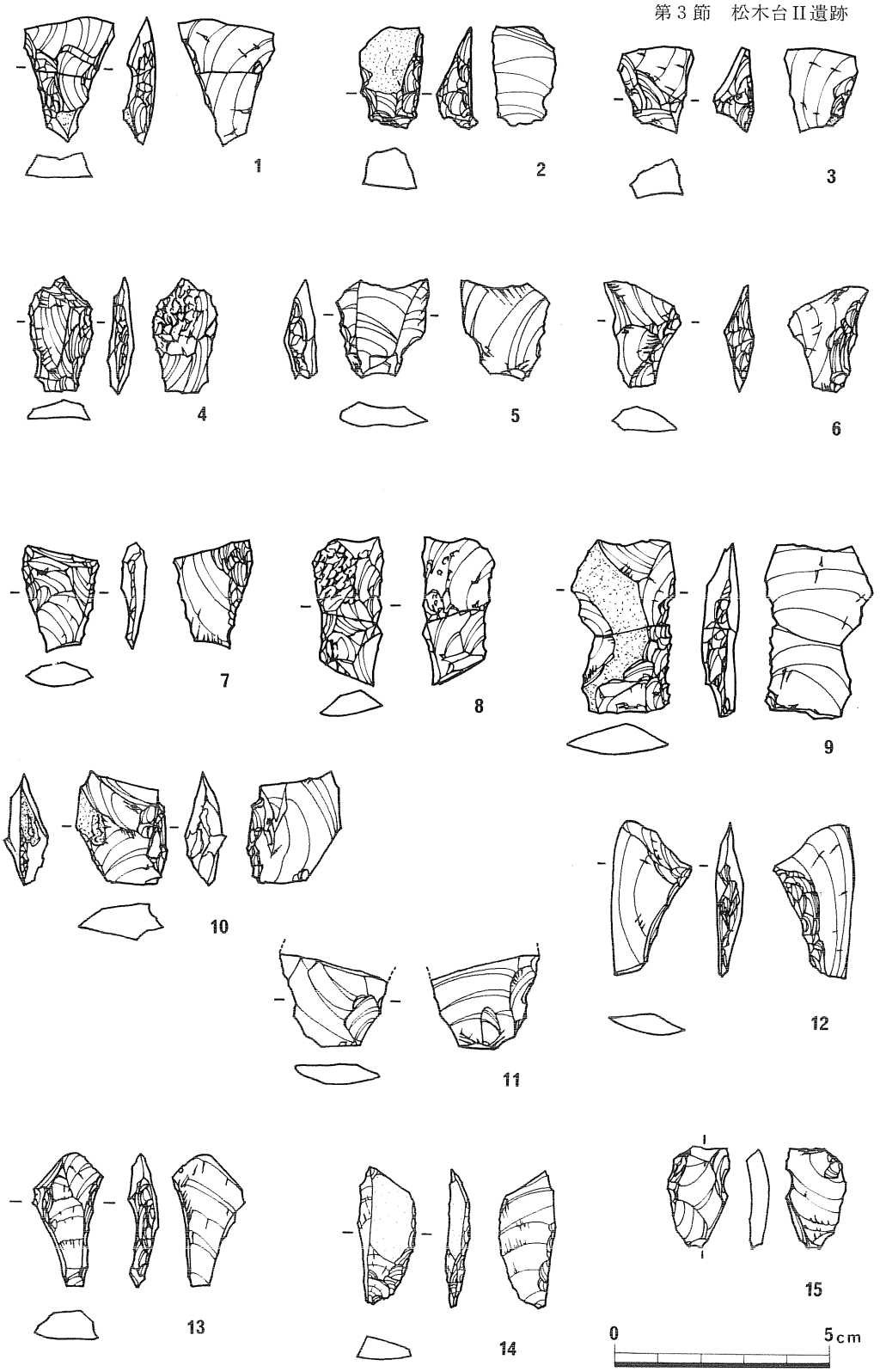
第81図～90図が、接合資料の代表的なものである。これらの接合資料をもとに、本遺跡の剝片剝離の方法を分析すると、以下のようになる。なお、本遺跡での剝片剝離の方法は、風無台II遺跡のそれと同様なものや、似ているものが多い。このため、風無台II遺跡には無くて、本遺跡にあるもの、またはその逆のものについては、記号の重複を避けるため、前者のＡ～Ｄ類に続く記号を用いた。また、石核の形状についてはその全体を推定し得るものが少ないので、記述の際省くこともある。

Ａ類：単設打面からだけ剝片剝離を行う方法

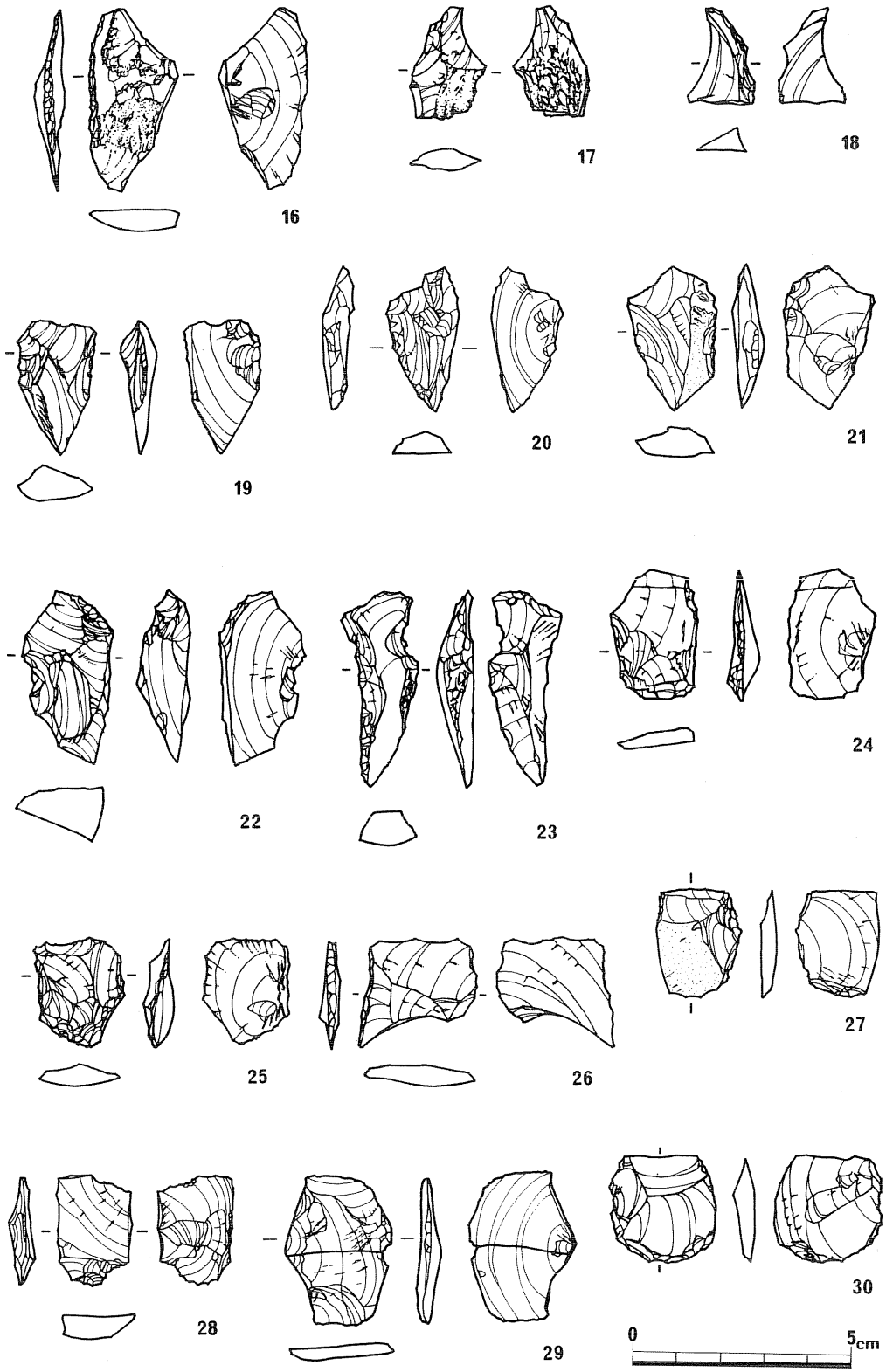
風無台II遺跡のＡ類と同じ方法であるが、石核はそれよりも大きく、得られている剝片も大きなものが多い。打面は自然面や節理面、分割面であることが多いようである。接合資料11（第89図141）・14・15（第90図144・145）などに見られるが、いずれも残核が不明なことからＣ－２類の一部である可能性もある。

Ｂ類：石核の稜線のうち、直角に近い角度をなす稜線の両側から錯向剝離状に剝片剝離を行う方法

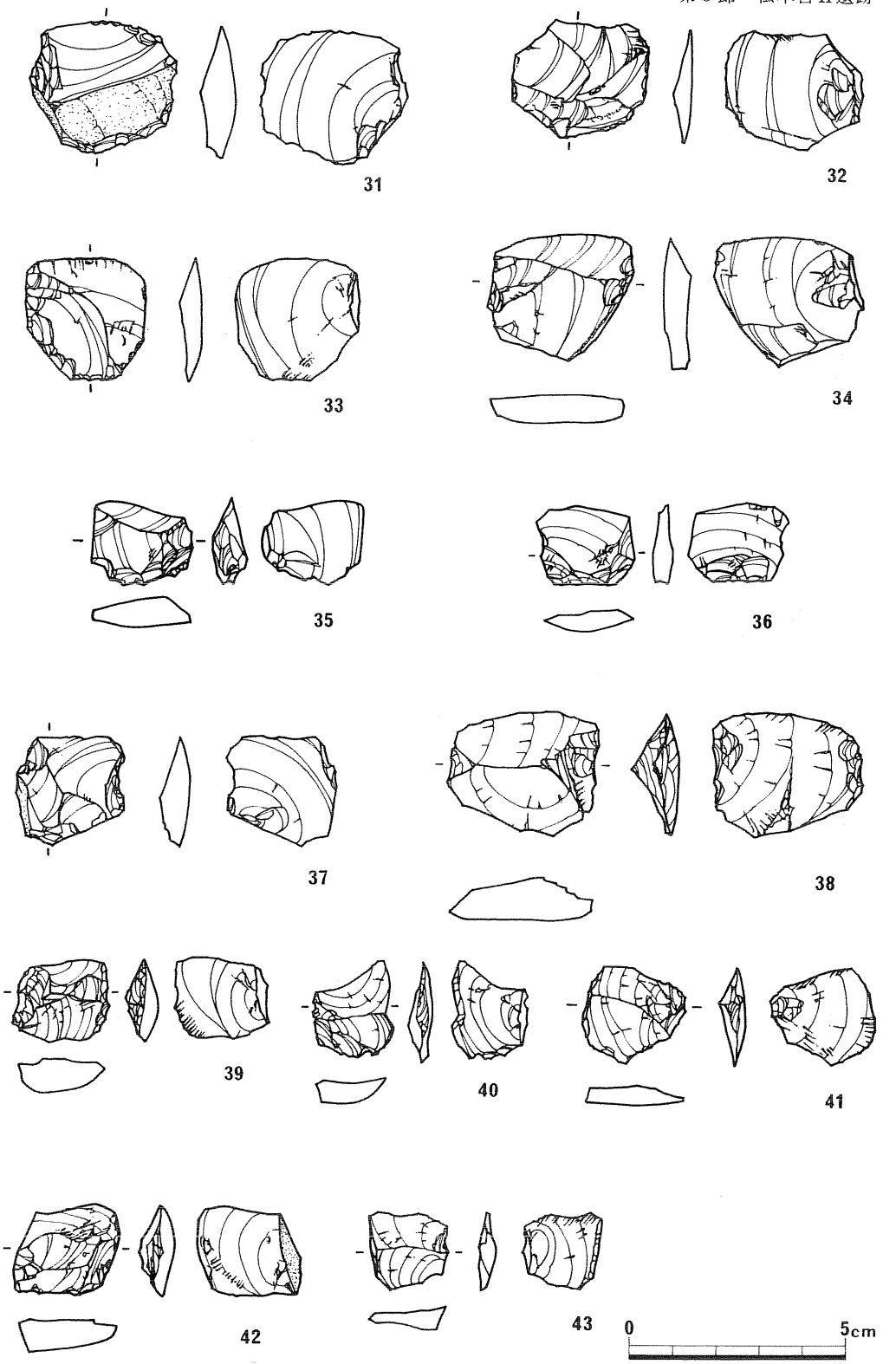
基本的には風無台II遺跡のＢ類と同じで、石核の稜線のうち、直角に近い部分を錯向剝離状に剝片剝離する方法であるが、本遺跡の場合、石核が立方体ではなく、三角錐あるいは四面体に近い形状であるため、剝離の進行が螺線状に回らず、一直線か直角をはさむ二辺



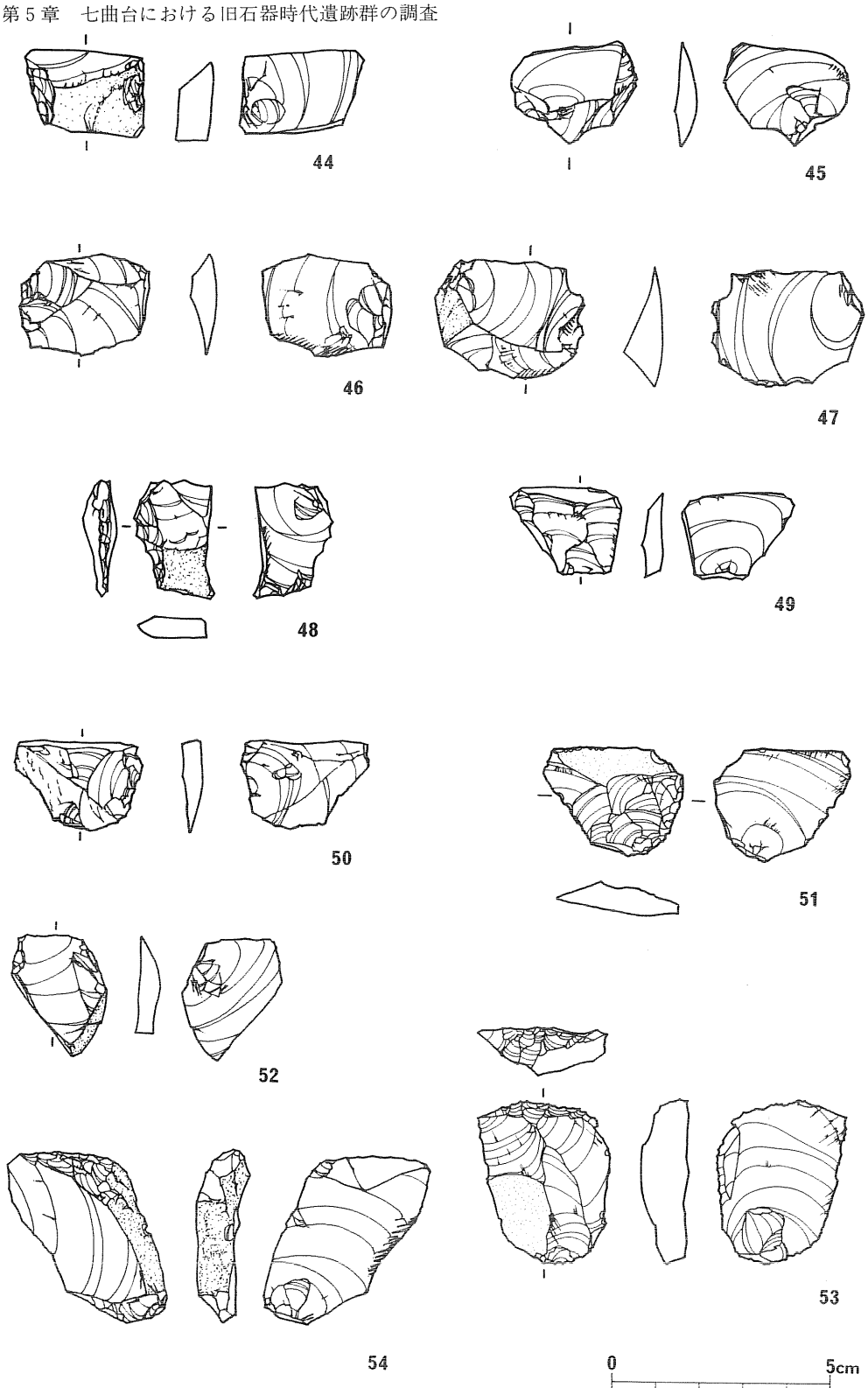
第74図　台形様石器(1)



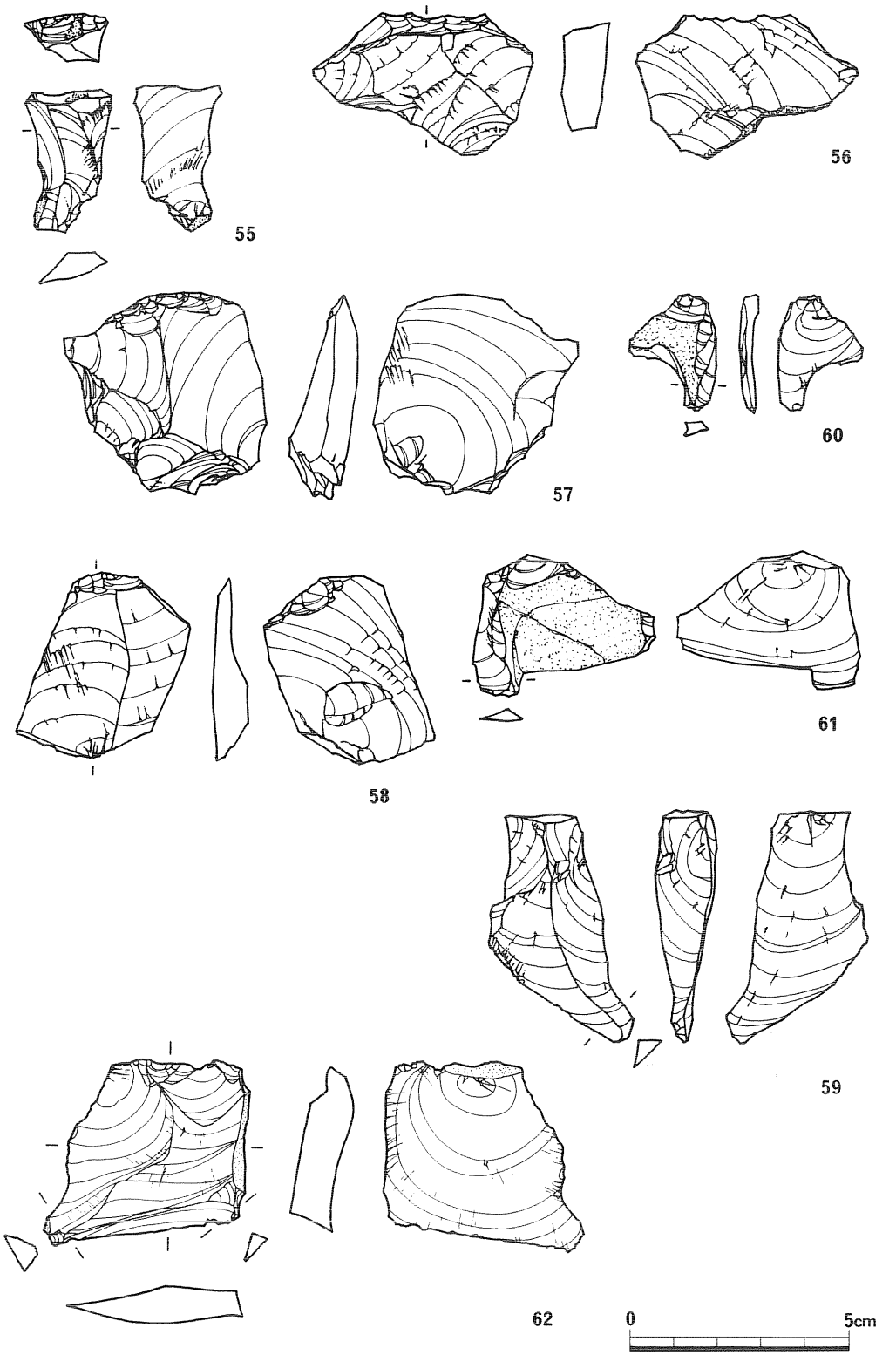
第75図　台形様石器(2)



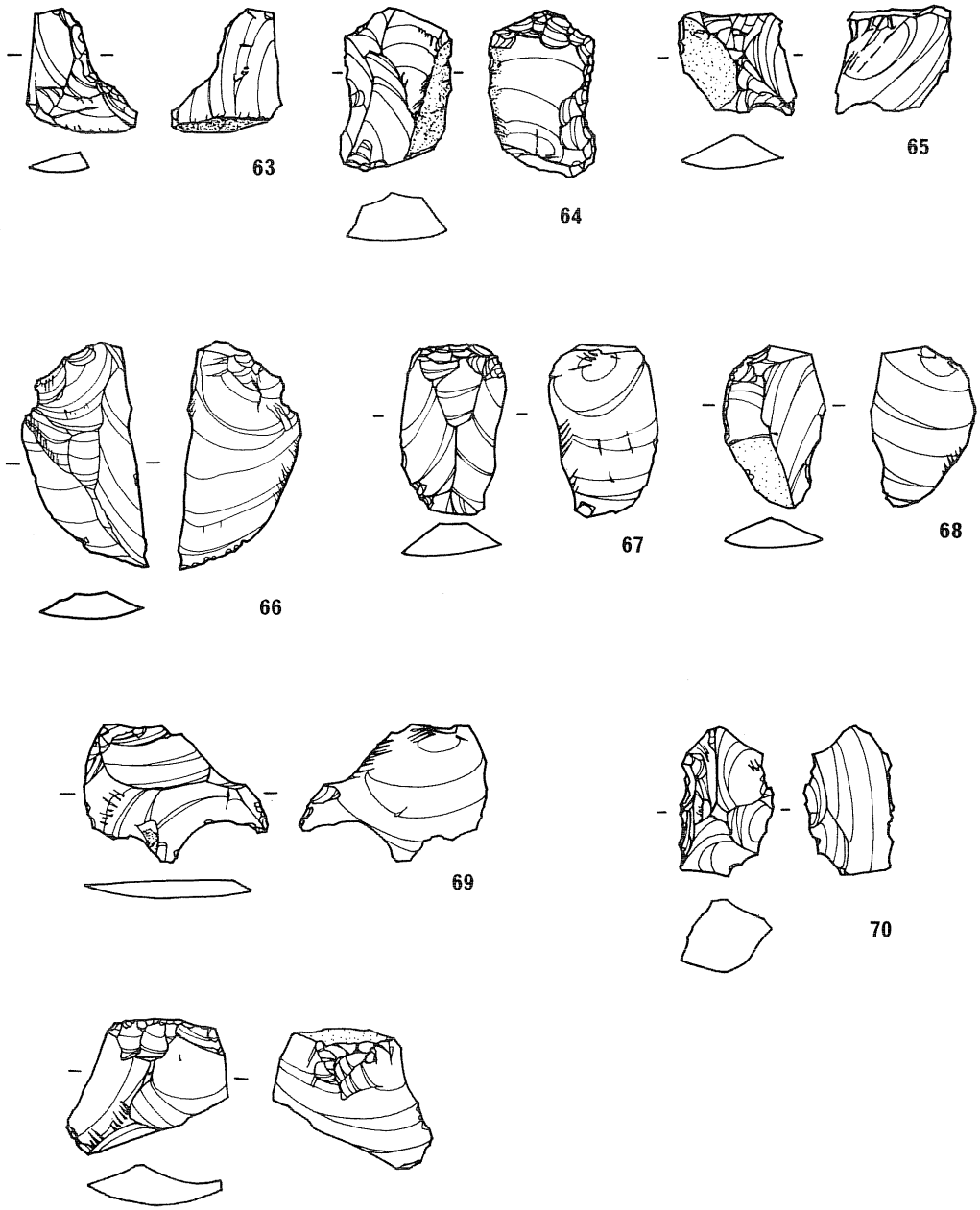
第76図　台形様石器(3)



第77図　台形様石器(4)・掻器(1)



第78図　掻器(2)



第79図　その他の石器

上で行われる。風無台Ⅱ遺跡のＢ類と一応区別するため、前者をＢ－１類、後者をＢ－２類としたい。接合資料２（第82図）、12（第90図142）に見られる。

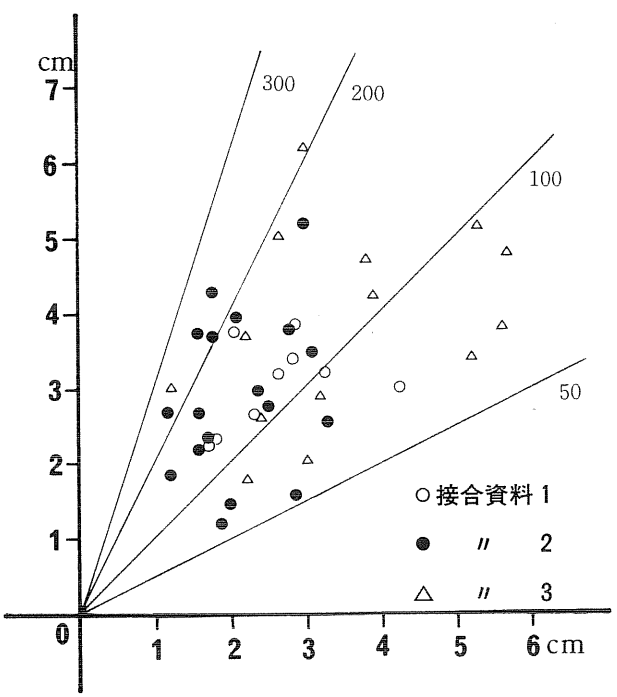
Ｃ類：打面と作業面を次々に変えながら、石核を転がすように剥片剥離を進める方法

残核では、一面あるいは一部分を除いて全て、打面であり、作業面となっている。やはりＣ－１類とＣ－２類があるが、両者とも風無台Ⅱ遺跡のＣ－１・Ｃ－２類と全く同じである。Ｃ－１類は、接合資料１（第81図）、３（第83図）、５・６（第86図）、８（第87図132）などに、Ｃ－２類は、接合資料４（第85図）、７（第87図131）、９（第88図）、13（第90図143）などに見られる。

Ｄ類：Ｄ－１・Ｄ－２類とも本遺跡中には見られない。

Ｅ類：両設打面による剥片剥離を行う方法

石核は直方体で、上下に平坦な面を持つ。この平坦面は自然面や節理面・分割面などである。この方法は風無台Ⅱ遺跡では見られなかったものであり、本遺跡中でも、接合資料10（第89図139）の１例だけである。この資料の場合、13ｃ－ｂの方が自然面、138－ｃの方が節理面である。剥片剥離作業は上設打面（この場合節理面）側からと、下設打面（自然面）側から交互に行われ（138－ｂ・138－ｃの○印は剥片はないが剥離方向のわかるもの、●は剥片が接合しているものを示し、番号は剥離の順番を表わしている）、最初の数回を除けば、全て石核の高さの中位でヒンビ・フラクチャーで終っている。140は残核で、この石核が大きな剥片あるいは分割された塊であったことを示している。



第80図　接合資料１・２・３の長幅分布図

第80図は、接合資料１（第81図）・２（第82図）・３（第83図）の残核を除く

剝片の長幅分布を表わしたものである。これによると、接合資料１の剝片が長幅指数100～200の間にほとんどが入る他は、接合資料２・３とも同指数50～300の剝片で、ばらつきのあることがわかる。また打角の分布を見てみると、接合資料１では打角120～140°でピークはなく、同２では打角110～140°で115～125°にピークがあり、同３では打角120～135°で125～130°にそのピークがある。

第85図123～126は接合資料４で、２点の台形様石器と他の剝片が残核126に接合した状況を表している。２点の台形様石器は第74図の１と２である。台形様石器71図１の製作行程については第２節(本書67ページ)で示したとおり、長さ・幅とも3～4cmの長幅指数100前後の剝片の打面側とその反対側を折断および急斜度の二次加工によって台形様石器としている。74図２もほぼ同様の行程によって製作されたと考えられるが、１では剝離面を刃部とし打面と刃部の関係も「正」であるのに対して、２では節理面を刃部とし打面側が基部となっている。同一の石核から得られた条件の異なる剝片が、ほぼ同様の台形様石器として、製作されていることがこれで明らかになったわけである。

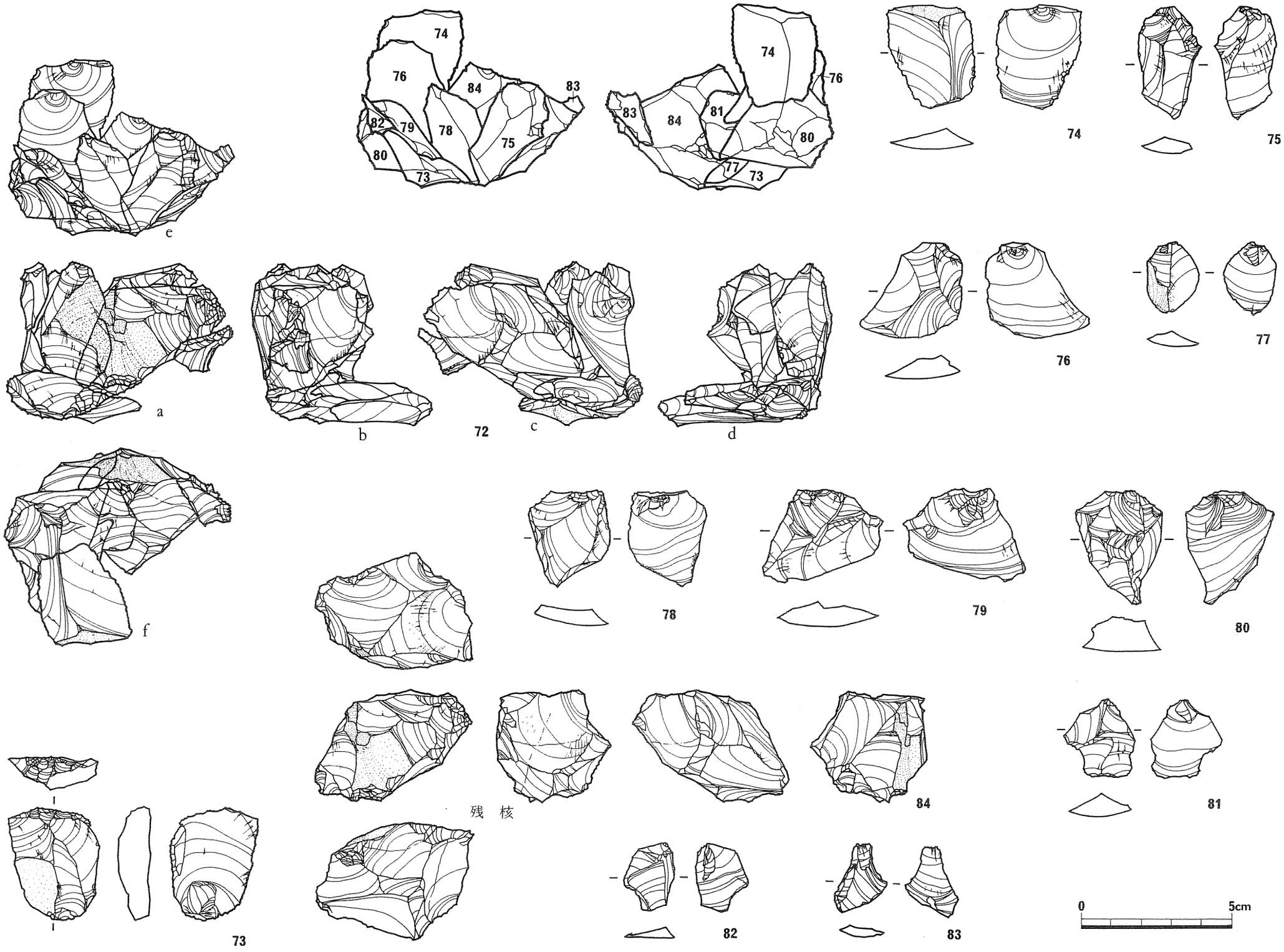
第82図85は接合資料２で剝片が残核（106）に接合した状況を示し、86は剝片剝離行程の途中の図である。この86においては、87の台形様石器II－ａ類（第75図27と同様）が接合している。これによると、台形様石器87の製作される前の剝片は、長さ2.2cm、幅3.6cmの大きさで、鋭利な左側辺を刃部とし、反対の側辺を折断や二次加工によって石器に仕上げていることがわかる。同図88も同様の石器である。

5　小　結

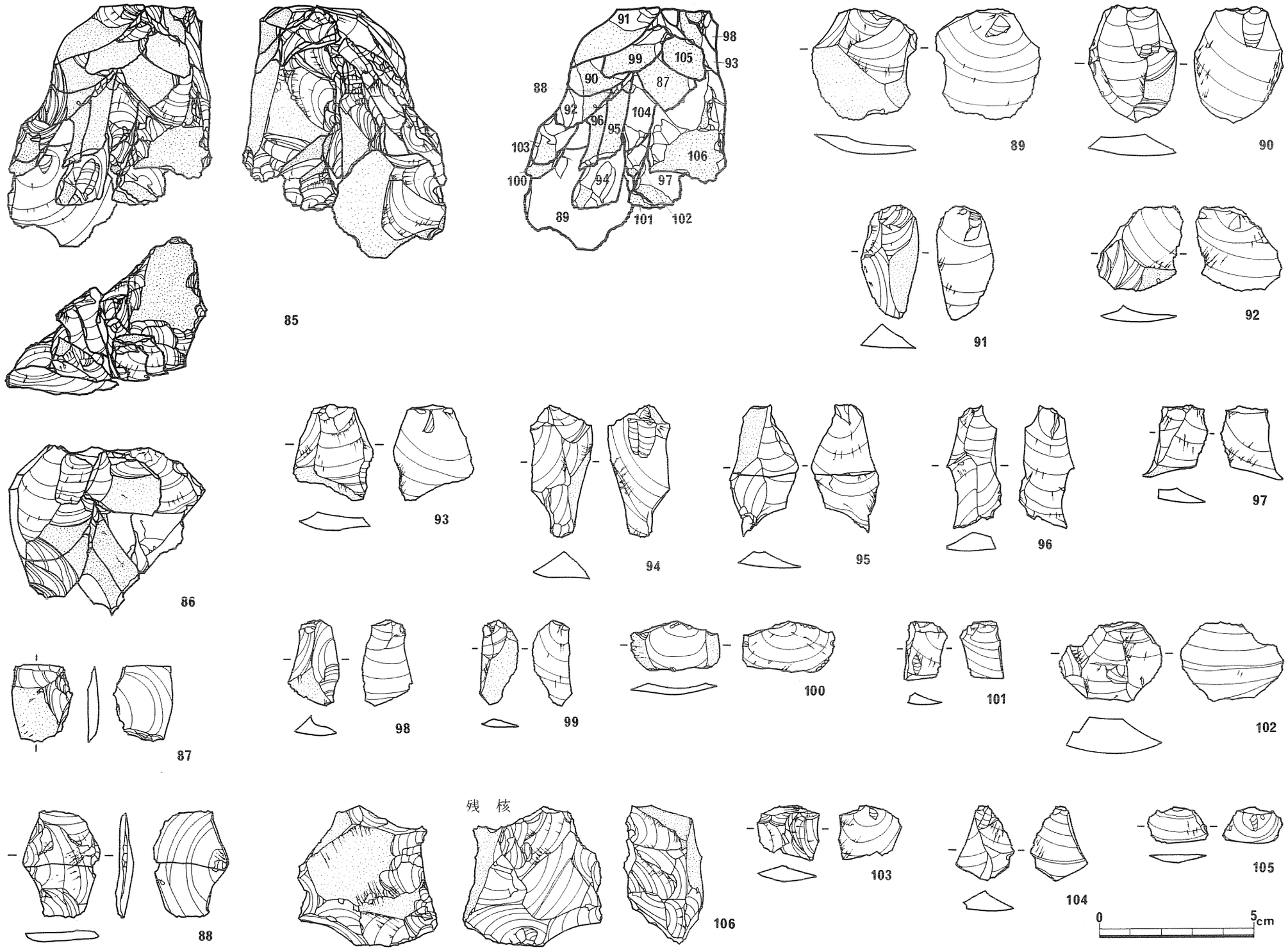
松木台II遺跡では直径12～13mの円で囲まれる範囲の中から、剝片・石核・定形的な石器などが約1,200点（チップ・礫を除く）出土した。このうち定形的な石器は71点で、その内容は、台形様石器51点、掻器11点、その他の石器９点である。これらの石器群は、その内容、出土状況、接合関係、剝片剝離方法の基術基盤などから、全て同一時期の所産のものと考えられる。

(1)　火熱を受けた石器について

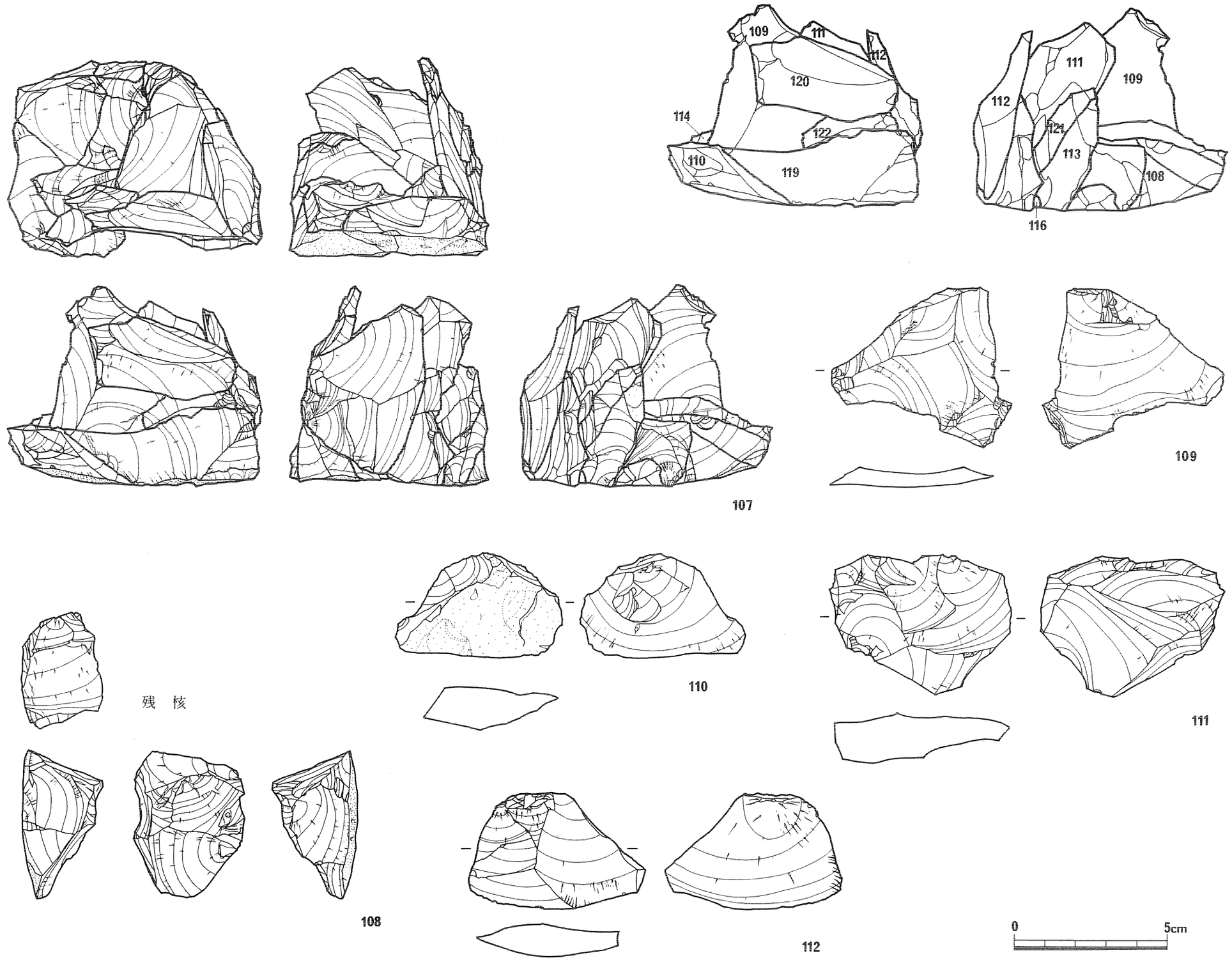
七曲台における旧石器時代の３つの遺跡、風無台Ｉ・風無台II・松木台II遺跡では、共に剝片類が二次的な火熱を受けて黒色化しているものが多い。その数は風無台Ｉ遺跡では約450点（全体の７％）、風無台II遺跡では約800点（16％）、松木台II遺跡では約200点（８％）である。これらの石器は、全て石核から剝片剝離された後に火熱を受けており、それは剝片にとどまらず定形的な石器の中にも見られる。そして火熱を受けた石器の分布を見てみると必ずしも１ヶ所



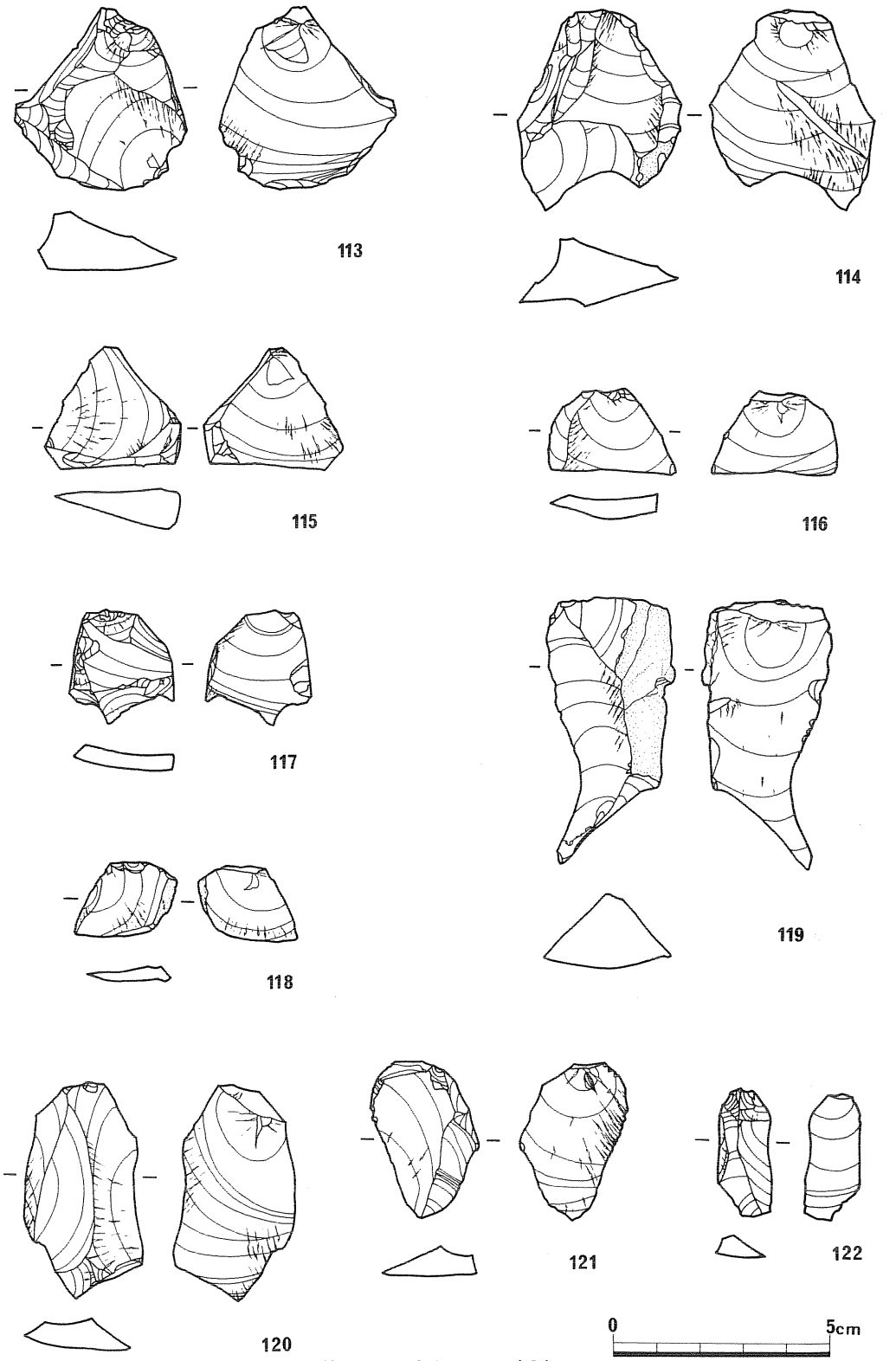
第81図　接合資料 1


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
残　核
0
5cm

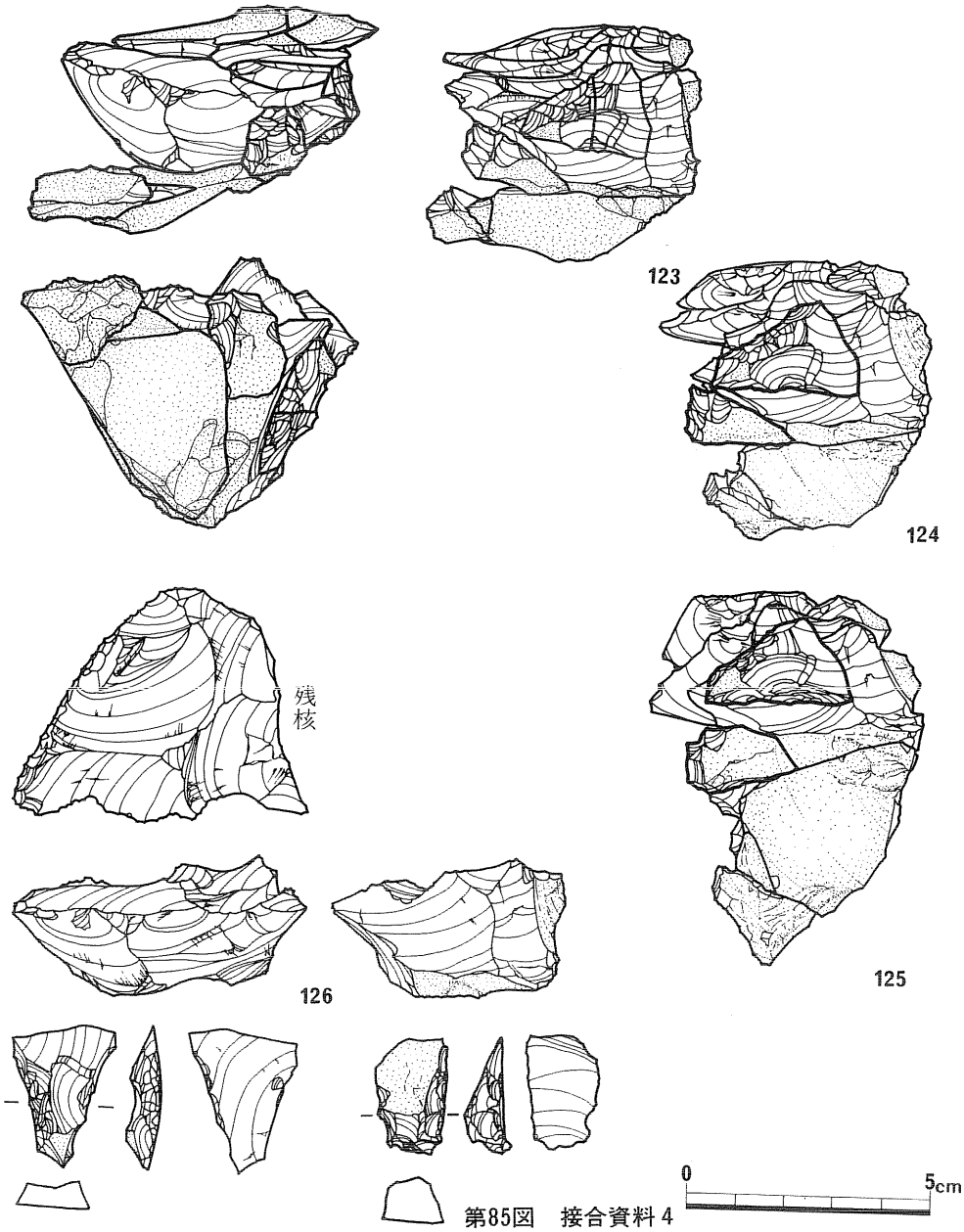
第82図　接合資料２



第83図　接合資料３（$\frac{1}{2}$）



第84図　接合資料３（$\frac{2}{2}$）

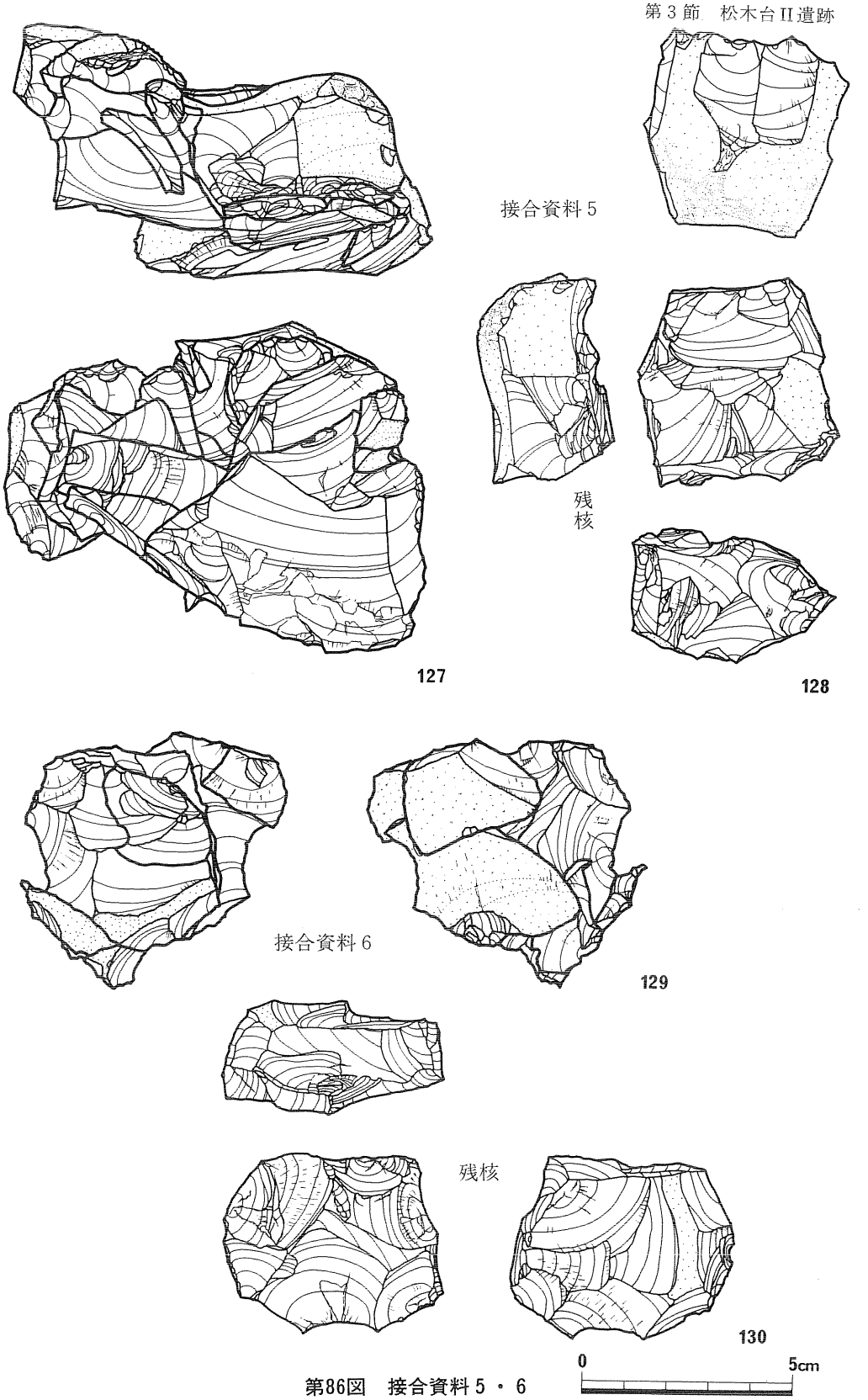


第85図　接合資料４

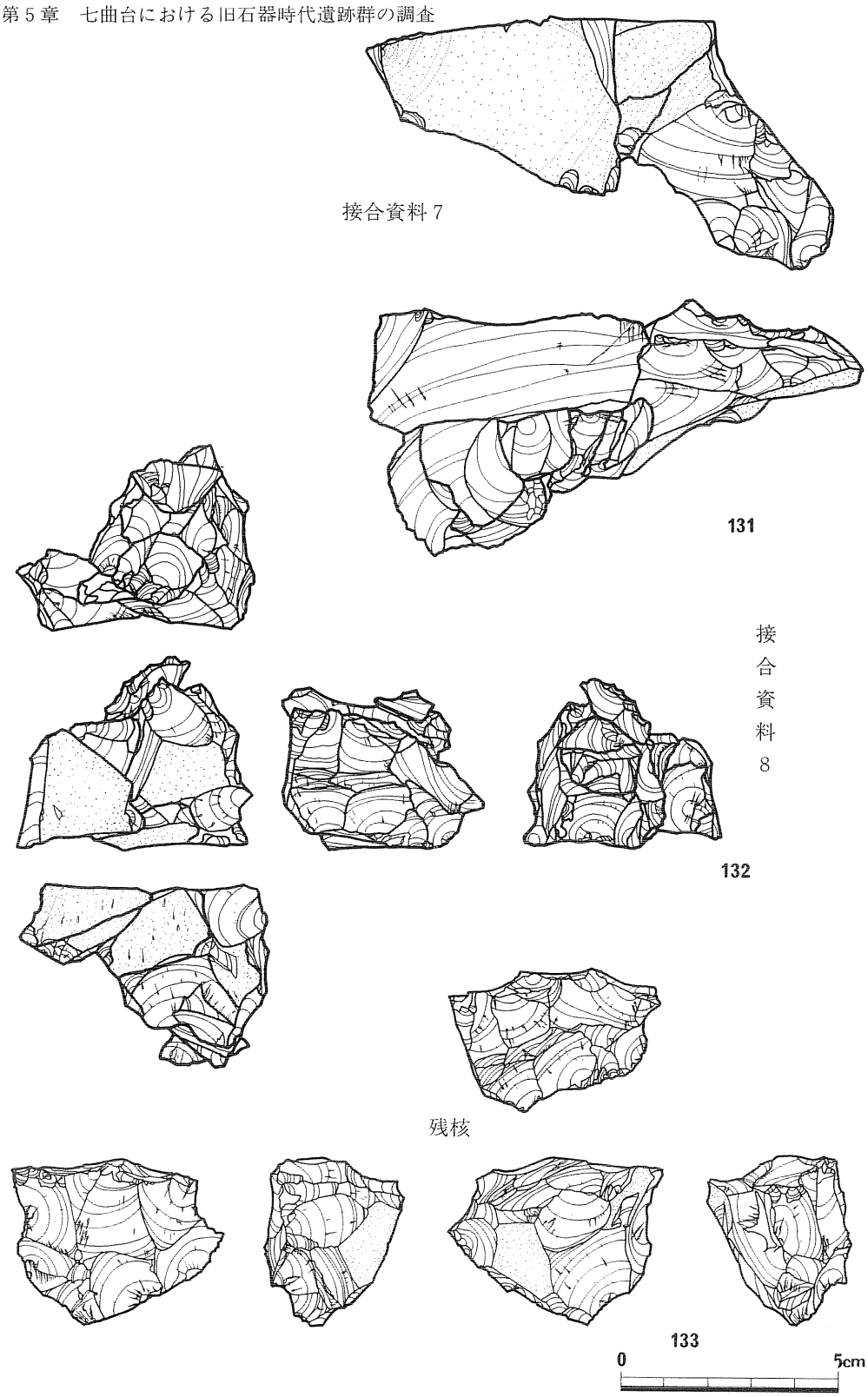
に集中する傾向は見られなかった。また、調査中、特に焼土と断定できる箇所もなかった。これら石器がどのような理由によって焼けたのか不明であるが、今後注意しなければならない問題点の１つとしてここに述べておきたい。

(2)　風無台Ⅱ遺跡との関係について

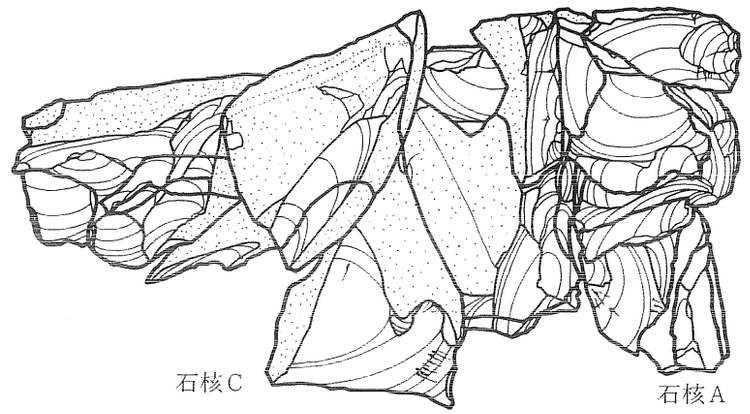
松木台Ⅱ遺跡と風無台Ⅱ遺跡は同一台地上にあり、直線距離にしてわずか120mしか離れていない。いま、この２つの遺跡における石器群の出土層位、出土状況、石器組成、剥片剥離の方

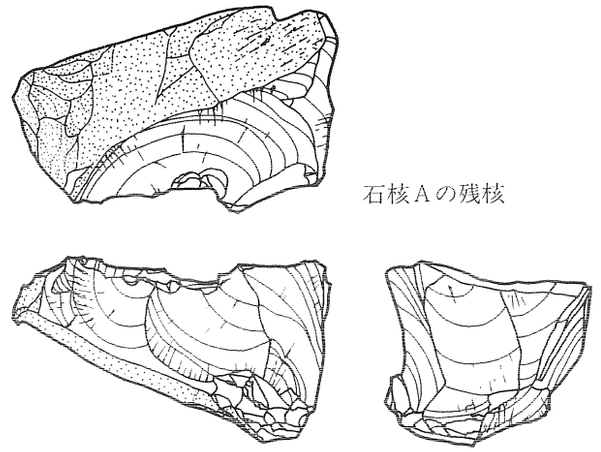


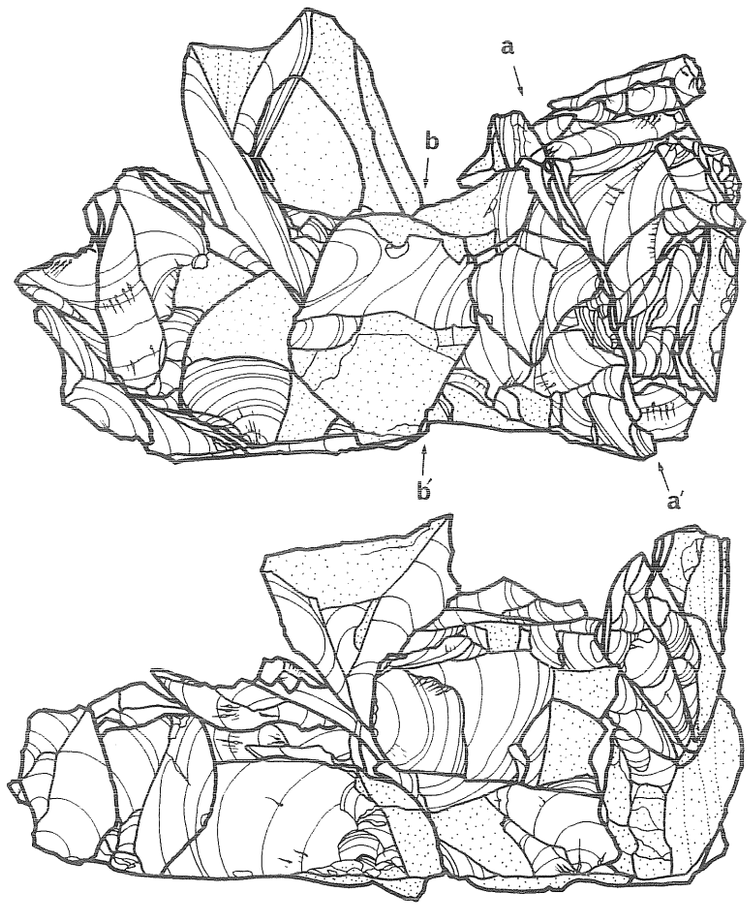
第86図　接合資料５・６

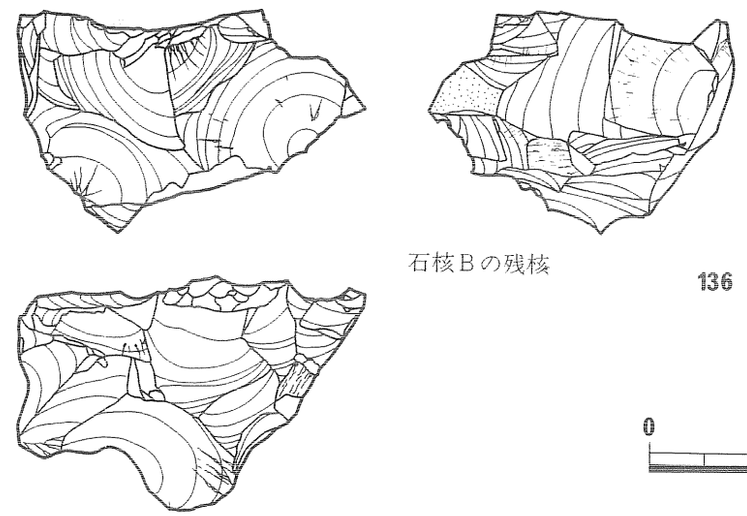


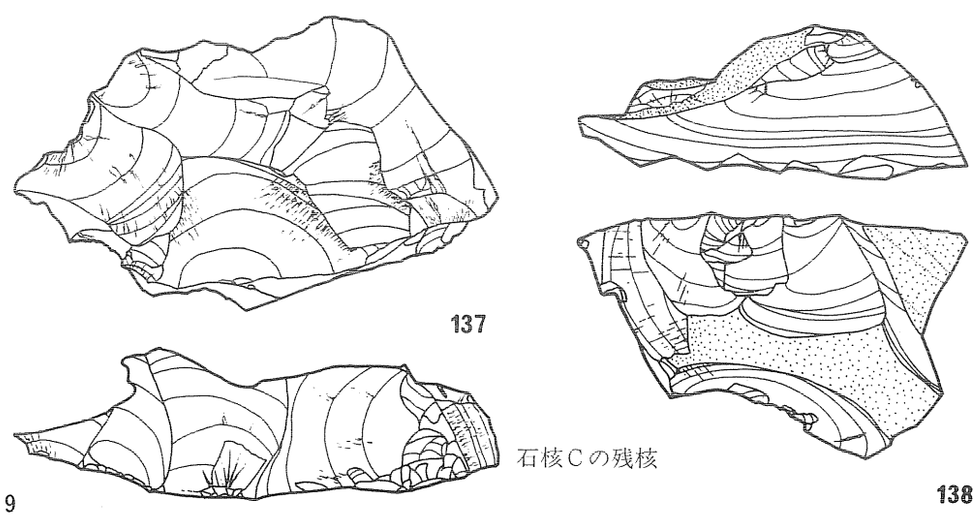
第87図　接合資料７・８


石核C
石核B
石核A

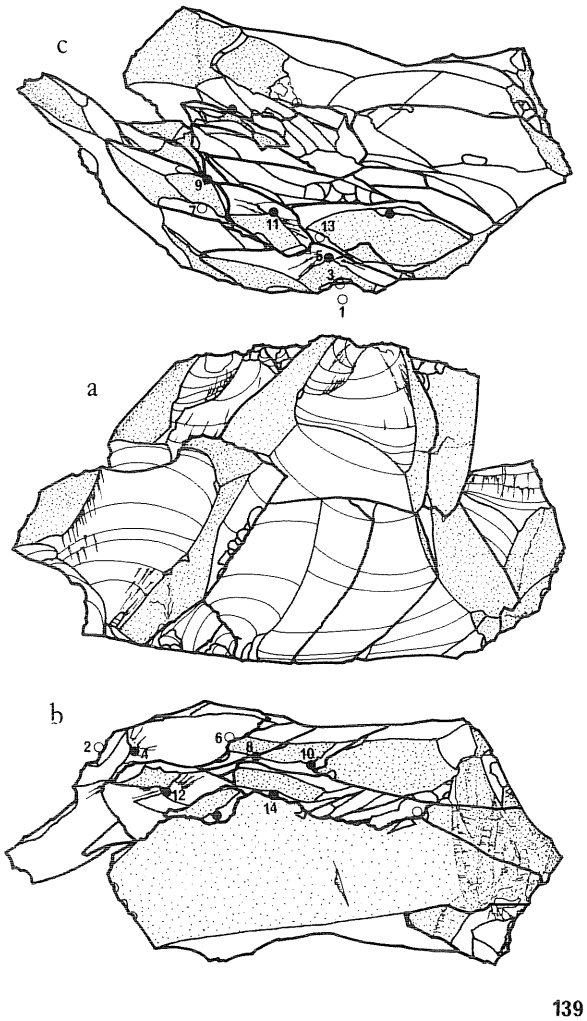

石核Aの残核
135


a
b
b′
a′
134

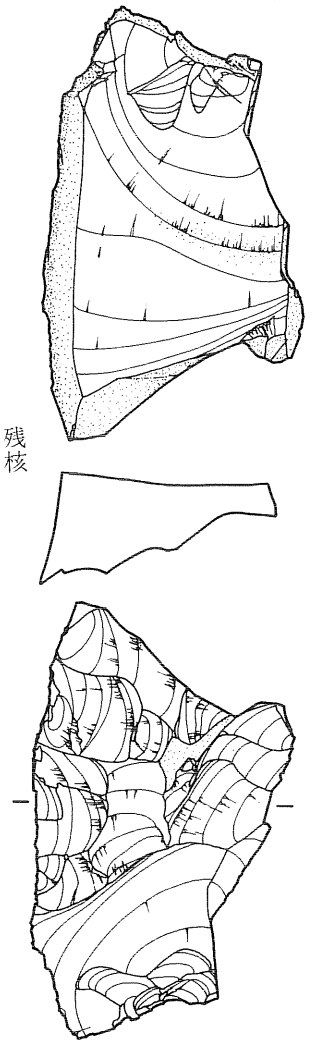

石核Bの残核
136

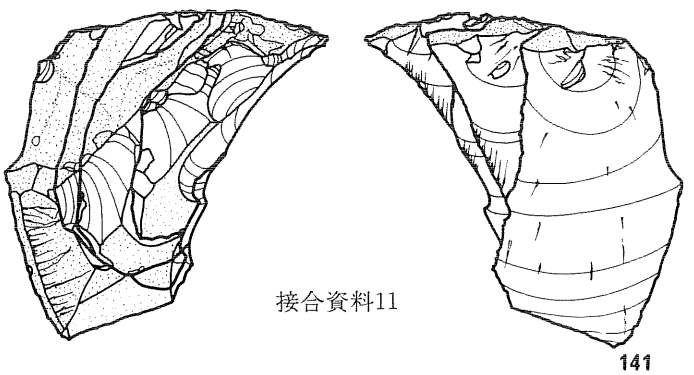

0
5cm
137
石核Cの残核
138

第88図　接合資料 9



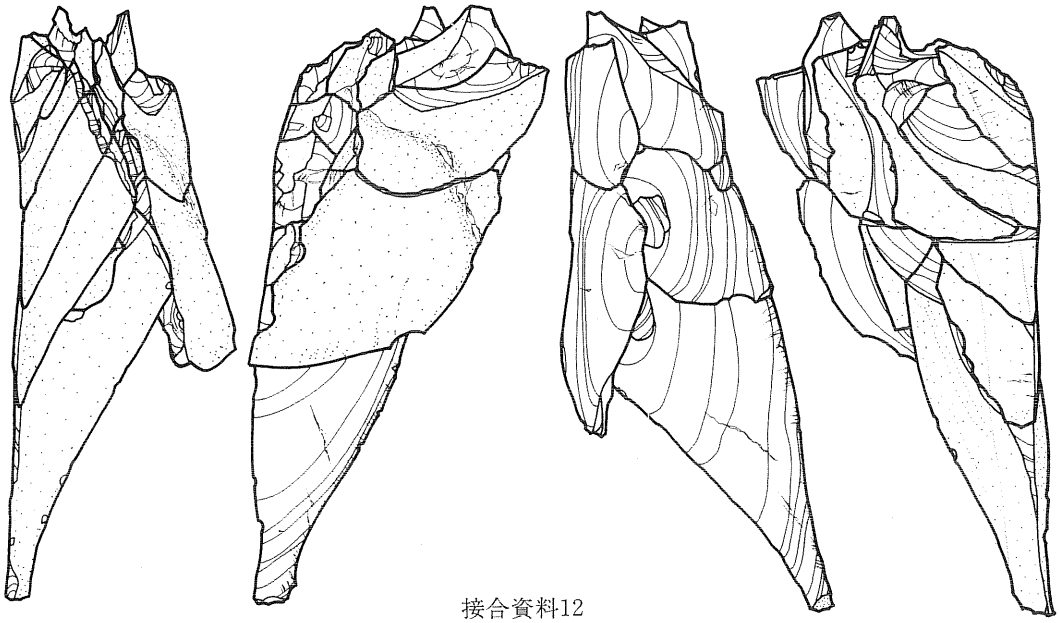
接合資料10





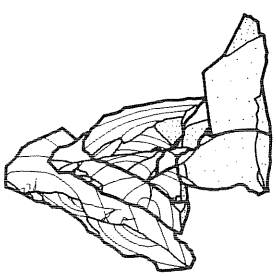
接合資料11

第89図　接合資料10・11

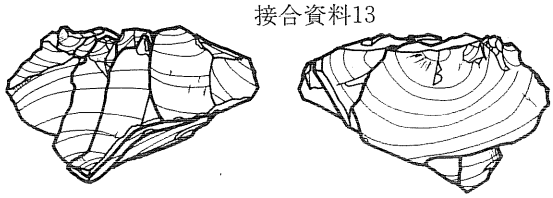


接合資料12

142

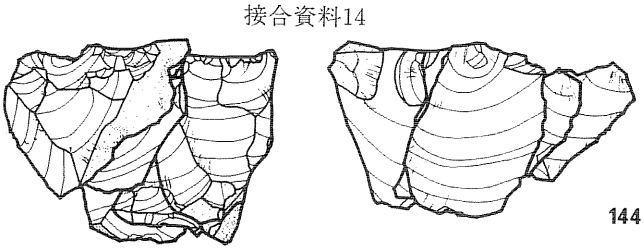


接合資料13



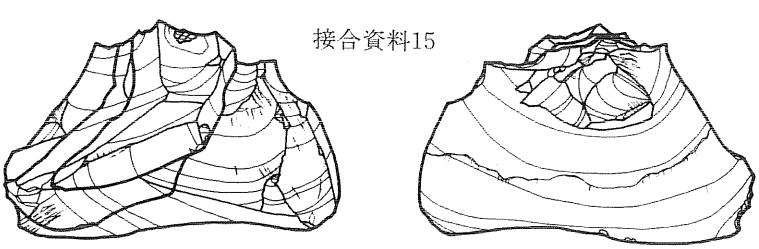
143

接合資料14



144

接合資料15



145

0　5cm

第90図　接合資料12・13・14・15

法などを比較してみると、近似した状況、内容を持っていることがわかる。これらの似ている諸要素のうちのいくつかについて比較してみると以下のようになる。

①　出土層位と出土状況：２つの遺跡の石器群は、黒色表土下の漸移層から出土しはじめ、その下の黄褐色ローム層中に生活面を置いた単一の時期のものであると考えられる。両者ともに直径12m前後の円で囲まれる範囲内に遺物が集中する。

②　石器組成：両者ともに台形様石器を主体とし、それにわずかながら掻器を伴う。台形様石器Ⅰ類はこれまで「日ノ岳型」、「枝去木型」とよばれて来たものであり、台形様石器Ⅱ類は、これまで「ウワダイラ型」とよばれていたものに似ている。(注1) なお、Ⅰ類は風無台Ⅱ遺跡の34点に対し、松木台Ⅱ遺跡では23点とやや少なく、全体の形状、二次加工のあり方も前者の方に整ったものが多い。Ⅱ類では、松木台Ⅱ遺跡のⅡ－ａ類が風無台Ⅱ遺跡には見られない。掻器は、両遺跡のものとも、長幅指数200前後の部厚い剝片の先端に刃部を作出したものが主体である。松木台Ⅱ遺跡の掻器Ⅲ類は風無台Ⅱ遺跡では見られない。風無台Ⅱ遺跡のハンマー・ストーンを除いてこの他の石器、例えば彫刻刀形石器などは２つの遺跡ともに存在しない。

③　剝片剝離の方法：２つの遺跡とも石刃技法は全く存在せず、いわゆる「不定形剝片」だけを生産する剝片剝離の方法に依っている。この方法は大きくは、Ａ～Ｅ類の５つの種類があり、両遺跡とも４つずつの種類を持っているが、その中で舟底状あるいは盤状の石核から剝片を得る方法は松木台Ⅱ遺跡にはなく、代わりに同遺跡では両設打面から剝片を得る方法がある。これら５つの剝片剝離の方法は、打面調整、作業面調整などのいわゆる調整技術を全く持たず、打面と作業面を頻繁に変えながら剝片剝離作業を進行させる方法が主体となっている。

以上の①・②・③から、松木台Ⅱ遺跡と風無台Ⅱ遺跡は、同時に在存した遺跡ではないかとの疑いもあり、剝片間での接合作業なども試行してみたが、接合するものは全くなかった。恐らくは、同一の生活基盤、文化内容を持った２つの小集団がほぼ同時に２つの遺跡の地に生活の跡を残したものか、同一の集団がそれほどの間をあけないで、大体同じ土地に戻ったかしたものであろう。

なお、２つの遺跡での母岩のあり方、接合関係を比較してみると、風無台Ⅱ遺跡では、遺物集中地点外で製作された石器が（４点の黒曜石製台形様石器など）確実に存在し、各母岩の中にも、他の地で剝片剝離作業が行われた後、剝片として遺跡に持ち込まれたと思われるようなものがあるのに対し、松木台Ⅱ遺跡では、そのような疑いのあるものはほとんどない。

(3)　松木台II・風無台II遺跡の発見の意義

松木台II遺跡の編年的な位置については(2)で述べたように、風無台II遺跡とほぼ同じ時期のものと考えられるが、その具体的な位置づけについては現在のところ不明と言わざるを得ない。

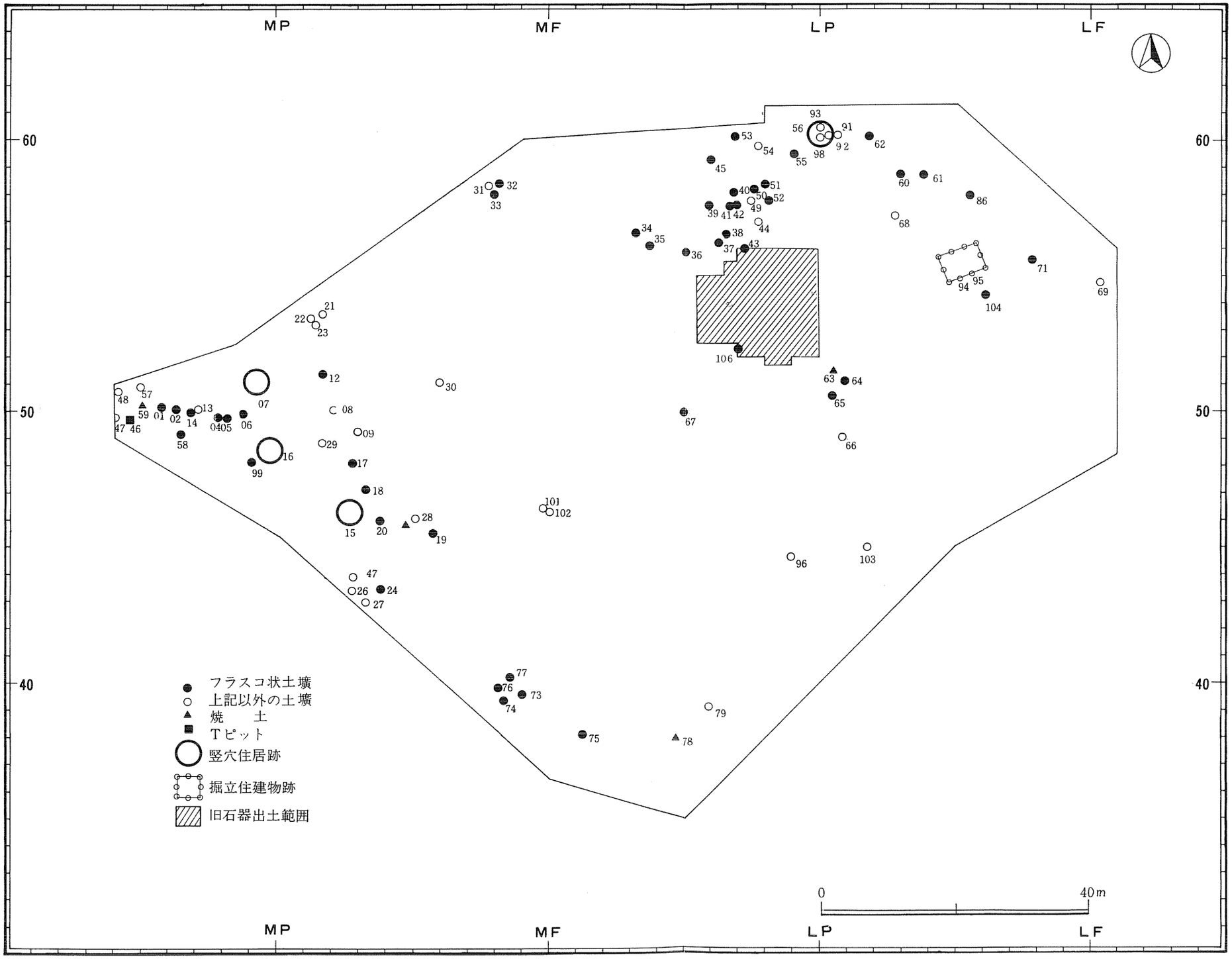
ただ、風無台II・松木台II遺跡の発見は、第２節でも触れたように、台形様石器を主体とする石器群とその文化を、汎日本的な視野で考えなければならない状況にまで導いたことに意義がある。それはまた、これまで、極めて散発的な出土例の１つとして把えられてきた山形県越中山K地点の国府型ナイフ形石器[注2]や、石刃石器群が主体を占める東北地方にあって、全く異質の技法として存在するような感のあった米ヶ森技法及び米ヶ森型台形石器の存在[注3]が、例外的なものではなく、確固たる基盤を持った文化の一つとしてこの東北地方に存在した可能性を物語るものかもしれない。

いずれにしろ、可能性を可能性としてのみ止めておくことなく、今後は、これらの石器群が包含されている土層の地質学的な究明や、縦長の剝片を主体とする石刃石器群に対して、不定形あるいは横長の剝片を主とする（いわゆる石刃技法を持たない）石器群とその分布や、散在するかに見えるそれら石器群の対比などによって、これら石器群の出自及び編年的な位置を明らかにして行かなければならないと考えられる。

注１．松木台II遺跡II－ａ類は、全体の形状からすれば「日ノ岳型」に似ているが、二次加工のあり方などに疑問点もあり、Ｉ類には含めなかった。なお、小畑弘己（「台形石器」『季刊考古学』　第４号　1983）は「ウワダイラ型台形石器」を「縦長剝片の一辺を切断して長方形に剝片調整を加えたものである」としているが、ウワダイラ型台形石器をこのように把えるとすればここでいうII類の中でウワダイラ型台形石器に含まれるものはほとんどない。

２．酒井忠一、加藤稔　『越中山遺跡』　致道博物館　1976

３．米ヶ森技法がどこでどのような経過から生まれたかについては、今後の調査研究に期さなければならないが、風無台II、松木台II遺跡のような技術基盤からそれが生まれた可能性も大いに考えられるところであろうと考えている。



第91図　風無台Ⅰ遺跡遺構配置図

第６章　七曲台における縄文時代～古代の調査

第１節　風無台Ｉ遺跡

１　遺構について（第91図）

遺跡は、七曲台地内で最大の沢によって北半を東西に二分された東側の北縁で、標高41.5～42.0mの平坦面に位置している。遺跡の北には岩見川とそれによって形成された狭小な沖積地さらには和田丘陵（標高50m前後）と太平山丘陵（標高100～150m）が連なり遠くには秀峰太平山（標高1,170.6m）が臨まれる。遺跡の南側にはこれも沢に面して、今回調査対象外となった風無台IV遺跡（縄文時代中期後半）が、沢を越えた西側には本遺跡と同一標高で風無台II・松木台II遺跡が並んでいる。

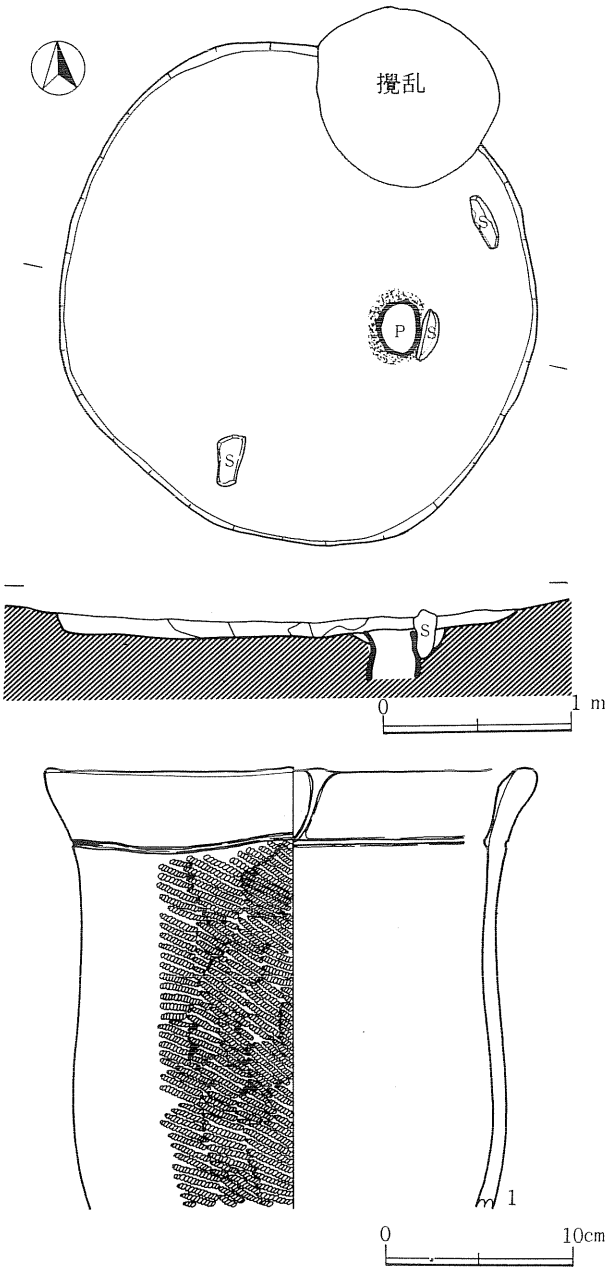
検出された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡４軒、古代の掘立柱建物跡１棟、土壙79基、Ｔピット１基、焼土の散布する箇所４ケ所である。このうち遺物の全く出土しない遺構については、時期が明確にされる遺構との形態的な比較等でその時期を把握するしかない。

土壙を中心とする85の遺構群は、台地の北縁に沿って東西に展開し、とりわけ遺跡内中央北辺と西辺にそのまとまりをみることができる。中でも最も遺構数の多いのが北辺でＳＩ56を初めとして39の遺構が、台地が岩見川に向って急傾斜し始める肩部に沿って東西に広がり、また西辺では３軒の竪穴住居跡を内側にして舌状に伸びる台地先端まで直線的に遺構が確認される。この他に遺跡南側に数基の土壙がまとまりをみせる。

４軒の竪穴住居跡は、ＳＩ56を除けばＳＩ07、15、16は円形を呈し、土器埋設炉を有すること、さらには柱穴が確認できない等共通した点が窺えるが、ＳＩ15の炉のように埋設土器の口縁が住居内中央に向って傾斜するものもある。

遺跡内東側に位置する掘立柱建物は一度建て替えが行われたものであるが、同時期と考えられる遺構・遺物とも他には全く検出されていない。

79基に及ぶ土壙はその形態から大きくはフラスコ状土壙（従来使用されてきたフラスコ状・袋状・ビーカー状土壙を総称する）47基と平面形が円形ないし楕円形を呈し、断面形が鍋底や鉢状を呈する土壙32基とに分けることができる。出土する遺物から、これら土壙群が、縄文時代前期後半、同後期初頭、同晩期から弥生時代に属するものと考えられるが、住居跡と同時期の縄文時代中期後半の土器を出土する土壙は全くない。



第92図　７号竪穴住居跡と炉埋設土器

①　竪穴住居跡

７号竪穴住居跡　（第92図）

遺跡内西辺の遺構群の中に位置し、８ｍほど南には16号竪穴住居跡がある。北側で一部撹乱を受けているが、直径2.5ｍの円形を呈する。壁は西側で10cmほど立ち上るが東側では明瞭でない。床は炉の東側が堅くしまっている他は比較的柔らかく、柱穴は住居内、壁外にも全く確認できない。

炉は住居中央よりやや東側に設けられた土器埋設炉であり、土器を支えるように片側に自然礫を添えている。土器を中心に直径50cmほどの範囲が非常によく焼けているが炉の掘り込みは明瞭でない。

埋設土器は平縁で、外反する口縁から一度ゆるくすぼまり胴部下半で丸く膨む深鉢形土器である。胎土は白色砂粒を多く含むも緻密である。二次加熱のため非常に脆くなっている。口縁から頸部にかけては無文で、ＬＲ縄文施文の胴部とは不安定な一条の沈線で画される。土器内面の口縁部には粘土紐貼付による「ノ」の字状の隆帯があり、その末端は頸部のつまみ出しによる細い隆帯に連結する。

住居跡覆土中からの遺物はほとんどないが、炉埋設土器から縄文中期後半の住居跡である。

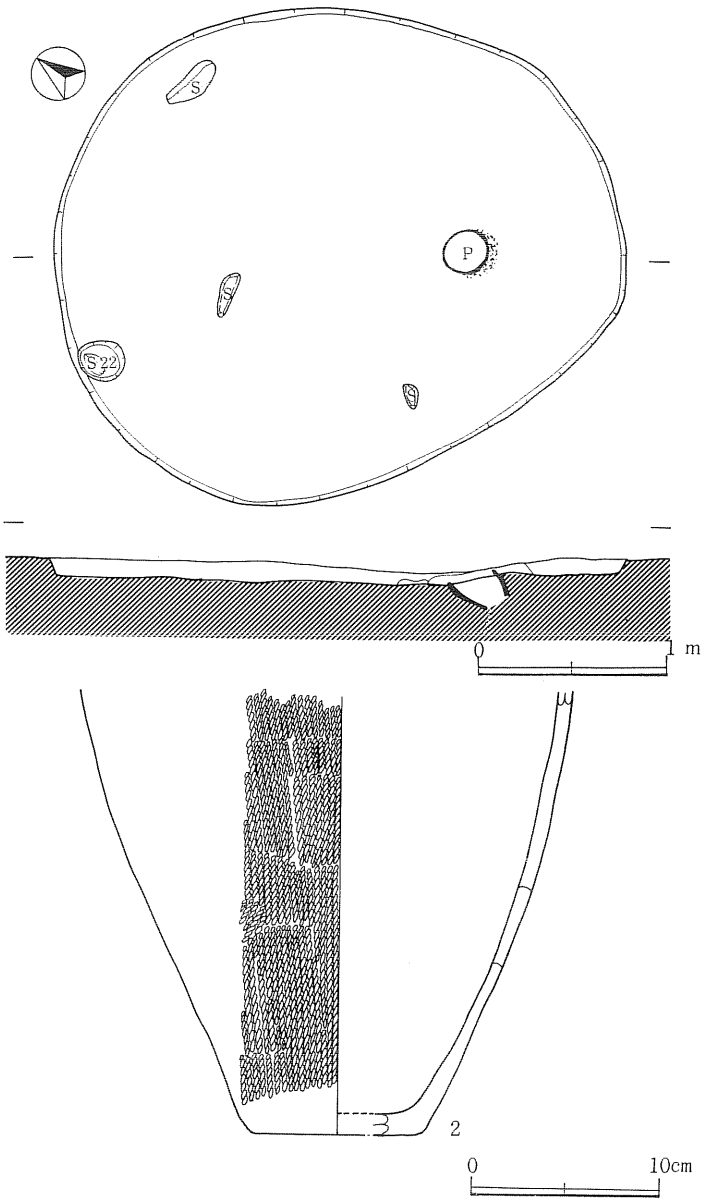
15号竪穴住居跡　（第93図）

遺跡内西辺の遺構群に位置し、ＳＩ16の南東にある。南北3.0ｍ、東西2.5ｍほどのほぼ円形

を呈する。壁は10cmほどで低いが立ち上りは明瞭である。床は炉の南側の一部が非常に堅いほかは、比較的柔らかい。３個の自然礫が床面に接している。柱穴は北西の壁際に１個確認されただけであるがこれには拳大の礫が入っている。

炉は住居中央やや南側に設けられた土器埋設炉であり、土器は口縁が住居中央に向くように傾斜して埋設されている。炉の掘り込みは明瞭でない。

炉埋設土器は胴部上半と底部を欠くものであるが、底部から直線的に外に開く深鉢形土器であろう。胎土は砂粒を含むも緻密であるが、二次加熱のため脆くなっている。撚糸文が全面に施文される。住居跡覆土中からの遺物はないが、炉埋設土器から縄文中期後半でＳＩ07と同時期と考えられる。

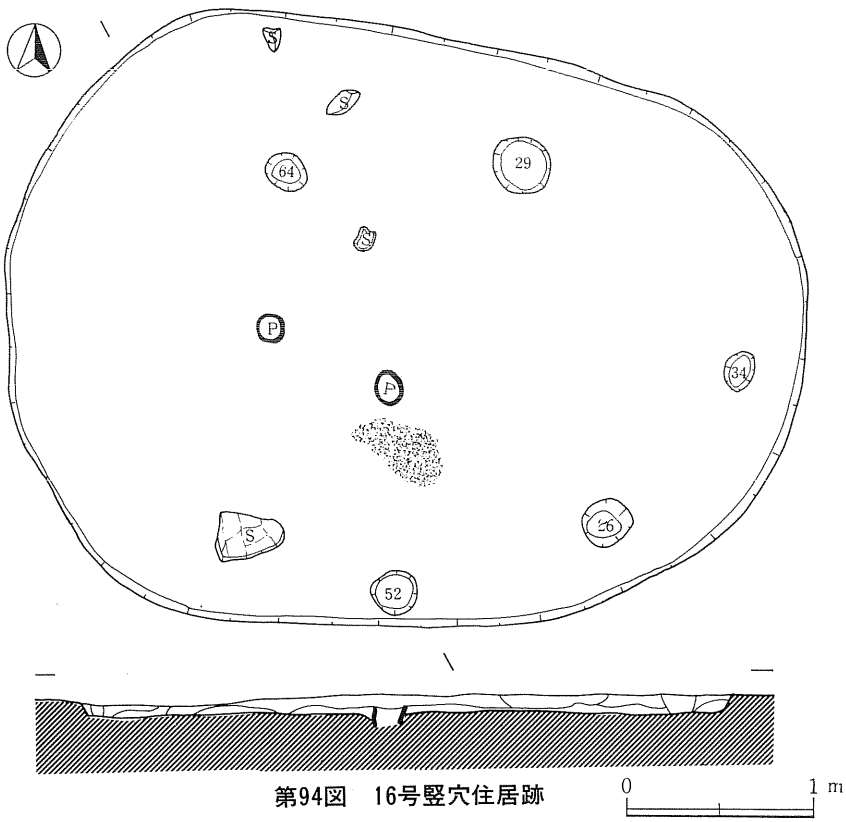


第93図　15号竪穴住居跡と炉埋設土器

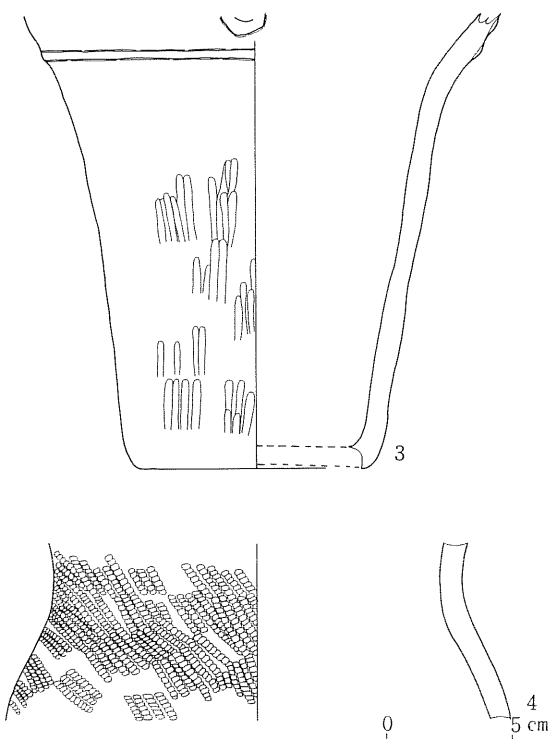
16号竪穴住居跡（第94図）

遺跡内西辺の遺構群に位置しＳＩ07の南側にある。南北3.2m、東西4.2mで楕円形を呈する。壁は10cmほどで、立ち上りは明瞭である。床は比較的しまっており、炉の南側が特に堅い。床面には、炉の北西に埋設土器がありまたその南側に偏平な凝灰岩が検出されている。柱穴は住居内東側で床面からの深さ30cm前後のものを確認するが、西側では確認できない。

炉は住居内中央部に設けられた土器埋設炉で、土器の南側が非常によく焼けて堅くしまっているが炉の掘り形は確認できない。炉の埋設土器は、底部と口縁端部を欠くが、底部から胴部



第94図　16号竪穴住居跡



第95図　同上炉埋設土器と覆土中土器

にかけては直線的に外に開き、頸部からは丸みをもつ無文の深鉢形土器である。胎土は緻密で焼成も良好であり二次加熱による変色も顕著でない。口縁部にはボタン状の突起があり頸部には粘土紐貼付による隆帯が一条めぐっている。胴部下半から底部にかけては器面成形のためのケズリ痕が顕著である。

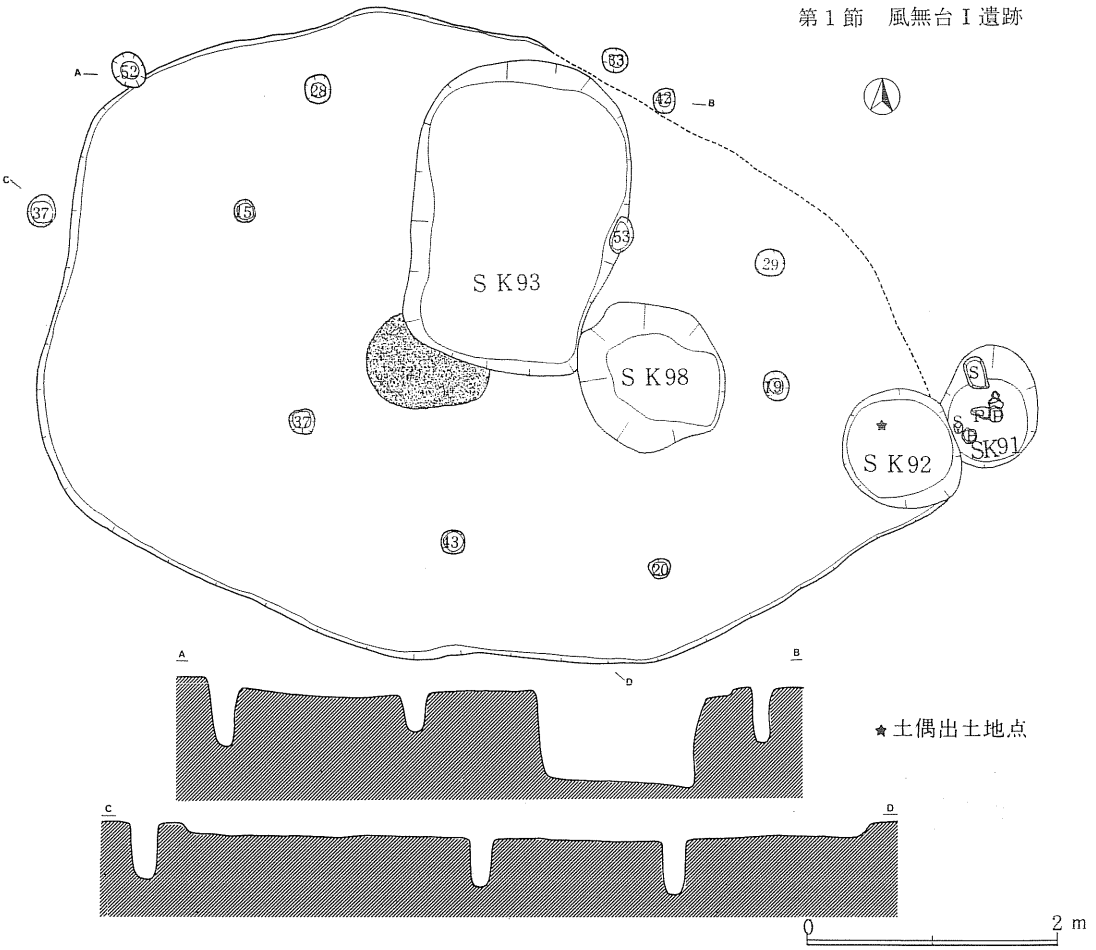
土器４は、口縁部と胴部下半を欠くが、やや外反する口縁部から頸部へ、そして丸く膨みをもつ胴部に至る壺形土器であろう。胎土は白色の砂粒を含むも緻密であるが焼成は不良である。縄文はＲＬ縄文である。

住居跡覆土中からの他の遺物はないが、炉埋設土器から縄文中期中葉であろう。

56号竪穴住居跡　（第96図）

遺跡内中央北辺の遺構群の中に位置している。北東側のプランが明かでないが、およそ南北5.0m、東西7.2mの楕円形を呈するやや大型の住居である。床は全体的に柔らかい。

柱穴は住居内外に深さ20～40cmほどのも



第96図　56号竪穴住居跡

のが確認されている。

炉は中央部に床の焼けた部分があり地床炉と考えられる。

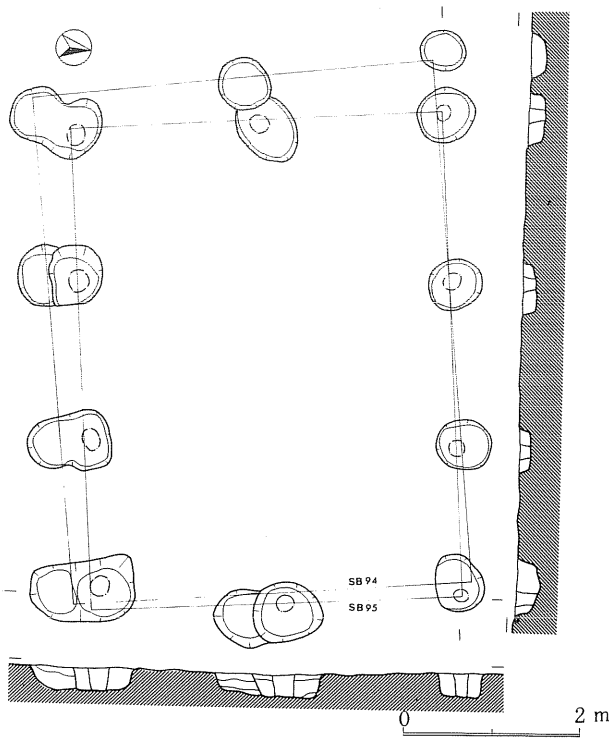
床面出土の土器は６（第100図）のような太い隆帯とボタン状突起に縦位に縄文を押圧するものや縄文原体を横位に押圧する７などがあり縄文中期前半と考えられる。

②　掘立柱建物跡

ＳＢ94・95掘立柱建物　（第97図）

東西棟桁行３間、南北梁行２間の掘立柱建物跡である。ＳＢ94は柱間平均距離が桁行5.7m（東から1.9m＋1.9m＋1.9m）、梁行4.2m（北から2.1m＋2.1m）であり計画尺による桁行19尺、梁行14尺で１尺は平均30cmである。柱掘形は円形を呈する。

ＳＢ95はＳＢ94の北側桁柱の３本をそのままに若干縮小されたものである。柱間平均距離は桁行5.4m（東から1.7m＋1.8m＋1.9m）、梁行4.1m（北から2.1m＋2.0m）であり計画尺による桁行18尺、梁行14尺である。柱穴掘形はほぼ円形で柱痕は直径20cm前後である。ＳＢ95の



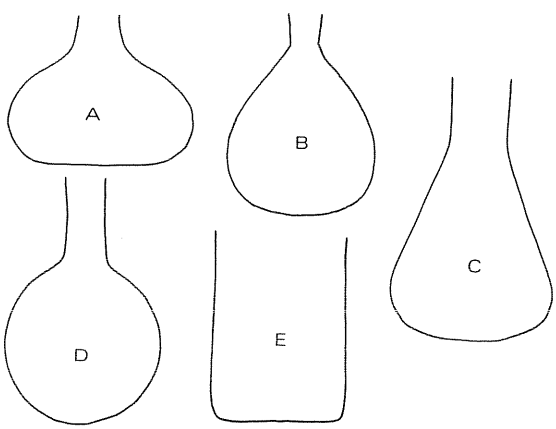
第97図　ＳＢ94・95掘立柱建物跡

柱掘形から土師器の細片が３点ほど出土しているだけで正確な時期は分らない。本遺跡からの古代の遺構・遺物も他には全く出土していないし、また七曲台全域においても古代の遺構・遺物は、わずかに松木台Ⅱ遺跡において確認されるにすぎない。

③　土　壙（第98・99図）

本遺跡で確認された79基の土壙群は大きくはこれまでフラスコ状、ビーカー状、袋状土壙（ここではこれらの総称としてフラスコ状土壙を使用する）とそれ以外とに別けることができる。特にフラスコ状土壙は79基のうちの47基とその半数以上を占めており、ここではそのフラスコ状土壙を中心にその断面形からＡ～Ｆタイプまで分類したが、これら土壙群はその上面が削平されている可能性が強く、その分類の基準は底面とそこから立ち上る壁の状態を中心とする分類となる。尚、土壙の出土遺物に関しては④の出土遺物の項で詳述する。

Ａタイプ　底面が平坦で胴部最大径の位置が底面よりやや上にあり、丸くふくらみながら頸部で一度すぼまりさらに外に向って開くものでＳＫ01・04・99等21基であり、特別なまとまりは見られない。遺物を出土する土壙は５基で、縄文時代前期末葉ＳＫ91、同中期中葉ＳＫ92、同後期初頭ＳＫ01・04・同晩期前半ＳＫ67、弥生時代ＳＫ24・38である。



第98図　フラスコ状土壙分類模式図

ＳＫ91・92は北辺遺構群の中に位置して特にＳＫ92はＳＩ56・ＳＫ91を切っており、またその覆土上層において土偶（第101図）

が出土している。ＳＫ01・04は西辺遺構群の中に位置している。ＳＫ01からは縄文時代後期初頭の完型土器３点（第100図）が一括出土しておりこの時期の土器組成を知る上で好資料であり、またこの土壙の底面直上には堅果類を含む炭化物層がある。この他ＳＫ17の覆土上層からも炭化した栗の果皮が多量に検出されている。

Ｂタイプ　平坦な底面から丸くふくらみながら頸部に至るもので、Ａ類より最大径の位置が上になるＳＫ42・50等７基である。ＳＫ05・75を除く５基が北辺の遺構群の中に位置している。遺物はＳＫ50等５基から縄文時代晩期の土器（第100図）が出土している。

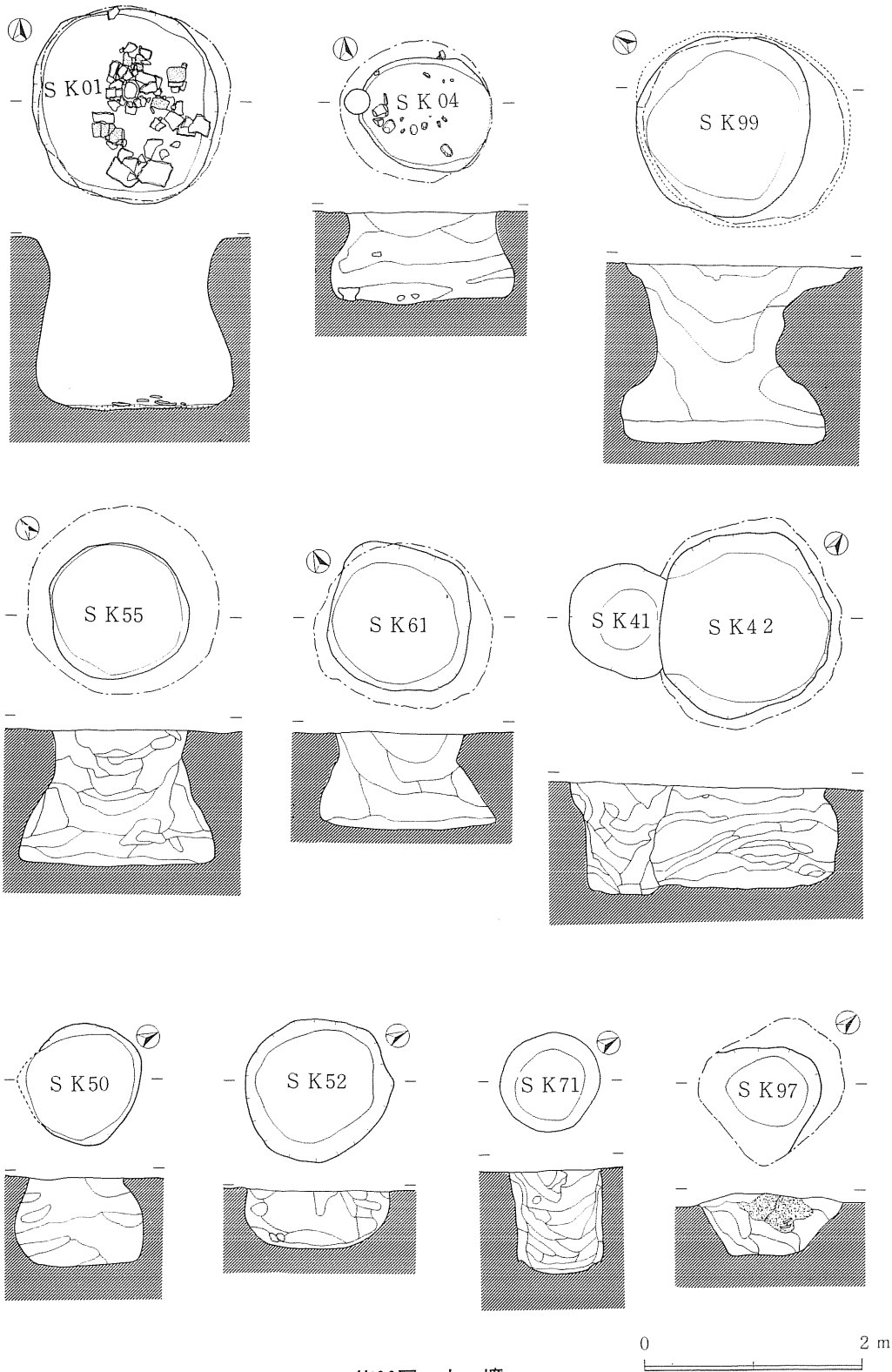
Ｃタイプ　平坦な底面から直線的に頸部にすぼまり、頸部から開口部に向ってほぼ直立するものでＳＫ55・56等13基である。このうち９基までが北辺の遺構群の中に位置している。遺物が出土したのはＳＫ39・61・63の３基で特にＳＫ39からは完型の深鉢形土器（第100図）が、底面よりやや上で横倒しの状態で出土している。いずれも縄文時代晩期の土器である。

Ｄタイプ　底面も丸みをもち全体が球形に近くなるものでＳＫ52・65の２基である。いずれも北辺の遺構群の中に位置し、ＳＫ65出土の土器（第101図）は縄文時代晩期である。

Ｅタイプ　筒形でこれまでビーカー状と呼ばれてきたものである。底面径・胴部径・開口部径がほぼ同じになるものでＳＫ41・71等６基である。覆土は自然堆積の顕著な例を示す。このタイプの土壙からは遺物は全く出土しない。

Ｆタイプ　Ａ～Ｅ類以外の土壙を一括しており31基である。平面形が円形ないしは楕円形を呈し断面形もスリ鉢状を呈するものであるが、遺物を出土する土壙が少なく時期を詳述できるものではないがＳＫ97のように焼土がマウンド状になっており縄文時代後期前半の土器（第101図）を出土するものもある。

本遺跡検出の土壙群を以上のように形態分類してみたが、この中でこれまでフラスコ状土壙と呼ばれてきたいわゆる下ぶくらみの土壙と、ここでいう筒形をなすＥタイプとを形態上から同一視するのは若干の疑問が残るし、またＦタイプとされる土壙もさらに細分して分類する必要があるかもしれない。一応これら土壙群の分布をみてみるとＢ・Ｃ・Ｄタイプが北辺遺構群の中にある程度のまとまりをみせるのに対してＡ・Ｅ・Ｆタイプは北辺・西辺・南辺の三ヶ所に点在するようである。時期的には縄文時代前期・同中期・同後期が１～３基でその数では晩期にピークを向えているがこれら土壙群の出土遺物が少なく、タイプ別による分類と時期別の相関関係を云々するまでには至らないのが実情である。このことは逆に本遺跡が少なくとも縄文時代前期末葉から縄文時代晩期に至るまでフラスコ状土壙を構築する場所に適した所であり、またこの一連のフラスコ状土壙がこの長い期間にわたって同一機能を与えられた遺構として構築されたことを物語っている。



第99図　土　壙

④　Ｔピット

西辺の遺構群の中でも最も西に位置するＳＫＴ46である。長軸を東北にとり、1.15m、南北0.5ｍで深さ1.1ｍの楕円形を呈する。Ｔピットは本遺跡ではこれ１基である。

2　出土遺物について

本遺跡出土の遺物について、ここでは遺構内外出土の遺物を一括して説明を加えたい。

①　土　器　（第100～102図）

土器は縄文時代前期末葉、中期初頭、中期中葉、中期末葉、後期初頭、晩期、弥生時代と多岐にわたるが時期毎の遺物量は少ない。

前期末葉……ＳＫ91出土の21や29・30・31である。胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好である。木目状撚糸文が施されるもので円筒下層ｄ式である。

中期……初頭の土器としてはＳＩ56床面出土の土器５・６・７や27・34である。外反ぎみの口縁に四つの山形状突起があり、そこから隆帯が胴部上半の隆帯に垂下する。口唇部および隆帯上には縦位の縄文圧痕文、隆帯と口唇部間の無文部には二条の撚糸側面圧痕文が施される27に代表される土器で円筒上層ａ式である。

中葉の土器としてはＳＩ16の炉埋設土器３、ＳＫ93出土の22、その他32・33である。３は底部から胴部上半まで直線的に外に開き口縁部が外反しつつまるみをもつキャリパー形の無文深鉢形土器である。22は直立する口縁から底部にややすぼまる深鉢形の土器で胎土・焼成とも良好で厚さ0.5cmほどである。口縁部には異条縄文が施されるが、明瞭ではない。胴部上半には半載竹管による刺突列を２～３条の沈線で挟んでおり胴部には突起部と同位置で縦位に鋸歯状の沈線文が施される。その他胴部には数条一組の浅い沈線が曲線的に引かれているが判然としない。32・33はやや内反する口縁部下に太いうねった隆帯を貼付しその上に縄文を施したものでキャリパー形の深鉢になるものである。いずれの土器も県内ではほとんどその例をみない土器である。ＳＫ92出土の土偶26は、胎土が22と全く同じで厚手の板状の胴体に短いずんぐりした脚部が付く。胴部に縦に沈線が引かれ、胸部には二つの穴があり上半を折損している。

末葉の土器ではＳＩ07・15の炉埋設土器１・２や37がある。資料的には乏しいが大木10式の新しい時期のものである。

後期初頭の土器ではＳＫ01出土の８・９・10、ＳＫ04出土の11、ＳＫ97の出土の24・25それに35・38～40などがある。８は外反する口縁から頸部でゆるくすぼまり胴部でわずかにふくらみながら底部に至る深鉢形土器で、口縁部では２個１対の突起と単独の突起が対面する。胴部にはＬＲ縄文が施される。10も器形的には８に近似している。口縁部の４つの突起からは「八」

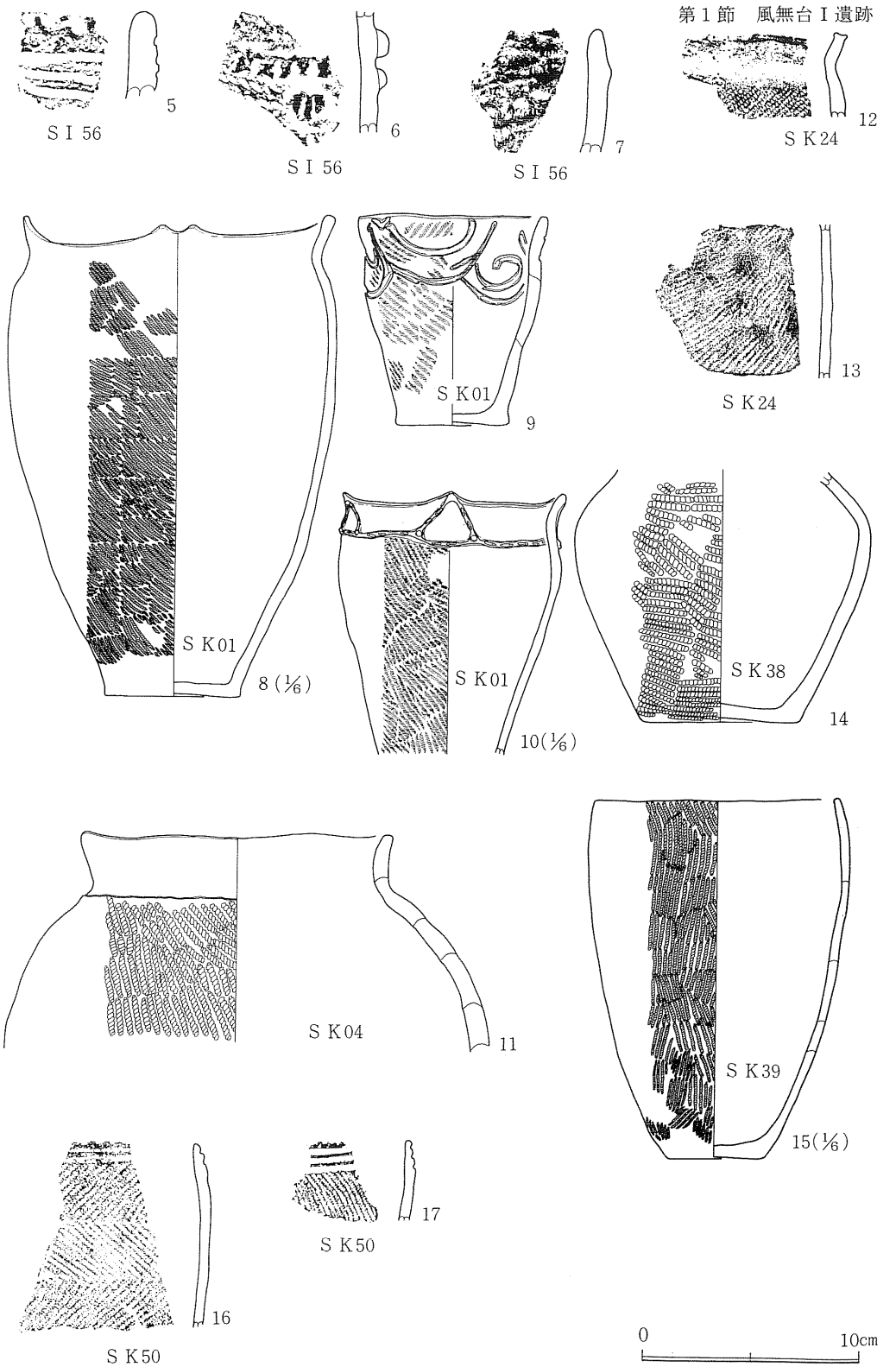
の字状の隆帯が伸び、無文の頸部と胴部とを画する隆帯に同化する。隆帯上には連鎖状の刺突が施される。９は小型の深鉢形土器でやや外反する口縁からほんの少し胴部上半ですぼまってそこから直線的に底部に至るもので、口縁には２条１組の沈線が弧状に引かれその起点と終点には粘土粒が貼付される。弧状の沈線間には渦巻文がこれも２条１組の沈線によって描かれる。胴部にはＲ縄文が施される。39～41は撚糸文を地文として、沈線で幾何学的文様の施されたものである。36・25は隆帯上に円形の刺突を施したものである。これら土器の中では８・９・10あるいは42等は門前式併行であろうし、11・39～41はそれより若干新しい時期のものであろう。

晩期の土器ではＳＫ39・50・61・65・67出土の深鉢形土器15～20が主体である。いずれも口縁部が内反ないしは直立ぎみで最大径が胴部上半にある土器で胴部には16のようにＬＲ・ＲＬ縄文による結束をもたない羽状縄文や19のようにＬＲ縄文とＬ縄文による羽状縄文が施されるものがあるが、他は単節縄文が施されるだけである。

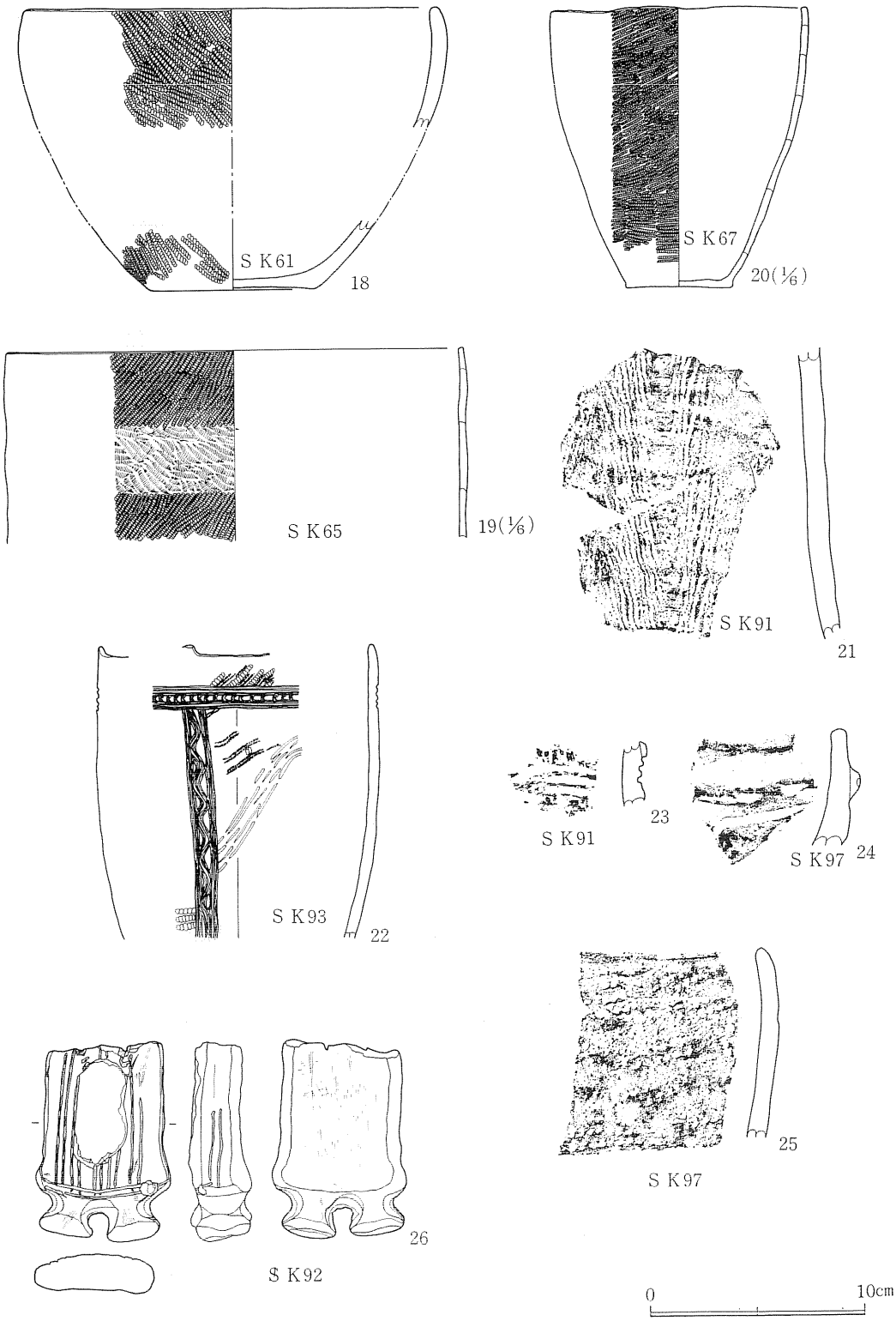
弥生時代の土器ではＳＫ24出土の12・13、ＳＫ38出土の14の壺形土器や42～49がこれにあたり、45～49は撚糸文を地文として沈線で菱形文を描くものである。14の壺形土器は横位にＬＲ縄文が施される。

②　石　器　（第103図）

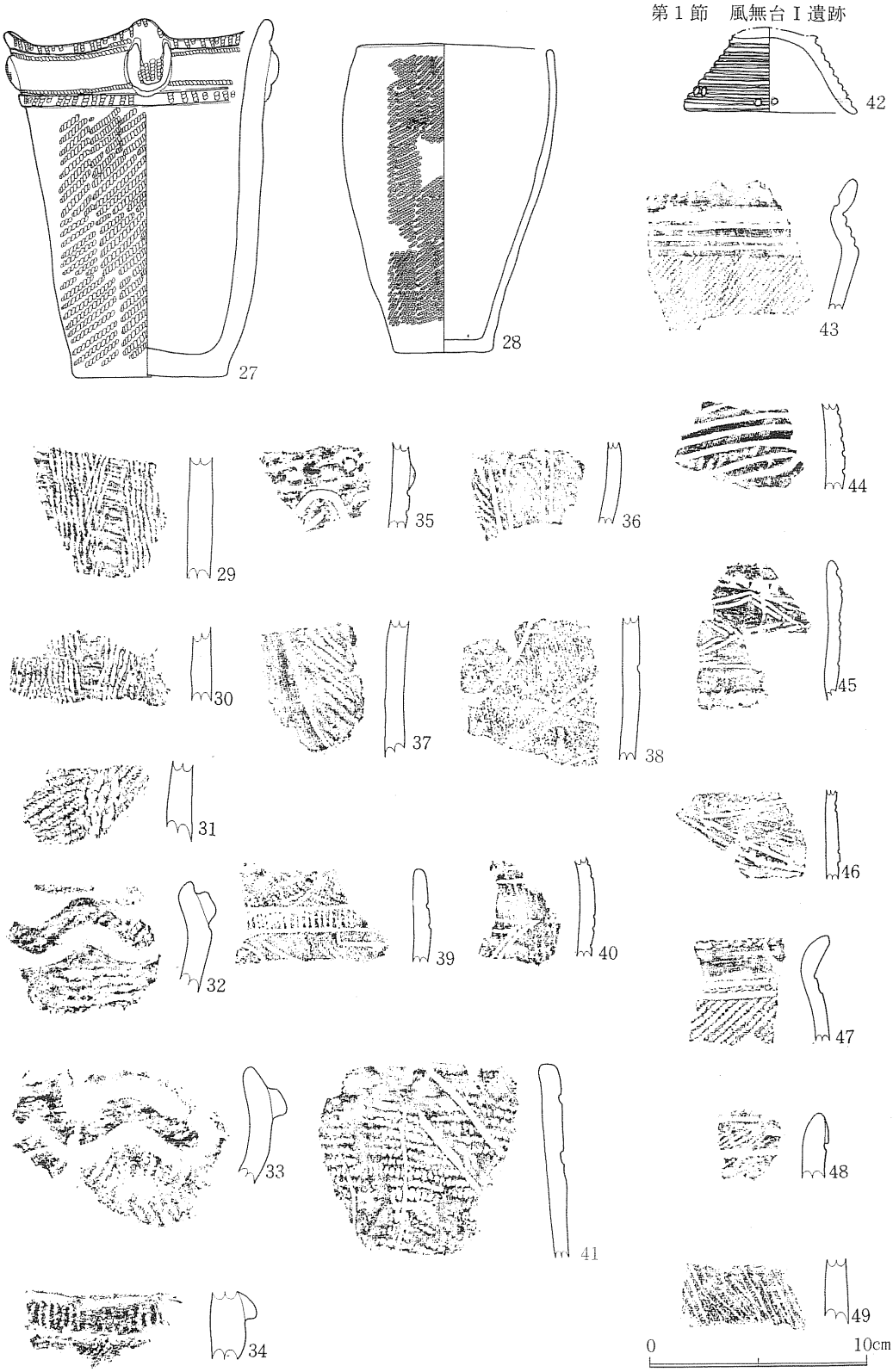
石器には両面に調整を施すヘラ状石器１～３・５・12、石鏃７～10、第１次剥離面を残しながら背面・主要剥離面の縁辺のみに調整剥離を施す石匙４・11、基部の破損状態が敲き痕を示す磨製石斧や石錘がある。特にＳＩ56からは１～３以外にも剥片に調整をわずかに加えただけの剥片石器が多量に出土している。



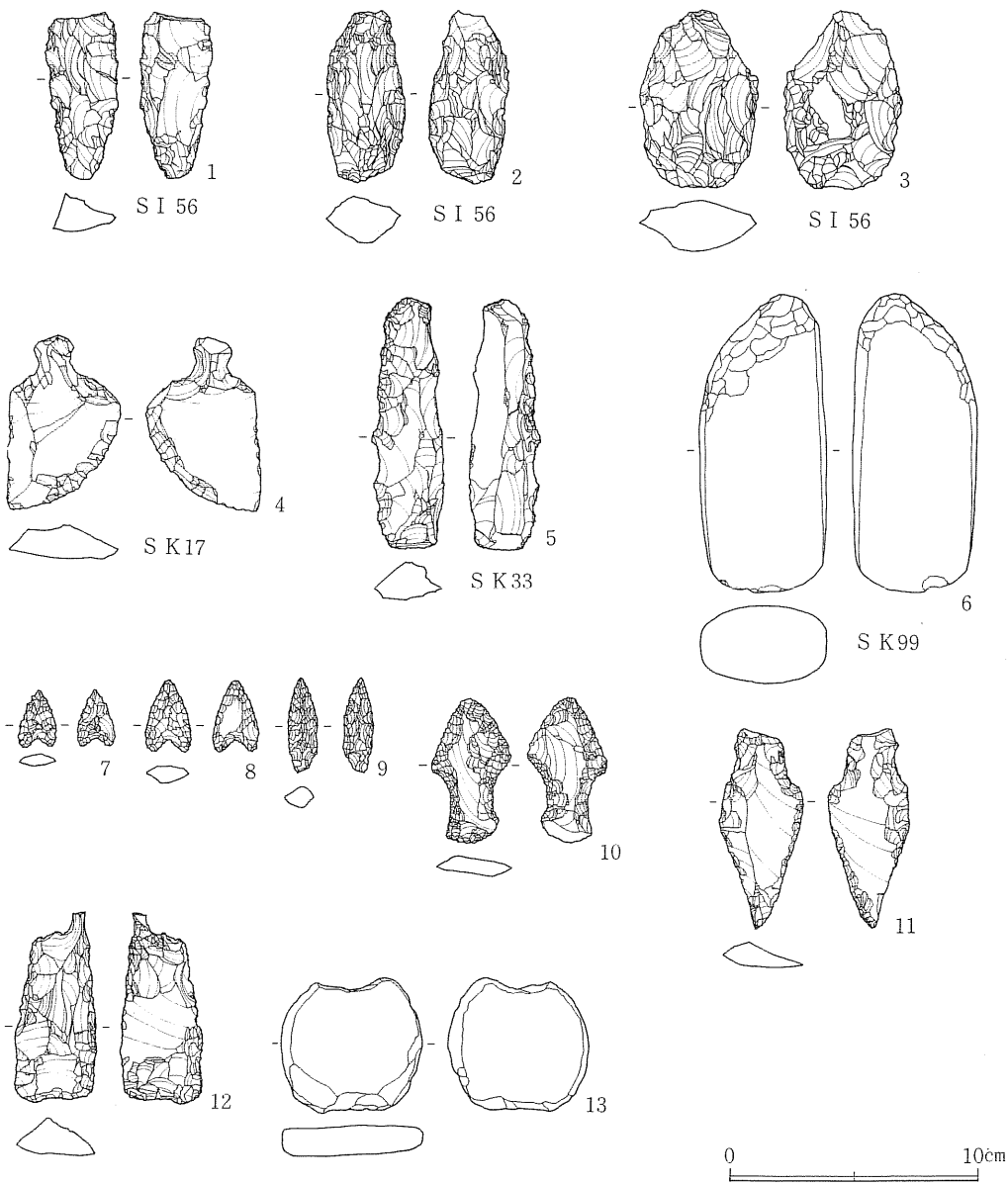
第100図　遺構内出土土器



第101図　遺構内出土土器・土偶



第102図　遺構外出土土器



第103図　遺構内・外出土石器

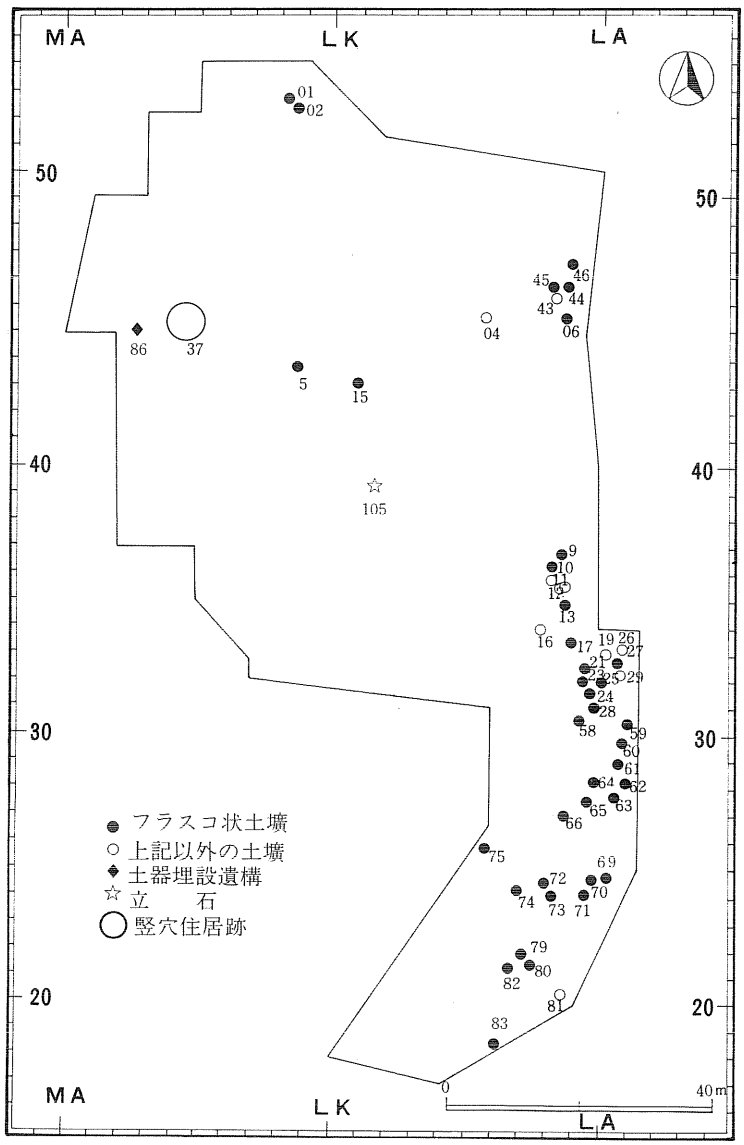
第２節　風無台Ⅱ遺跡

１　遺構について　（第104、105図）

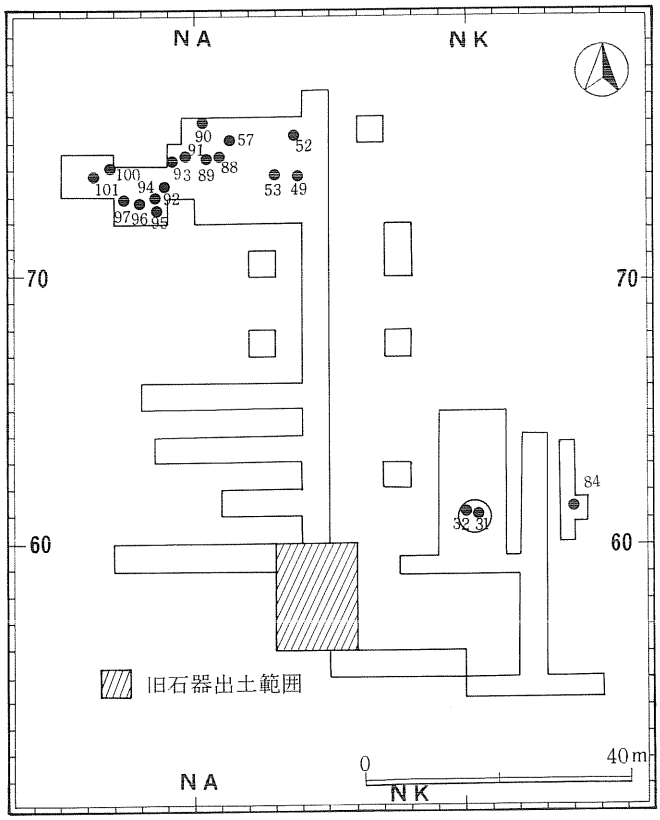
本遺跡は台地中央北端に位置し、北側直下には岩見川を臨むことができる。標高は41.5m前後で同一標高で西側には松木台Ⅱ遺跡が、東南側には風無台Ⅲ・石坂台Ⅱ遺跡が南北に連なっており、東側の沢を越えれば100mほどで風無台Ⅰ遺跡がある。

検出された遺構は、土壙70基、住居跡２軒、土器埋設遺構１基、立石１基である。また旧石器は遺跡内西側中央部ＭＰ・ＭＱ57・58グリットを中心に発見されている。

74に及ぶ遺構は第104・105図に示すごとく、その多くが遺跡東南の台地縁辺部と北西の縁辺部に集中するが、２軒の住居跡ＳＩ37は遺跡東側中央部に、ＳＩ104は西側中央部に位置している。遺構の時期は縄文時代晩期と弥生時代のものである。遺構外の遺物は住居跡周辺の黒色土中より出土する弥生時代の土器が中心であり、その他は遺構内からの出土遺物である。



第104図　風無台Ⅱ遺跡東側遺構配置図



第105図　風無台Ⅱ遺跡西側遺構配置図

①　竪穴住居跡

37号竪穴住居跡　（第106図）

遺跡中央東側で確認された弥生時代の住居跡で東西8.3m、南北7.4mのほぼ円形を呈するもので周溝と石囲炉を有するものである。

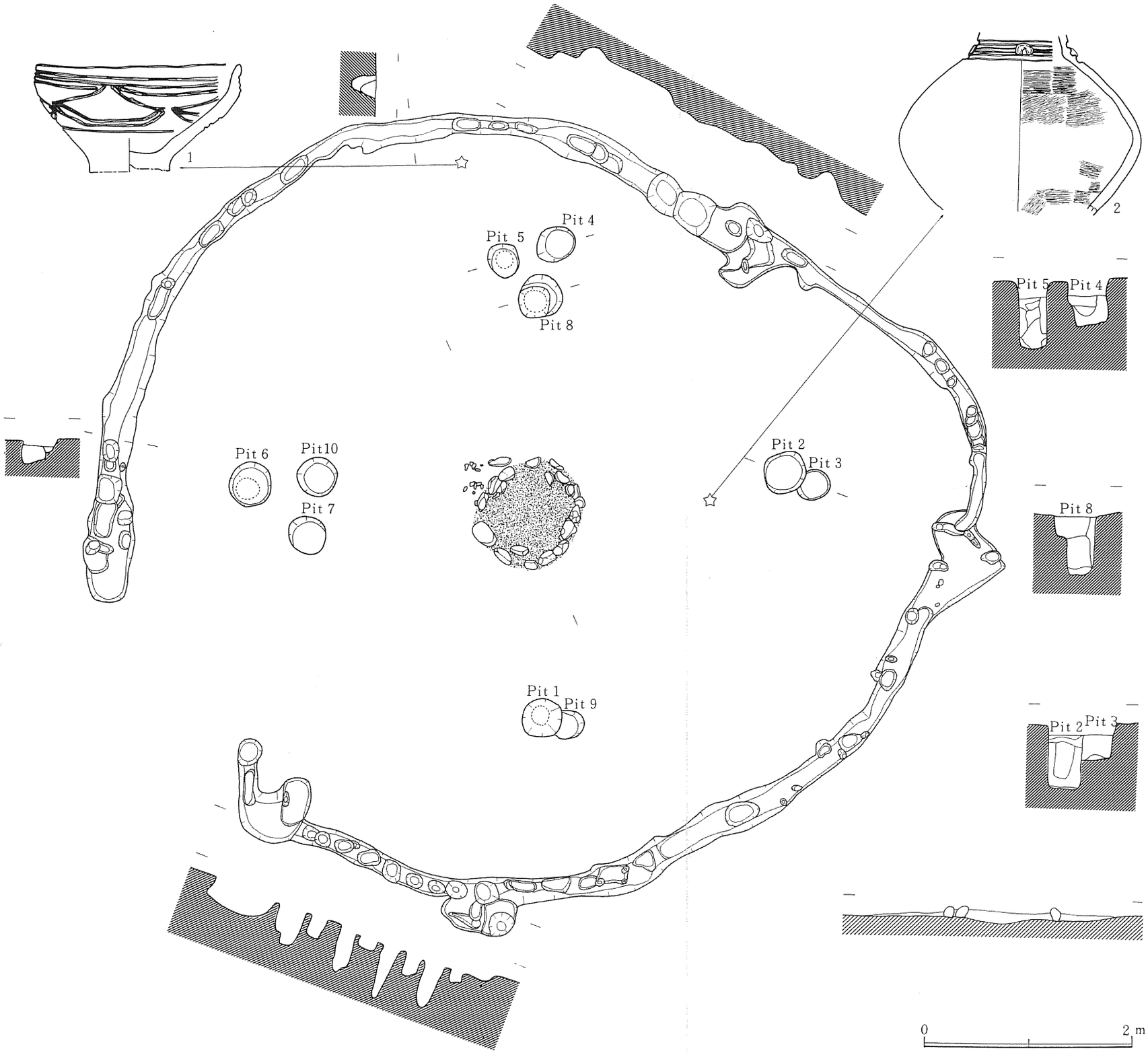
住居をめぐる周溝は上面幅は一定でないが底面幅は平均13cmほどで床面からの深さは平均で20cmほどある。この周溝は南西で２ｍほど途切れている。周溝の土層観察によれば一度少し内側に作り替えが行われている。周溝内には全体的に浅い小ピットが確認されているが、明瞭ではない。しかしながら周溝の南側の末端では、小柱穴８本が連結するように確認される。この小柱穴のうち４本は上面径20cm、床面から深さ60cmほど打ち込まれており先端は杭状に尖っている。

住居床面中央には直径約１ｍほどの石囲炉がある。炉内は強く焼けており、また炉周辺径2.5ｍほどの範囲にも焼土がみられる。炉の掘形は明瞭ではなく炉中央に向ってゆるく落ちこんでいる。炉の周辺の調査では、この炉の確認面よりやや下で径1.3mの範囲に石の抜取痕跡が確認されており炉に関して言えば一度縮小されていることになる。

床面は比較的柔らかいが、周溝がとぎれる部分から炉周辺にかけては堅くなっており、またこの周溝のとぎれている部分の東側には薄く砂利の敷れている部分が検出されている。

柱穴は４本で、二回の建て替えが行われ、３期にわたる住居跡であることがわかる。１期目はpit１、pit２、pit７、pit８によるもので柱穴の深さは60cm前後でpit８の底面では径20cmの柱痕が認められる。２期目はpit３、pit４、pit９、pit10によるもので深さ40cm前後である。３期目はpit１、pit２、pit５、pit６によるもので深さ70～80cmで、径20cmの柱痕が確認できる。pit１、pit２は１期めと３期めが同位置である。

床面出土の土器１は赤褐色を呈し胎土焼成とも良好で変形工字文が描かれ、低い台の付く浅鉢形土器である。２つの壺形土器は頸部の沈線上にコブ状の粘土粒が付され、それに刻みがつ



第106図　37号竪穴住居跡

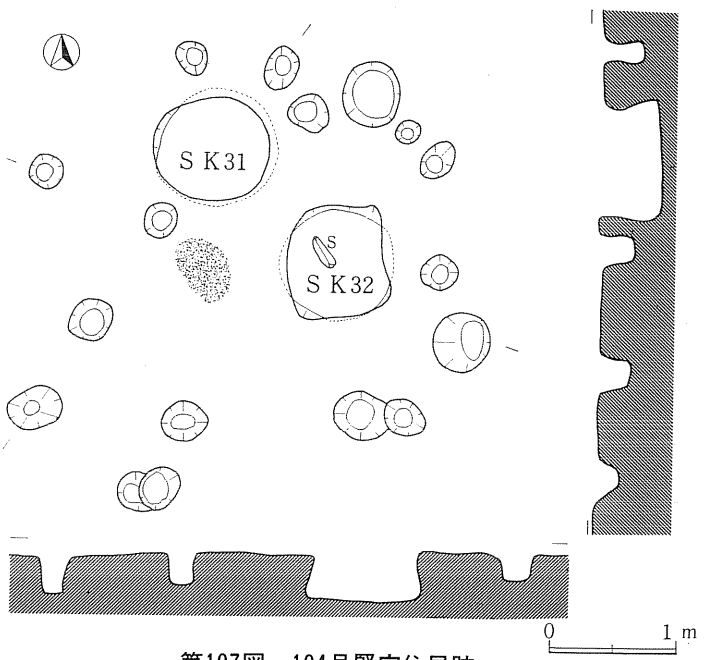
けられる。外面は黄白色を呈し、内面は黒色で頸部下には刷目が顕著である。

この住居跡について以上のことをまとめて見ると、周溝は一度作り替えが行われ若干内側に縮小される。周溝のとぎれる部分は床面も堅くまた周溝内片側には深く打ちこまれた小柱穴群があることなどからこの部分が入り口であると考えられる。石囲炉も一度作り替えられるが、周溝の作り替えとともに３期のうちどれに相当するかは立証することができない。

秋田県内における弥生時代の住居跡が調査されたのは当遺跡の他には横長根Ａ遺跡と湯ノ沢Ａ遺跡がある。両者とも壁があり周溝のめぐるもので前者の場合は径6.5m、後者の場合11mほどの円形を呈しており主柱穴も４本と本例と類似している。また炉は前２例とも住居中央に焼土があるだけで本例の石囲炉とは相違している。また周溝については横長根Ａ遺跡のものは全周するが、住居跡南側でこれと直交して長軸を住居中央に向けた二条の溝がありこれを入り口部と考えている。一方の湯ノ沢Ａ遺跡の場合三条の周溝を確認しながらもその建て替え回数などに言及していないため正確さを欠くが、この三条の周溝が東南部で切れることからここを入り口部とみることも可能であろう。本例をも含めた弥生時代の住居跡３軒には次の共通性がある。住居は円形を呈し周溝がめぐること、主柱穴は４本で炉は住居中央に設けられること、入り口部がいずれも住居の南側に設けられることなどである。本遺跡の住居跡の場合壁は確認できなかったが、他の２例からみて壁をもつ竪穴住居跡であることが考えられるし、周溝末端で確認された小柱穴群は入り口部と関連する何らかの施設とみるのが妥当であろう。また床面出土の土器を見る限り本例の住居跡が３例の中では最も古い時期のものと考えられる。

104号竪穴住居跡（第107図）

遺跡の西側中央部に位置する。焼土を中心に柱穴が直径約3.7mの円形を呈しながら連なっている。柱穴内から縄文時代晩期の土器片が出土しておりまた弥生時代の土器を出土するＳＫ31・32と重複している。



第107図　104号竪穴住居跡

② 土　壙　（第108図）

土壙は全部で70基である。この中で遺物を出土したのは15基でいずれも縄文時代晩期から弥生時代の土器であり、他の55基の土壙も幅はあるもののこのいずれかの時期に相当するものと考えられる。これら土壙群を風無台Ｉ遺跡と同じ基準で分類してみた。

Ａタイプ　ＳＫ31・74等25基である。分布に関して言えば２つの遺構群、東南辺と北西辺の両方にみられる。遺物を出土するのは５基でこのうち縄文晩期の土器を出土するのがＳＫ64・74で弥生時代がＳＫ31・32・53である。前者は東南辺の遺構群中に位置するのに対してＳＫ31・32はＳＩ104と重複し、ＳＫ53は北西辺の遺構群の中に位置する。特にＳＫ57･80は覆土上面に黄褐色地山土が人為的に埋められており、またＳＫ57の底面には炭化物の層が認められる。

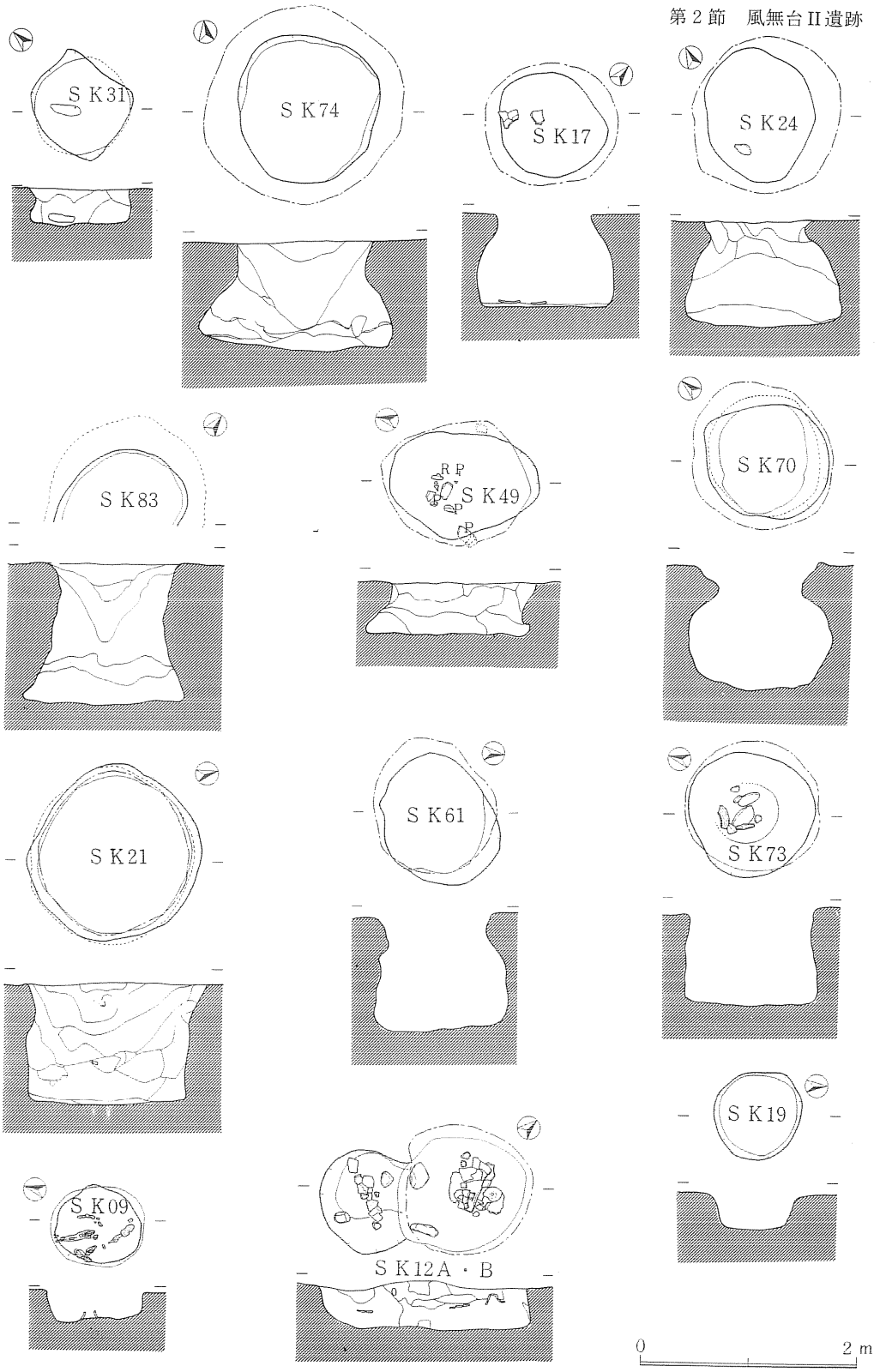
Ｂタイプ　ＳＫ17・24等９基である。このうちＳＫ25を除けばＳＫ15・05はＳＩ37の西側に、その他の６基は東南辺の遺構群の中に位置する。遺物を出土するのはＳＫ17・63で縄文時代晩期前半の土器を出土する。ＳＫ17には底面に炭化した栗を含む炭化物層がありＳＫ15では炭化したクルミを含む炭化物層がある。またＳＫ18には人為的に地山土を埋めている。

Ｃタイプ　ＳＫ83・49等10基でこのうち３基は北西辺に、他は東南辺の遺構群の中に位置する。ＳＫ73・94から縄文時代晩期の土器、ＳＫ71・49からは弥生時代の土器が出土する。

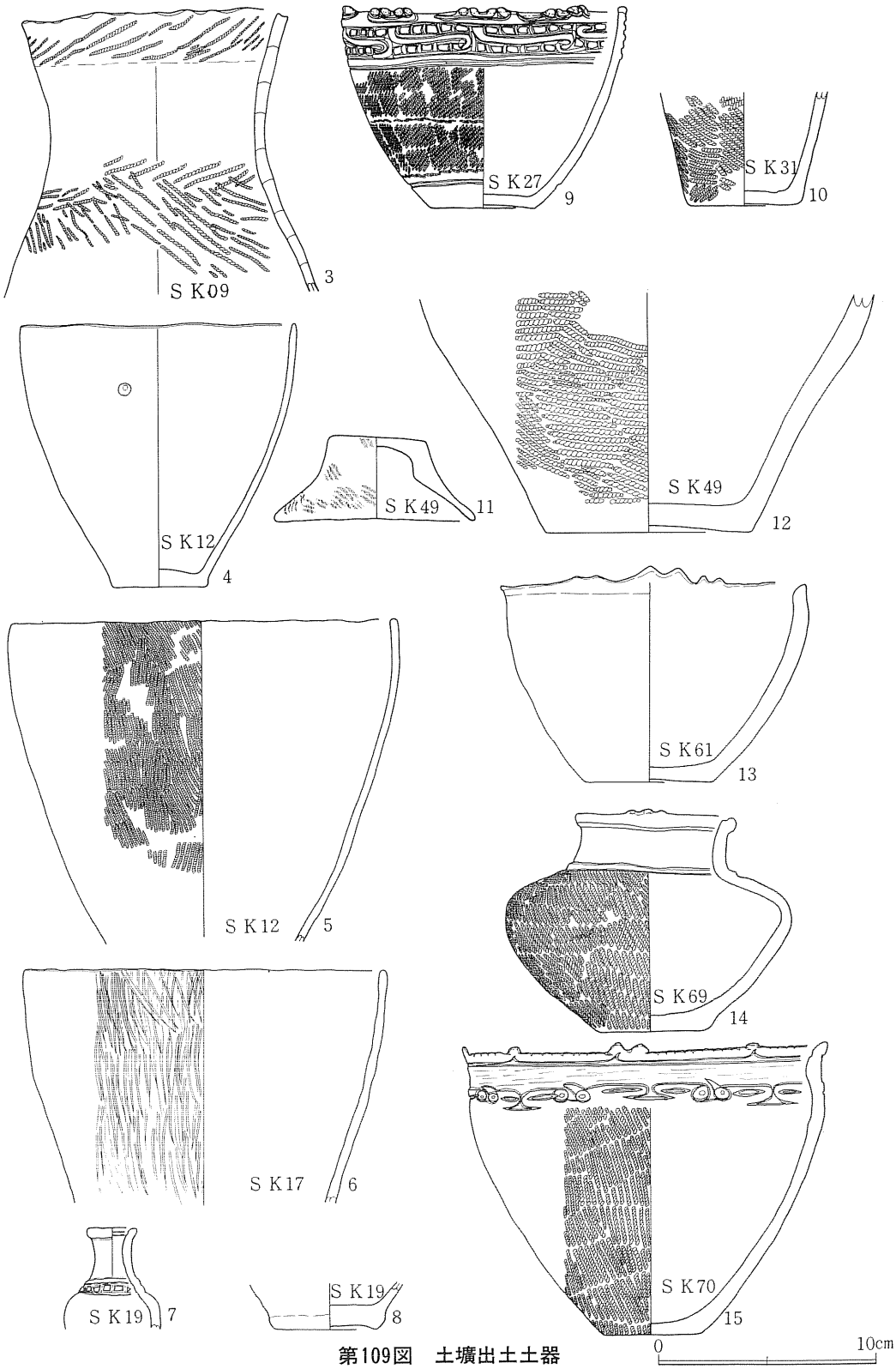
Ｅタイプ　ＳＫ21・61・73等14基で全て東南の遺構群の中に位置している。遺物を出土するのは６基で、いずれも縄文時代晩期のものである。このタイプのものはその断面形において風無台Ｉ遺跡におけるＥタイプのＳＫ41・71の典型的な筒形のものとは若干相違がある。

Ｆタイプ　ＳＫ09・12・19等12基で全て東南側の遺構群の中に位置している。遺物を出土するのは縄文時代晩期が３基、弥生時代のものが１基である。特にＳＫ09は弥生時代の壺形土器が底面に倒立して出土している。ＳＫ12Ａには覆土中に焼土層が認められ、またＳＫ26には角礫が底面に投げ込まれた状態にある。

これら土壙群についてまとめてみると、時代的には縄文時代晩期から弥生時代の土壙群で、前者の時期に該当するものが圧倒的に多く、またそれは遺跡内東南辺と北西辺の二ヶ所にまとまりをみせる。特に北西辺においてはＡタイプで晩期の土壙が大部分である。またタイプ別にみた分布状態では、東南辺の遺構群には各タイプの土壙が縄文時代晩期から弥生時代を通じて存在するのに対して、一方の北西辺では晩期のＡタイプの土壙が多く、わずかにＳＫ49が弥生時代のものであるだけにとどまる。また覆土の状態では人為的に地山土を埋めたものがみられることや土壙の底面ないし上面において堅果類を含む炭化物層が確認されている。こうした状況は、たとえばその分布においては風無台Ｉ遺跡でも同様であり、台地の縁辺部に数期間にわたって土壙群が構築されていくこと、遺物出土状況が散漫でむしろ遺物を出土しないのが一般的であること、炭化した堅果類の出土状況も他の炭化物とともに投棄された状態であること、

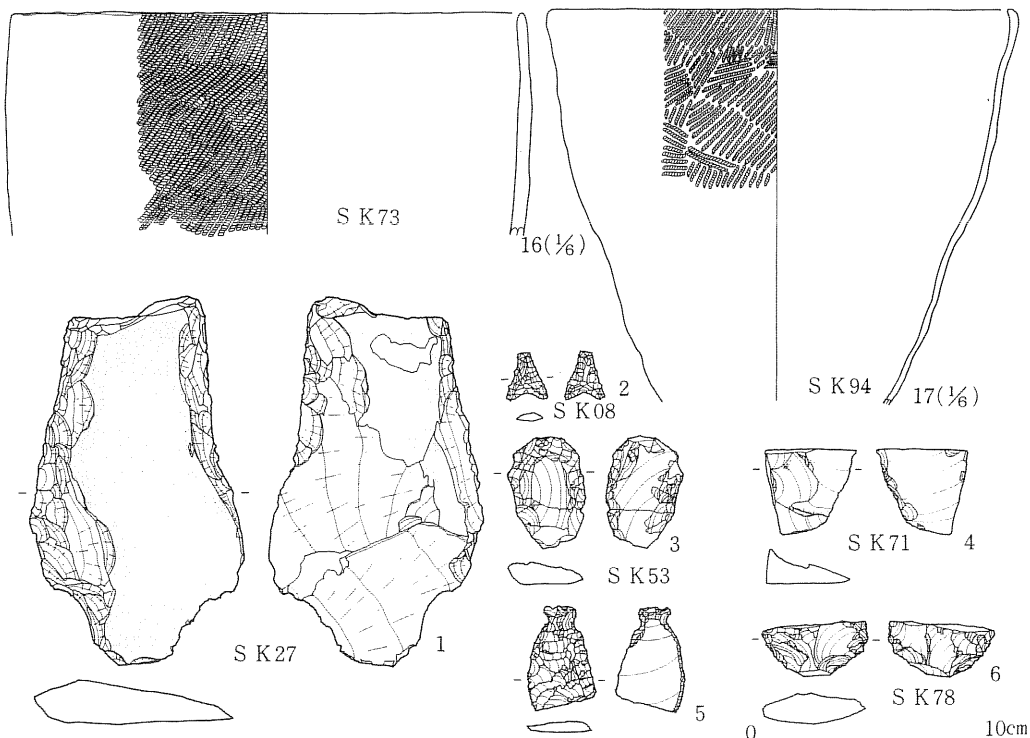

S K31
S K74
S K17
S K24
S K83
R P
S K49
S K70
S K21
S K61
S K73
S K19
S K09
S K12A・B
0
2 m

第108図　土　壙



第109図　土壙出土土器

同台地内にその背景となる集落群がないことなどに共通性がある。このことはフラスコ状土壙群の機能とも関連してくるものと考えられるが、風無台Ⅰ遺跡でも述べた通り、Ｅ・Ｆタイプをのぞくこれら土壙群が少なくとも、両遺跡を通じて、縄文時代前期から弥生時代にかけて同一機能をもつ遺構であることが窺える。これら土壙群を従来から言われてきたように貯蔵穴として考えるならば、風無台Ⅰ・Ⅱ遺跡は食料採集地における貯蔵穴であって集落内あるいは住居内にある土壙群とはその目的と使用期間にも若干の相違があるのかもしれない。



第110図　土壙出土土器・石器

③　土器埋設遺構

ＳＲ86　（図版38）

ＳＩ37から南西に３ｍほどで確認されたもので弥生時代の甕形土器を埋設したもので掘りこみは土器よりほんの少し広めに掘られているだけである。口縁部が直立し、最大径が胴部上半にあり全面に粗いＬＲ縄文が施される。ＳＩ37との関連性が窺える。

④　立　石

ＳＱ105　（図版38）

東西遺構群とＳＩ37のほぼ中間に位置している。長さ50cm、幅20cm、厚さ10cmほどの偏平な自然礫を全体の⅔ほど地山に埋めこんだもので偏平な面を南北に向けてほぼ直立している。時期は不明であるが縄文時代晩期から弥生時代のいずれかの時期のものであろう。

2　出土遺物について

本遺跡出土の遺物について、ここでは遺構内外の遺物を一括して説明を加えたい。

①　土　器　（図版109～111）

土器は、縄文時代晩期前葉・後葉と弥生時代のものに限られる。前者には遺構内特に土壙内出土のものが大部分で、弥生時代のものは遺構外の出土が多い。

晩期前葉……ＳＫ27・19出土の９・17・18である。９は口縁部文様帯に末端の嚙み合わない羊歯状文が施される浅鉢形の土器である。17の小型壺形土器には赤色顔料が塗られており、大洞ＢＣ式である。

晩期後葉……ＳＫ61出土の13、ＳＫ70出土の15の鉢形土器やＳＫ69出土の壺形土器14、その他、26・27である。26・27は直立し小波状を呈する口縁部に２～３条の沈線が引かれる鉢形土器であろう。13～15では口縁部に２個１対のいわゆるＢ突起を有する土器でいずれも大洞Ａ・Ａ′式に並行するであろう。この他縄文時代晩期では深鉢形土器４・５・６・16・17がありいずれも遺構内出土である。口縁部は直立ないしは内反し、ほぼ直線的に底部に至るもので、４は無文、６は櫛歯状工具による粗い条痕が縦位に走る。

弥生時代……ＳＫ09出土の３、ＳＫ31出土の10，ＳＫ49の11・12と18～25、28～34である。この中で多いのが甕形土器で次いで壺・深鉢・蓋形土器などである。

甕形土器では胴部に単節の縄文が斜位から横位に施されるものが多い。口縁部はやや内反ないしは外反するもので直立するものはみられないが小波状を呈する21、口縁部が直角に折り返される22もある。口縁端部に縄文が施されるものが多くその端部の縄文帯と頸部の無文帯さらに胴部とは２～３条の幅広の沈線でもって画されるが33では全面に縄文が施され、31では太い沈線で変形工字文が描かれ胴部には縄文が横位に施される。この甕形土器は、壺形土器や蓋形土器が精製された胎土を用い焼成も良好なのに比べて、胎土に径１～３㎜の砂粒を含んでおり、焼成時にこの砂粒を中心に亀裂の走るものが多い。

壺形土器３は口縁部が外反し、長い頸部から胴部にかけて丸いふくらみがあり、口縁部と胴部にＲ撚糸文が施される。18は胴部上半に最大径をもち、短頸部から外反する口縁部が付くものであろう。器面は赤褐色を呈し胴部には横位のＲＬ縄文が施される。風無台Ｉ遺跡のＳＫ38

出土の14の壺形土器と非常に良く似ている。

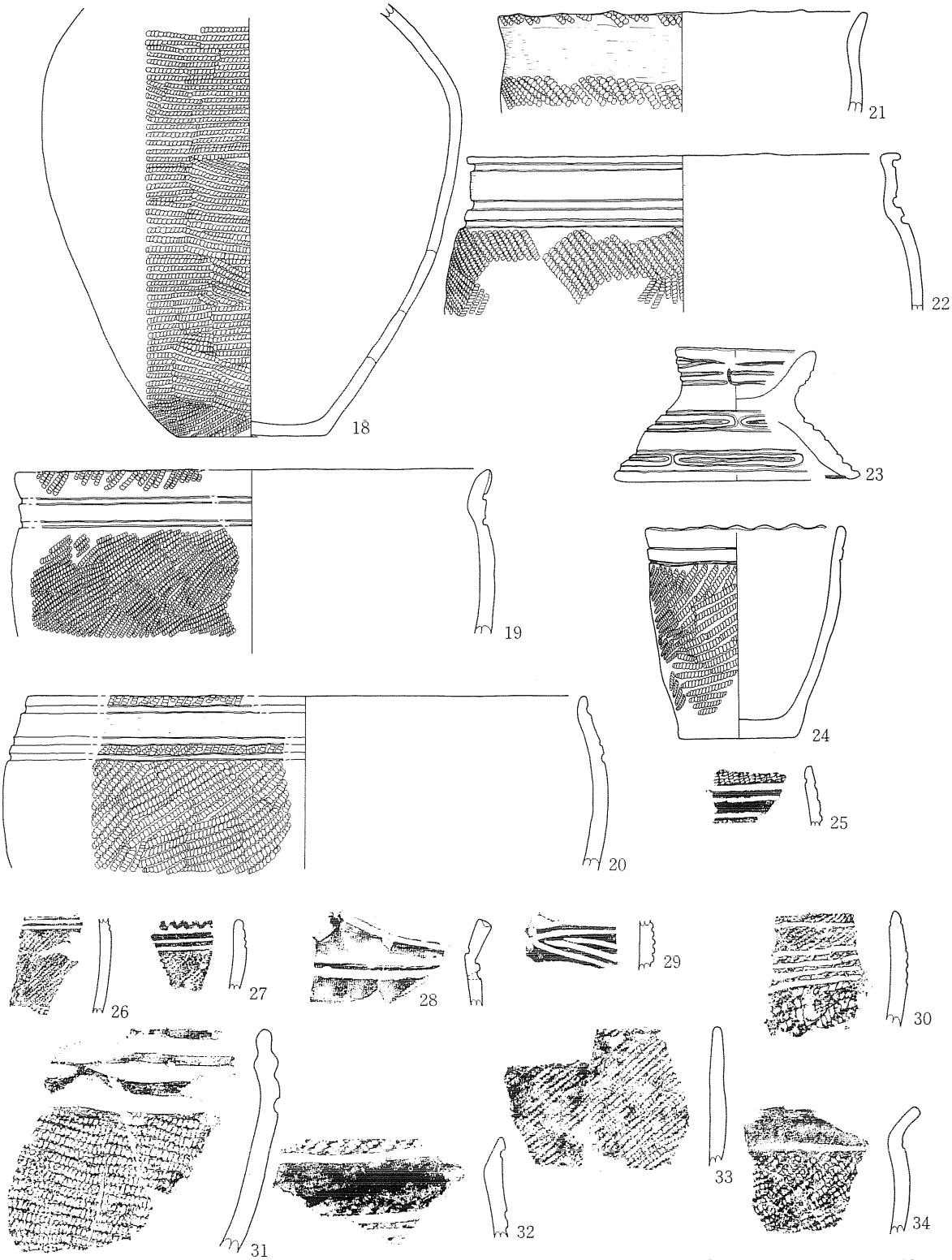
深鉢形土器ではＳＫ31出土の10と24がある。24は外反する口縁から直線的に底部に至るもので、底部からの立ち上りは10と類似する。口縁部は無文で浅い沈線でもって胴部の縄文帯と画される。

蓋形土器はＳＫ49出土の11と23がある。11はＬ縄文が施文され、23には変形工字文が描かれるが11に比べて胎土も粗く、沈線の描き方も雑である。

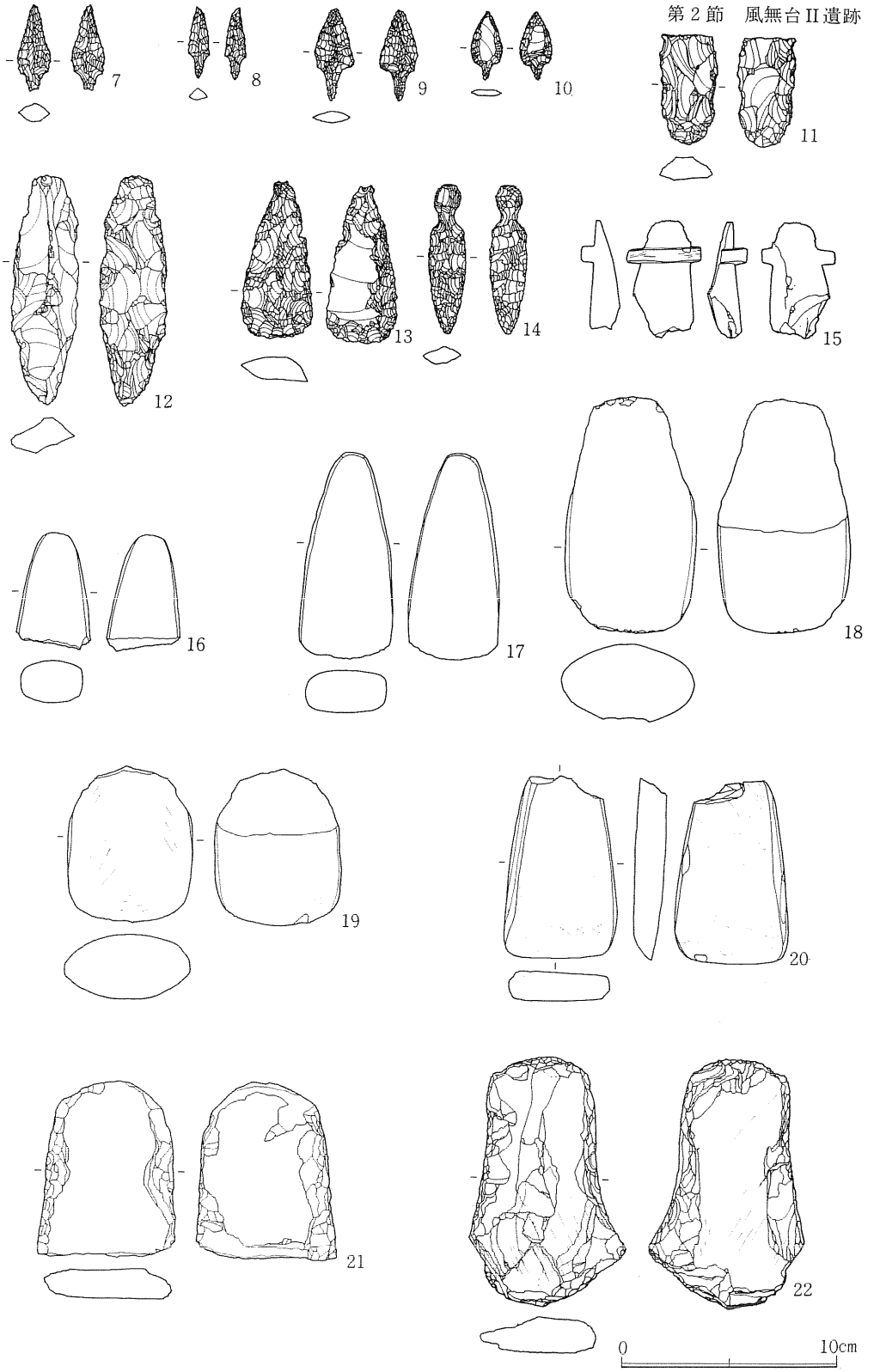
②　石　器　（第110・112図）

出土した石器は遺構内出土の石器６点と遺構外出土の15点が定形的な石器として挙げられる。この中でＳＫ27から大洞ＢＣ式の浅鉢形土器と共伴した扁平打製石斧と片刃状石斧を除けば明確な時期を与えうるものはない。

遺構外の石器では有茎石鏃４点７～10、両面に調整を施した篦状石器２点11・12、これも両面に調整を施す縦型石匙２点13・14でありこれらは全て頁岩である。さらに磨製石斧５点16～20、扁平な自然礫を用いて縁辺部のみを打ち欠いた打製石斧２点21・22があり、15の石製品は突帯部を巧みに削り出した石棒であろうか。



第111図　遺構外出土土器



第112図　遺構外出土石器

第３節　松木台Ⅱ遺跡

１　遺構について

本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では、北西端に位置する。遺跡のすぐ北側には、斜度37°の急斜面を下りたところを岩見川が流れている。西側の縁もまた岩見川に繋る沢筋によって画されている。東側には、ほぼ平坦な面をなす同一台地上で風無台Ⅱ遺跡が連続し、南側は比高―15m程の小さな沢筋を隔てて、松木台Ⅰ遺跡が隣接している。遺跡である台地の中央部では、標高約41mを測る。

調査で検出された遺構は、旧石器時代の石器集中個所１ヶ所、縄文時代晩期の土壙42基、同

第113図　松木台Ⅱ遺跡遺構配置図

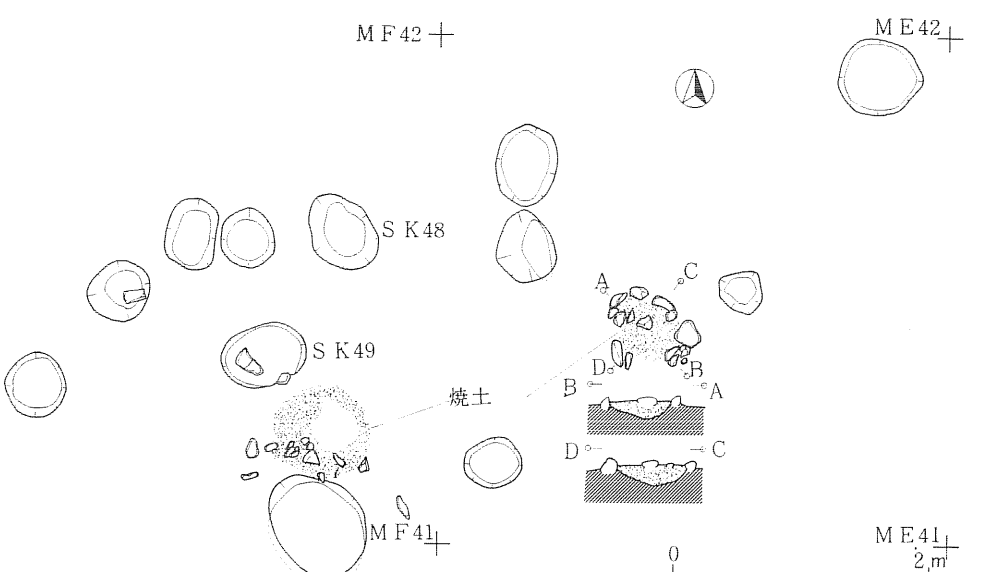
時期の石囲炉１基、埋設土器１基、配石１基、古代の土壙１基、近代の竪穴状遺構が１基である。このうち、旧石器時代の石器集中個所は風無台Ⅱ遺跡に近い東側で検出され、また縄文時代晩期の土壙は台地南端部に石囲炉とともに22基、北端部に13基が検出された。残りの土壙は他の遺構とともに、台地西部から中央部にかけて散在して検出された。

①台地南端部土壙群

ＭＢラインからＭＬライン、38ラインから44ラインまでの範囲に21基の土壙が集中し、その中央部に石囲炉が位置している。また土壙群の北西側、および中央部には20数個所焼土の堆積個所が確認されている。

石囲炉は、径10cm～20cmの河原石を、北西―南東方向に長い楕円形に組み合せて構築したもので、中央部に１個の石を置いている。炉内には焼土が詰って確認されている。石囲炉の北東側に隣り合って径35cm・深さ20cmのピットが、また南西側には２ｍ程離れて径40cm・深さ50cmのピットがそれぞれ１つずつ検出されている。

土壙は、形態・規模によって２つに分けることができる。１つは開口部径１ｍ前後・深さ20cm～40cm程の浅いもので、断面形は僅かに末広がりとなる。他は開口部径１ｍ20cm～1ｍ80cm・深さ60cm～１ｍ程で、断面形がビーカー状もしくはフラスコ状を呈するものである。前者はＳＫ02・08・09・16などであり、後者はＳＫ03・17・18・20である。前者の土壙ではＳＫ09・12・16・31のように河原石を埋土上面に１～数個据えたものや、ＳＫ16・31のように埋土に焼土層をもつものがある。埋土中には炭化物や焼土粒、晩期の土器砕片などが含まれるが、これらは埋土自体に混ったもので土壙内に入れられたものではない。対して後者の土壙では、ＳＫ03のように壙底から完形の土器や磨製石斧などの石器を出土したり、ＳＫ17・20のように埋土上面から

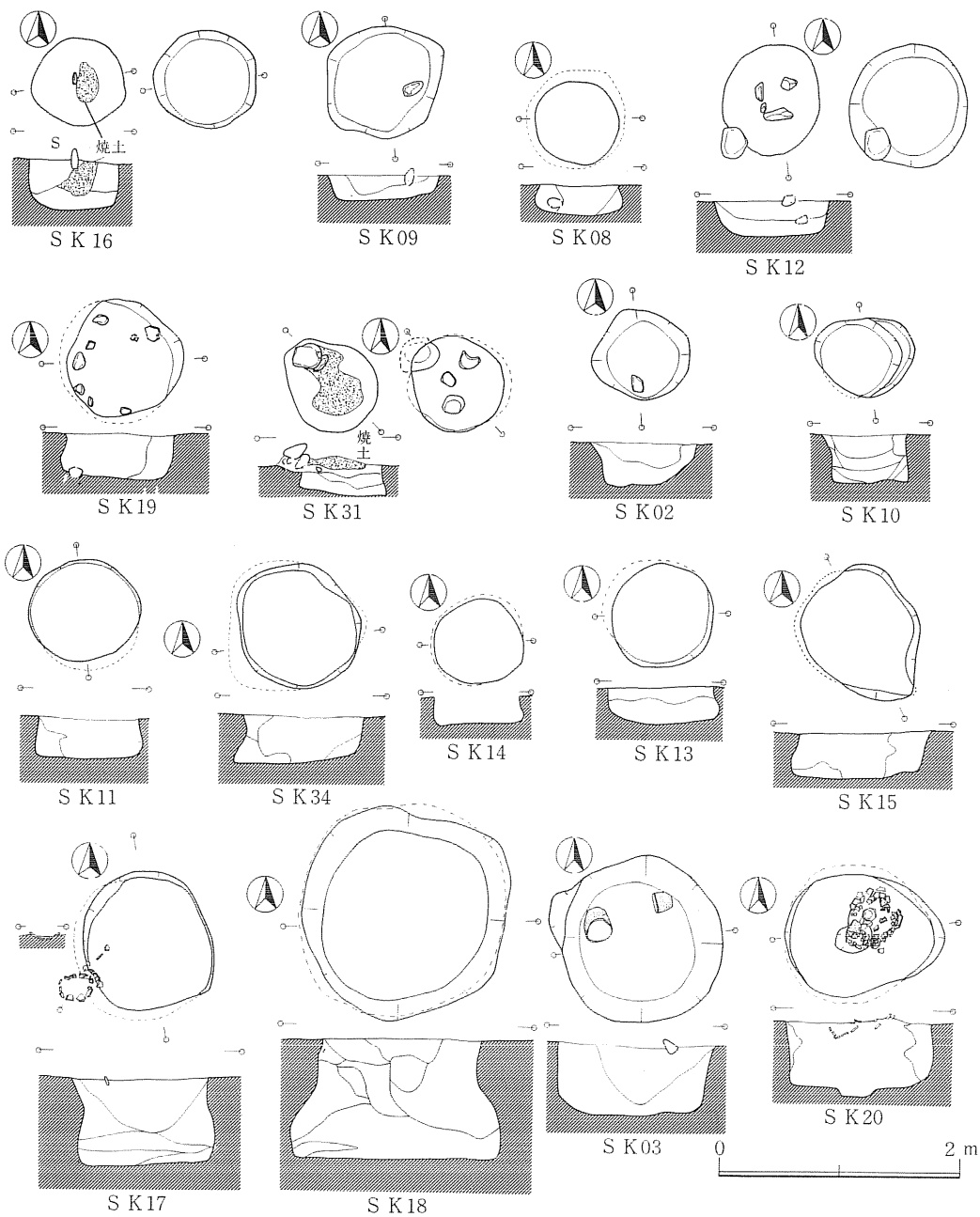


第114図　石囲炉と周辺土壙（01）

完形に近い土器を出土している。両者の土壙の位置的な関係をみると、前者の土壙は石囲炉を中心に径15m～16mの円形に配列し、後者はその外側、南西に位置している。

また、以上の土壙群の周辺からは計25ヶ所の焼土を検出している。検出面は土壙群のと同じ高さにある。

その他、土壙群の検出面までの遺物の包含層から、種類の判別は出来なかったが、堅果類を採取している。



第115図　台地南端部土壙群

②台地北端部土壙群

ＬＰラインからＬＴライン、71ラインから74ラインまでの範囲に11基、そこから南東側に30ｍ程離れたＬＫ69グリットに２基検出された。土壙はランダムに構築されており、ＳＫ28Ａ・Ｂ、ＳＫ40Ａ・Ｂのように極めて近接して構築される例、重複する例がある。全体の配置の形状からは規則性を看て取ることはできない。

各土壙は、開口部径１ｍ～1.8ｍ・底径1.2ｍ～2.1ｍ・深さ0.7ｍ～1.2ｍ程の規模をもち、断面形はビーカー状またはフラスコ状を呈する。フラスコ状を呈する土壙ではＳＫ22、ＳＫ23のような頸部を有するものと、ＳＫ44、ＳＫ45のように単に台形となるものとがある。

土壙の埋土は、概ね自然堆積に任せたレンズ状の堆積状態を示すが、明らかに他の土壙を掘り込んだ際の排土が入り込む例がある。ＳＫ23、ＳＫ24などがその典型である。またＳＫ22も同様の埋土状態を呈しているが、加えて開口部から頸部にかけて径10cm～20cmの多量の礫が投げ込まれ、詰った状態を呈している。他にＳＫ46のように開口部からの崩落土が壁面近くに堆積した例もある。

遺物量はさ程多くはない。しかし、ＳＫ22、ＳＫ23は壙底から完形もしくは完形に近い土器の大破片を出土している。土壙の構築・使用の時期はこれらの遺物から推し測ることができる。遺物は縄文時代晩期のものである。

③台地西部・中央部土壙群

台地南端および北端の土壙集中域を除いた、遺跡範囲のほぼ全域に亘り、土壙およびその他の遺構がまばらに検出されている。

土壙は、規模・形態ともに台地北端部の土壙群に近い。埋土状態、遺物の出土状況もほぼ同様である。ただしＳＫ42、ＳＫ43のように壙底中央に径10cm～20cm程の浅いピットをもつ場合があり、相違する特徴である。

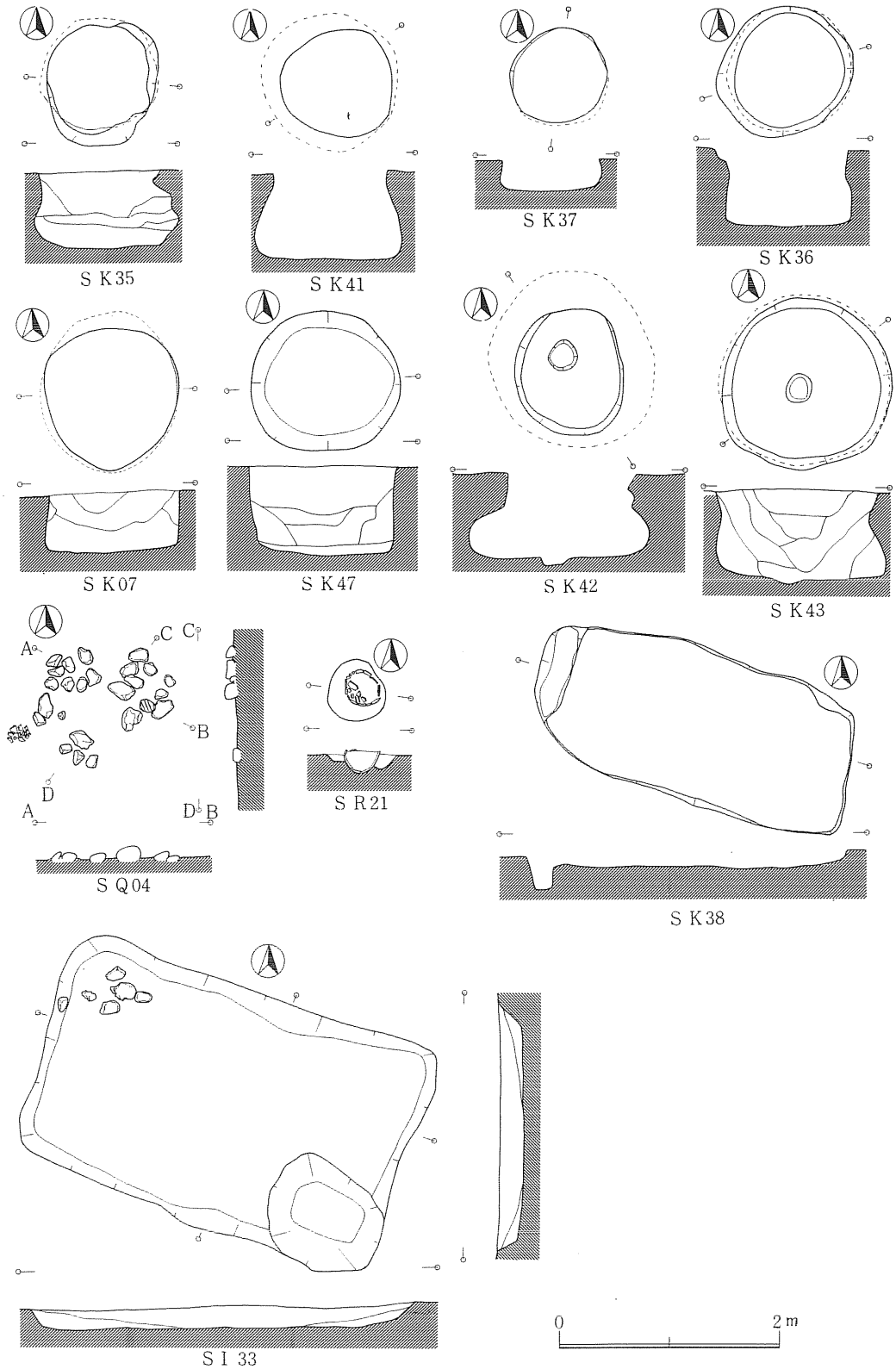
集石遺構（ＳＱ04）は、ＭＪ49グリットで検出された。径10cm～30cmの河原石を、北東―南西方向に1.2ｍ、北西―南東方向に１ｍの規模で集めている。西側に隣接して浅鉢形土器が出土している。

埋設土器（ＳＲ21）は、ＭＬ52グリットで検出された。地山面に径50cm程の浅いピットを穿ち、体部の膨らむ甕形もしくは壺形と思われる土器を埋置している。土器底部は穿孔されている。

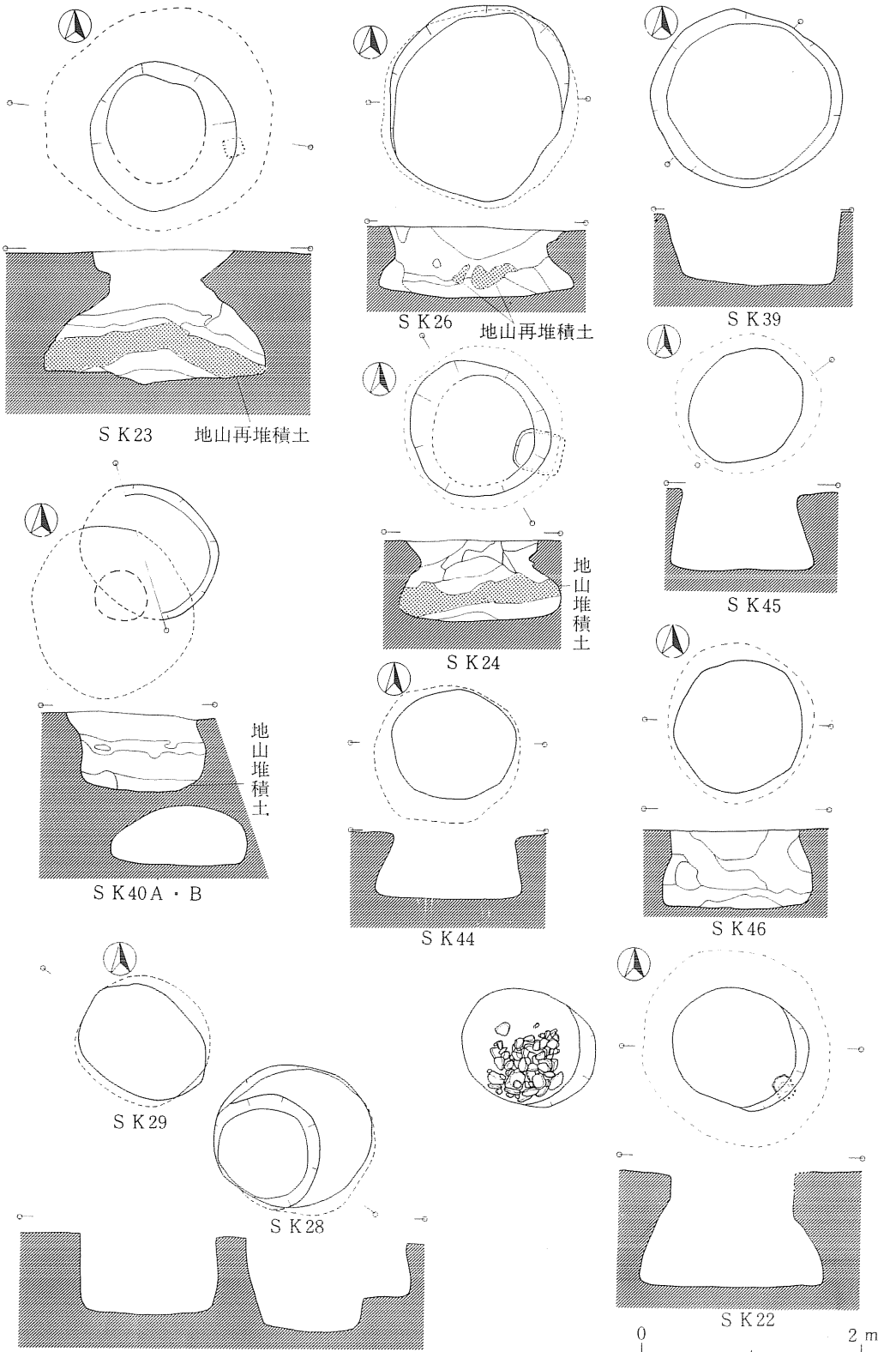
以上は遺物の観察により、縄文時代晩期の遺構と判断する。

古代の土壙（ＳＫ38）は、ＬＨ55グリットで検出された。北西―南東方向の長軸径3.0ｍ・北東―南西の短軸径1.4ｍ・深さ0.2ｍの略方形を呈する。長軸はＮ―70°―Ｗにある。土壙内北西辺には幅30cm・長さ90cm・深さ30cmの溝が掘られ、土壙内のほぼ中央から須恵器杯が出土している。

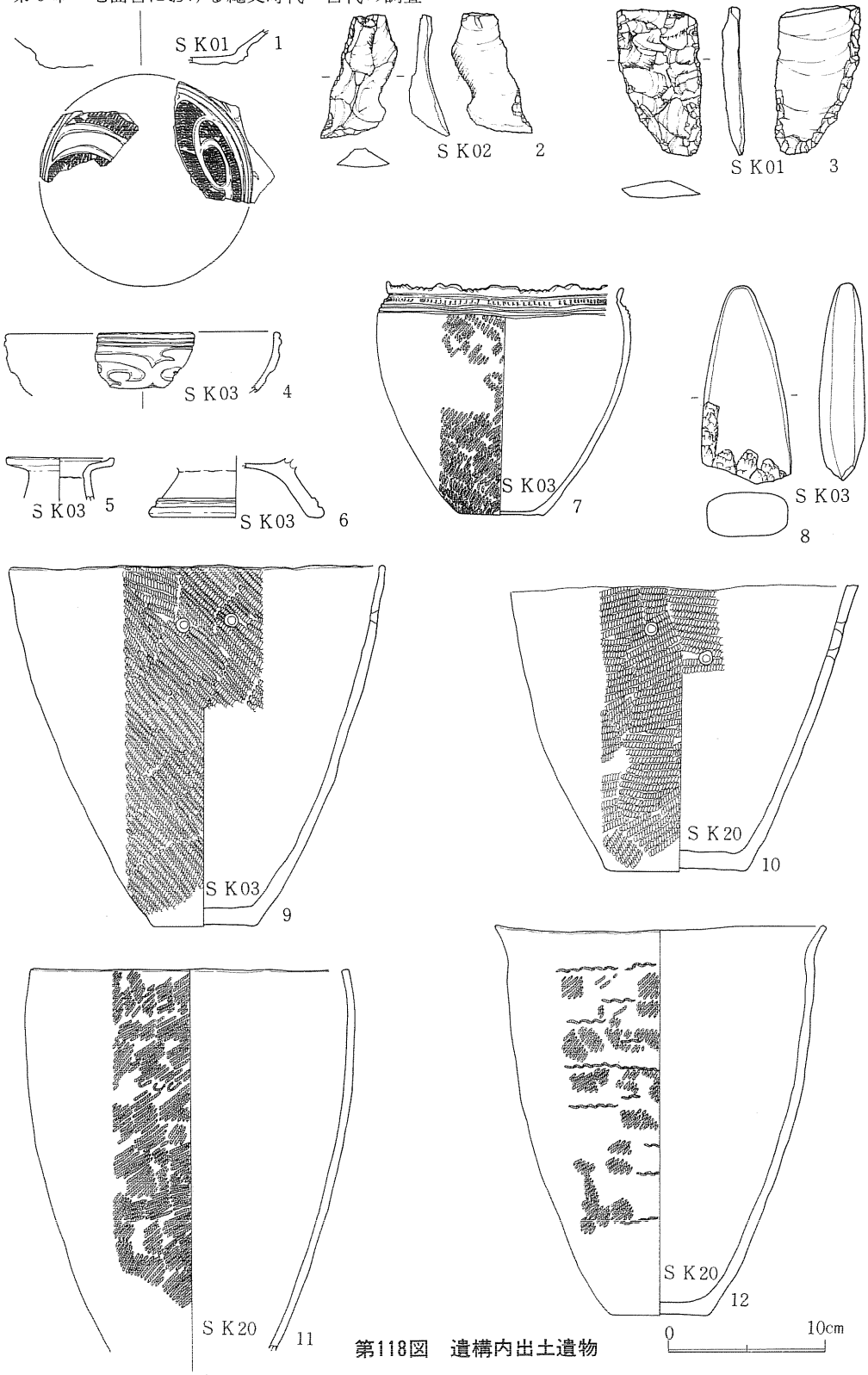
近代の竪穴状遺構は、ＬＰ48グリットで検出された。長辺3.4ｍ・短辺2.2ｍ・深さ0.2ｍの方形を呈す。南東隅からはプラスチック製の箸、歯ブラシの柄を出土した土壙を検出している。



第116図　台地西部・中央部土壙群，その他の遺構



第117図　台地北端部土壙群



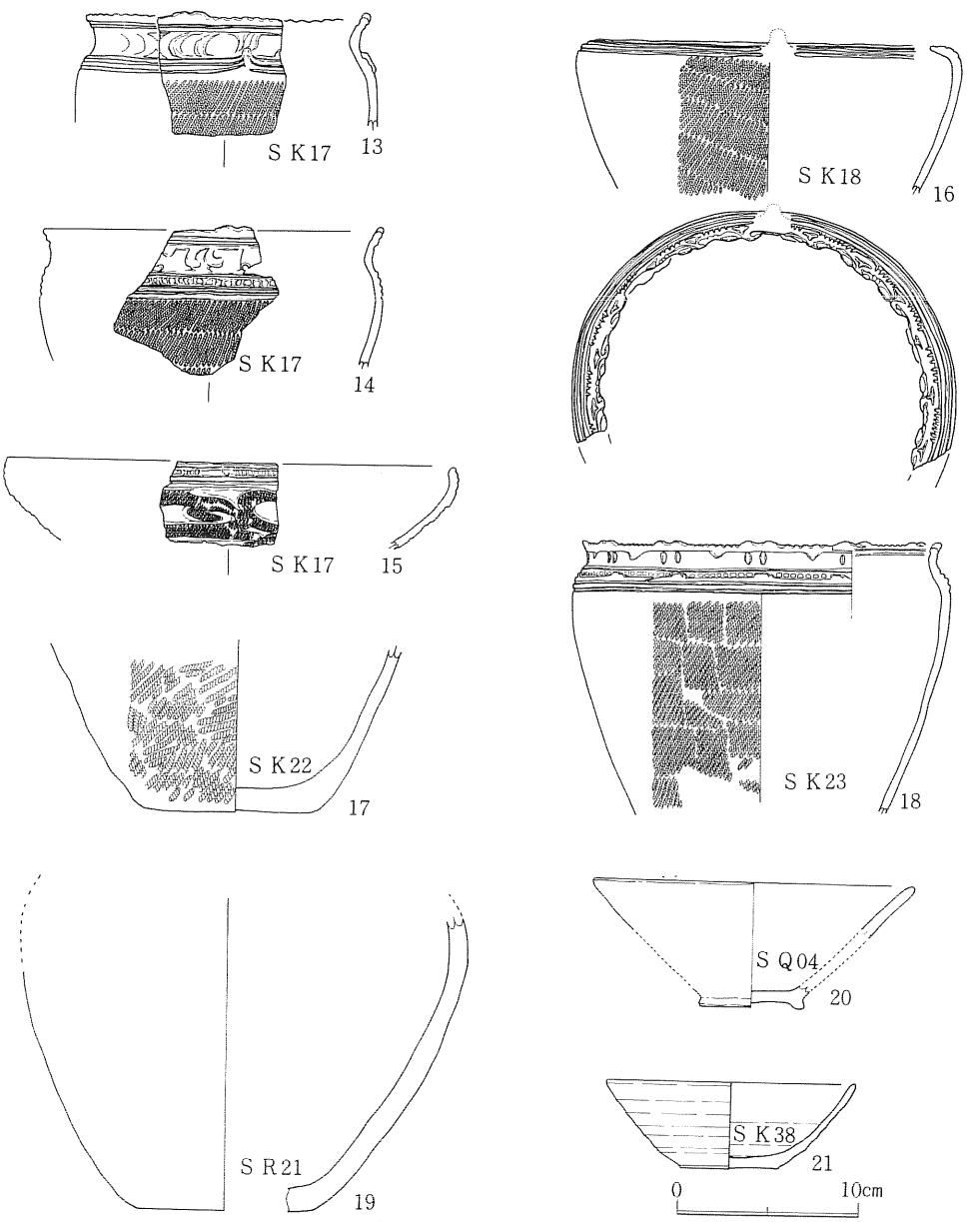
第118図　遺構内出土遺物

2　遺物について　（第118～121図）

土器は、縄文時代晩期、大洞ＢＣ～C_1式期を中心として出土している。器種には皿形、鉢形、壺形、深鉢形がある。精製土器では４、５が朱塗りが施されたものである。粗製土器では補修孔を穿ったものがあり、器面に施される原体は９がＲＬ、他は全てＬＲである。

他に縄文時代後期初頭、晩期後葉の砕片、古代の須恵器杯などが出土している。

石器で出土したものの内訳は、石錐１、石鏃１、尖頭器２、石匙２、箆状石器３、打製石斧



第119図　遺構内出土遺物

１、磨製石斧６、凹石１、調整加工を施したものを含め剝片数点である。石材は石錐、石鏃、石匙、箆状石器では頁岩、打製石斧は流紋岩、磨製石斧、凹石では安山岩である。これらの石器のうち、扁平な打製石斧は晩期特有のものである。他のものも該期に帰属する可能性が強い。

３　小　結

本遺跡の調査結果を以下にまとめる。

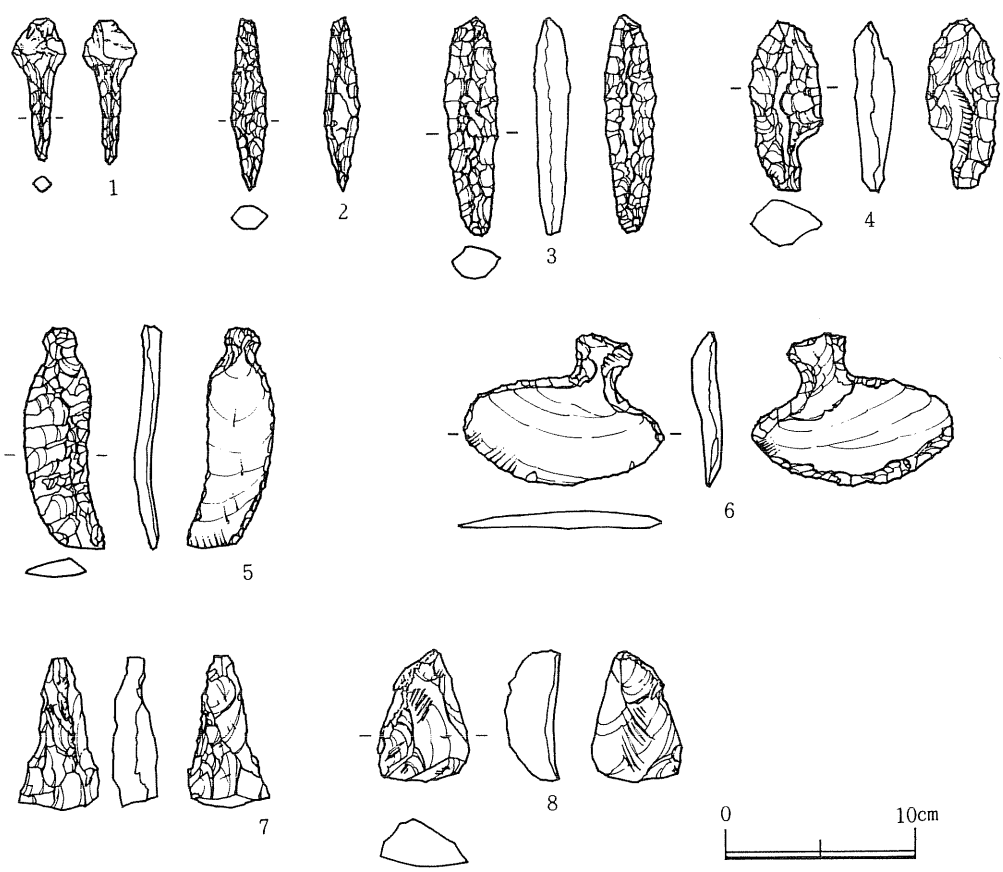
①遺跡が営まれた時期は主に縄文時代晩期である。

②遺構は土壙が主体をなし、遺跡の北端と南端に集中域がある。

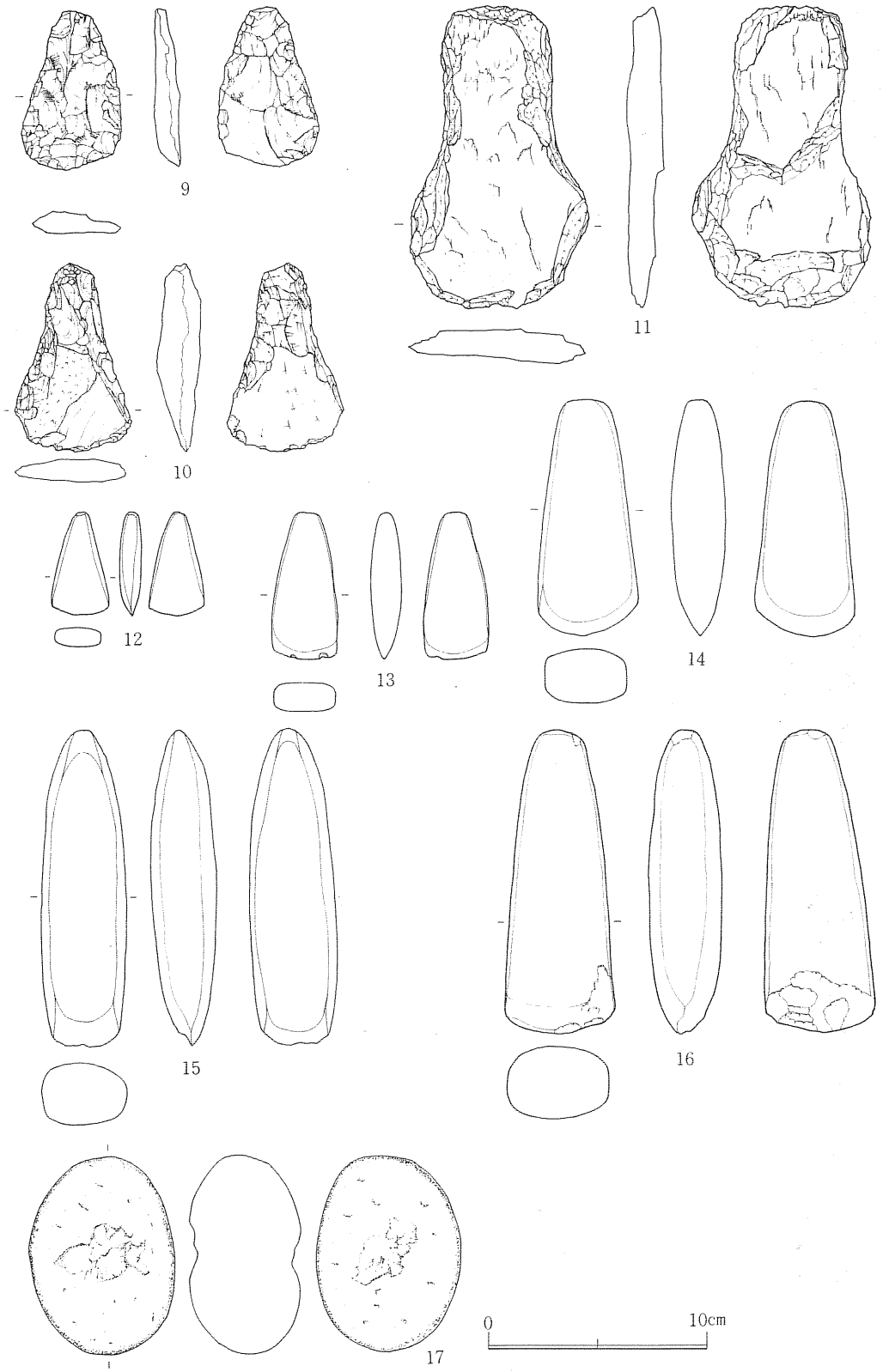
③北端と南端の土壙集中域では、それを構成する各土壙の形態、埋土状態、遺物の出土状況に相異が認められ、それぞれの集中域が異なる営為により形成されたことを想定させる。

④遺物量は少ないが、縄文時代晩期の土器、石器の種類を包含している。

以上の各項のうち、③については、第７章で再び考察する。

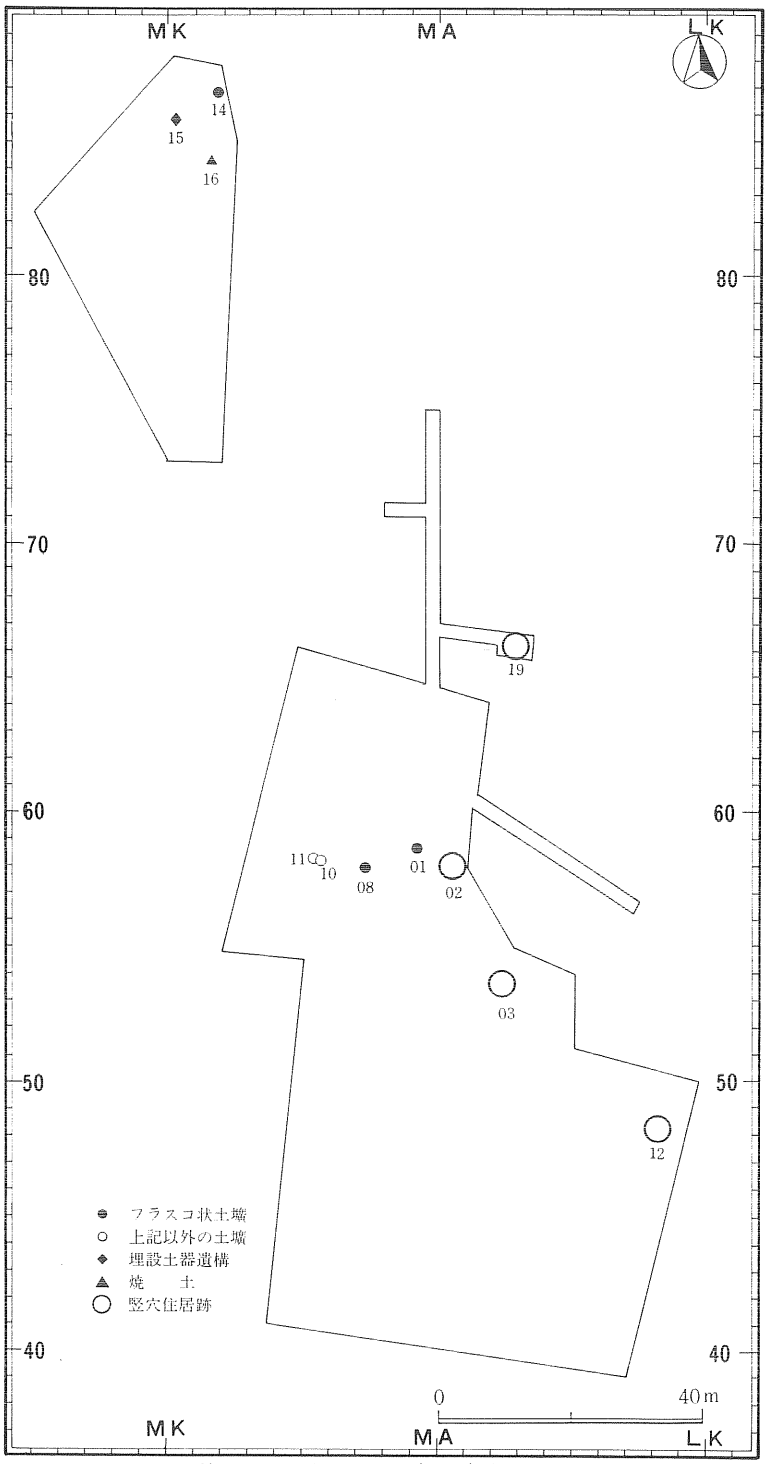


第120図　遺構外出土遺物



第121図　遺構外出土遺物

第４節　餅田沢Ⅱ遺跡



第122図　餅田沢Ⅱ遺跡遺構配置図

１　遺構について（第122図）

本遺跡は七曲台の遺跡群の中では最も東側に位置しており、西側には小さな沢を隔てて石坂台Ⅰ遺跡がある。標高は遺跡南側で48m前後で北にゆるく傾斜しており、遺跡の北端ではその比高差が６ｍほどある。遺構は遺跡中央、標高45～47mに集中し他は北端の標高42m前後の平坦面で確認されている。

遺構には縄文時代の竪穴住居跡４軒、フラスコ状土壙３基、縄文時代晩期の土壙２基、同後期の土器埋設遺構１基、焼土の散布する所１ヶ所である。遺跡面積から見ると遺構数は極めて少なくまた遺物も遺構外のものは縄文時代の土器細片だ

けである。

①　竪穴住居跡

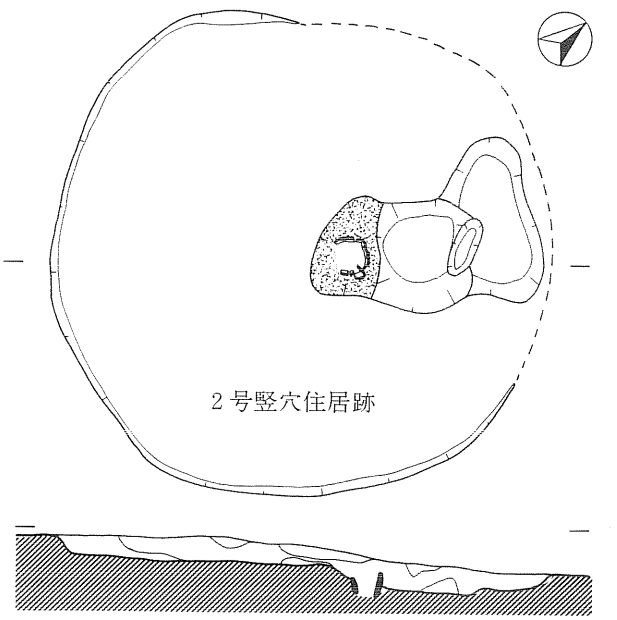
２号竪穴住居跡　（第123図）

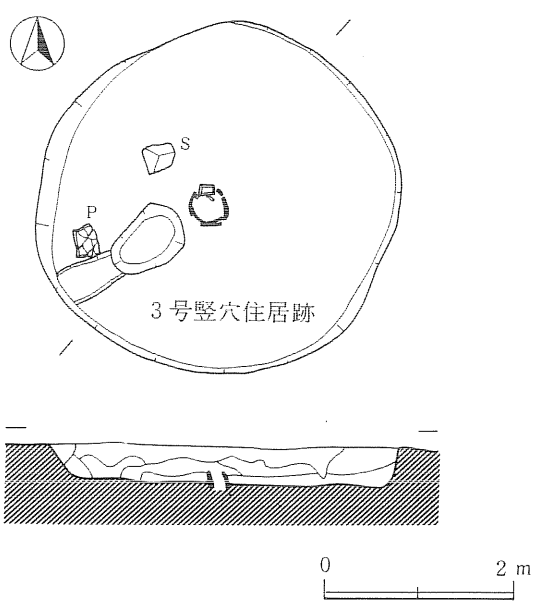
遺跡中央部で南から北へゆるく傾斜する面に位置している。住居プランは北側で確認できなかったものの直径約2.6mの円形を呈する住居跡である。壁は10cmほどの立ち上がりがあるが柱穴も住居内外に１つも確認できない。床は南から北へわずかに傾斜し、炭化物が多量に散在する。

炉は住居中央部にあり土器埋設炉に掘り込み部が伴う複式炉の形態をとっているが、土器周辺が焼けているだけで掘り込み部底面はほとんど焼けていない。炉の埋設土器は二次加熱のため大変脆くなっており図示はしなかったが、「U」字状文の施された深鉢形土器である。

３号竪穴住居跡（第123図）

遺跡中央部、２号竪穴住居跡の南側に位置し、直径約1.9mの円形を呈する。壁の高さは30cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で竪くしまっているが、柱穴は住居内外で全く確認できない。炉は住居中央に土器埋設炉をもちそれに掘り込み部が壁まで伸びている複式炉である。掘り込み部は浅く、焼けていない。炉の埋設土器は珍らしく底部をもち胎土焼成とも良好で底部から丸くふくらむ胴部、そして外反する口縁部をもつ深鉢形土器である。地文はＲＬ





第123図　２・３号竪穴住居跡

縄文で、胴部上半で末端が入り組む横「Ｓ」字状文が描かれる。

12号竪穴住居跡　（第124図）

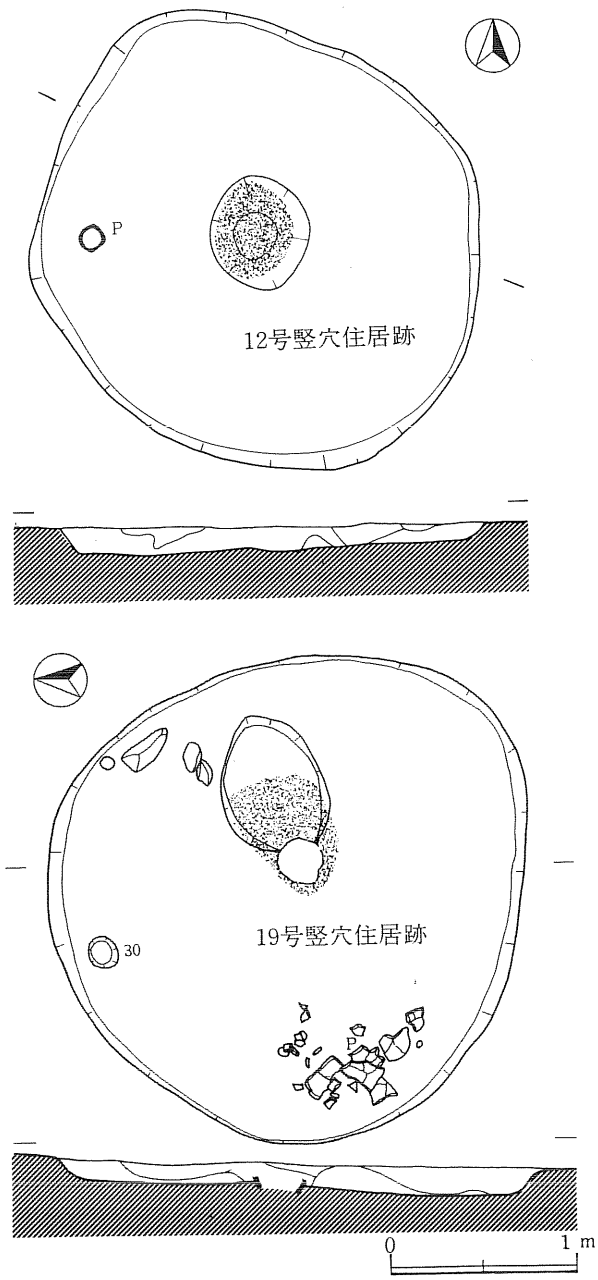
遺跡東南部の平坦面に位置しており直径約2.4mの円形を呈する。壁は高さ10cmほどでゆるく立ち上がり、床は比較的柔らかく柱穴も確認出来ない。炉は住居中央に浅い掘り込みのある地床炉である。住居南西部の床面から鉢形土器の底部２（第125図）が出土しているがこれには細かなＬＲ縄文が施文され胎土・焼成も良好である。

19号竪穴住居跡（第124図）

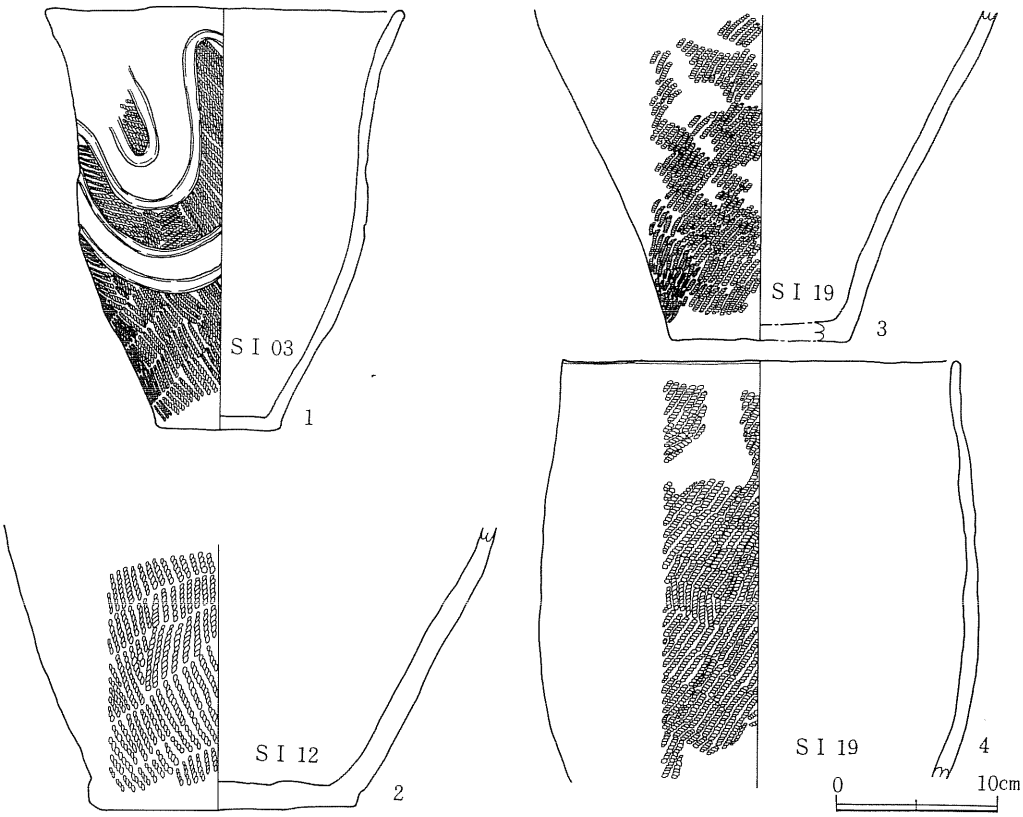
遺跡中央南側に他の遺構群とは隔絶して位置している。直径2.6mの円形を呈し、壁の高さは20cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で堅く、炉は住居中央で土器埋設炉に浅い掘り込みのある複式炉であり、掘り込み部底面は焼けている。

炉の埋設土器３(第125図)は底部から直接的に胴部に外開きするＲＬ縄文のある深鉢形土器である。床面出土の土器４(第125図)は丸みのある胴部に最大径をもち、口縁が直立する深鉢形土器でＲＬ縄文が施文される。

確認されたこれら４軒の住居はその出土土器からＳＩ02・03・19が縄文時代中期末葉、ＳＩ12は縄文時代晩期前葉である。特に前者の３軒の住居跡は炉の形態だけから言えば先の風無台Ｉ遺跡の住居跡の土器埋設炉と後述の石坂台Ｉ遺跡の住居跡の複式炉との中間的なものであろう。



第124図　12・19号竪穴住居跡



第125図　竪穴住居跡出土土器

②　土　壙　（第126図）

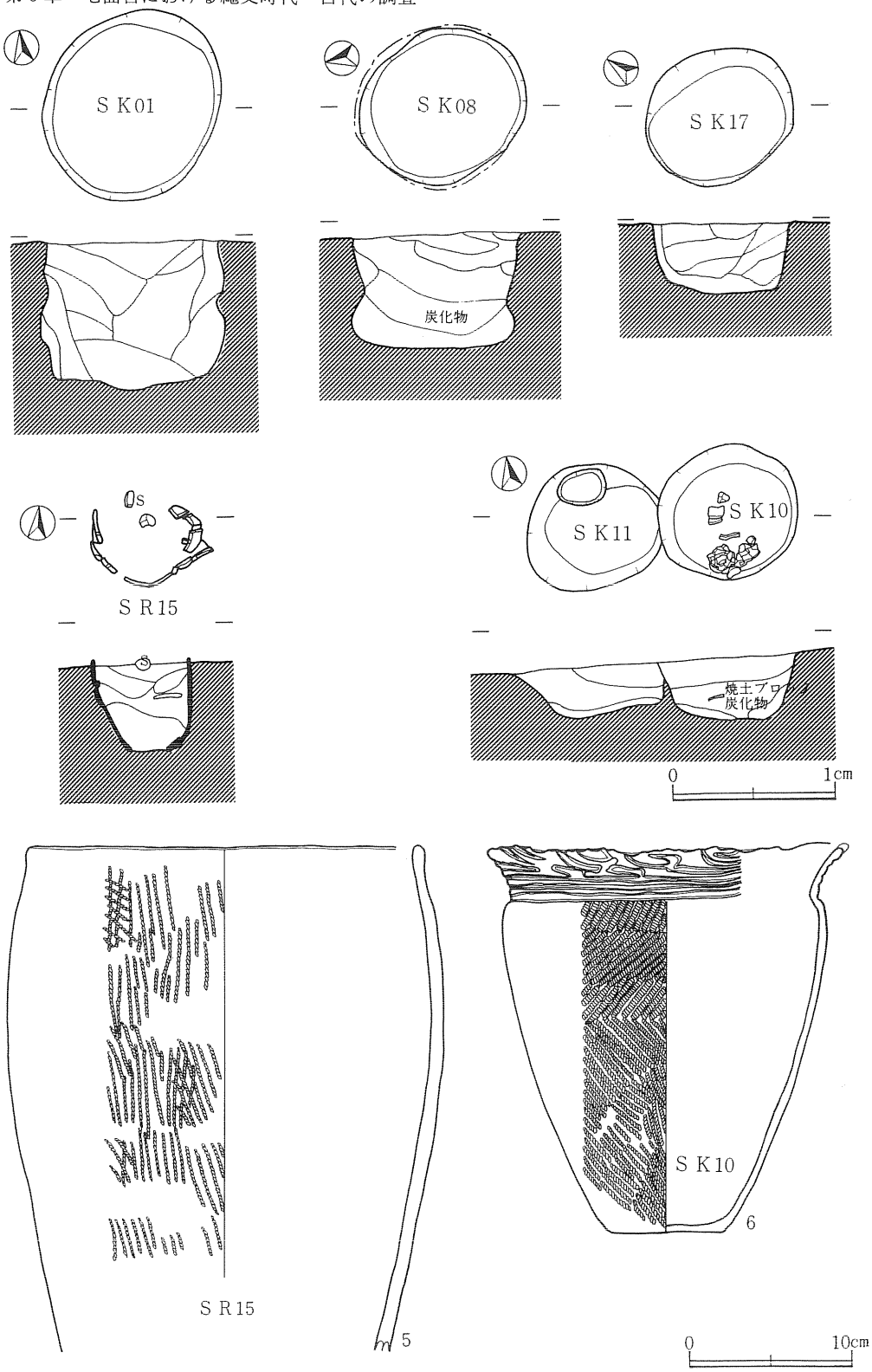
土壙はＳＫ14を除けば遺跡南側中央で東西に並ぶ。ＳＫ01・08はフラスコ状土壙で、ＳＫ17は筒形の土壙であるが、出土遺物が全くなく時期は不明である。

ＳＫ10・11は円形で断面形がスリ鉢状を呈するが前者が後者を切っている。ＳＫ10の覆土には焼土・炭化物層がある。底面よりやや浮いた状態で深鉢形土器６が出土しており、底部から胴部に至り頸部が「く」の字状になるもので、口縁部では小波状を呈し、入組三叉状文が施され、胴部とは３条の沈線で画される。

③　土器埋設遺構

ＳＲ15　（第126図）

遺跡北端で検出されたもので埋設土器５は胴部下半を欠くものであるが、胴部上半に最大径があり口縁部が直立する深鉢形土器である。胴部に斜位と縦位にＬ撚系文が施される。



第126図　土壙と出土遺物

2　出土遺物について

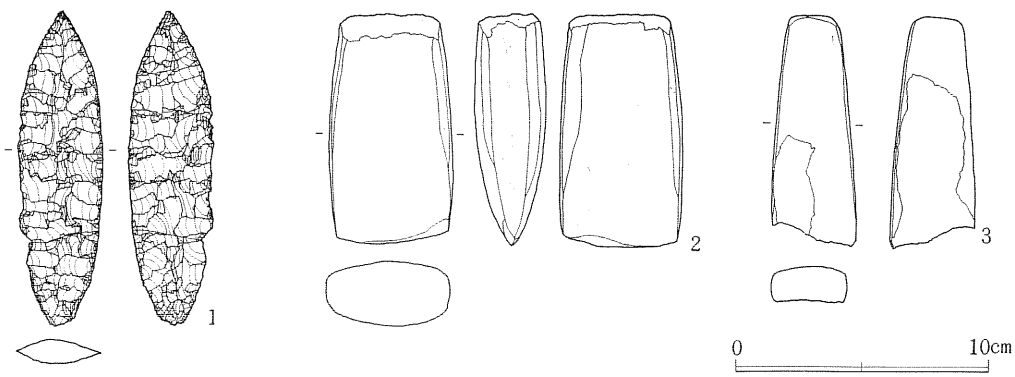
本遺跡出土遺物のうち土器については各遺構の説明において概述した通りでありまた出土する石器も少ない。

①　土　器　（第125・126図）

土器についてはＳＩ２・３・19出土の１・２・４については縄文時代中期末葉の大木10式である。またＳＲ15の埋設土器は縄文後期前葉、ＳＩ12出土の２やＳＫ10出土の６は縄文時代晩期前葉の土器である。

②　石　器　（第127図）

１の石槍は、長さ12.3cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmで両面に丁寧な剝離を施したもので先端部は鋭い。２・３の磨製石斧には擦痕が明瞭に残る。



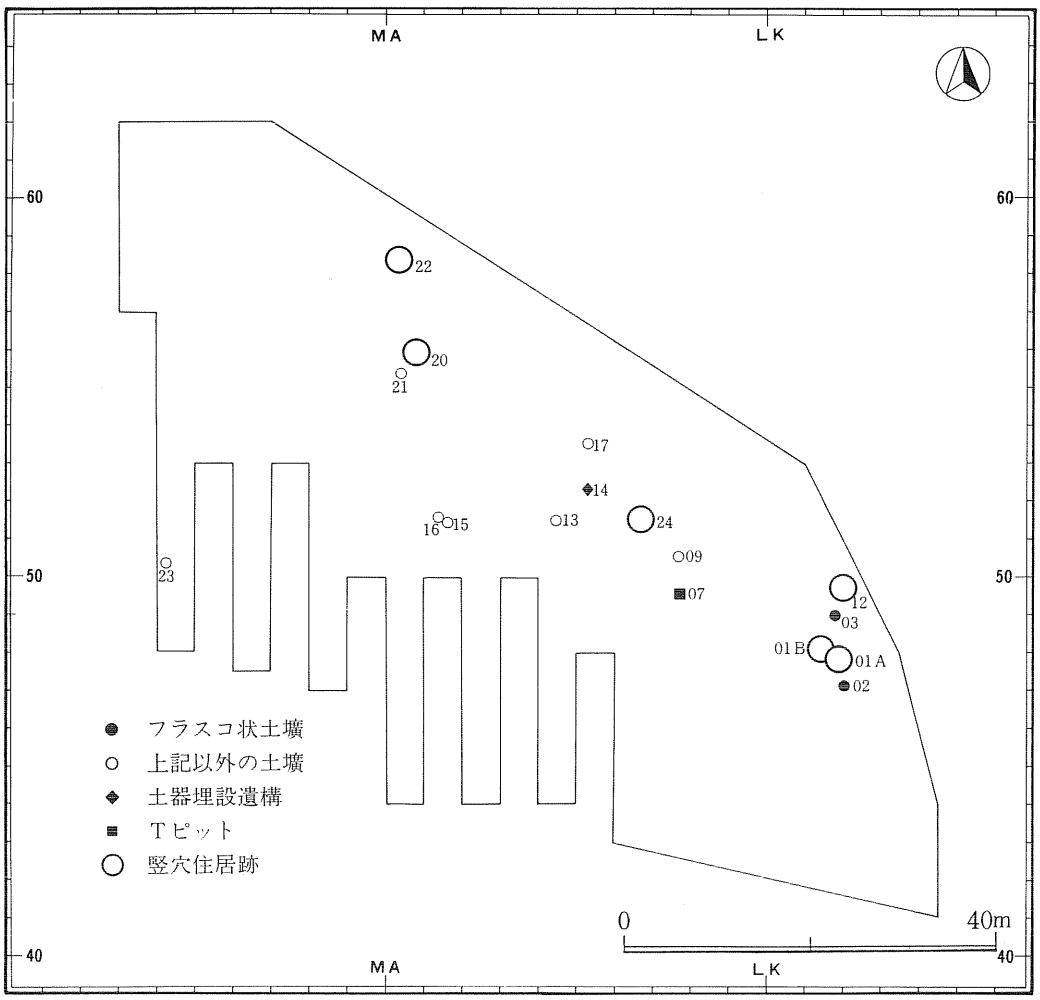
第127図　遺構外出土石器

第５節　石坂台Ⅰ遺跡

１　遺構について（第128図）

本遺跡は七曲台では東側で、標高46.5～48mほどの南から北へゆるく傾斜し、七曲台では高位の段丘西に位置している。遺跡の東側には小沢を挟んで餅田沢Ⅱ遺跡があり、北側には本遺跡を境いに風無台Ⅰ・Ⅴ遺跡のある一段低い段丘面が広がっている。

確認された遺構は全て縄文時代のもので竪穴住居跡５軒、石囲炉１基、フラスコ状土壙２基、その他の土壙６基、土器埋設遺構１基、Ｔピット１基である。これら遺構群は遺跡のある段丘



第128図　石坂台Ⅰ遺跡遺構配置図

面に沿って展開している。また遺物は、各遺構からと遺構外でも、ある程度１個体まとまって地山直上より出土している。

① 竪穴住居跡

１号Ａ竪穴住居跡　（第129・130図）

遺跡の東側で１号Ｂ住居跡を北側で切っている。直径約3.6mの円形を呈し、壁は高さ約６cmで垂直に立ち上がる。床は比較的堅く、また床面上には炉周辺と南側に広く炭化材が分布している。炉は住居中央に土器埋設部とそれに接して北に石組部と掘り込み部を伴う複式炉であり土器を石囲いにした痕跡がみられる。石組部は方形の掘り形の壁に接して石を配置するが掘り形底面に敷石はない。掘り込み部は円形を呈しやや北に向かって開きながら壁に接する。柱穴は深さ20cmほどで４本確認され特に南側のものは壁よりも若干外に張り出している。

炉の埋設土器３は胎土・焼成とも良好で、底部から直線的にやや丸みのある胴部に至りそこから直立する深鉢形土器で、ＲＬ縄文を施文する。床面出土の土器１は丸みのある胴部から外反する口縁に至る深鉢形土器であろう。ＬＲ縄文を地文として曲線的な摩消縄文が施される。柱穴内出土の土器２はＬＲＬ縄文施文後縦位に摩消しを行うものであり、胎土・焼成とも良好である。

１号Ｂ竪穴住居跡　（第131・132図）

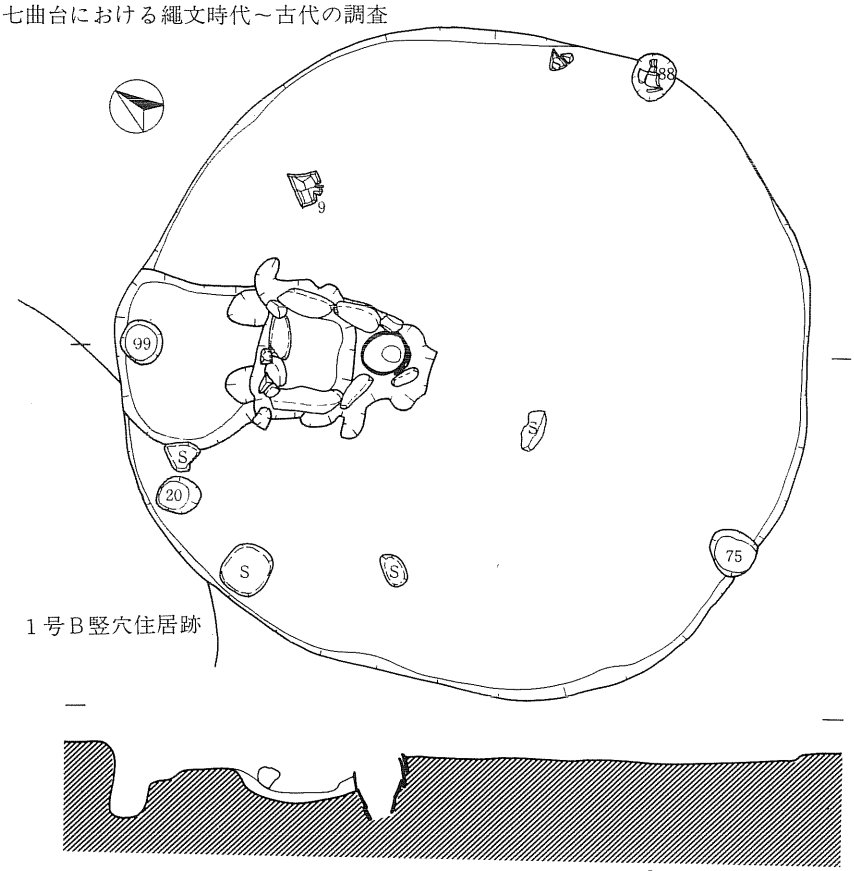
南東側を１号Ａ竪穴住居跡に切られている。直径約3.6mの円形を呈するものと思われるが、南側では明確でない。壁は北側でおよそ７cmほど垂直に立ち上がる。床面は比較的堅く全面に炭化材が広がっており、柱穴も西側で壁より張り出した状態で確認される。

炉は住居中央北側よりに土器埋設部と石囲部・掘り込み部からなる複式炉で、土器を囲む石はなく、石組部は円形を呈し底面に敷石はみられない。掘り込み部も方形に近いが壁には接していない。

炉埋設土器４は底部から胴部下半にかけて直線的に外に開きそこから直立する深鉢形土器でＲＬ縄文を地文として胴部上半には摩消しによって楕円形の縄文帯を残す。床面出土の土器５は鉢形土器で最大径が胴部中央にありやや丸みのある胴部から内反する口縁部に至るもので胴部にはＲＬ縄文が施文され口縁部は無文となる。

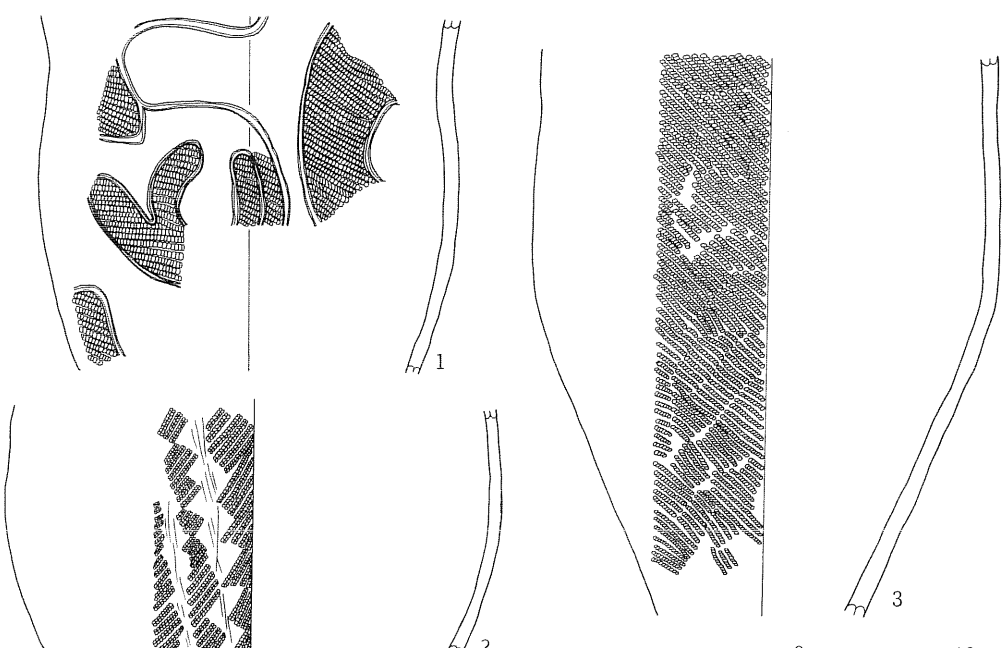
２つの住居は切り合いから新旧関係が明確であるものの炉の埋設土器からしてほぼ同時期の住居であろう。また複式炉の形態や柱穴が壁の外に張り出すことなどに共通性がある。

Ａ住居跡の炭化材は床面よりやや上で確認されておりこの住居が焼失したとすれば、住居廃棄後、やや時間が経過した後に火災があった可能性もあり、また１号Ｂ住居跡の炭化材は１号Ａのものではなかろうか。

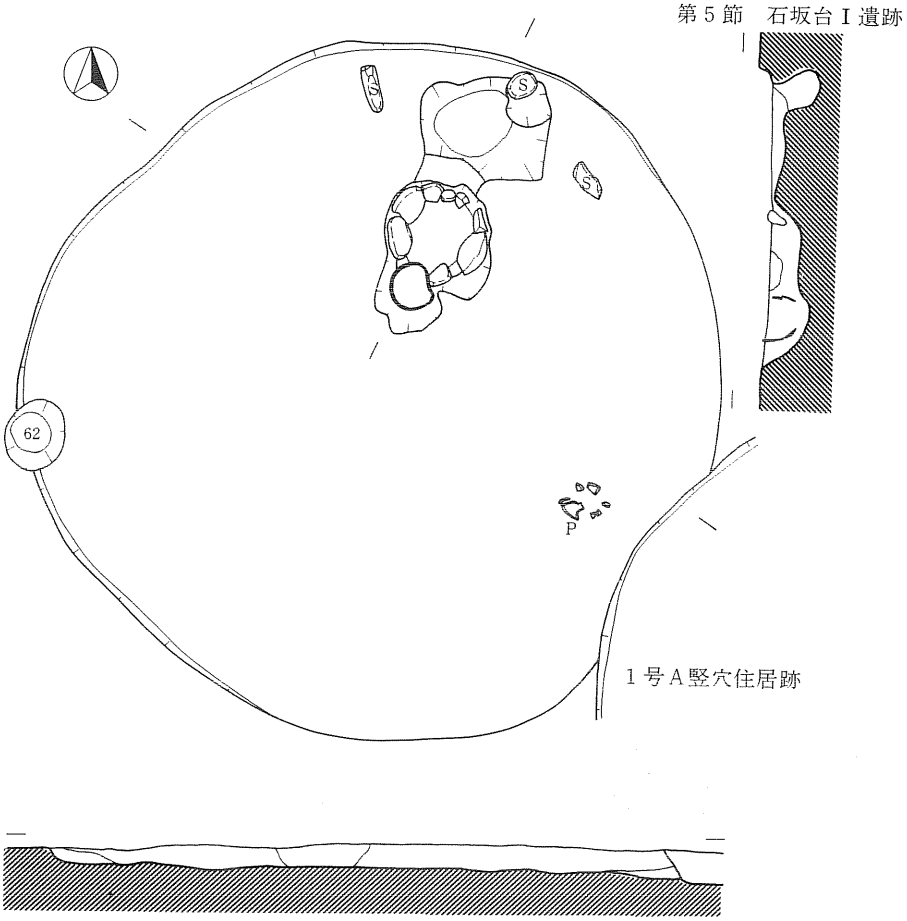


第129図　１号Ａ竪穴住居跡

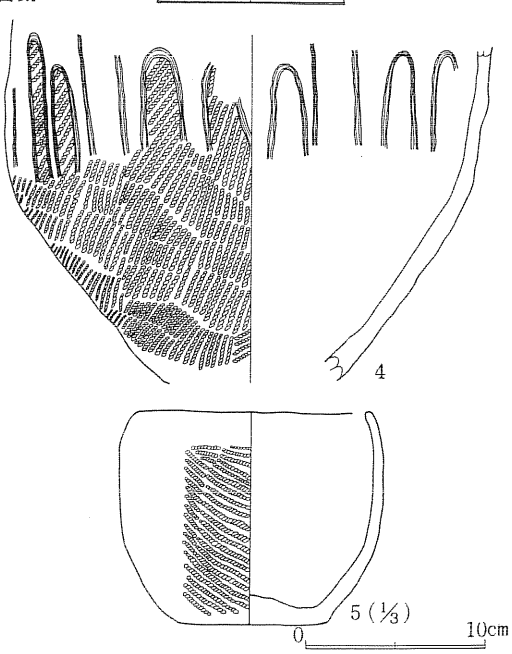
0　1m



第130図　同上炉埋設土器(3)と覆土中土器（１・２）



第131図　１号Ｂ竪穴住居跡

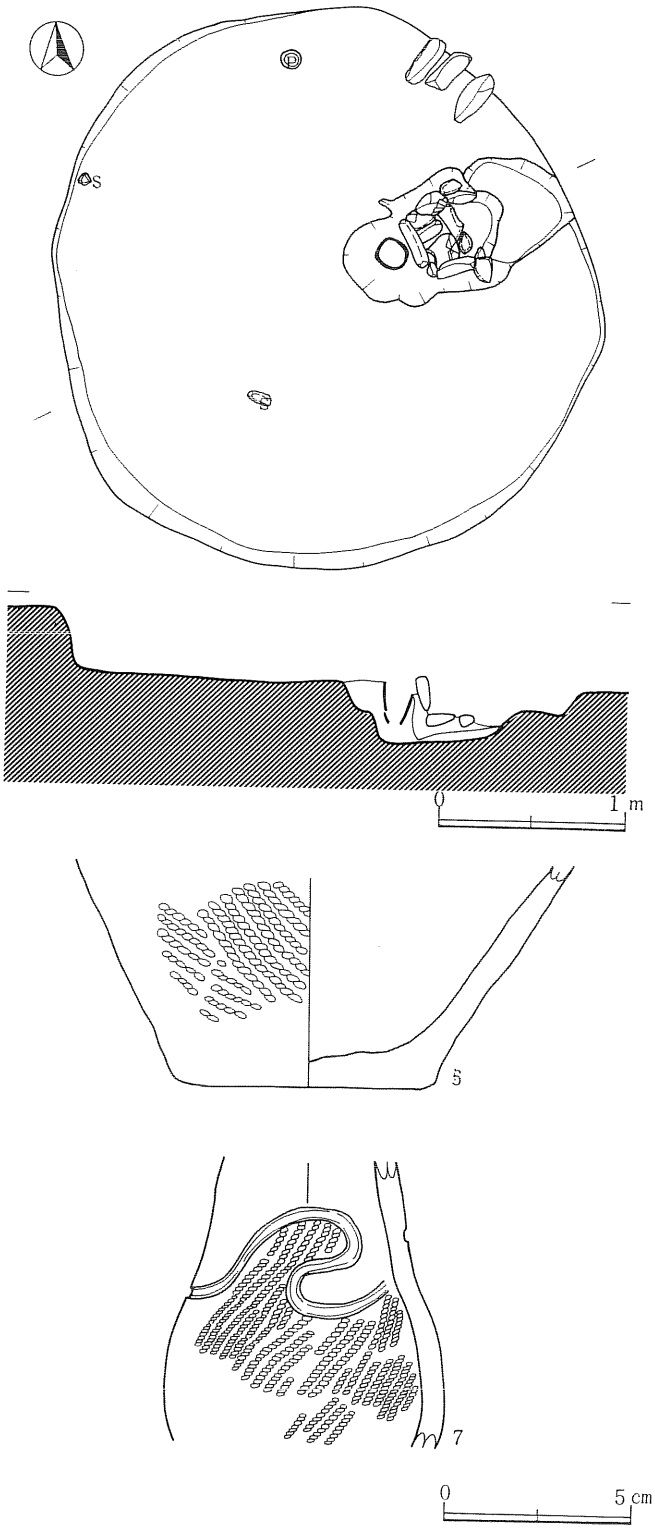


第132図　同上炉埋設土器(4)と覆土中土器(5)

12号竪穴住居跡　（第133図）

１号Ａ・Ｂ住居跡よりやや北東で、台地が沢に向って東に傾斜し始める肩部に位置している。直径約3.0mの円形を呈し、壁は西側で60cm、東側で20cmほどの立ち上がりがある。床は比較的堅く、床面よりやや上面で炭化材が多量に確認される。柱穴は全く確認できない。

炉は住居中央よりやや東で土器埋設部、石組部掘り込み部のある複式炉である。埋設土器は石囲を伴わないが石組部の扁平な石が土器を支えるように配置されている。石組部は堅緻で底面にも敷



第133図　12号竪穴住居跡と覆土中土器

石があり、石組部と掘り込み部は方形に近い。

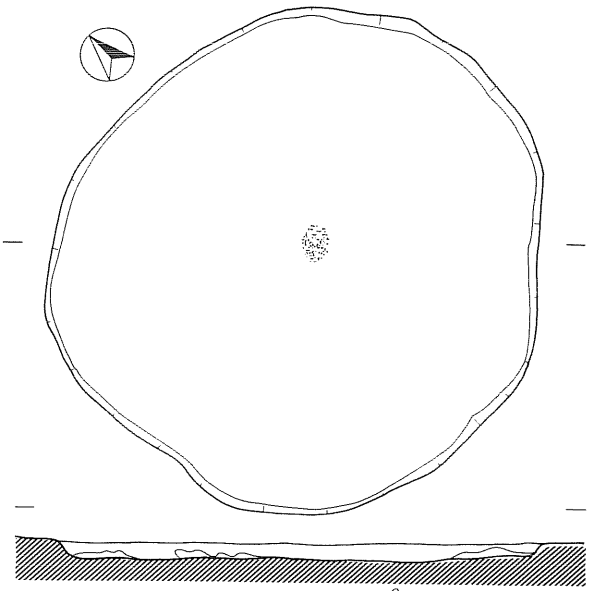
炉の北側には壁に直交するように床面に３個の長方形の石を長軸を住居中央部に向けて配置しており、石は床面に少し埋られた状態で入り口部の施設と考えられる。１号Ａ・Ｂ住居跡にも炉の周辺に大きな自然礫があり同じ性格のものであろうか。

炉の埋設土器は二次加熱のため非常に脆くなっており図示できなかったが、「Ｕ」字状文を施す深鉢形土器である。床面出土の土器６はＬＲ縄文施文の深鉢形土器の底部であろう。７は覆土中からの出土で、最大径が胴部下半にある小型の壺形土器で胴部上半で曲線的な沈線によって無文部とＲＬ縄文施文部とに画されている。

12号竪穴住居跡も炭化材が床面よりやや浮いた状態で確認されるが、壁が焼けている痕跡がなく炭化材の存在だけで焼失家屋とするのには積極的な根拠に欠けるものの仮りに１号Ａ住居跡とともに火災にあったと考えるならばこれもやはり住居廃棄後に惨禍にあったとすることが言えるのかもしれない。

20号竪穴住居跡　（第134図）

遺跡中央よりやや西北の平坦面に位置しており、直径2.5mほどの円形を呈する。壁は高さ10cmほどで垂直に立ち上がり、床も柔かく柱穴も全く確認されないが、住居中央部の床が径10cmほどの範囲で焼けており地床炉とも考えられる。遺物の出土が全くなく時期は不明である。



第134図　20号竪穴住居跡

22号竪穴住居跡　（第135図）

本遺跡の遺構のうち最も北側の遺構で段丘面が傾斜し始める肩部に位置している。直径約3.3mの円形を呈し、壁の高さは南側で50cm、北側で25cmでほぼ垂直に立ち上り壁面もしっかりしている。床も非常に堅くしまっているが炉・柱穴とも全く確認されなかった。床面出土の土器８はキャリパー形の深鉢形土器で口縁部はＬＲ縄文の押圧によって小窓状に区切られ、胴部にもＬＲ縄文が施される。縄文時代中期中葉の土器である。

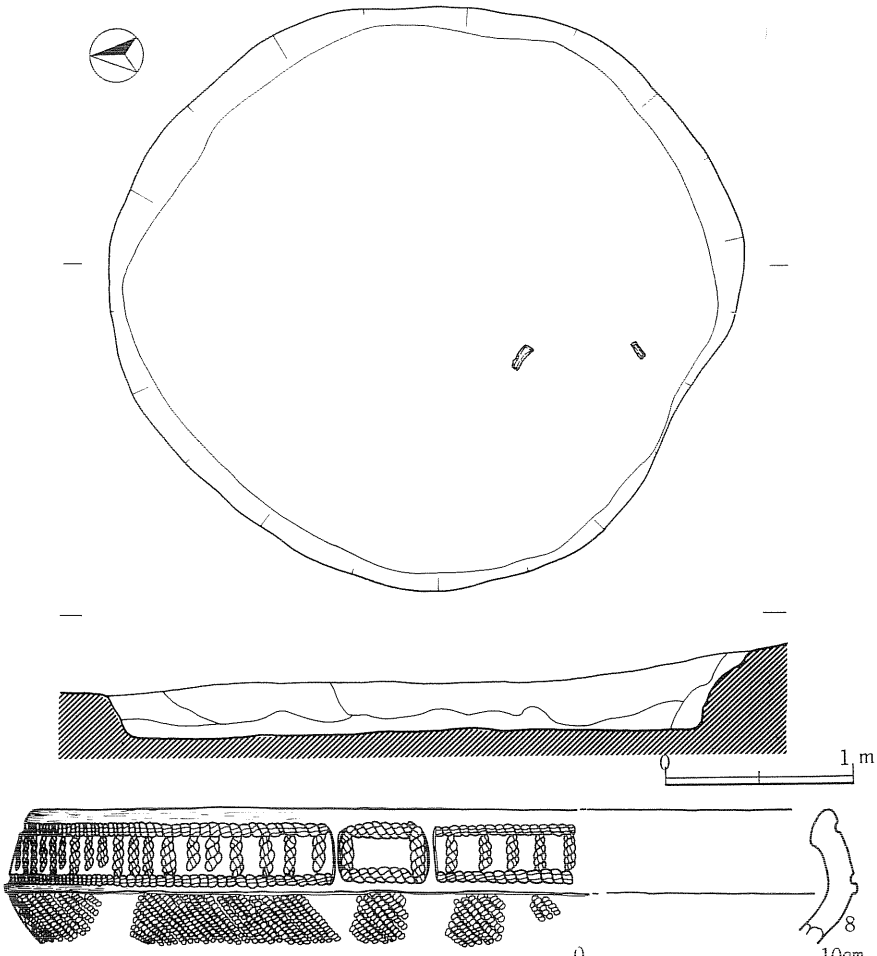
②　石囲炉　（第136図）

遺跡の中央やや北側に位置している。三個の石を「コ」の字形に配したもので炉の内側が少し焼けているだけであり、また周辺からは柱穴も全く確認できない。

③　土　壙　（第136図）

検出された土壙はフラスコ状土壙２基ＳＫ02・03、それ以外の土壙７基ＳＫ13・15・16・17・19・23である。フラスコ状土壙ＳＫ02は１号Ａ竪穴住居跡の、ＳＫ03は12号竪穴住居跡の南側にそれぞれ住居跡に付随するように位置している。

ＳＫ13を始めとする７基の土壙は平面形が円形ないし楕円形を呈する土壙で深さも30～40cmほどのものである。ＳＫ23を除けばいずれも縄文時代晩期中葉の土器が出土している。ＳＫ13では上面に石が置かれ、ＳＫ17では底面よりやや上で二つの打製石斧１・２と石錘（出土時には二つに折損していた）３が出土している。またＳＫ15・16Ａ・Ｂはいずれも楕円形を呈し、ＳＫ16ＡがＳＫ15・16Ｂを切っておりこのＳＫ16Ａ東側に上面から底面まで礫が多量に投げ込まれている。ＳＫ23は楕円形の土壙で上面から赤色塗彩の壺形土器が出土する。縄文後期中葉



第135図　22号竪穴住居跡と覆土中土器

の土器である。

④　土器埋設遺構

ＳＲ14

遺跡中央部において黒色土中で検出されたもので深鉢形土器９・10を二重に埋設しているが、胴部上半はすでに欠損している。外側の土器10は胴部にＬＲ縄文を施文しており、内側の土器９は無文で幅広のケズリ痕を明瞭に残す土器である。

⑤　Ｔピット

ＳＫＴ07

遺跡中央やや東よりに１基だけ検出されたものである。上面での長さ3.0m、幅0.7m、底面

での長さ3.3m、幅0.2m、深さ0.8mほどで縦断面は下ぶくらみを呈し、長軸方向を南北にとる。

2　遺物について

遺物は遺構の項でも触れたがここでは遺構内外のものを一括して扱う。

①　土　器　（第137・138図）

縄文時代前期初頭から弥生時代まであるが、各時期ごとの量は少ない。

前期初頭……17～22で、同一個体である。直立して平縁の口縁部には細い３本の沈線が平行に引かれ、その後に半載竹管状工具によって瓜形文が、二段に方向を逆にして施される。胴部には太いＬＲ縄文とＲＬ縄文が幅１cmほどで押圧され一種の羽状縄文を呈するが、20・21の拓影図の上半に見られるように胴部に瓜形文の列がある。胎土・焼成とも良好であるが、繊維は含んでいない。

中期中葉……22号住居跡の土器８や12・13である。キャリパー形をなす器形で13の口縁部には「Ｓ」字状の突起が付くのであろう。地文は、ＲＬＲ縄文で、口縁部の隆帯に沿って、同じ原体が押圧される大木８ａ式である。

中期後葉……１号Ａ・Ｂ、12号住居跡出土の土器１～７、14～16、23～28などで、磨消手法が多用され胴部には「Ｃ」字状文や楕円区画文が施される土器で大木10式である。

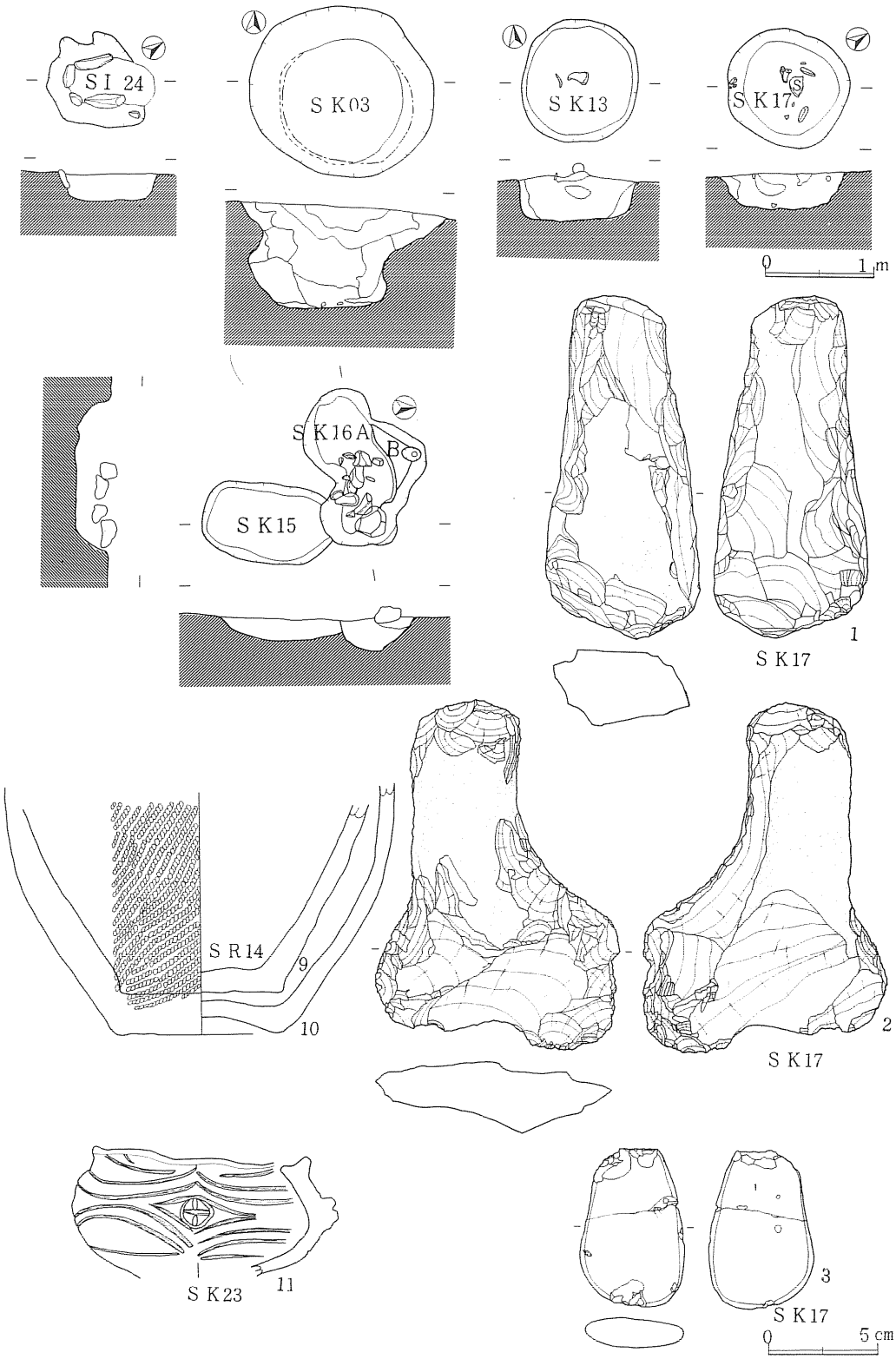
後期……ＳＫ23出土の壺形土器11や29～35などで撚系文や縄文を地文として沈線文を施す土器である。後期の前葉の土器である。

晩期……36～38で口唇部に刻みがあり三条の沈線が引かれる鉢形土器36や磨消手法による「Ｋ」字状文や「Ｘ」字状文の施される土器で大洞C_2式である。

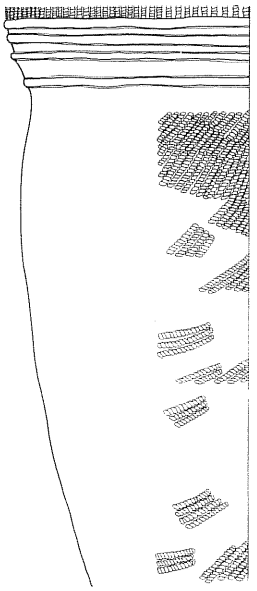
弥生時代……39～41で刺突の行われるものや、口縁内側に沈線の引かれるものである。

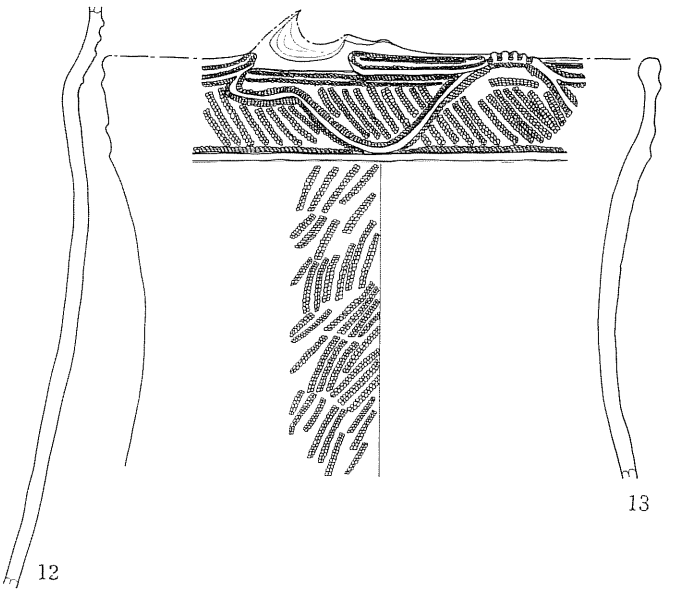
②　石　器　（第139図）

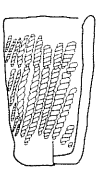
石器は横型の剝片を素材とし主要剝離面に第一次剝離面を残すトランシェ様石器４・５、断面カマボコ形で両面に調整を施すヘラ状石器15～17、それに６～14のように主要剝離面側に第一次剝離面を残し、背面と主要剝離面の縁辺部に剝離調整を施す石器がある。この他無茎石鏃18縦形石匙19、磨製石斧20～22などがあり、これに加えてＳＫ11出土の打製石斧１・２、石鏃３などがある。

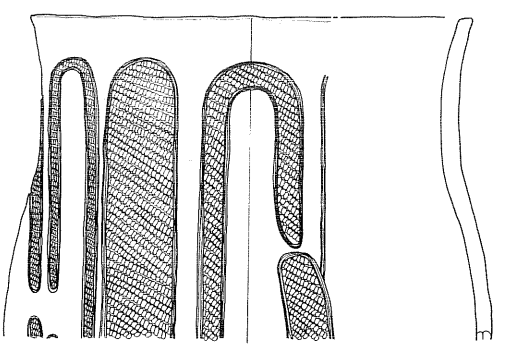


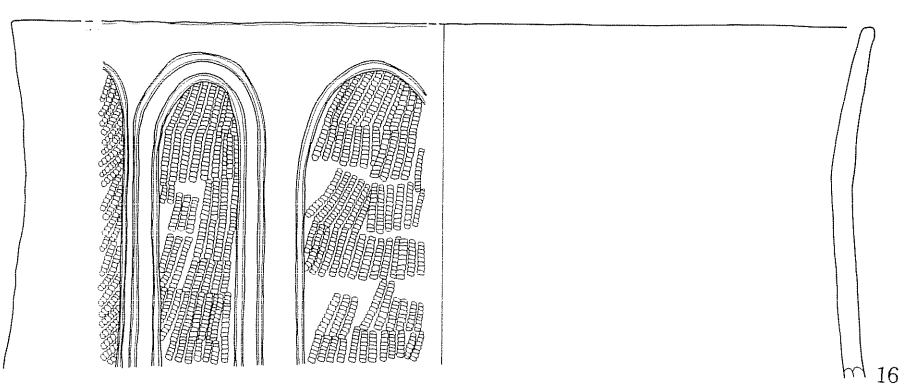
第136図　土壙とその出土遺物





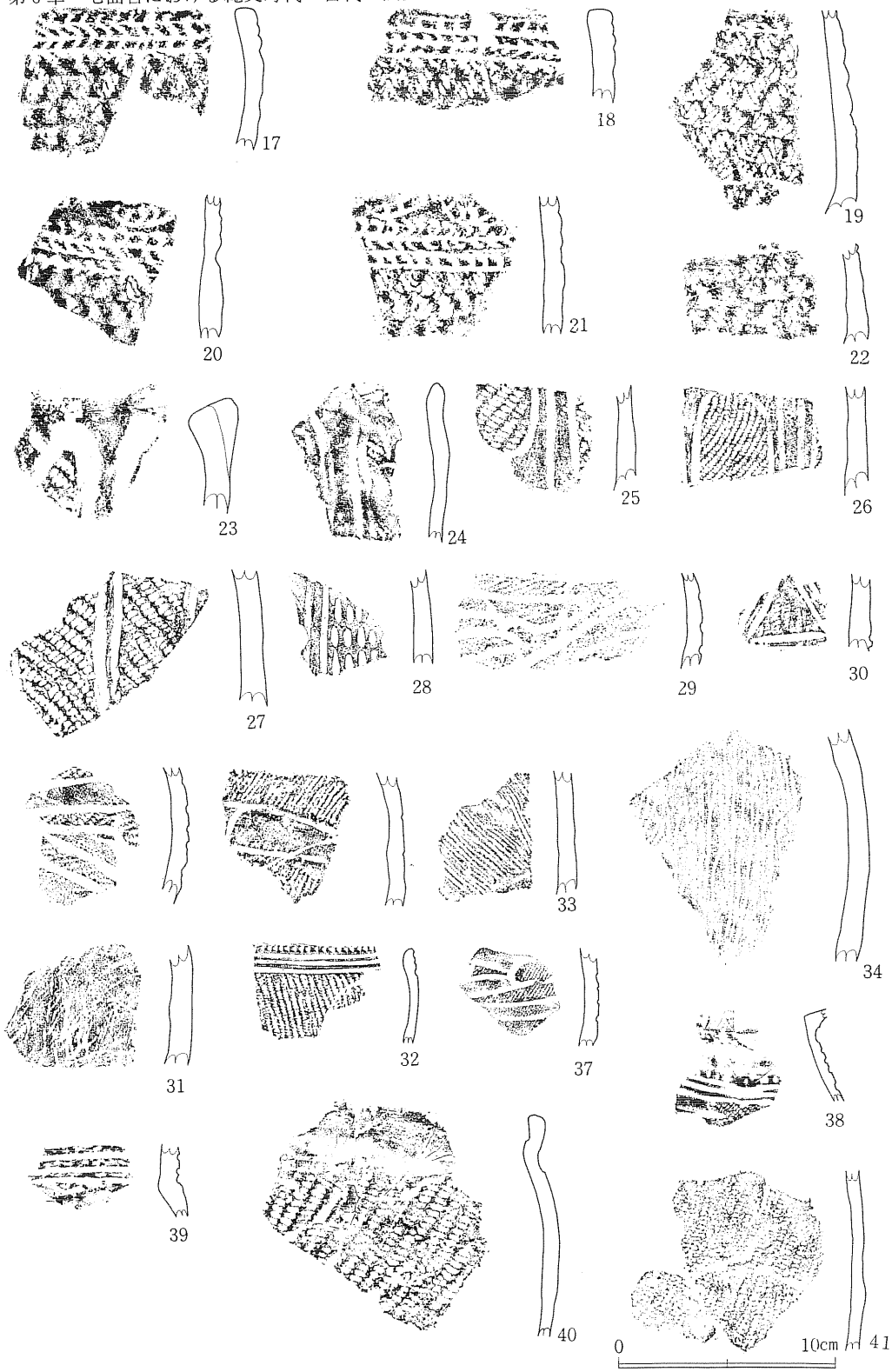




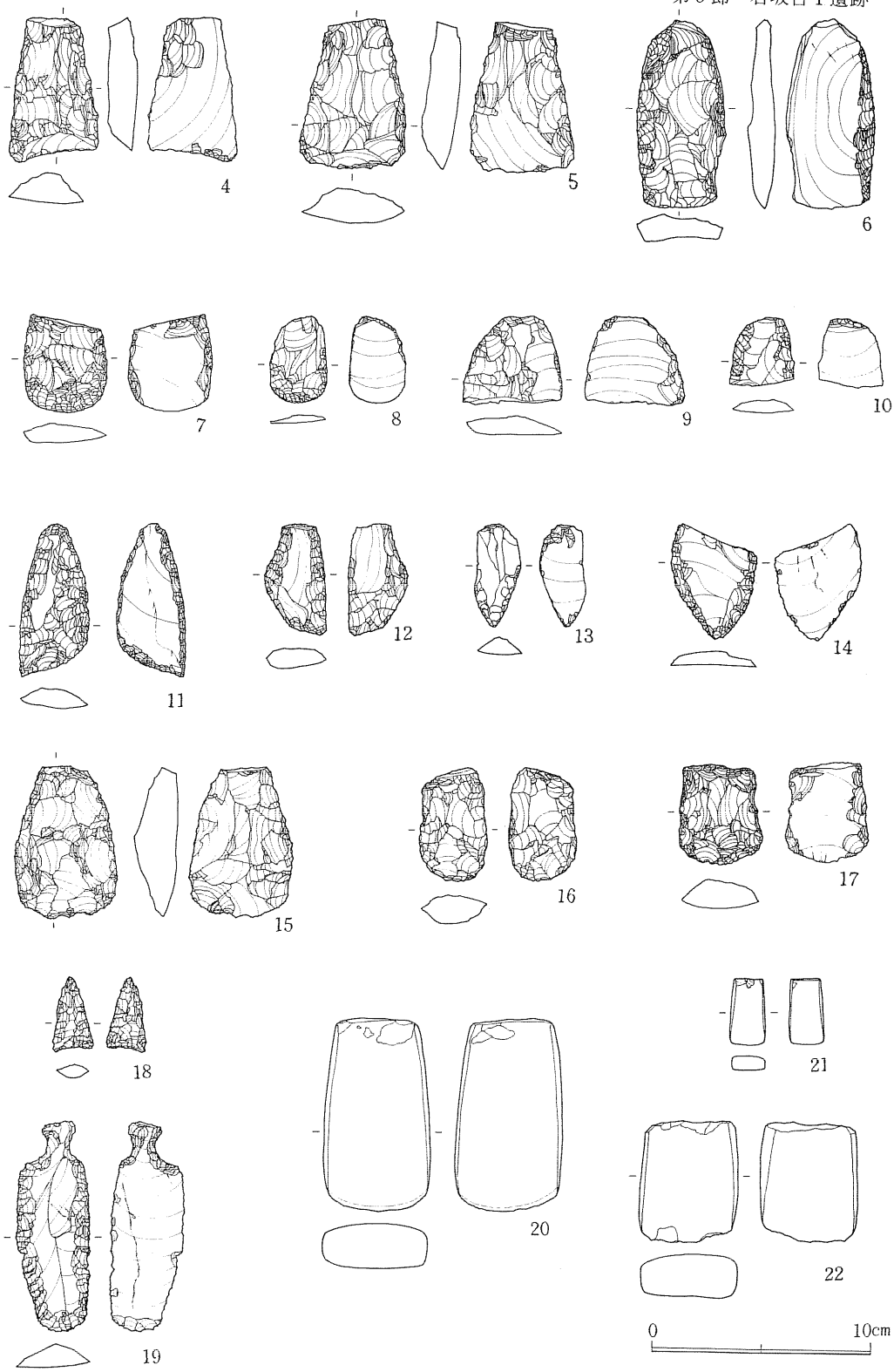


0　10cm

第137図　遺構外出土土器



第138図　遺構外出土土器



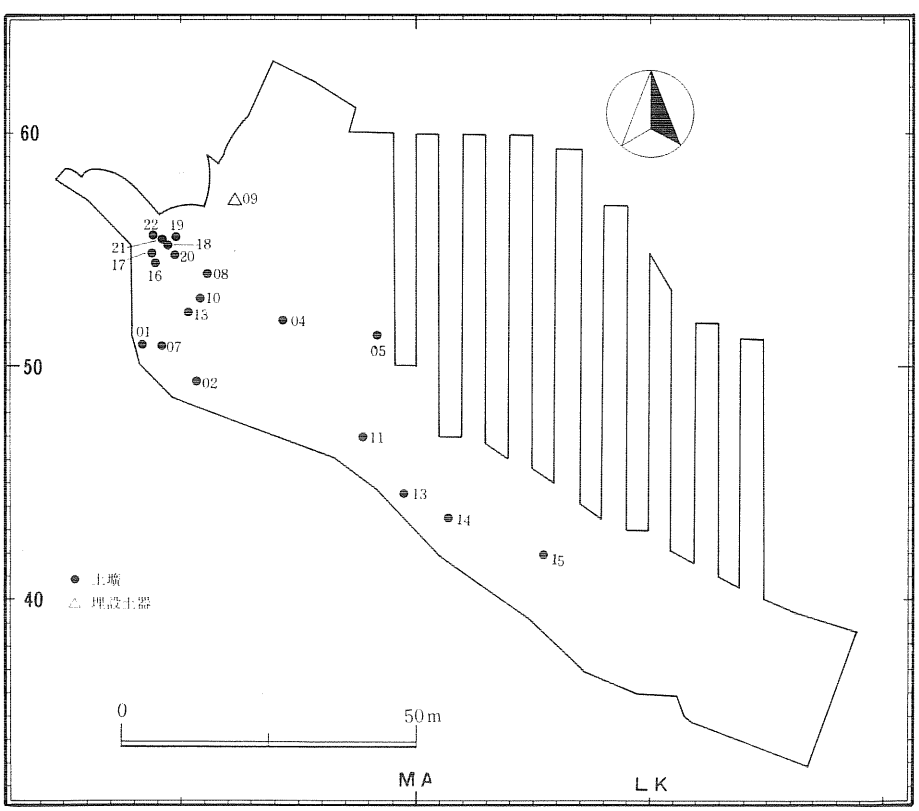
第139図　遺構外出土石器

第６節　石坂台Ⅲ遺跡

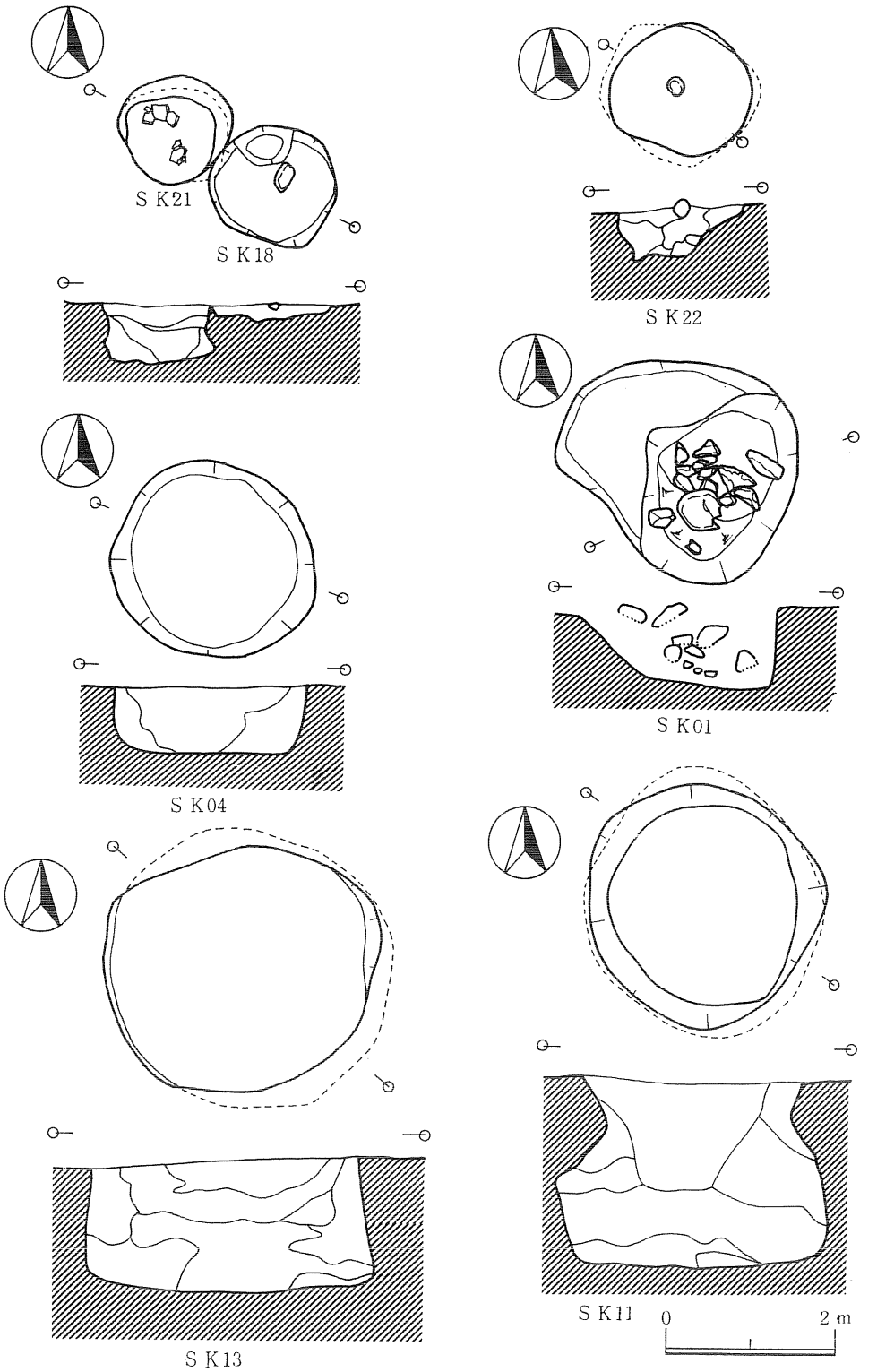
１　遺構について

本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では、南西端に位置する。河辺町の戸島地区周辺の沖積地は、岩見川が現在の河道の南側につくったものであるが、この沖積地には、さらにその南側の丘陵地帯を開析して何本かの小谷が降りてきている。遺跡はこれらの小谷のうち、白熊地区をその中程にもつ谷に面した七曲台全体の南縁にある。遺跡の北側には比高－１ｍ～４ｍで風無台Ⅱ・Ⅲ遺跡、松木台Ⅰ・Ⅱ遺跡、石坂台Ⅱ遺跡などがある北西方向に突出した台地が広がり、東側は比高２ｍ程の緩斜面を上って石坂台Ⅰ遺跡がある。また西側と南側は東北横断道秋田線の予定区域内に含まれる№36、№35遺跡に挟まれている。遺跡の中央部での標高は45ｍを測る。

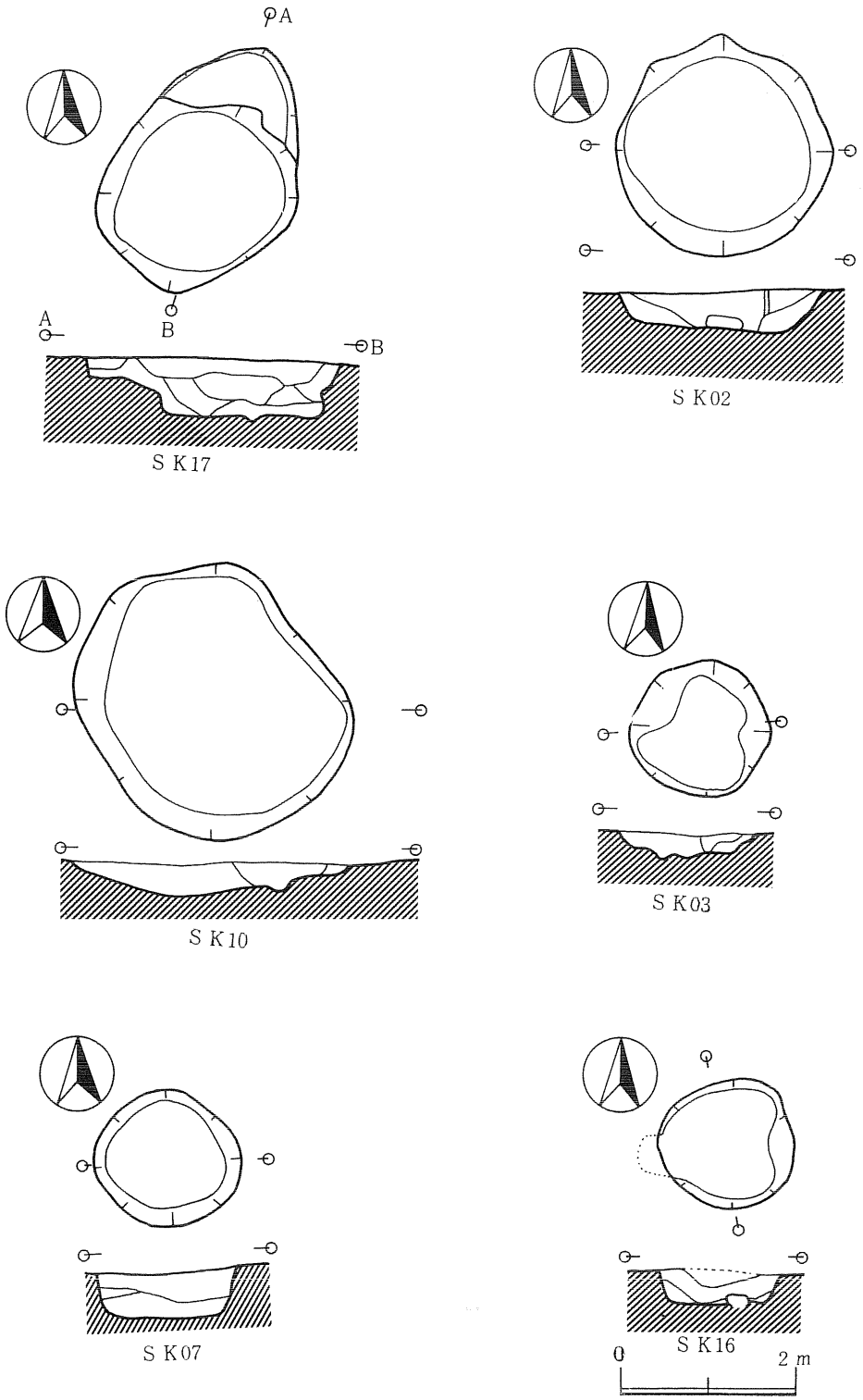
調査区は、台地の縁に沿って設けられた。調査の結果、土壙18基、Ｔピット１基、埋設土器１基が検出された。このうち14基の土壙は調査区の西側に集中し、ことにＳＫ16～22の７基はＭＫラインからＭＭライン、54ラインから56ラインの４グリット分の区域に密集している。



第140図　石坂台Ⅲ遺跡遺構配置図

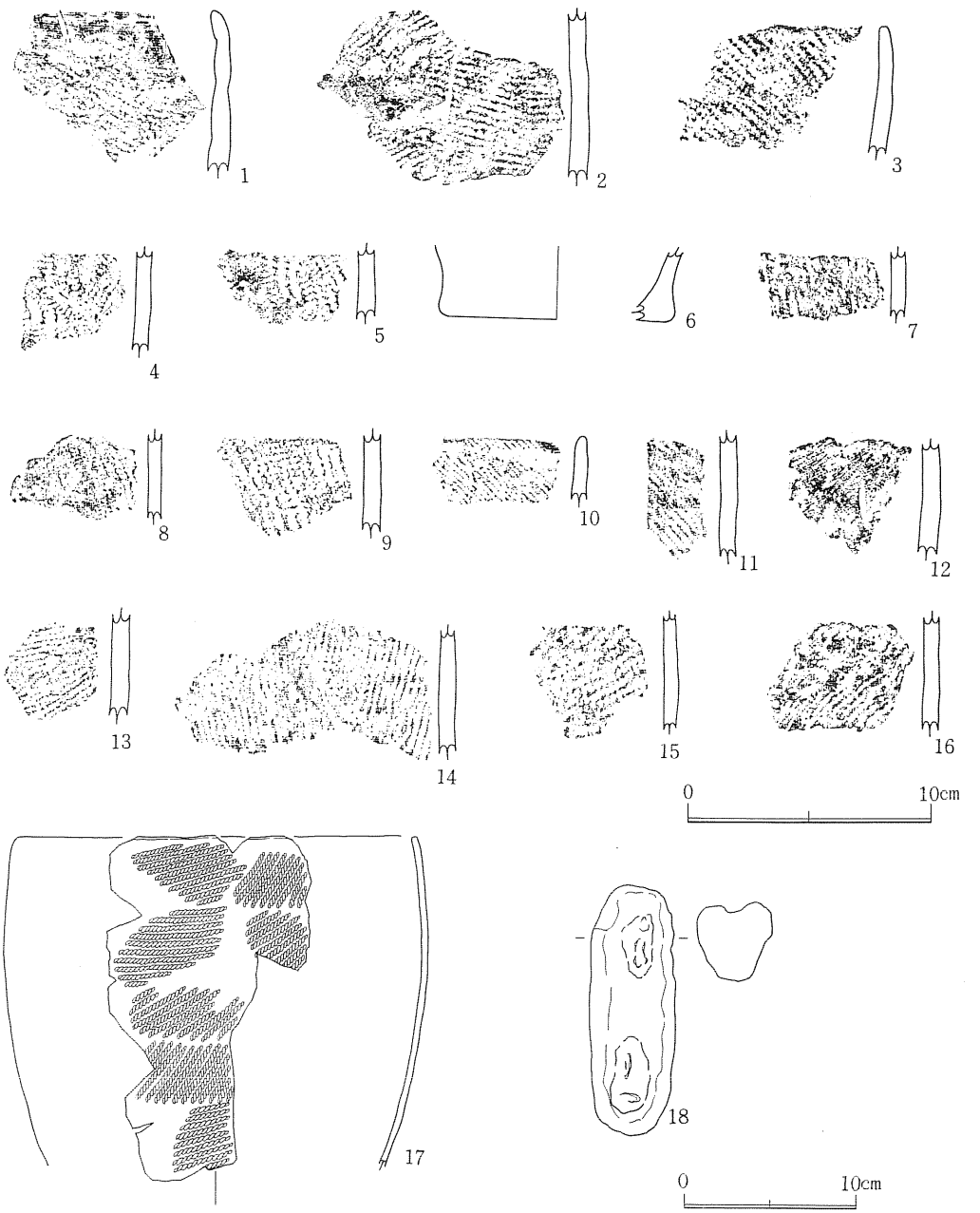


第141図　土　壙



第142図　土　壙

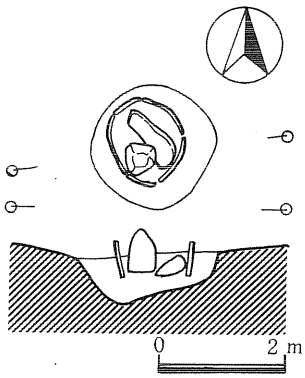
土壙には開口部径が0.6m～1.4m、深さが0.1m～0.4mの規模をもち、断面形が擂鉢形かビーカー状を呈するものと、開口部径1.4m～1.5m、底径1.5m～1.7m、深さが0.8m～1.1mの規模で断面形がフラスコ状かやや末広がりとなるものがある。前者の土壙ではＳＫ01のように石が詰まったり、ＳＫ18、22のように埋土上面に石が据えられたなどの例がある。また、後者では埋土に壁面からの崩落土の堆積が認められるＳＫ13のような例もある。



第143図　土壙内出土土器

埋設土器は、MH57グリットで検出された。径25cm・深さ10cmのピット内に２個体分の土器を埋置し、さらに内部に２個の河原石を入れている。

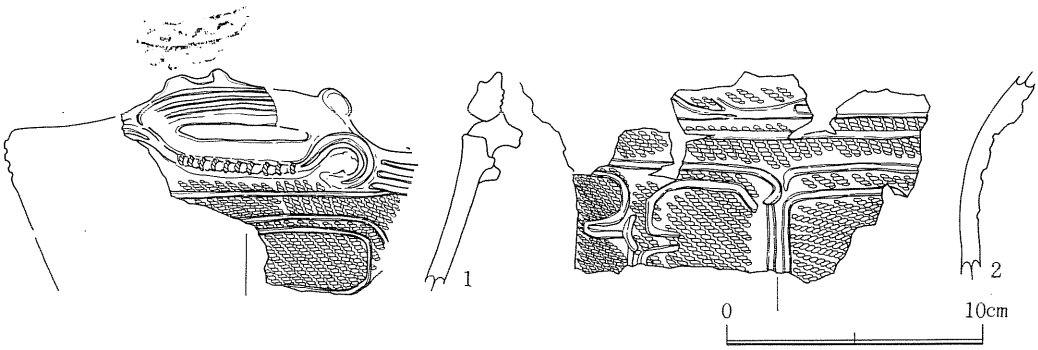
Ｔピットは、MB51グリットで検出された。長さ3.5m・幅0.5m・深さ1.1mを測る。



第144図　埋設土器（ＳＲ09）

2　遺物について

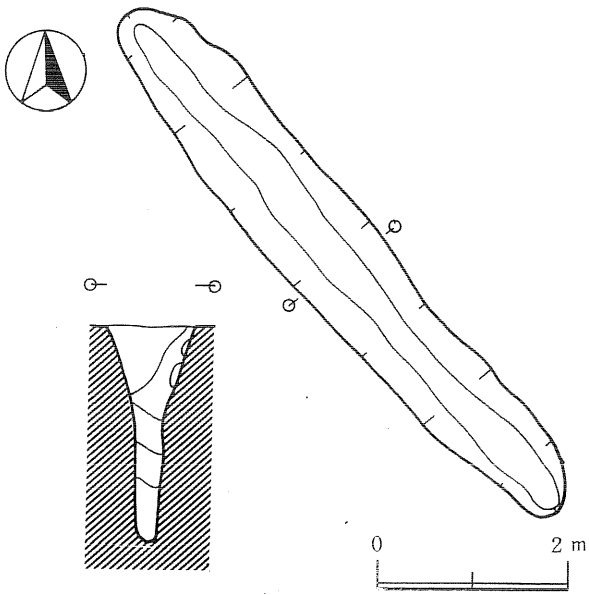
土器は、縄文時代中期、後期末～晩期のものである。土壙内からは晩期の粗製土器、遺構外から後期末の入組文を施した土器および粗製土器が出土している。埋設土器は中期の大木８ａ式の土器である。石器は石鏃２点、篦状石器３点、石匙１点、剝片数点および凹石１点が出土している。



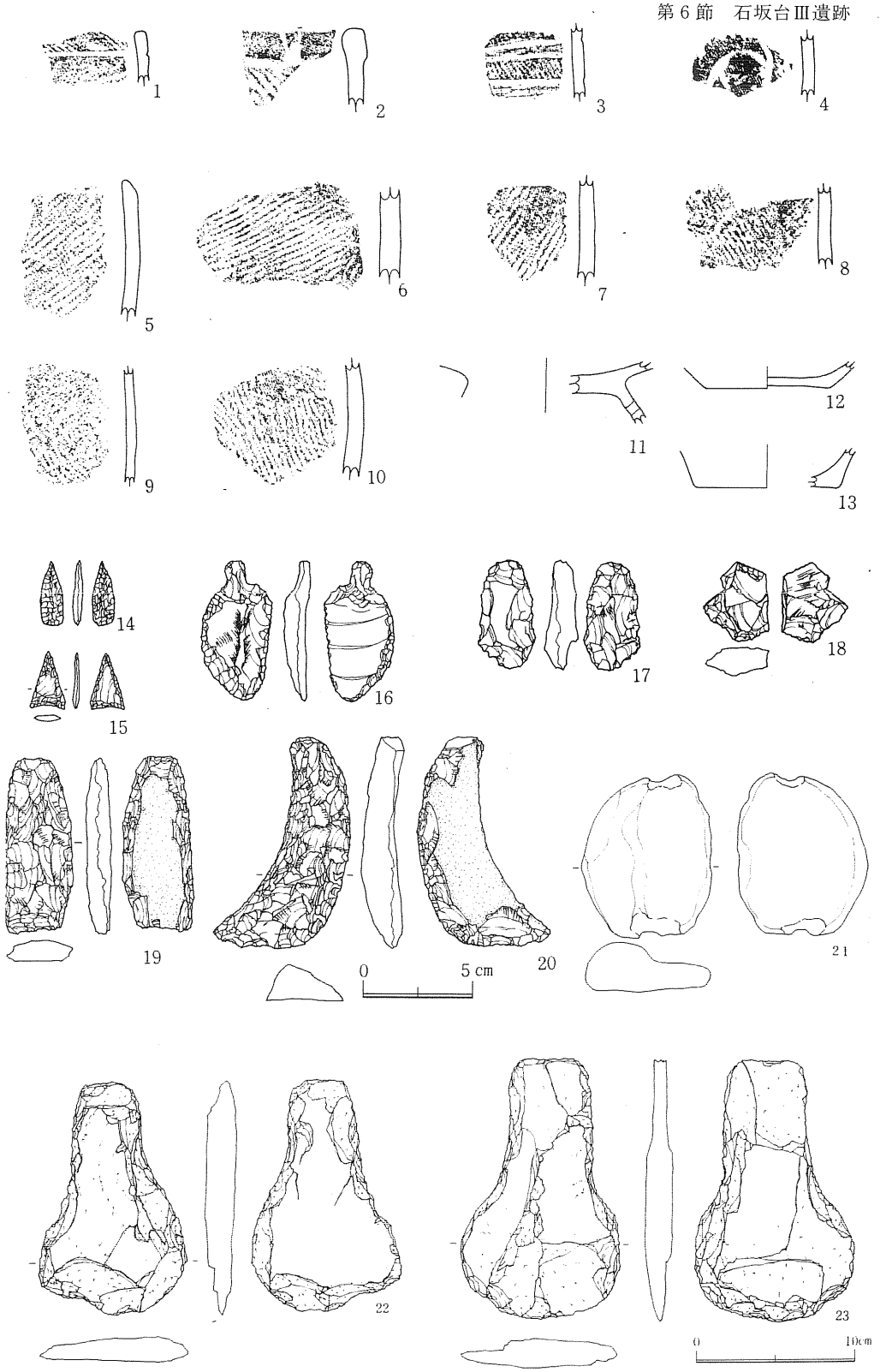
第145図　ＳＲ09使用土器

3　小　結

本遺跡から検出された土壙は、出土した遺物の時期から、縄文時代後期末～晩期のものである。また土壙の形態・規模、その検出状況から、七曲台の他遺跡と同様、２つの種類に分けられる。



第146図　Ｔピット（ＳＫＴ05）



第147図　遺構外出土遺物

第７節　石坂台Ⅱ遺跡

１　遺構について

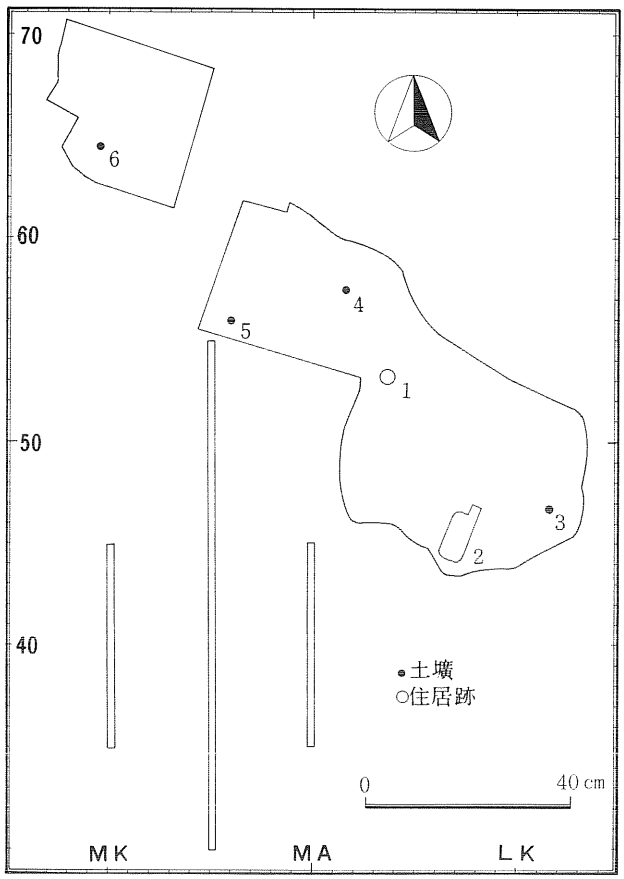
本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では、ほぼその中央部に位置する。七曲台はその北部において岩見川に注ぎ込む沢筋によって、東西に大きく２つに分断された形状を呈している。すなわち北部にあっては、北へ向い大きな舌状台地が２つ突出した形を見せているのであるが、遺跡はこの台地を分断している沢筋の南側、沢頭の部分に立地する。遺跡のある地点での標高は45mを測るが、すぐ北側には比高－３m～４mで風無台Ⅲ遺跡が隣接し、南西および南東側にはほぼ同じ高さで石坂台Ⅲ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡が続く。

調査区は、遺跡範囲のほぼ中央を南北にはしる道路を挟んで２個所設け、またその南側には３本の南北トレンチを設定した。遺構は道路の西側調査区で弥生時代の土壙１、東側調査区で縄文時代の土壙３、住居跡１、時期不明の竪穴状遺構１を検出している。

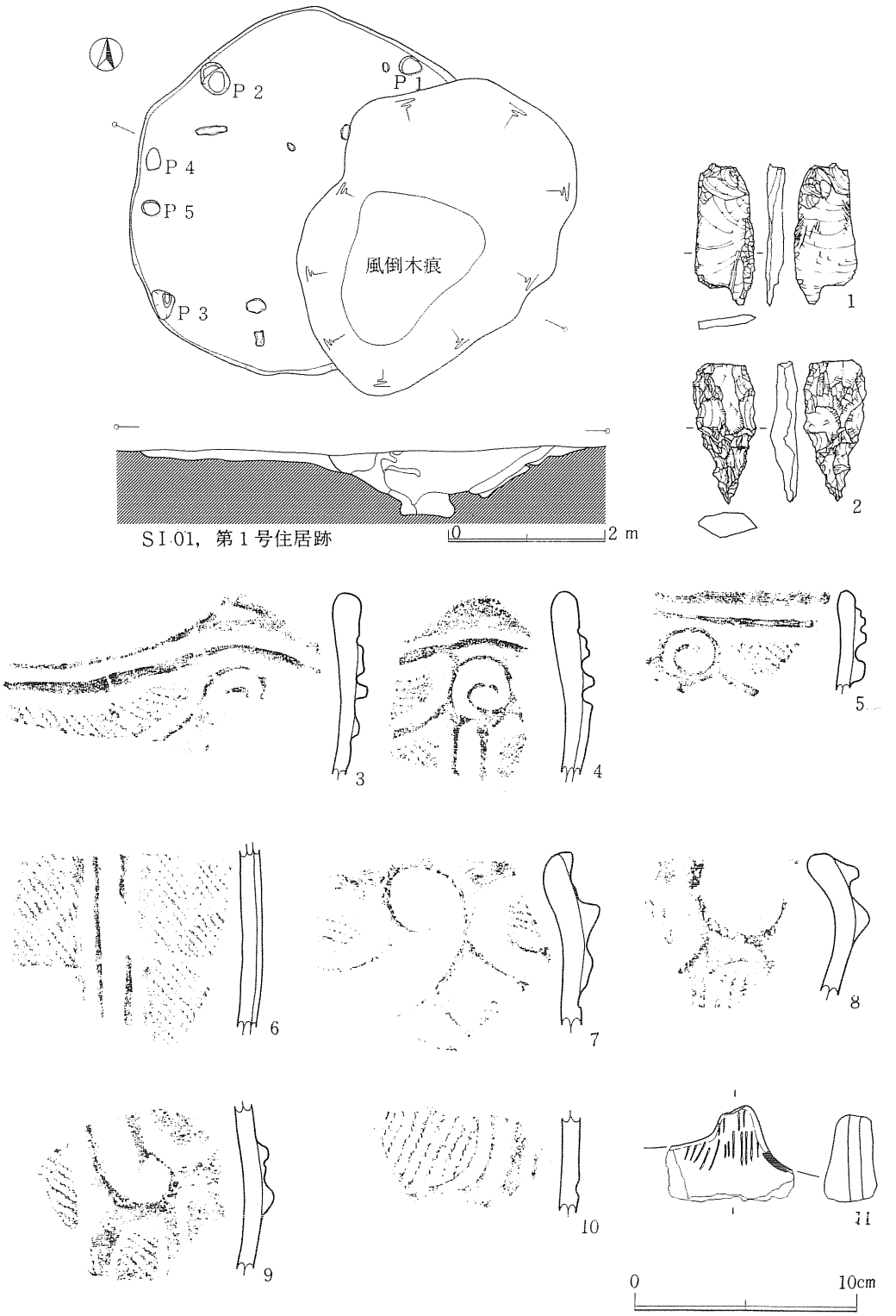
住居跡は、ＬＱ53グリットで検出された。東側⅓程は倒木痕によって大きく失われている。径48m・深さ0.1mの円形プランをもつ。柱穴は壁沿いに５ヶ所確認されている。このうち、P_1、P_2、P_3は深さがそれぞれ、11、20、22cmで、P_4、P_5は13、12cmである。またP_2とP_4の間には長さ40cm・幅10cmの礫が置かれている。P_4、P_5は住居出入口に関係した柱穴と思われる。

遺物は、住居跡の壁近くから多く出土し、中央部においては疎らである。ことにP_4、P_5およびその北側に置かれた礫の付近から、完形に近い大破片が出土している。住居跡の埋土は遺物を含む黒褐色土である。住居跡内から出土している遺物の時期は、中期中葉大木8ｂ式期のものである。

遺物がなく明言できないが、縄文時



第148図　石坂台Ⅱ遺跡遺構配置図

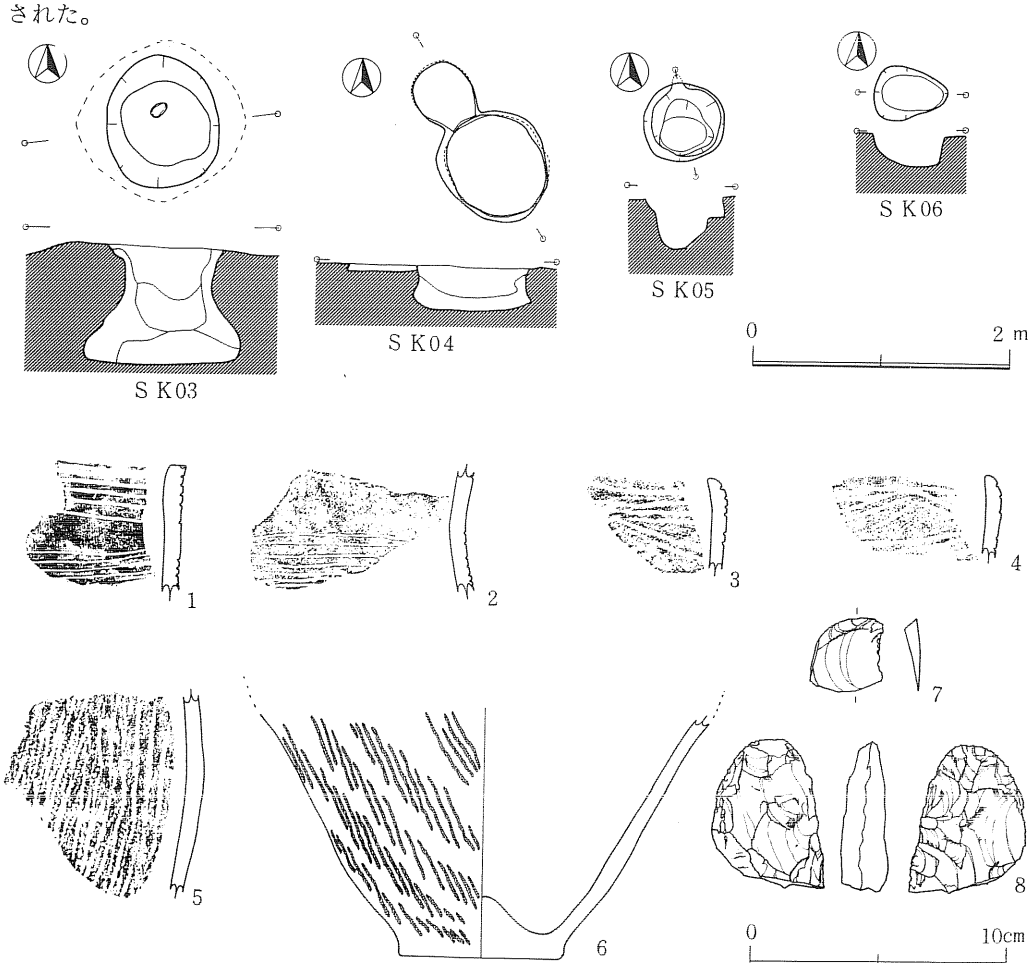


第149図　ＳＩ 01第１号住居跡および出土遺物

代の土壙は３基、ＫＴ46、ＬＳ57、ＭＥ55の各グリッドでＳＫ03、ＳＫ04、ＳＫ05が検出されている。ＳＫ03は開口部径1.5m・底径1.9m・深さ1.3mを測り、断面形がフラスコ状を呈する。ＳＫ04は開口部径1.2m・深さ0.5mで、断面では僅かに末広がりになる。ＳＫ05は開口部径0.9m・深さが0.6mの擂鉢形を呈するものである。

弥生時代の土壙であるＳＫ06はＭＫ64グリットで検出された。開口部径0.85m×0.6m・深さ0.4mの小形の土壙である。内部から弥生時代の土器片が多量に出土している。

時期不明の竪穴状遺構ＳＫＩ02は、ＬＣ44、ＬＣ45、ＬＣ46の３グリットにわたって検出された。長辺9.4m・短辺4.1m・深さ0.4mの方形プランをもち、北辺には長さ1.6m・幅1.2mの階段状遺構が付設されている。竪穴内は、遺構を掘り込んだ際地山を僅かに残した仕切で大小８つの区画に分けられている。東西列の仕切は３列、うち東側の列では北から5.1m・4.4mの個所に仕切を設け、西側２列では2.1m・2.7m・4.6mに仕切を設けている。竪穴内に柱穴と思われるピットは検出できなかったが、東壁外側のほぼ中央に径44cm・深さ12cmのピットが確認された。



第150図　土壙および出土遺物

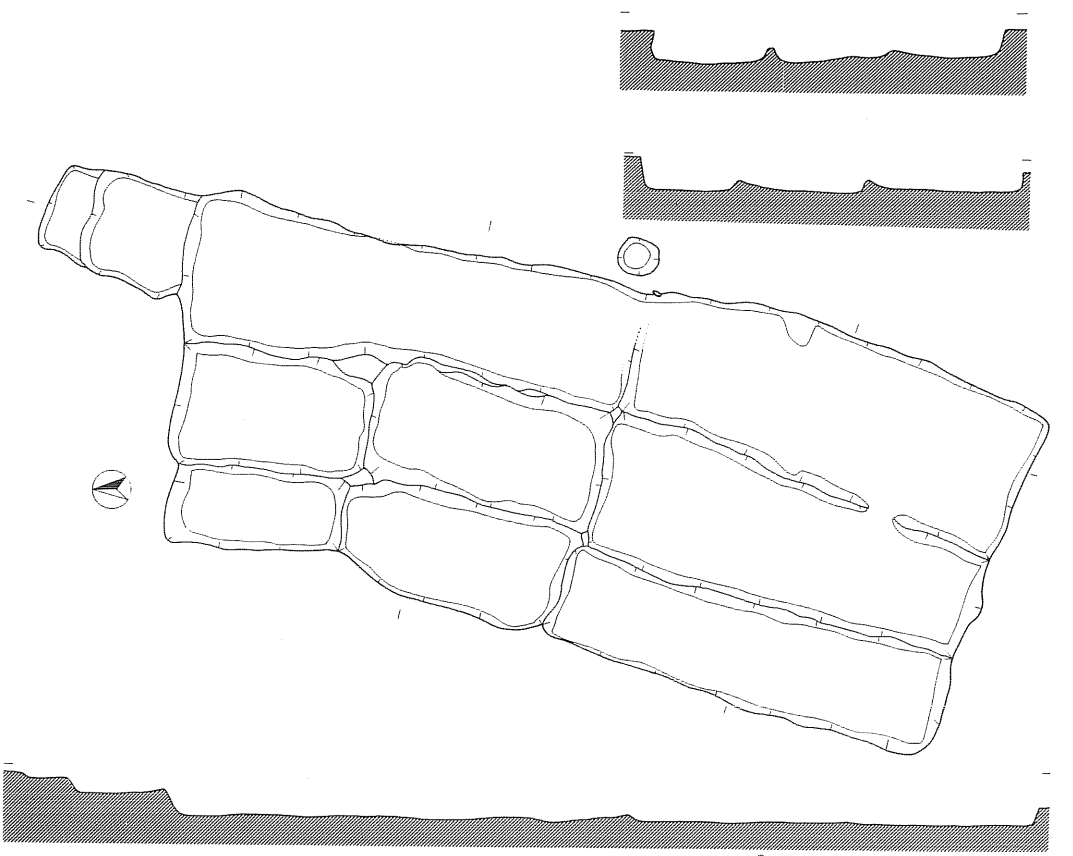
3　遺物について

縄文時代の土器は中期中葉の大木８ｂ式が住居内から出土している。第149図３～６は同一個体である。11は貫孔をもつ土製品で、表面に櫛歯状工具による引掻文が施されている。弥生時代の土器は、口縁部から頸部にかけて先端の鋭い工具により細い平行沈線を数条引いたもの（第150図１、２）、２～３条の沈線により変形工字文を描いたもの（３、４）、器面全体に縄軸の撚糸文を施したもの（５、６）が出土している。

石器では住居内から尖頭器１、遺構外から篦状石器１を出土している。

4　小　結

本遺跡で時期を特定し得た、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡と弥生時代の土壙は各々遺跡内では単独検出のものであり、住居に関しては石坂台Ⅰ・Ⅲ遺跡、土壙に関しては風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅰ遺跡との関連でⅦで再考する。また竪穴状遺構については、付近から開拓入殖者が埋めた家畜の死骸が見つかっていることから、極く最近の構築物の可能性がある。



第151図　ＳＫＩ 02竪穴状遺構

第８節　餅田沢Ⅰ遺跡

1　遺構について

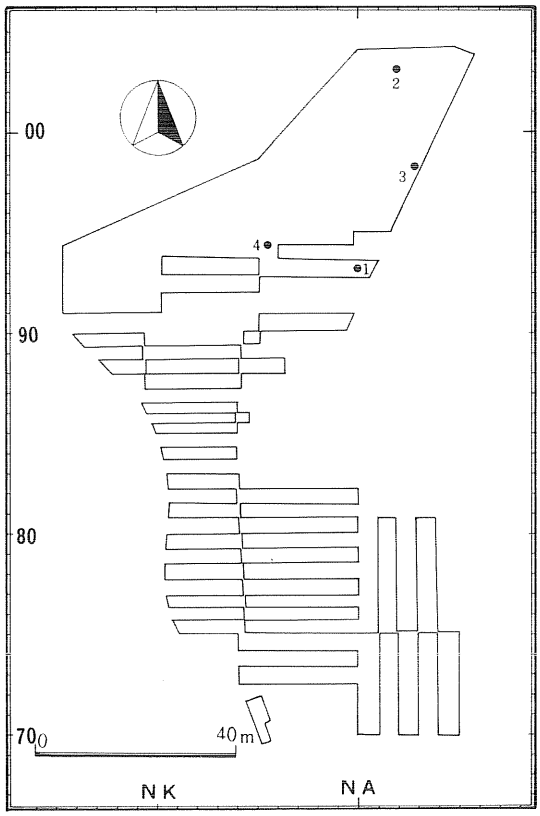
本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では、東側に位置している。工業団地の予定区域の東側には岩見川に注ぎ込む沢筋がつくった沖積地があるが、遺跡のある位置はその沢筋に東縁を画された台地縁辺である。さらに、遺跡の北西縁はこの沢筋から枝分れする別の沢により画されている。したがって、遺跡の載る台地は七曲台全体の中では、東に位置したそれ自体は北東方向へ伸びる小分丘といえる。遺跡の北西側には沢を隔てて風無台Ⅴ遺跡があり、南東側は比高４ｍで餅田沢Ⅱ遺跡がつづく。また北西縁を画する沢筋は僅かに南へ湾曲して沢頭となるが、この沢頭部分を隔てて南西には石坂台Ⅰ遺跡が比高５ｍ程で位置している。遺跡の中央部分での標高は42ｍを測る。

検出された遺構は、土壙４基である。ＳＫ02、03は開口部径１ｍ～1.1ｍ・深さ0.6ｍ～0.9ｍを測る、断面形がビーカー状を呈するものである。またＳＫ01、ＳＫ04は開口部径0.6ｍ～１ｍ・深さ0.1ｍ～0.2ｍを測る極めて浅いものである。ＳＫ04の内部からは多量の炭化した栗と凹石が出土している。

これらの土壙は、台地の中にあってはその北部にあるが、各々20ｍ～25ｍ程離れており集中して立地しているわけではない。また、餅田沢Ⅱ遺跡に隣接する南側の調査区では、遺構は全く見つかっていない。

2　遺物について

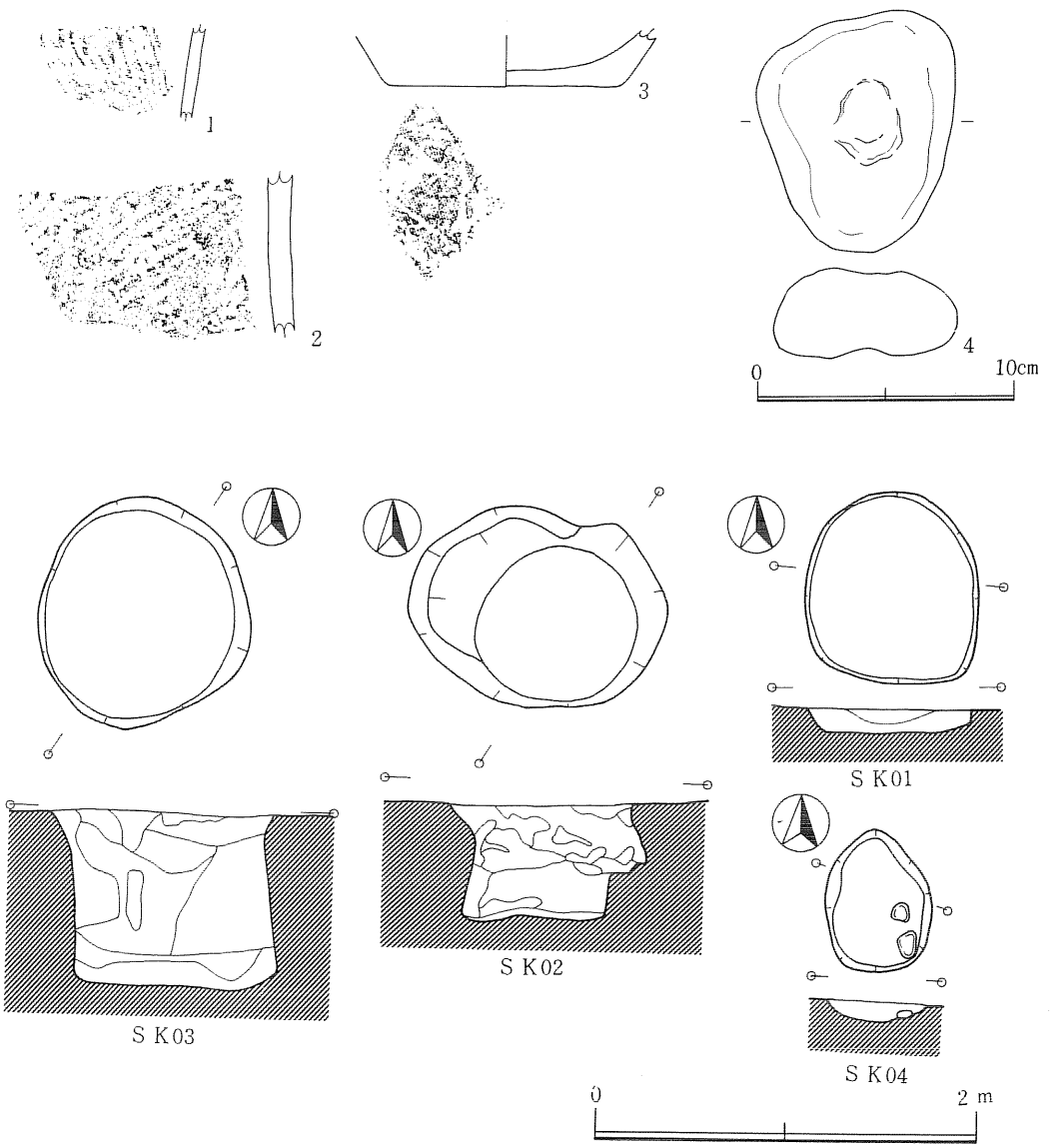
遺物は、４の凹石を除いて全て遺構外からの出土である。１、２は縄文が器面全体に施された粗製土器の破片である。１はＲＬ縄文の縦回転施文、２はＬＲ縄文の縦回転施文されたものである。石器では若干量の剝片と４に示す凹石が出土している。剝片は全て頁岩製である。



第152図　餅田沢Ⅰ遺跡遺構配置図

3　小　結

４基の土壙は、台地の北部に散在する形をとっている。出土している遺物は土器の厚さや胎土から推して、縄文時代中期のものであろう。遺跡の南側に隣接する餅田沢Ⅱ遺跡、さらにその南にある石坂台Ⅰ遺跡は、縄文時代中期に営まれた遺構を含んでおり、本遺跡はこれらの遺跡との関連が考えられる。



第153図　土壙および出土遺物

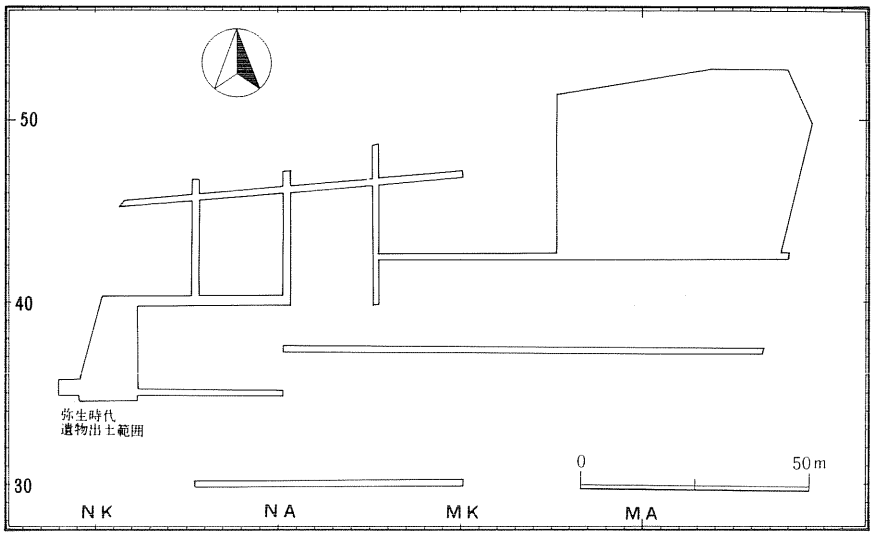
第９筋　松木台Ⅰ遺跡

１　遺構について

本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では西側に位置する。北側は比高―15mの小さな沢を挟んで松木台Ⅱ遺跡と隣接し、西側の縁は岩見川に注ぐ沢が画している。東側は200m程離れてほぼ同じ標高で風無台Ⅲ遺跡が連続し、風無台Ⅲ遺跡のすぐ南には比高４ｍで石坂台Ⅱ遺跡が隣り合っている。また南側は300m程離れて比高４ｍで石坂台Ⅲ遺跡がある。遺跡の位置する台地を画する沢筋のうち、北側の沢はほぼ東西に直線的に伸びるが、西側の沢は台地を囲むようにしてやや南へ湾曲し沢頭となる。したがって、台地は北西方向へ僅かに張り出した形状を示す。遺跡の中央付近での標高はおよそ41mである。

本遺跡の調査区は、北側の沢頭に近い個所におよそ1,750㎡、西側の沢頭に近い個所に280㎡と２個所設けられた。他の部分については南北に３本、東西に４本のトレンチを設けて調査した。

調査の結果、時期を特定でき、明らかに人為的に構築されたと判断し得る遺構は検出できなかった。ただ、南西側に設けた調査区から弥生時代の土器の集中して出土した個所があり、焼土の堆積する個所も同時に見つかっている。この弥生時代の土器の集中域は、台地の西縁から8.7m東へ入ったＮＦ35グリットにある。径およそ４ｍで北西―南東方向に長く、ほぼ真中に径60cm・厚さ５cmの焼土堆積個所が１個所、またそこから南東に２ｍ程離れて３個体分の土器が潰れ、うち１個体は径80cm・厚さ20cmの焼土に埋って検出された土器の集中地点がある。付近からは、３点の石器と炭化した栗が見つかっている。



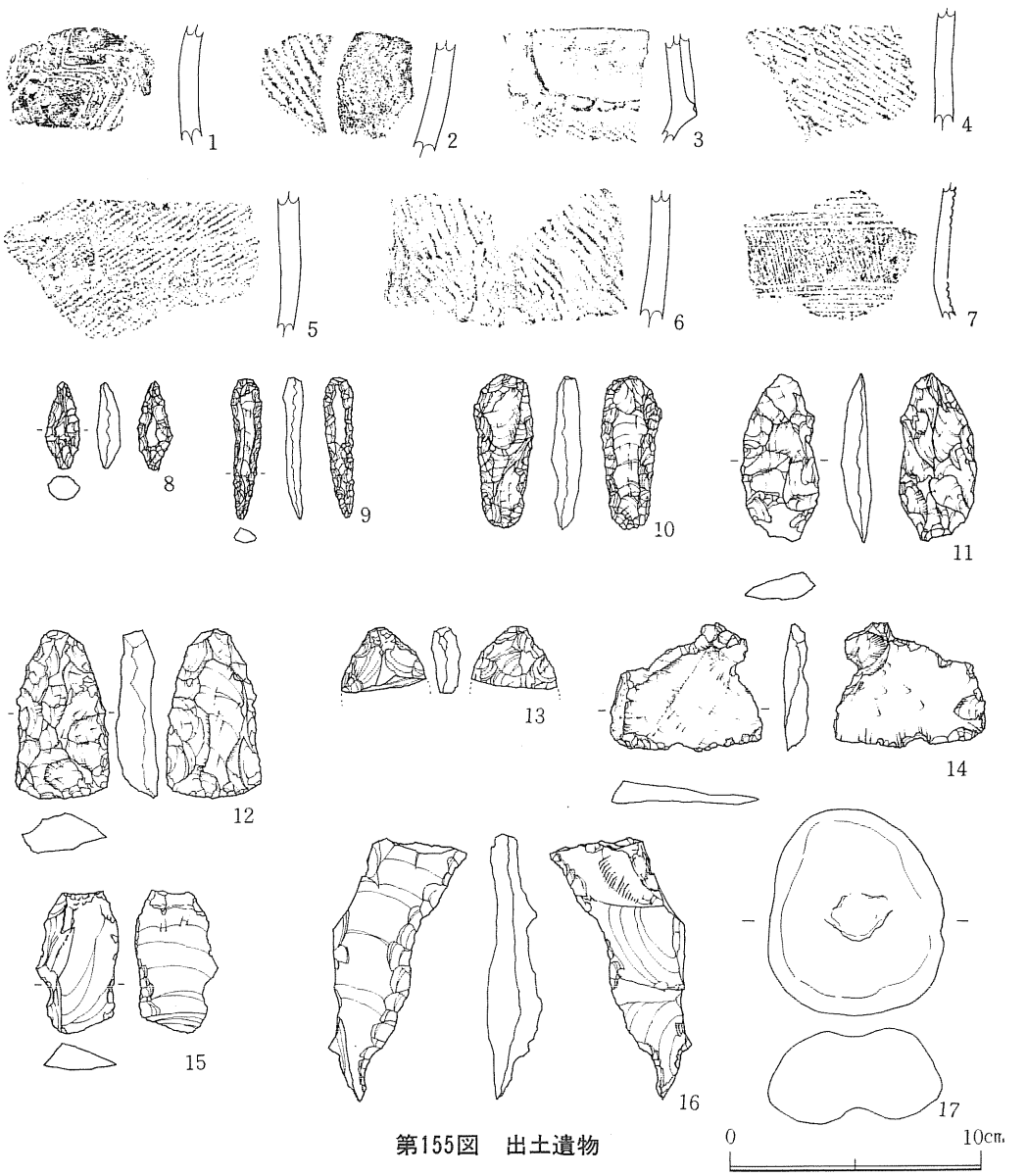
第154図　松木台Ⅰ遺跡遺構配置図

2　遺物について

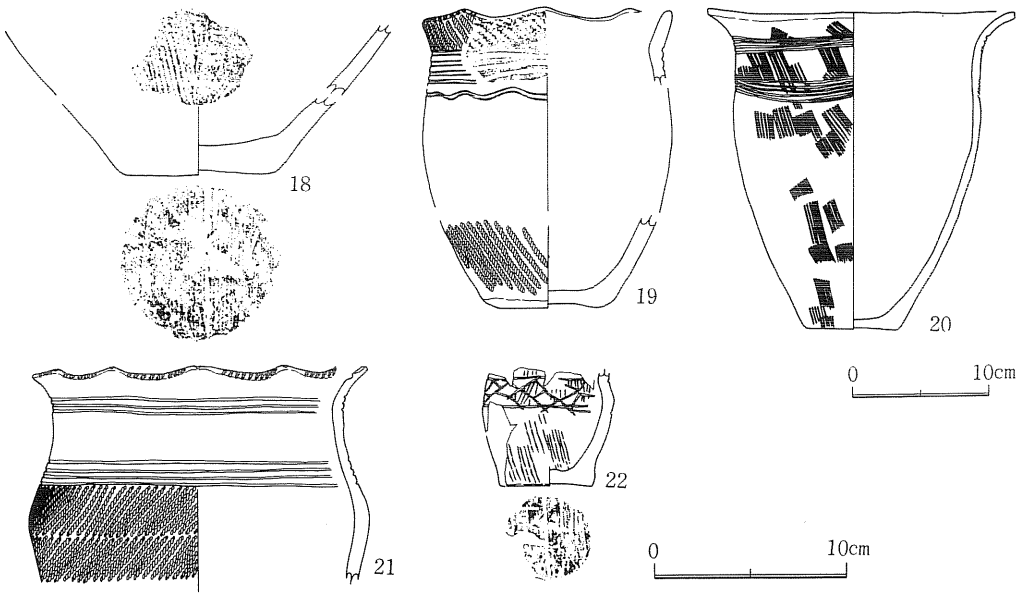
①土器（第155図、第156図）

遺跡の南西調査区からは弥生時代の土器がまとまって出土しているが、他に縄文時代の土器片数点が調査区内から出土している。

１は繊維を含んだ胎土をもち、器面上は櫛歯状工具による引掻文が施される前期末葉の土器である。２はＲＬの縦回転の縄文を太めの沈線で区画し磨消したもの、３は口縁部の無文帯と体部の縄文部分とを鎖状の隆線文で区画したものであり、両者は中期末～後期初頭に位置づけ



第155図　出土遺物



第156図　出土遺物

られる。18は器面に貝殻条痕文が施され、底部には笹葉状の圧痕文が残る後期の土器である。４～６は縄文が器面全体に施されたもので中期末～後期の土器である。

弥生時代の土器は、図で復原したものを含め、４点出土している。19は波状口縁の鉢形土器で頸部に３条の平行沈線と１条の蛇行する沈線が引かれる。地文はＲＬの横回転の縄文である。20は口縁部の大きく開く甕形の土器であり、器面には刷毛目が施され、口縁下部と頸部に４条ずつの先の鋭い工具による沈線が施される。21は波状口縁の甕形土器で、頸部の無文帯を挟んで上段に３条、下段に４条の平行沈線がひかれる。口唇部および体部の縄文はＬＲ横回転のものである。22は小形の鉢形土器であり、器面全体に刷毛目状の細密な沈線がひかれ、上部に連続した菱形文が描かれる。底面には笹葉状の圧痕が残る。

②石器（第159図）

出土している石器は、石鏃１点、石錐１点、箆状石器４点、石匙１点、調整加工を施された剥片１点、凹石１点、その他剥片数点である。凹石は花崗岩製、他は頁岩が素材である。これらの石器のうち、８、９、10の石鏃、石錐、箆状石器は弥生時代の土器の集中域付近からの出土である。

３　小　結

本遺跡では、人為的な構築とし得る遺構は見つからないが、弥生時代の土器集中域は僅かながらも生活痕跡をとどめているといえる。弥生時代の遺構の見つかる遺跡は少なく、類例の増加を待ち再検討に供すべきである。

第10節　風無台Ⅲ遺跡

1　遺構について

本遺跡は、七曲工業団地予定地域内のほぼ中央、七曲台北部を東西に分断する沢筋の西側に位置する。遺跡の北側にはほぼ同じ標高で風無台Ⅱ遺跡が続き、南側には比高４ｍで石坂台Ⅱ遺跡が位置する。

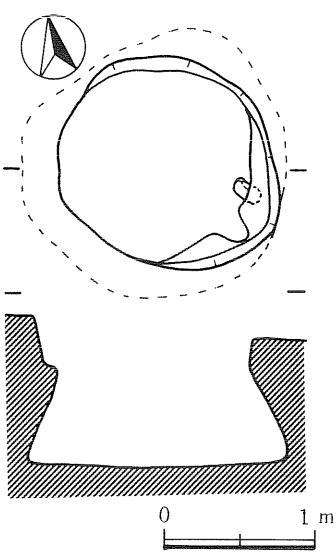
検出された遺構は、フラスコ状土壙が１基である。開口部径1.6m・底径1.9m・深さ１ｍの規模をもつ。内部からの出土遺物はない。検出区はＬＲ47グリッドである。また、ＬＰ59グリッドからは剝片の集中して出土した地点１ヶ所を確認した。

2　遺物について

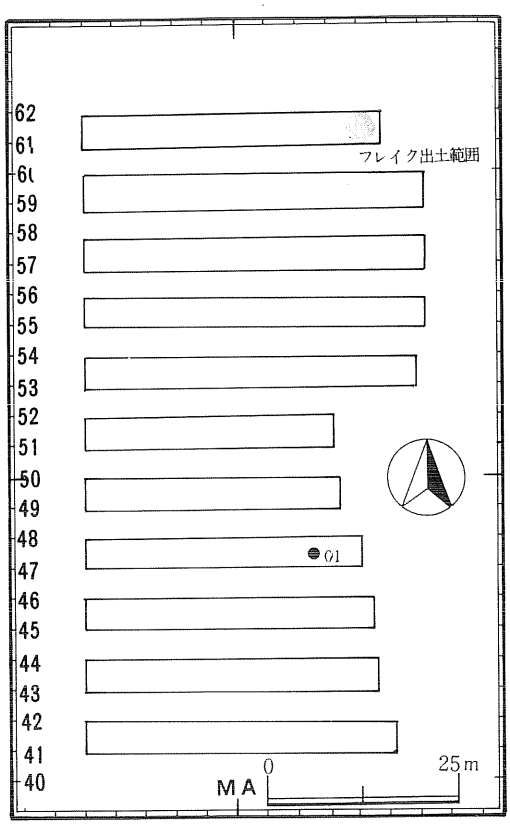
ＬＰグリットの剝片総数は、48点を数える。全て頁岩製である。形態・技法からは時期的な特徴を把えることができない。

3　小　結

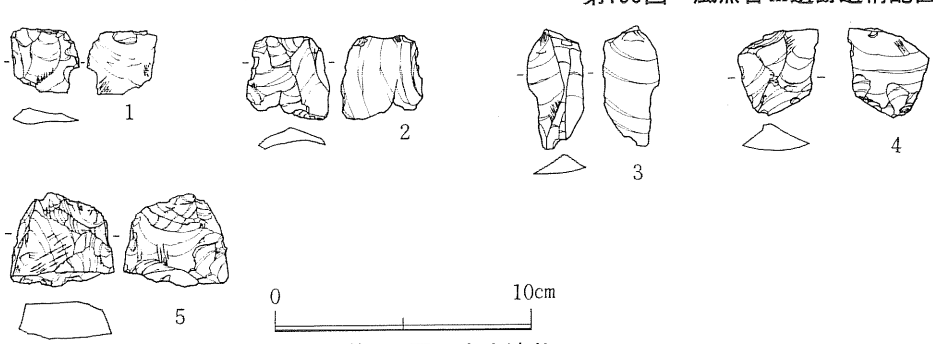
検出された土壙は遺物を伴わず、遺構自体も単独検出である。同じ標高で続く北側の風無台Ⅱとの関連で把えるべきである。



第157図　ＳＫ01



第158図　風無台Ⅲ遺跡遺構配置図



第159図　出土遺物

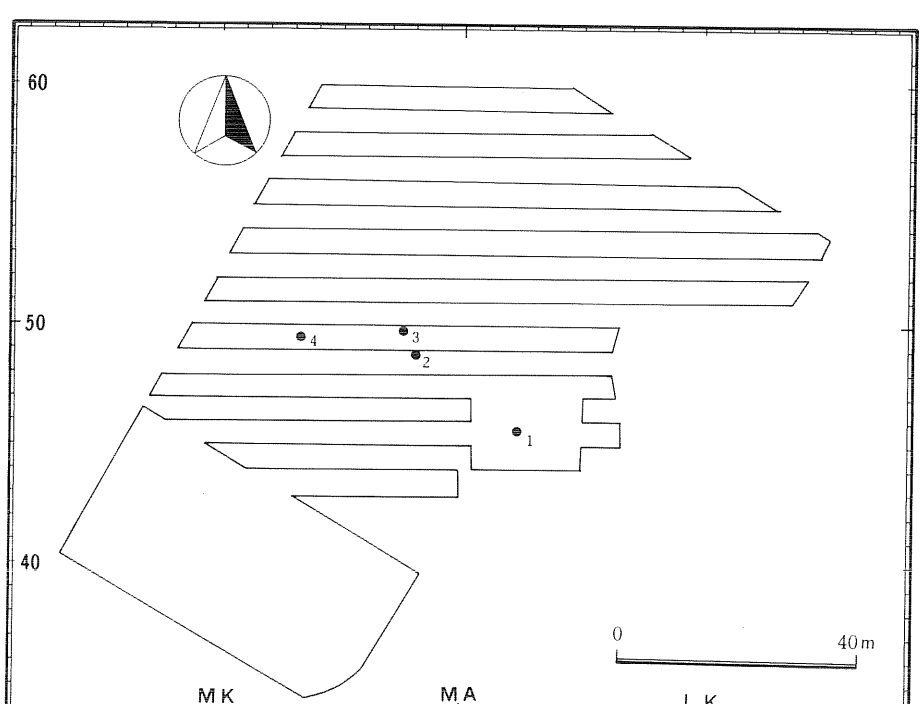
第11節　風無台Ｖ遺跡

1　遺構について

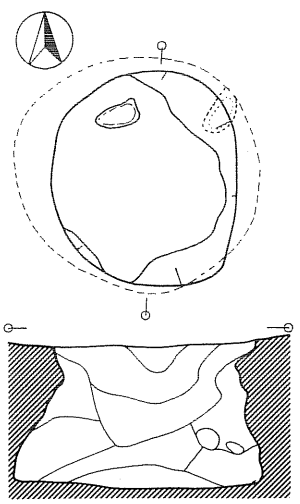
本遺跡は、七曲工業団地予定区域内では、東側に位置している。遺跡の南東側には比高―16ｍの沢筋を隔てて餅田沢Ｉ遺跡があり、また南側には比高５ｍの緩斜面を上って石坂台Ｉ遺跡があり、北側にはほぼ同じ標高で風無台Ｉ遺跡がある。遺跡のある地点での標高は43m程である。遺構としては土壙４基が検出されている。土壙にはＳＫ01、04のように断面形がフラスコ状を呈するものと、ＳＫ02、03のように浅い逆台形を示すものとの二者がある。開口部径×底径×深さによる各々の規模は、ＳＫ01；1.1×1.3×0.7m、ＳＫ02；1.1×0.9×0.2m、ＳＫ03；0.8×0.7×0.25m、ＳＫ04；1.1×1.2×0.9mである。ＳＫ01は壙底から２個の河原石を、ＳＫ04は埋土中から中期後葉の土器片を出土している。

2　遺物について

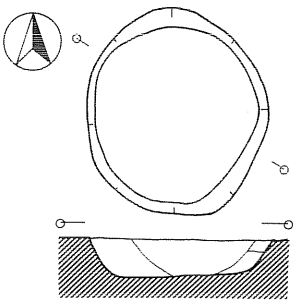
ＳＫ04および遺構外から出土している土器のうち１は、中期後葉の土器である。器面に縄文または刺突文を施し、２条または３条の沈線で区画している。２、３は器面にＲＬ縄文を横回転施文した土器である。



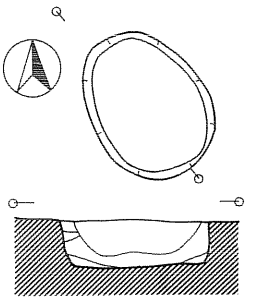
第160図　風無台Ｖ遺跡遺構配置図



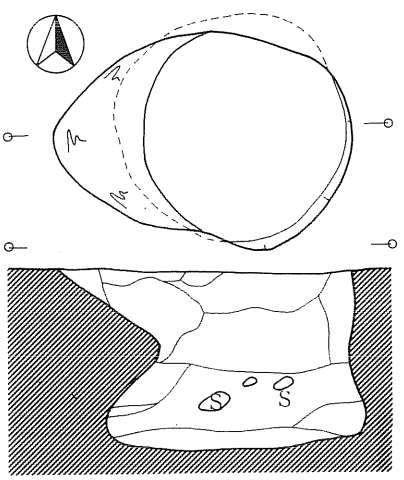
S K01



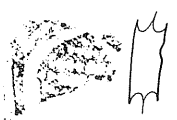
S K02

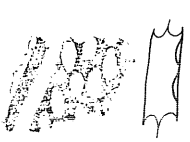


S K03

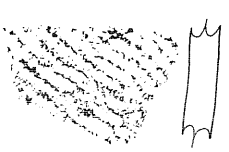


S K04

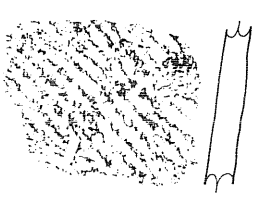




1



2



3

Scale；土壙は1/40，土器は1/2

第161図　土壙および出土遺物

第７章　七曲台の縄文時代遺構にあらわれた問題について

七曲台は、岩見川がその左岸に形成した段丘群の１つである。標高40～50mの平坦な段丘面は、岩見川の左岸におよそ6.5km程つづくが、七曲台はほぼこの中程にある。今回、工業団地造成の工事で開発される面積は約60ha、七曲台をひとくくりにしてみた場合のおよそ50％にあたる。開発される区域は、南側の椿台面から張り出した南部の上野台面と北部の七曲台面の２つの段丘面が、松渕からの沢筋によって東西２つに分けられ、さらに東西それぞれの台地の東縁・西縁が細かな沢筋によって区切られるという形状を呈している。

したがって調査に際しては、これらの自然地形に沿った遺跡の存在が想定され、運動場建設などで削平・消滅した個所を除く12個所（うち１個所は縁地帯として保存）が選定された。前章までは、各遺跡毎に調査で得られた遺構・遺物について述べた。しかし、もとよりこれらの遺跡は各々が１個の独立した遺跡であるというより、ひとつひとつが群の中で相対的な位置を占める地点ともいうべきものである。すなわち各遺跡は微視的な地形によっては区分され得るが、その区分がそのまま遺跡を営んだ人間集団の活動の場の区分とは対応し得ないのである。

各遺跡は旧石器時代～近代までの様々な遺物・遺構を含んでいる。このうち縄文時代から弥生時代にかけては、主に土器型式の連続および断絶の状況から、縄文時代中期～後期初頭、晩期前葉、弥生時代中期、弥生時代中期末～後期の４つの期間に分けられる。そして各期間の遺構・遺物は遺跡（地点）を越えて分布している。ここでは以上の４期のうち縄文時代の２期について、調査結果が提示する問題点について述べる。

縄文時代中期～後期初頭

この期間以前にあたる時期の遺構・遺物が全くない訳ではない（石坂台Ｉの前期初頭羽状縄文系土器、風無台Ｉの円筒下層ｄ式の土器片を出土したＳＫ91など）。しかし、それらは量的に極めて少なく、また時間的にも空間的にも断絶している。

縄文時代中期に至って、やっと両者の広がりをもった遺構・遺物を確認することができる。中期前葉の円筒上層ａ式期の住居は風無台ＩのＳＩ561軒を検出している。次の中期中葉では大木８ａ式期に石坂台ＩのＳＩ22、風無台ＩのＳＩ16、大木８ｂ式期に石坂台IIのＳＩ01、石坂台IIIのＳＲ09の埋設土器が検出されている。次の中期後葉から後期初頭では、大木９式期に石坂台ＩのＳＩ01Ｂ、大木10式期に石坂台ＩのＳＩ01Ａ、ＳＩ12、餅田沢IIのＳＩ02、ＳＩ03、ＳＩ19、風無台ＩのＳＩ15、大木10式期に後続する時期に風無台ＩのＳＩ07、ＳＫ01、餅田沢IIのＳＲ15が検出されている。また、この時期のいずれかに営まれたものとして、石坂台Ｉの

ＳＩ20がある。

この期間は、遺構が地点を変えながら構築されている。全体の印象では中期前葉から中葉までは脈絡は細いながらも続き、中期末に一応は集落を形成する程に至るという観を呈している。

第７表に示すように、現在のところ雄物川下流域では圧倒的に大木９・10式期以降の住居検出例が多い。対して中流・下流域では大木８ｂ式期以前の住居検出例が多いのである。また、各遺跡毎の住居軒数をみると、大木８ｂ式期以前と大木９・10式期以後では遺跡は画然と分離できる。縄文時代に何度かおとづれた画期のひとつに、縄文時代中期後葉が数え上げられることは従来多く指摘されてきている。地域を抽出する際最も明解な水系をひき、さらに遺跡の在り方を比較する際に最も単純な時期別の住居軒数をみただけのことであり、より細かな検証を必要とすることはいうまでもない。非常に大雑把な把え方ではあるが、雄物川水系の縄文時代中期の遺跡の在り方にも、そうした画期は現われている。翻って七曲台の中期の住居跡の在り方をみれば、中期後葉にあらわれる変化は、微弱ながらも、雄物川水系全体の大枠の流れに沿った変化と見做し得るのである。

縄文時代中期後葉の遺跡の在り方の変化は、それまで存在した大形住居（所謂ロング・ハウス）の消滅、米ヶ森遺跡例などに見られる小形住居の出現、複式炉の採用等の住居構造の変化としても表われているが、それが他のどのようなことを指示しているかは、今しばらくの検討が必要である。

縄文時代晩期前葉

後期初頭で七曲台における遺跡の営みは一旦途絶えるが、晩期前葉には復活する。その間の後期前～後葉には殆んど遺構・遺物は残っていない（例外的に石坂台ＩのＳＫ23や、石坂台Ⅲでの貼瘤文、入組文土器がある）。

晩期前葉には、風無台Ⅱ、松木台Ⅱ、石坂台Ⅲの土壙群が残される。これら３ヶ所は七曲台では西側の台地上に位置する。ことに風無台Ⅱ、松木台Ⅱでは、岩見川に向って張り出した西部の台地縁辺のほぼ全周を、いくつかの集中域をつくりながら土壙の構築に利用している。

ところで、この土壙群は第６章第３節で述べたが、営為方法の異なる二者を含んでいる。

第162図は、松木台Ⅱにおける台地南端部の土壙集中域を模式図化したものである。図で土壙Ａとしたものが、この台地南端部の集中域および石坂台Ⅲに見られるもので、比較的小さく埋土上面に置石などがあるものである。また土壙Ｂとしたものは、松木台Ⅱの北端部や風無台Ⅱの東側、および北側の土壙にみられる比較的大形のもので、断面形がフラスコ状を呈するものを含む。さらに後者では内部から完形ないしは完形に近い土器を出土し、炭化した栗なども出土している。

松木台IIの台地南端部の集中域では、以上の土壙自体がもつ特徴の他に、土壙の構築面とほぼ同じレベルで焼土が多数個所分布し、また土壙群のほぼ中央に石囲炉が位置するという特徴が認められる。

平鹿郡増田町にある平鹿遺跡は、晩期後半の墓域とされた遺跡である。ここでは土壙の他、多数の焼土が石囲炉を含む配石とともに検出されている。県内では平鹿遺跡の他、東由利町の湯出野遺跡、増田町の梨ノ木塚遺跡、秋田市の上新城中学校遺跡、鷹ノ巣町の藤株遺跡など規模の大きな墓域とされる遺跡が多く、その各々が特色をもつ。したがって、複数のパターンが含まれる晩期の墓域の特色を、一概にいうことはできないのであるが、平鹿遺跡例をとって、土壙、焼土、石囲炉（配石）を備えることが、晩期墓域の典型のひとつだとすれば、規模こそ違え松木台IIの台地南端部土壙集中域はその類例であり、土壙Ａを１つの墓壙としてみることができる。

対して、他の土壙集中域のように、土壙だけによってつくられ、埋土状態が構築―廃絶を繰り返したことを示す例は、近年増加してきている。

鹿角市柏木森遺跡では、13,500m²の調査区内から他の遺構を伴わず袋状土壙60基を検出している。60基の土壙は、いくつかの群をつくりながら構築されているが、各群のなかでは地山を掘り込んだ際の排土が他の土壙の埋土として堆積し、それによって構築時期の新旧が判別できるものが多い。報告では、集落から離れた採集地に営まれた貯蔵穴の可能性を示唆している。

七曲台の土壙Ｂも、これと同様の検出状況を呈しており、同様の可能性を指摘できる。

ところで、松木台IIの台地南端部の集中域では、土壙Ａと土壙Ｂがほぼ同じ区域の中で検出されている。出土した遺物からは、両者に構築時期の差があったとしても、それは極めて狭い時間幅であったことしかうかがえない。すなわち、殆ど同時期に墓壙と貯蔵穴が併存していたことになる。

岩手県紫波郡紫波町の西田遺跡は、縄文時代中期大木８ａ～８ｂ式期の環状墓域を含む集落である。ここでは環状にめぐる墓壙群の外側に、報告では『もがりの場』とされた長方形柱穴列を間に介し、貯蔵穴群と住居とが構築されている。墓壙群および長方形柱穴列については、領域を同じくする複数の集落の共同の葬送・祭祀の場であったとし、その外側に位置する住居と貯蔵穴は、それら複数の集落の共同行為のうち『葬制』を代表する拠点であるとし、縄文時代中期に葬制という、人間の諸活動のうちの一支柱のみで成立しうる集落のあった可能性が示唆されている。

現在の我々の「集落」についてのおぼろげなイメージからは、想像もつかないことであるが、西田遺跡例は全く特殊な例であるとはいえない。報告で引いているような大湯環状列石、阿久遺跡などは、そのような縄文時代社会の特異な側面の存在を支持している。

七曲台での台地南端部の土壙集中域は、葬制と採集一貯蔵の2側面が顕現した区域である。西田遺跡の場合は、貯蔵穴も一連の葬制という活動枠のうちで位置づけられることが予測されているが、七曲台の場合には土壙A、土壙Bの割合から、現在のところは、異質な2側面があらわれたそのままを受取っておきたい。

以上、縄文時代の2時期について他の遺跡例を引いて述べた。他に風無台IIの弥生時代住居例は、近年発見例のあいついだものの一つであるし、また松木台IIのSK38は、秋田市湯ノ沢F遺跡で多数検出された古代の墓壙の類例である。いずれも比較・参考とすべき好資料である。

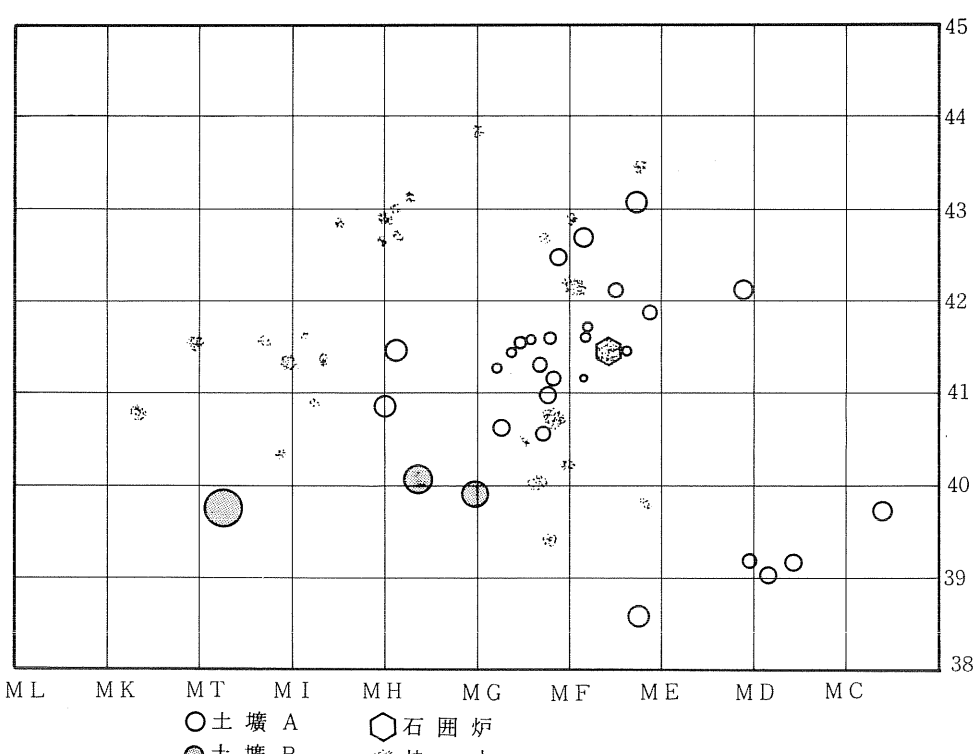
注　第7表は以下の資料によって得た。

秋田市教育委員会　『下堤D遺跡発掘調査報告書』　1982年
秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財調査報告書』　1983年
秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財調査報告書』　1984年
秋田市教育委員会　『小阿地』　1976年
秋田県教育委員会　『新秋田空港周辺遺跡鹿野戸遺跡石坂上遺跡発掘調査報告書』　1976年
協和町教育委員会　『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』　1977年
秋田県教育委員会　『秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書』　1982年
神岡町教育委員会　『神宮寺一笹倉・東高野遺跡発掘報告』　1955年
田沢湖町教育委員会　『黒倉B遺跡現地説明会資料』　1984年
千畑村教育委員会　『一丈木遺跡第3次発掘調査概報』　1965年
秋田県教育委員会　『内村遺跡発掘調査報告書』　1977年
横手市教育委員会　『中杉沢遺跡発掘調査報告書』　1974年
平鹿町　『平鹿町史』　1984年
山内村郷土史編纂委員会　『山内村郷土史年報』　1984年
仙南村郷土史編纂委員会　武藤一郎・豊島昂『仙南村郷土史資料第六集』　1978年

東山本の住居については、武藤氏と豊島氏との間で報文内容が異る。ここでは東山本の住居に縄文時代中期（豊島報文）と古代（武藤報文では原始時代以後、元慶年前後）のものの、二時期があると解し、豊島氏報文の3軒をとりあげた。

第７表　雄物川水系の縄文時代中期住居軒数

遺跡名	〔御所野群〕	下堤A	下堤B	坂ノ上A	下堤G	野畑	湯ノ沢B	坂ノ上E	湯ノ沢A	湯ノ沢C	湯ノ沢H	〔七曲群〕	風無台I	石坂台I	石坂台II	餅田沢II	鹿野戸	駒坂袋I	米ケ森	東高野	黒倉B	一丈木	内村	中杉沢	大保中台	道地	東山本
支流名								岩見川									岩見川	岩見川	荒川	雄物川・玉川	玉川	丸子川	丸子川・釜淵川	旭川	大戸川	成瀬川	谷地川
大木8b以前		22			5			1					2	1	1						1	19		26	1		3
大木9.10以後			5	1	1	8	17	36	1	6	3		2	3		3	1	2	9	1			31			5	



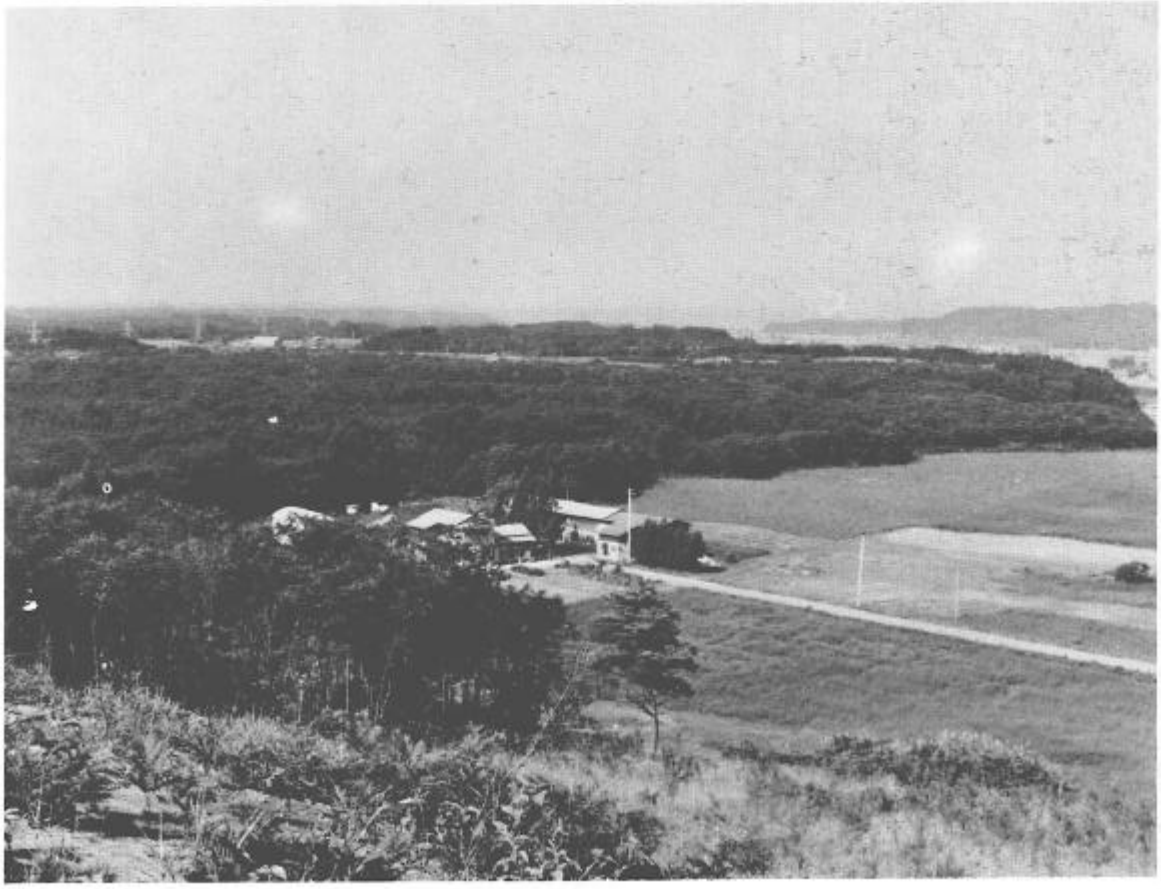
第162図　松木台Ⅱ遺跡南端部土壙配置図

図　　版

図版 1　上　七曲台遺跡群航空写真（上が北）

下　同　　上　　（上が北西）

図版 2　七曲台遺跡群（上が北）

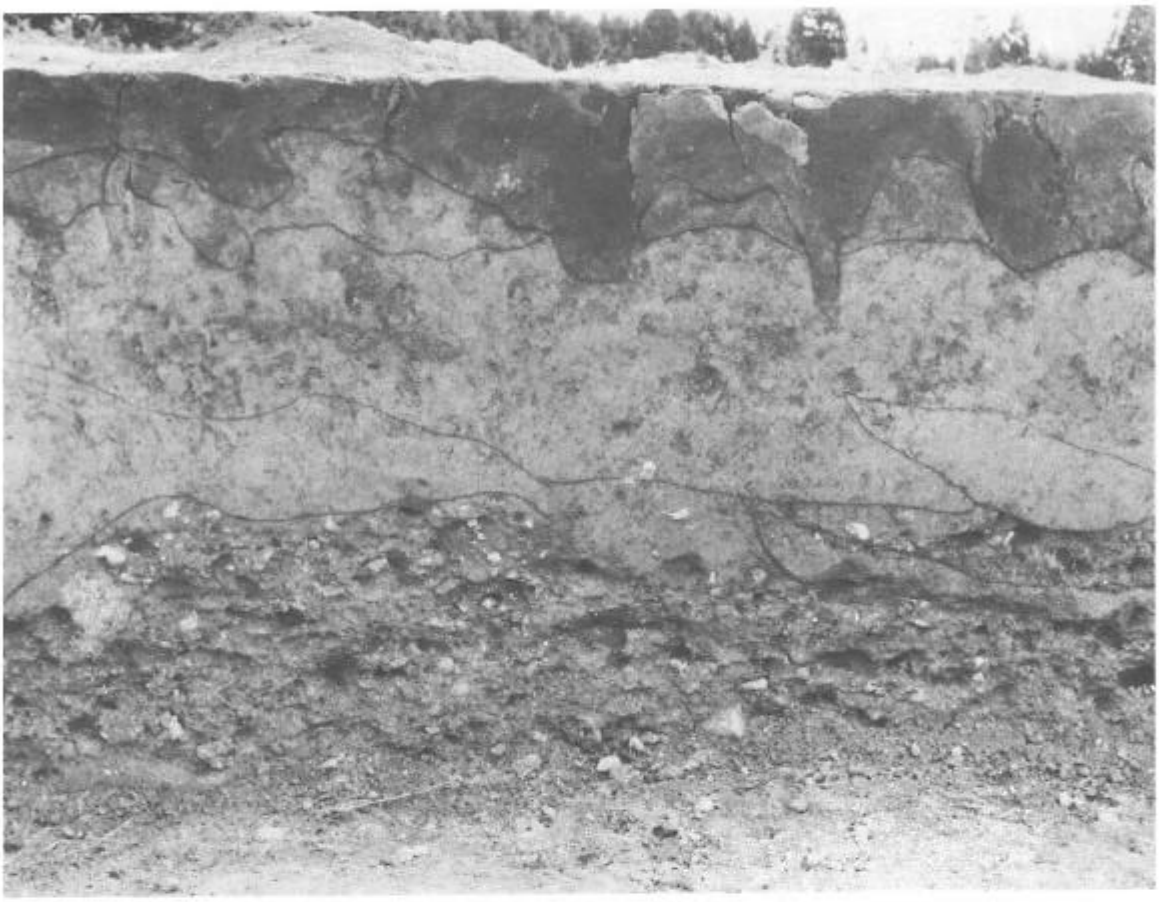


図版 3　上　遺跡群遠景（北▶）

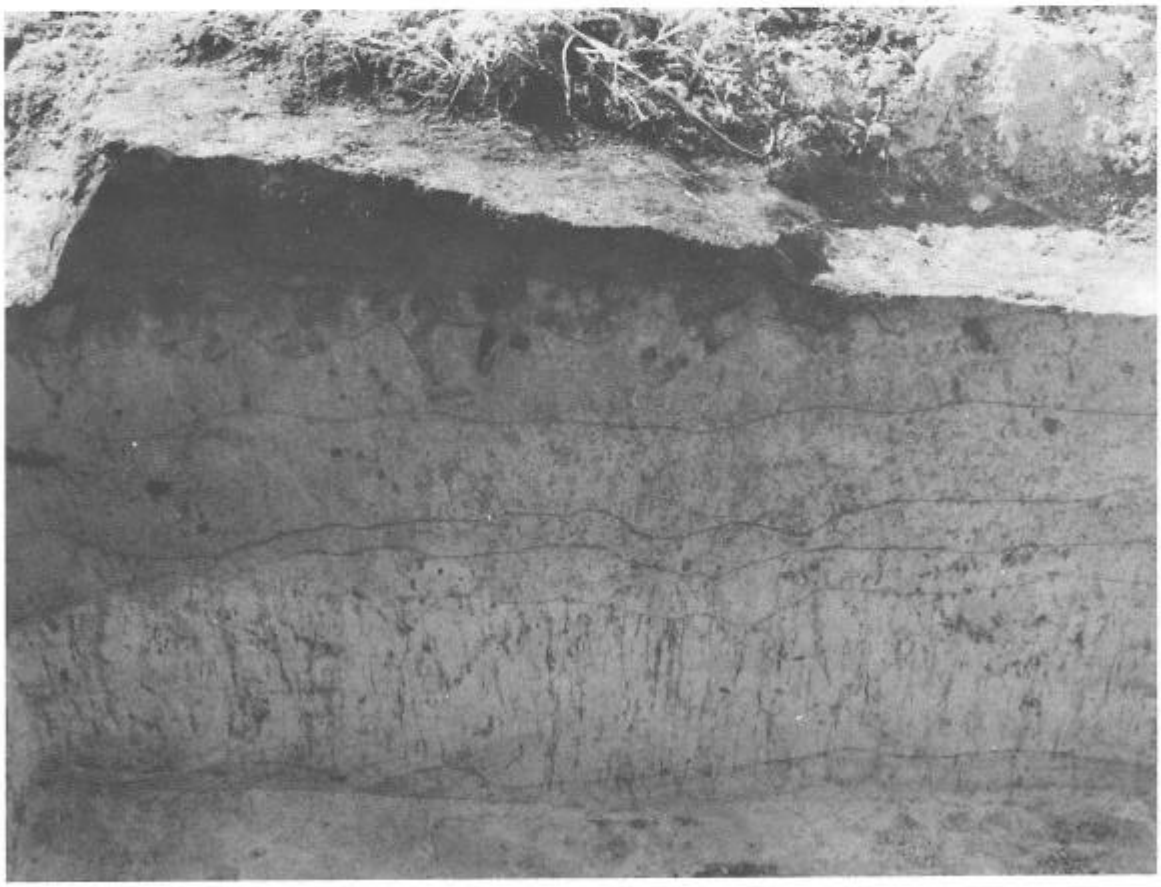
下　同　　上（北東▶）

図版 4　上　風無台Ⅰ遺跡旧石器出土地点土層断面（北▶）

下　同　　上　　（南▶）

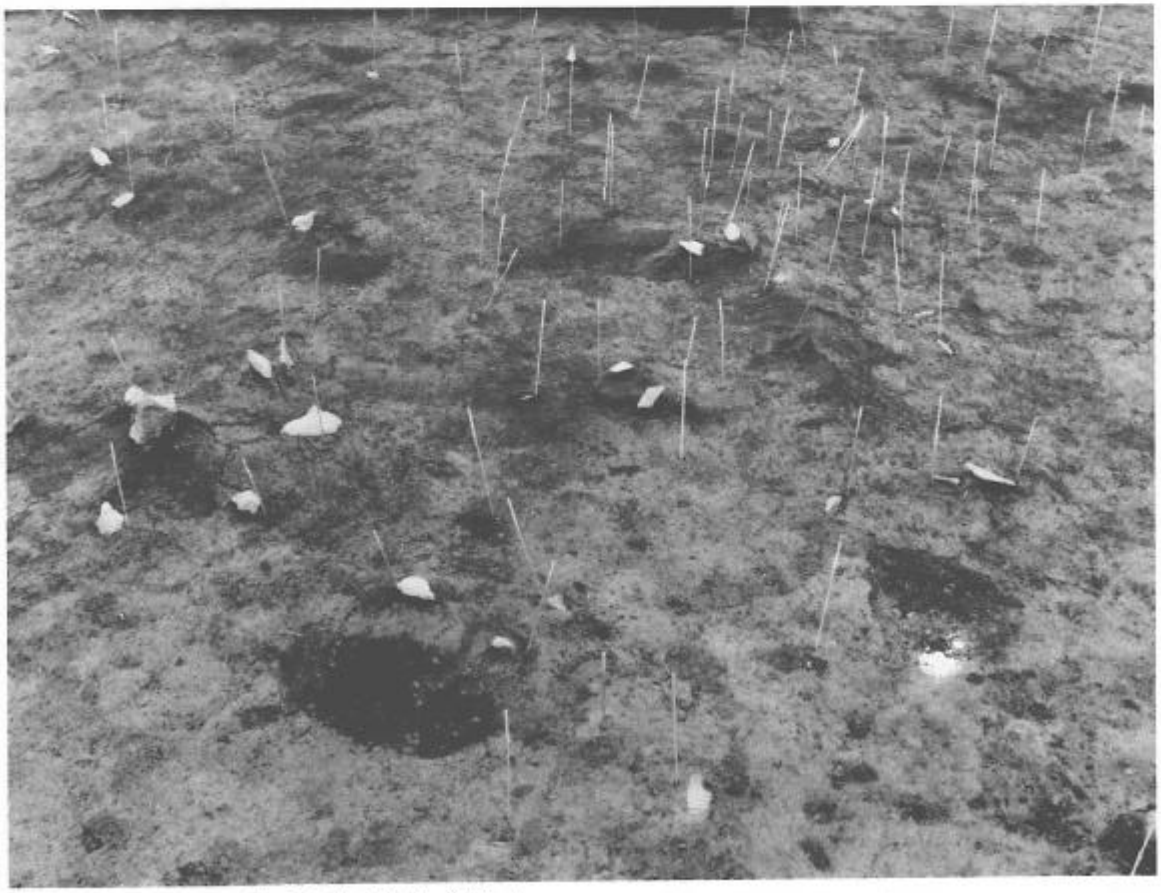


図版 5　上　風無台Ⅱ遺跡旧石器出土地点土層断面（西▶）
下　松木台Ⅱ遺跡旧石器出土地点土層断面（南▶）

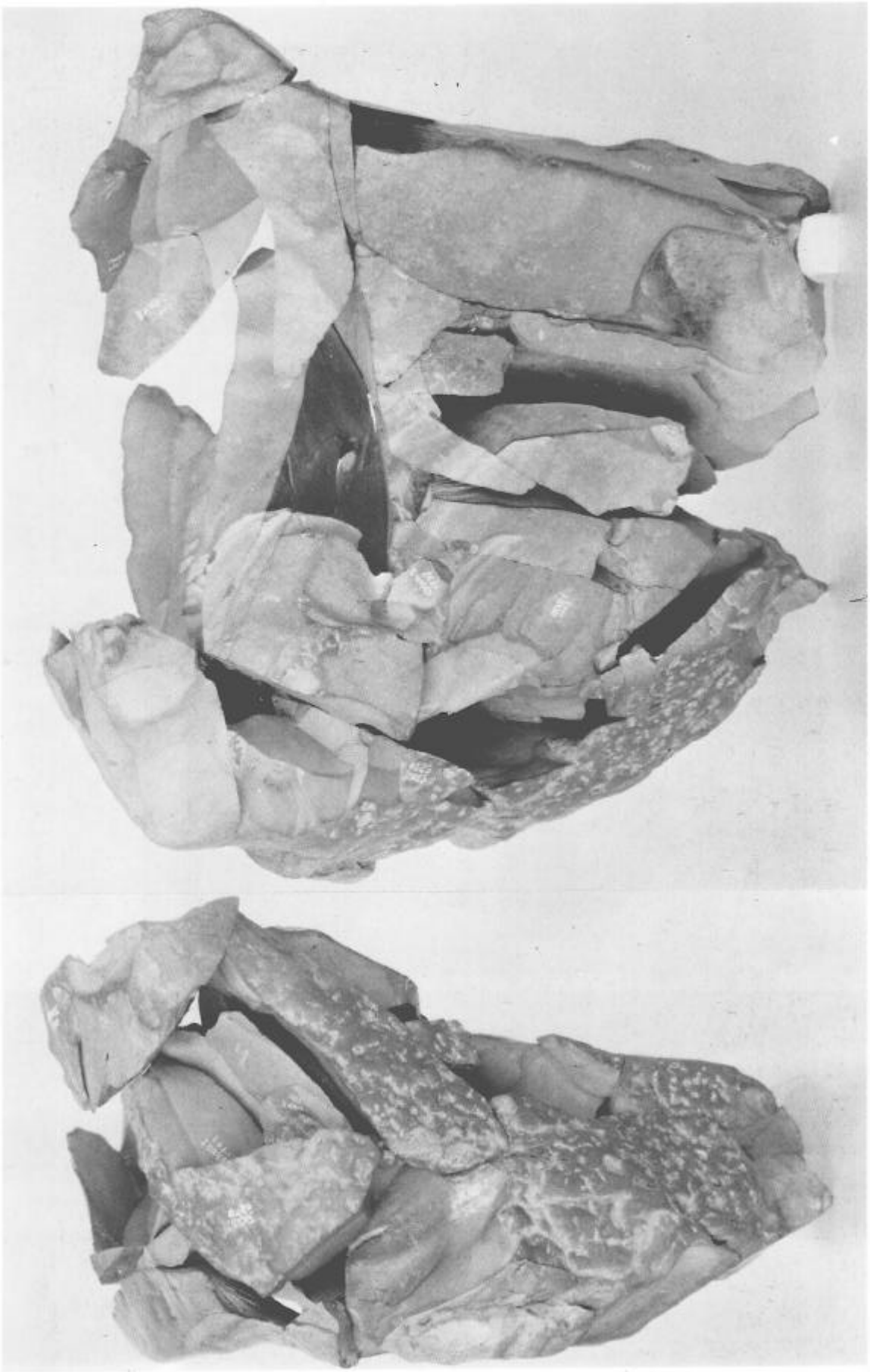


図版 6　上　餅田沢II遺跡土層断面（東▶）
　　下　石坂台III遺跡土層断面（北▶）

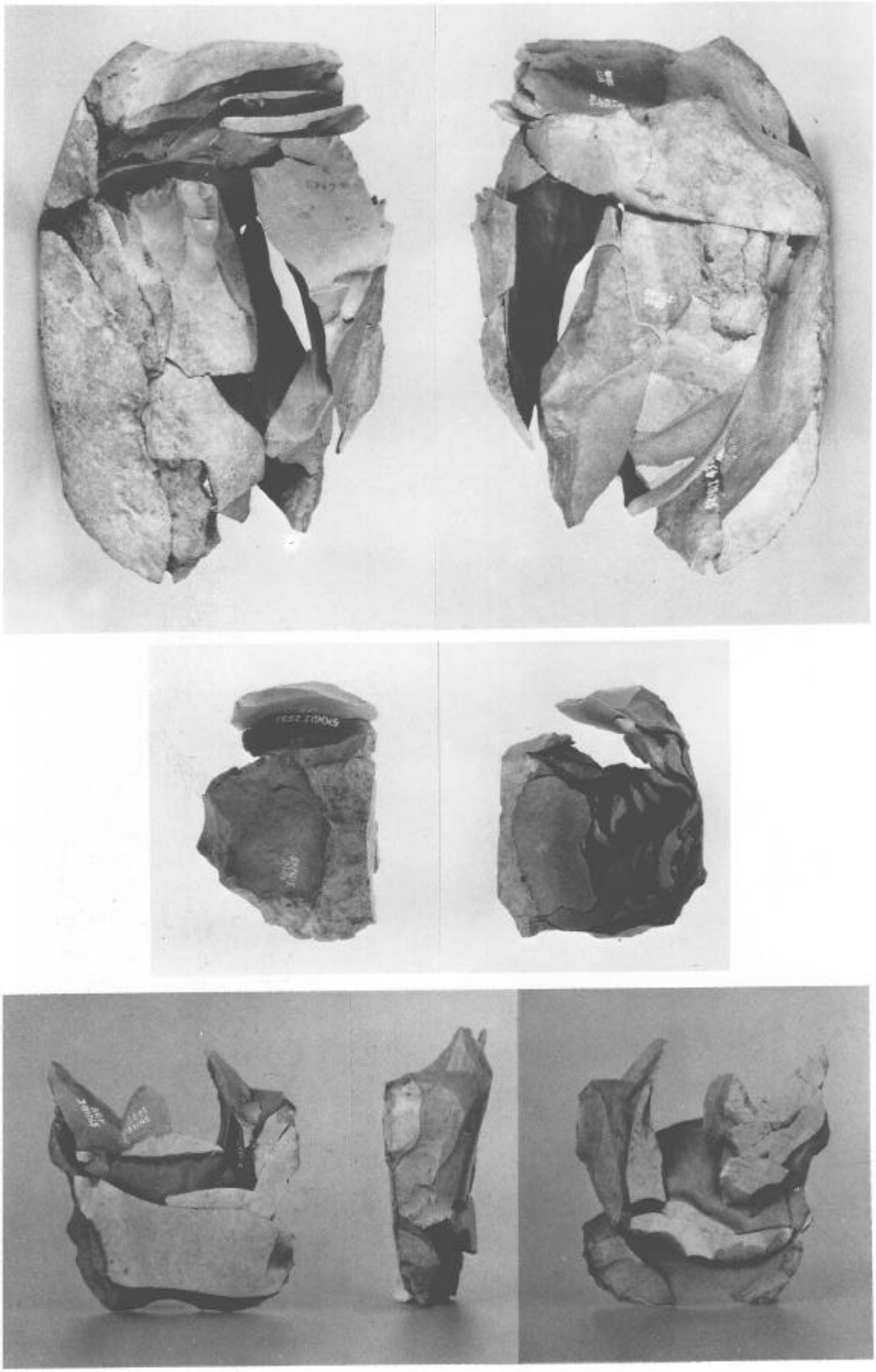
図版7　上　旧石器出土地点遠景（東▶）
　　下　旧石器出土地点調査風景（北▶）



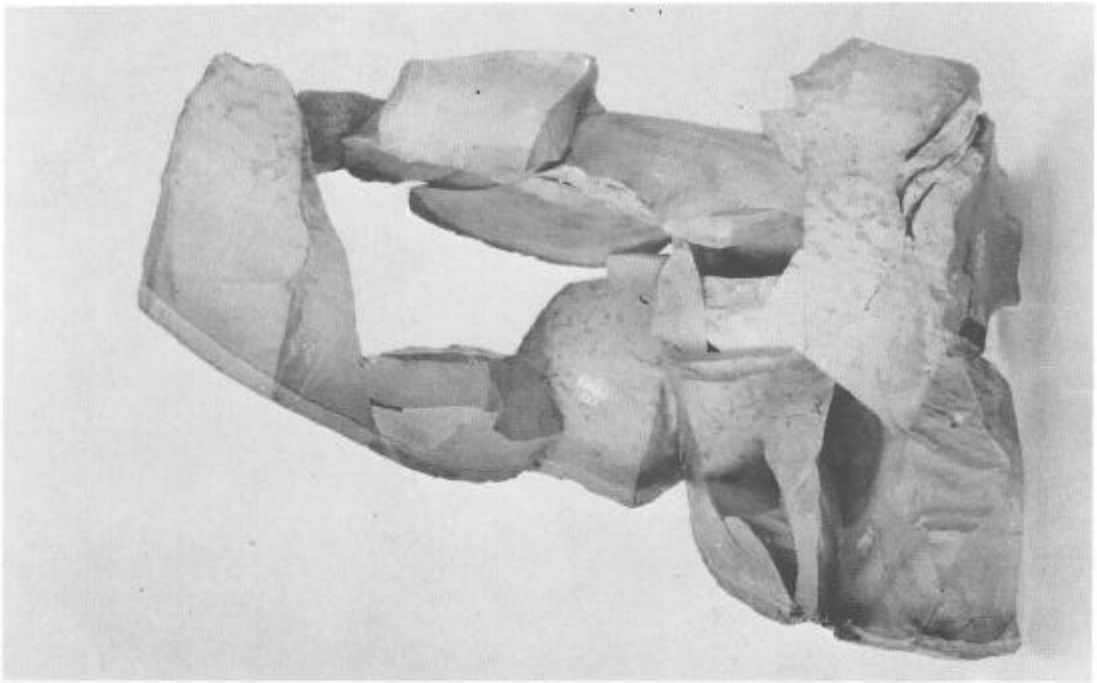
図版 8　上　旧石器出土地点全景（北▶）
下　旧石器出土状況（北▶）

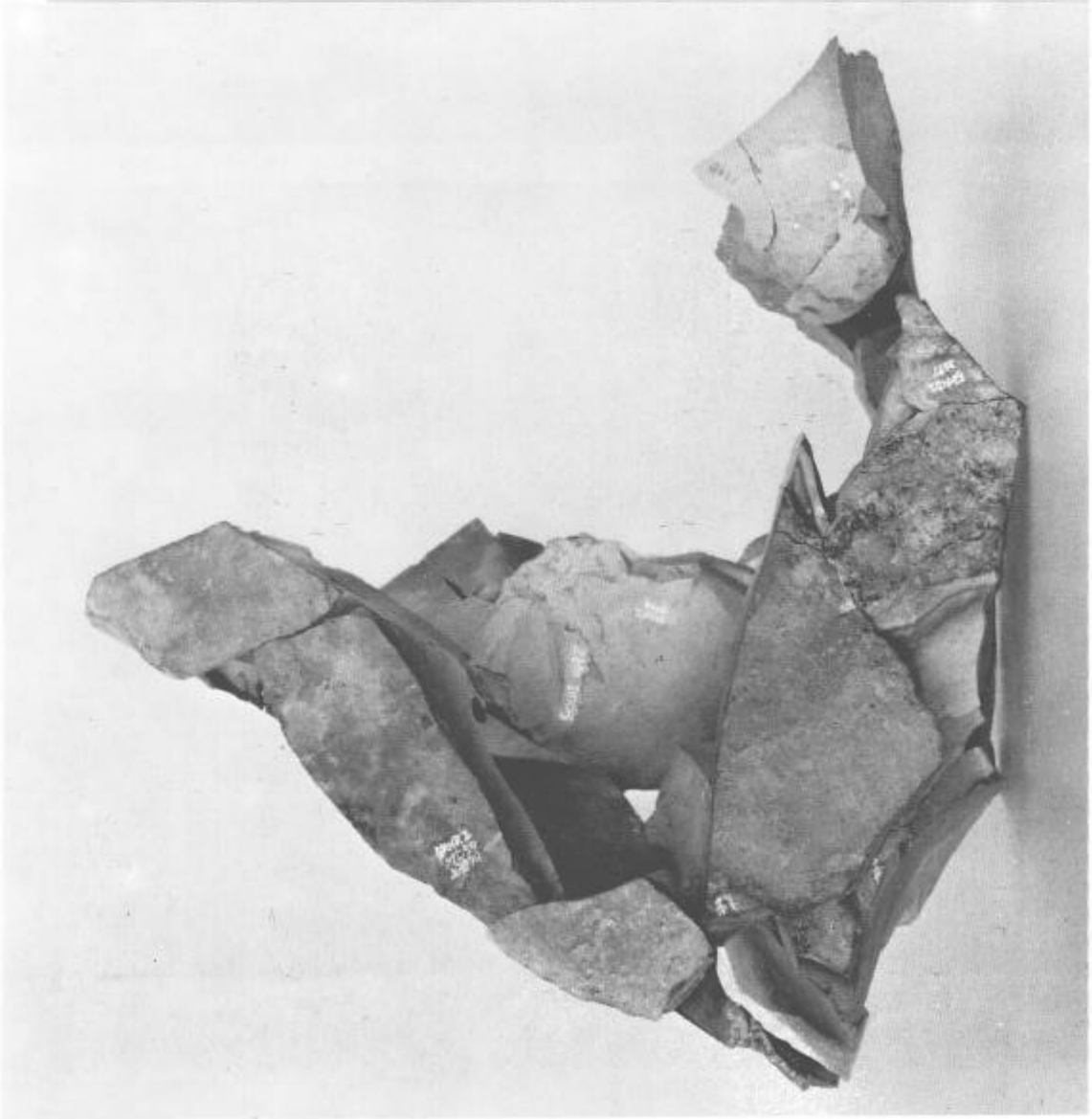


図版9　母岩 ㋩

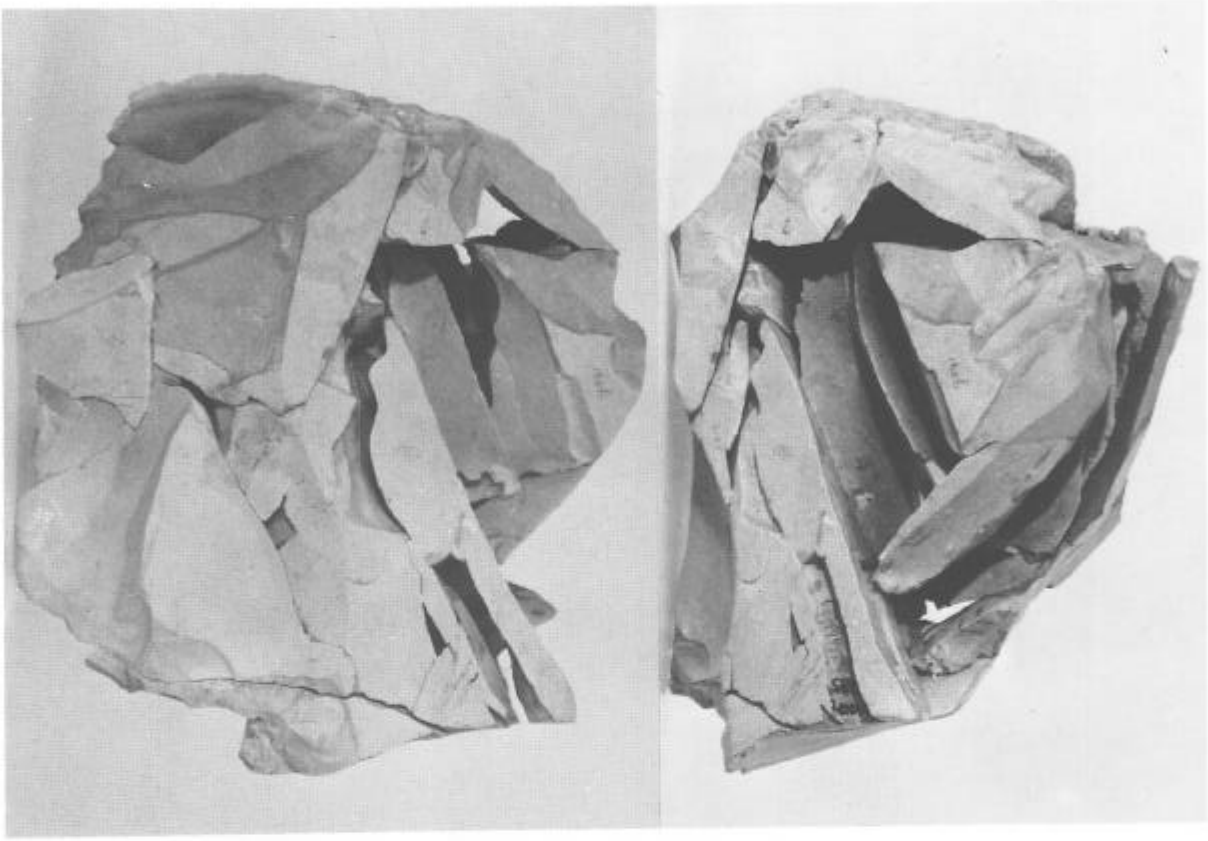


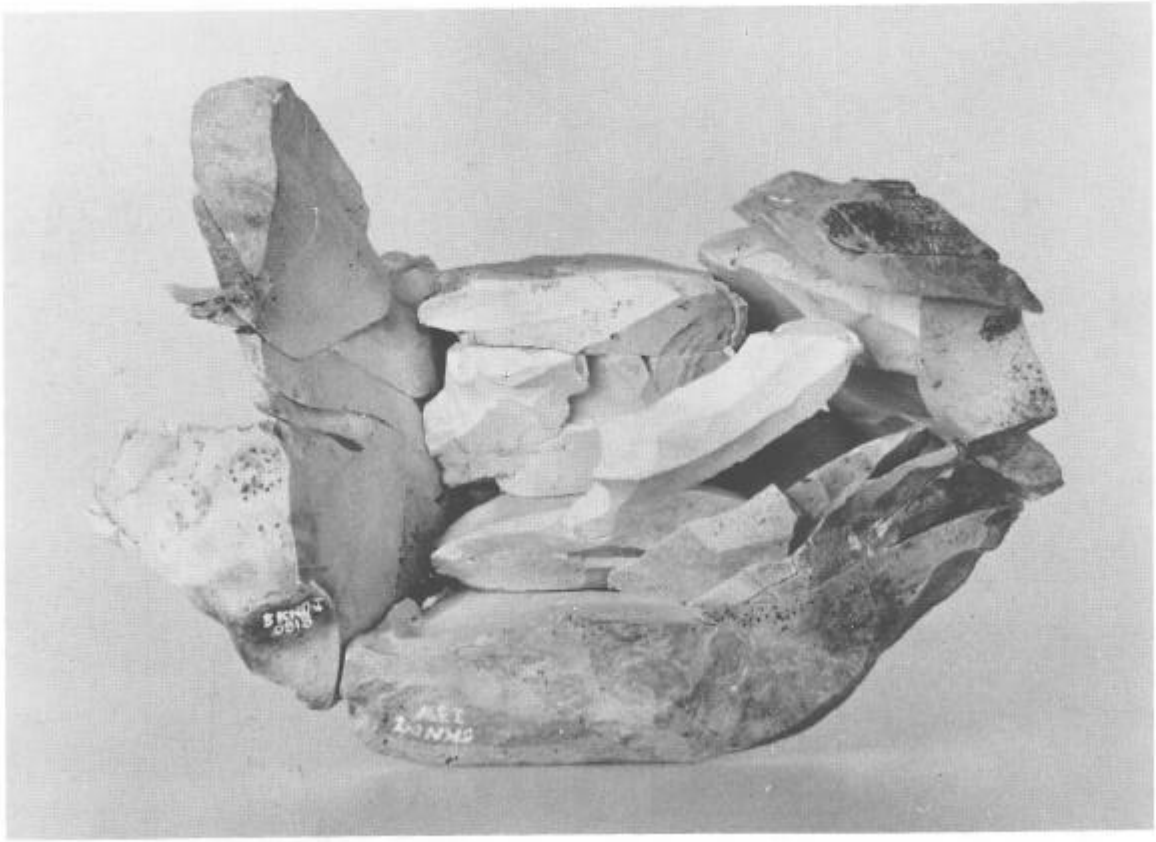
図版10　上　母岩　(え)
　　中　母岩　(く)
　　下　母岩　(た)



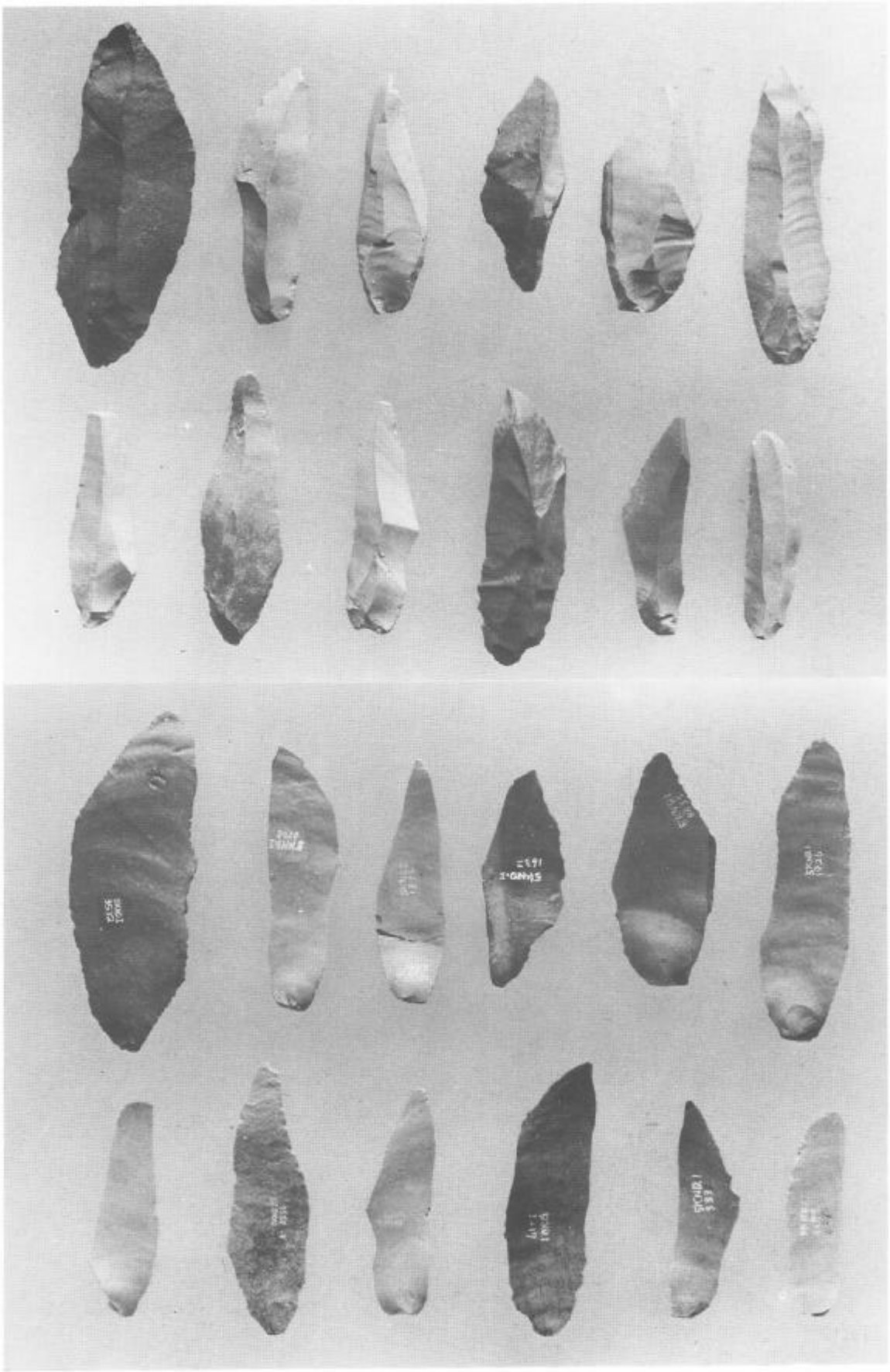


図版11　母岩 ③

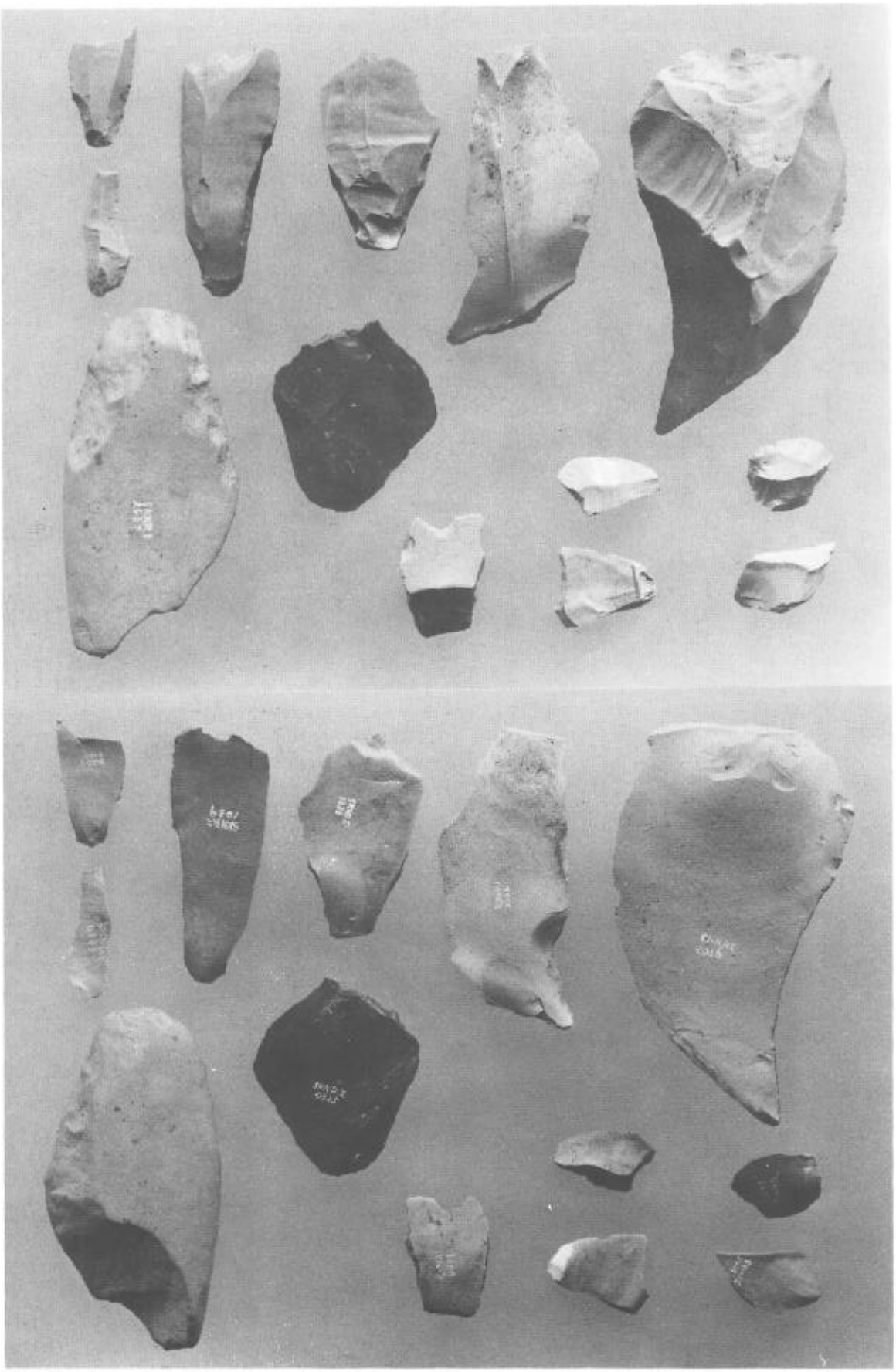




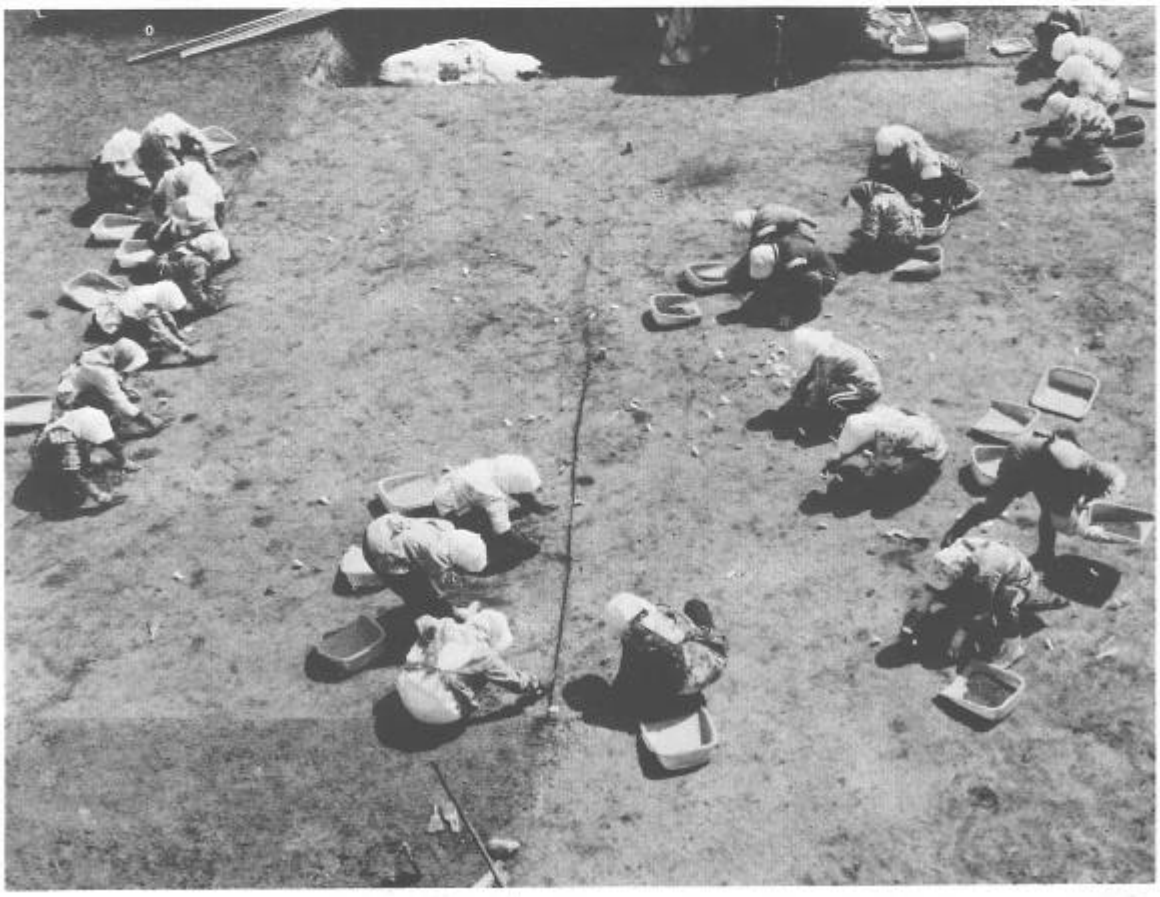
図版12　上　母岩 ㋕
　　下　母岩 ㋑



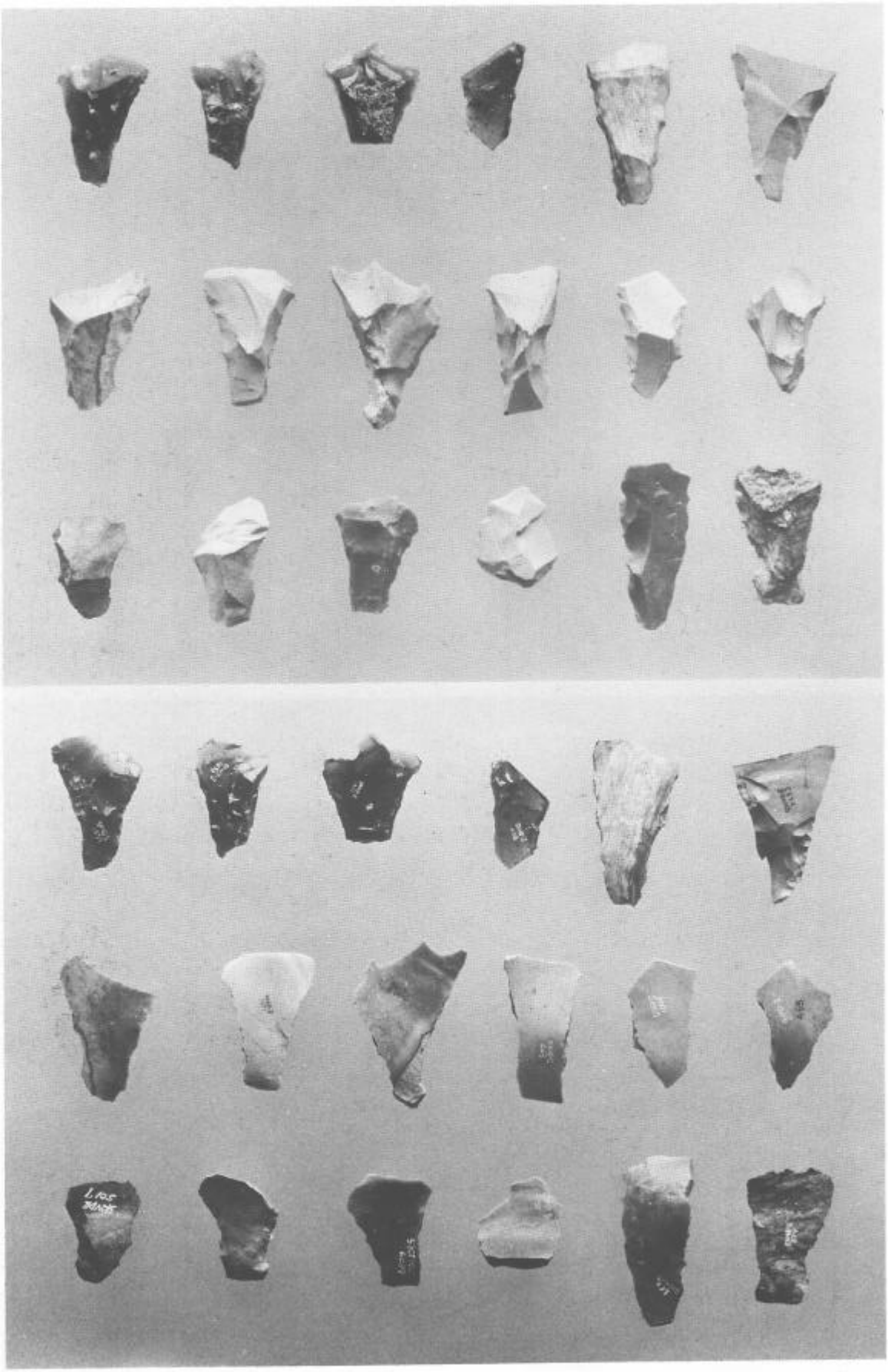
図版13　ナイフ形石器 (1)



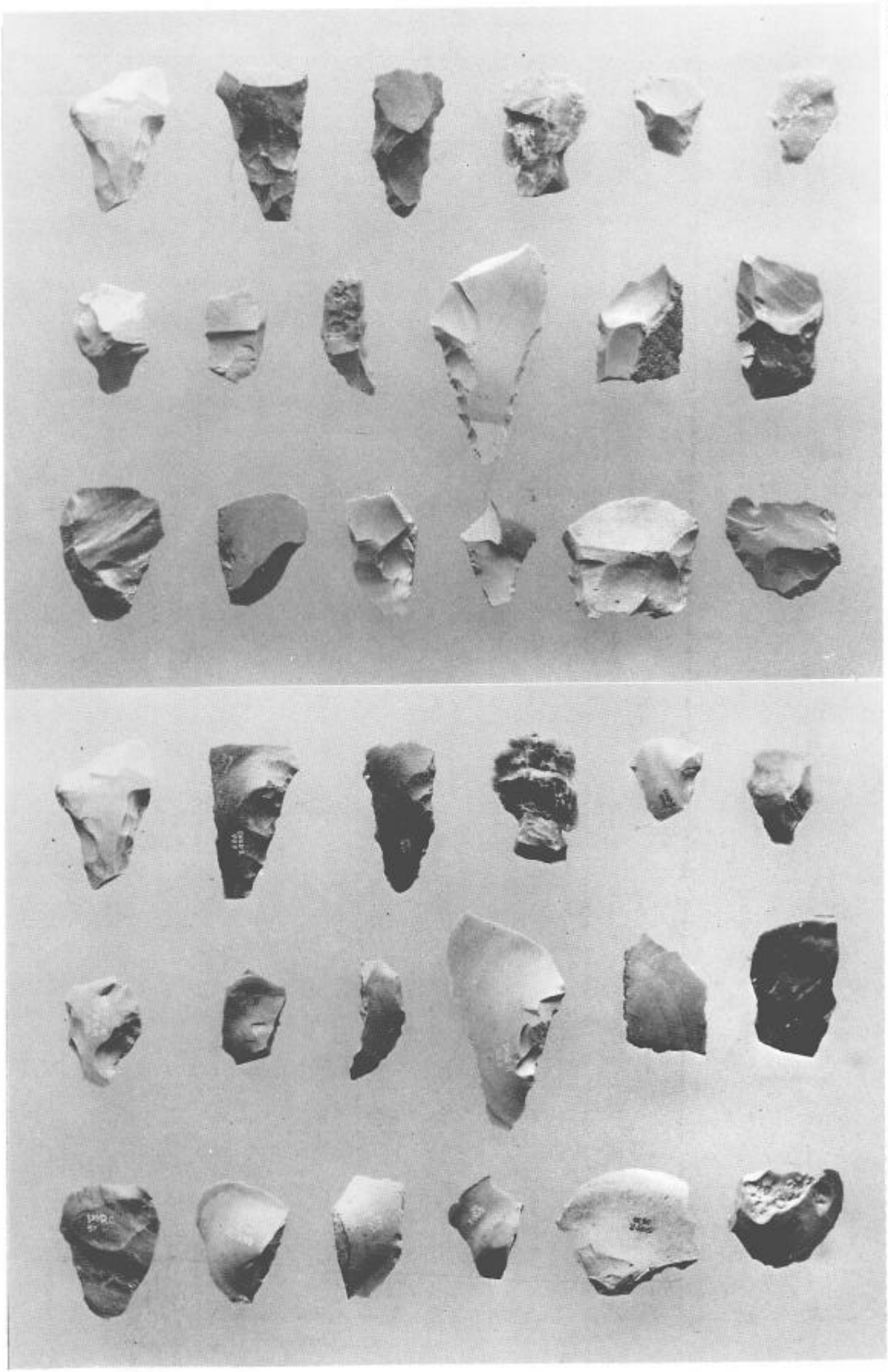
図版14　ナイフ形石器(2)・掻器・石斧・台形様石器・その他の石器



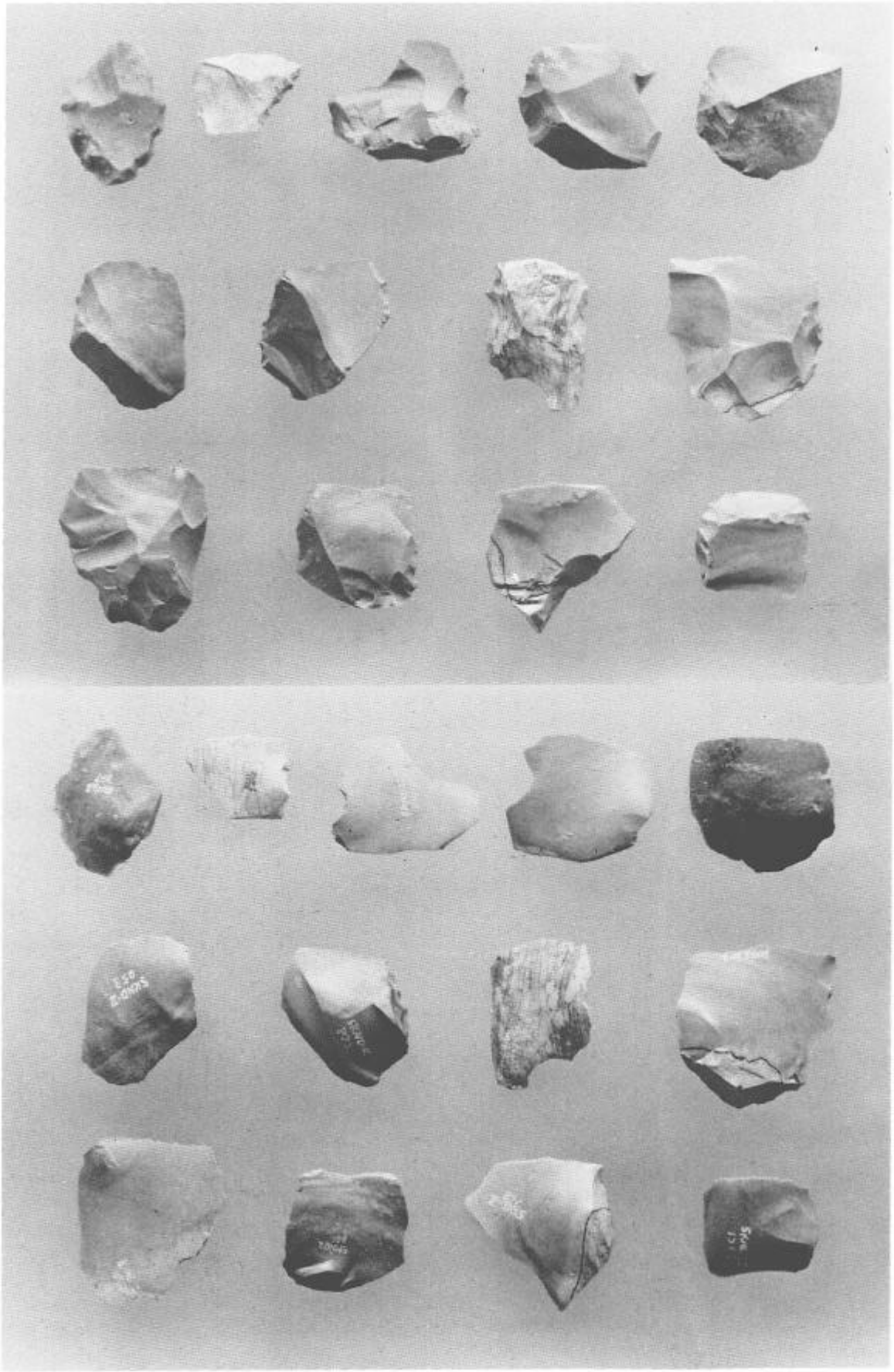
図版15　上　旧石器出土地点遠景（西▶）
　　下　旧石器出土地点調査風景（西▶）



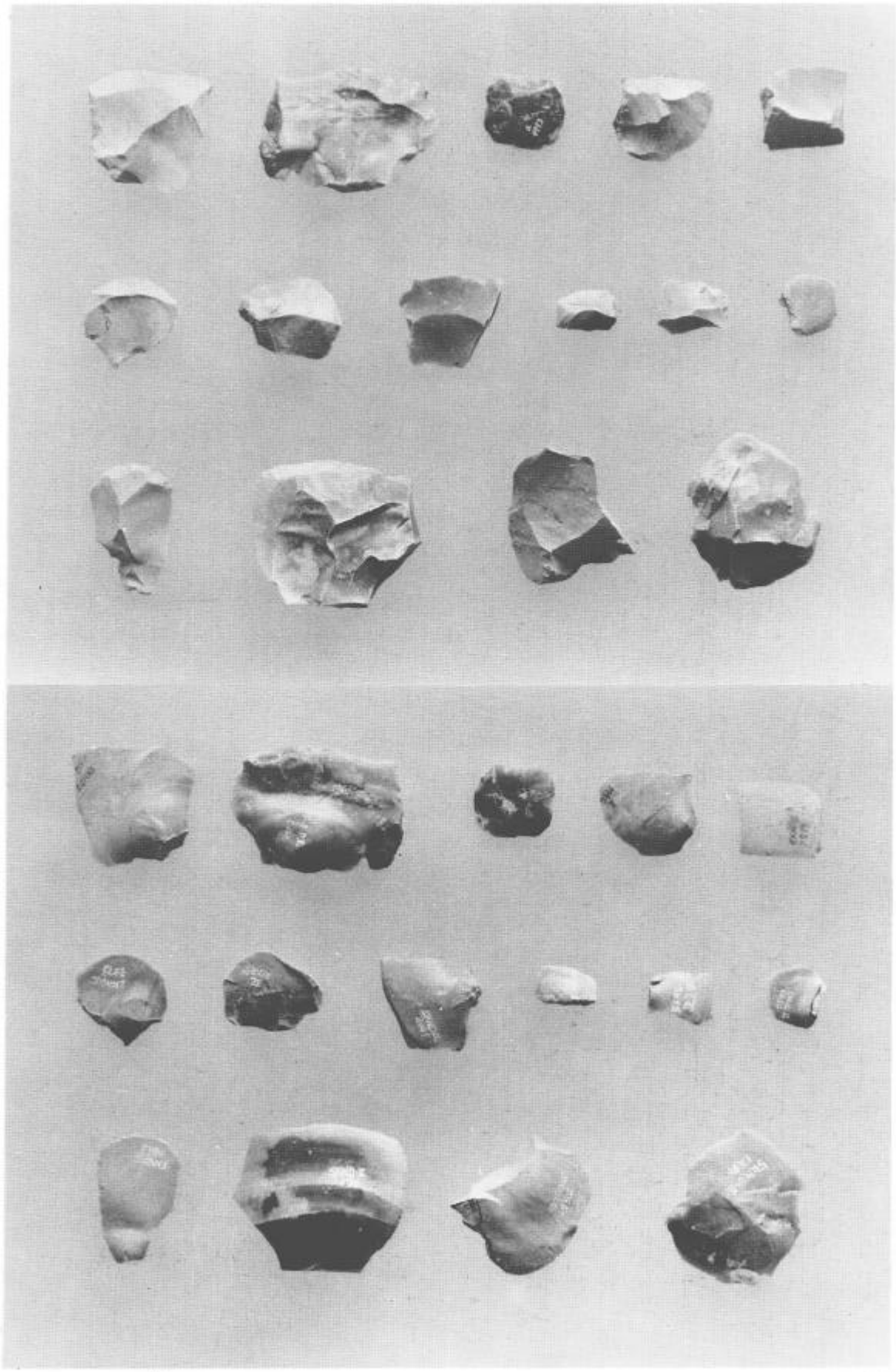
図版16　台形様石器 (1)



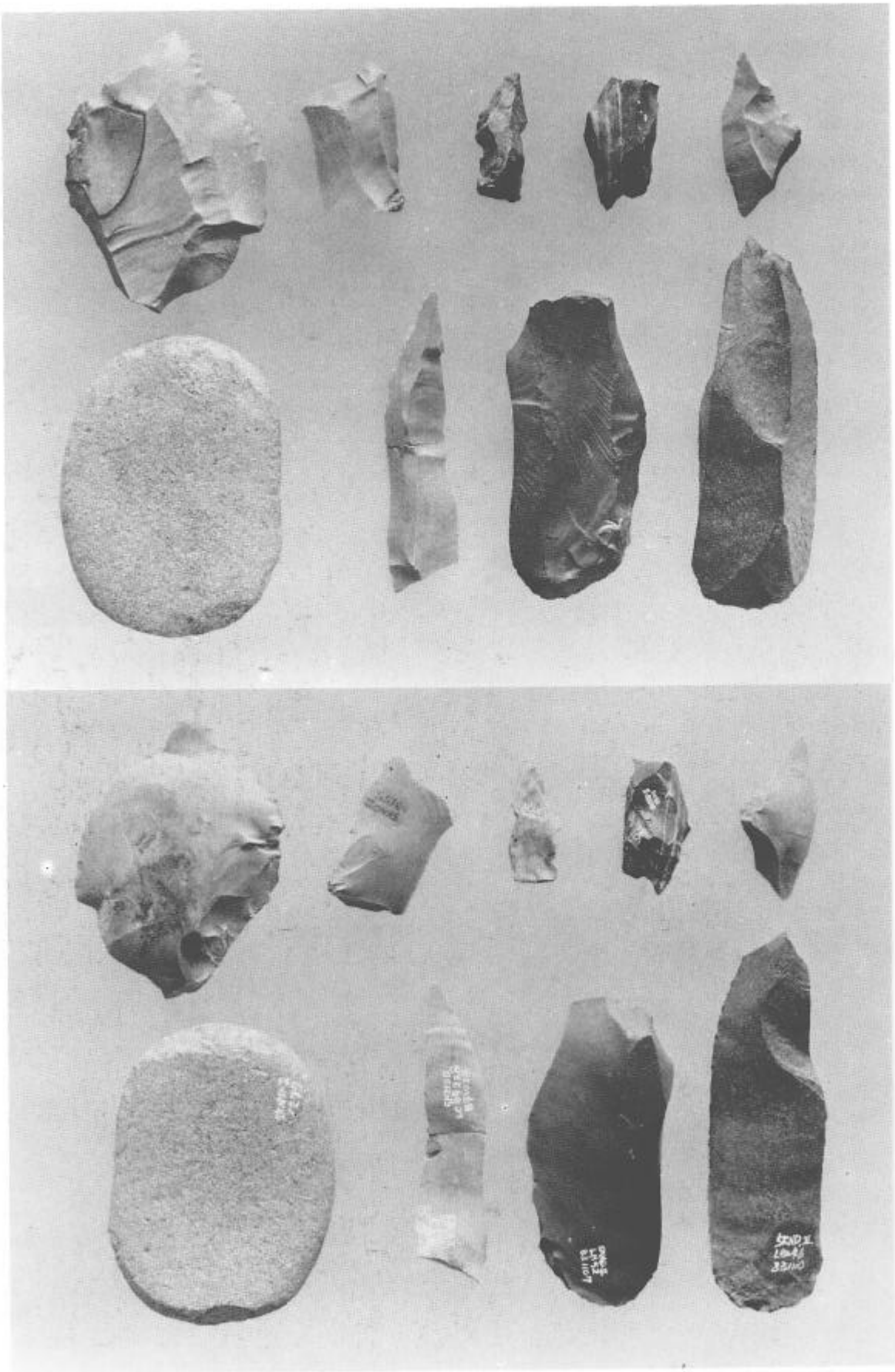
図版17　台形様石器　(2)



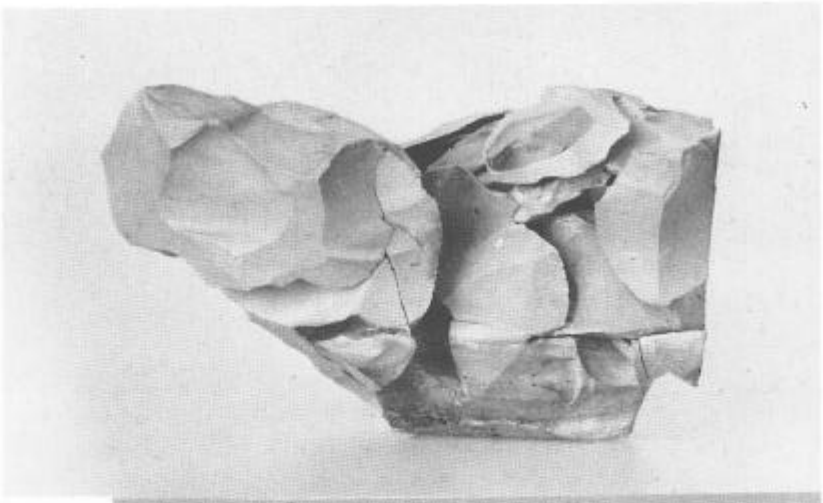
図版18　台形様石器 (3)

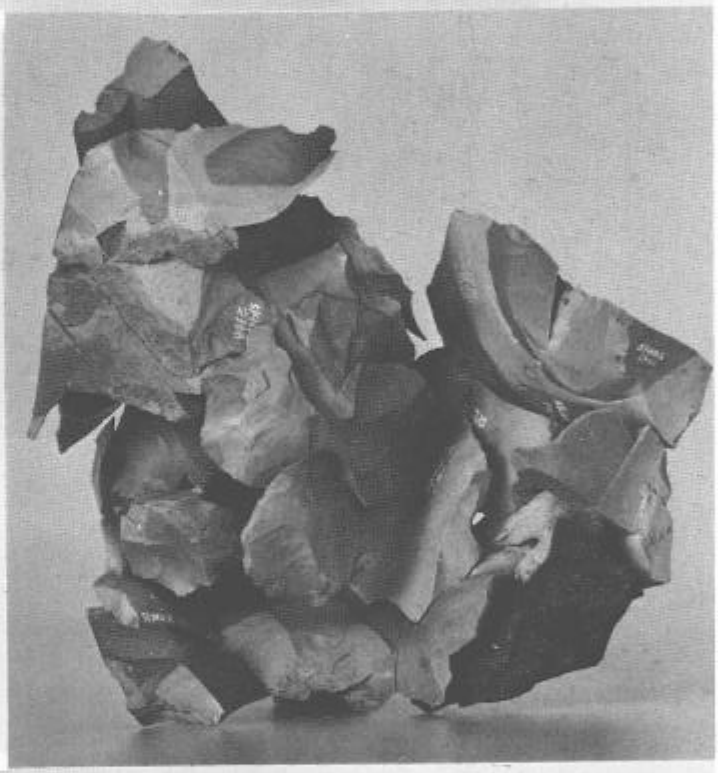


図版19　台形様石器(4)・掻器

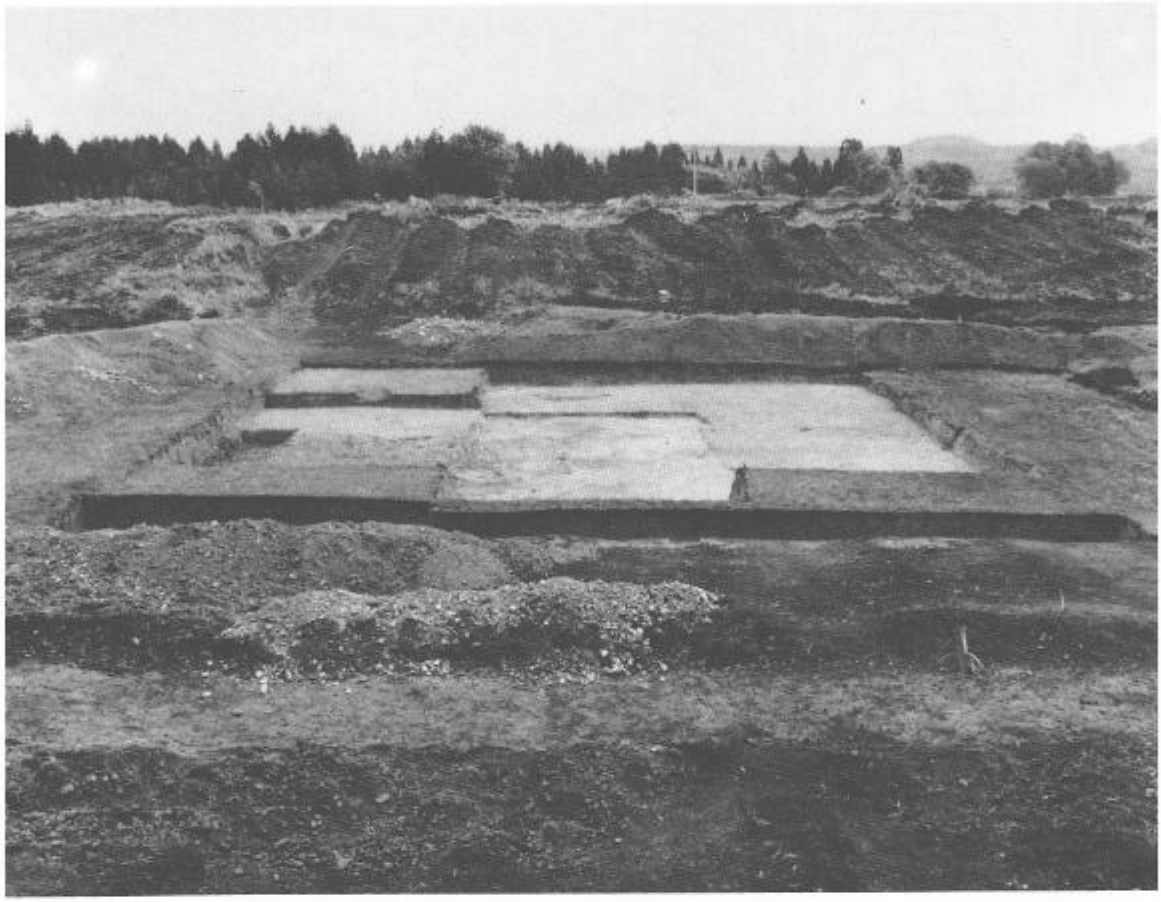


図版20　その他の石器・ハンマー・ストーン・ナイフ形石器・掻器

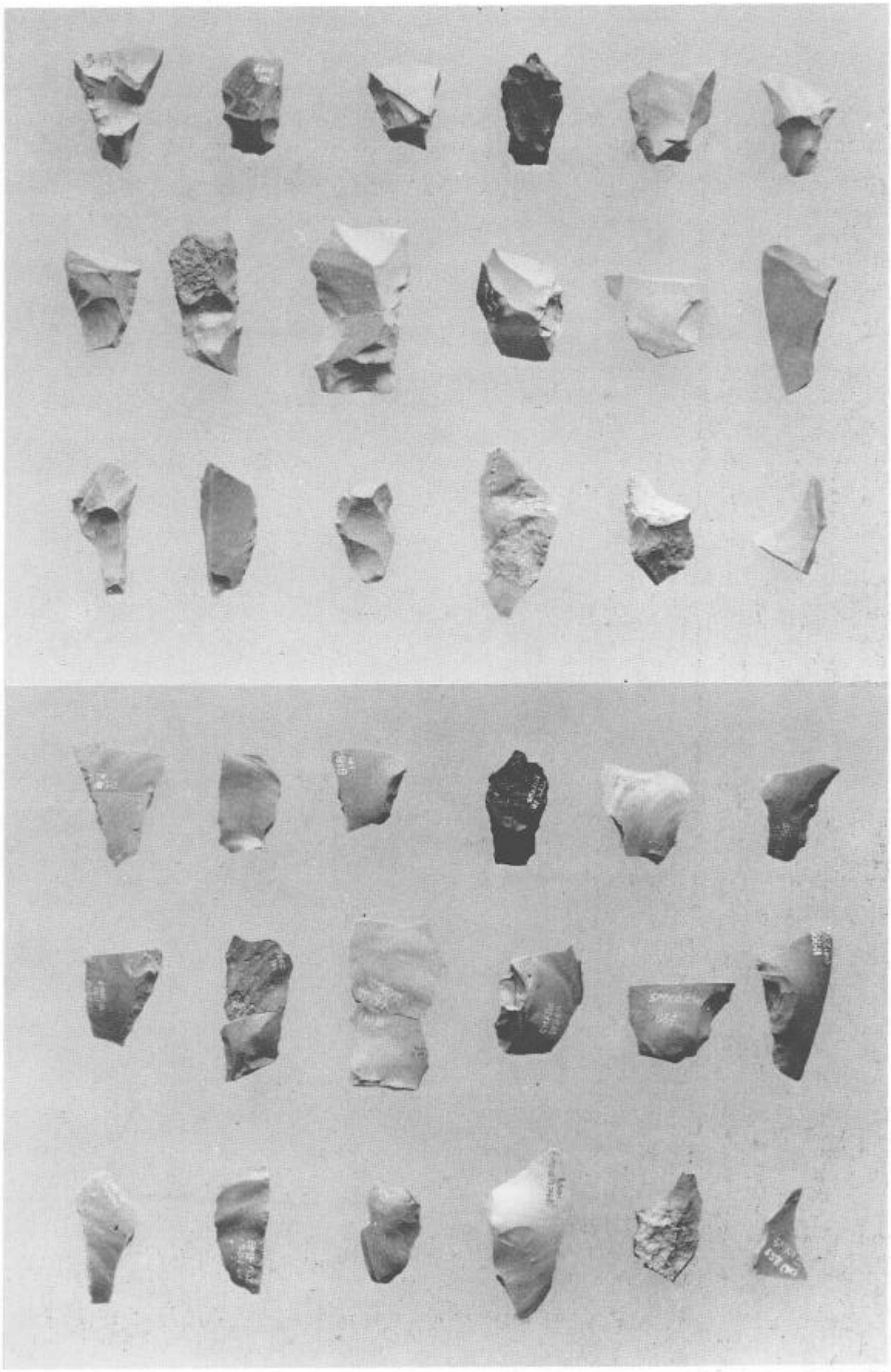




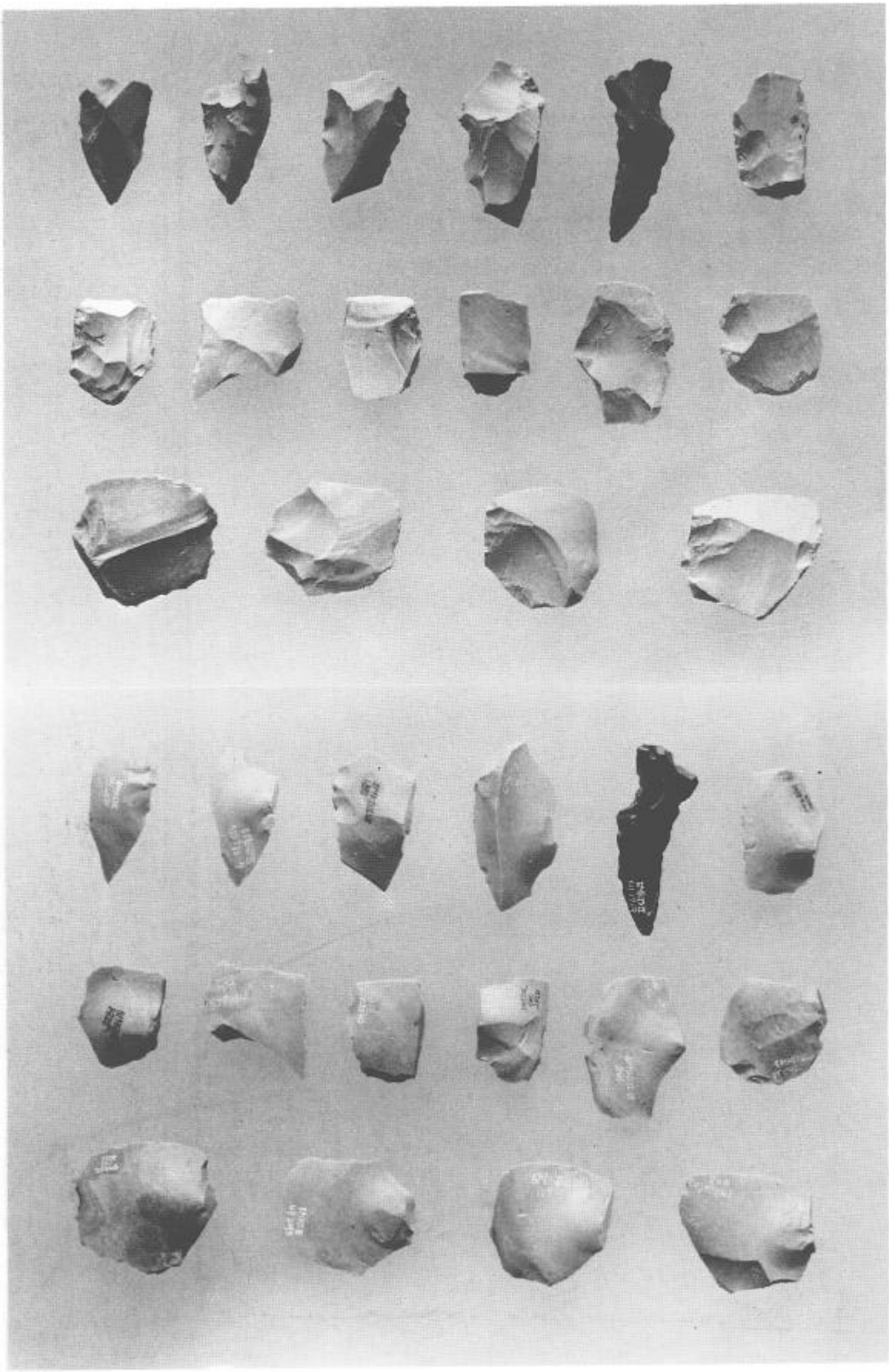
図版21　母岩 ㋐



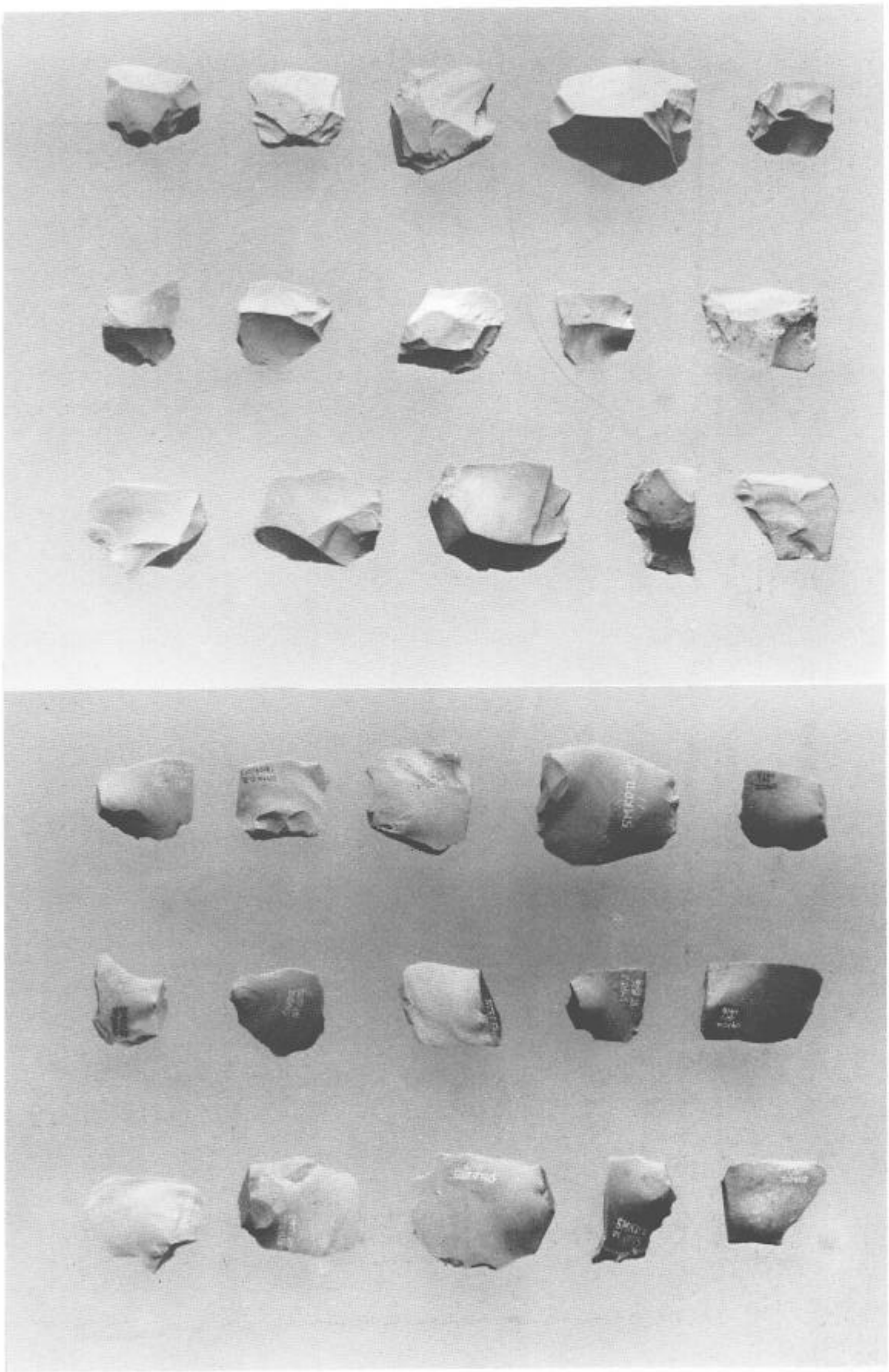
図版22　上　旧石器出土地点全景（西▶）
下　同　　上　　（東▶）



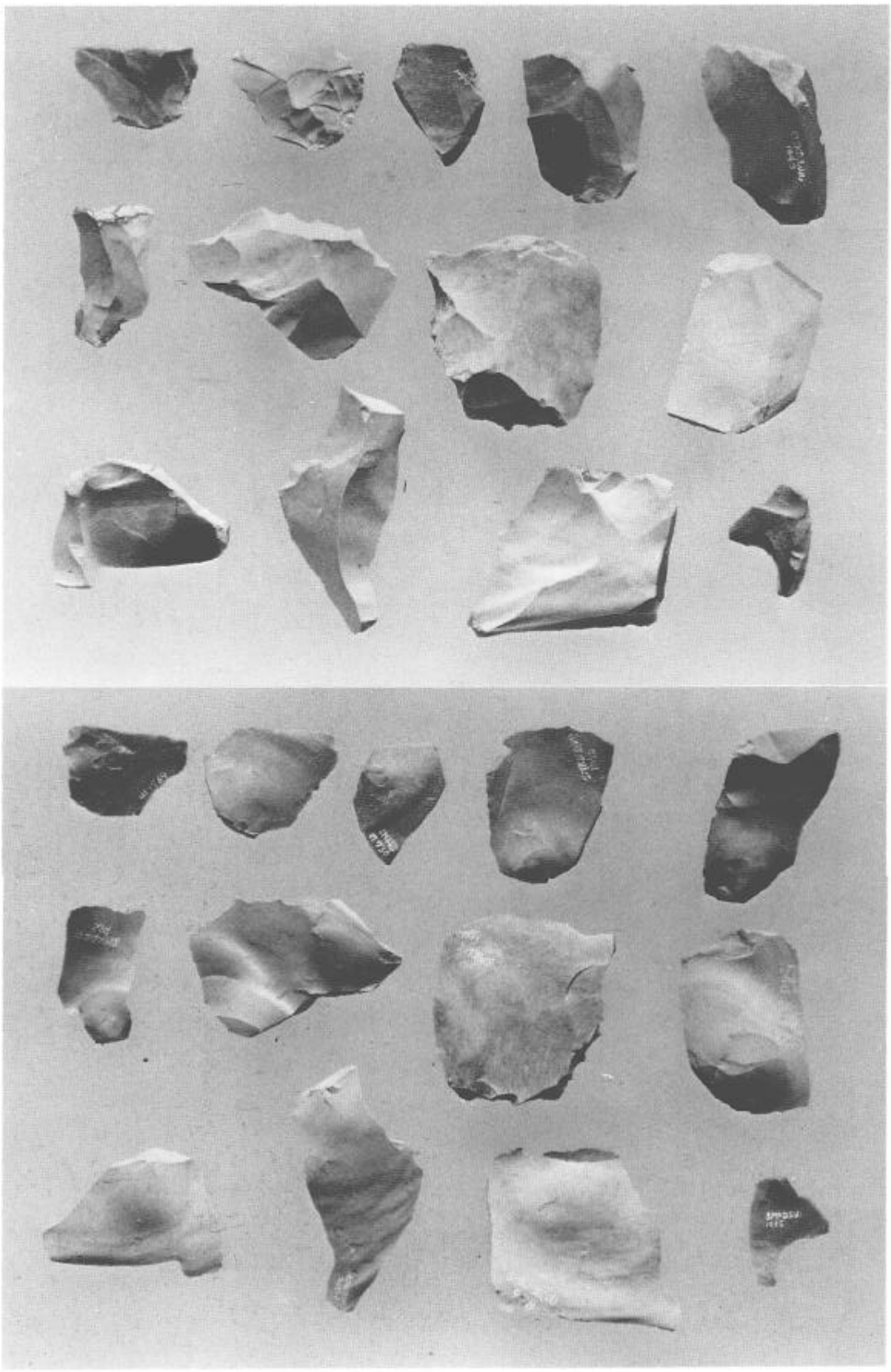
図版23　台形様石器 (1)



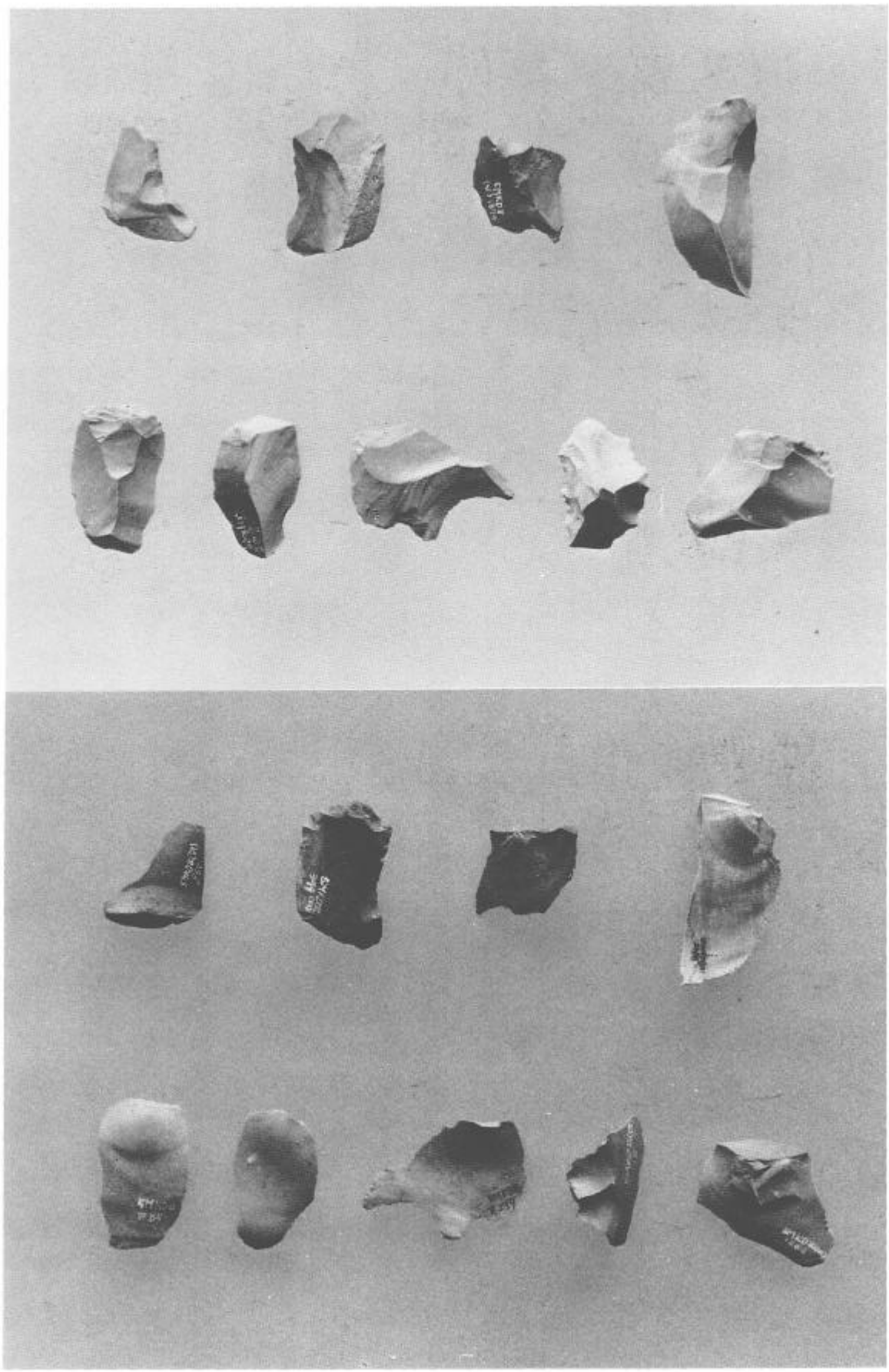
図版24　台形様石器 (2)



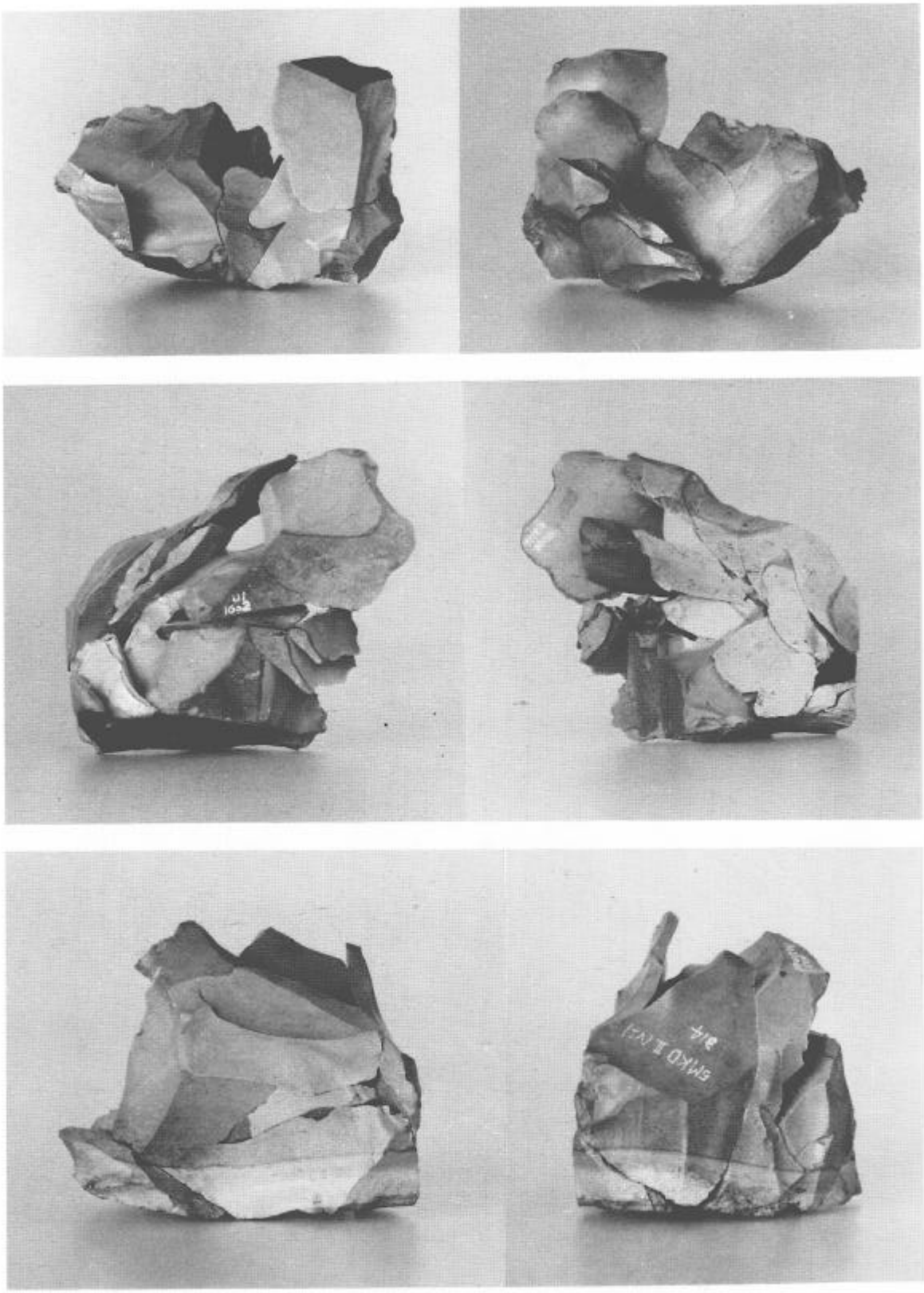
図版25　台形様石器 (3)



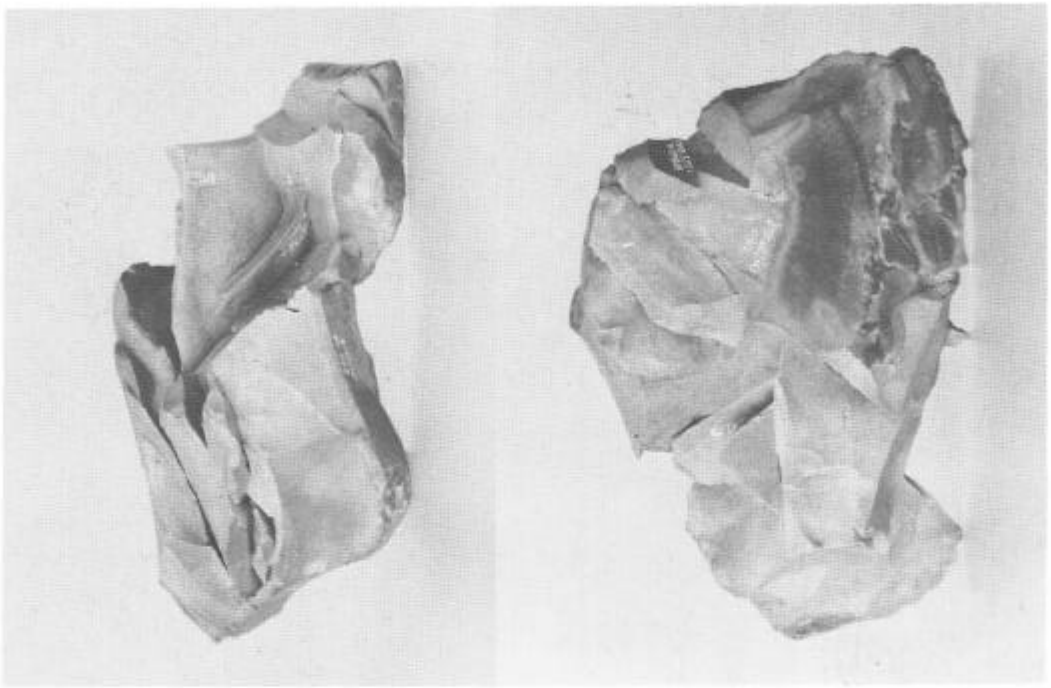
図版26　台形様石器(4)・掻器

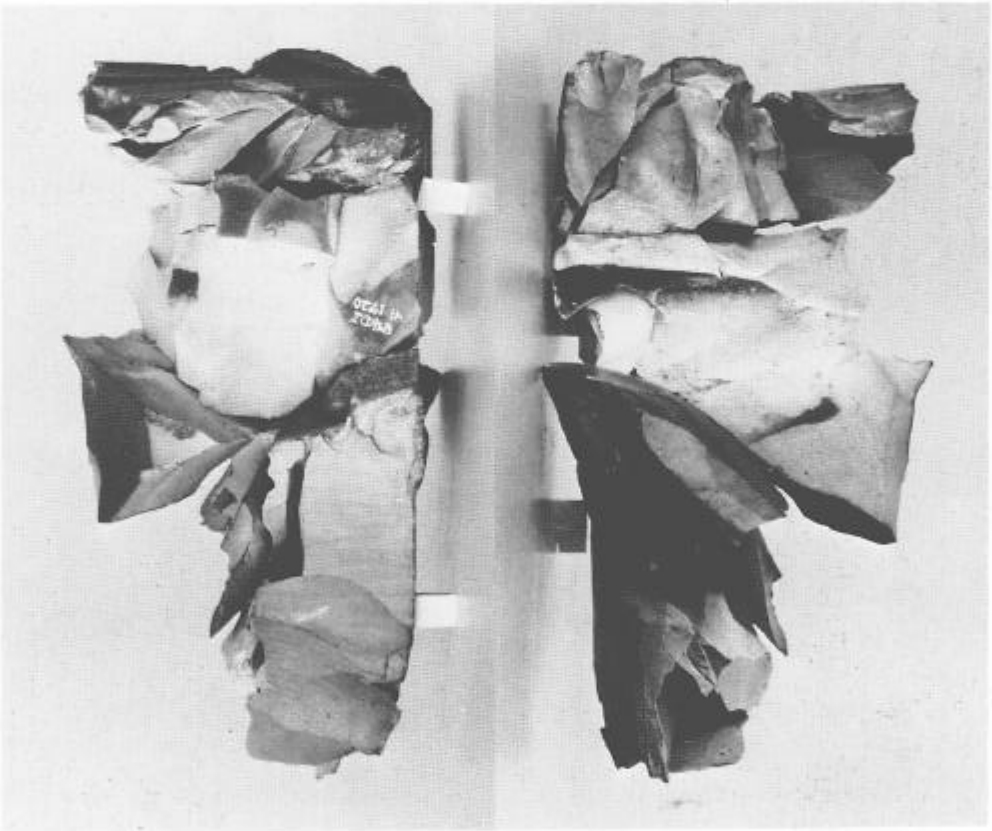


図版27　その他の石器

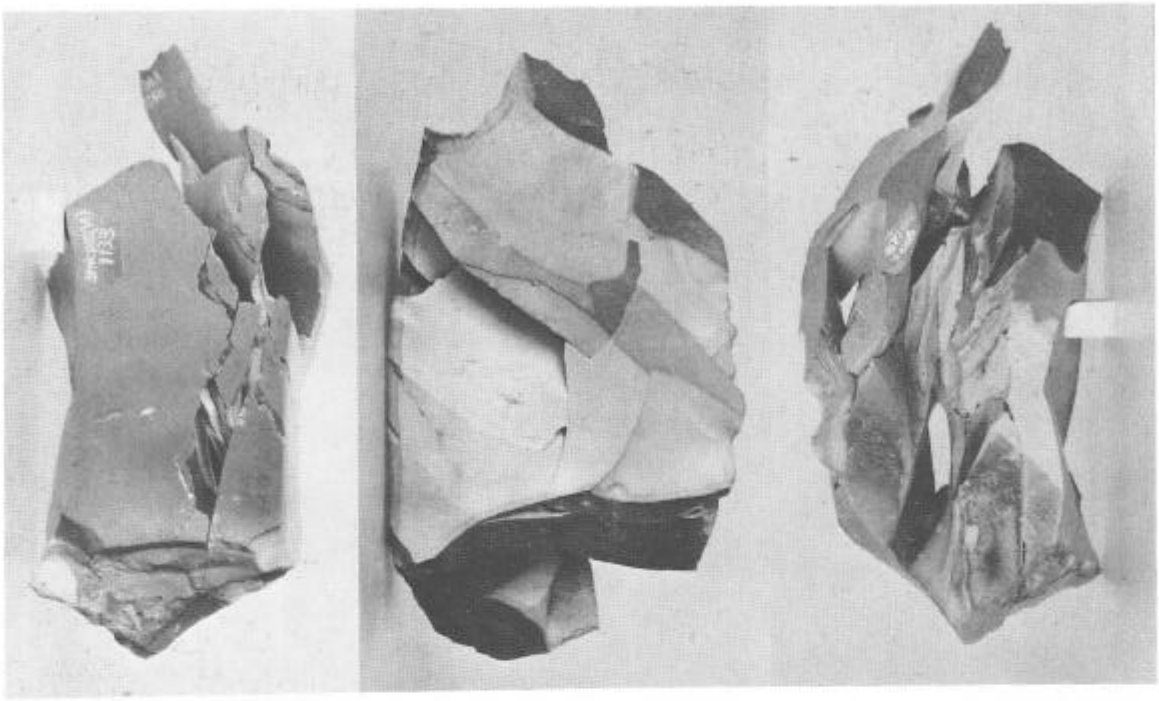


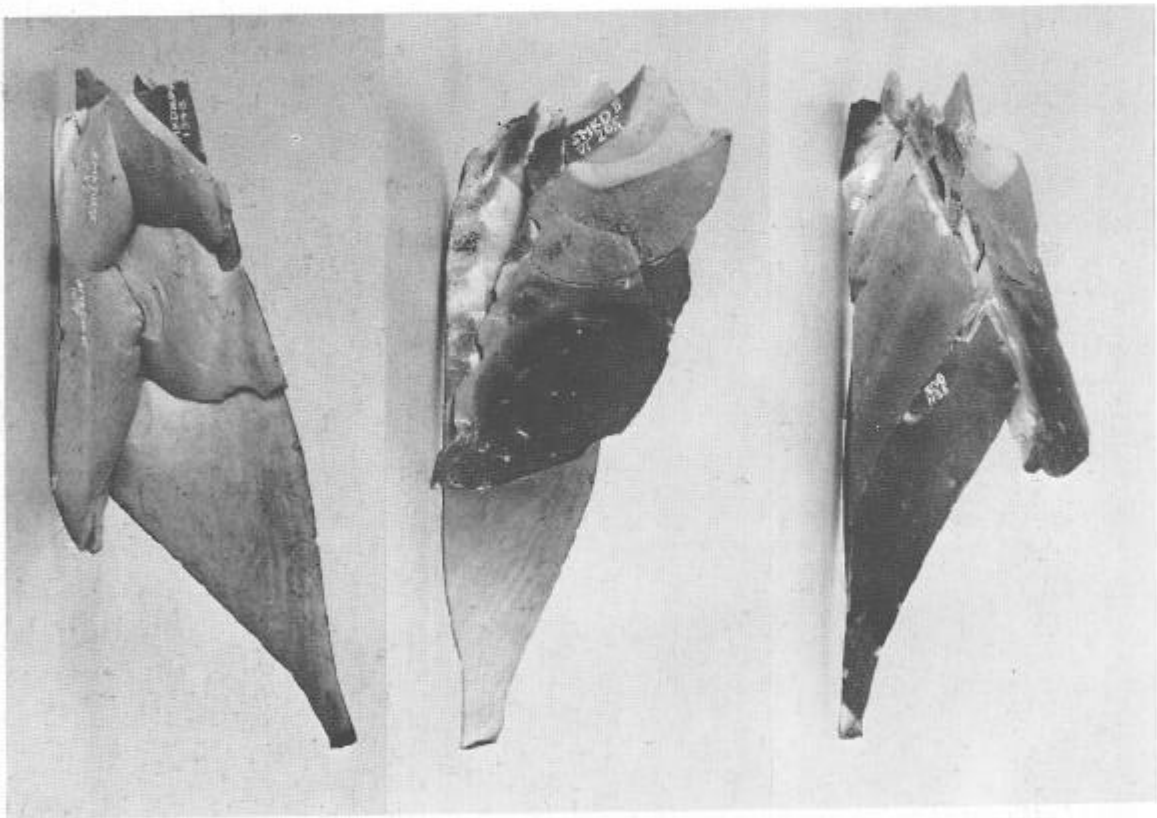
図版28　上　接合資料1
中　接合資料2
下　接合資料3



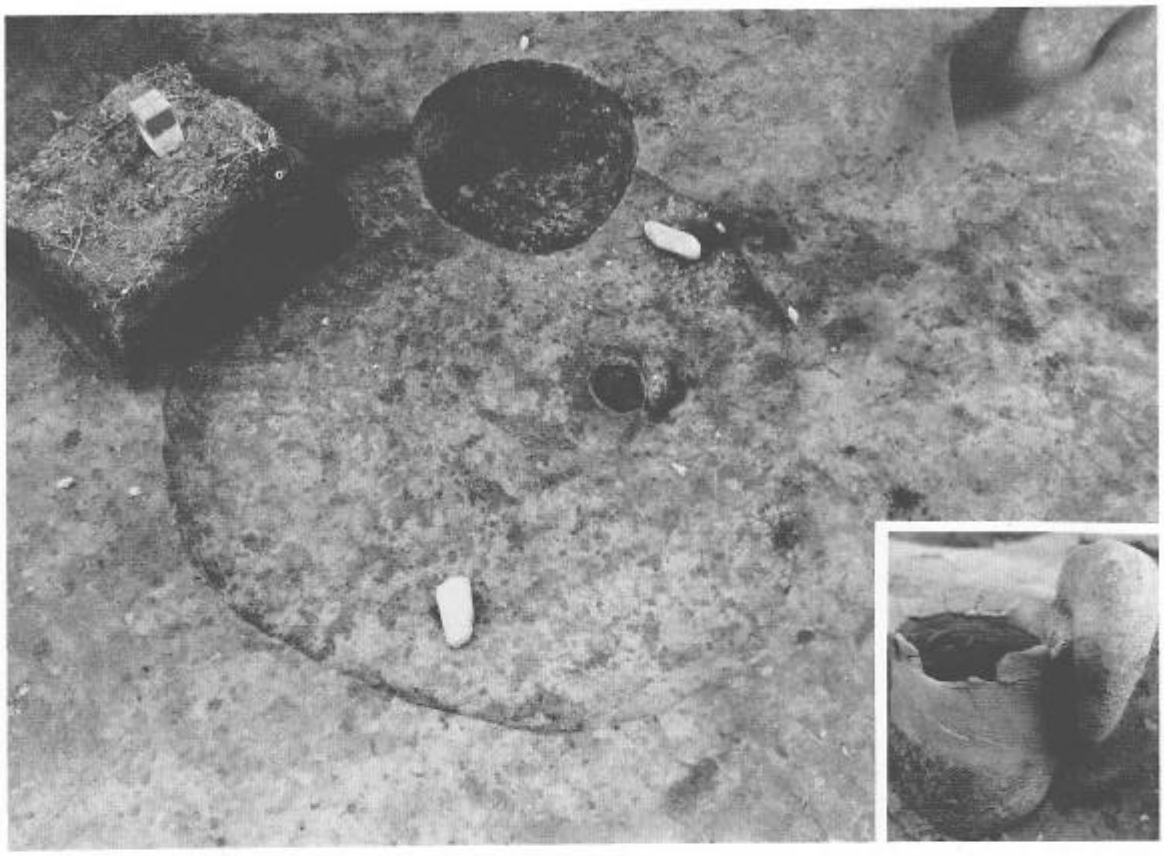


図版29　上　接合資料５
　　下　接合資料９

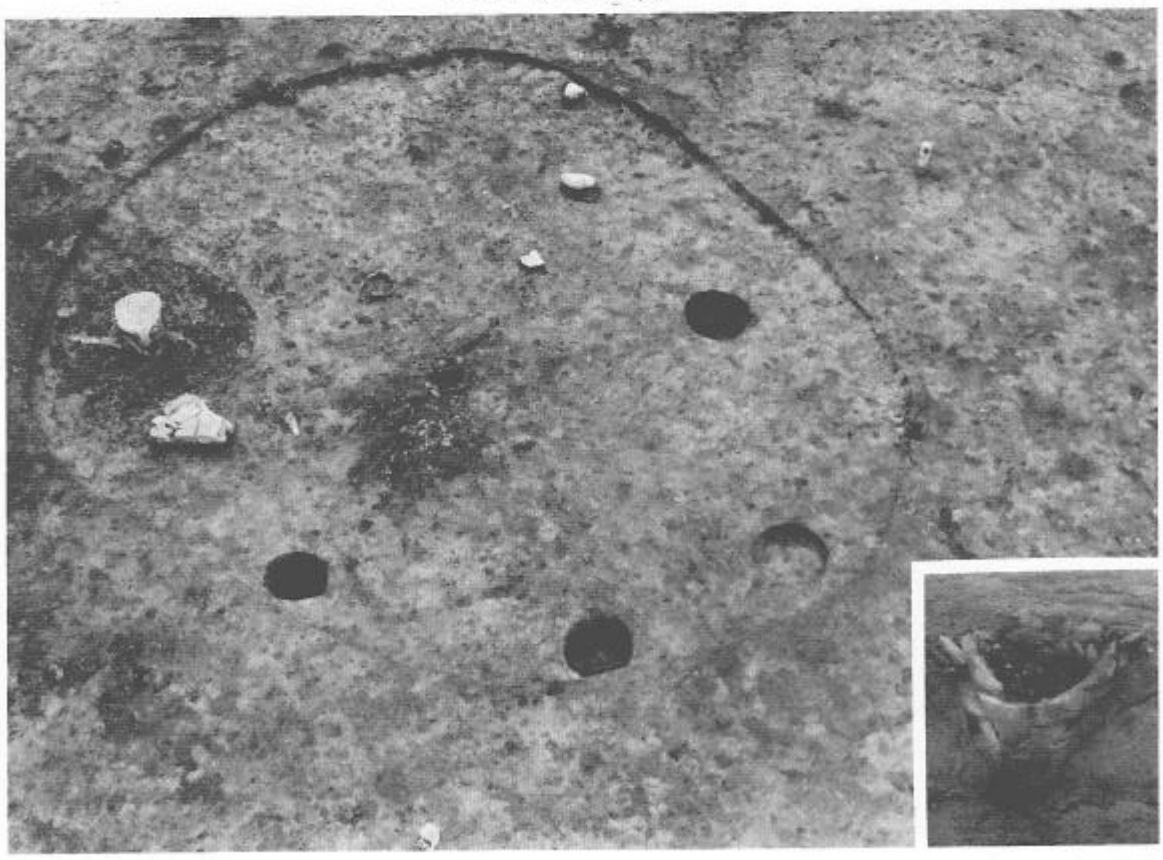




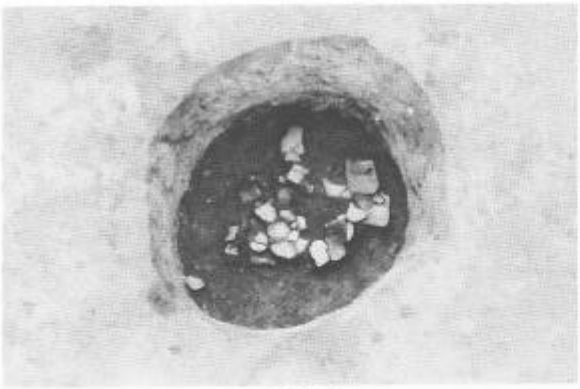
図版30　上　接合資料10
　　下　接合資料12



ＳＩ07竪穴住居跡

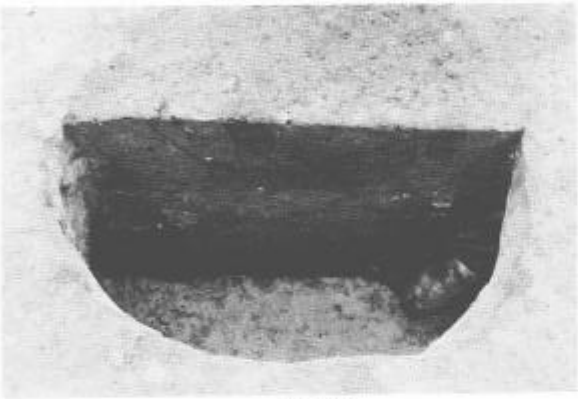


ＳＩ16竪穴住居跡

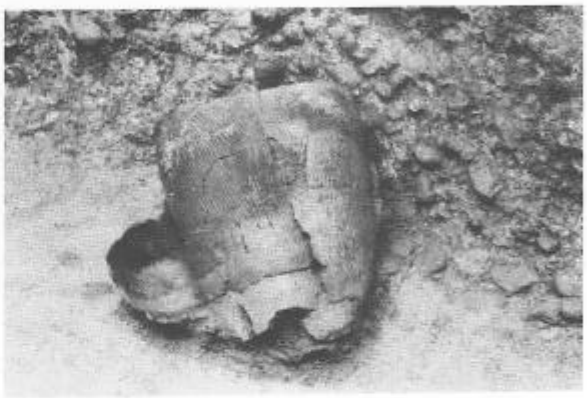


S K01

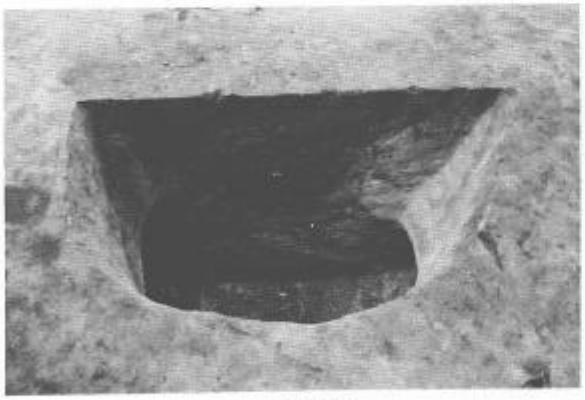
S K04



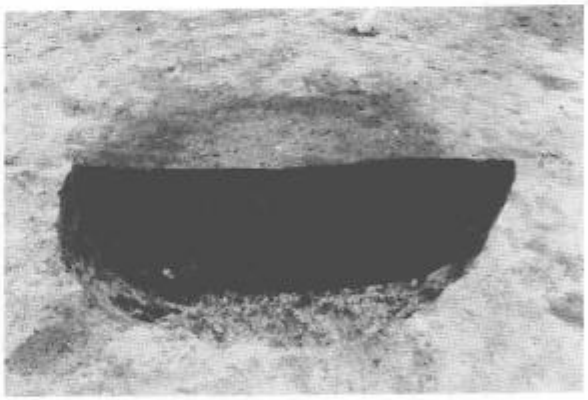
S K05



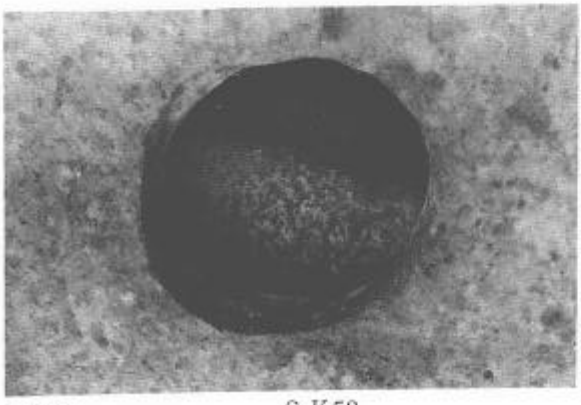
S K39



S K39



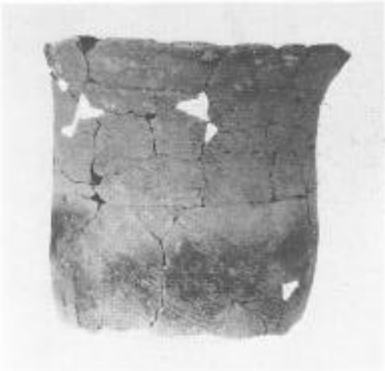
S K52

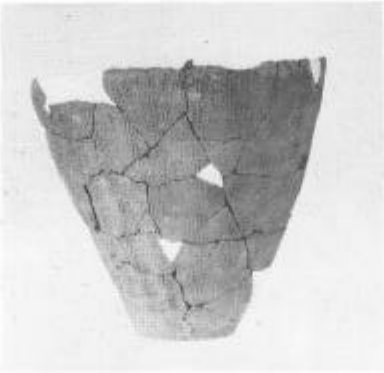


S K52

S K97

図版32


S I 07

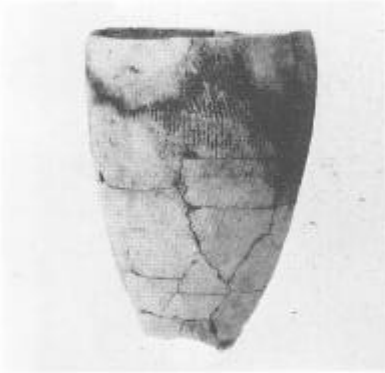

S I 15

S I 16

S K01

S K01

S K01


S K39

S K67

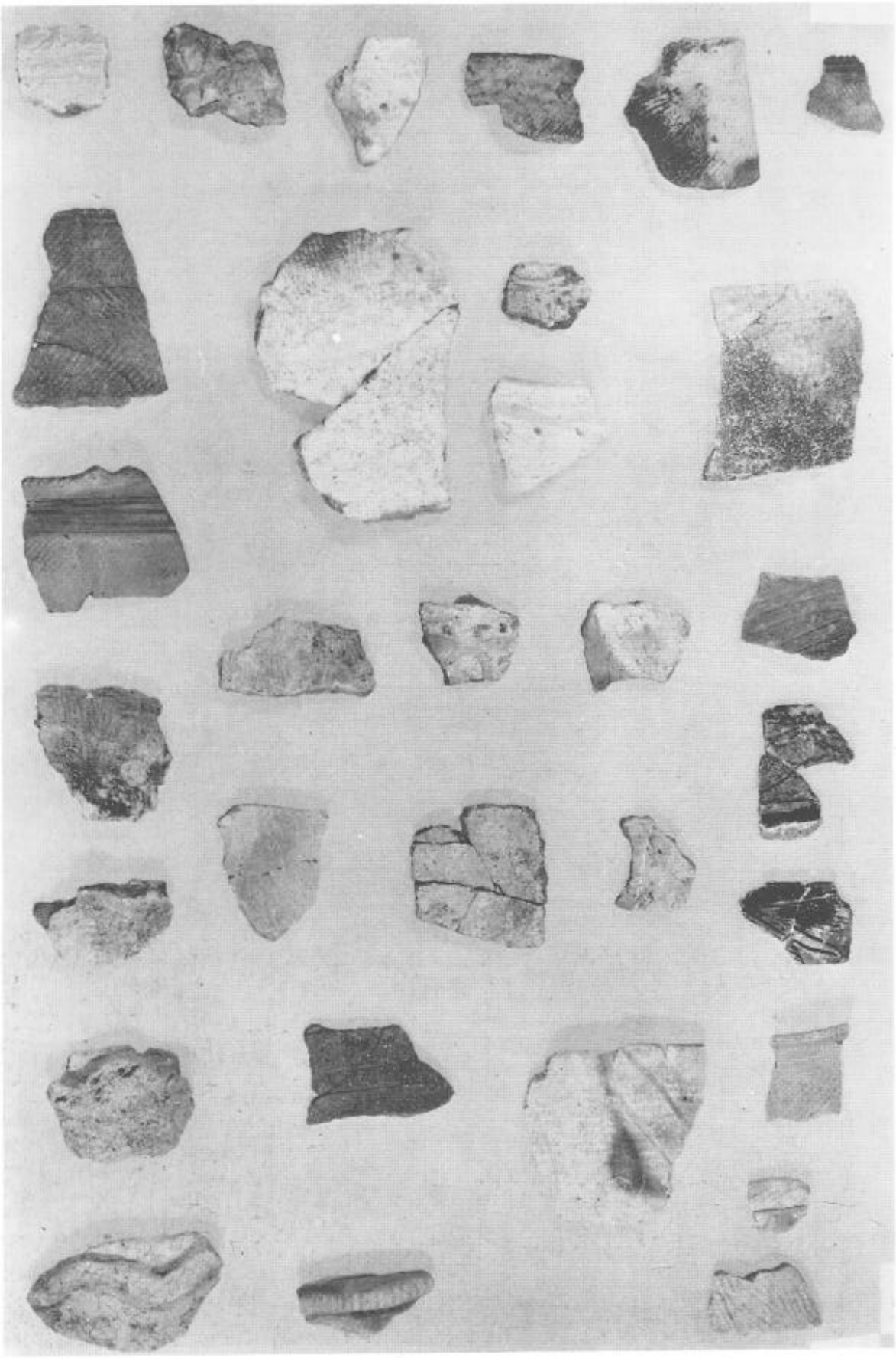
遺構外

遺構外

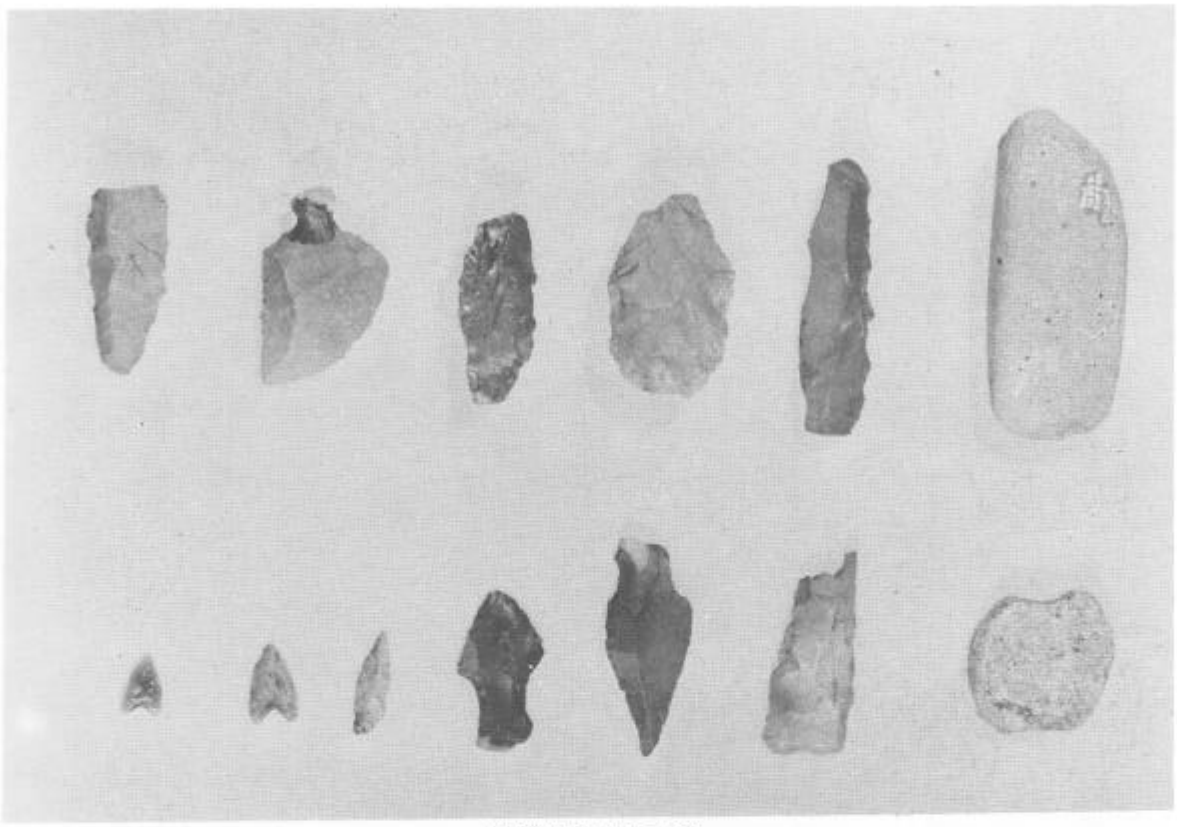
S K93

S K92

図版33



図版34

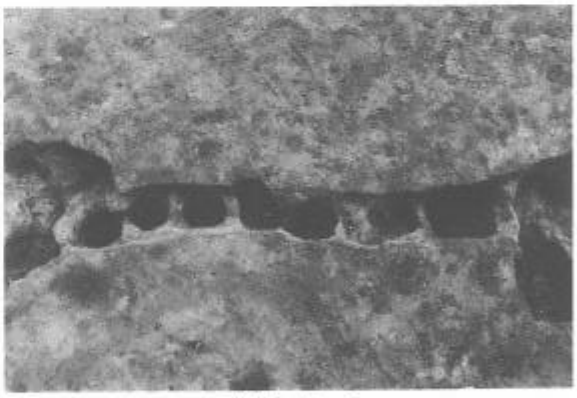


遺構内外出土石器

遺　跡　近　景

ＳＩ37 竪穴住居跡

炉



周溝内ピット

周　溝

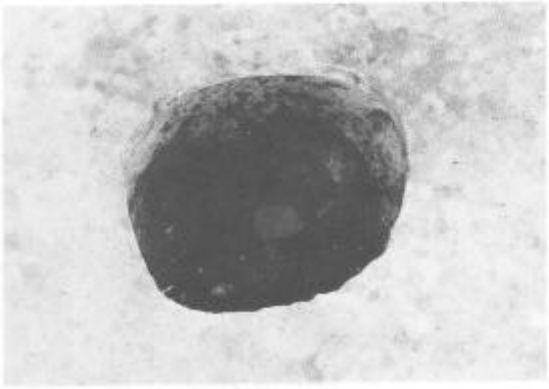
ピット断面

図版36

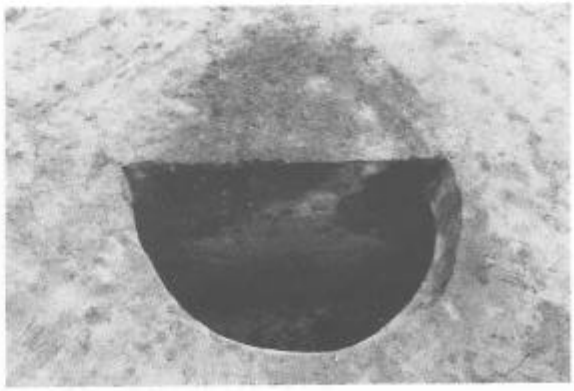
遺跡東側土壙群

S K53

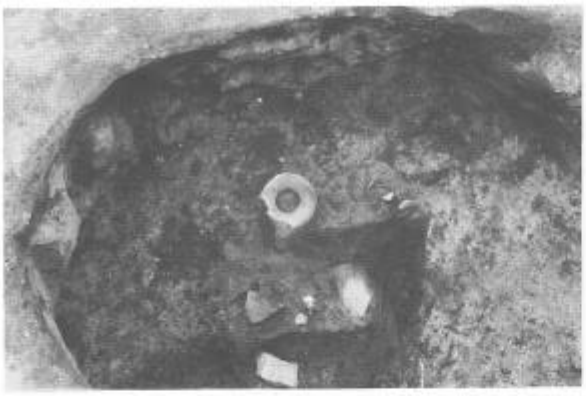
S K80



S K17

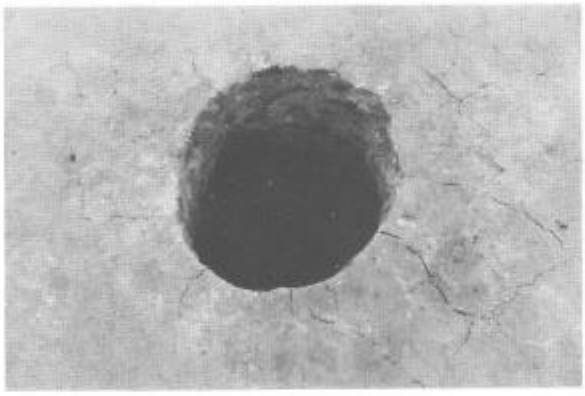


S K24



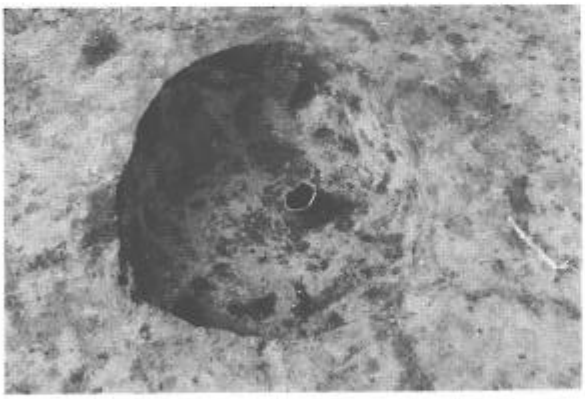
S K94

S K49

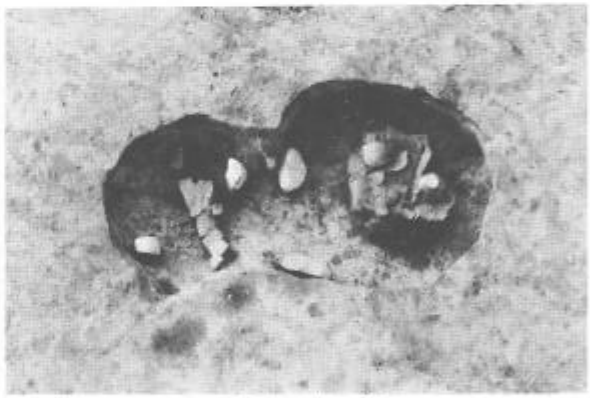


S K70

S K73



S K09



S K12A・B

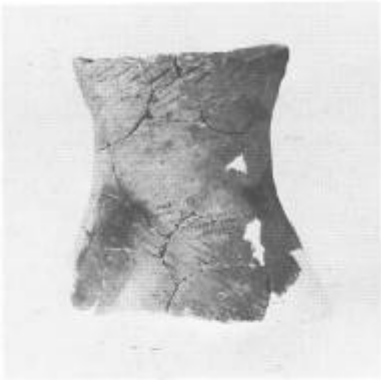
S R86

S Q105

図版38

S I 37

S I 37


S K09

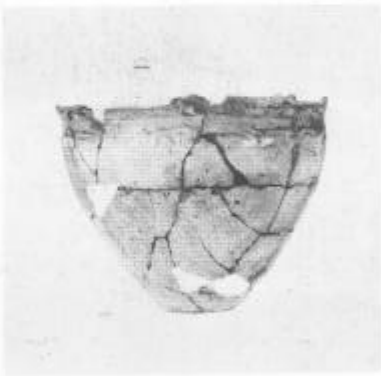
S K12A

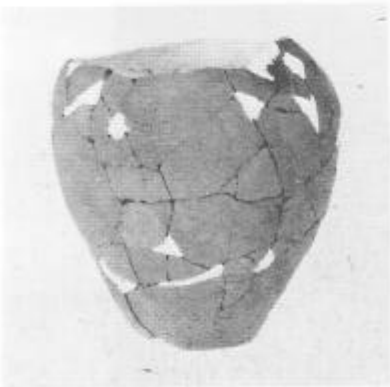
S K27

S K49

S K61

S K65

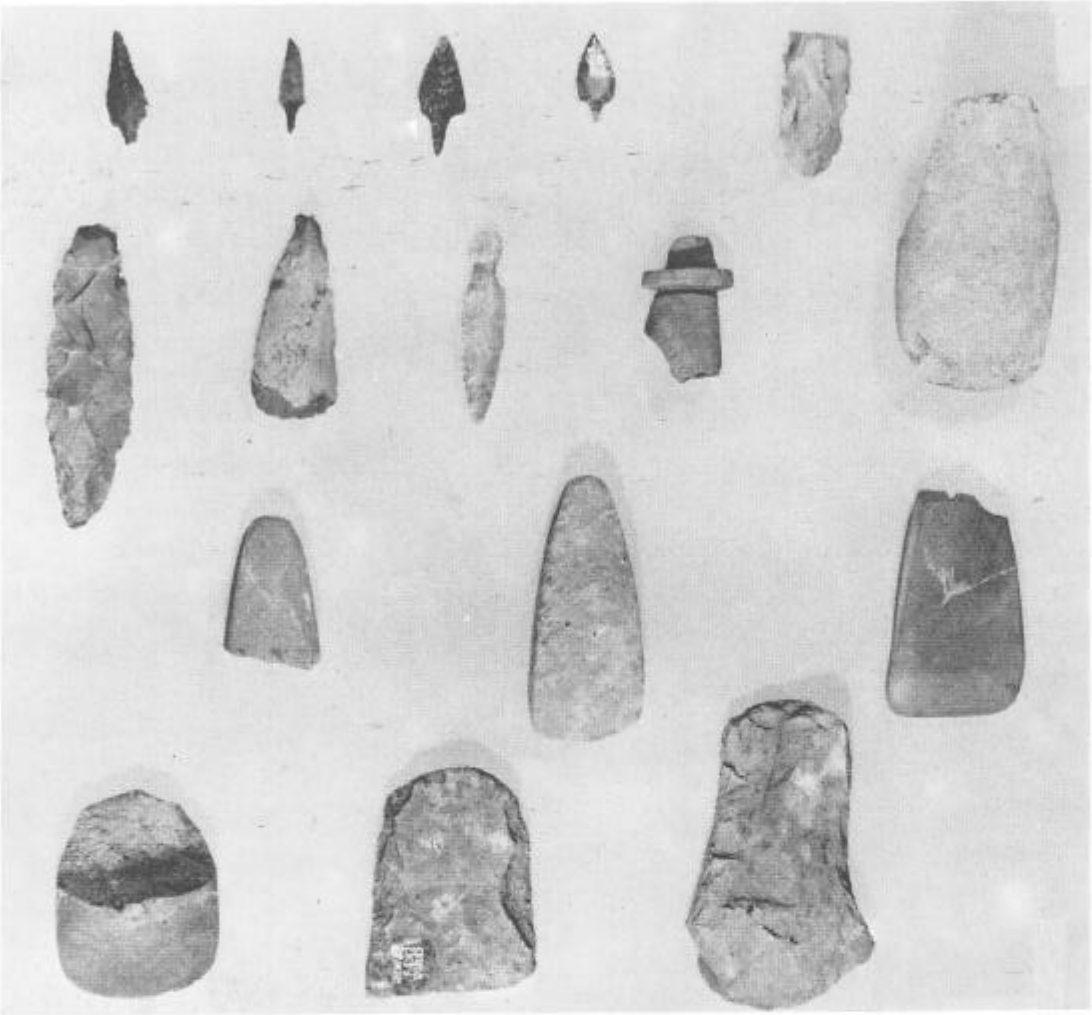

S K70


遺構外

遺構外

遺構外

図版39



遺構外出土石器

調　査　風　景

台地南端部土壙群

石囲炉と周辺土壙

ＳＫ16

石囲炉

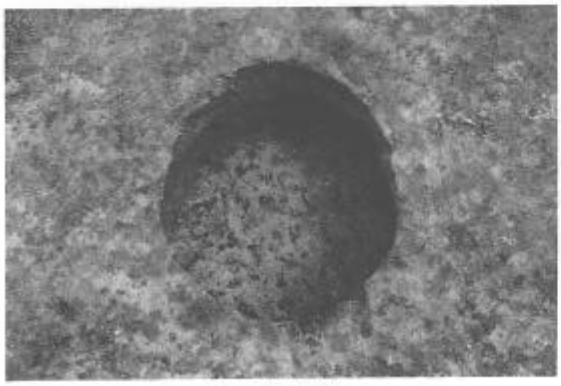
ＳＫ31

図版41

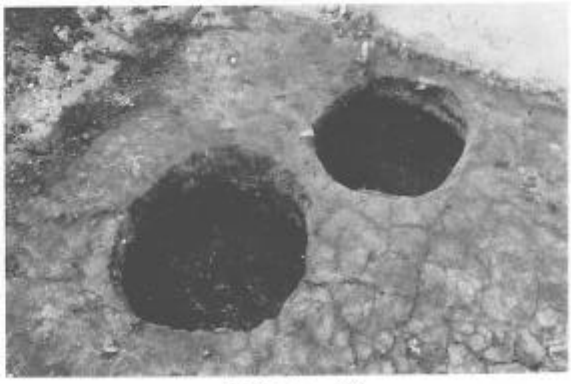
台地北端部土壙群

ＳＫ22

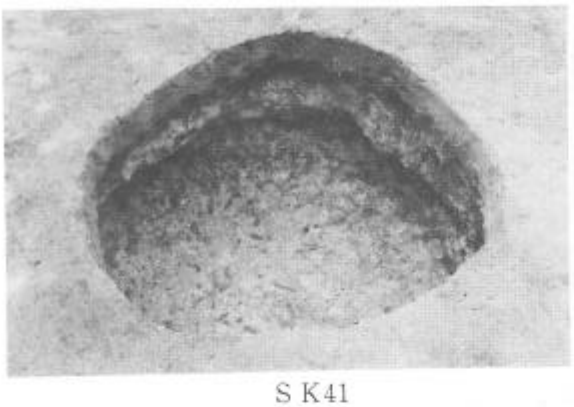
ＳＫ28



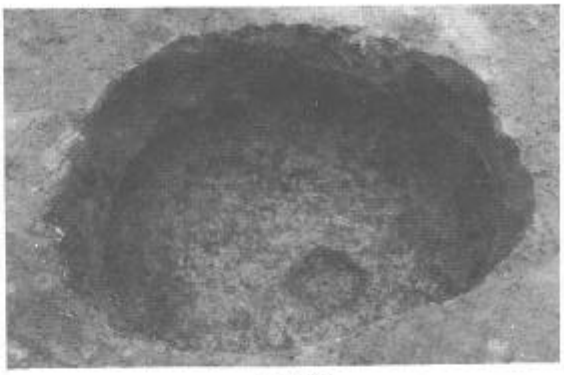
ＳＫ27



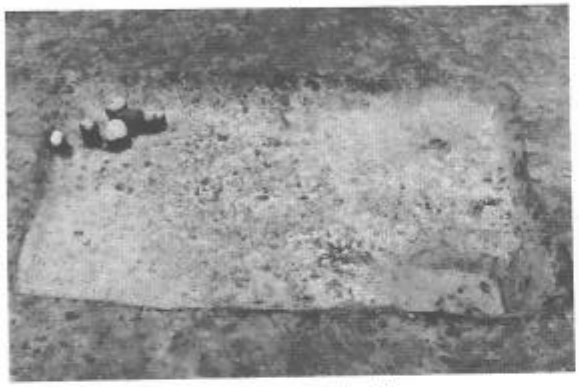
ＳＫ45・46



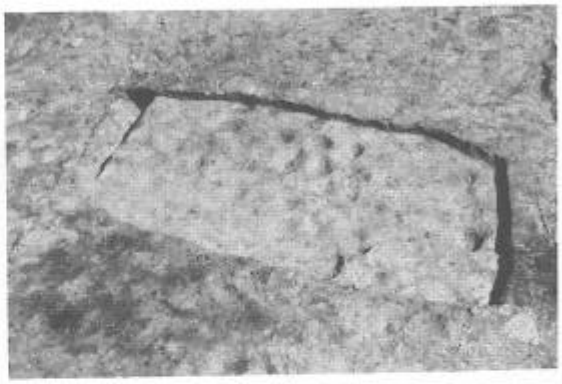
S K41



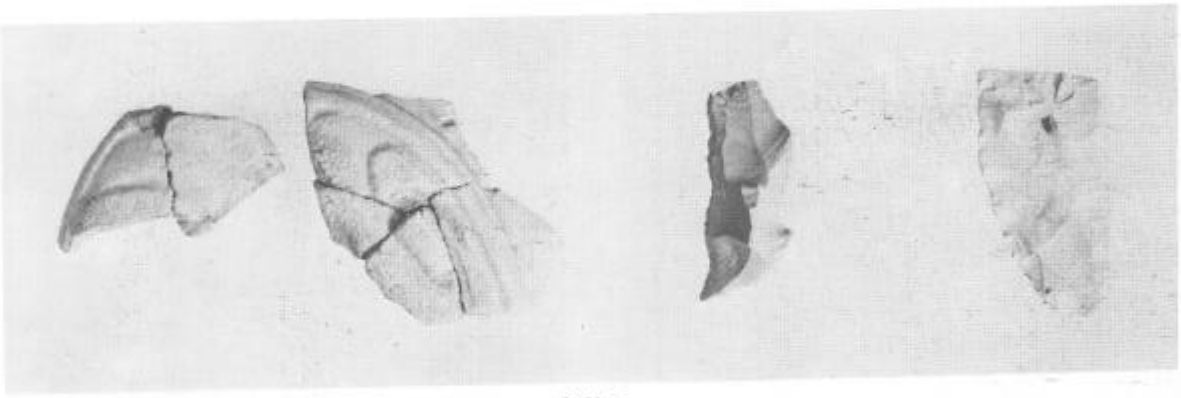
S K43



竪穴状遺構



S K38

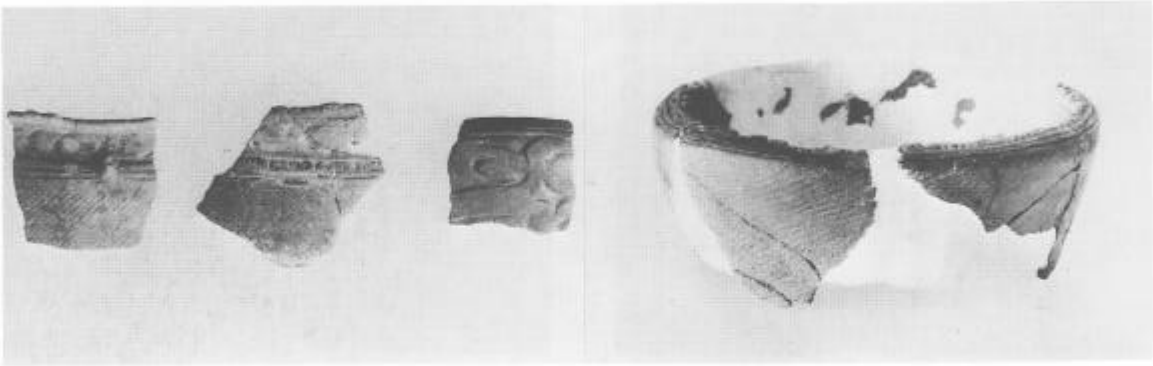


S K01

S K03

図版43

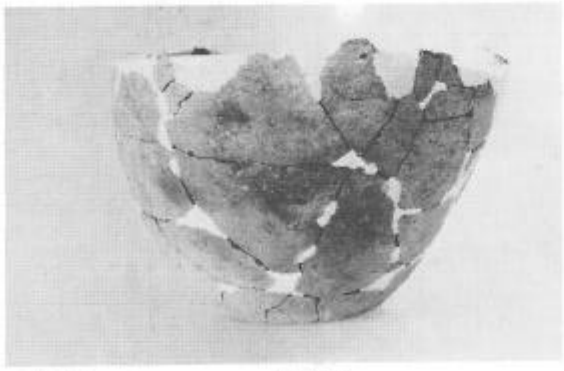
S K20



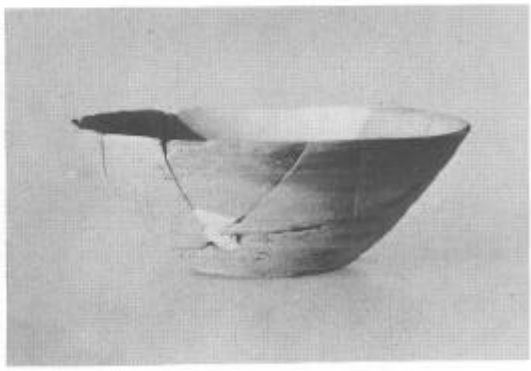
S K17　　S K16

S K17

S K18

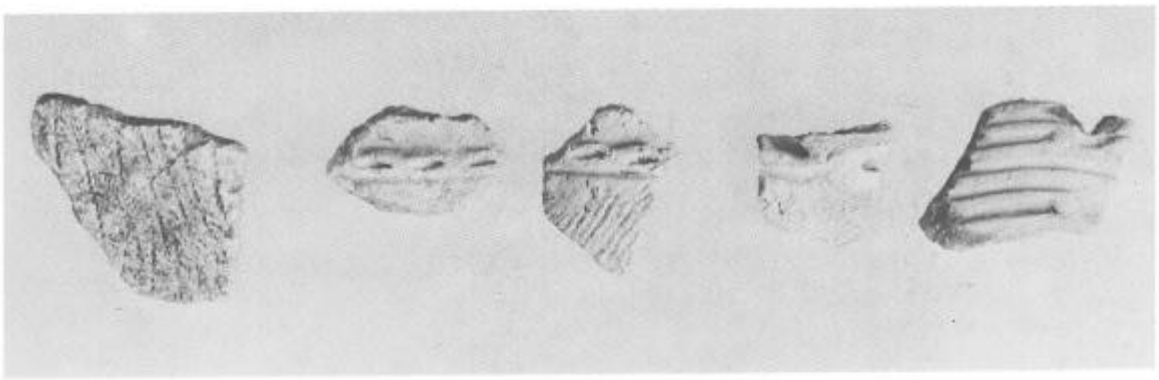


S K19

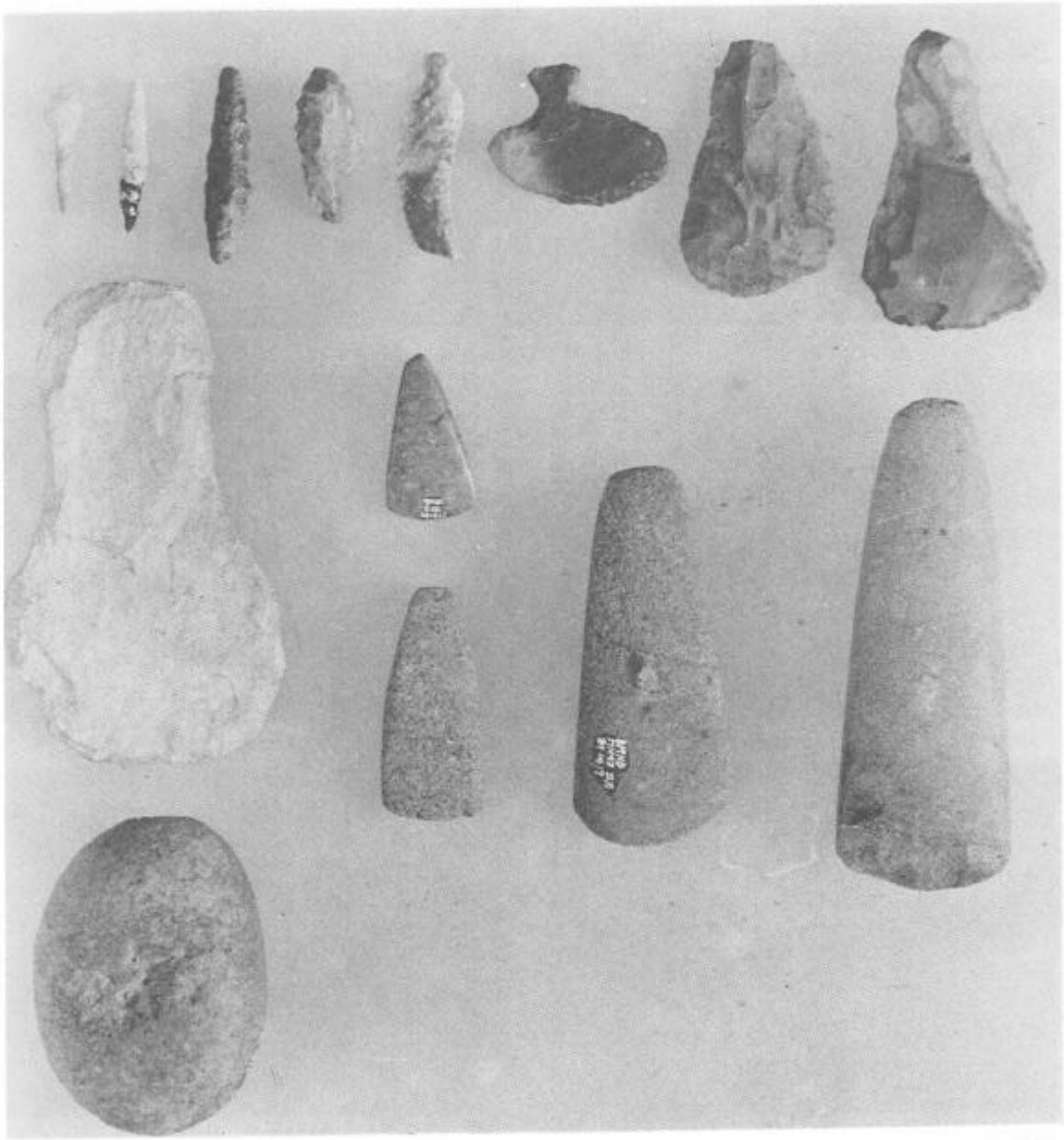


S K21

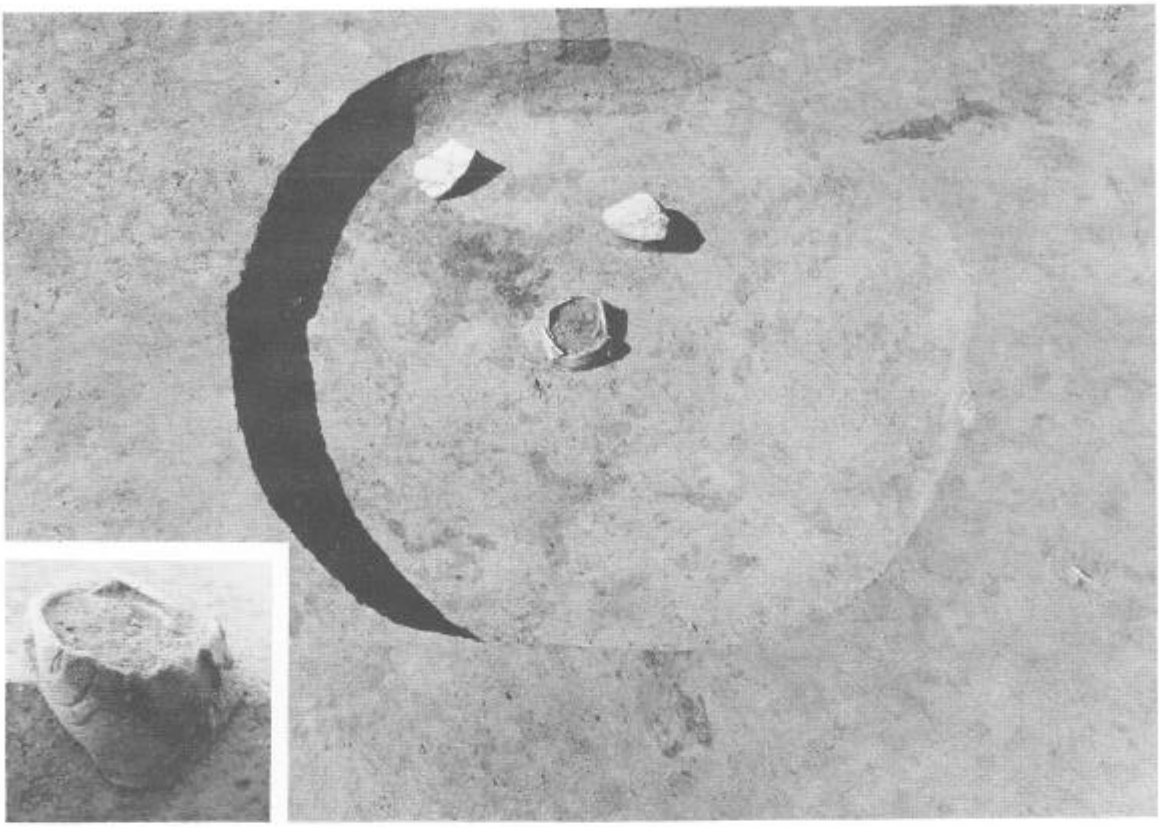
図版44



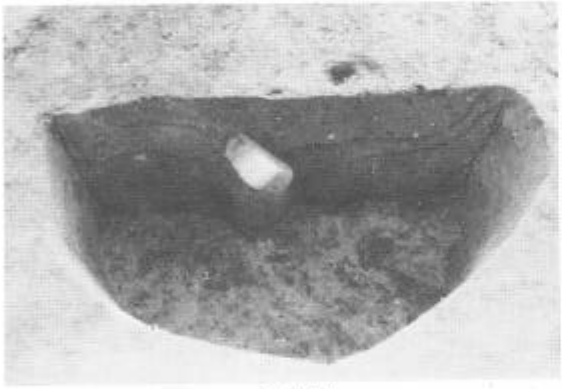
遺構外出土土器



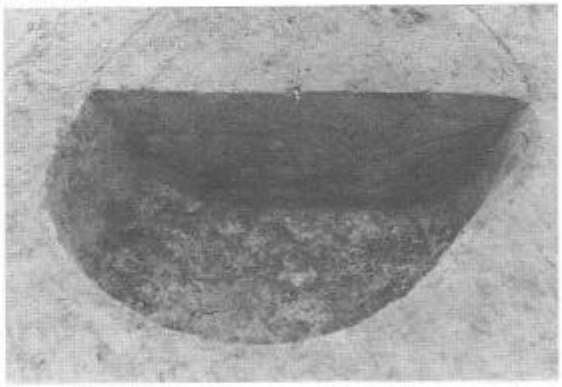
遺構外出土石器



S I 03 竪穴住居跡

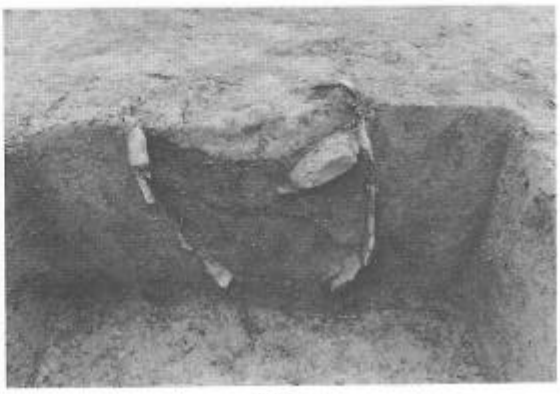


S K14

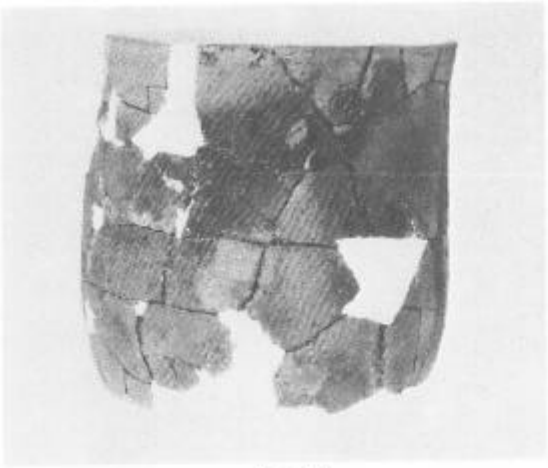


S K17

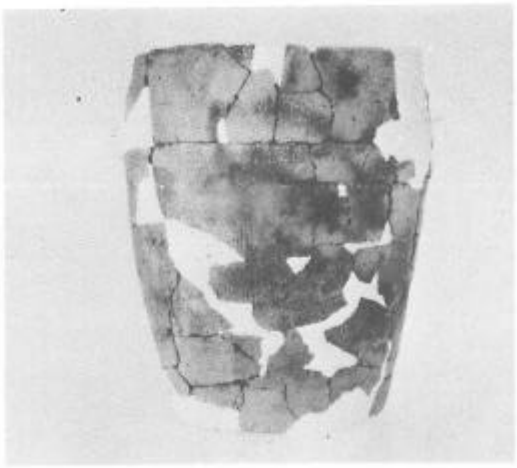
S K11



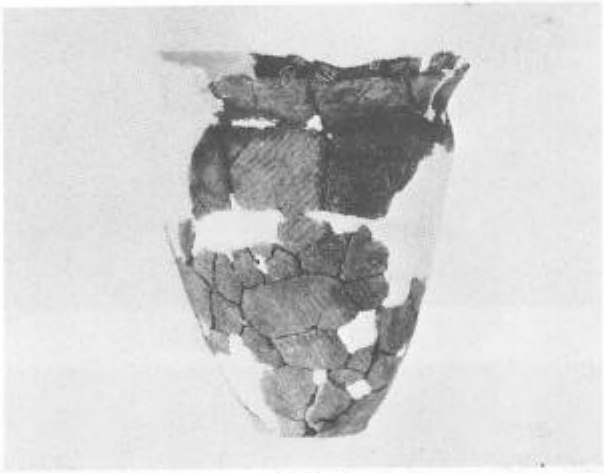
S R15



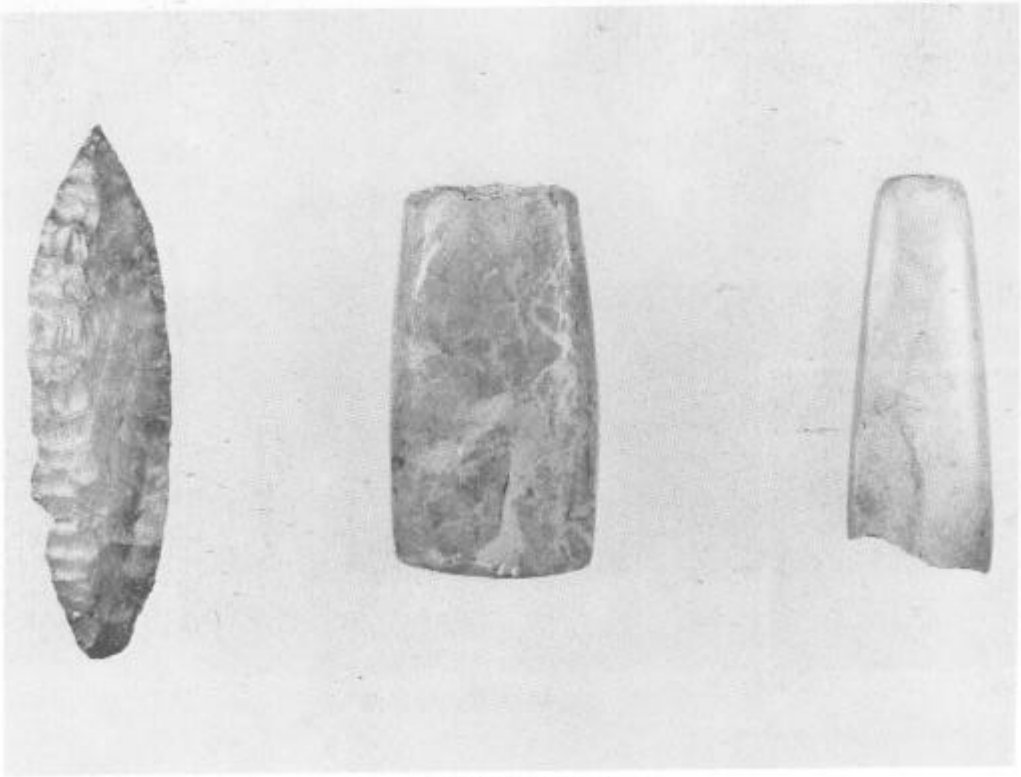
S I 19



S R15

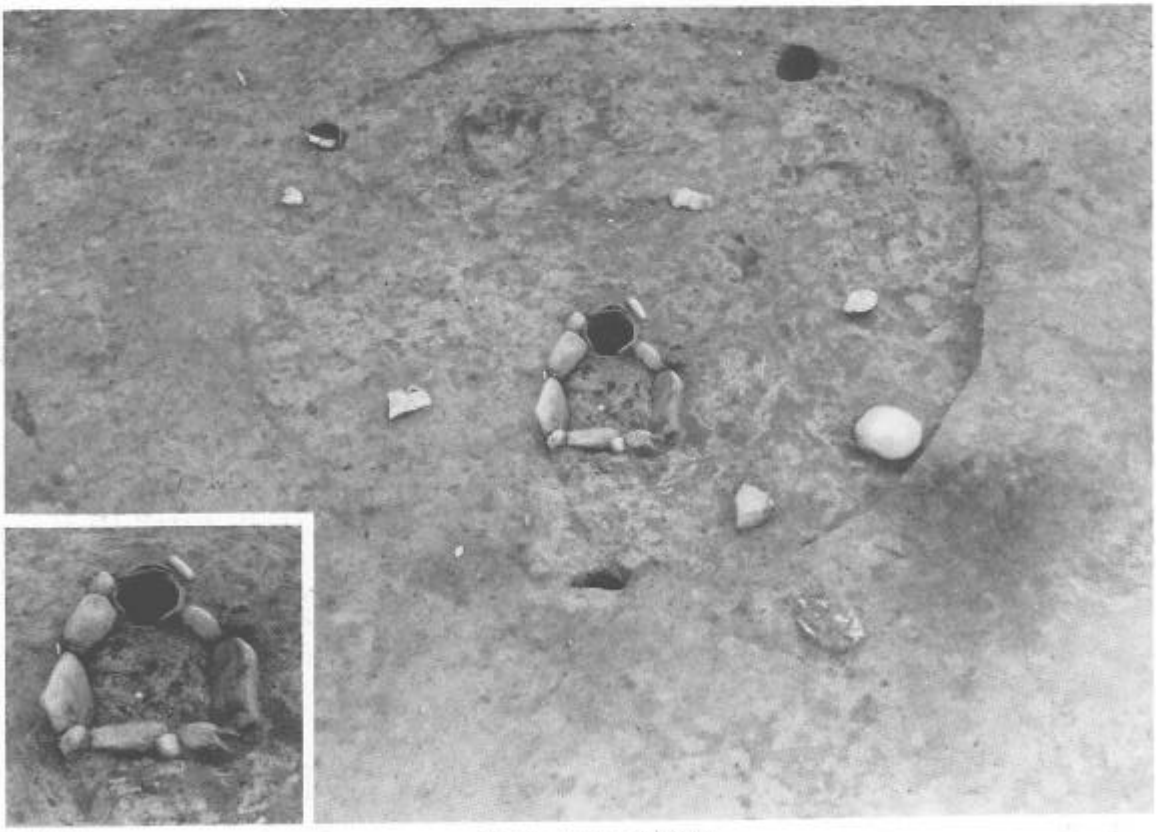


S K10

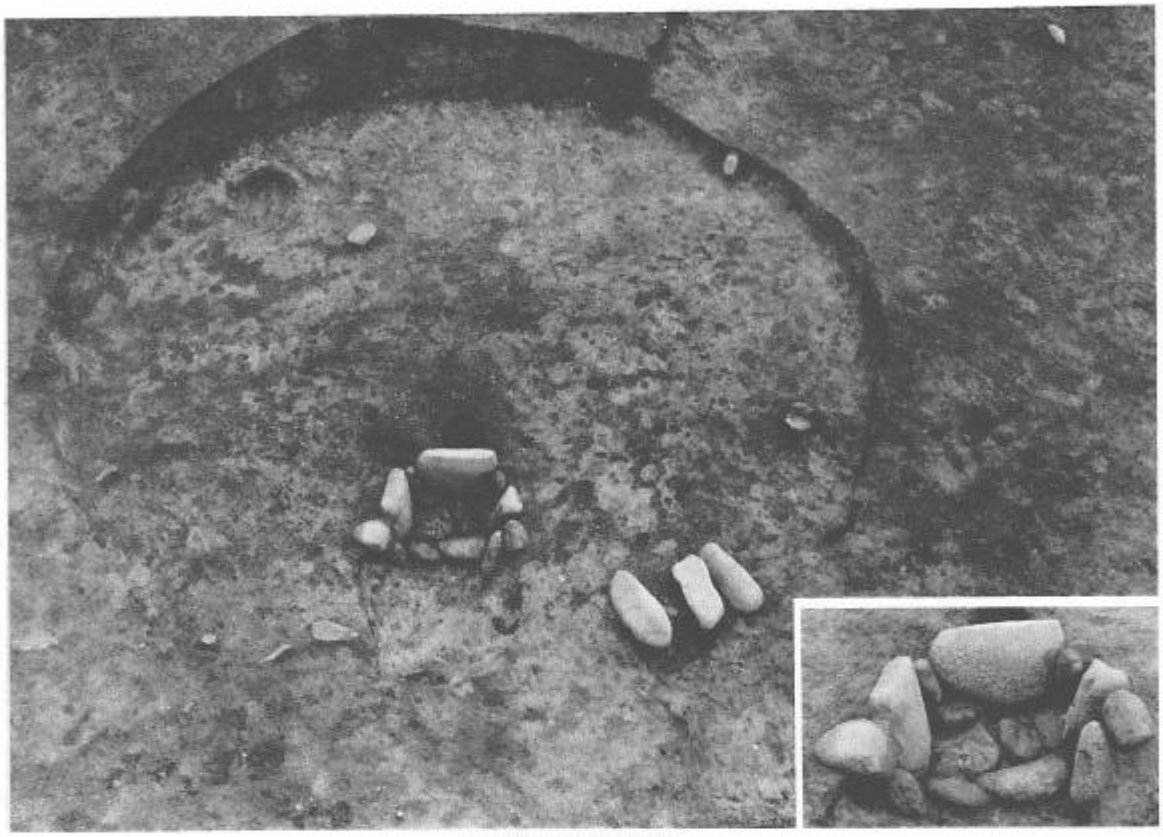


図版47　遺構外出土石器

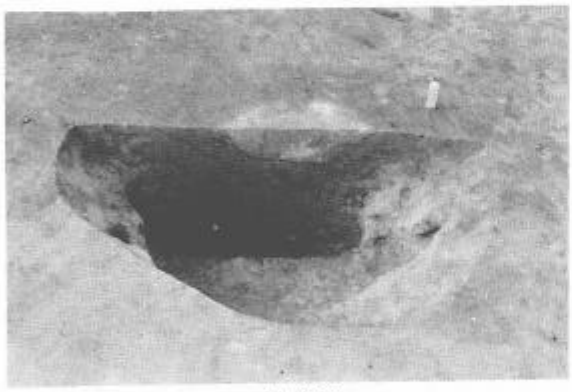
ＳＩ01Ａ・Ｂ竪穴住居跡



ＳＩ01Ａ竪穴住居跡



ＳＩ12竪穴住居跡

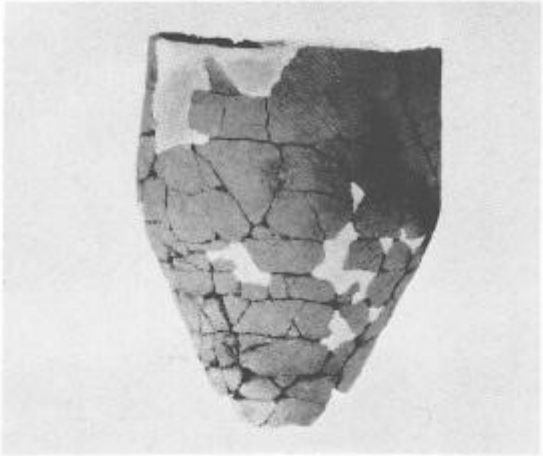


ＳＫ03

ＳＫ13

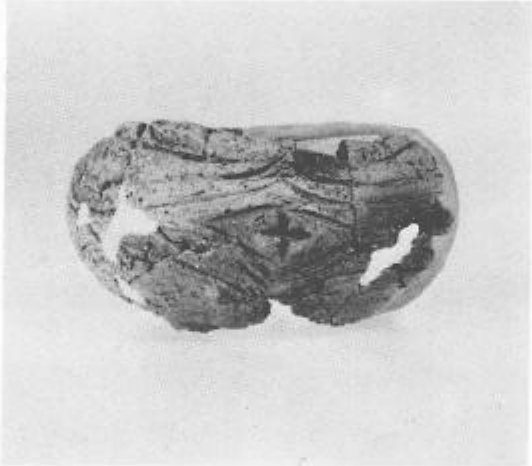
ＳＫ15・16

ＳＫ17

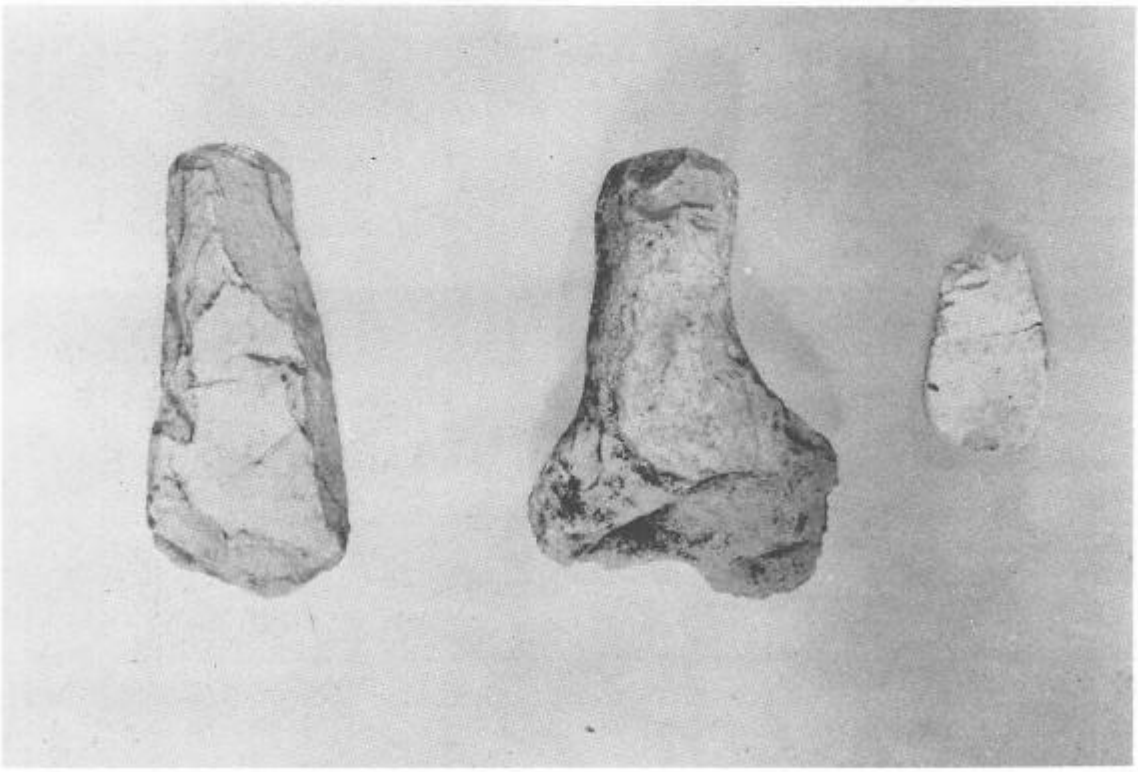


SI 01A

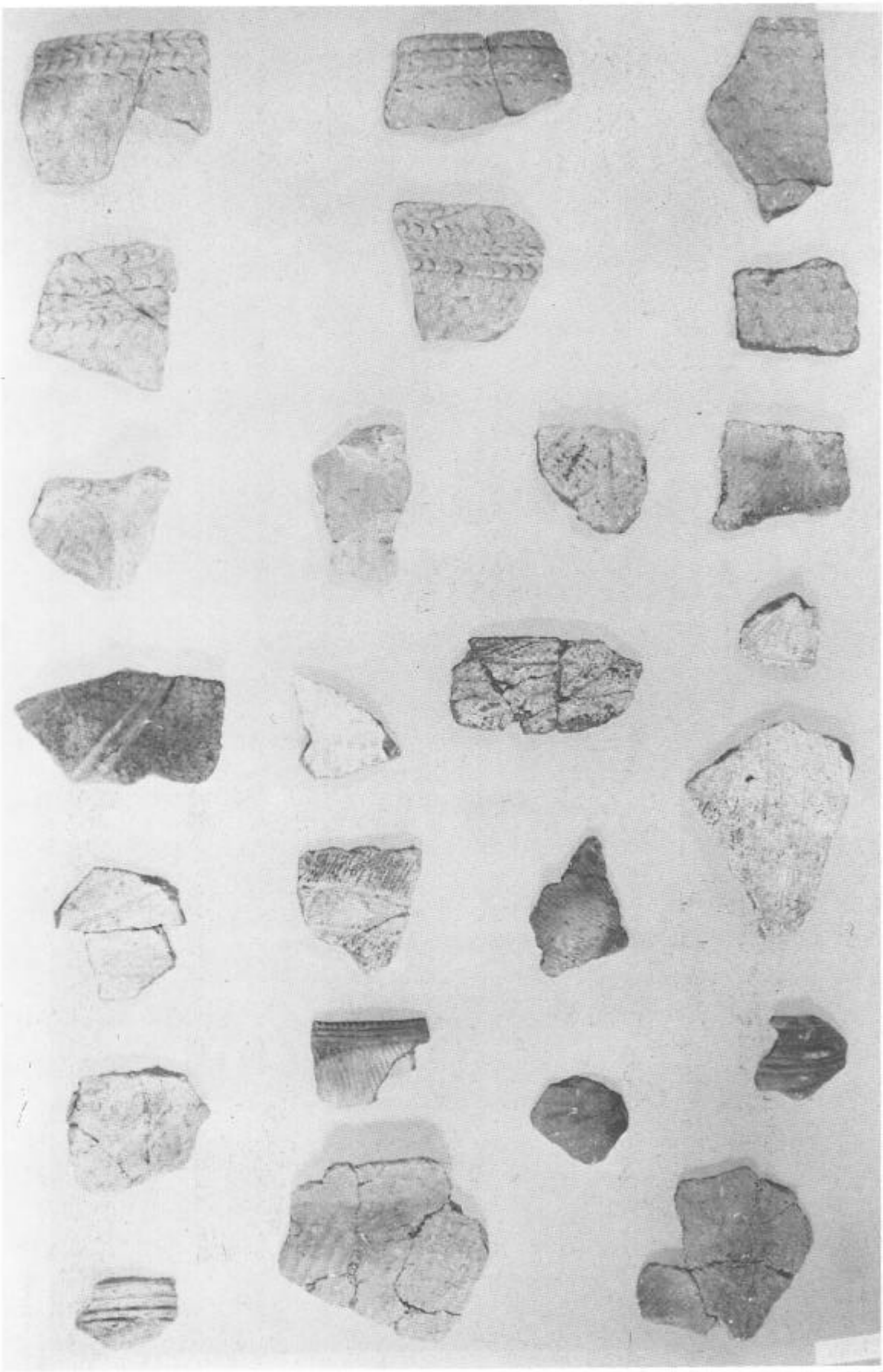
SI 01B



SK23



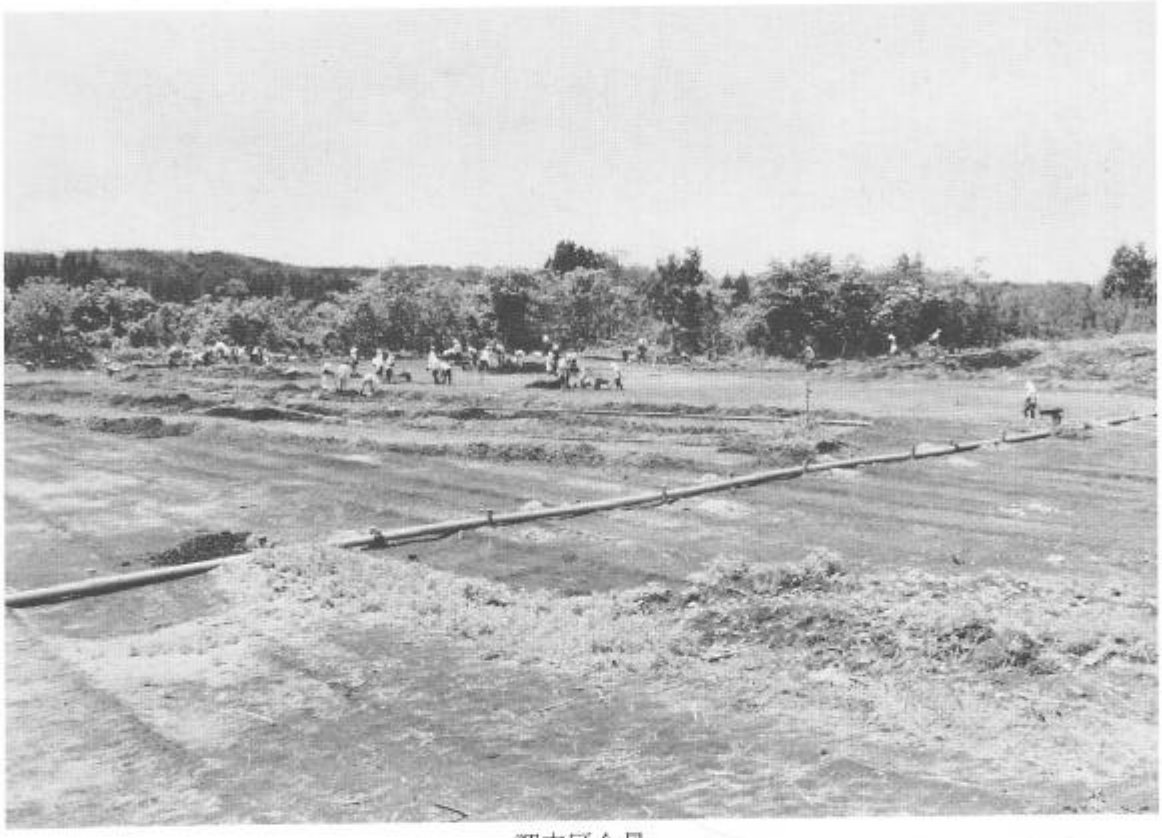
SK17



図版51　遺構外出土土器

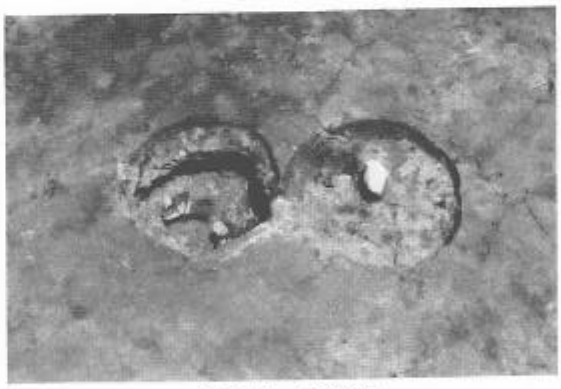
遺構外出土石器

調 査 風 景

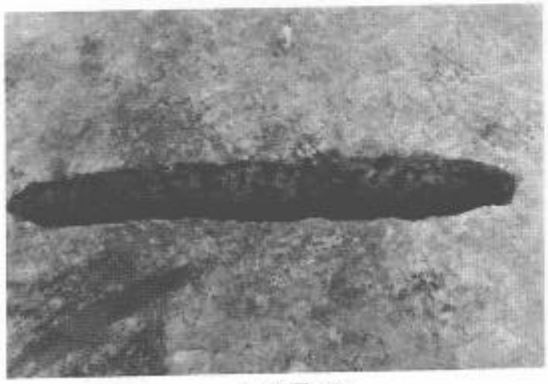


調査区全景

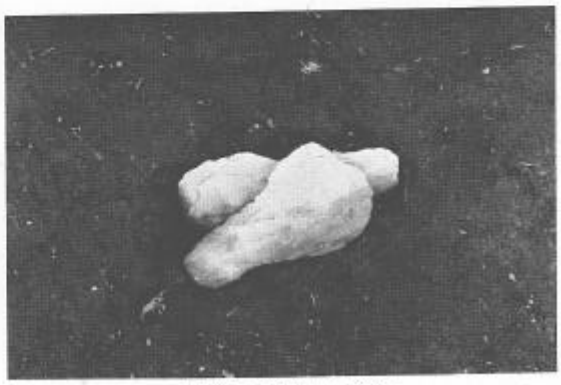
ＳＲ09



ＳＫ21・ＳＫ18

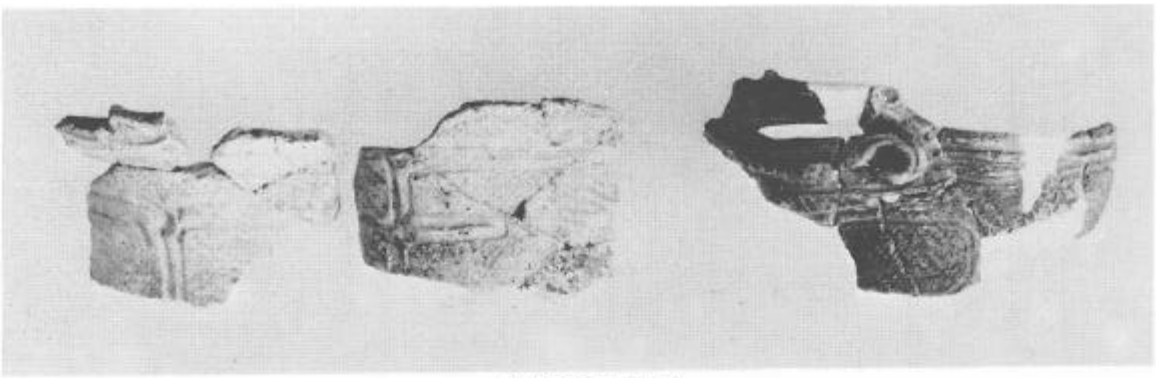


ＳＫＴ05

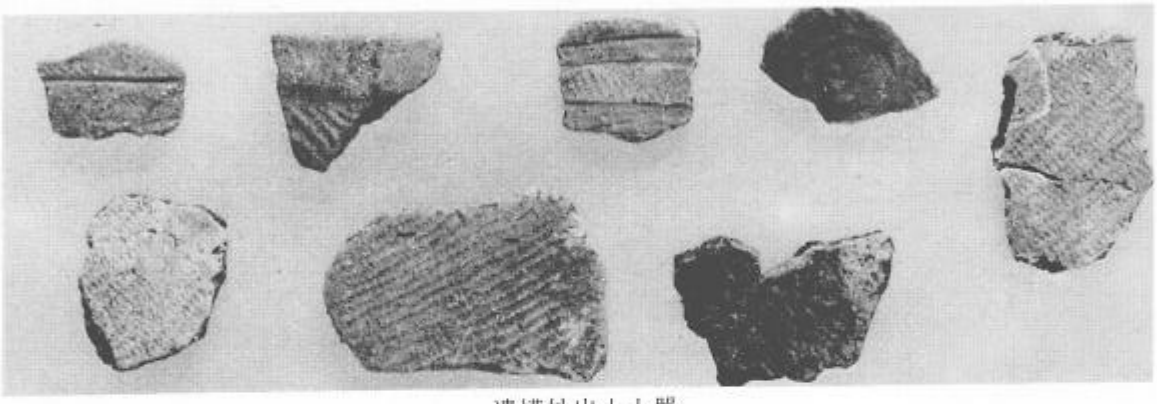


打製石斧出土状況

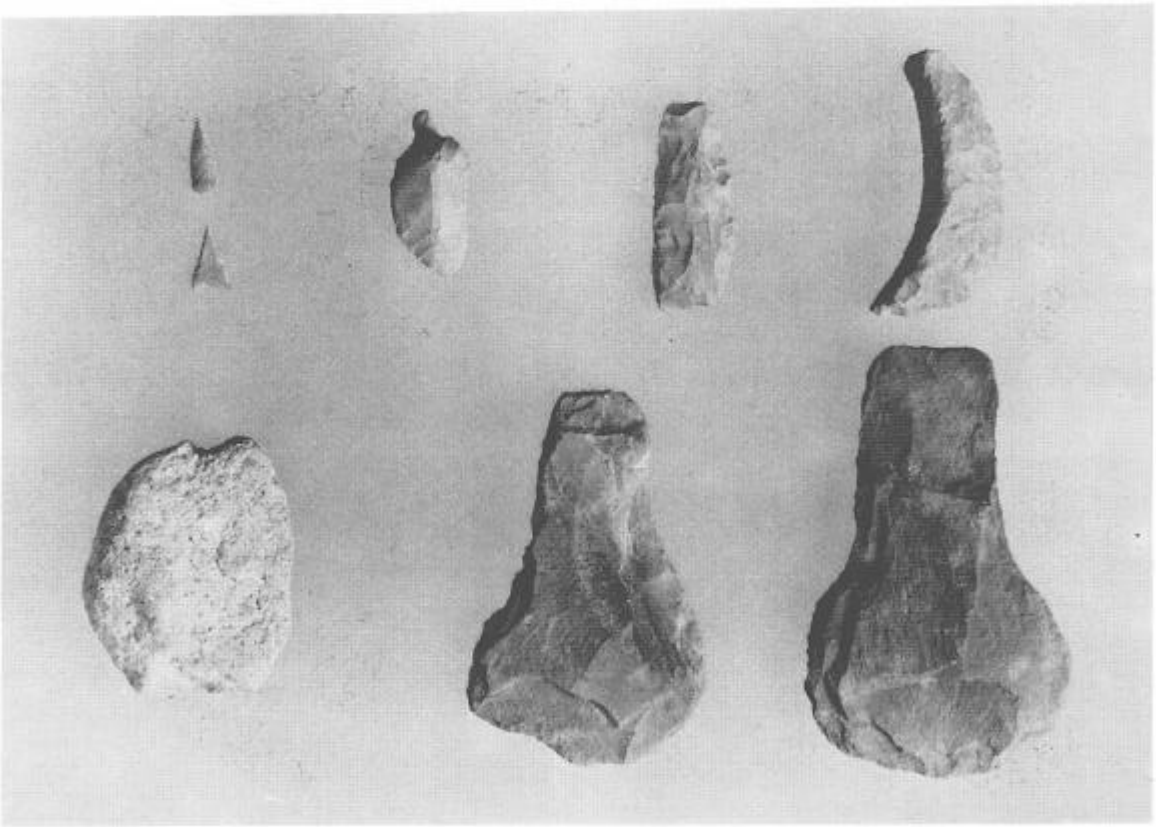
図版53



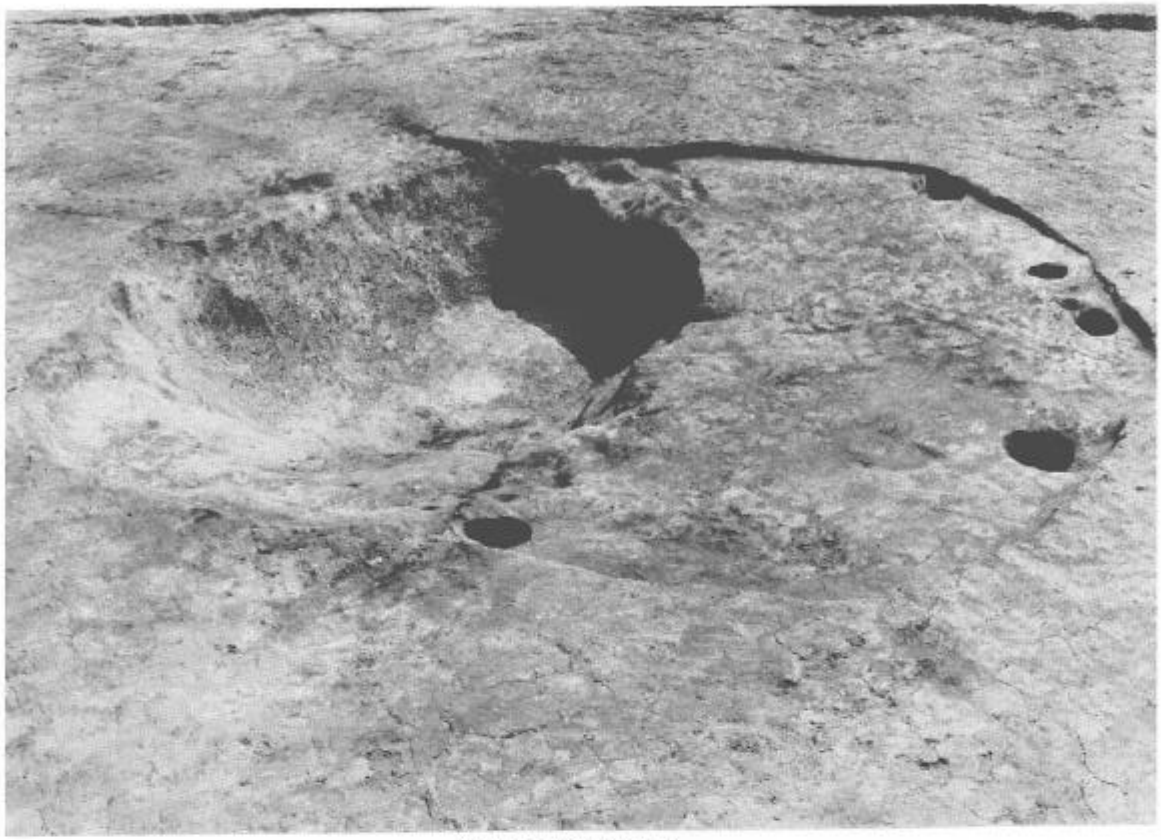
ＳＲ09使用土器



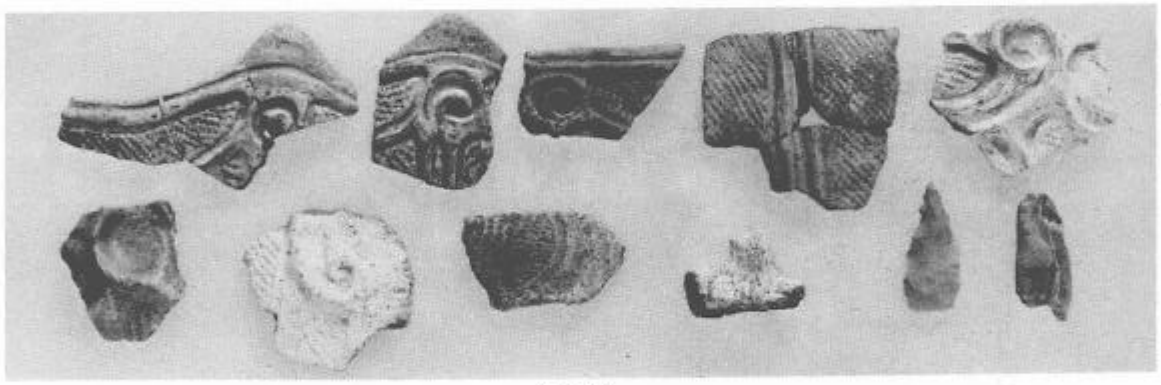
遺構外出土土器



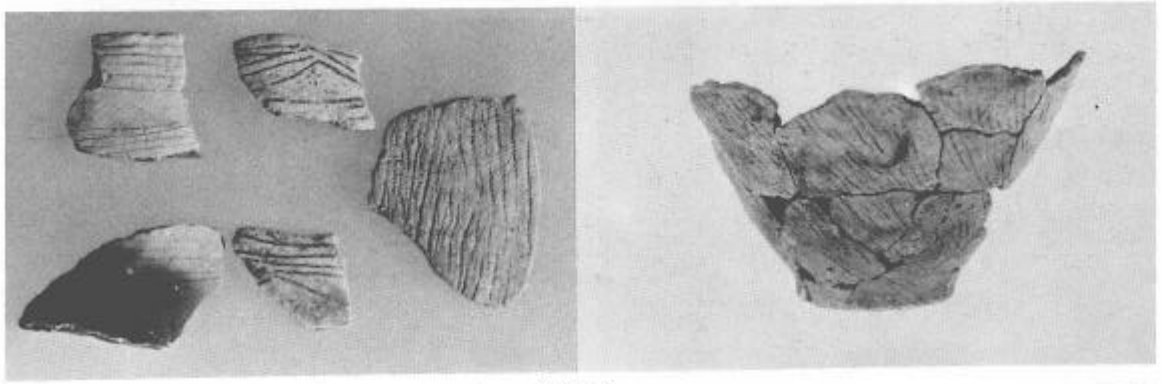
遺構外出土石器



ＳＩ02竪穴住居跡

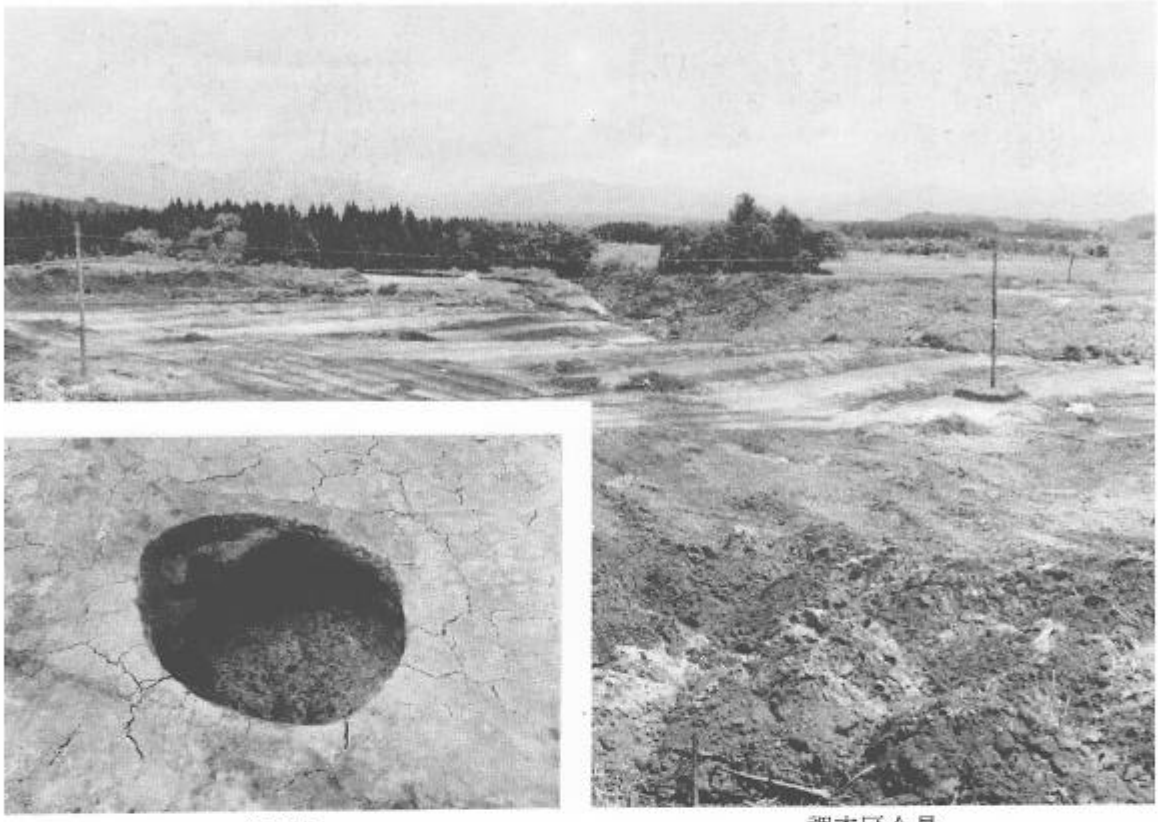


ＳＩ 02

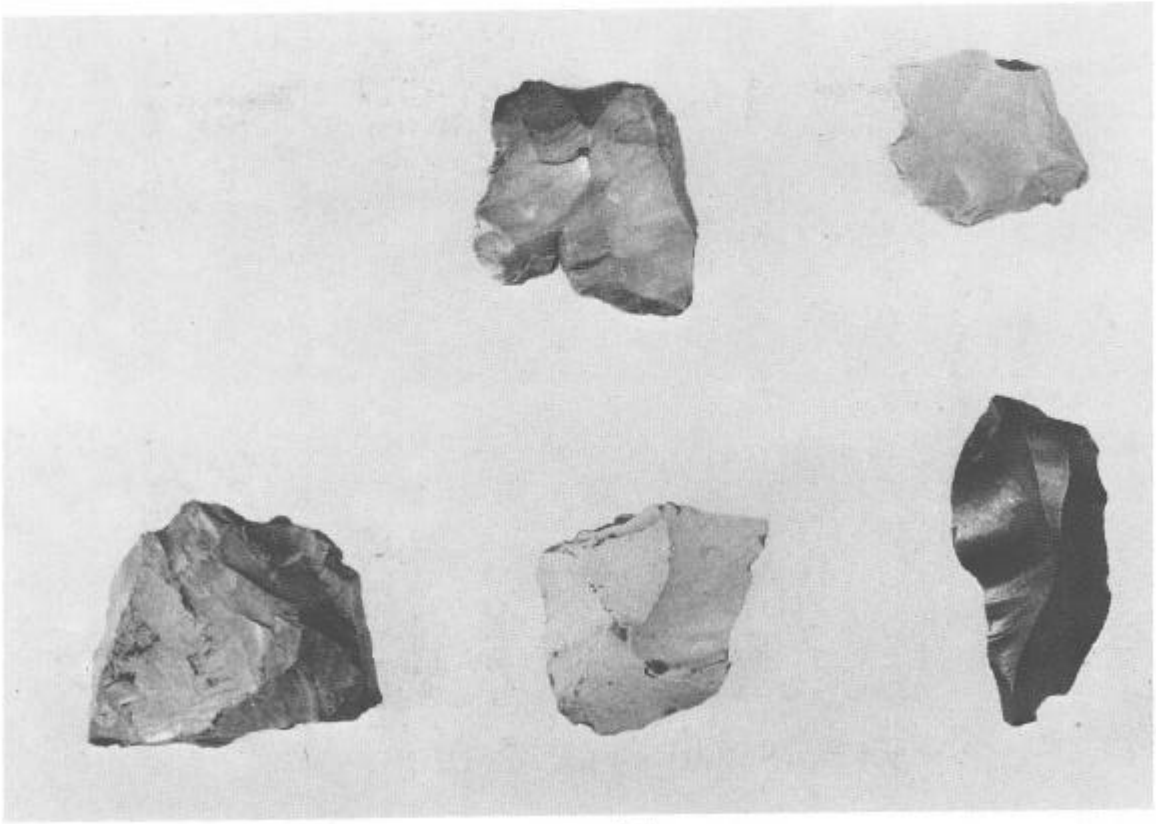


ＳＫ06

図版55



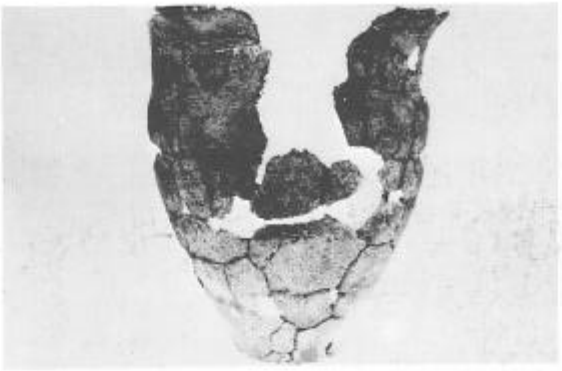
S K01　　調査区全景

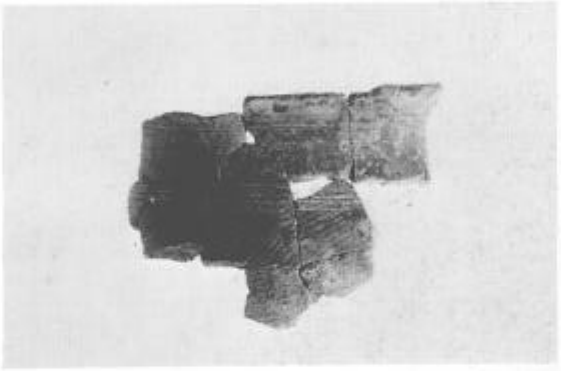


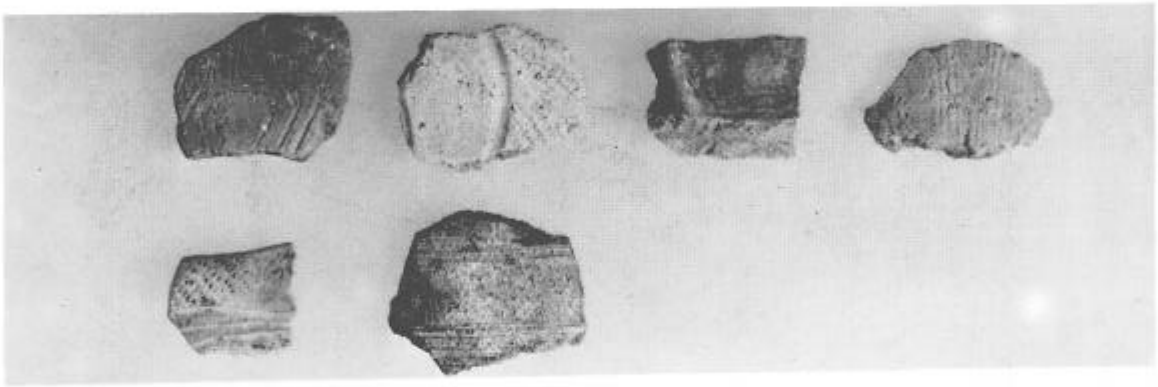
出土遺物

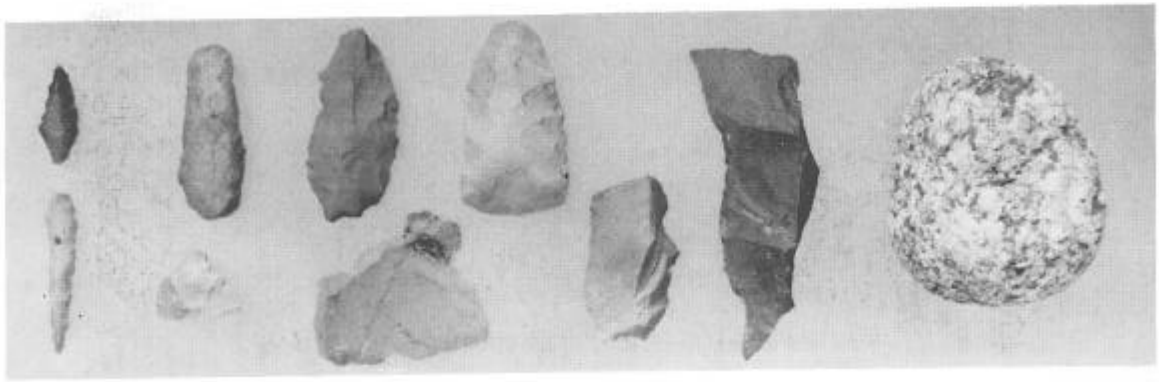
図版56

弥生時代遺物出土区域









出土遺物

七曲臨空港工業団地

その１

1:2,000

第163図　七曲台遺跡群の地形・調査区・遺構分布図